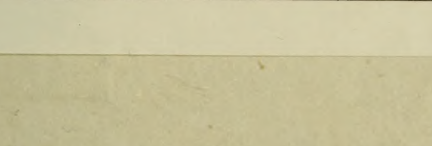
PL
700
.M41
no.1-3
UNIVERSITY OF ILLINOIS-URBANA
3 0112 071411737

LIBRARY OF THE
UNIVERSITY OF ILLINOIS
AT URBANA-CHAMPAIGN

PL
700
.M41
no.1-3



明治文庫

短篇小説

博文館發行

巖谷漣山人作

第壹編目次

風流辻占饀
秋乃蝶
けなげさ
黒衣魔
白面鬼
梢之月
あの聲で蜥食ふか山時鳥
京自慢
吉野記行花の旅

風流
辻占飴

風流
辻占飴

PL
700
.M41
no.1-3

短篇小説　明治文庫第壹編

◉風流　辻占飴

（一）

漣山人

これは元祖辻占飴、飴は風流戀の辻占入り、辻占飴をめしませ〳〵！と、鉦面白く叩き立てゝ、僅か二文か三文の商賣に、町の小兒を常顧主にして、市中を賣り歩行く飴賣人。齡はまだ二十年を三とは過ぎず、脊はスラりとして骨格逞しく、色は日に焦けて少し黒いが、眼元凉しく鼻筋透り、物を云ふ口元に愛嬌あつて、此の商賣には惜しい男振り。脊の小兒を口實にして、子守女の跡を追いたがるも成る程道理。褐色の無袖半纒に、同ド色の投頭巾。紅白を手綱染にした丸括けの帶に。二子の袷の裾を高くからげて、淺黄木綿の脚絆手甲かひ〴〵しく。飴を入れた荷箱に赤い紐付けて左の肩にかけ、箱の角に鬱金木綿の袋を提げて、それに百眼五六枚と、扇子二三本入れてあるのは、折々これを持て躍るともあると見へた。』

小春日和の長閑さ、殊に今日は後の彼岸と云ふに、本郷から小石川邊と、人の集まりさうな寺道場を歩行いて、可成りの商賣ひに懐中の財布を重くして、吾家へ歸る途中。日漸く高田の森に傾く頃、目白不動の地

内に差し掛り。倘チラホラと參詣人の散り殘りを目的に、荷箱を本堂の椽に卸して、例の鉦を打ち囃すと。それに浮かされて走り寄る小兒、孫への土產と賽錢の殘餘をはたく婆樣も混ぢつて、暫時は人の楯を築かしたが。軈て打ち出す入相の鐘に、皆ちり〳〵に成て、殘されたハ件の飴屋と、今葦簾を疊みかける、茶店の婆さんばかりに成た。飴屋は荷箱を提げながら茶店の方へ來て、愛嬌商賣だけに口も輕く、「もうお仕舞ひなさるのに御氣の毒さまですが、一寸莨の火をお貸しなすつて……」云ひながら床几へ腰を掛けると。婆さんも馴々しく、「さアさお掛けなさい。好いお天氣でまア結構でございましたネ。」「ほんとに好い鹽梅で商人は助かります。」「今日等は書入の日だもの、降られてたまるもんですかネ。ホヽヽ」笑ひながら婆さんは澁茶を酌で出し、「一杯おあがんなさい。……火はございましたか知ら。」と云つて今戶燒の達磨の背を覗いて見る。飴屋は茶を取つて呑みながら、「御仕舞がけにとんだ御邪魔ですネ。」「なアにお前さん、まだ日は暮れやしまいし……悠然憩んでお出でなさい、妾もこれからゆる〳〵一服して……。ドレなんぞお菓子がありさうなものだ。」ト、立て茶棚の方へ行かうとするのを、飴屋は押しとめて、「お婆さん、それには及ばねヱ。お茶受けは私が奢りましやう、まだ六七本殘つて居たから。」云ひながら荷箱の抽斗から、商賣物の飴を五六本搔き出して、傍に在た盆の上に置き、「お婆さん、殘り物だ、一ッお摘みなさい。」「まアそれは濟みませんネ。それぢやお茶を入れ替へて、妾も御伴食しましやうよ。」婆さんは別に茶を入れて來て、飴屋の傍へ坐を占め、飴を一本取て眺めながら、「これは通常の飴ですか。」

『イヽエ、此は辻占飴と云つて私の新工夫さ、中に辻占が仕込であるんです。』『へー辻占がネ……、成る程奇用なとが出來ますネ。……何だつッて……少くて妾にや讀めないが、……ふしぎなごゑん……不思議な御緣、ある程さうに違ひないねエ。見ず知らずの飴屋さんと、斯して一所にお茶を呑むのは、これは不思議な御緣に違い無い、ホヽヽ。然し相手がお婆さんで、お前さんこそ御迷惑さネ。ハヽヽ』婆さんは興に入て笑て居ると、飴屋は又別に飴を折て中を見せながら、『これにはかはらぬみさをと、ありますぜ。』『頼もしいネ。成る程かうして何處を折て見ても辻占が出るんですネ。これはまア珍らしい、よい物をお考へなすつた。さぞ賣れましやうネ。』『處がまだ初めて間が無いから、あんまり賣れませんのサ。』『それぢやアまだ此頃お初めなすつたのかネ。』『つい一月ほど以前から初めましたが、どうも馴れないんでいけません。』『其以前は何樣な商賣をしなすつた。』『エヽ……それは一寸云ひ惡いので。』婆さんは先刻から頻りに飴屋の顏を打守つて居たが、此時少し笑を含んで、『ハヽア讀めた。それぢやア粹の果だネ。』『お婆さん串戯云つちやいけないぜ。』『イヽエ此辻占の意匠と云ひ、第一男振りが左樣出來てるもの。』『お婆さん飴の御返禮かネ。』『ホヽヽ、飛でもない。』

（二）

此時まで本堂の段の下に蹲まつて、今日貰ひ溜めた靑錢を、薄汚い手拭の上で、餘念なく算へて居た、年頃四十五六の女非人。今婆さんの笑聲に氣が付いて、此方を見て居たが。やがて立上つて、ノツ〳〵

とこれも茶店の方へ來て、小腰をかゞめ、《叔母さんまたお仕舞なさらないかネ。》《今此飴屋さんとお茶を入れて馬鹿ッ話をして居るのサ。お前も今日は好い所得があつたらうネ。》《處が却て駄目ですよ。こんな日には餘所の奴等が入込で來るから、土地の者は却てつまりませんよ。》《左樣だらうネ、今日は大分見慣れないのが居たッけよ。……それはさうと何日もの御女中は今朝はお見へなさらなかつたようだノ。》《ほんにさ。毎朝欠したとの無いお方が、今日に限つてお見へなさらねエのは不思議ですネ。》《今日はお彼岸だから人が出ると思つて、それでお出でが無いのかも知れないネ。》《お彼岸だから今日なんぞは、倘更お參りがありさうなものですに。…………でもあゝやつて毎朝〳〵早くからお參りなさるが、ほんとに感心なお女中さネー。まだ御齡は若くつて居らつしやるが、ほんとに感心な御心掛けで、何日もお鳥目を投げて下さるシ、時々は大層な……見ても眼の廻りさうな、すばらしいお菓子なんぞ持て來て下さるから、妾は有難くつて〳〵、斯う云つちや濟まないが、不動樣より有難い位で、何か御恩報ドをしなくつちやならないと思つて、此頃では妾がお手洗の水を掛けてあげるとにしましたが。……妾の樣な非人が水を掛けてあげたら、却て氣味がお惡からうと思ふけれど、それでも汚いともお思ひなさらないと見へて、ちやんと掛けさせて居つしやるがネ。ほんとに感心なお方ですよ。》《さうかネ。妾も時々お見掛け申すが、第一あの御容貌のよいと。》《ほんとにお美しい方で、妾ハ初めての時は、あんまり美しかつたから、あの觀音樣の御化身ぢやあるまいかと思つて、實はソッと跡から踵けて見たが、途中で

消えもなんにもせず、ちやんと遠州様の御門へ這入てお仕舞ひなすつたが。ほんとにあんなお方ハ珍らしい……。』ト、二人の會話を先刻から、默つて聞いて居た飴屋ハ、やがて女非人に向つて、『お前さんの噂して居る、そのお女中と云ふのハ、全體何處の方なんだネ。』『それは遠州様の……確か御腰元だそうですが、毎朝五時分に此不動様へ、一人で御參詣なさるんです。』『成る程それは感心なお女中だが、一體何様御心願があるのだらう。』『それがさ、矢ッ張り男の爲めださうでしてネ。……此處の叔母さんとも此間から話をして、どうも年頃と云ひ容貌と云ひ、如何も何か仔細があるらしいと云て居ましたが、矢ッ張りその云ひ替はした男があるので、其男の爲の御信心ださうですよ。』『さうかネ、矢ッ張り男の爲かネ。あんなお別品にそれほど思込まれた野郎ハ何處の野郎だらう、ほんとに憎らしいネ。ホヽヽ。』『叔母さんも好い齡をして、飛んだ苦勞性ですネ。ホヽヽ。』飴屋も傍から笑ひながら、『ほんとに浮氣な婆さんだネ。それはさうと、お前さん大層よく知てなさるが、一ッ初めから話してお聞かせな。』『お松さん知てるなら話しよ。』お松と云ふ非人は少しく考へて居たが、『それぢやお話申しましやうかネ。』『ちよつくら待ちねヱ、今お茶をあげるから。』ト飴屋が酌でくれた茶を、お松は頂いて呑み干し、『それぢアお聞きなさい。妾も傳聞で委くハ知りませんが、まづざつと斯うなんです。』

（三）

江戸は本町二丁目に、三間々口の友染店、近江屋伊兵衞の秘藏娘。名はお京と云つて、今年向へた二八

の春。自然と備はる花の姿は、日本橋を中心にして此八百八町に、二人あらうとは思はれぬ美色。評判は町内の火見櫓より高く成て、美人鑑の西の大關、素人で此席を動かぬとは、聞いたばかりでも襟元がゾッとする程の代物。一度これを店頭に坐らせれば、商賣物の友染忽ち色を失つて、誰も其方へは目も呉れず。同じ金で自由になるものなら、その生きた物云ふ友染をと、不了簡な所望に人知れず胸を焦す者も多い處から。根が堅藏の父親伊兵衞、娘の容貌の美しいを、結句苦勞の種にして、兎角は間違ひの無い樣にと、お京を奥の四帖半に閉ぢ籠めて、乳母のお崎がこれの看守人。さても不憫や何の罪もない身を、氣も違はぬ可愛い娘を、云はゞ體のよい座敷牢同然。可惜美玉を筺の底――でも瑕の付く時は付くもの。

此處に果報者一人――近江屋の手代に粂次郎と云ふがあつた。主人伊兵衞の遠い緣續きとやらで、稚い時に兩親に殘され、是非なく此家に引取られて、子飼ひの中から廿二の今年まで、隨分と目を掛けて使はれて居たが。根が利發な粂次郎、出精の効メキ〳〵現はれて、年層な番頭よりは、商業の道にも怜悧く。客の應對から問屋の取引まで、萬事に脫目無いのみか、第一氣質が温和しいので、伊兵衞殊の外賴母敷がり。粂よ〳〵と何事もこれに委ねて置けば、お蔭參りや京上りも、安心して道中が出來ると云ふ位。將來は娘の婿に直して、店藏共に開け渡す下心。それを知てか知らいでか、お京も兎角いとしがつて、小本で讀むお染久松、どうやら自分の身の上と思へば、一入憐れに一入面白く、而も一入思ひを增

す媒介であつた。

茲に又伊兵衞の女房お島と云ふは、お京の眞の母親ではないので。齢もまた卅には二つほど足らず、容貌も尋常の女に優れて居るから、齢よりは若く見えて、お京の姉と云ふなら兎も角、母とはとても請取れず、隨て互ひの折合も面白くない上に、此お島は相應な商家の娘でありながら、性來水草の浮いた質。一昨々年此家へ後妻に成て來た時から、はやこれにと、眼點は伊兵衞の禿顱を滑べつて、粂次郎の男振りに止めて居たが。了得に云ひ寄る機會はなく、只いやらしい眼付きや、日々の仕向けに謎を籠めて、解けての逢ふ瀨を心に祈つても。先は木佛か金佛か、石地藏に蟬の止まつた程も感じないに。音にこそ啼かね胸は螢火、單り思を焦がして居る中。不圖氣の付いたお京の素振り、それに對する粂次郎も、青い目には青く見えて、如何やら臭いと悟て見れば、可愛さ餘つて憎い粂次郎より、第一に邪魔なはあのお京。何卒して此間を、割いてやる工夫はと、私かに胸を痛めるとも、知らぬが佛性の伊兵衞親爺、例の下心を云ひ出して、女房の贊成を得やうと云ふ了簡。聞いてお島は愈々悔しく憎らしく。さうはなりませぬとも云ひ兼ねたが、別に何やら難癖を付けて、遂々お京を封ト籠めさしたも、全く此のお島の入智惠であつた。

何も知らぬお京こそ不憫。其後の鵲の橋中絕えて、日に一度も顏は見られず。籠鳥の雲戀しく、鴛鴦の波に割れた心地。思ひを運ぶ媒手、夕暮毎に洩れて來る、アレ〳〵あの琴の音。——粂次郎聞く度毎に、

身は帳場にありながら、彈く算盤のたましひ脱け出して、中庭の彼方へフラリ〳〵。

（四）

戀は蓮の莖、折るならば折て見よ、倘愛着の絲は繫がつて居る。お京は繼母の邪な計畫で、戀の間を割かれても、心は京染の本紅、いかな〳〵褪色はせず。また粂次郎も逢瀬の絶えるだけ、思ひの淵いよ〳〵深く、情の浪ます〳〵高く、初めに優る切な心根は、迚も動かすことは出來なかつた。

されば其後お島は、眼の上の瘤を拂つた心持で、以前よりは無躾に、粂次郎に云ひ寄つたが。粂次郎更に取りあはず、主人の女房と我慢はしながらも、なか〳〵靡く氣色は無いに。お島も少し我を折り、どうかして此意趣をと、我非を知らぬ恨み立て。その面當てに斯うして見せんと、これも浮奔婦の常、珊瑚の代りに明石玉で、少し代物は落るけれど、同じ店の若番頭の、廣吉と云ふノッペリ男に見かへて、これに一寸當つて見た處。元より此奴ぬからぬ奴、殊に疾からお島には、良からぬ望を抱いて居た處ゆゑ。痩犬に見せた肉、尾を振りたてゝ寄て來て、忽ち怪しからぬ中と成た。

然し人間の慾には際限の無いもの。自分の家の庭の梅は、鼻に着いて面白からず、兎角隣家の櫻を手折り度がり。隴を得れば蜀を望み、銀を堀れば金を探し度くなる習慣。お島は廣吉を手に入れたもの丶、向ふから直ぐ靡く男には、此方の情左程に加はらず。矢張りあの粂次郎が、あの強面い粂次郎が、可愛らしくていとしくて、奇麗に思切ること叶はず。何卒して此方を向かせる、好い分別は無らうかと、それ

ばつかりを苦勞にして居た。

或る日同じ町内の、三雲屋喜四郎と云ふ藥屋の亭主。用あり氣にやつて來て、伊兵衞と奥二階での秘密談。何事かと思つて居る中、やゝ半時ばかりして、二人ハ階段を下りて來たが。喜四郎ハ幾度もふり返つてハ、《それでハ伊兵衞さんよろしく頼みましたぞ。》ト、頻りに念を押して居ると、伊兵衞ハ其後から、《いづれ後刻御返事を……》ト云ひながら、店先まで送り出して、やがて居間へ戻つたが。火鉢の側に坐はつたまゝ、さしうつむいて默つて居るを。そつと窺いて見れば、何うやら濟まぬ顔付きに、お島ハ讀みかけた小本を下に置き、湯呑に茶を酌で出しながら、《貴郎何をそんなに考え込で居らつしやるんですチ。三雲屋さんのお話ハ何でしたノ。》ト問ひ掛られて伊兵衞ハ、持て居た煙管をポンとはたいて、

《だから娘ハうつかり出されねエ。》

（五）

此年六月十五日は日枝神社の祭禮。分けて今年は新將軍の御上覽と云ふに、氏子の町々は、一昨年に輪を掛けた奮發。茲ぞ江戸ッ子の腹の見せ時と、美を盡した山車屋臺に、後の頭痛を事ともせず。向ふ鉢卷片肌脱ぎ、誰も頼まぬに吾から騷ぎ立て、身中にある程の汗を絞つて、終日塵埃の中を駈けまはる事、更に正氣の沙汰とも思へず。家毎に赤飯煮〆の用意して、來る客も迎へる主人も、今日はふくれた顔を見せず。四面に打ち囃す笛太鼓の音、さながら地から沸くやうに覺えて、人の心自然と浮き立ち、身も

世も忘れての太平樂。まこと豊年の兆は此二三日に現はれた。

神輿永田町の本社を出て、茅場町の御旅所へ練て行く途中。行列此本町を通るを、丁度近江屋の斜向ひの、三雲屋の二階から、山室遠江守の若殿、まだ部屋住みの仙三郎と云ふが、忍び姿に従者二三人後にならべて、青竹の欄干に凭れながら、餘念なく眺めて居たが。今此の家の前に麹町の大象止まつて、唐子仕立の小兒二人ばかり、其上で種々な藝をして居るのを、打ち見やる眼の餘り。不圖近江屋の店にお京を見付けて、それからハ山車も屋臺も瞳に入らず、一心に成てお京を見れば、――水色縮緬に大きく薫球を染め出した單物、まだ肩揚げのあるも可愛らしく、帯は樺色に飛形のある小柳、朱鷺色のしごき房々と結びさげ。髪も町方には似合はぬ上品な島田に、花簪と水玉を挿し添へて、右の手に團扇を一本持ち、弟か知る人の子か、七才斗りの男の子を、自分の膝に腰かけさせて、靜に煽いでやりながら、表の方を眺めて居る眼元の美しさ、フックリとした二重頤何とも云はれず、折々男の子に何か云ひ聞かしては、ニッと笑ふ面ざし、骨も溶解けさうに覺えて、若殿段々と膝を進ませるに、臂忽ち欄干をはづれて、思はず頤を青竹でコツリ。《ホイれ浮雲うございます。》《……象は大きな物ぢやナ。》《御意にござります》

さて其日も黄昏近く、家々の軒提灯に巴繪の紋かゞやき。山車も小屋に納まつて、裏河岸の居囃子も暫時息を入る頃、お迎ひの乗物三雲屋の店頭に横付けになれば。《イザ御歸舘》ト従者に促がされて、仙

三郎澁々立出でゝ、それに乗り移る時。未練！今一目と近江屋の店を見込む途端、今奥へ這入らうとするお京が、間の暖簾に身を半分包んで、あは物珍らしさうに此方を回顧つた其顔、仙三郎ハタト見合せて極りが惡く、乘物の中へ潜んでも、簾越しにまだ見えるワ、あの情らしい立姿。八幡！用捨があらうか。

（六）

無粋な六尺め！會釋もなく肩を入れ、ウンと突く息杖に、乘物は地を離れて、仙三郎は其儘日比谷の上家敷へ歸つたが。心は殘る本町二丁目。それからと云ふものは、起きても寢ても、只お京の事忘れられず。自分の目に遮る者は、老女も腰元も、禿顱の家老髯むしやな足輕までが、あの美しいお京に見えて。今までは氣も付かなんだが、廊下の杉戸に探幽の薫球、彼時の着物思ひ出して、其前は去り難く。書院の床の間に明畫の芍藥、お京の簪その儘と、かぢり付きたい思ひ。兎角その事斗り思ひ詰めて、何事も手に着かず。武藝も讀書もそつち退けにして、朝暮居間にのみ閉ぢ籠り、果ては三度の食事も進まぬ樣子に。陪從の小姓ども眉を顰め。これには何ぞ仔細があらう、見受けた處尋常の御病氣ではあるまいと、典藥の則齋より、まづ小姓頭の多久彌と云ふ者、或る時仙三郎の前に進出で、それとなく探つて見る了簡。（乍恐若殿には、此頃は御顏色も惡く、どうやら御心すぐれぬ御樣子、則齋に一度お見せ遊ばしては如何でござりましやう。）（イヤ乃公の病氣は……醫者では癒らぬ。）多久彌さてこそと思ひ

ながら、少し膝を進めて、『それは近頃不思議な御病氣……それでは何ぞお氣に掛ります事でも厶りますか。手前に御隱し遊ばす事はござりますまい、他に誰も居りは致さず……此多久彌へ御話し遊ばせ。次第に依つては手前が、別に良い藥を求めてさし上ましやう。』ト云ふに。仙三郎少し思案をして居たが、やがて小聲に成り、『多久彌！其方は此間乃公と一所に、山王の祭を見たな。』『如何にも其節お伴を致しましてござります。』『三雲屋で見たな。』『いかにも三雲屋の二階より行列を見ましてござります。』『三雲屋は本町二丁目おやな。』『御意に厶ります、本町二丁目で……』『……多久彌、乃公はも一遍三雲屋へ行きたい。』ト云ひさして少し涙組む樣子。多久彌は篤と見て、忽ち小膝をハタと打ち、『成る程御道理……萬事手前が呑み込ました。藥は三雲屋が承知致して居りましやう。』ト、其儘仙三郎の居間を罷出たが。直ぐに馬の支度をさせ、三雲屋さしてハイヨ――

多久彌が不意の入來に、三雲屋では驚き狼狽て。まづ多久彌を奥の間へ通し、主人の喜四郎羽織を着替へて挨拶に出で。さてお使者の趣きはト尋ねると、多久彌喜四郎を近く招いて、『拙者用事の次第は、若殿の御一命にも關すると。』ト、まづ勿體を付けて置いて。さてかう〳〵と仔細を語り、『あのお京とやら云ふ娘に、若殿殊の外の御執心。事成就せぬ曉には、御生害にも及ばれん御樣子なれば、貴樣も年來の御恩報ドに、隨分盡力致してくれ。』ト頼めば、喜四郎も早合點。『それならばお安い御用、喜四郎めキット受合ひました。』ト云ふに。多久彌も勇み立ち、急いで家敷へ歸つて、此由仙三郎に話すと。仙三郎聞くよ

りはや相好をくづし、褥から滑り落ちながら、側に在た金蒔繪の印籠を取て、『多久彌！取て置け、〳〵。』

（七）

粂次郎夕方の閑暇を見て、裏町の湯屋へ行き、日中の汗を流して歸り途。手拭を提げて四角を曲らうとする時、ハタと出逢つた乳母のお崎、『お崎どん何處へ！』『ちよつくらお師匠さん許まで御孃樣のお使で。』『さうかい。』ト云ひ捨てゝ行き過ぎやうとするのを、お崎は急いで呼び止め、『一寸〳〵粂どんお待ちよ。』『なんだチ。』『お前さん話をお聞きか。』『話ッて……何の話を。』『アラ……まだ知らないチ。お孃樣が奉公にお上り遊ばすよ。』『エッ？』思はず洩らした聲に氣が付いて四邊を見廻はすと。幸ひ人通りは無いけれど、茲は往來。人の見る眼も如何と、お崎を招いて豆腐屋の路次へ少し這入り、藏の陰にイみながら、『お崎どん眞實かィそれは。』『誰が嘘なんぞ突くもんかチ、馬鹿々々しい。』『さうしてそれは何處のお邸だィ。』『山室樣さ、アノ日比谷御門の。』『何だつてまたそんな事に成たんだ。』『それはお前さん斯云ふ譯さ。――その山室樣と云ふのは、お向ふの三雲屋さんの御出入場で、此間お祭禮の時、山室樣の若殿樣が、矢張見物に來て入らしつて、その時自家のお孃樣をお見初めなすつたんだとサ。それからと云ふものは、云はゞ戀病で、お醫者も盛る藥が無いと云ふので、御家中の者は大心配。段々伺つて見ると、實は斯云ふ次第と云ふので、それから早速御下來衆が、三雲屋さんへ掛合に來て、是非自家のお孃樣をお邸へ上るやうにとお頼みに成ると。三雲屋さんの旦那はあゝ云ふ方だもんだから、二ッ返辭

で受合て、すぐ自家の旦那へ云ひ込んだのさ。すると旦那は堅い方だシ、殊にたつた一人のお孃樣の事だから、御奉公に上るのは嫌なんだけれど、菅無く斷る譯にも行かず、仕方なしにお內儀さんとも相談すると、お內儀さんは却て大喜悅で、それこそ願つたり叶つたりだ、それを嫌がるお前さんは、耄碌して居らつしやるなんぞつて、頻にお京さんを上げたがつて、種々とお勸めなさるシ、三雲屋さんからは每日の樣に返辭を催促するので、旦那も仕方なしに納得なすつて、とう／＼御奉公に極まつたのさ。》《ウンそれぢや初めは三雲屋さんの周旋で、自家のお內儀さんがそれを……旦那は嫌がつて居らつしやるのに……。》《さア其處が矢ッ張りお腹を痛めない間だから。》《あにお腹を痛めない斗りぢやあるまい。》《エッ？》《いゑさそしてお孃樣は何と云て居らつしやる？》《お孃樣もお前此頃ぢや泣いてばつかり……ほんとにお可愛さうさ……妾だつてさう成りやお店には居られないシ、妾もほんとに泣きたいよ。》粂次郎は腕を組んだまゝ、暫時首を垂れて居たが。お崎は又語を繼いで、《それでお孃さまは、大變お前さんに逢ひたがつて居らつしやるシ、お前さんも嘸逢ひたからう。ト云つてとてもあのお內儀さんの眼が恐ろしいから……斯うしたら如何だらう。――アノ後にお前さん奧藏の二階へ昇つてお出でな。さうすれば妾がお孃さまを物干までお昇げ申して、あの窓の處でお話の出來るやうにさせやう。さうすりや縱令人に見られたつて、暑いから涼んで居らつしやる積りにして置けば、可怪しく思ふ氣遣はなし、お前さんはお藏の中だから、誰にも目付ることはあるまい。子そうおしな。》《なるほどさう出來りや豪氣だ。》《そ

りや妾が受合て、旨く逢はして上げるよ。》《それぢやお崎どん歸つたらお孃さんに。》《ア、大丈夫だよ。》ト云ふうちに下駄は外の方を向いて、《それぢやちよつくら妾は行て來るから。》ト、其儘お崎は急ぎ足で出て行た。あとに粂次郎は、暫時立止まつたまゝで考へて居たが、やがてスゴ〳〵路次口を出で、自分の店へ歸らうとすると。後から不意に、《粂どん何處へ行たんだ？》胸にギツクリ、驚いて振り返て見れば、同じ店の丁稚の龜太。粂次郎拔らぬ顏で、《ナニ一寸寄り途をして居たんだ。》ト云ひながらよく見れば、これも片手に濕手拭。さては自分より後に行て、――烏の行水、はや歸り掛けと見えた。

（八）

夏の日も照り草臥れたか、西丸の森に沈めば、市中は蜩の聲は無くとも、日の暮ると一段はやく。勝手に荒神の燈明點いて、物干に人の顏も確とは見えず。まして藏の中は眞闇、其人は何處に居るとやらと、軒に立つ蚊柱團扇で拂ひながら、物干傳ひに窓近く忍び寄て、《粂！》と小聲で呼べば。彼方は早く見て取て、《お孃樣？》と云ふ聲も間近いに、お京は嬉れしく、轟く胸を押し鎮めて四邊を見廻し、下女が仕舞忘れた單物の、まだ竿に掛てあるを幸ひ、その蔭に身を潜めて。一人は藏の中、一人は物干の上、手を取らうにも生憎に、鉄の格子に遮られて、それもならぬ焦思たさ。《お孃樣、先刻お崎どんから聞きましたが、貴孃はほんとに山室樣へ……》云はれるよりはや涙聲、《粂！妾は御奉公に上てしまふよ。》《それではいよ〳〵。……そしてそれは何日からでござります。》《まだ何日からとも極まらないけれど、それ

邸の方では大層お急ぎなさるからと、三雲屋さんが毎日の様に催促。阿母さんは阿母さんで、善は急げだから一日も早くと、着物もちやんと仕立屋さんに頼んでしまつて、明日にもそれが出來次第に、妾は行かなけりやならないかと思ふと、妾はもう嫌で〳〵、ほんとに死んでしまひたいよ。》《飛んでもない、何をおしやるんですナ。これが百里と二百里の遠國なら知らぬと、同ド江戸の中でございますもの、れ暇さへ願へば何日何時でも歸て入らつしやれます。決してろんな短氣をお起し遊ばしちやいけません。》《それが只の御奉公なら兎も角……今度は妾は迚も歸て來られまいよ。》《それは又何故でございます?》《……ア、ほんとに嫌でならない……》《然しお孃樣の御出世話、お喜び申すのが當然で……。》《嫌なとお云ひでない!》ト、ぢれて打うとする其袖も、無粋な鐵網に止められて、主には當りもせず。思ひ掛けない蝙蝠が、お京の襟を掠めてツィと飛び出したに、アレーと驚いて思はず格子に寄り添ふのを、《コレお靜に!》と粂次郎が、中から制するのも忍び聲。此に暫時話は途切れたが。やがて粂次郎は言葉を改め、《然しお孃樣、これも云はば前の世の約束、今までの事は夢と諦めて、何卒私の事は思ひ切り、親御樣の仰ッ仰るとほり、素直に御奉公遊ばして下さいまし!》ト、皆まで聞かずお京は聲震はして、《粂!粂!それはあんまりな……あんまりだよ。妾は縱令どんな事があらうと、お前を見限る心はない。殊にお父さんも内心では、お前を……妾の……それに、……それに今更……》《イエそう云ふ譯ではございませんが、つまり貴孃のお爲を思つて……》《イエ〳〵妾の爲なんぞ思つてくれなくても澤山だよ。そんな事云てお

お前は、妾の御奉公に上るのを、好い事にして居るのだらう。》《イエどう致しましてそんな事が……私だつて貴孃が御奉公にお出遊ばせば、どんなに悲しいか知れやしません。》《イエ噓だ、噓に違ひ無い、妾が行て仕舞つた後は、定めし自家の阿母さんが、お前を可愛がるであらうヨ。》《エッ、それでは貴孃も……》《そんな事位知れるわヨ。だから妾は今度の御奉公は、どうしても上る氣にはなれない。それに……粂！妾は今は只の體ぢやあないよ。》《只の體ぢやないとは？》《今までは誰にも云はなかつたけれど、……先月から見る物を見ないのだよ。》《エッ？》餘りの事に粂次郎は、暫時言葉も出なかつたが、漸くにして何やら云ひ出さうとする時。忽ち階子の下に下女のお國が、《アラ嫌だよ、妾としたとが干物も取り込まずに、また夕立に濕らさうと思つて。》ト、獨り語を云ひながら、物干へ昇つて來るに。お京は驚いて窓を離れ、ツカ／＼と欄干の處まで來て立止り、そしらぬ顔で團扇を動かしても、片袖はおほ目をはなれず。お國は見てこれも一愕、《アレ何人？》思はず高めた聲。ハット思ふお京は、手を合せたい心。

（九）

夜半の神鳴に思ひ寢の夢を破られた心地。お國が不意の推參に、折角の首尾さん／＼にされて、此から云はうとした大切な事、云ふて行く間もなく。お京は轟く胸を押えながら、よい程に紛らして、其儘物干を降り、自分の居間へ戻つたが、倘心は彼處に殘つて、胸の中安からず、まだ明放してある圓窓に、

力無げに、身を憑しかけて、團扇の先を嚙みしめたまゝ、餘念なく中庭を見つめては居るが、心は此處にあらず、胸には種々の物思ひ。――常は大嫌ひの蟇が、今石燈籠の根本へ、ノツ〳〵匍ひ出して來たも、更に眼には這入らぬと見えた。』藏の中では粂次郞。彼の時早速に身を潛めて、幸ひ人目には掛らなかつたが。何やら氣を咎めて、下へ降るともあらず、獨り氣を揉みながら、ウカ〳〵と今度は西側の窓の傍へ來て蹲居り。フト下を見おろすとたんに、不圖お京の此の有樣を見つけて、其儘鐵格子に取りつき、脇目も觸らず昵と眺めて居るのを、知るか知らぬか、お京はまだ其塲を去らず。折ふし植込の中を洩れて、軒の風鈴に音信る夕風に、鬢のほつれ毛嬲られて、少し素向けた横顔を、岐阜提灯の光にツク〳〵見れば。色は凄いほど白く、唇に光澤なくて、眼の椽だけ紅く成て居るに。此程の心勞思ひやられて、いとしくいぢらしく。しんぞ可愛のこちの孃樣！自由に成るなら此の鐵網の目を拔けて、彼處へ飛で行きたい一念、何時か一匹の蚊に成て、お京の眞白な頸筋へ、無遠慮に吸ひ付くのを、眉を顰めてハタと打つた。その掌に眞紅な血の痕、それこそ粂が胸の中と、藏の中では一生懸命、思はず乘り出して聲を掛けやうとする時。店の方で誰とも知らず、『粂どん！粂どん！』ト自分を尋ねる聲がするに。南無三寶！と思ひながら、そつと階段の上まで來て、下の樣子を窺ひ、態と足音さして降りて來て、『誰だイ私を呼んだのは。』ト云ひながら店の方へ行かうとすると、お島は居間から聲をかけて、『オイ粂！此處だよ旦那が先刻から呼んで入らつしやるんだよ。』ト、云はれて粂次郞薄氣味惡く、傷持つ脚の進み兼る

を、漸くにして主人の居間へ這入り、伊兵衛の前に手をつかへると。伊兵衛はなほ近く招いて、《サテ粂次郎。誠に御苦勞だけれども、お前一寸私の代理に、宇都宮まで行てくれんか。實は私が行く筈であつたが、知ての通り娘を今度山室樣へ上るについて、私が留守では不都合だから、お前誠に御苦勞だけれど、明日の朝早立ちにして、一ッ宇都宮まで行てくれ。宇都宮は一昨年私と一所に行た、大黒屋へ代物を持て行くので。外に少し用があるが、それは私が手紙を付けてやるから、口上には及ばん。又路用は此處に少し斗り入れてあるから、胴卷ごと持て行きなさい。暑い時分の事でもあるから、朝は成りたけ早く立て、日中は立場で悠然休むやうなとにして……途中で病氣にでも成ちやつまらねェから。それに道中は物騷だから、私の道中差しを貸してやらう、あれを打込んで行くがよい。》ト、何かは知らぬが寝耳に水足元から取急いだ命令に、粂次郎呆氣に取られて、諾否の返事も暫時は出なかつた。

（十）

お京はいよ〳〵山室家へ奥勤めに上る事に極まり、家内はその支度を取急いで居るに。お京はつらく悲しく、遠流にでもされる心持ちで、涙に暮らす今日此頃。頼みに思ふ戀人の粂次郎は、思ひ掛けない宇都宮のお使ひ。常に似合はぬ不粹な仕方と、父親を恨むでも今更詮なく、取り殘された身はます〳〵心細く、朝暮乳母のお崎を捕へては、かき口説きかき口説き、いつそ死んで仕舞ふとまで云ふに、お崎は驚き、なほ種々に慰めても、慰められぬお京の心中。彼を思ひ是を思ひ、果ては思ひ迫つて、ほんとに

短氣を起さうも知れぬに。主思ひのお崎は、餘所事ならず心を痛め、折を見合せて伊兵衛に向ひ、『お嬢樣の此頃の御樣子、われも御奉公がお嫌なばつかり。此儘に捨て置いては、御躰に障りますのみか、果ては御氣の狹い處から、ひよんな事に成らうも知れず、さう成ては取て返しが付きませぬ。兎角は此事を中止にする、好い分別は御座りませぬか。』ト、實情を盡して說き勸めるに。伊兵衛も思案の腕を組み、『それは其方の云ふまでもなく、私も最初より此事は好まず、何うも娘は上げられぬと、謝絕はしたけれど。あの三雲屋の喜四郎親父、一筋繩では行かぬ奴。もしお京殿を上げぬ時に於ては、山室樣の大切な若殿、見す〳〵焦がれ死は知れたと。祖父が長崎から出て來た折から、大恩のある山室樣へ、申譯が立ぬ故、私も鴆を喰ふて死ぬ覺悟。其方が返事只ッた一ッが、人間二人生死の境、茲の處をよう合點して、お京殿をお邸へ上げてくだされと、くどう繰り返しての依賴。それでも否ドやと云ふ時は、後日の難儀計られぬに、是非なく納得した次第、娘もさぞ嫌であらう、不承知は道理ドやが。これが遊女に賣るのではなし、云はゞ女の出世と云ふもの故。私が胸も少しは察して、今度の處は不肖して吳れるやう、其方からもよう云ひ聞かしてくれ。』ト、これも便無い挨拶に、再び返す言葉も無く、お崎は其儘泣き寢入り。お京は尙更泣いてばかり。淚を知らぬ繼母のお島は、其間に支度を急がして、衣類調度の用意大方は調ひ、明日はいよ〳〵ト云ふ事に成た。

お京は今朝から眼を泣き腫らして、三度の膳に箸も取らず、亂れた鬢に櫛も立てず。只シク〳〵と袂を

嚙んで、一間に引籠でばかり居るに、萬一の事があつては大變と、お崎は側へ着ききりにして、せめては氣の紛れるやうにと、種々話をしかけても、挨拶も祿にせず。只時々洩れるのは、『粂はまだ歸らないかチー』ト、ぢれッたさうな聲ばかり。其心も知らないで、下女のお國がいそ〳〵這入て來て、『アノお孃樣、此のお服を一寸召して御覽あそばせ。仕立屋さんがやつと只今持て參りましたから。』ト、云ひながら持て來たのは、今度御奉公に上るに就いて、新たに拵えた振り袖。見れば黒縮緬に花菱の定紋付き、裾を白茶にぼかして、小松とこぼれ梅の模樣。常ならば飛付いて嬉しがるものを、今日は嚙み裂いて棄てたい心地。エヽ、見るも嫌！

（十一）

不憫やお京、今は御殿風に綾路と呼ばれて、まづは山室家の腰元。髷も御守殿に結ひ直して、帶は立やの字、斯うして見れば又一段見上げた容色。一家中の眼其一身に集まつて、宿直の詰所の月旦、綾路の他に女を說かず。あはれ一言なりとも情らしい言葉、一度なりとも情らしい眼づかひト、それは願はぬ者もなく。虎髭厳めしく、上下の肩角張つた丈夫も、君の馬前と極めて置いた命を、此君の爲ならば、今捨てゝも更に惜からず。い、い、い、はこせこの打擲なんでも無い事、振袖のしもと願つても打たれたいほどなに。さりとは人ぢらしな綾路、此の邸に來た其日から、ついに機嫌のよい顏見せたとなく。いつも眼を泣き腫らして、用が無ければ一間に引籠でばかり。却て一層人の念ひを増さしめた。

此時山室家の大殿遠江守季武は、兼ての願ひ聞屆けられて、國元に隱居の身となり。嫡子仙三郎廿一才で元服して、雅樂助季高と其名も仕細らしく昨日まで部屋住の身が、廿五萬石の當主と成た。これに就て、兼て執心の腰元綾路を、改めて內妾に直し。其日から御部屋樣と、人々に敬められる身の出世、綾路はいよ〳〵悲しく、何卒して免がれんものと、樣々の嘆願に、季高少し腹立の氣味に成て。或時傍の人を遠ざけ、綾路を膝近く招き寄せて、《何故余が云ふ事を聞かぬのぢや。仔細があらう、云ふてくれ！》ト問ふに綾路も何やら氣味惡く、答辭に暫時躊躇つたが。愁ひ包み隱さうより、寧の事云ふてしまひ、それで御意に逆らうたなら、それまでの事と覺悟を極めて、恐る〳〵手をつかへ、《賤しき此身を、斯程に思召す御志、勿體ないほど嬉しうはござりすまれど、どうあつても御心に從へませぬ仔細、耻かしながら斯うでござりまする……》ト、自分も今は只の身でなく、深く云ひ替はした男あつて、其胤を宿して居る事を、殘り無く話した後。《斯程に汚れた妾故、迚も御寢間の伽ぎは叶ひませぬ。どうぞ此儘御暇を下さりませ。それもお聽き下されずば、どうぞ一思ひに御手打ちに……》ト、淚を呑んで云ひ放すに。季高は初めて樣子を知り、驚き呆れて暫時は言葉も無く、腕を組んで思案に呉れたが。やがて膝を進めて綾路の手をヂッと握り、《コレ綾路！其方は貞女ぢやな。顏ばかりと思ひの外、腹の中まで天晴れ美人、季高尙更執心致す。暇も遣られぬ、手打ちにもせぬ。》《それでは何うでも御聞屆は……》《綾路！これも因果じや、許してくれ！》ト云ひ放して、其儘座を立てしまつた。跡に綾路は季高の心酌み

かねて、今更胸安からず、どんな難儀に及ばうかと、それのみ獨り案じて居たが。其日より季高は、只懇ろに綾路を劬はり、共に快く遊ぶばかり。寢所は決して一ツにせず、お部屋樣とは只名のみであつた。

（十二）

譬へば黄鳥、朱塗りの籠に飼はれうより、矢張り戀しい元木の梅。――綾路も今は腰元ともつかず、さりとて眞の內妾でもなく。寢間の伽だけは漸く免れたが、尙宿へは歸るとならず。只山室家の奥殿に飼はれて、綺羅錦繡に取卷かれ、多くの女中に敬はれて、町人の娘をさりとては、勿體ない程大切にされるに。他の朋輩の所存如何と、それ等を案じ過しては、身は針の褥、兎角居づらくてならぬけれど。また季高の此の頃の擧動、毎日の樣に尋ねて來ては、憂ひ勝ちな綾路をば、何卒して慰めんものト、そればつかりに心を碎くに。初めは五月蠅く思ふたも、次第に情に絆されて、果ては心も少し挫けたが。さりとて戀しい粂次郎のこと、片時忘れる間もなく。せめてはその音信なりと、聞かしてほしいと思ふても、それさへ心の儘ならず。殊に腹の兒もはや四月、心安く產をせよ、產まれた其の兒は養うてやらうト、殿の言葉は嬉しいけれど、心安く產み落した後は、此の身を何うする御心算かと、それを考へてはまた心細く。所詮あれまでの緣と諦らめて、殿の心に隨はうか……いや／＼それは女の道ならず。寧そ舘を拔け出して、粂次郎の許へ行かうか……それでは殿に濟まぬやうなト。彼も思ひ切られず。是れ

も棄てられず。心二ッに身一ッを、今は何うすることもならぬに、胸の安まる暇もなかつた。胸の思ひ外に現はれて、綾路は兎角優れぬ樣子、見兼ねて季高は心を痛め。此儘に捨て置いては、大切な體に障るであらうト、氣遣はしく思ふ處から、種々思案を巡らした末。態々牛込の目白臺に、新らしく屋敷を購ひ、それに綾路を住はせて、自分も大方は其處に泊り。何事も綾路の心の儘、氣樂に保養させることにした。――此の目白の下屋敷と云ふのは、丁度不動堂の隣地に當り。關口の清流に臨んで、向ふは高田早稻田の村落、日和には富士足柄の山々まで、總て一幅の圖に成て、四季の眺望に飽かぬ處故、自然綾路の心もほつれ、體の爲にも良らうと云ふ、皆季高の實意。これを思へば……噫勿體なや此方の殿樣！ト、腹の中で掌を合すことも度々。

かゝる中にも光陰は會釋無く、何日か夏も過ぎ去て、來る秋は軒端の桐に音づれ。夕暮の虫の音哀れに、我身の上を喞つかと、只さへ物悲しくてならぬ折から、――思ひも掛けぬ一大事！

七月の廿日と云ふ日。晝の中から西風砂煙を起して、夜に入てはいよ／＼劇しく、鴉も塒を振り落されて、闇に啼く聲物凄く、人々肝を冷して漸く枕に就くと。やがて其夜の午の刻、寝耳を貫く半鐘の響き、スハ火事よと、皆屋根に駈け登つて見れば……アレ／＼火の粉が――常盤橋外！

（十三）

同ド江戸、將軍の膝下に住みながら、一つは繁華な下町の眞中、一つは邊鄙な牛込の端。それかとばか

り東の空赤く見えて、半鐘の音も少しは聞えたが、火元は何邊とも知れず。只上屋敷氣遣はしさに、馬をはしらせた使ひの者、黎明に飛で歸り、《御上屋敷は無事なれど、綾路樣の御里が――丸燒》ト、呼吸も繼きあへぬ注進を、聞くより綾路は仰天して、暫時は物も云はれず。處へ取次の下婢走つて來て、《只今お崎さんとやら云ふお女中が、一寸お目通りが願ひたいと、中の口まで來てゞござりますが。何やら急ぎの御用と見え、ひどう心の急く樣子。直ぐにお逢ひなれますか。》ト、云ふに綾路はそれと知り、《それあらば早う此處へ。》《ハイ。》ト答へて引返したが、やがてお崎を案内して、綾路の居間へ連れて來た。久し振りの對面に、綾路はいそ〳〵次の間まで出迎へて、《オヽ崎か、よう來て。》ト、走り寄て其手を取らうとすると。お崎は綾路の顏を見るより、其儘疊の上へ身を投げ伏して、挨拶もせず只泣ばかり。綾路はそれを救け起して《コレ崎！泣いて居ては分らぬ、速う昨夜の樣子を聞かして！》《それでは昨夜の御樣子を、もう御存じでござりますか。》《使ひの者が戻つて來て、只〻今聞いたばかり。シテ父樣は御無事なか、粂には怪我は無かつたか。速う話して……それが聞きたい。》ト、急き込むに、お崎はやう〳〵氣を取り直し、《御話し申すも忌はしうござりますが、御話しせねば樣子が分らず。……お孃樣まづ御聞き下さいまし。》ト枕を置いて物語るを聞けば。――火元は僅か四五軒先き、折からの西風に、風下の悲しさは、道具何一ッ持出す間もなく、忽ち家は火に包まれて、家内の者は寢衣のまゝ、辛く身一ッを逃れ出たが。中に旦那樣は、如何活路を失ふたか、淺ましや藏の土に敷かれて、今朝見れば無殘眞

黒焦げ！《エヽ、それでは父様はアノ黒焦げに……》《ハイ……目も當てられぬ非業な御最期。》《そして粂やら其他の者は？》――御新造お島樣は行衞知れず。これも灰の中にかと、探して見ても見當らず。噂に聞けば番頭の廣吉と、眞先に逃げて仕舞ふたとやら。其他店の者共は、思ひ〳〵に逃げ散て、未だに誰も歸つて來ず。又妾は運強く、昨夜は石町の伯母の許に、泊まりに行て居りました故、危險ひ命を助すかりました。《そしてあの粂次郎は？》《ほんにアノ粂どんは、四五日前から家出して、今はお店に居りませぬ。》《ナニ粂が……アノ家出を。そりや又何故に？……譯を聞かして！》《サア何故の家出やら、妾にも分りませぬ。》《それでは今何處に居る？》《それも一向存じませぬが、昨夜などは眞先きに、駈付けて來さうなものを、今朝に成つても影を見せぬのは、大方江戸の中には居ないのと見えます。》ト、聞けば聞くほど情無い事ばかり。綾路も今は堪り兼ねて、お崎の膝に震ひ付き、ワッとばかり泣き伏すに。お崎も何と慰めてよいやら……やがて自分も重り合ふて、涙に袖は絞るばかり。

此時襖静かに開けて、誰やら居間に這入て來る樣子に。綾路は驚いて身を起し、涙をはらつて見返れば、後にスックと――これはしたり殿の御入來。

（十四）

思ひ設けぬ季高の入來に、お崎は驚きながら飛び退り、次の間に半分身をにぢり出して平伏すれば。綾路も急ぎて席を改め、しとやかに兩手をつかへたまヽ、これも暫時は頭を揚げ得ず、只オヅ〳〵するば

かり。
やがて季高は進み寄て、其處に座を占め、《コレ綾路！其方の心中察し居るぞ。》ト、劬はる只一言、情は充分其中に籠つて、聲も涙に濁る樣子。綾路は辱なさに尙更胸塞がり、まだ何とも返辭は出ない。
季高は又靜かにお崎を見かへり、《其方は綾路が乳母か。》《ハイ……御幼少い折から御乳を上げました、崎と申す不束者にござります。》《オヽ崎とやら、よく來て吳れた……。樣子は大方一間で聞いたが、いかにも不憫な綾路が身の上、此後は尙更心細い事であらう故、苦しからずば其方も此館に居て、往時の通り綾路の擁護を致して吳れぬか。此儀は季高が、改めて其方に賴み入る。》ト云ふにお崎は元より願ふ處、なんの苦しい事があらうぞ。さう成る事なら實に重疊ト、斜ならず喜んで、異議無き旨お請けをすると、季高も滿足して、直ぐさま事がまとまり、其儘お崎は綾路の居間に勤めるとに成た。さても粹な捌き、これも綾路を不憫がる實意から。――
眞實今季高は、綾路を戀ふ心より、これを憐むの念まさり。斯程の憂苦を見せるのも、皆吾と云ふ者ある故と、それを漸く悟つては、氣の毒でゝたまらず。只此上は如何にもして、綾路の心を慰め、飽くまで力に成つてやらうと思ふばかり。其身を汚してわが情慾を遂げやうと云ふ、抑も當初の念願は、男らしく今さつぱり思ひ切てしまつた。――是偏へに其貞操に感激してのこと。思へば女の操正しいほど、世に恐ろしい力はあるまい。大象をも繫ぐと云ふ、其頭髮もなんのその。

お崎が共に居るとに成つてからは、綾路も少しは力を得たが。兩親には殘され親類は無く、二世と云ひかはした粂次郎は、何事ぞ行衛知れずト、其等を思ひまはす時は、しんぞ此世が味氣なく。果は死を決するとも度々であつたが。殿の優しい心根と、腹に宿した戀人の胤とに、流石愛着の絆を曳かれて、惜くもない命を永らへては居るものゝ。考へれば考へるほど、吾身の不幸に前世の業思はれて恐しく、後生を願ふ念こゝに起り、此黑髮も誰が爲に結ふものぞ、いつそ淡泊と剃り落して、振袖の代りに十德ト、健氣な決心、或る時お崎にも話して見ると。お崎少し小首を傾けたが。何にしてもこれほどの美色を、さりとは寶の持ち腐れ。妾で濟むとなら、お身代りにト云ひたいけれど、こればかりは左樣はゆかず。所詮その御心なら、斯う遊ばしては如何ト、お崎の勸告に、綾路實にもト合點して。殿樣には內證、毎朝暗い時分から庭口を忍び出で、ツイ鼻の先の不動樣へ、三七日の間日參。是一ツには父の菩提を吊ふため、二ツには孕兒の恙無く產れるやう、さて三ツには戀人の粂次郎が無事に居て、何卒再度會はれるやうト、此三ヶ條の祈願に、身を忘れて一心不亂。其眞情が屆いて粂次郎に會はれた時は、殿に願ふて暇を乞ひ、共に近江屋の家を興す所存。もし又會はれぬ其の時は、これまでの緣とあきらめて、首尾ようう孕兒を產み落すを待ち、直ぐさま尼に成る覺悟で、――さてこそ此間からの御參詣。それに今朝お姿の見えぬは、……オヽそれよ、算えて見れば今日で滿願、丁度三七日に當るやうなが……シテその戀人にお間ひなされたか。もしまだお會ひなされぬなら、あつたらあの小町櫻、青葉にして仕舞ふとか。さ

ても、おいとしや、情なや……ト非人のお松の長物語。何時か秋の日のたつぷり昏れて、つい其處に居る人の顏も、確とは見えぬ樣に成つた。

（十五）

《お松さんの話に身が入て、日の暮れるのも知らなかつた。ほんとにお婆さん飛んだお邪魔でしたネ。》ト、云ひながら飴屋は財布の中から、若干の鳥目を出して盆の上に置き、《お婆さんこれはほんの少しばかりですけども。》《オヤまアそれは御氣の毒樣ですネ。》飴屋は又別に鳥目をつかみ出してお松に向ひ、《これはお前さんに……失禮だが話のお駄賃だ……。》《イヽヱなんのそれには……》《まアいゝから取て置きなさい、お蔭で大層面白かつた。ドレそろ〳〵歸りましやうか。》ト、例の荷箱を肩に掛け、表の方へ行てしまふに。婆さんも急いで葭簾を捲き、床几などを積み重ね、店を疊んでこれも自分の家へ歸つて行た。

あとにお松は、此頃にない今日の收獲に、久し振りで米の飯にありつくはト、ホク〳〵喜びながら門を出て、角の煮賣屋に這入り、思ふ樣腹を滿たして、これからは只寢るばかり、酒樽がさぞ待て居やうト、急ぎ足で歸て來ると、何時の間に立戾つたか、さい前の飴屋門の小蔭から現はれて、《オイお松さん、一寸待て呉れないか。》呼び止められてお松は驚き、立止まつて後を透かして見ながら、《さう云ふお前

は……オヽ先刻の飴屋さん。》《いかにも先刻の飴屋だが、ちつとお前さんに依頼があつて、今まで此處に待て居たのだ。》《シテ妾にお依頼とは？》《立て居ちやァ話せねェ……ちよつくら彼處まで來てもらはう。》ト、先に立て以前の茶店の處へ來て、積である床几を一脚おろし、お松も一所に腰かけさせ、四邊を窺ひながらソッとすり寄て、《時にお松さん、依頼と云ふのは他ではない、遠州樣のお邸へ、私を案内してくれまいか。》《エッ、遠州樣のお邸へ？……》《サ、只こればかりぢやわかるまいが、先刻もお前さんが話をした、近江屋の手代粂次郎とは、何を隱さう私の事だよ。》《それではお前さんがアノ粂さんと云ふ……》《今こそ斯云ふ風俗をして居るが、これには仔細のあるとで、追て譯も分るけれど。兎に角是非とも今夜の中に、お孃樣に逢はにやならぬが。さうかと云つてお玄關へ、名乘て出る譯にもゆかず。……逢て會話はならずとも、只私の無事で居る事さへ、知らして上ればよいのだが……なんと案内をしてはくれまいか。》ト、折入ての依頼。お松は篤と聞いて、《成る程それは御道理。お前さんの無事なお顏を御覽遊ばしたら、綾路樣もさぞ御喜びであらう……。斯云ふ時こそ御恩報じ、片時も早くお逢はせ申して、御安心遊ばすやうにして上げたいもの。……殊に此處は御下屋敷故、さほどに嚴重でも無いのみか、忍び込むには適當の處、妾は見て知つて居ます。ほんに今日は御滿願、これも皆不動樣の御利益か。……さう云ふ中も心が急く、それでは直ぐに、さァ御出でなさい！》ト、はや先に立て行くに、粂次郎は賴もしく、荷箱も鉦も其處に殘して、お松の後から尾いて行た。右は高塀、左は椎木の枝茂つ

て、只眞闇な小徑を、先に立て行くお松の、冷飯草履の音を知る邊に、辿つて行くと廿間ばかり。路盡きて先は笹藪、此處から這入れとお松の耳語、粂次郎は點頭いて、《辱ない》も忍び聲。やがて足音を竊んで、藪の中に割て入り、ガサつく根笹を踏みしめて、辛うじて藪を拔け。低い四ッ目垣を乘り越れば、ヤレ嬉しや此處は廣庭、幽かに見える燈火の影、あの邊が綾路の居間かト、それを目的に進で行けば、ア痛！横合から頬を刺す松葉、それを拂つて行うとする、其前脛を石に蹴つけて、思はず其處に蹲居り。又立上つて手探りに、立木を除け捨石を跨ぎ。築山の裾をめぐつて、漸く奥殿近くなるに、まづ嬉しく又恐しく。呼吸を殺し身を潜めて、尙二足三足進みかけた時。南無三！後から帶際取て、誰かは知らず《曲者待た。》

（十六）

綾路はお崎の勸告によつて、目白不動へ祈誓を籠め、供も連れず只一人、人目を忍んでの日參。はや今日は滿願と云ふに、其苦心の甲斐もなく、粂次郎の行衞まだわからねば、さてはいよ〱無い緣かト、諦らめても今更悲しく。薄暗い行燈の下に、お崎と膝を突き合はして、共に涙に暮れて居る所へ。思ひ掛けない殿の御使者、《即刻參れ！》トの御召しに、何の御用かは知らぬが、まづ急いで衣服を改め、泣き顏隱して殿の居間へ行て見ると。季高は何時に增して機嫌よく、《さて綾路！其方を態々呼び寄せたは、他の事ではない。――今宵限り其方に暇をやるぞ。》意外の言葉に暫時呆れて、只季高の顏を見つ

めて居ると。季高は又語を繼いで、《それにつき季高が寸志、其方に取らせる餞別がある、快く受けてくれ！》ト云ひながら次の間を見かへり、《多久彌其品をこれへ！》《ハッ。》ト答へて間の襖をサラリ明ければ、多久彌先に立て、後から來る其人は、——ヤレなつかしや粂次郎！走り寄てすがり付きたいけれど……殿の御前を憚つて、只モヂ〳〵するばかり。——さても夢では無からうか。

此に優つた者はない、嬉しい有難い餞別。綾路は押し戴かぬ斗にして、此を居間へ持ち歸り、お崎にも見せると、お崎も驚くまい事か喜ぶまい事か、二人兩方から手を取て、暫時は嬉し涙に言葉もなかつた。

漸くにして綾路は、粂次郎の風俗の變て居るに氣が付き、さてもこれは何とした事ト、いぶかしさに尋ると、粂次郎容をあらため、《さればよお孃樣お聞き下さりませと、自是語り出すを聞けば、——さても綾路が御殿へ上つてから後、お島の不行跡いよ〳〵募つて、はては人目も憚からず、粂次郎へ淫猥らしい擧動、粂次郎は迷惑でたらず。また例の廣吉は、自分の寵を横取りされまいト、頻りに粂次郎を邪魔に思ひ、如何かしてあれを無い者にト、主人伊兵衞へ種々の讒訴、それも効驗の無い處から、果は恐しい企謀、三雲屋の主人を旨く欺して、怪しい薬まで手に入れたと、聞いた時は身毛竪つて、所詮此處に永く居ては、自分の身の安からぬのみか、到底は御店の利益にもならずト、分別を定めて家を拔け出し。暫時宇都宮の大黒屋に影を隱し、いづれ伊兵衞だけには此仔細をあかして、機會もあらば又店に歸らうト、思つて居る中主家の大變。永年大恩のある主人伊兵衞は、無慘や……眼もあてられぬ最期。また女房のお

島は、例の廣吉と一所に成て、此大變を幸ひに、金子若干引き攫つて、何邊へか逐轉し、近江屋の家は散々の仕末。――それも三四日經て初めて聞き、驚愕して江戸へ飛で歸り、本町の燒跡へ來て見れば、店も藏も只灰の山、此處が中庭ト思ふ處に、半分倒れかゝつた石燈籠と、眞黒な幹ばかりの槇の樹、見るから涙はら〳〵と落ちて、其儘灰の上に突伏し、《斯うと知つたら彼の時に、お店を逃げはせまいものを。なまじ旦那樣に御心配かけ、お詫びもせぬ間に此の體態。……ア、悲しや口惜しや》ト、泣いても恨んでも追付かず。またお京樣は如何して居らつしやるとか、さぞ御嘆きのことであらうト、それを思ひやつては增々たまらず。ヨシ此上は身を粉に碎いても、此の近江屋の家を興して、伊兵衛の亡魂を慰めんものト、覺悟をさだめてさて此のありさま。辻占飴と云ふものを工夫して、それを毎日賣り歩行き、少し斗りの利潤を得て、塵も積れば山をなす、其將來を樂みにして居る折から。今日目白不動の地內に來て、不圖聞き込だお松の談話に、綾路の樣子篤と知り。今迄綾路は殿の意に從つて、樂しい月日を送つて居るとと、少しは恨めしくも思つて居たが。それは全く自分の僻見、實は見上げた心底に、嬉しく辱なく、今は矢も楯もたまらなく成つて、大胆にも御屋敷へ忍び入る處を、多久彌に捕られて、殿の御前に引据えられ。もはや御手打ちになる事と、覺悟を極めながら少しも惡びれず、事實を白狀すると。殿聞いて小膝を打ち、直樣縛を解かれて座敷へ通されるに、何やら薄氣味惡く、如何成る事かト案じて居る間に、思ひ掛けない此首尾ト、粂次郎の物語に、事の大概はわかり。其後は三人入り

亂れて、彼一句是一句、或は泣き或は笑ひ、秋の夜も短くあけて、日頃の雲霧今朝晴れば。欄間にさす旭麗はしく、アレ嬉しさうな雀の聲！

さて季高の情によつて、綾路は粂次郎と一所に舘を下り。一端潰れかゝつた近江屋の家を、又起す二人の力。其の間に可愛らしい嬰兒産で、これをお崎に抱かせ、山室家へ御機嫌伺がひ出る頃には、季高にも松江と云ふ奥方出來て——こゝも御目出度や。　（了）

◉秋の蝶

（其一）

麻布古川端に、霜といふ吾が乳母が住で居る。廿年ほど以前良人に死別れて後は、與吉といふ子息と只の二人暮らし。與吉は幼稚い時分から、器用に盆栽や箱庭を造つて居た甲斐に、今では植木師の群に入り、晝は庭の手入などに傭はれ、夜は又縁日へ草花を擔ぎ出して、痩腕に一人の母を養ふ殊勝さ。今年廿四の血氣盛りで、尋常の若者なら、飯盛に現をぬかすか、さなくば良からぬ遊戯を覺えて、商買物の梅櫻も、正眞のものよりは、紙札に畫たのを有難がり。大方家を外にして、親の壽命を縮めさせる年頃であるに。此與吉職人には珍らしい堅造で、前の樣な遊事一切喜ばず。交際の席に連なつても、無理强ひの猪口一杯に、息をはづまして苦しがるといふ風であるから、此年齡になるまで、遂に一度母子が赤

い顔仕合つたとおく。稼業大切、母親大切と、精一杯働ぐので、近所の者も感心し、自家の野良息子と比較しては、いつも羨ましがつて居た。

されば親の身の嬉しさは一入、杖とも柱とも頼むで居たが。もはや年頃の事ではあるし、且は轉ばぬ先に杖といふともあるから、與吉が惡い事を覺えぬうちに、似合はしい女房を持たせてト、知己の者にも心當りを探させ、自分からは云ひ惡いから、人を頼むで與吉にも言聞かすと、皆まで聞かずに頭をふり。まだ私も年は若し、腕は鈍し、只一人の母を養ひますのすら、隨分と難義、此上に女房など持ち、嬰兒の一人も出來しましては、それこそ大事。親子で饑死するより他はござりませぬ。又女房を持ちますると、自然情がその方に偏り、大切なお生母も疎末になるもの。何は兎もあれ今暫時の間、女房持ちますは平に御免と。一向に承引ぬので、母親も強てとはいひかね、自家の息子の樣でも困りますト——惡くいふのだか、ほめるのだか。

與吉は大方毎日仕事があり、朝早く辨當持たして出せば、日暮まで歸て來ず。留守はお霜只一人、その淋しさから思ひ付たか、此間から茶店を開き、駄菓子に握酢、此頃流行の燒パンなどを店頭に列べ、通り掛りの者や近所の小供を相手に、少しばかりの利分を得て、聊ながら臍栗の足にするのも、まるで子息の厄介にはなるまいと思ふ、老嫗の意氣地。これも其身體が健康であればこそ、——還暦の祝も遠くはないに。

乳母が隱居仕事に此商賣をはじめてからは、流石に店が忙がしいと見へて、暫時吾が家へも無沙汰でおつたが。先月久し振で機嫌聞きに來た時、《何卒若樣、那邊を通り掛りでございましたら、是非お立寄りを願ひます、何はなくとも筍飯位は御馳走致します。》ト、懇切に云ふて行た故、いつか一度尋ねてやらうと思て居るうち。此頃初袷の身輕さに、近所の友達二三人と、目黒の新綠見に行た歸り途。白銀まで來て思ひ出し、幸ひまだ日も高く、それにさほどの廻り路でもないから、今日こそ尋ねて行て、乳母の喜ぶ顏でも見てやらうト、茲で友達に別を告げ、又草鞋豆の出來ぬ足を力に、やがて古川端へ出て、其處か此處かと見渡すと。丁度三の橋を渡た所に、それらしい茶店が一軒。間口は二間半ばかりか、まだ新らしい腰高障子に、「お休所」「だんご」「すし」など書いてあり。床几三ッ四ッ行儀よくならべた土間、行拔に成て裏は庭らしく、表の方には草鞋や冷飯草履を釣し、茶棚や菓子などをのせた臺が置てある。なほ奥を窺くと、四疊ばかりの表座敷。火鉢の側に陣を取て、乳母は頻りに繼ぎ物をして居て。折よく客もない樣子だから、甘いと獨り喜んで、案内もなくずッと這入ると、乳母も人影を見て客だと思ひ、《入らつしやいまし。》云ひながら下りて來やうとして、初めて吾と云ふとを知り、《オヤ、若樣でございますか。よくまア來て下さいましたネ。サどうぞ、こんな汚い處でございますけれども、まアお上り遊ばしまして！》

其うち私は傍にある床几へ、投げる樣に腰をかけ。あたりを見廻はしながら、《中々いゝ店だネー、どう

だい繁昌するかいィ?》《イヽヱ貴君、一向不景氣でございまして。然しまアよくこんな處へ來て下さいました、そして今日は一體何邊へ?……》《目黒まで行た歸途だ。》《目黒まで?……へヱお一人でございますか。》《連れがあつたけども白銀で別れた。》《オヤまア貴君、お草鞋を召して居らしやるのでございますネ。まアホヽヽ。》《草鞋穿いてるのが、何故をかしい。》《よくお貴足が痛みませんネ。》《なアに痛いもんか、始終穿きつけてるもの。》《へヱ。誰に穿かせておもらひ遊ばしました。》《馬鹿にするな、草鞋なんぞ獨りで穿けるサ。》《ほんとに能く召せますネ。——お宅では皆様御機嫌よろしうございますか。》《ハア、みんな變りはない。》《それは何よりお結構でございますネ。先達て上げました菫は花を持ちましてございますか。》《ウン三ツばかり咲たよ、今度與吉が來たら肥料をよく敎はつておかなくちや。》《オヤ、いやな私はまだお茶もあげませんで。兎も角も若様お上り遊ばして、どうぞ其草鞋をお取りなすつて…、御安樂お休み遊ばして下さいまし!》と、吾を進めて座敷へ上らせ、茶を酌で出したり、店の菓子を盛て來たりして、甲斐〻〻しくもてなして居たが、やがて裏口の方へ行て、《まアちやんや、もうそれはいゝから、鳥渡來ておくれ!》さては裏にも人が居たのか。——私は默つて聞て居ると、可愛らしい女の子の聲で。《アイ!それおやお婆さん……二把だけ洗ておきましたヨ。》《オヤ大層早かつたネ。そんならおとは明日にして、鳥渡お使に行て來ておくれナ!》《ハイ。》

此時娘は前垂で手をふきながら、霜の側へ來るのを、霜は引寄せて何か耳語た。娘は只點頭て居るばか

り。此娘、年は十三か四。髪は形ばかりの銀杏返しに結て居るが、油氣疾に無くつて、鬢の毛五月蠅さうに耳を掩ひ。着物は手織木綿の袷に、い、い、めれんすと毛繻子と腹合の、幅の狹い帶を〆めた鹽梅。何う見ても賤い者の娘らしいが、面は着付と打て變つて、何處となく氣高く。パッチリとした眼に、了簡あらぬ愛嬌あつて、キッとしまつた口元利巧らしく。横顏は此間銀座の寫眞屋で、ほしいと思つた油繪の美人にそつくり。此に麥藁の帽子をかぶらせ、水色の洋服きせたなら、あの額からぬけ出したかと疑はれやう。さりとは床しい小娘、何處の誰の娘で、此の乳母の家に、何云ふ由縁あつて來たものかト、酌でくれた茶のさめるのも知らず、吾を忘れて見惚れて居た。

其中件の娘は用事を聞果ゝ、軈て裏口から出て行た後。《乳母、あれは何處の娘だェ？》

（其二）

あの娘でござりますか。彼はお町と申しまして、今年で漸と十四になりますが、それは〳〵感心な娘でござります。――父親は松山幹一と申しまして、只今では直き飯倉五丁目に、裏屋住を致して居りますが、以前を申せば水戸樣の御家來で、何百石か頂戴なされ、若黨の草履取のと、隨分時めいた御身分。それが當今の時節に成りましては、士族と云ふ肩書ばかり大きく、肩身は段々狹くなり、兩三年前までは、大藏省とかへお務めであつたを、中氣が起つてそれも御免になり、又候扶体離れとなられ、さしづめ暮らしに困る處から、家を疊むで只今の處へ引込み。彼の兄を印刷局の職工に出して、少しばかりの

日給を頂き、またお生母は針仕事が達者なのを幸ひ、お邸方の仕立物をして、わづかの賃錢に細くも煙を立てゝ居りました。丁度去年の冬のことでございます。其お生母が不圖風邪を引ましたが、それが元因でドッと床に就き、十日ばかり臥せりまして、其儘あの世へ旅立ち。……跡に殘された二人の小供は、肝腎の父親は大病。頼みに思ふお生母は、死去つてしまひましたから、只狼狽へますばかりで、何うすることも出來ませず。近所の衆の周旋で、漸々葬式だけはすましましたが。それやこれやで、雜費は入りましたから、家は一層火の車で、此米の高い時節に、粥も祿々すはれない仕末でございます。すると貴郎、弱り目に祟り目、魔でもさしましたものか、彼の兄が至極氣立のよい男でございましたが、わらう事かれ役所で……、これも矢張り貧から起つた不了簡で、お役所の方の時計を……、盗むだとか盗みかけたとか申すことで、お役所も失策つてしまひ、今までは何程づゝか取れたものが、急に取れなくなりましたから、途方に暮れて何うにも斯うにもなりません。すると又、世間は廣いものでございます。――貴君方は御存じでございますまいが、昔時のぜげんと申す奴で、只今でも慶庵の中に、斯云ふ悪いのがござりますが、あの娘の器量のよいのに目をつけ、家の困まつて居るのを幸に、卅圓とか五十圓とかに買はうと、度々云込んで參りましたが。零落れてもそこは士族様で、金錢づくで娘を手離なす樣なことはト、父親は頑固を張て、中々承知を致しません。あの娘も初手は大變厭がつて居りましたが、見るに見兼ねるは父親の苦痛、少しは樂にしてあげたいト思ふ處から、仕舞には自分から參る氣になり、兄とも相談致

して、父親にいろ〳〵叱り付けられまして、逐々其話は立消になりましたが。さしづめ喰べる事に困りますから、お町を何處ぞへ奉公に出したいが、お邸奉公にはまだ年が少し、これに第一支度が出來ず。さうかと云つて、料理茶屋や商人の處へは、どうもやり度くないト、いろ〳〵心配致して居ると申すとを、あの近所の者から聞込みました故、さう云ふとなら妾の處で、一人手がほしいと思つて居るのだから、丁度幸ひ來ては呉れまいか。其中によい口があつたら、妾が世話をしてお邸奉公に出してあげやうからト、そこで相談をまとめまして、少しばかりの給金をやつて、先月から手前共へ來てもらつて居りますが。第一氣立が至て好い上に、年の割にはよく働きますから、妾も不憫で、可愛さうで堪りませず、自分の娘の樣に思ひ、隨分いたはつて使ひまして、時々は定めの給金の他に、これでお父さんの好きな物でも買つて行きなト、少しばかり鳥目をやりましても、遠慮致して中々取るとではムりません。ほんとにそれは感心な娘でござります。只少し困りますのは、兎角自家を戀しがつて、使ひが時々遲くありますが、これとても父親の身を案じますればこそ……。其心根を推しましては、中々小言を申された義理ではござりません。まア考ても御覽遊ばせ！元はれつきとしたお侍のお孃樣、世が世であらうならば、乳母よ腰元よト團扇の風も荒くは當てません位。それが貴君。時節とは申しながら。妾風情に每日追ひつかはれて。それでも何とも思はず、神妙に働いて居りますいぢらしさ。……妾は可愛さうでたまりませぬ。

これがあの娘の履歴の概畧。聞けば聞くほど、吾も可愛さうでたまらなく成て來て、暫時は無言、只心で頻りに嗟嘆して居た。

噂をすれば其人の影、裏口の障子に寫ると思ふ間に。《お婆さん只今！》

お町は使から戻つて來た、此時吾は、なほ仔細にお町の樣子を見るのに、今の話を聞いた故か。不思議！　薄穢れた衣服も、汚くは覺えず。煠けた髮、却て貴とく。目と口とに含ませた天眞の愛嬌、無上に嬉しく、無上に有難く感じられた。

霜は次の間へ行て、お町から風呂敷包みを受取り、それを開けて何か暫時して居たが。やがて菓子皿へ、處に似合はぬ蒸菓子堆かく盛て《こんなお菓子は、お口にも合ひますまいが、どうぞお一ッ。》《有難う……こんな心配してくれちや困るな。》《あんの貴郎、おかまひ申し度くも、こんな田舍でございますから……。今日はお約束の筍の御飯をこしらえましやうと存じて……。それに貴郎は牛がお好てございますから、只今取て參りましたが、此邊の牛は如何でございますか。》《それは大變御馳走だネ。あんまり御馳走すると、好い氣に成てこれから毎日遊びに來るヨ。》《ホヽヽ、どうぞ毎日お遊びに入らつしやいまし、其代り少々お待ち遊ばせよ。これから支度を致しますから、どうぞ御體屈でも少々の間。》《アヽ、待つとも〳〵、おとなしくして待てるヨ。》《おむづからずにお遊びあそばせホヽヽ。》串戯を云ひながら、乳母は立て臺所の方へ行た。其間にお町は米炊桶をさげて、裏手へ出て行た樣子。吾は一人座敷に殘さ

れて、蒸菓子一ッ二ッたべながら、珍らしくもない襖の張りませや、壁に張りつけた錦繪を見て居たが。不圖思ひ付て獨り點頭き、其儘椽側から裏手の方へ――井戸傍の方へ……。

其三

何故吾は此時裏庭の方へ出て行たか。是には少し仔細があるので、……白状すれば吾は先刻一寸お町を見た時から、最惜しらしい娘と思つたが、今乳母から其履歴を聞いて、いよ〳〵最惜しくてたまらず。せめて一語なりとも言葉を交はして見たいと云ふ念むら立て、其念力遂に吾を座敷からおろし、足を裏庭の方へ向けてしまつた。

さて裏庭へ出て見ると、左手の隅に柘植の生垣に添ふて、太い槐が一本立て居り。其下に井戸が在て、お町は其流しの處で、頻りに米を磨いで居る。幸ひあたりに人はなし、言葉をかけやうなら此時であるのに、何うしたものか吾は急に臆氣が出て、其側へは進み得ず。又足を轉じて、右手の植込みへ這入り、薔薇や椿、榧などの苗の作てある處を通りぬけて、柘榴や梧桐、竹などの盆栽の置てある臺の前に立ちどまり。またハ花壇の方へ行て、松葉牡丹、百日草、菫、瞿麥、罌粟。其他名も知らぬ西洋の草花などの、澤山植てあるのを眺めたりして、暫時うろ〳〵して居たが。心は疾に井戸側へ行て居るので、與吉が丹精して作つた盆栽も草花も、斯うなつては甲斐なく。吾が眼は兎角お町ばかりを見たがつて、足元には氣も付かず。南無三、泥鉢一ッ蹴返した。

漸く度胸を据ゑて、また井戸側の方へ來て見ると、——さても粹な。井欄の下に五六株、麁末な泥鉢に植はつて居る瞿麥が、吾をそつとさしまねく樣子。吾は之を見に行く振りで、ツカ〳〵と側へ寄て、珍らしくもない花をヂツト見ながら、《これは瞿麥かヱ?》

お町ハ米を磨ぐ手を休めて、《ハイ、髯瞿麥でございます。》《さうか……實に奇麗だ。》云ひながら吾は、吾知らず井欄へ腰をかけてしまつた。花を媒介にして漸く口は綻けたもの丶、慾には今少し話しがして見たいが。さて突然話しかける譯にも行かず。また氣が後れて暫時無言。心の中では斯う、——先刻霜から聞いた話で、あらまし解つたけれど、まだ少し聞きたい事もある。然し何と云つて問ひ掛けやう。考て見ると第一名を何と云ふて呼びかけてよいやらわからない。自家の女中でないから、お町と呼び捨てにするのもをかしいし。さうかと云てお町さんでは丁寧過るト、つまらぬ事に胸を痛めて居たが。漸く思ひ切て、《アノお前に兄さんがあるかヱ?》《ハイ、ございます。》《年は幾歳?》《廿一でございます。》《何處か學校へ行てるノ?》《學校は……ズツト前に中學校へ參て居りましたが、只今は何處へも……》《お前は?》《ハイ……三田學校へ。》《今何級?》《イヽエ、もう一昨年下がつてしまひました。》《惜しいとした子、……何故下がつたノ?》《…………》《お前阿母さんは、居ないんだつて子?》《ハイ…………》《阿父さんは鹽梅が惡いの?》《……ハイ。》《お前自家に居るのと此處に居るのと何方が好い?》《……》

此娘は寧ろ無口な質と見えて、吾がこれほど打ち解けて話しかけても、至て簡短な、そして嚴正な答ば

かり。吾も少し張り合が抜けたが、氣が付て見れば、用もないのに色々と尋ねるのハ、隨分五月蠅とであらうと、其儘だまつてしまつた。

此間お町は、赤い唐縮緬の襷に、眞白な二の腕まで現ハし。首を少し斜めにして、餘念なく米を磨いで居り。時々米の中の芥を細い指先で摘み出し、其指先で頬へ垂れる鬢の毛をはらふ樣子、可愛くて何とも云はれず、吾ハ多愛なく見とれて居ると。お町ハやがて桶を斜めにして、靜かに水を流しかけたから、吾はそれと悟つて立ちあがり、釣瓶の竿を二ッ三ッたぐつて一杯酌みあげ、お町が今水くみに立たうとするのを、立しも敢ず、『桶をおだし、水をあげやう！。』ト、釣瓶をさし出すと。お町は呆れた樣な顏で、私をヂッと見つめる罪の無さ。私はをかしさを堪えて、『いゝからお出しよ。』『誠に恐れ入ます……』お町は漸く桶をさし出して水を受けた。吾は釣瓶を持て水を入れてやつたが、力が足らないから手が慄へて、水が少し外へこぼれ、其餘滴が衣物の裙と足の先へ掛つた。するとお町は、急いで帶にはさんで居た手拭を取て、拭いて呉れやうと出したから、吾はそれを受け取つた。此時其手を握れば、たしかに握れたものを……。吾にハまだそれ迄の勇氣は出なかつた。

不意に後の方から乳母の聲で、『オヤ若樣が、何時の間にかそんな處へ入らしつて、おいたなすつていけませんヨ。』

驚いた吾は。不意の事と云ひ、疵持つ足。少し狼狽へて、乳母の冗談に返すべき冗談も出なかつた。乳

母は手桶をさげて井戸へ近づき、釣瓶の竿へ手をかけながら、吾が衣服の濡れて居るのを見て、《ソレ御覧遊ばせ、お召しが代無しでございます。貴郎まアお幾歳におなり遊ばします。》《これか……今水がはねたのさ。》《まアお出しあそばせ!》

乳母は自分の被つて居た手拭で、すつかりふいて呉れた。お町にかりた手拭も今は無駄になつたが、然し反しもせず。どう云ふ了簡であつたか、乳母の見るのを恐れて、ソツト袂の蔭にかくして持て居た。其内に乳母は水を入れた手桶をさげ、《お米が磨げたら持つて來ておくれヨ。筍はもううだつたから。》云ひながら引返して行た。其後姿を見送りながら、吾は急いで手拭をお町に返した。

斯うなると吾も妙に極まりが悪くあつて、其場にも居られぬから、スゴ〳〵座敷の方へ歸りかけて來ると。丁度表口から、急いで這入て來た一人の男。年は廿三四、色は淺黒いが目鼻立ち尋常で、決して醜からぬ男振り。紺の腹掛に同じ股引。古びた麥藁の帽子に、足は草鞋ばき、三尺帶に木鋏一挺はさんで、手には四角な辨當の包み。——これが乳母の子與吉であつた。

其四

與吉は乳母の子、吾とは乳兄弟で、云はゞ兄も仝然。其顔見れば何となく床しく、坐ろに昔時が忍ばれる。——思ひ出せば丁度十七年以前、與吉の父與左衞門は、不圖した病氣で身罷り。その忘れ筐、程なく生まれたは玉の樣な女の子であつたが、此世の氣を吸ふと十日斗り、不憫や!産衣を其まゝ經帷子に

して、父親の跡を追ひかけて行た。

頼みに思ふ良人に死なれては、空く腹も充たすに易からず。樂みにした嬰兒に逝かれては、凝る此の乳の捨て所！お霜も此上は家を疊むで、何處ぞへ乳母奉公に出たいと、其口を探して居る折から、不思議の縁あつて、私の實家駒小路家の二男君若の乳母、――乃ち吾に乳を吳れる身分と成た。

其時與吉は丁度八才、もう親の側にばかり置こともならぬと、或る町家の丁稚に出されて居たが。白い駒の足速く、吾もはや六才になり、乳母の膝にばかりも居ないから、丁度よい相手と、與吉が十三の秋奉公から下げさせ、吾が邸へ引取つた。むかしで云へば若君のお扈從、町人風情から思ひもよらぬ出世であるから、當人の與吉よりは、母親の喜悅大方ならず。淚流さぬまでに有難がつて、與吉にも不調法の無い樣にと、よく云ひ聞かして務めさせて居たが。何を云ふにも小供同士、殊に吾は甘く育てられて、隨分我儘であつたから、時々無理を云ふては與吉を困らせ、事に依ると癇癪にまかせて、罪もない身に瘡を負はせ、流石に辛抱強い與吉を、淚組ませたこともあつた。中にも今だに覺ゑて居る事。今更思へば、よくもあんな酷い事が！

それは吾が八才に成た正月、確か二日のことであつた。吾は與吉と二人で、裏の馬場へ出て凧をあげて居たが、其日は一體風の少ない日で、未熟な吾にはどうしても凧が揚らない。それに見れば與吉の凧は、甘く揚る樣子だから。吾はそれを凧の故にして、與吉に凧を取りかへてくれと云ふと。與吉も主人の命

で否みもならず、素直にそれを吾に渡して、更に吾が凧を揚げはじめた。吾は與吉の凧を受取つて見るに、暫時はよく揚がつて居たが、空に風がないから、又次第に落ちかゝつて來る……、それをたぐつて揚げ直さうとあせる中に、忽ち傍にあつた樫の木に引かけて、糸目を一本切つてしまつた。此時また見れば、與吉の持つた凧は、調子よくあがつて行く樣子、吾はまた羨ましくなつて、再び取りかへてくれろと求めたが、與吉も今度は快く渡さず、少しお待ち遊ばせと云つたのを、無理にせびつてまた其糸を手に取つた。與吉は澁々自分の凧の糸目を繕ろい、また揚げ初めたが、糸目の釣合が惡かつたか、揚がり掛つては面喰らひして、容易に揚らないから、自分でも見捨てゝ揚げやうともせず、そろ〱糸を巻きはじめた。其間吾は自分の凧を揚げて樂しんで居たが、今度もまた少し調子が惡く成つて來たのを、見兼ねて與吉は吾が傍へかけより、いそいで糸を取てたぐり初めたが、もう追付かず。牛若も辨慶も眞逆樣、――凧は地上にバサリ。これがどうしてか非常に吾の癇を立たせ、なぜ乃公の凧を落してしまつたト、突然與吉に喰つてかゝつた。與吉は周章てゝ、イヽエ落した譯ではございませんト、言譯するほど吾は付けあがり、怒氣にまかせて與吉を突きとばすと、與吉は少しよろけたが、何う云ふはづみか其場へ横倒しに、投られたからたまらない。母が丹精して拵らへた正月の晴着、黒襦子の羽織も、暑寒平の袴も、霜解けの泥だらけにしてしまつた。是ほどにしてもまだ吾は飽き足らず、聲を張りあげて泣き出した。いつも吾が怒て泣くと、種々に詫びて慰める與吉が、其時ばかりは餘程口惜しかつたと見へて、

起上つたまゝ何とも云はず。泥塗れになつた着物をながめて、……やがてしやくり上げて是も泣き初めた。處へ用人の水元と云ふ男が來掛り、此の狀態を見て驚き、傍へ寄て譯を尋ねたが、二人とも泣いて答へぬから、其仲際に當惑した樣子であつた。然し吾が泣いて居るので、地頭には勝を讓らねばならず、譯もわからずに與吉の方が惡者に成て、ひどく小言を云はれ。やがて二人共家へ這入てしまつた。

吾の癖として、腹の立つ時は實に阿修羅の樣に荒れるが、時過ぎるとまるで打ち忘れ、しかも其腹を立てた相手に氣の毒になり、どうか其心を慰めやうと云ふ念が起る。此時も吾は程經て件の佛心が起り、與吉が氣の毒で〱矢も楯もたまらず、其機嫌を取り直さうと、竊かに與吉の居間へ來かゝつて見ると、生憎！與吉は今母親に叱られて居る最中。アッ！惡い處へト思ふから、引返さうとしたが、待てよ！何を云はれて居るかト、其まゝそつと襖に身を寄せ、耳を清まして聞いて居ると。餘所を憚かる小聲で、《だから云はないとではない、お父さんが沒つてからは、何を便りに親子二人が、此世に活きて居られるのだ。……よく考へても御覽、皆お邸のお蔭ぢやないか。……その御恩があるから、少しの事は我慢して……御機嫌に逆らはないやうにと、不斷からあれほど云ひきかして居るのがお前にはわかりませんか。……ほんとに妾にばかり苦勞させて、……阿母さんの氣にも成て御覽。……コレお見！着物もこんなにしてしまつて、明日から何の着物を着てお奧へ出る氣だ！》やがて聲も聞へなく成たか

ら、不審に思つて、襖の隙から窺いて見ると、可愛さうに與吉は、母親の前に突伏して、只しやくり上げて泣くばかり。又母親は泥に汚れた與吉の着物を、うらめしさうに眺めて、これも眼には……アレ一杯の涙！是を見ては吾はもう堪り兼ね、其儘飛込むで、私が惡かつたト、あやまらうかとも思つたが、さてそれ程の勇氣も出ず。只胸は變に絞ぼられる樣に覺え、何時の間にやら涙。頰につたはつて、水鼻も垂れさうに成たが、聲立てゝ啜るともならず、兩袖に涙と鼻をじつと押へ、心では精一杯の詫言、手を合せぬばかりにして其塲を立去り。すぐ樣奥の母樣の處へ行き、泣きながら願つて、羽織袴を新らしく拵えてもらひ、それを與吉に取らせて、やつと吾が胸を休めた事があつた。

此事が小供心にも實に深く感じたと見え、それからは吾も大きに勘辨が付て、以前の樣な無理は云はず、情をかけて與吉を使つたから、程なく二人とも大の中よしになり。學校へ行くにも自家で遊ぶにも、片時側を離したとなく、何事も與吉でなくては、夜が明けぬやうになつた。

それから吾が十二才の時、稚い頃からの約束で、今の大畠家へ養子に來て後も、右の縁で乳母も與吉も、今だに出入りはするものゝ、去るもの日々に疎しと云ふ譯ではないが、與吉も年を取るにつけて、父親の無い故か、一入大人びて來て、未だ小供心な吾とは……、殊に吾は華族、先は植木職人、身分も差ふ處から、昔時の樣な交際はならず。一所に縁日に行てカラクリを見たり、お神樂に日の暮れるのも厭はなかつた頃の事は、まるで忘れた樣に吾に對しては至極眞面目で、言葉遣ひも、をかしい程丁寧になつ

た。

與吉は吾を見て連忙しく帽子を取り、その手を膝まで垂れて辭義をしながら、《若樣で居らつしやいますか、よくお出で下さいました。》

吾も一寸答禮して、

《今仕事から歸つたのか。》《へイ。……今日は若樣何方のお歸途でございました。》《今日はアノ目黒まで行たんだが、歸りに時刻が早かつたから一寸寄つた。》《左樣で。それは然しよくお立寄り下さいました……こんな汚い處でございますが、どうぞ御安樂遊ばしまして……。》

其中に乳母は奥から出て來て、《與吉かイ、大層今日は早かつたネ。》《ア、少しはやかつたけども、切りあげて歸つて來たのさ。》《それは丁度よかつた、先刻から若樣御一人で、お淋しがつて居らつしやる處ろだ。お前歸つて來たなら御相手をして……。妾も今少し手が離されないから、その代りお前も御陪食で御馳走してあげるよ。》《そいつは豪氣だハヽヽ。兎も角も足を洗つて……。若樣、一寸御免遊ばせ。》

與吉は帽子と辨當箱を上り口へ置き、草鞋と足袋をぬぎすて、跣足に成て下駄をさげながら、急いで井戸の方へ出て行た。

吾は此時まだ座敷へ上らず、其儘何の氣無しに又裏口から出やうとして……立止まり。柱に憑れて井戸

の方をながめた。
見ればお町は、今與吉の足を洗ひに來る姿を見て、愛らしい頬に片靨をよせながら、《もう歸つたノ？》《今日はちつと早かつた。アノ……股引は洗つて呉れたかネ。》《ハア、洗つてちやアんとしてありますワ。》《そいつは有り難え。》
與吉は井戸側へ來て、持て來た下駄を下に置き、釣瓶の竿へ手をかけると。お町は傍にあつて盥を押し出して、少し躰をよけ。《其處に酌むでありますヨ、盥に！》《これは濟まネー、使つてもいゝのか。》ト云ひながら與吉は、そろ／＼足を洗ひはじめた。
《與吉さん！》《何だイ？》《今日來て居つしやるお客様は何處の方？》《あの方か。あれがお邸の若様さ。》《ア、いつも話のある大畠様の……。妾も先刻からさうだらうと思つた。》云ひながらフッと此方を見た時。南無三！吾と瞳を合せた。お町も吾が此度に居やうとは思はなかつたから、極まり惡さうに顔を眞赤にして少しそむけた。――與吉は一向これを知らず、今足を洗つてしまひ、手拭で足をふきながら、片足つまだて、手をのばしてお町の肩をとらへ、《一寸肩をかしな！》《アラあぶない、轉ぶワ。》《我慢しねエ、ちつとの間だ。》

（其五）

植込みの隅々漸く薄闇くなり、井戸傍の槐の樹梢、夕映の空に聳えて、新緑の色まばゆく、日もはや

西に沈みかけた。

此時まで吾は、與吉が作り物の手入れをして居るのを、傍で珍らしそうに見ながら、まだ知らぬ草の名を尋ねたり。又は接木の仕方、さし芽の時節。菊には何の肥料がよくて、松は何の土に限るト云ふとなどを研究して、思はず時を移して居たが。《もう御飯がよろしうございます》ト、お町の報知に與吉も木鋏の手を休め、《左樣ならば何卒！》ト、先へ立て吾を座敷へ伴なつた。

座敷へ來て見れば、はや膳部の用意整ひて。霜はまだ襷掛けになつて、鉢の物を小皿に取りわけて居ると。お町も甲斐々々しく、臺所の方から何やら運んで居る樣子。霜は吾の顔を見ると、

《さぞお腹がおすき遊ばしましたでございましやう、さアどうぞ、お口にも合ひますまいが、御遠慮なく召上つて下さいましよ、田舍料理もまたお話の種でございます。ホヽヽ。》《實に種々心配をかけて、濟まないチー。》《なアに貴君……サどうぞこれへ！……》

云はれるまゝに遠慮なく、ずつと上座に通れば。其處には木地で中だけ朱塗にした蝶足の膳に、茶碗も小皿も尾張物の醜からぬをのせ。小豆地に淡泊り鶉と秋草の蒔繪した汁碗に、箸は神路山の榊、形の如く箸紙にさしてつけてある。さてまた馳走には、約束の筍飯。牛の煮たのに玉子の卷燒。これは古川の名物か、鯉の味噌吸物。乳母が心を盡しての供應に、吾の嫌ひな物あらう筈なく。ましてや給事はおのお町、自家に居て舅や姑の前で、氣を置きながら喰べるのとは、遙かに身に成て覺え、思はず一二

杯過して、却て乳母を嬉しがらせた。

霜も與吉も禮を守つてか、吾が箸を持て居る間は、決して膳に對はず。吾が膳を引てから、はじめて次の間で食事に取掛つたが。やがてこれもすみ、茶を入れかへ、菓子など取り出して、暫時談話をして居たが、實に此時の心の中。――日頃からなつかしく思つた乳母や、稚友達の與吉、それにあのお町、今日初めて逢て、そして初めから嫌ならず思つて居る、あのお町も同ト席に居て、誰に心を置かうではなく、實に樂のしい、嬉れしいこの團欒。縱令へ煤けた天井の下、破れた疊の上であらうとも、人間のイーデンは此處此時。……悲しやそれも一刹那！

氣が付いて見れば、日もたつぷり暮れて、七時は何時の間にやら過ぎて居る。吾は急に自家のことが氣に懸り、早く歸らねばならぬ……ト思ひながらも、何としたことか此の家が戀ひしく、名殘り惜しく。兎角未練な心が出て來るのを、漸やくにして吾れと窘なめ、急に心付いた風で、もう大分遲くなつたから歸へらう。またその中……》《オヤ、まアおよろしいぢやございませんか、久し振りでございますから……。》

與吉も傍から、《折角お出で下さいましたのに……どうぞ御ゆつくり遊ばしまして。》止められるほどなほ心弱く成て來るが、なほも心を勵まして、《……でも今日はもう歸らう、遲くなるとまた自家の方が。》少し悲しさうに云へば、乳母も吾が胸を察してか、矢張り沈むだ調子で、《左樣でございますか……、そ

れではあまりお止め申しません。御養父樣のお小言が出ますやうでは、妾が申譯がございませんから……。又其中にどうぞお出で下さいまして！》

此詞を聞いた時には、何故か吾れは急に悲しく、胸は妙にむづ痒ゆくなつて、云はゞ腸を絞られるやうに覺えた。然し考へて見れば實にをかしな事で、これが二年三年の離別になるなら知らぬ事、また百里と二百里と遠くへ歸るなら兎も角。たかゞ同じ東京の內で、來やうと思へば明日にも來られるのに、それが何としてそれほど別れ惡く、名殘り惜しいか。これには話さねばならぬ次第もあるが、兎角は久し振りで乳母の傍へ來た爲め、吾れもむかしのだゝつ兒に立戻つたと見える。不覺な！今は與吉も是非に及ばぬと云ふ風で、實に殘念でございますけれども、それでは今日はお歸へし申しませう。……またどうぞ是非その中に。》さつと來るよ……。お前も閑な時には遊びにお出で！》《ヘイ、有難うございます。それでは少々お待ち遊ばしまして、一寸車をさう申して參りますから。》《車ならその邊で乘るからいゝよ。》《イヽエ貴君、辻の車は人が惡くつていけません、直き近所に知つた車夫が居りますから……。與吉や、はやく源さん處へ行て……、車は奇麗なのを！》《よろしい。それぢやァ少々お持ち下さいまし！》

與吉は連忙しく表へ出て行た。その後で私は、力なげに立上り、帶などしめ直して居ると、霜は傍につき添ひながら、まだ吾を小供あつかひ。衣服の着樣が惡いとて、褄を引いたり背筋を直したり、いろ〳〵

世話をやきながらも、つぶやく様に、『ほんとに折角お出で下さいましたのに……、一晩位お泊まり遊ばしたつて可さゝうなものでございますがネー。……さぞ貴君も御窮屈でございましやうネー。始終氣がねばかり遊ばして……。』

私の身の上を思ひやつては、勞はるやうな、慰めるやうな、そして吾を非常に激動させる詞。吾の胸は一層心細くなつて、折角の老婆心、却て恨めしいぞや！

此時お町は表の土間に出て居たが、『アノお婆さん、お履物は？』『おはき物……オヽお草鞋でございましたネ。町ちやん、其處の下駄箱に新しい駒下駄があつたつけ、それを出しておくれ！』『イヽヱ草鞋でいゝよ。自家を出る時から穿いてたのだから。』『それでも貴君、お車に召すのにお草鞋ぢや見共ないぢやございませんか。麁末なのでよろしければ、與吉のがございます、まだ新しうございますから、お氣味の惡いとはありません。お召し遊ばしまし！』『それじや氣の毒だが借りて行くとしやう。』云ひながら、其處へそろへてくれた、細い茶なめしの鼻緒の着た、臺の低い駒下駄をはいて、表の方へ行かうとすると、乳母は後から、『貴君まだお車が。』『ナニ一寸出て見るのだ。』

云ひながら戸外へ出て見ると、はや四面は大分闇くなつて、古川の川水だけ白く。前岸を走る車、提灯にそれと見え。刷毛でかいたやうな柳四五本、川霧に包まれながら、夕風に靡いて居る景色。吾はうか〳〵と川の岸まで進で來ると、足音に驚いてか、フーッと立つた螢一匹、一尺ほど闇を縫つて、また

吾が眼の前に現はれたが、一寸拂つた手を、後ろえぬけたと思ふ間に、可愛らしい聲で、（アラ螢が！）吾は後をふりむいて見ると。お町は手拭で螢を拂ひ落し、それを急いで拾ひあげて、嬉しさうに眺めて居る横顔、チラと拜ませた粋な螢。身を焦がせと云ふ謎か。

處へ與吉は車を雇ふて來たから、吾はそれに乘て、おさらば！無事に家へ歸りはしても、心は殘る古川の畔――其夜夢にお町と遊んだ。

（其六）

小糠三合持つたら、忘れてもなるなと云ふ養子の身の上。そのつらひ、悲しい身の上に、吾は今成て居るので。思へば戀しい實の兩親。これも三年前に國元へお歸りになり。吾は此養家へ、體のよひ俊寛。十二の年からもらはれて、茲に足かけ六年。その六年の間に、――習慣は恐ろしいもの、性質が著しく變つた。以前は短氣で、強情で、隨分我儘であつた吾が、氣も長く、堪忍強く、そして少かい處によく氣が付く樣に成た。その代り又萬事扣目になり過ぎて、往時の快活な氣性はいつの消え失せ、今では却て因循に傾きはせぬかと、吾ながら心配する位。これも養家へ來てから、萬づ心の儘に出來ず、する事なす事氣兼ねばかり。何處となく物に縛られる樣に覺えて、充分に自分の心を伸すとが出來なかつた。是その爲の結果でがな。

元來養父は至つて物堅い方で、云はゞむかし氣質。吾れを可愛がらぬと云ふでもなからうが、物事

に口やかましくて、何となく可怖いお方。養母は之に反して、至極口數は少ないが、その口數の少ないのが、却て又薄氣味惡るく。たま〳〵情らしい詞をかけられても、眞綿の裡に針ありさうに覺えて、これにも氣が許されない。これも初めの程は、――吾が此家へもらはれた當座は、吾もまだ小供であつた故か、隨分優さしくして、可愛がつても吳れたが。段々年を取るにつけて、次第にその慈愛の度が減る樣に見え。一昨々年實家の兩親が、國元へ引移つてからは、氣の作用か樣子が大分變はり。眼下の家令家扶、果ては召し遣ひの者までが、吾を養子と侮つてか、心得ぬ處置ぶりも度々。――殊に面白からぬはあの芳枝までが、――乃ち吾が未來の妻、――三四年前までは、兄樣々々とよく吾に馴染み、その心根の可愛さには、日頃の悲しさも忘れるので、吾も隨分と不憫がつて居たあの芳枝までが、何が氣に入らぬか、此頃ではツンとすまして、打ち解けた素振少しも見せず。此間も吾が少し落度があつて、養父に叱られて居た處へ、芳枝が學校から歸つて來たが、吾が爲めに辨護どころか、心配らしい顏もして吳れず。只垂れて居る橫顏を、ヂロリと見たばかりで、直ぐに奧の居間へ行つたが。間もなく琴の音が聲こゑた樣な仕末。あの時は心から面憎かつた。――斯樣な有樣で、此一二年以來は、何となく養家が面白からず。錦の褥も針の莚、氣まづくも居づらくも思ふ處から、自然氣が結ぼれて。雨のショボ降る夕方、實家の事思ひ出しては、人知れず袖を絞り。夜半の時鳥に眼が冴へて、フト身の上を考へ出し、吾知らず夜着の襟に、齒形をつけるともあり。寧そ浮世の味氣なさを感じて、吾身ながら女々しく成た

今日此頃。何の神樣の引合せか、何の氣なしに乳母をたづねて、思ひ設けぬ愉快を得、日頃の屈托も一時に晴れる樣におぼえたから。それからと云ふものは、思ひ出した樣に霜が戀しく、與吉がなつかしく、お町が可愛く。されど比較べては、養父がます／＼可怖く、養母がいよ／＼親まれず、芳枝もまるでいとしくなく、只乳母の側がよくて／＼、養親の側がいやで／＼……。若樣と云はれてこんな居つらい華族の家に居やうより、小僧と呼ばれてゞも、氣樂なあの掛茶屋に居たいと、わけもなく只古川の乳母の家が好きに成た。

さてその翌日、丁度月曜日であつた故、吾は常の時間に支度して、學校へ出て行きはしたものゝ。まだ昨日の事が頭腦に殘つて、井戸側でお町と話をした事や、乳母に慰められたとなど、幾度となく思出して、なんぼ紛らせやうとしても、一向忘れられず。そしてその思ひ出して居る間は、誠に樂しく、妙に心嬉れしいから、はては吾から好んで思ひ出し、まのあたり乳母の家に遊んで居る樣な氣になつて、更に餘念もない。その位だから他の事は少しも身に染みず。課業の間も何時にない失策ばかり。譯もない算術の答案も、人に先を越され。易さしい書取も、平常に似ず誤寫だらけ、然しそれを又口惜しいとも思はず、さほど苦にもしなかつた。

此日は朝から天氣が惡く、折々雨が掛るので、十二時から一時までの體操も臨時休みに成た。其間は運動場へも出られぬゆゑ、生徒は皆敎場に殘つて、思ひ／＼に群をなし。今日の譯讀の復習をして居る勉

強家もあれば、次ぎの日曜日のボート行きを、今から熱心に遊說して居る運動家もあり。或は寄席から受賣の駄洒落に、一人で頤を解いて居る滑稽家。又は怪しげな雜誌を前に開て、相手もないに泡を吹て居る議論家。立て演說の稽古をする者もあれば、坐つて落語家の眞似をする者もあり。敎場はまるで錢湯の如く、只ガヤ〳〵と騷がしい中に、吾は只一人、隅の方のベンチに腰かけ、テーブルに頰杖ついて、鉛筆で帳面の表紙に、何ともつかぬ徒書しながら、又も昨日の事を思ひ出して、獨り樂んで居たが。

フト見れば、隣りのベンチに坐つて居る少年が、一册の小說本をあけて、その口畫を感心して見て居るから、吾も何の氣なしにのぞき込むと。芳年の畫いた口畫の田舍娘、――心の迷ひか、何處やら昨日のお町に似て、いかにも可愛らしく出來て居るので、なほも餘念なく眺めて居ると。突然《ミッセス大畠の肖像。》《これは大出來〳〵。》

驚いてふりむくと、同じ級で吉元と云ふ、畫が自慢で、いつも畫學では滿點取る少年が、黑板に白墨で、隨分念入れて書いた少女の半身像。髪を束髪にして、道行を胸まで見せ、上に洋字でミッセス大畠と書いてある。私はいつもの惡戲と、そのまゝ見むきもしないで、矢張り小說の口畫を見て居ると。一人の少年が、《大畠、そんなに濟まさなくつてもいゝぢやないか!》《なにも濟ましはしないサ。》《濟まさないならあれを見たまへナ!》

また一人が《ナニ、大畠は平生見てるから、なにも畫に書いたのを見るにも及ばんサ。……僕は今日丁

度赤阪見附で逢つたが、實に此の通り。これは餘程よく似てるよ。』するとまた一人が、『これかイ、有名な大畠君の妻は。……成程美人だ。家にこんな美人が待てるのだから、實に大畠は羨ましいナ。』吉元は吾を呼んで、『大畠、惡い處があるなら直すから云つて呉れたまへ！……とても御氣には入るまいけども。』

耳うるさい燕の囀り、いづれも吾をなぶる了簡。なぶらばなぶれ、なぶられながらも嬉しかつたは、もう往時の事。今はなんともなく、却つて彼是云はれるだけ、一層彼を厭ひ是を思ふの念まし。今は思はぬ芳枝の顏を、物々しく畫に書いて、吾をなぶる吉元が齒痒く、偶然ながらもお町をば、口畫に出した芳年が頼しく。おつとそればかり見て居たから、吉元も張合が拔けたかして、澁々その畫をふきけした。思へば嬉しい是辻占、嫌だと思ふ芳枝は、忽ちにかき消されて、只戀しいお町ばかり、猶眼の前に止まつて居るト、勝手な理屈をつけて嬉しがつたが。悟つた後でこれを思へば、馬鹿げ切つた戀の欲。戀はなるほど愚痴なものだ。

（其七）

戀は空吹く風、何處から起て何處へ向ふのやら、何日何時、如何なる仔細あつて起るやらわからぬ。されば人を戀ふと云ふ事、人を愛すると云ふ事、是に何故戀ふか、何故愛するかト云ふ問を出すのは、抑も愚の極野暮の至り、戀知らずの情知らず、瓦の盃にして而も底のないと同然。戀が其樣な理屈づめ

のものならば、誰が其路に蹈迷はうぞ。誰も蹈迷はぬものならば、何處に白面い味があらうぞ。蓼喰ふ虫の謬嘘をつかず、太郎が櫻の派手を好けば、次郎は梅の清いを悦び、吾に又と無く思はれる女、必しも世界一の美人でなく、天下無雙の美人も、其割に人が熱心せぬは、同じ理屈で行かぬ一ッの證據。實に戀ほど玄妙に、戀ほど不測なものはあるまい。一度此の魔風に出逢ふ時は、耳は鈍り眼は曇り、智者も愚痴になつて、忽ち闇路に蹈み迷ひ。身は吾が物にして、吾が物でなく、所謂る戀の奴となり、煩惱の犬自物となつて、戀の爲には骨も惜まず、煩惱の爲に命を縮め。他の用に使ふたなら、立派に一仕事出來る月日を、たわいもない事に心勞して、頼まれもせぬに眼を凹ませ、頰の肉まで落して騒ぐと、戀のない目からは、瞽家が狐に憑かれたやうに見えやうけれど。當人の身にも成て見よ。隨分道理な處もあつて、人知れぬ中に面白味のあるもの。万更の酔狂と思ふは、抑も大きな了見違で、決して頭からけなしつけるものでない。

されば吾も、木や石で無い身の、おぞくも此の魔風に捲きこまれてからは、あのお町が戀しくて、なつかしくて、可愛らしくて、いとしくて。片時忘れられぬ胸苦しさ、只譯もなく戀の奴と成り果てた。もし此時に誰かゞ、何故あのお町が可愛くてならぬかト、吾に問掛けたなら、恐らく答に苦むだらう。實の處吾すら、お町の何處がようて、斯う深く思ひ込だかわからず。只何となく……云ふに云はれぬ處に、云ふに云はれぬ愛らしさがあつて、遂にかゝる仕末、實に云ふも耻かしい次第だ。然しながら、

今吾が虚心平氣に成て考えて見れば、其元因を求めるも、強ち六かしい事ではなく、試みに擧げて見れば、まづ一ッには乳母が話したお町の履歴が、大に吾が感情を動かした事。二ッにはお町の容貌が、兼て吾が意中に描いて居た理想の美人に、少からず符合した事と、第三に、吾が養家を面白からず思ひ、彼の芳枝との關係が、近頃不愉快に成て來たからの反動で。此の第三の者が、此の反動が大に此の戀を奬勵し、まづは首なる元因と成たらしい。ト、今こそ思ひ合はすものゝ、其時の吾が心中、なか／＼そんな餘裕はなかつた。

逢ひ度い、逢い度いと思ふ心から、果てはよからぬ事を思ひ付た。二度目三度目は學校の歸途に立寄て遊ぶやうにして居たが、それでは歸宅が遲くなり、遂には養父の小言を呼び出さうも知れず。さうかと云つて日曜日ばかりでは、六日の間が待ち遠いト、彼是案じた末、よからぬ事を案じ出し、學校を定めの時間より早く歸り、また時としては初めから學校へ出ず、そのまゝ乳母の家に日を送り、辨當も乳母の家でつかふて歸る事も度〻。大方一日置きか二日置きに、學校を休みと僞つて乳母の家に遊び暮らす事やゝ半月ばかり。それでも乳母は何とも云はず、行く度毎に嬉しさうな顏して彼是もてなし、又お町とも打ち解けて來て、相手にして遊ぶが何より面白い處から、吾も見事懶怠者となりて只、ノラクラと日を暮らし。學校の成績次第に惡く成て行くのも、一向心に掛けず、後の祟りも打ち忘れて、馬鹿も馬鹿も大馬鹿者に成てしまつた。

二三日足を拔いたので、今日は行きたくてたまらず。自家は學校へ行く振で、本包みをかゝへて立ち出で、途中から横路へそれて、うか〳〵うかれて來た古川端。二丁ばかり此方から、はや見える乳母の家。例の「だんご」と書いた腰高障子、見るから心嬉しく、イソ〳〵と歩行いて行く二三間先へ、四角な風呂敷包を右の手にさげ、首を斜めにして行く女の子。氣が付けば正しくお町だ。吾は二足三足走りながら、《オイ、何處へ行たノ？》

云はれてお町は立ち止り、不審さうに後を振返つたが、吾を見て急いで辭義をし、《お早うございます。》云ひながらもニコ〳〵と笑ふ愛らしさ。吾はやがて側へ走り寄り、《お前何處へ行たノ、お使かイ？》《ハイ、飯倉まで。》《さうかイ……婆やは居るか。》《ハイ……今日は與吉さんも……。》《ナニ與吉も居る？仕事はやすんだノ？》《アノ………昨日から……怪我をしたもんですから。》《怪我を……それは氣の毒だネ。何處を……》《アノ足の裏を……踏み拔したのでございます。》《それは可哀さうに……臥てるかイ？》《起きたり臥たりして居ます。》《さうか……お前その下げてるもの何？》《これでございますか……お菓子でございます。》《店で賣る菓子かイ。箱に這入て居るネ。》《ハイ只今問屋から取て參つたのです。》《重からう、持てあげやう。》《ナニよろしうございます。》《そんな事云はずにお貸しよ、此本と取かへて持たう。》《でも……》

まだ躊躇して居るのを、吾は無理に本包を取りかへ、其箱をさげて見ると、思たよりは重く、吾が持て

さへ直に肩が張りさうあを、まだ十三四の小娘の身で、よく飯倉あたりからさげて來たものゝ、それが又いたはしくあつた。

其内に三の橋の側まで來ると、お町は又吾の本包を返へしかけて、《アノ、もう妾が持て參りましやう。》これは乳母の家が近く成たから、もし乳母にても見られた時、吾に此箱を持たして居ては、相濟まぬと思ふ懸念。吾もそれと悟つたから、素直にその儘箱を渡し、本包を取て行きかけると。橋の袂に辻待の車夫、客の無い退屈まぎれか、人を馬鹿にした語氣で、《君、合乘行きやすか。》失敬な車夫！嫌な車夫だよ！

（其八）

やがて茶店の前近く來たが、さて何と無く氣が尤めて、お町と一所には這入り惡いから、お町に云ひ聞かせて先へ歸らせ、吾は一足後れて這入つた。

這入て見ると、霜は土間に下りて何やら働いて居り。表の方の床几には、はや客が腰掛けて居る樣子に、稼業の邪魔するのも氣の毒と、挨拶もそこ〳〵にズッと奥へ通つた。これも此頃は吾が度々來るので、霜も當初の頃ほど珍重からず、云はゞ親類交際に成たからで。

ヅカ〳〵と奥の間へ來て見ると、與吉は單物の上に怪しげな半天を引掛け、繃帶をした右の足を投出しながら、椽側で今盆栽をいぢつて居たが。吾の姿を見ると急いで居住を直し、手をふきながら、

《オヤわか様でございますか、よくお出でくださいました。》《また邪魔に來たよ。》《先達中から度々お出で下さいましたさうでございますが、いつも仕事に出て居りまして……、》《時にお前怪我をしたつてチ、どうだい大した事は無いかィ？》《有難うございます、ナニ大したとは御座いませんが、仕事に出られませんで。》《それはさぞ困るだらう。醫者に見てもらつたかィ？》《へィ直きアノ長阪下に土倉様とおつしやるのが……。それに見て頂きました。お藥も頂いて居ります。》《さうかィ……速く癒らないと困るねー。》ト、話をして居る處へ、お町は茶を入れて持て來た。與吉はお町に對ひ、《町ちやん、お藥は取て來たかィ？》《頂いて來ましたよ、今朝はまだ洗はないでしやう？》《まだサ。手が隙いてるならちよつくらやつてもらはうかチ！》《それぢやお藥を持て來ましやうか。》《ナニ其處へ行くからい丶、一寸御免被つて……。若様失禮でございますが。》《構はずおやり……。私が洗つてやらうか。》《どう致しまして、足が曲つてしまひます。》《そんな手荒なとはしやしないよ、アハ丶丶丶。》《隨分亂暴で居らつしたから……》

串戯を云ひながら、與吉は側にある柱を力に立上ると、お町は甲斐々々しく自分の肩にすがらせ、勞はりながら靜かに次の間へ連れて行く。その後から吾も、醉狂に付いて行つた。

次の間の椽端に與吉はドッカと坐を占めた。お町は瘡を洗ふ道具をそれ〲揃へ、與吉の側へ寄て、覺束ない手付きでまづ繃帶を解き、恐々瘡口の綿撒糸を取除け、靜かに石炭酸で洗ひ初めると。與吉は齒

をくひしばり、躰を反らして……。でも痛いとも云はず、ぢつと我慢する顔を、自分も眉を顰めて、お町は下から見上げながら、《痛いノ？　エ、エ、？、》《否、痛かね！……》《だつて……痛さうだもの……。》《初めはちつと痛いけども……なにこれしきの……。》《今日はでも膿汁がよつぽど少く成た。……もう少許の我慢よ。》

慰めながらもお町は、與吉の痛さを思ひ遣つてか、よいほどにして洗ふのを止め。誰に教へられたか、形の如く手當てをなし、新らしく繃帶を仕かへる鹽梅。小供ながらも行き屆いて居るに、吾は感心して、此時漸く言葉をかけ、《町ちやんは中々慣れたものだチ、お醫者樣に奉公した事があるんだらう。》《アラ……そんなとわりやゐませんワ。》《だつても手付きが好いもの。》與吉も笑いながら、《此看病婦は中々名人でございますよ。……それに信切でございまして……。》《たんとお愚弄なさい。妾は知らないからいゝ。》ちよいと逹拗て結びかけた繃帶をはなす。《アヽわやまつた、もう何とも云はねエから結いておくれよ。》

其中に手當も濟むだ故、與吉は又立上り、跛蹩曳きながら漸く舊の席へ直つた。そのあとでお町は道具を取片付けて居たが、やがて霜に呼ばれて、店の方へ行てしまつた。

店の方は引き續いて客があるらしく、霜もお町も多忙しいと見へて、其後は暫時姿を見せず、只與吉と吾ばかり、さし對ひでの話。《彼のお町と云ふ娘は、中々よく働くチー。》《へエ、まア年紀の割には間

に合ひますから、家母も大きに助かりますので。》《そして中々怜悧な娘だよ。》《へヱ、何だつて貴郎、舊は歷々の士族の娘でございますから……。》《さうだつてネ、此間乳母に聞いて感心したよ。》《若樣ももう御存ドでございますか……。實に不憫なんでございます……。然し出生が善いと矢張り何處かゞ違ひますもので。》《さうだネ……。何處か奉公に出たがつて居るのぢやあないか。》《へイ、實は……彼の父親は、何處かお邸奉公に出したいと申して居るのでございますが、只今の處では家母も、手元を放しますと不自由でございますし、それに彼も、なんだか手前許がよいと見えて、餘所へ行きたがりも致しませんから、其儘に成て居りますが……。實は何處か固いお邸へ上げて、善く仕込ました方が宜しいのでございます。》《何しろ乳母が大層可愛がつて居るんだネ。》《へヱ、からもう自分の娘も仝然でございます。それと申すも……御存ドでも御座いましやうが、手前の次に一人女の子が出來ましたのに、生まれる間もなく歿りましたから、その故で殊に女の子がいとしいと見えます。それにまた彼の娘も、丁度生母が去年歿りました後でございますから、何となく生母の樣な氣が致すのでございましやう……。人情と云ふ物は妙なもので……さう成て參りますと、私も何だか妹の樣な心持ちが致して、可愛がつてやります樣な譯で……。マア妙な具合に成つて居るのでございます。》と、噂をして居る處へ、さうとは知らずに當人のお町が、茶を入れかへに來たので、この話はこれで途切れ。また暫時世間話に時を移して居たが。やがて與吉は少し居住ひを直し、やゝ眞面目に成て、何か云はうとしては……また口籠り……。漸く思

ひ切つたと云ふ風で、《若樣！》何うやら仔細ありげに呼びかけた。改まつて出られたから、吾は薄氣味惡く、《何だ、與吉。》《若樣。今日は與吉が……少々惡まれ口を申します。》ト、思ひ切て云ひ放して置きながら、極まり惡さうに、側に在た茶碗を取て、――空とも知らずグッと呑む……眞似をした。

（其九）

何事ぞ、惡まれ口とは？胸はやゝ波立て、少し挨拶に狼狽へたが、でも吾の方が上位だけに、さまで臆れもせず、《惡まれ口ッて……何を？》

與吉は四顧を見まはし、小聲に成て、《若樣……此頃は學校へ御出でになりますか。》

南無三！一矢胸板を……ダヂ〱としながら、《ア、ゝ行てるよ。》《眞實でございますか。》更に念を押して置いて、吾が顏を見上た與吉、其視線の注ぐ處、眉の間が妙にむづ痒く覺へたが。さあらぬ體で他を向きながら、《眞實さ……休みはしない。》ト、覺束無く答へた。なにもさう強情はらずとも、疾うに見貫れて居る事、つひ白狀してしまへばよいに、さてさうも行かぬもので、倦く迄包み掩せやうと云ふ、それほどの覺悟は無いまでも、一度出した汗は還されず、矢張り噓を云張て居たが。心中此時頗る危く、此處針の莚、吾身を責めたものは、誰でもない吾が良心であつた。

やゝあつて與吉は、《それならそれで宜しうございますが。……先達て目黑のお歸途に御立寄に成てから

以來は、三日にあげず手前許へお入來遊ばすさうで。私は仕事に參つて存じませんが、なんでも朝から御入來に成て、御辨當も手前許であがつて、二時頃からお歸りになると申すとでございますが、それでは何時學校へ御出でにある時間があるかと、不思議に存ドましたから、もしや……と存しましたゞけでございますが。……然しそれはまァ宜しいと致ました處で、若樣、もし此事が御宅の御養父樣にでも知れましては、それこそ大變でございましやうせ。平常からお喧ましいお方、どんなに御小言が出ますか知れますまい。其時に成てはどんあに云譯遊ばしましても追付きません。――私共がこんな高慢な口をきゝましては、さぞお可笑しうございましやうが、只今の時節は學問が肝腎で、郎君方もお若い間に一生懸命御勉強遊ばして、後には立派な學者にお成り遊ばさなくつては成らない御身分。それを郎君うか〱と、學校の方を御留守になすつて、手前許でお遊びおそばす樣では、つまり御自分の御損で、後へ行てどんなに御後悔遊ばすか知れません。お稚い時から御發明な若樣が、これ位の事に御氣の付かあいとはございますまいが、これには大方別に譯のあるとでございましやう。……其譯も與吉存ドて居ります。」

疵持つ足。――私の胸板の第二の矢は、此の一番終りの言葉であつた。丁度此時例のお町が、水でも掛みに行く心か、店の方から手桶をさげて、前の庭をいそ〱と通り拔けて行く後姿。常ならば呼び止めて、串戯の一ッも云ふ處。與吉の手前――今の言葉、吾は只顏を熱くしたばかり、それを見るとさへ出

來なかつた。

これに話は一寸途絶へたが。暫時してまた與吉が、《然し郎君の御身の上は、實にお可愛さうで、‥‥いつも生母と話を致して居るのでございますが、何事も御氣隨に出來ず、何かにつけておつらい事ばかり。たまに手前許へ御出でに成て居らつしやるのが、遙かに氣樂で御面白い處から、度々御出で遊ばすのでございましやう。實に御無理もないことで、手前許でも誠に嬉れしく、毎日でも御入來を願ひ度い位でございますが。其處がそれ只今も申す通り、此の爲に學問の方が御留守におなりましては濟みませんから、少しは御辛抱を遊ばしまして、お嫌でも成るべく御宅をお出遊ばさないやうに、また學校へはキッ〳〵と、勉強して入らつしやいまし。さうして置けば御養父樣の方のお首尾も好くなり、御自分も御徳と申すものでございます。その代り日曜日には、朝から晩まで手前許に居らつしても宜しうございますし。また土曜日の晩から御泊掛けに御入來下さいますとも、其處は郎君の御勝手でございます。さうして御養父樣の御許可を受けて遊びに入らつしやる分には、誰が何んと申しましやう。さうで無いと手前許でも申譯がございません次第で、與吉が御養父樣に酷く叱られます。――何もこんな事を申度くはございませんけれども、つまり郎君の御爲めを思ひまして‥‥。御氣に障りましたら、どうか御勘辨を‥‥。》

云ひながら倚答辭を要する樣に、吾の顏を覗たが。吾は始終首を垂れて、斜めに庭の方を眺めて居た。

否、眺める振をして居る斗り、何が眼に這入らう、——眼には一杯の涙。涙——悲しの涙、悔しの涙、恨みの涙。先刻からこみ上げ沸き返つて、辛く睫毛に堰き止められて、今にも頬へすべり落ちさうな。——抑も何が悲しくて、何が悔しくて、何が恨めしくて、さてこれほどの涙ぞ? 是今云ふ事ではないが、——只私には、更に無慈悲なお霜、無情なお町、嫉妬深い與吉が出來たので、それが悲しく、悔しく、恨めしかつた。

さてもお霜は何故無慈悲か?——吾の頼り無い身を知りながら度々遊びに來るのを蒼蠅がつて、與吉と計て吾を來られない樣にする。是が無慈悲でなくて何? お町は何故無情か?——吾がこれほど思ふ心を察しても呉れず、與吉にばかり眞實を盡す、是が無情でなくて何? 與吉は何故嫉妬深いか?——吾のお町を思て居るのを知て、表では信切らしく意見しながら、暗に吾を遠ざける了簡。是が嫉妬深くなくて何? 噫強面の人々! 一念茲に氣が付けば、乳母は憎らしく、お町は恨めしく、與吉——己れ戀の敵め!

此涙を與吉に見られまいと、吾は庭を眺める振で居ると、丁度今お町は水を掬で來た處で、重たさうに手桶をさげながら、庭の木戸の側まで來たが、そこで手桶を一寸おろし、更に袂をたくし上げながら、吾の方を見て、例の通りニコ〳〵笑ひかけた。——然し此の愛らしい笑顔も、今は吾が泣顔に、笑靨を移すほどの力は無つた。

其中に店の方も閑に成つたと見えて、乳母はいそ〳〵出て來たが、相變らずの元氣で、《ヤレ〳〵忙がしかつた。今日の樣な朝からお客のつめ掛て來る日はありはしない。碌々御挨拶も出來ないで……ほんとに失禮を致しました。ちつともおかまひ申しませんで。……ドレ御茶でも入れかへて……町ちやんや、御湯が沸いてるなら一寸さして來ておくれナ。それから何か御菓子があつたらう。……若樣どうぞ御悠然遊ばして！》ト、、、、チヤホヤもてなし初めるのも、自分が與吉に云ひつけて、吾を泣かせて置きながら、今に成て又機嫌を取り直す了簡かト、思へばいよ〳〵恨めしく、憎らしく。どうせ邪魔であらうから、吾は早く歸るよ、決してかまつてくれるなト、口へ出して云てもやりたい位、挨拶もろくにしなかつたが。かうなると片時も此家に居る氣はなく、面當てに直ぐ歸らうとは思いながら、何やら氣の毒でそれもならず。又吾が腹を立てたのを、もし知られてはそれも極り惡しと、彼是氣を配り。隨分と居づらく、面白からぬ處を二時間ばかり我慢し、いよ〳〵我慢がしきれなく成てから、それと無く暇を告げて、止められる袖を振り拂ひながら、乳母の家を出た時も、『いづれ二三日の中に』ト、口には云つたが心の中では、二度と再び此の閾を跨ぐまいと。――さりとは吾ながらきつい覺悟。

「だんご」とかいた腰高障紙、尻目にかけながら心にわざわらつて、半町ばかり急ぎ足で來た時は、妙に心が愉快であつたが。是も一時の血氣の爲め、嫌だと思つた乳母の家を、潔く出て來た働きを、吾ながら小氣味よい事と思つたに過ぎず。――やゝ動氣も靜まつて、了簡臍の下に定まつた時、つら〳〵身の

上に考へ及べば、いよ〳〵頼り無い吾が身。行けば無慈悲な乳母、無情なお町。歸れば無慈悲な養父、無情な芳枝。行てもつらく、、、歸てもつらく。行ても悲しく、歸ても悲し。噫、嫌、嫌、嫌、嫌、浮世は嫌。歩行くのも嫌。

（其十）

扨も今朝自家を出る時に、乳母の家へ泣きに行かうとは誰が思はう。此が爲に學校へも出ず、はる〴〵古川端まで來て、こんなつらい、悲しい目に逢はうとは、實に昨夕の夢にも知らなんだ。思へば強面い人達、情知らずの人達。さうとも知らず、此程樂しい處はない樣に、此程頼もしい人はない樣に、今日の今まで誑されて居た悔しさ！ト、斯う氣が付いて見れば、古川の水も汚く、お町の姿も賤しく、乳母の家も！なんだあんなむさい處。

天晴れ！斯くまで立派に思ひ切りながら、まだ何處やらに未練が殘り、今の三人の中誰か。霜か與吉か、――あのお町でも跡追かけて來て、吾を慰めて呉れさうなものと、幾度か後をふり返て見ても、……無益な事、それらしい影も見へず。さては吾の歸たのをよい事に思ひ、厄介拂ひをしたなどゝ、皆で嗤つては居まいか。――今頃はあの與吉が、又お町とふざけては居まいかト、つまらない邪推も起つたが。實に吾ながら耻かしい了簡、女の腐た樣な性根と、氣を取直して吾を窘め。誰に見せるでもない虚勇氣、無理に足を速めてスタ〳〵と行く中に、又思ひ出す今度は養家の事。――成程與吉の云ふた通り、此頃の

吾が不勉強、もし養家の者に知られたなら、養父にでも知られた曉には、此上に又どんなつらい目、……ほんに今日にも小言が出るかも知れず。其を考へては足も進めばこそ！思はず立止つてアーと嘆息すれば、折からすれ違つて行く巡査、怪訝な顔をして吾を見る極りの惡さ。

然しよう考へた處で、何の道此儘家へ歸つては、まだ時刻も早い故、怪しまれるは知れたこと。それより此から直ぐ、ちと遲いけれど兎も角も學校へ出て、定規の時刻に歸つたが、まづ安全であらうと、よい處に氣が付き。それから辻車を飛ばして學校へ行き、教師へは何とか口實を設けて、遲刻の處を繕ひ、例の通り授業は受けたものゝ、何となく氣が尤めて平常の元氣は出ず。妙にふさいでばかり居るのが、いつしか色に現はれて、君何處か惡いのかと、信切に尋ねてくれる者があつても、心苦しさ、明けても云はれず。

すると十二時少し過ぎに、思ひもかけず自家から車夫が迎ひに來たと云ふ小使の報知。これ聞いた時の吾が愕き、南無三小言かと、一も二も無く其事と合點したが、それにつけても不思議なは、斯う學校に出て居るものを、わざ〳〵呼び戻して叱るにも及ばぬ事。さうかと云つて他に何も用のある筈は……もしや養父が急病でも……と、更に不審は晴れぬながらも、其由を幹事に屆け、支度をして表へ出で、心元ないまゝに車夫に尋ねても、車夫は何も知らず。只直ぐお伴をして歸る樣に、お奥からのお命せとばかり。《もしやお父上樣でもお惡いのではないか。》《いゝエ其の樣な御樣子はござりませぬ。》さてはい

よく〱小言に極まつたト、思へば氣もワク〱。其儘乘りはしたものゝ、心は居所の羊、――生憎車の速い事。

程なく車は自家に着いたが、玄關の敷臺平常とは高く覺え、力無く靴ぬぎすてゝ上れば、出迎ひに出た女中達、例になくイソ〱して居るも、吾には却て薄氣味惡く、恐々奧へ通て見ると。茶の間の火鉢の邊に、芳枝が只一人、――此も學校から歸て來た處か、紫紵絲の袴着けたまゝで、新聞を讀で居るに、又も不審の種が殖えた。《オヤ芳さん、お前も歸て來たの。》芳枝は吾を顧みて輕く一禮しながら、《お歸り……。妾もお迎ひが來て。只た今歸たばかり。》《そしてお父上樣やお母上樣は？》《アノ奧の衣裝室に居らつしやいますつて。》

芳枝も歸て居り、兩親は奧の衣裝室。――解らぬとばかり。《一體何があるの。芳さん知らないか。》ト、問ひかけた時、芳枝の乳母の某が、忙がしく這入て來て、《サアお孃樣よろしうございますよ、お手水をおつかひ遊ばせ！――オヤ若樣もお歸り遊ばしましたか、それでは郎君も直ぐお召換あそばせ！サアお孃樣參りましやう。》ト、何の譯だか知らせる間もなく、芳枝は乳母に連れられて出て行てしまつた。

あとに吾一人、何事やらさつぱり解らず、只茫然として居たが、兎に角此樣子では、まづ小言では無いらしいと、胸もやゝ落付た處へ。養父は衣服を改め、羽織袴に威儀を正して出て來たが。吾を見るより、めづらしく機嫌好く、《オゝ君若、歸て來たか、直ぐ支度をしろ！》《只今――一體今日は何事でございま

す？」『まだお前ハ知らなんだか、ハヽヽ。實は疾からやらうと思て居たが、天氣が悪いやら、叉差支が出來たりして、つい其儘に成て居たが。今日ハ天氣もよし、都合もよいからして、急に思ひ立て寫眞を取るとにして、それでお前達を迎ひに遣たのだ。早く行て支度をして來い！寫眞師はもう來て居るから。』

案じたより産むが易く、聞て見れば何でもない事に、先刻の心配何處へやら。氣は俄に勇み立て、其儘衣服を着換へに行けば、養母も側に付添て、男は洋服の方がよからう、襟飾は此間買て置いたのをト、何から何まで世話を焼いてくれるに、吾も嬉しく。やがて支度も出來あがれば、芳枝も衣服を着換てしまひ、打ち揃て表座敷の椽端に出て、設けの席につけば。寫眞師は器械を庭前に据て、形の如く寫しはじめた。

まづ最初には大畠家の家族打揃つた處て。其次が養父と養母と一人宛、叉吾と芳枝が一人づゝ。此で仕舞と思へば、今度は吾と芳枝と一所に寫して見ろと、さても粋な養父の命に、吾は今更耻かしく、只モヂ〳〵して居ると、芳枝も同じ様に極りの悪さうな顔して居るのを、偖促がされて否みもならず。二人並で設けの席につけば、養父と養母は遠くから、さも嬉れしさうな顔して、餘念なく眺めて居る、其長閑さ。此を今朝の乳母の家での殺風景に較べては、……彼は雲惨憺、是は霞靆靉。あれは秋、これは春。譬へば函嶺のトンネルの暗さを出て、青天一白、富士あり〳〵と見た心地。噫、これはぞ樂しい養家、

何故吾は嫌がつたらう。
此處、此時、風迷の雲を吹拂て、心を照らす眞如の月、吾は初めて眞人間に戻つた。思へば此頃の吾が振舞、一として馬鹿らしくなきはあらず。勿躰なや、慈悲深い養父母を邪見と恨み、可憐な芳枝を無情と恨み、此樂しいホームを、吾からサタンの巣窟の様にして、只恐れ、只嫌がつたは、抑も何の理由あつてぞ？噫、耻かしや吾が根性。皆このひがみ根性から、斯くも養父母は邪見に見へ、芳枝は無情に見へ、罪もない家中の者までが、誰も彼もわが敵の様に思はれた。疑へば弓の影も蛇、盲目は此に恐れぬが、吾に生憎ひがみの眼あつたが爲に、斯くは恐れ斯くは嫌がつた。
偖又乳母は如何に、與吉は如何に、お町は如何に。——乳母は決して無悲慈ならず、矢張り吾を可愛がつてくれる、さればこそ吾も古川へ行きたがつた位。與吉も母に似て信切もの。先刻云ふた吾への意見、無理な處が微塵もあらうか。もしあの意見聞かなんだら、吾は尙乳母の家に遊んで居て、學校へも出なかつたらう。學校へ出なかつたなら、あの迎ひの車の行た時、ほんに如何であつたらう。思へば身の毛もよだつやうな。それも是も皆與吉の賜物、禮云はねばならぬ筈を、何事ぞ彼是恨むだは、噫吾ながら鬼か蛇か。偖て又お町は……矢張り可憐な少女、不憫な娘。然しわれは賤しい身分、縱へ吾が戀へばとて、何うするともならぬ次第、まして吾には定まる許嫁もあるもの、それに道ならぬ横戀慕して、無情の強面いのと恨むだは、無理も無理、非道も非道。噫、戀故吾も愚痴になつたか。斯う今考へて見れば、

いづれもいづれ、善い人ばかり、頼もしい人斗り、それを勿躰ないや恨み三昧、是も偏へにひがみの作用か。

咄ひがみ！汝憎らしいひがみ根性め！汝の爲に暫時なりとも、吾身を自由にされし悔しさよ！噫、汚らはし汝ひがみ！噫、忌はし汝ひがみ！　エヽ、西の海へさらり〳〵！

（をはり）

●けなげさ

（上）

都には近からぬ片田舍。片田舍らしい小さやかな家か一軒。前には一筋の小川か流れ、その岸に沿ふて、田舍めいた生垣か結ひ廻らしてあります。これが春でもあれば、その生垣の連捷か、――賤婦の化粧――しほらしい花を咲かして待て居ますと、實のある鶯が遠くの藪から毎日通つて來ては、樂しさうに唄ふその歌、鄙びた中にも風情かあります。またその下を流れて行く小川は、汀の小石と嬉しさうに耳語て居ますと、アラ無殘！里の小供等かボチャ〳〵中へ這入て來て、盥船を浮べたり鮨をしやくつたりして、折角清まして居る川を怒らせます！面を赤くさせます。それを又その小供等が喜び騒ひて居るのは、殺風景な樣で……又そこに趣かあると、物數寄な詩人は云ふでしやう。

扨も風雅な此の家、主人は如何なる風流人ぞと、床しくおもふのは飛んだ鑑定違ひ。此家に住んで居る

のはペーテル、ヒェニンクと云ふ大工の、實に哀な一家族で、老母のヒェニンシュは寄る年波の仕業か、永の月日病の床に臥して、横に成たぎり……今は身代も横になりそうな有様です。

生憎く今は冬です。野も山も一面に白布に包まれて、あの活潑な小川も、寒さに我慢も出來ないかして、我と硝子の蓋をして居ますが。相變らず元氣の好いのは里の小供達、冬は冬の遊ひを工夫して、その氷の張た小川の上をすべつては、面白さうに騒いで居ます。

門の外にはあの樂しみ。戸の内には此の苦しみ。氷に閉られた窓の中に、臥床に寄り懸て居る老母のヒェニンシュ、此寒氣で病も一入重つた樣子。節々は痛む、筋は釣る、言葉さへ出す勢なく、漸く吐く呼吸ほんとに青さうに見へます。その枕邊に坐つて居るのは、レーチと云つてたつた一人の孫娘、また十二才の少女ですが。その心樣の甲斐〲しさ、祖母が此病に患つてからと云ふものは、朝から晩まで傍を去らず、粥を煮たり藥を煎じたり、祖母の身の冷ぬやうにと、煖爐をたきつけたり、咖啡をすゝめたり、帶を解く暇もなかつたと云ふ、支那の故事にも劣らぬ孝養、實に大人も恥かしいほどでした。それで今日も朝から祖母の部屋へ來て、介抱に餘念もなく、午飯には祖母か好きな物をと、自分加減のスープを進めて、褒められた位でしたが。冬の日の短く、はや日暮となりました故、まづ洋燈に灯を點して、今しがた咖啡を熱くして、祖母に進めて居る處です。

《お祖母さんお熱かァありませんか。》《……イ、ェ……丁度いゝ加減だよ。》《それであつたかくありまし

たか……今日は少しはようござんすか。》《ア丶……ほんとにお前が……よく世話をして……呉るので……妾も嬉しくつて……鹽梅も段々よくなるやうだよ。》云ひながら額の汗をふかうとして、ハンカチーフをさがすと。レーチはそれと悟つて、自分のハンカチーフを出してふいて遣りました。《お祖母さんそんな事を云はないで……お鹽梅のよくなるまでは……いくらでも御世話をしますから、はやくよくおなるやうに……》《ア丶〳〵早くよくなりましやうチー。さうして一所に會堂へ連れて行きましやう……オーさう〳〵……明後日はもうクリスマスだチー。ほんとにお前は……可哀さうに、遊びたいだらうにチー。》

愛情の力は、祖母の手をレチーの頭に載せました。レーチは可哀らしい顔を輕ろく振て、《イ丶ヱお祖母さんがお惡い中は……ちッとも遊びたかァありません……それよりか早く鹽梅のよくなる樣に、お祈をするのが何より樂しみですワ。》

祖母はもうたまりません。突込んで來る涙の波、せきかねて……枕の上に一滴、二滴。話しも暫く途切れました。が、賢こいレーチ、何がお祖母を慰めるものをと、見廻した卓子の上、新聞ももう讀んで聞かしたし、繪本ももう見せてあげたし……オーそれよあの讚美歌！……祖母か日頃から大好なあの本……ト手に取ては見たが……さて唄ふとは……生憎く讚美歌の節は知らず、ト云ふて祖母に進めても、病める身にはとても……ア丶之を思へば……習ふて置けばよかつたに……ト今さら己を恨みます。祖母は漸く時

雨を晴らして、レーチの方を見やると、眼に着いた讃美歌の本。《お前が唄へるとチー……》と殘念そうに云た一言。ア丶讃美歌か聞たい＝ト云ふ意味を含んで居ますから、レーチには麁想して叱られたよりもつらく感ドます。《ほんとに妾が唄へれば……ほんとに好いのですに……あしたから何處へか行ておそはつて來ましやう。》《……かうやつて毎日〳〵……臥てばつかり居ると……それに久しう會堂へも行かないから、讃美歌か聞たくなつて。》《アヽいヽ事がありますよ。學校の先生に賴みましやう。あの方ハ御巧者だから、あしたでも行て賴んで來ましやう、毎日來て唄つて下さるやうに。》《だつてお前……先生がどうしてこんな家へ來て下さるもんかチ。……ソシテあの方は信者ドやなし。》《信者でなくつても、節は御存してすヨ。……どうか來て下さいッて賴んだら來て下さるでしやう。》《さうかねー……來て下されぱいヽが……そんならお前ようくお願ひ申て……むさい處ではござりますけれども……》云ふうちに又痛み出す節々、顏をしかめて身を屈めるに、レーチはーあはて〳〵後へまはつて、祖母の腰をおさへる、氣弱いその腕。――さうも云へません、深いその愛、健氣なその心。

（中）

此の病めるヒエニンシユ、その達者であつた時には、安息日も欠さず會堂へ出て、熱心な祈禱も奉げ、熱心な勸話もし、殊更讃美歌は大好て、自分も中々巧者であつたから、之に依て感導した者も幾人か。眞に神には忠且つ善なる婢、人には信愛なる姉妹でありました。然し此病に患つてからは、此年頃毎日臥床

に横に成て居るばかりて、會堂へ出ることなどは思ひもよらず。只安息日毎に聞こゆる鐘の聲、――風か連れて來るオルガンの音、――それを以て僅かに氣を慰めては居ますが。肝心の好な讃美歌は、絶えて久しく聞くとは出來ません。それかと云ふて自分で唄ハうにも、それは三年以前のと、――鶯も老ては。――まして病に喘ぐ身の、どうして成りましやう。孫のレーチに唄はせうにも、生憎く彼ハ知らず。悴の。ヘーテルハ佛骨な大工職人、なか〳〵その樣なことの出來る身ではありませんから、ヒエンシユは折々之を愚痴の樣に云ひます。

生れ付て孝行なレーチです。何事も祖母に逆はず、否逆らはぬのみでなく、どうがなして祖母を慰める樣にとつとめて、他の事なら一ツも祖母の心に染まぬとハありませんが、只一ツ逗惑をするのは、此讃美歌でした。

そこで愈々思切て、今日學校の教師の許へ行て、頼み込まうと決心しました。が、日の中ハ先生も留守であらうからと、夕方に成てから支度をして、祖母に暇を告げ、隣村の教師の家をさして門を出ました。

＝嗚呼此の寒い冬の夜……まだ小供のあのレーチに……遠くハ無いが隣り村まて、しかも此雪路を……

＝ト、思ひ出しては祖母も流石に心元なくて、兎角孫の身の上か案じられますから、痛む體をやつと起し、枕邊の窓掛を押しのけて、硝子越しに向ふを見ますと、――霞む眼霞む硝子、――夕煙に霞む畑道、確とは分らぬが……頭に被て行く破れショール、縞は見覺の……正しくレーチ！あの憎らしい無情な風

が、無殘に橫顏を吹きつける、――また解け切れぬ小路の雪、――アラ意地の惡い――幾度か少女の足を取らうとする。之を見ては祖母もうたまりません、＝こんな事と知つたら、あの樣な我儘を云はずにおけばよかつた、よしない事を云ひ出して、可愛い孫に飛だ苦勞をさせたワイ……噫おやまつた＝ト、もろい涙は、――もう睫毛に露を宿とします。

《御免下さいまし》可愛らしい一聲、レーチは戶の外から音づれました。內から手燭を點して出て來たは、敎師の妻君です。《まアレーチさん、この寒いのによくまア……お前たつた一人かい、……さうかい……まアそれはさぞ大變だつたらうチー。サ此方へお這入り！そうして今日はなんぞ御用かい？》《ハイ、あの先生は御內に入らしやいますか。少々御願がございまして。》《ハアお宅だヨ。さア此方へお出て！》妻君は勞はりながら、奧の一間へ連れて行きました。此の部やは主人の書室です。主人は丁度安樂倚子に寄り掛て、倨傲に煙草を吹かして居ます。見れば目のふち常にまして紅くなつて、意氣遣ひも輕くない樣子。どうやら酒と云ふ曲者が、腹の中に住むで居るやうです。(一體此男は大の酒家て、每夕必すフランティの一二本は平らげるといふとです。) 敎師は今妻君に伴れて來るレーチを見て、《ヤ誰だレーチか。お前なぜ此頃學校へ……ちつとも出ないんだ……遊んでばかり居ちやいかんぞ！》レーチが身には寐耳に雷、一度はおきれて物もいへません。

《……ハイ家のお祖母さんが……鹽梅が悪るいもんですから。》《ナニお祖母さんが病氣……そんなことで學校を休む奴があるもんか。馬鹿な！それでけふは何しに來た？》《先生に少しお願がございまして。》《ナニ願か……なんだ願たァ？……金なんざお貸す事ならんぞ。》《イヽエお金じやございません……アノ歌を……》《ナニ歌を？……作るのか？》《イヽエ。どうか私の家へ來てお唄ひなすつて、アノお祖母さんが聞きたいと申ますから、學校の御歸りにでも……どうか！》《馬鹿な……何を云ふかと思もや……そんなと裏の瞽女の處へ行け……失敬な學校の教師に歌を唄へなんぞト……失敬極まる。》《ハイ……あの歌だつても只の歌ではございません、あの讃美歌を！家のお祖母さんが大變好でございますから。》《好きだつて嫌いだつて、そんなことを知たもんか、それに讃美歌なんぞなはいやだ。》《それでもどうか……》《だまれ、うるさい！》

妻君は聞きかねますから、《良人そんなにおつしやらずに、もつと靜かに……小供ですから驚きますさァネ。》《エーイ貴樣までがだまつてろ！オヽもう七時だ行かにやならんワ。》《アノ先生どうか……》《エ、うるさい……知らん／＼。》《そうして良人どちらへ？》《知れたとさ。》

教師は帽子掛から、帽子を引ちぎるやうに取てかぶり、ステッキを一本突きながら、靴音荒らくふみならして、……わちもう姿は見えません。妻君はレーチをいたはりながら、《サもうお泣きでないヨ。ヨ。なにもこはかァない……さうかい、折角ね。……でも今日は先生はお酒をあがつて居らつしやつたから、

あんなにボン〳〵おつしやッたんだ。今度私からようくお願ひ申しておくからヲ、……サもうお泣でない、泣かずに早くお歸り。ヨ、ヨ！ さアふいてあげやう。（涙を）》《ハイ……ハイ……有りがたう……そんならどうか……よろしく……》

少女はほんとに信切な奥樣と、見返りながら出て行きます。妻君はア、感心な娘よト、見送りながら立て居ます。折からさしのぼる夕月、——慰め顏です。

（下）

雲に追はれて居る月、とう〳〵雲に攫まれました。あとは雪光ばかりて、漸く薄暗くなりました。片側は見上るやどの森の木立、何となく殺風を含んだ木枯は、梢の雪を蹴落して、塒の鳥の肝を冷させて居ます。又片側は可成りに大きな池で、汀に亂れて居る枯蘆は、水鳥の爲に好い旅籠屋と成て居ますが。氷の張りつめた池の面、今は月を宿すことも成りません。此の池と森との間には、荷車一輛を漸く通す程に細路があつて、レーチの住家から敎師の家へ行には、是非とも通らねばならぬ處、ソシテ一番氣味の悪い處です。何故ならば、此池では毎年氷すべりの時に、一人宛落て死ぬと云ふ事が、まるで規則のやうになつて居ますものを。此森では折〻人殺しがあると云ふ噂を、兼々聞いて居ますものを。

レーチは今此細路にさしかゝつて來ました。可哀さうにレーチは、折角賴みに行た事が、鵙の嘴と成たので、——家へ歸てなんと云はう……お祖母さんがさぞ樂しんで居るだらうに……此返事を聞たなら、

どんなに落膽なさるだらう……――ト、案じては氣が氣でありません。なんと無く胸に痞が起て居るやうで、足の運びもはか〳〵しくありませんが。又お祖母さんが淋しからうト思ては、早く歸らねはならぬやうで、……少女の體は、殆ど此等の心配に支配されつゝも、來るとはなしに此處まで歩行て來ました、所が此處は平常からこはい〳〵と思ふて居る處、……ましてもう日はくれて人通りはなし、木の下は薄暗くて、風の音さへ物凄くなつて來ましたから、まだ小供のかなしさ、さアこはく成てたまりません。後から何かに追はれるやうな心持で、踵も地につかず、可愛らしい足で雪を蹴立ながら、急ぎ足で行きかけると。――アラ落人に陣鐘、――向ふの木立の影で、不意にピストルの音が。――レーチの小さな膽は、これで殆どつぶれました。思はずも二三間逃け出しましたが、雪に隱れて居た木の根につまづいて、其處へ轉げました。轉ぶともう起き上つて逃けられないのが、斯ういふ時の常で、レーチはハツと思ひましたが、もう逃けられませんから、仕方なくそのまゝ匍匐ながら、森の中へかくれました。

向ふでは大變です。――二三發ピストルの響いたと思ふと、あとはスツテキでうち合ふ音、――何とも分らす罵りあつて居る聲、暫くやかましく聞こえました、がやがて靜まりました。……すると忽ち足音が聞えて、今レーチの隱れて居る前を、大きな男か三四人、何かいひながら驅けて行ました。――あとは全く寂寥として、夢を破られた汀の水鳥の、寢惚て騒く聲ばかり。

レーチはやつと安心しました。が、胸の動氣足の戰慄はまだやみません。こは〴〵森から出ましたが、雨降て地のかたまるならひ、此騷處があつてから、少女が度胸はすはつたやうです。ツシテ今は只、——此樣な所に居ては、またどんな怪我をしまいものでもない、……早く歸るにしかず——と、急ぎ足で今の喧嘩のあつた場所を通つて見ますと。——アラ無殘！大地の雪には時ならぬ紅葉を散らし、またあちこちに杖が二三本と、一挺のピストルと、靴が片足飛で居ます。之を見るとレーチには、急に恐怖いもの見たしといふ念が起つて、なほ其邊を見廻しました。——すると不思議です。——池の中でボチャ〳〵と水音がして、又薄い氷の破れる音が、バリ〳〵と聞ゑます。レーチは是を聞つけると、中々そのまゝに捨てません。ツカ〳〵と池の頭へ來てすかしてみれは、確に人間です。しかも大の男です。池の中へ投け入れられたものか、背から下を水につけ、氷にすがつてよぢのぼらうとして居ますが。よくみれは横顔に疵があつて、それから流れて出る血が、襟から肩へ傳はつて居る鹽梅、いかにも殘酷に見えますから。小供ながらも仁俠心に富で居るレーチ、斯うなつては大人も及ばない勇氣が出ました。自分の寒いのも忘れて、片足を水の中へ入れ、件の男の手を摑み、全身の力を兩手に集めて、引きあげやうとしますと、其男もその心を得て、嬉しさうにレーチの手にすがりましたが。痛手に苦しめられて居ますから、自分の力で上ることは出來ません、却てレーチの方が池の中へ引入れられさうです。それを一生懸命の腕力で、ヤッと半分ほど上たと思ふと、男のふまへた氷が破れて、又スル〳〵と中へすへり落ちま

す。……此やうな事を二三度して、やつとのとで引きあげて見ますと、男の疵ハ顔ばかりでなく、腰のあたりからも血か夥しく流れて居て、中〱立て歩行ともならず。その儘雪の上へへたばつて、苦しさうに迂鳴つて、居るばかりです少女はこれを勞ハりながら、雪を口に入れて遣つたり、瘡口を押へて遣つたり、甲斐〱しく介抱して遣ります中。男も少しハよくなつたか、重たさうに首を擡げて、《ア……あ、あり難う……何方……ですか……》と云ふ聲ハどうやら覺へがあるやうです。もしやとおもふて顔をさしのぞいて見ると、驚ろきました。《アラ貴郎ハアノ先生……》《ウーン……誰だ……》《先生妾でございますヨ……レーチで……先生もう大丈夫でございますヨ。》《オヽレーチか……面目無い……レーチや先刻ハ私が悪かつた……許して呉れ……アヽもう私ハ後悔した……あれから私ハ……いつもの友達の處へ……賭博をした處が……それから悪い奴が……ア苦しい！》《さうですか。それにしても此處じやア……アヽ誰か來て呉れないかチー……》

家へ連れて行て介抱しやうと思ひましたが、少女の身で大の男一人、どうして負ふて行かれませう。と云ふてその邊りに車もなしと、逗惑して居ます處へ、通りかゝつたのハ三十四五の職人體の男で、此の體をみると少しも躊躇はず、少女の傍へ走り寄て、《レーチヤどうしたんだ此の方は？》《オヽお父さん……》

丁度よい處へ父が仕事歸りで通り懸つたので。そこで二人は力を合せて、深傷になやむ教師を、程遠か

らぬ吾家へつれて行きました。その跡の話は推量でも分りましやう。
嗚呼此少女の健氣さ。——彼の無頼な教師を、善良な信徒にしたのも、此レー子のけなげさ一ッでした。

◉黑衣魔

(上篇)都の眞中で豺の遠吠

下谷金杉村、トばかりではなんでもないが。呉竹の根岸の里、かう云へば何となく其處が風流に聞へて、此處に住む者は車屋までが、初雪やトうめき出しさうに覺えるのも妙さ。さても此の里の住人に、丸田杉內と云ふ男があつた。これも俗名聞いたばかりでは、どうやら序幕に首をはねられさうな代物だが、鼻の舍主人鞍馬山人と、雅號を呼べば箔が付いて、この東京市四里四方はおろか、日本六十餘州いづこの津々浦々までも、寶丹の名と共に、知らぬ者のない大した作者。まだ三十に成るか成らずで、はやく已に大家番附の三役に入れられ。今日本の文壇の、日の下開山横綱免許と、吾まづ許るせば人も物云ひ付けぬので。高慢の鼻無遠慮に膨脹し。今に肩のあたりに翼が生へて、手足の爪が尖つて來れば、やがて大山か秋葉あたりへ、轉居をせねばなるまいと……陰ながら心配をして居る友人もあると云ふ。
今日も不忍の長蛇亭で、同ド作者仲間が鼻突き合いしての小集會。三時頃より燈火つくまで、思もひおもひの螺を吹き、手製の味噌もあげ盡して、夜の八時頃からポツ〳〵解散。少こし後くればせに鞍馬

ハ、木葉亭と云ふ年若な作者と、何にか大聲で話なしながら、お靜づかに入らつしやいを背にうけて、表てに出て見ると、四日ばかりの月まだ入りもせず。名殘り惜しそうに辨天堂の棟に取り付いて、松の影げを形面白ろく、池の面へ投げて居ると。寢そびれた鴨が、折りふし間の拔けた聲をして、塒を移つす羽ばたきの音が聞こへる。二人はブラ〳〵石橋の上まで來たが。鞍馬ハ立ちどまつて、《オイ木葉、暫時休むで行かふ。ア、い丶風だなア。》《寒中に夜風に吹かれて、ア、い丶風たア變はつてるヨ。面の皮の厚い以て知るべしだ?》《何を?》《イ、エ、い丶景色だと云ふとサ。》《實に絶景。面白や馴れても須磨の夕間暮。君なぞは韻文や詩のヿをやかましく云ふが、斯云ふ處をまづ氣をつけんぢやいかん。見給へむかふの上野の山の具合から、コンモリとした森の茂みへ、薄く靄をあしらつた鹽梅。その下へ家を見せて、その二階の、戸がまだ開いて居て、障子があかるく見えるなんぞは嬉れしいぢやないか。かうなつて來ると辻待の人力車の提灯までが、景色を添へて來る。嗚呼絶美々々……。オイ〳〵先へ行ちやいかんヨ。》速足で追駈けて來て《君達はだからまだ若いヨ。徒らに受賣りの空論に斗り走つて、居るのを、輕々しくヤレ曲線が美だノ、裸體が美だのト云つてるが、今眼の前に斯云ふ高尚な美——天然の美があらはれて見過すヿは實に愚極まるヿだ。僕ハ思ふよ、所謂眞正の美なる者ハ、決して遠くハないと思ふ。吾人が日々見て居る處に、美がいくらもころがつて居る。それを見出すヿが出來ず、さも得難い者の樣、に大騷ぎやつて之を遠くより求めやうとするのハ、所謂自分の家の羮肴をすて丶、隣家の香の物を窺ふと一般

だ。》《嫌にあてつける子。先刻奈良漬を侵した敵を、戸外まで持ち出して討つとはきつい執念だ。》《イヤさう云ふ腹で云つたのぢやないから、まア勘辨したまへ！時に木葉子、今夜は一ッ妙な處へ案内しやうか。……イヽエ決して恐れたまふな。誰がそんな青樓なんぞへ案内するものか子。京傳三馬の時代ぢやあるまいし、苟も新日本の作者が、そんな花柳の巷に徘回して、遊女冶郎の痴話に、貴重な白紙を汚されるものか子。况や廢娼論の盛な今日、通言總籬や辰巳婦言の如きものが世に出されると思ふか。僕は實に三馬や京傳なんぞの氣が知れんが、それよりは第一、あんな遊戲文字を、文學の一端として許して置く、今日の批評家が氣に喰れん。イヤ是は話が枝葉に渡つた。今僕が妙な處と云つたのは、遠くはない直き其處だ、來て見給へ！。》《近くなら行てもいゝ。なんか美形でも居るのか？》《美形？――けしからん、そんな了簡なら來てもらひますまい。君も實に見下げはてた人だ。苟も日本文學改良の重任を佩びて、今日小説家の列に加はるゝ者が、なんとした事だ！區々たる婦人如きに左右されるとは！婦人が居れば行かう、居なければ行くまいト云ふやうな了簡で、斯道の研究が出來るものか。君見た樣な人が居るから、今日の小説界にまだ梅暦や田舎源氏が捨てられないんだ。――君でしやう、束髮の娘が何處の書生に惚れたとか、ある若殿樣が藝妓にはまつたとか、實に不健康極まる者ばかり書いて、揚々として人情の極微を穿つた積りで居るのは。君等はそも〳〵人情を誤解して居るものだ。實になげかはしい次第サ。さう云ふ精神で小説を書くから、つまり小説は風致に益なくして、却て害毒を流す耳だ。

誰かゞ今日の文學は極衰だと嘆息したのも、萬更道理のない事でもない。なんぼ教育が無いからと云つて、それではあんまりひど過ぎる。ちつとは眞理を研究して、眞理の發揮と云ふ處へ心掛けてくれんでは。――嗚呼君等はまだ〳〵修業が足りない、チット僕を見習ひたまへ。――だから僕と一所に來て見たまへと云ふのだ。實に大に學ぶ處があるから。》《默つて聞いて居れば、口角泡を吹いて論じ立てるが、全體それは何處の話だい？》《何處だつて聞くだけ野暮さ、君はまだ知るまい、此の上野の山に一珍事が持上つたのを。》《一珍事。なんだ情死か？》《またそんなことを……近頃夜な〳〵此山で豺が遠吠をするのを。》《豺の遠吠？――なんだつまらない。動物園の豺が鳴くんだらう。》《さうさ。だが此の大都會のまん中で、豺の遠吠とは實に有り難いぢやないか。あの權現の森の中で、豺の遠吠を聞く位、凄くつて妙なものはないヨ。僕は毎晩聞きに來るのだ、どうだ君も付合はんか！》《イヤもうお斷り申さう。》《そんな根性だから雄編大作が出來ないんだ。》《豺の遠吠を聞て、どんな妙案が浮ぶものか。御苦勞樣な、風邪でも引ちやつまらない。》《アヽ俗物駄目だ〳〵。よろしいそんなら歸りたまへ！無理にとは云はん。早く歸つて妻君の顏でも見たまへ。そして其の惚氣でもあしたの紙上にかくべしだ。》《ヘンそねめ〳〵ッ！》《あれだもの。當代の名家が左二郎の口吻を眞似して……苦々しい事だ。》

鞍馬は先前大分きこしめした勢に、常とは輪をかけて吹きたてるので、相手にされた木葉はほと〳〵こずりゝ、よい加減にあしらつて居たが。とても切りがなさゝうなので、隙をねらつてすばしこく車を雇

ひ、何時の間にやら姿を消してしまつた。

體よくまかれた鞍馬山人は、何か獨りでブツ〳〵云ひながら、東照宮の方へ取て行き、石の鳥居をくゞつて石壇を一ッ〳〵、千鳥にあがりかけるとたん。大佛で撞き出した鐘響、不意を打たれて踏み止つたが、なんだか點頭きながら、又登つて行た。

東照宮の前へ來た頃には、月もたつぷり沈んでしまつて、空は星の天下、樹影は闇の世界と成て、只處々にある常夜燈が、却て物淋しさを添て居るばかり。時々森の梢をくゞつて、不忍の池へ吹きおろす夜風、襟元から濕手をさしこまれるやうに覺えて、思はず身を震はし。二重外套の襟深く頸を縮め、先刻もらつた長蛇亭の小田原提灯を、外套の翼の下へ入れ、土産の笹折を懷中へ押し込み、小股に急ぎ足でやつて行くと。其物音に驚かされてか、五重の塔の椽の下から、躍り出た白犬と斑犬。鞍馬はビツクリ。

（ヒエーなんだ畜生ッ……ヤッ犬か。これはどうもお樂しみを妨げた。失敬々々。決して恨んで呉れるナ。チト根岸の方を通りかゝつたら吾の家へ寄れ！直き御行の松の傍だ。又洗ひ流しでも御馳走するから。默つて逃げて行く處を見ると、腹も立たなかつたと見えるナ。……どうだィあの仲の好さ加減……。あれで何か話をして居るのだナ。「ほんとに憎らしい人間だヨ」てなとを女房が云ふと、「お前が止めなけれや喰付いてやるんだけども。」などゝ亭主の犬めが吾を睨らみやがるんだナ。「何うだらう犬の小說を書いたら。不思議なものが出來るに違ひないヨ。此間誰かゞ鳥の小說を書くと云つてたが、吾は其の向

ふを張て、一番犬小説を書いてやらう、其處で材料はさしづめ酒屋の八と自家のムクとの關係がいゝ、そして其の間に牛屋の黒が決闘中し込む處などもあつて……。是は屹度と面白い物が出來るョ。なんでも今の世の中は、一ッ斬新なものさへ書けばそれで傑作だと思はれるんだから、企て易いものだ。——イヤ犬と云へば豺はもう鳴きさうなものだがなァ。……まだ寝る氣づかいはないて……。丁度よい此處で一服して暫く待たうかナ。』ト、塔の椽へ塵も拂はず腰をかけ、煙草入を取りだして、提灯の火に二三服吹かして居ると。忽ち一聲オウ——。『ソリヤお出でなさつたぞ…又か……も一ッ。今夜は大分安賣だナ。——どうも何んとも云はれないチー。妙に悲しいやうな、其中に滿腔の怒氣を含んで……。なるほど腸をしぼられるやうな……も一ッか、有り難い。不思議だ〳〵。此處で聞いてさへこれだもの、旅へ出て山路に踏み迷ひ、あんな奴を一ッ聞いたら、思はず身震ひするよ、震ひが止まるまいよ……。イヤ酒がさめた故か、大分寒く成た。一ッ焚火をしてやらう、處で火はこゝに蠟燭の火でよいとして、何か焚付はないかナ……。ヨシ〳〵枯ッ葉がある——夜間聞狼燒落葉——噫風流なものだなァ。木葉亭の如きは此の風流を知らんのだから不憫だよ。オッと豪氣々々。椽の下から菰が出た。ハヽア乞食の遺產と見たは僻目か。さう思ふとなんだか汚はしいナ。然し彼等に取ては錦の褥だ。これで中々履歷付きの菰だからをかしい。——元は四斗樽の着物と成て、故郷の伊丹あたりから、遙々東京へやつて來て、新川に居候になると半年ばかり。それから割烹店か煮〆屋へ買はれて行き、やがてはがれて飯事の座敷となり、

又或時は見世物小屋の幕に用ひられ。幾度か焚火の邊へ望むで、危い命助かり。時々は合羽の代りに成て、夕立の折に善根を施し、果ては非人の手に下だつて、出でゝは着物となり、入ては蒲團となり、虱の宿となることまた幾月。やがて新菰に見替られ、此の椽の下に捨られて、徒づらに塵芥と朽ちんことを待つ處。又野良犬の爲に見出されて、鴛鴦の衾にされて居たが、今人間に捕へられて、遂に北邙一片の煙、思へば不憫な菰の身の上、噫、觀ずれば浮世は夢なり。……。ハヽヽ、とんだ菰の賦が出來上つた。ハヽヽ、。》

獨り興に入りながら、落葉をかきあつめ、菰をかぶせて堆くし。それに蠟燭の火を移して、頻りにふいたけれども、夜露にしめつて居るから一向燃えつかず。只燻ぶるのみに、鞍馬は顏をしかめてもてあまして居ると。——其處へ、何處からともなく一人の男進み寄て、《焚材は私が差し上げましやう。》云ひながら、枯れ枝のよく燃えさうなを一束にして、鞍馬の前へ持て來て畏まつた。鞍馬は一度は喜び一度は訝り。ツク〳〵其男の樣子を見るに、年は廿五六か、色クッキリと黑く、黑羽二重の小袖に同しく羽織。黑繻子の袴をはき。黑足袋に黑塗の下駄、黑の高帽子を左の手に持て、慇懃に手をつかゑて居た。鞍馬は不審晴ず。《これは辱いが、全體あなたは何處の方で?》《ハヽ。私は唐津九郎。雅號を墨の舍と申す駈出の作者でござりますが、乍恐先生は、根岸の鞍馬先生ではござりませぬか?》《いかにも私が根岸の鞍馬山人、又鼻の舍たかいとも云ひますて。》《ハヽ、有り難し辱し。私先生の御雷名を伺ふと久く、何時か

一度は高門を叩いて、御高論を承はり度き心願で在りましたが。先生には御見識高く、門前に俗士禁制の制札を立てられ、尋常一樣の人間には、御面會下さらぬと承はり、吾々木葉作者の到底御目通り叶はぬとは存じながら、一端思ひ立たと、此儘にあきらめるも無念と、晝夜肝胆を碎き居りました處。此頃承まはれば先生には、夜な〳〵此の上野の山へ、貎の遠吠を御聞に御出での由。これ幸ひと早速支度致し、日暮より此の處へ參りまして、御待ち申します中にも。私が茫然して木の下に佇んで居りますので、もしや首でもくゝるのかと、二度まで巡査にとがめられましたが。其の苦心の甲斐あつて、さい前御姿は見へながら、何とやら御威光恐ろしくなつて、御側へ寄ることならず。あの木影に暫らくためらひ、黄石公のむかし思ひ出して、せめてお帽子でも飛んだなら、それを機會に近づかうものをト、いろ〳〵工夫いたしながら、ひそかにうかゞへば、折角の落葉に火がうつらんで御難義の樣子、こゝぞと其處ら探しあるいて、枯れ枝を拾ひ集め、漸やくお側へ參りました譯。此の心根殊勝と思召して、何卒是よりは私めを、御門弟のはしくれに遊ばされ、御教示のほど偏ねに願ひ奉つりまする。ト、額の汗をふきながら、畏まつて陳べた。その弱身につけこんで、鞍馬はズッとそり身になり。地眼で見をろしながらさも横柄に、(ハテ若いには似合はぬ心掛けだ。さう云ふ心掛ならナニ遠慮に及ばう、何日でも尋ねてござらつしやい！また色々御教示申さうから。アノ私の家に俗士禁物と制札を立てたのは、畢竟世間の俗物が蒼蠅いからだ。君の樣な斯道に熱心な者なら、垣根を取拂つてゞもお眼に掛るよ。殊に此の

頃では、私の名を慕つて毎日尋て來る者、無慮一萬八千人。隨分うるさいものさ。だが私も好だから、相手にして話をするが、とても一々會てやるわけにはいかないし、夫に家もせまいから、此頃では馬場の馬見場へ出て、皆を集めて毎日一問題宛講談をやるのさ。昨日が丁度演劇改良論で、今日は小說家の責任論さ。そしてその筆記はみんな文學雜誌へ出るが、それを又外國人が飜譯して、それ〳〵本國の新聞雜誌へ送るさうだ。その故か此頃では、歐洲の文學が大分面目を變ドて來たさうだヨ。此間も或人の話だが、英のシエクスピーヤが私の議論を讀で、大に感服して、是非近日日本へ渡つて、鞍馬山人の弟子になりたいと、其友人のシルレルに話したと云ふ事だが、赤髯も中々熱心なものさ子。》《段々承はりますれば、有り難い事ばかり。然し此處は野天で、ゆる〳〵お話を伺ふとも出來ず。甚だ殘念でござりますが、とてもの事に私の宅まで……、甚だ恐れ入りますが、御出で下さります譯には參りますまいか、今晩から御弟子入のしるし、何は無くとも一獻さし上げたうござりますから。》《イヤそれは飛んだ御厄介だ。然し遠慮は無沙汰、そんなら、御案內願はうか。》《御聞届けで誠に大慶……只今お乘物を。》墨の舍は立ち上つて向ふの木の影をさしまねき。《早くこれへ?》《ハア〳〵。》ト答へてあらはれたは、黑塗りの箱馬車一臺、逞ましい黑馬二匹つけ。黑裝束の馭者揚々として、黑革の手綱かいぐり、靜かに塔の側まで引きよせて來れば。黑鴨仕立の馬丁一禮して戶を開らく。墨の舍は跪づいて《どうぞこれへ!》

鞍馬は得意に成て乗る。馬車は駈け出す……

（下）　杉の頂邊に人の高話

見渡せば床の間の山水、霞むで見へぬ程の大廣間。十五疊廿疊いくつかぶつ通して、立て列らねた黒塗の燭臺、白晝を欺くばかり。はるか上座に、黒綾子の座蒲團しかせ、黒柿の床柱の前に、黒塗の曲線によりかゝつて、豪然と大安樂、これ誰かと思へば、――例の鞍馬山人。前には黒塗に蒔繪の膳二つまで据へ。その上に山海の珍味の數々、とても喰ひ切れぬ程ならべてある。鞍馬の隣へ、少しはなれて座を占めたは、前回の終りに現はれた、彼の唐津九郎。察するに唐津は此家の主人で、鞍馬は先刻馬車に乗せられて、乃ち此の家へ招かれたものか。それより遙か下座へは、唐津の目下とも覺える客、いづれも黒紋付の折目正しく、畏こまつて居並んだ鹽梅、何の事はない代官が庄屋の許へ招かれたと云ふ體裁。座敷を周旋するあまたの侍妾は、皆黒縮緬の大振袖。なまめかしい風微塵も見せぬが、ほつそりとした腰付きから、裳さばきのしとやかさ、鞍馬は眼頭を釣り上げて見とれて居る。咳をすればソレお煙草盆、嚔をすればソレお火鉢。一寸手洗に立てば、前後にはや二人の美人。手も自分には洗はせず、鞍馬此年になるまで、これほどの優待、夢の外には逢つたとがないから、悦ぶまい事か、嬉れしがるまい事か。十年ぶりの有卦一度に入た心持で、食いも喰つたり、飲みも飲むだり、臍が綻ばぬばかり。『イヤ唐津君。今夜は實に大頂戴だ。今夜は下めてお目にかゝつた君に、こんな御馳走

をされるとは、實に夢かと思ふよ。ア、こんな愉快なことはないネ。》《これは痛み入たお言葉で……私とても今夜初めてお目に掛りました先生の事故、どんなものがお口に合ふのやら、どんな事が御意に叶ひますのやら、一向に辨まへませんで、まことに行き屆きませず。さぞ御不滿足と存じましたに、殊の外の御機嫌で、私ばかりか一同の幸福でござります。付きましては先生に、甚だ恐れ入りましたが、少々お願ひの筋が……。お聞き屆け下さりましやうか。》《願ひ。これは近頃改まつた話だ、私の身に叶ふとなら、何んでも聞きましやう。全體どんな事だネ。》《早速お聞き屆けで、實に辱う存じます。左樣なれば、申上ますが、今夜先生のお出でを幸ひ、兼々熱望致して居りました、文學上の御議論を……。ナア諸君！》一同首を疊へつけて。《伺ひたう存じます。》《ハヽヽ、何事かと思つたら、譯もない事。文學上の議論なぞと、別に六敷く云ふまでもなく、私か平常饒舌ることが、皆文學上の議論だ。私も先刻から大變つめこむだから、チト腹こなしに饒舌らうかナ。オホン〱。》《これお湯をさしあげろ！》鞍馬は湯呑をそばへひかへ、居住ひをなほせば。唐津を初め一同の者、膳を片付け、耳垢を堀り。膝を進めて聽聞仕初めた。

鞍馬は咽を濕し、オホンと勿體付けて。《さてこんばんは、不審な緣で諸君にお目にかゝり、わしのへいせいの意見を吐漏すると云ふのも、全たく斯道の神の引き合せか。實に喜こばしいことぢやて。オホン〱！私も少し酩酊して、何からお話をしやうやら、自分ながらわからぬが、只口から出まかせに云ふ

から、諸君の方でよい樣に、順序をたてゝもらひましやう。オホン〳〵！――そも今日の文學界、これを亂れたる麻に譬やう。メチヤ〳〵にこんがらかつて、大亂痴奇な鹽梅、實にはや見物だ。言文一致を唱へて西洋主義を入れやうとする改進黨もあれば、雅俗折衷などの名をつけて、元祿の昔時にかへさうとする保守黨もあれバ、其の間にブラ付て居る內股主義、洞が嶺主義とも云ふべき黨派があつて、實に千差萬別だが、要するに言文一致派と元祿黨とが、此の二三年の間一番行はれた。一昨年から去年へかけてハ、言文一致が全盛を極めた時代だつた。一體言文一致と云ふのハ、平常饒舌る言葉をそのまゝ文章にすればよいのだから、至て譯ハない、所謂る其堂に入り難くとも、門にハ入り易い文體だから、眞似がしよく又わかりよい。解りよいから流行るト云ふ鹽梅で、全盛を極めたのだが。飽ッぽいのが人情だから、やがていや氣になる。その虛に乘じて現はれたのが元祿黨だ。これは彼の西鶴、其磧、其角、芭蕉なんぞの俳人の文を崇拜する輩で、云はゞ骨董文學だ。此骨董文學が、二三の有力な文學者から唱へ出されたのと、妙に古色を帶びて、素人にハ譯もわからずに有り難いのと、且は……兎に角眼新らしく覺えるのとで、世人はパリーで刺身を喰はされた程うれしがり、なんでも西鶴に限ぎる、諸事八文字屋が事だと、申されけるトカぞかしトか書かなければ、小說でない樣に覺え。自然此流の作者をば、神樣佛樣のやうに有難がるが、これも隨分をかしなものさ。然し此の元祿文ハ、元が俳文から割りだしたもので、一寸俗眼にハわからないから、萬更の素人にハ眞似が出來ないから、有難さが一層增す。有難さが

増すから世にもてはやされる。此を前の言文一致に較べると、丁度反對に來て居る。言文一致の流行つたのハ解り易いから、元祿文の流行るのハ解り惡いから……。かうも反動の來るものか。然し遠からず此も鼻に付いて來ると、又彼是云ひ出すにちがいない。兎角流行と云ふ奴ハ五月蠅い者だ。此奴中々の力持で、どれほどの大家も、これには動かされるからをかしい。だが此流行の源になる人こそ、眞の大家であらうて。——大家と云へば、此頃の樣に大家を安賣されても困るて。當人がはやく大家がるのか、世人が大家にしてしまふのだか、其處はどつちか知らんが。此頃の大家は、二ツ三ツ小説をかいて、少し名を知られゝば、それでもうなれるのだ。博士も澤山出來ては價値もないやうなもので、大家も無暗と出來ては一向有難味が薄い。然し見る人が見れば、其間に幾個も階級があるから、大家が必しも多い譯ではないが、まづ今日の處で、大家と云ふ者の定義は、其人の價値如何に係はらず、只其名の賣れて居るものをさす樣に成て居る。それもよいが、只をかしいのは、世間の馬鹿が、所謂る盲千人が此の大家の爲に煙にまかれるとだ。只に盲千人耳に止まらず、やゝ眼の開いて居る者すら、大家の名にまづ恐れ入て、充分公平に評したつもりでも、此人はうまいと云ふ念が頭にあるもんだから、それに束縛されて批評眼が自由に配ばれず。いつも賞詞ばかりを呈して居る。これに反してさまで名の知れぬ作者か、或は初陣の者の著作に對しては、充分手嚴しく小言を云ひ、或は馬鹿にするやうな評をしておく。まるでへボ官員が長官に對する時と、小使に對する時と、調子を變へるやうなものだ。これが抑も批評家

たるもの丶本分か。一體批評家なるものは、公平無私でなくてはならんとは勿論だが、第一膽を大きくせんではいかん。當代の大家に諂らつたり、流行に左右されるやうな不見識なことではいかん。今日の文學社會は、善良な詩人よりも、まづ善良な批評家が必要だ。噫、日本にシルレルあれども未だレッシング無し、心あるもの豈慨嘆せざるを得んやだ。これほど批評家が必要なるにも係はらず、批評家にならうと思ふ人は少くして、誰も彼も作者たらうとするのは、是亦嘆げかはしいことだ。成る程作者と云ふ職業は、岡目からは面白くも、氣樂さうにも見えやう、そして直きなれるやうにも思へやう。それだから少しでも才がきいて、筆がまはる者はすぐ眞似をする。——瓢簞から駒が出て、眞似が本職になる輩もあるが。さて本職に成て見ると、中々氣骨の折れるもの、なまじい名が賣れゝば賣れるだけ、責任が重くなつて來て、人に知らさぬ内幕の魂膽。まだ讀んでも見ない本を、堂々と書目十種の中に出して、あとで急いで讀んだり。自分で自分の評をかいて、只管名を賣らうとしたり。用もない事に人に喧嘩をしかけたり。それは〳〵色々と政畧の數を盡して體裁を作らなければ、とても立ち切れないと云ふ果敢ない仕末だ。然し書齋に只一人居る時は、乃ち其の天眞をあらはす時で、原稿一枚書くのに、引用書五六部。あつちの名文を引ぬいて、此方の好句と接ぎあはせ、譯も無い假名遣いに、一々字引と首ッ引き。こんな處を晝鳶にのぞかれたら、それこそ大變だが。でも天道はやつぱり照らし、どうかかうか作者らしい生活が送れるとは、さても浮世は廣いもの。イヤ作者の内幕をあばき始めたら、ほんに切りはあるまい。無

暗に世人の愛顧を得やうと思ふ作者。故意と世人にさからつて大家がる作者。さうかと思へば自分の知つて居ると殘らず云はなければおかぬ作者。知らぬ事まで知つた風する作者。勉めて奇を求めて世人を威せす作者。賞められて圖に乘る作者。誹られて氣をもむ作者。名を賣らうとして奔走する作者。名負けがして持て餘す作者。實に十人十色、種々樣々、一々あげてハ夜が明けるかも知れないが。――爰に不思議なのハ娘作者だ。婦人の作者だ。何時か誰やらが、婦女子ハ小說家に適して居ると云ふ事を云つた、その結果でもあるまいが、追々婦人の作者が殖ゑる樣子だ。此の間も新聞で見たが、ある女學校の女生徒の中には、五六人組んで小說の雜誌をこしらへて居るとか、小說研究會を開いて居るとか、折々聞き込むが。御志のほどは實に感服だ。だが一言伺ひ度いのハ、其等の令孃諸君が、全く他日東洋のエリオットを以て自ら任ドやうと云ふ氣か、それともほんのお慰みに書いて居るのか、此事だ。果して眞面目に研究する心根なら、實に嬉しくも亦有り難いが、たゞ冗談にするのなら、實に惡い冗談だから、いつそ今の中に止てもらい度い。第一令孃諸君のお爲めにならんから、御人體にかゝはるから、さつぱり思ひ止まられた方が宜しからう。和文教科書でも御覽でしたらう、昔仁和寺の小坊主が鼎をかぶつて躍つたら、遂に其の鼎がぬけなくなつていろ〳〵と苦しみ、漸く拔いたら顏が散々になつたと云ふ。是れは實によい御手本だ。オツト餘り云ひ過ぎて、アラよくつてよも下さらない、小言はこゝらでやめやう。――兎に角今日の文學はまだ〳〵若い、が、また末頼もしい處がある。だから今の文學を彼

是評し、今の文學者の價値を論ずるのは、誠に無理な話だ。なる程今の文學界に大詩人は現はれない、勇篇大作は出來ないが。これも無理ではない、それを強ちに注文するのは、春、新米を求め、嬰兒を戰場に出さうと云ふやうなものだ。今少しの辛抱。やがて新米も出來る、戰爭へも出られる。——大詩人も出る、勇篇大作も現はれる。なんぞ遠きにあらんやだ、ヤレせつない！》

鞍馬は漸く咽を濕した。今までは咳もせずに聞いて居た唐津は、此時はじめて言葉を發し。《段々伺ひますれば、實に面白い御議論、私共一同の思ひも至らぬとばかり。お蔭で大いに學問致しましてござります。》《ハヽヽヽ、平常の議論をかいつまんだ處がまづあんなものさ。其他小說、演劇、落語、詩歌、音樂などの枝葉に付ては、又それ〴〵議論もあるが、それ等は次ぎまでお預けとしてもらはう。然しあんぞ尋ねたいとがあるなら、遠慮なく聞きなさい！、質問に應ずるから。》《左樣ならば早速伺ひますが、先刻お話の出ました西鶴と申す男は、一體何云ふ男でございますか、度々名は聞きますが、一向云はれを存じませんで……》《今の世に西鶴を知らん樣では話せないナ。イヤ尤も堂々たる大家ですら、其名を知つたはツイ此頃のとだから、君等がさう云ふのも尤もだ。西鶴は一體松壽軒と云ふ菓子屋の息子で、曾て饅頭を二ツ食ふ中に一句咏じたと云ふので、師匠宗因から二饅翁の名をもらつた。惜しい事に年を取てから目がつぶれてしまつたので、一代男の終りあんぞは、娘に筆記さしたと書いてある。》《へ、ー。近頃は露西亞や獨逸の文學が盛んになりましたやうですが、一體ゴエテーと云ふ人は、どんな工合の人

でございましやう？》《ゴエテー或はゲーテー、又はギョーテーと云ふ人もある。あの人はまづ京傳の様な人物で。此に對してシルレルを馬琴に比したらよからうか。ゴエテーと云ふ人はまづ通人だね。ヘルデルが彼の人の事を、始終コート、コートと呼んで居たさうだ。これはゴエテーと云ふ名に音が似て居るからだ。譯は糞と云ふことだが、當人は屁とも思はなかつた。此ゴエテーは後に寫眞屋へ奉公したので、今だに寫眞派の名家と云はれて居る。》《支那も文學の盛んな國ださうですが、あまり日本で貴みませんやうに見へますのは、如何なものでございましやう？》《いかにも支那は文學の盛な國で、隨分昔時から有名なものがある。まづ七才子書、十種曲、四夢記、十二樓。いづれも面白いことだ。これはどの物を日本に輸入しないで、矢鱈に西洋の物ばかり用ひたがるのは、小田原の鰹を取らずに、北海道の鮭を買ひ込むやうなものだ。中にも面白いのは西廂記かね。》《へゝー西廂記と申しますと……。》《西廂とは、西の廂と書くので、西の方の廂で鶯々と云ふ女が首をくゝつた。その由來を書いたものだ。支那戯曲中での名作で、斯云ふのを北曲と云ふ、寒い時分にするからでもあるまいが。》《成る程……。先生なんぞはかうやつて何でも御存ドでございますが、一體何致しましたら作者になれますものでムいましやう？》《ハヽヽ、作者になるのかチ、これハ中々容易でないて。先刻も云つた様な、所謂デモ作者になるのなら譯はないが。苟も人から大家とか名家とか、廊架とか椽側とか云はれるやうになるのは、さうチョックラチョイとなれるものではない、第一天賦の才と云ふものがなければ。——私なんぞは生れない前からち

がつて居たよ。母親が八犬傳を枕にした轉寢の夢に、文昌星を呑むと見て妊身だと云ふ。三才の時にいろは四十七文字をそらんド、六才の時にはもう歌を作つた。その時分から樣子がちがつて、一寸友達と遊ぶにも、つまらない獨樂わてや凧をわげて遊びはしない。必ず飯事か芝居ごつこ。其頃こしらへた五人男の臺辭が未だにわるが、隨分をかしなものさ。》《へゝー、旃檀は二葉よりとは、實に先生のとで。成る程。》《それから十才の時に、はじめて正本を書いて見て、隣りの叔父さんに大變ほめられ、鶴屋南北は跣足と云はれたから、そこで龜屋東西と名を付けた。》《恐れ入たもので……シテその時の正本は何と御付けなされました?》《外題はちやんと覺ねて居るよ。エー二本棒鼻汁横撫で總六幕。チヨボもあり大薩摩もあつて、ちよいと巧者に出來て居たつけ。》《それほどの物をなぜ歌舞伎座で致しませんでございましやう?》《イエなに此間團洲が來たから、戯れに見せたら、大變感服して、是非やつて見たいと云つたが、私も昔時の作だから斷はつたのサ。》《成る程。然しその筋はどんなものでございますか。私共先生の御作で世に出て居りますものは、殘らず讀みましたが、只今のは今日只今承はつた位。甚だ勝手がましうござりますが、一寸筋をお話し下さいませんか!》《ハヽヽこれは飛んだ迷惑だ。が然し乘りかゝつた船だ、お話し申さう。まづ斯うぢやつて。オホン〳〵二本棒鼻汁横撫、序幕地藏縁日飴屋の場。…………

動物園に鶴の聲高く、旭東天に昇ぼれば、木影漸く明かるくなり。塒をはなれる烏、今朝は一段と騷は

がしい。――巡査一人、角燈の燈光消して、一際寒い曉の風を、外套の頭巾目深に防ぎ。白い意氣を吹きながら。キユー〳〵、ガサリ〳〵コト〳〵(靴音)。今東照宮の石疊から、五重の塔の下を、動物園の方へ出やうとすると。アラ不思議！頭の上で高話。聞けば聞き捨てならぬ吾が惡口。‖……それでこの巡査め、つかまへに掛つたが、見掛けによらぬ弱虫で、此の小僧の爲におべこべに投げたをされ、帽子は破られる、サアベルは折られる、散々な目にあつた……‖

《おのれ官吏侮辱》と、見上げる杉の大木に、益々不思議。其頂邊の二股に成た處に、男一人濟まして坐はり込み。その側に烏何匹とも知れず、或は肩に止まつたり、或は飛ながら糞をしかけたり、種々な惡戯をして居るが、當人は一向平氣で、變な手付きをしながら、興に入て話を仕て居る樣子。あまりのとに小言も云へず、只呆氣に取られて眺めて居たが、捨てもおかれぬから、《コリヤ〳〵、貴樣は何しちよるんじや？ コリヤ……(大聲で)コリヤッ！》

この聲に、人よりはまづ烏驚き。ドッと羽音をさして他の木へ飛び移ると、そのとたんに件の男は、まつ逆樣に、ズル〳〵……ドサリ。《ア痛た！》《コリヤ〳〵！》

巡査はいたはり乍らも《貴樣は一體何者じや？ 何の爲に木の上に登ぼつちよつたか。貴樣公園規則を心得ちよらんか。コレ！》ト背中を一つなぐられて初めて心付き。《ヘッ……ア、貴君は巡査。……コリヤどうだ？》

キョロ〳〵見廻して居る鹽梅、萬更のキ印とも覺へず。さては狐狸につまゝれたか、それとも上野の山に天狗が棲むで、その玩弄にされたのかゝ、巡査も少し氣の毒になり、いろ〳〵と尋ねて見れば、——昨夜の黒裝束の男、今朝の烏、——思ひ合はせばどうやら仔細もわかり。巡査は可笑しく、鞍馬は面目なく、帳面に名を止められ、以後を心付けられたばかりで其場は事濟み。からつぽにされた笹折と、メチャ〳〵に破れた提灯くやしさうに捨て。糞だらけにされた外套を、そのまゝまとひ、腰をさすり〳〵立上り、恨めしさうに梢を見上げ、あれが昨夜のお座敷かと思へば。——畜生め！まだ二三匹、高慢に見おろして嘲る聲——成る程、アホー〳〵。

チットーのメルヘンシャッツ（奇異談集）に、樂師が烏に誑された話があります。此黒衣魔はそれを飜案したものです。原書は或は諷刺の意味がありましやう、然し此には其樣な高慢な意味更にありません。編中鞍馬の議論、暗に作者が平常の意見を吐漏した者と、思ふお方もありましやう。が、それはとんだ迷惑。編中の屁理屈は、鞍馬と云ふ大白痴が烏に誑された時吹いた熱、作者にすら譯がわからぬ、そこが身上だと申すとです。又此大白痴の住所を根岸に致したので、惡く氣を廻はすお方もありましやうが、これとても作者が便宜上から起つたと、此作者がなんでその樣な徒らを致しましやう！そんぢよそこらの先生方、決してお氣に掛られますまい！——玆に豫防線を張る。

漣　拜

◉白面鬼

(上)いよ〳〵天下一の幸福者

夫れつら〳〵惟るに、人間無上の幸福、富貴か、長命か、高位か博識か。あれでもなし、これでもなし。凡そ人間の男も女も、持て生れて容貌の美き、是、是、是こそ人間無上の幸福。金も、命も、名譽も、へつたくれも入つたものでないト、天晴れ發明した無分別男。さりとは氣の知れぬ麻布の住人に、紀の白之と云ふ若者があつた。彼の貫之の後胤なりト、自分で云ふこと當てにはならぬが、家富まねども貧ならず、其性愚ならねど又賢ならず。一通りの教育は受けて、まづは一通の男であつたが。ある時源氏物語を素讀みにしてより、無闇矢鱈滅多無上に、源氏の君が浦山敷て〳〵堪らず。何卒して吾もあんな美男になり、あれほど女に可愛かられて、浮世を面白をかしく、でれり〳〵と送らんものと、途方もない心願を立てたものゝ。偖て翻つて吾が面を見るに、成る程眼が二ッ口が一ッ、鼻は顔の眞中にあつて、耳は兩方の端につき、確かに人間男一匹の顔には相違ないが。何處やらが間が拔けて、おぢやむさくて、畫で見た光る源氏の御相好とは、吾が眼にも大分の差別があるので、なるほど是では及びもない事。且つ夫れ女に可愛がられるト云ふ事は、正に判然と一種の技術で、容貌が美うて金持ちて、それで女が惚れるものでもなく。其處に云ふに云はれぬ一種靈妙な技術があり。餘り澄ましては誰も寄りつかず、餘りひつこくて嫌はれ。親切過ぎれば馬鹿にされ、世話を燒かねば不實と恨まれ、嬉しがつてでれ助にされるも

つらく、泣いて意氣地無しと云はれるも本意なく。饒舌ればお饒舌りとさげすまれ、默つて居ればオッウ氣取ときざがられ。實に實に、其間を甘く梶を取て行く六敷しさと云ふものは、中々自轉車で人込みを走るより骨の折れたもの。尋常一樣の男子の、得て成り易からざる處だ。然り而して此の梶を甘く巧みに取つて、女を悅ばせ、女に可愛がられる、是を樣子の好い方、すいたらしい方と云ふ。吾果して其樣子の好い方であらうか、すいたらしい方であらうか。私かに既往の經歷に徵して見るに、……………まづあまり樣子のよからぬ方、すいたらしからざる方と見えた。夫れ既に樣子が好からずして、而して又容貌が惡いと來て居るからは、とても心願覺束なし。折角思ひ立た色修行、噫及びもない事ト、一度はしよげ返り、念入れて製造てくれなんだ、兩親が今更恨めしく、一人やきもき思つて居たが、思ひ返せば萬更氣を落すにも及ばぬ譯。昔桂川と云ふ力士は、元は六尺棒も振れぬ程のひよろ〳〵野郞であつたが、目黑の不動に願かけて、一心不亂に祈念を凝らしたら、遂にあれ程の大力と成て、見事親の敵を打たためし、此間も雜色の辻講釋で聞いたが、なるほど人の一念は恐ろしいもの。隅田川さへ棹さしや屆く、一生懸命信心をしたらば、吾が思ひの屆かぬ事もあるまいと。かなはぬ時の神賴み、玆にそろ〳〵渴仰の念を起したが。さし當て何の佛樣に願をかけてよいやらわからず。不動樣は强ひ佛樣故、力を授けては下されやうが、男振を直したり、樣子を好くするは不得手でござらう。さらば地藏樣にせうか、眉毛ばかり好く成ても仕方なし。金比羅樣もよいが、鼻が高くなるばかりでも困まる。阿彌陀樣では髮が縮

れやう。屁も放らぬに水天宮樣もをかしなもの。………斯うと知つたら此間れ墓參りに行た時、旦那寺の和尚樣に、容貌を好くする方の佛樣を、尋ねておけばよかつたものト、今更佛撰みに當惑したが。

忽ち膝をハタと打ち、あるわ〳〵善いのがあるわ。辨財天女、辨天樣。佛樣の事でも頗る別品。このお方に願つたなら、大方男振りも直して下されやうと、當てにもならぬ理屈をつけ。思ひ立たが最上吉日、今日から早速信心に取り掛らうと、今迄は稻荷の鳥居に小便しかけた男が、急に珠數屋へ駈付て、丁度手頃なのを一ッ求め、それを以て芝の圓山の辨天樣へ、三日の間殊勝にも日參。それも白晝は極まりが悪いから、朝の三時頃に家を飛出し、階段の下に二時間ほど額づいて、═南無辨天樣！何卒私をば古今無雙、天下一品、前代未聞、空前絶後、專賣特許、妙技一等の美男にして、そして誠に樣子の好い、すたらしい方にして下されますやうに………オンウガヤジヤヤ、ギヤラベイソワカ………═と繰返し〳〵。其後で池の頭へすゝみ寄り、もはやちつとは色が白く成たか、鼻が高く成たか、ト水鏡に吾が顏を見ると、氣の作爲か段々男振りが上るやうに覺へるので、益々力を得。雨が降らうが、風が吹かうが、烏が鳴かうが、夜が明けやうが、此の願透さねば死するとも止まずト、一心不亂に祈念を凝らして、毎朝參詣する程に、いつしか滿願の日と成た。

さて滿願の日と成て見ると、思つたよりは男振りも上らず、吾が顏は依然として未だ吾が顏、只此中の氣苦勞に少し面瘦がした位に、これではならぬと氣をあせり、前の夜から眼も合はず、平常よりは早く起き

て、神前へ駈け付け。指先から湯氣の立つ程、一生懸命に合掌し、少しは恨みつらみもませて、夢中に成て祈て居ると。アーラ不思議や、貴とやな。御殿頻りに鳴動し、正面の扉ガタンと音して、辨財天女出現まし〳〵、やがて白之が耳元に、可愛らしい御聲で——(もうよし夜が明けた。)

時しも頃は水無月の、東雲告るあけ烏、圓山の森の木立に、欠伸の聲もやかましく。池の面は朝霧立ち籠めて、寒冷紗か吉野紙で包むだ様。其中に青々とした蓮の葉、蛙の尿を玉と欺き。矜羯羅童子が持ちさうな蓮の花、葉の間にニヨキ〳〵現はれて、ポカ〳〵と莟みの開く音も時々聞ゑるに。まだ眼が醒ぬか、岸の柳はボンヤリ枝を垂れて居る。凡て昨夜と今朝との間の景色、なんとも云はれぬ心持ちだ。

白之はいそ〳〵として池の頭へ來り、例の如く水鏡に寫して見て一愕。どうも不思議!これは不思議!成たり〳〵、奇麗に成たワ、美い男に成たワ。もはや昨日の紀ノ白之に非ず。繪にかいた源氏の君に、似たとは愚か瓜二ッ、見れば見るほど微塵をかしな處のない、誂へ通り御膳上等の好男子。吾ながらひつ搔いてやり度い程の好い男に成たに。悦ぶまい事か!嬉しがるまい事か!天に悦び地に喜び、手の舞い足の蹈み處も知らず。今にもすべつて池に落ちさうな勢。又た本堂の方を伏し拜むで、(有難や!忝なや!辨財天様!辨天様!辨々天々様々!お蔭で此の通りの好い男になりました嬉しうございます。定めし様子のよい、すいたらしい方にも成たことでござりましやう。有難うございます。宜しく御禮を申上ます。)ト 幾度か禮拜し。また吾が顔を水鏡に寫して、ウットリと見惚れながらも、はや行末の胸算用。

暫らくハ此處空中樓閣の體。

扨て吾も辨天樣の御蔭を以て、斯う立派な美男子になり、樣子のよい方に成たからには、もはやむかしの紀ノ白之でないから、自分も其積りで、天下無雙の美男子ト云ふ風をなし、樣子のよい方然として、充分其資格を保たなければならない。然し只此儘でぢつとして居ては、所謂る寳の持腐れなるものだから、宜しく此美を現はし、此粹を發輝し、第十九世紀の日本に、天下無雙の美男、紀ノ白之ありと云ふことを、偏ねく天下に發表せんでハ、折角男振りを直してもらつた甲斐がない。其處で此の美を現はし、粹を發輝するには、抑も如何なる手段がよからう？ 自家に引込で居るばかりでは、近所の娘ッ子にチヤホヤ云はれるだけに止まつて、とても大事業は成し難いから、なんでも初めは人の眼に着くやうにしなければならない。さうかと云つて毎日〳〵、東京市中を歩行き廻はるのも迂遠な話だから、まづ一番の捷徑が、何處ぞ澤山女の集まつて居る處へ、それとなく出かけるのだ。——まづ芳原洲崎。それも登樓るには及ばない、只格子の前をズーッと通りさへすれば、それで片端からなで切りになる。それから新橋柳橋、下谷赤阪芳町講武所、牛込四谷の嫌ひなく、猫に松魚節を見せびらかし。其他料理屋牛肉屋の女中達から、又白人に至ては、女生徒職工箱入娘、女と云ふ女には、なんでもかんでも一遍通り顏を見せて置くと、それからはもう大變。至る處でヤイノ〳〵。世間の女が一度にドット吾の方へ向ひてくるから、忽ち女旱魃が起つてくる。はては新駒榮三郎などから、決闘狀を付けられたり、今迄花柳社會を跋涉して居た遊冶

郎からは、艶福案を妨害するなど〻、訟訴が起る騷動、イヤもう中々忙がしいが。是まで人氣を取てしまへば、もう大丈夫だから、そこで東京中の新聞へ、――小生に戀慕の御婦人方は、二ヶ月以内に申出べき事――ト、四號活字で廣告を出すト、吾も吾もと先を爭つて、艶書を持て來る者引きも切らず。中々一人では手がまはらないから、まづ書生を五六十人置て、誰は受付け誰は書記と、各々事務を分擔し。表てには「紀白之艶書事務所」ト云ふ看板をかけ、毎日時間を定めて事務を執る。さうすると又、自分で艶書の書けぬ者の便利を計て、門前に代書所が出來るが。さて來るワ〳〵、毎日艶書が平均十二萬三千四百五十六通。中には詩箋に「三更踏月來」と、堅くるしいのがあるかと思ふと。「マイディヤレスト……」など〻、羅馬字でかいた生意氣なのもあり。さうかと思ふと紅筆で「焦る〻君へ、ゟ」とした古風なのもあり。「命も入らないよ」など〻、辻占めいたのもあつて、實に千差萬別、中々悠然見て居られぬから、終にい此方で書式をきめて、美濃紙四ッ切に活版で摺つて、此を一々渡すやうな事にするが。それでも毎日十萬以上の女が申込みに來るのだから、洛陽の紙價爲に貴く、汗牛充棟も啻ならずト云ふ勢だて。――さてそこでいよ〳〵開札の日となると、茲にまた一場の大騷ぎを惹起す。何を云ふにも何百萬と云ふ女人が、一度に門前に押し掛て、鐵札か、金札か、地獄か、極樂か。及第か、落第か、願が叶つたか、叶ぬかを見に來るのだから、恰も代議士撰擧の日の如く。それに皆氣が立て居から、老人や小兒はあぶなくて戶外へは出されない、まご〳〵すると踏殺されてしまふ。そこで表へ張出が出て、いよ〳〵誰は及第、誰は

落第と判然わかると、さア大變。及第したものは取退き無盡でも取たやうに、雀躍してよがるけれど。之に反して落第したものこそ不憫、しほ〳〵として言葉も出ず、おれて、すねて、悔しがつて、襦袢の袖を咬み裂いたり、簪を折つたり、兼て覺悟をしたものか、懐中から剃刀を出して、緑の黒髪惜氣もなく、プッツリ切てしまふもあり。又中には取り逆上て、くやしまぎれに人に咬み付き、上を下への混雜に、押し殺され踏み殺されるもの、何千人と云ふを知らず。警察の御手數も並大抵なことぢやない。するとその翌日から、大川筋に毎日女の土左衛門が、魚河岸の鮪のやうに流れつく。また丸の内の土手の松には、女の縊死人が鈴生りになる。是も皆落第の悔しさに、思ひせまつて斯くの始末、思へば入らぬ殺生だが、これも致し方のない譯だ。然しかうなると又、ウッカリ戸外へも出られない。落第をした女達の中でも氣の暴い奴は、可愛さ餘つて憎さが、百倍、一圖に吾を讎敵と付けねらつて、ピストルやダイナマイト、短刀、鐵扇、洋刀などを持て、あぶない事に及ぶかも知れぬから、味方の女も默つては居ない。大切の〳〵の白之様に、御怪我させては取て返へしが付かぬト、片時も吾の傍をはなれず、入ては肉蒲團、出ては肉の楯。いざト云はゞひッ掻き合て、吾が身を守護する意氣組。此の頼もしい女達が、常に吾を護衛して居るから、一寸他出をするにも、人力車六十臺ばかり連ね、後先へ奇麗な娘ッ子をつけて、そのまん中に、吾が澄ましての行くだからたまらない、通りがゝりの者は羨ましがつて、岡焼半分石などをぶつけるかも知れぬが。兎に角是程の全盛を盡したるものは、國の東西を問はず、古から曾て聞かぬ處。

源氏の君だつて業平だつて、今居れば指をくわへさせてやるものを。……誰が何と云はうと、吾程の美男子後の世にも又とあるまい。吾こそ天下一の幸福者。それに付けても此幸福を授けて下された、辨天様は粋な方、有り難い方、可愛い方。南無辨々天々様々！

ト獨り譯もなく嬉しがつて居ると、突然うしろから、誰とも知れず白之の、兩方の眼を隱すものがある。不意の事に驚いて、《アッ！》と云ひながら白之は、眼をおさへて居る手を握つて見ると、フウワリと温かく、正さに女の手にちがいないから、白之はその手を握つたまゝ、グルリと後を振りかへつて見ると。

——天から降たか地から沸いたか、素敵滅法な美人一人。年は二八か二九とは昇らず。つや〳〵した髮を高島田に結つて、美しい針打ちに奇麗な銀のピラ〳〵。藤紫のわけぼの染めに、白鷺を裾模様にした絽の振袖に、紅葉を浮機にした緋緞子の帶を立ャの字に結び。鴇色の「しごき」房々と結びさげ、右の手に、金地に何か繪のある塗り骨の扇子を半分開き、帶の上に「はこせこ」の金物をきら〳〵あらはし、赤い襦袢の袖の見へるわたりから、何とも角とも云はれぬ薫り、驀地に白之の鼻を撲つて、まづ魂の居所をかへさせ。白之に取られた右の手を拂ひもせず、扇子を眞白な頤にあて、眞紅な唇を少し開いて、ホヽと笑ひかけた鹽梅、我慢も用捨も出來たものでない。白之もたつた今までは、隨分大きな了簡に成て居たが。何を云ふにも女の傍へ行たのは、——臍の緒を切てこのかた、實の處これが初めて。まして先が非常の美人だけに、此方も非常に面喰つて、言葉も容易には出ず、身體も少し慄へかけて來たが。

こゝぞと一生懸命に齒を咬いしばり、なほも件の女を、只默つて見つめて居るうち。次第に動氣はげしく打出して、鼻息もやゝ荒くなつて來た。――漸くに勇を鼓し、《ア、ア……貴孃……、一、一體ド、何邊から……オ、オお出でな……なされ……ました？》《何邊からとは水臭、郎を君お迎ひに參りました。》《ナニ、オ、お迎ひ……ワ私を？それは又ド……ド何邊から？》《白之樣としたとが、そら〳〵しいその御言葉。エ、まアじれッたい！》トいきなり白魚の樣な指先で、白之の二の腕を、衣服の上から一トひねり。白之はびつくり振りはらいながら、《ア痛たた……ひどい事をなさいますナ！》ト急いで袖をまくりあげ、紫色に成た處へ、唾をぬりながら、スウ〳〵意氣をはづませて居ると。女はをかしさをこらえて、《その位に致しましたら、思ひ出されたでございましやう。サア入らつしやいまし！》ト白之の手をしつかり握り、先へ立て連れて行く。導かれながらも白之は、更に合點が行かなんだが。又考へ直して見れは、何も恐がるには及ばない。吾も今は平常の紀白之でない、御膳別品、天下一の美男子に成て居るのだから、正しく是が通りがゝりに、吾を見染たに相違なし。そして此處は道傍だから、ゆつくり口說くこともならぬので、自分の家へ連れて行かうと云ふ寸法だな。ヨシ何處へでも連れて行け！何處へでも着て行かう。深山の奥の其奥の、ずつとの奥の行き止り、竹の柱に茅の屋根、蒲鉾小屋はちと恐れるが、此女の樣子では、中々そんなむさい處にあらず。正に立派で奇麗で、すばらしい御殿にちがいなし。そして此樣な別品が、まだ澤山居て、其等が一々吾に夏ぼた、四方八方からヤイノ〳〵。……ウッ有難いぞ、時節到來、歸命頂禮。いよ

〳〵美を現はし粋を發輝し、吾が腕前の程を試めすべき時期が來たぞ。見ろ〳〵今に吾が、辨天樣から授かつた、神變不思議の秘術を盡して、見事手の中にまるめ込でやるぞ。然し吾も今は天上天下唯我獨尊の美男だから、さうお安くは振まかぬぞと、又そろ〳〵元氣付き、一人腹の中で力身ながら、今度は此方から口を開きかけて、はや秘術實施の了簡《よい御天氣でございますチ。》《ハイよい鹽梅に……然しまたお暑くなりましやう。》《どうもひどい暑さで、當年は別して嚴しいやうでございますナ。――時に貴孃は……お名前は何とおつしやいます?》《妾のやうなもの丶名をお聞き遊ばして、何になさいます?》《アレ御挨拶ですチ。なるほど私の樣な者に名を云つてきかしても、何の役にも立たないとおつしやるのですか。よろしうございます。そんなら承はりますまい。》《郎君男の癖にイヤミをおつしやいますね。決してさう云ふ譯で申したのではございません。》《そんならお名を知らして下さいましな!……エ、エ、どうか云つて下さい!》《でも妾の樣な者の名なんぞ聞いて……。》《又そんな事を……是非伺ひ度いのですから。》《妾の名は汀と申します。》《みぎはさん? まアよい名でございますこと。よく云つて下さつた、どうも嬉しい。》《アラ憎らしいチ。御樣子のよい事ばつかりおつしやつて!》ト握つて居る手の甲を一ッつねる。白之は今汀に御樣子のよい事と云はれたので、グット嬉しくなり。さてはいよ〳〵樣子のよい方に成つたに相違ない、然し樣子が好い方と云ふ者は、つねられなければならぬものか。こいつはちつと痛いが、其位な我慢は屁でもない事。此のつねるのが乃ち女の惚れた證據で、紫色に痕の

殘るは、所謂る起請の血判も同然。命もあげます卜云ふ印なんだから有難い卜、無上に有難つて、尙も汀に寄り添ひながら、導かれて行く中に、やがて想像通り、立派な御殿の庭先へ來た。《汀さん此は貴孃の御住居でございますか、一體何と申す處です？》《ハア此は妾共の居ります處で、名も何もございませぬが、世間では雪御殿と申て居ります。》《ヘーー立派な御殿ですナ。なるほど雪御殿……壁が白うございますナ。シテ貴孃お一人で居らつしやるのですか。》《イエ友達が澤山居ります。》卜云ひながら座敷の方へ進み、》《淺瀨さん、白之樣をお連れ申しましたよ。》《アラまア嬉れしい事。》

可愛らしい聲が聞えたと思ふ間に、可愛らしい娘一人、汀と同ド扮裝をしたのが、いそ〳〵として走て出て、白之に一寸會釋し、又奧の方へ向つて、《田面さん、越路さん、松ケ枝さん、苗代さん、糸柳さん、小簑さん、皆樣入らつしやいましよ。白之樣の御入來でございます。》《さうまア嬉しい事。》《皆樣參りましやう。》

伽羅息い風サツト吹かせて、先を爭ひながら現れ出た一群の女隊。いづれも一樣の高島田に、同し鷺の摸樣の振袖、揃ひも揃つた美形七八人。白之の顏見ると等しく、號令でもかけたやうに、一度に横眼をつかつて異口同音に、《アラまアすいたらしい方！》

〆めたいよ〳〵本物。白之は只もうでれエり

（下）さてこそ天下一の大白痴

憶ひ出す彼の賈寶玉が、夢に大虛境に遊んだ時。其時の樣な今白之の心持ち。只恍惚として魂魄の居處自分にも更にわからず。肉も溶け骨も痺れんばかりであつたが。漸との事で氣を取直し、オホンと一ッ咳拂ひして、靜々と座敷へ上ると。女共は左右から白之を取りまき、しとやかに兩手をつかへ、結ひたての島田を疊にすり付け、眞白な襟足まで見せて、丁寧に辭儀をしながら、《これは〳〵白之樣、むさくるしい此處へ、ようこそお入來下されました。》《戀ひに戀がれし女の一念、屆いてうれしやお姿を、只今これにて拜みまするは、此上もなき身の果報。》《これと申すも皆々が、日頃信心する辨天樣の、お引合せでござりましやう。》《何はともあれ此樣な、嬉れしい事はござんせぬ。》

白之グツト反身になり、《數ならぬ此白之を左程までに思はるゝ、其方達の心の程、身共も嬉れしう存ずまする。》《アレ白之樣としたことが、御樣子のよい言ばかり、猶さら女が迷ひますぞヱ。》《サア御挨拶が濟みましたら、兎も角も御湯を召して、おとでゆる〳〵御酒宴を……》《それが宜しうござりましやう、そんなら妾が御案内を。》《アラ田面さん御待ち遊ばせ、妾がお連れ申すのでムります。》《これはしたり汀さん、貴孃は辨天樣から此處まで、御手を取て入らつしつたから、もうよいではございませんか。今度は妾に、お貸し遊ばせ!》《イヱ小簑さんは御酒宴の御用意を遊ばせ！御湯の番は此の苗代。》《イヤ〳〵此の越路がお流しを……》ト白之一人を引張り章魚、左右から吸ひ付く暑苦しさ。其上兩方の腕を、あちこちと取り合ふに、白之も迷惑顏、《コレサ〳〵其樣におすつては、私の腕が折れます。何方でもよ

ろしうございますから、速くお連れなすつて！……》《ソレ御覽遊ばせ、白之樣の御手が折れたら、皆さん如何なさいます……。だから妾にお任し遊ばせ！》《イエ妾に！》《それでは彼樣願ひましよう、何方々々とお名をさしては、却て依怙になりますから、玆は一番恨みつこ無しに、皆さんでお連れ下さいますやうに願ひ度いものですテ。》《なるほど是はよい思ひつき、それでは皆さん御一所に。》《然し誰ぞ御酒宴の用意に、殘るものが無くてはありますまい。》《ほんに左樣でございます、それでは小簑さんと汀さんだけ、殘つて頂く事に致しましよう。其代りに御酒宴の時は白之樣の御傍に置いて上げます程に。》《サ、それがよろしうございます。それでは汀さん小簑さん、御風呂の御供は妾達に、御任しなされて下さりませ！》ト漸く兩人に納得させ、あとは白之一人を、淺瀨、越路、田面、松か枝、糸柳、苗代の六人して前後を護衛し、やがて湯殿へ連れて來た。

湯殿――流しは一面大理石、雪の樣に敷きつめ、まはりの白壁と照らし合ひ、湯船は檜材の節無し、まだ香氣のプン／＼する奴で、角々に銀鋲あざやかに、銀圏のはまつた小桶、二ッ三ッ其邊にならんで居る。すべて其の結構、平常行く錢湯とは、烏と鷺ほどの差異に、白之もどうやら氣がをくれた。

《白之樣御衣服を御取りあそばせ！》ト淺瀨が前へ廻はつて帶を取れば、越路は後から衣服をぬがせ、肌着をぬがせ、下帶まで自分には取らせぬに、白之も極まり惡く、モヂ／＼して居たが。漸くにして裸體にあり、流しへ下りれば、はや糸柳が湯船の蓋を取つて、中の加減を見、ちやんと小桶に湯まで斟である

に。白之は此で五體を濕めし、此時はじめて吾が手足を見れば、何時の間にやら色白く成て、理膩細に肉着き丁度よく、脛の毛も多からず少からず、象牙細工にも見た事の無いほどの奇麗さに、吾身ながら驚き。此分では背中の痣は愚か、內股の黑子も消えたであらう。顏ばかりと思ひの外、五體中此樣に奇麗にして下された、辨天樣は有難い方と、叉た心の中で御禮を云ひながら、一風呂溫まつて出ると。兼て用意の女共、緋鹿子の襷がけに、小褄甲斐〳〵しくからげて、大根の樣な脚を現はし、六人とも流しに下り立ち、各々手拭一ッ宛持て、白之の四面を取りまき、手は誰、足は誰、背は誰、胸は誰と、持ち場を極めて洗ひはじめるに、白之は其儘溶解さうな心持ち。《まアほんとに白之樣の御躰の奇麗なこと。》《殿方のくせに憎らしい程理が濃くて。》ト賞めながら頻りに磨いて居るうち。淺瀬は白之の二の腕に、紫色の痣を見付け出し。《オヤこれは郎君どう遊ばしたので厶ります。……誰ぞつねりましたか。》《エ、それは、先刻汀さんに……此處へ來る途中でつねられたんで……。》《汀さんがつねりましたか。アノ汀さんが？……なんと越路さん、ほんに非道い方ではござんせぬか。》《さればいナ、妾達に斷りなしで、自分ばかり一番さきに、こんな事をなさるとは……。よろしい、妾も汀さんにまけぬやうに。》ト越路は悔しさうに白之の內股をつねつた。《ア痛た！》《それでは妾も……。》ト淺瀬が脇腹を一ひねり。《ア痛た！》《痛〳〵ても我慢遊ばすのが、丈夫でございますよ。》ト苗代が叉。《なんぼ丈夫でも、さう皆さんにやられちや。……もそつと御手軟かに！》《殿方の癖に、そんな野暮をおつしやるものではございません

よ。』ト糸柳が又一ッ。『野暮でもなんでも斯う痛くつては……。』田面と松枝は二人一度につねりながら、『郎君は殿方にも似合ぬ弱い言を。』『貴孃方は姫御前にも似合ぬ手荒な事を。……もうよい加減に免して下さい。』『これで一順まはりましたから、まづ御勘辨申しましやう。』『ヤレ〳〵こんなに赤くなりました。』ト少し涙組みながらも、自惚れの鼻ハ却て高く、これも畢竟吾が可愛いから。――色男はつねられねばならぬものだト、覺悟をしては腹も立てず、却て心中ニコ〳〵物。

其中に湯からあがると、それ〳〵躰をおふき申せと、前の樣に前後左右から取り卷いて、五體中をふき。又大きな團扇を持て來て、大の男を鮓米扱ひ。それから髪をちやんとかきあげて、香水を目鼻にしみるほどふり掛け。まづは見事に磨きあげた色男一匹、紺地に白鷺をそめ拔いた浴衣に包んで、其のまはりを八人が護衞し、廻廊傳ひに廣間をさして靜々と練つて行く樣、平相國の男の好いのか、光る源氏と云へば其まゝ。

廣間へ來て設けの席へつけば、待ち焦れたる小簑と汀、白之の左右へ侍べつて、靜かに煽ぐ團扇の風に、香袋の薰をませて、夏と云ふことを忘れさせて居る内。やがて膳が出る銚子が出る。入れかはり立代り運ぶほどに、間もなく山海の珍味眼前に岡を築いて、見たばかりでも腹が朽くなりさうな。『サア、どうぞお一ッ!』ト汀が酌に白之は盃を取りあげ、一口飲んで下へ置くと。例の淺瀨膝を進めて、『そのお盃を頂戴致しましやう。』オッと合點と飲みほして、盃洗で洗らはうとすると。『アラ白之樣……どうぞ其

儘下さいまし！》《それでは失禮ですが。》《淺瀨さんばかり御指し遊ばさずと、ちつと妾にも頂戴な！》越路が橫合からイヤミを云へば。《イエ、只今わげます處で。》《越路さん浦山しいこと！》《苗代さん今わげますから待て下さい！》《どうぞ松が枝にも下さいましな！》《どうせ妾共には廻りますまいけれども。》ト四方八面から疊みかけられ、一々是に逆ふまいと、飲では指し飲では指しする程に、酒は腹の中を縱橫に踏み蹂つて、はや正體は半分ほど失り、眼の緣櫻色に染まつて、大分御機嫌に成つて來た。《あり難い實に今日は嬉れしいよ。圖らずもかうやつて諸令孃の前で、親しくお話しをすると云ふのは何たる幸福。實に嬉れしい、白之臍の緒切て初めての愉快だ。》《さうおつしやつて下されば、誠に妾共も嬉れしうございますけれども。こんな不束者斗り居ります處で、お酒なんぞ召上ても、ちつとも面白く無からうかと、却て御氣の毒に存じます。》《是はしたり松か枝さん。こんな不束者とは、それは抑も何方の事……僕には一向合點が參らぬ。こんな奇麗なそして程のよい孃さん方の前で、から云ふ御馳走に成て、それで面白くないなどゝ云ふ奴が、何處に居ます。樂みは後に柱前に酒、左右に女懷中に金ト、ちやんと昔時から定義がきまつて居る。――ツレ後にはこの床柱、前には酒、左右にはツレこの樣な美人達。さて懷中に……金と云ふ處だが……併し是は無くなつてもいゝ。是にも昔時から、色男金と力は無かりけりと云ふ定義があるから、ナニ金などは持たぬ方が却て色男なんだ。イヤサ却て愉快なんだ……ト申す樣な次第の譯柄だから、實にこれほど愉極まり快極まり、面白極まる事はなからうと思ふ。實に有難い、ア、これと云ふも辨

天様のお蔭、南無辨財天女ムギヤ〱〱〱！》ト、又候辨天様の事を思ひ出してハ、両手をあはして拜み初めると。女共ハ其由來を知らぬから、是ハ自分達を馬鹿にすることゝ思ひ、《アラ白之様の御様子のよい言ばつかり。》《妾共を辨天様だつて……。ハイどうせ三平二滿でございますとも。ほんとに憎らしいお口だよ、小簑さんお手近で一ッつねつて上げて頂だい！》《チットつねるのはもう眞平！》ト逃げかゝるを、さうはさせじと大勢が、寄つてたかつて取て押へ、つねり掛るに白之ハ、今は自分も酔て居るから、もう素直につねらせす。身を様々にもがきながら、相手の誰彼嫌ひなく、つねり返したりくすぐつたりするに、女共も面白がつて、キヤツ〱と騒ぎ立てた。暑いのに御苦勞さまな。

酒を飲んで騒いだからたまらない、汗は流れて衣服を浸し、動氣ははづんで鼻息荒くなり、皆スー〱云つて苦しがつて、暫時ハ言葉も出なかつたが。其中に淺瀬は思ひ出した様に、《ほんに妾としたことが、すつかり忘れて居りましたなんと皆さん、から譯もなく騒いで居りましても、興が薄うございます故、白之様にいつもの舞蹈を、御覧に入れやうではございませんか！》《なるほどこれはよい思ひつき、そんなら早う支度して。》《此處は汀さんと小簑さんに御願ひ申し。》《それがよろしうございましやう。》ト一禮をして六人の女は、次へ支度をしに行た。あとは小簑と汀ばかり、白之の左右に附添、ひ何やら串戯を云ひ合て居たが、白之も大分酔がまはつて、居住もくづれかゝるに。汀ハ見兼ねて、《白之様、妾の膝でよろしければ……どうぞお枕に遊ばして！》《有難い拜借してもよろしいか？》《アラ妾のでは御氣に入

りませんか！》《そんなら小簑さんのを借りましやう。》《アラひどい、折角妾がかうして侍て居りますのに。》《妾の方が先口でございますよ。》《イヤこれは驚いたヂ、こちら立ればあちらが立たずト、云つて私の首を二に割る譯にも參らず。……そんならよろしい、かう仕やう。》ト小簑と汀を兩方から、ズッと寄せて二ッの膝をならべさせ、其眞中を枕にしてコロリと横に成り、二人の顏を下から見上げながら、《これではどうだ？》《ハア結搆！》《ほんとに郎君は粹な方ヂ。》

云ふてニッコリ笑ひながら、また團扇で煽いでくれるに、白之はさも嬉しさうに、小簑の手を握つたり、小簑の脇の下をくすぐつたりして、更に餘念も無い處へ。はや支度も出來たと見へて、以前の女共は靜々と正面へあらはれ、越路と淺瀬が地方に成て、糸柳、松か枝、田面、苗代の四人が、粧を凝らし媚を呈して、何やら舞ひ初めたが、醉眼已に朦朧として、何を歌ふか何を舞ふかわからず。白之には只大きな蝶々が四疋ヒラ〳〵、何處かで鶯の聲かして……

白之は美人の膝を枕にして、此の舞踏を見ながらも、つら〳〵思ひめぐらす樣。――さても吾辨財天女に信心せし甲斐あつて、斯く天下一の好男子、樣子のよい方すいたらしい方にあつて、端なく此の雪御殿に遊ぶ譯に成たが。抑も是が初陣で、將來天下幾百萬の婦人を籠絡し、美の美粹の粹たる處を發揮する、是が第一着の運動だ。然し果して是が紀白之の第一着の運動として、將來の運氣をもトすべく價値してあるか、是大いに考ふべき處である。――なるほど此雪御殿の八美人、いづれも十分吾に戀着し切て居り、

又吾も彼等八人に對して、相當の手管を施して、隨分彼等を嬉しがらせ、彼等の歡心を得ては居るか。是そも果して色男の本分であらうか。思ふにさうでは無いらしい。寶玉に黛玉と云ふ情婦あれば、源氏に紫と云ふ戀女房あり。其他丹次郎に仇吉あり、金五郎に小さんあつて、凡そ昔時より色男とし云はるゝもの、又必しも其相手として、定まつた情婦があつたは、蓋し爭ふ可らさる事實だ。梅に鶯松に鶴、牡丹に唐獅子、竹に虎。非情の草木にして已に此の如し、況や人間に於ておや。必ず其情を專にして、そんぞ命も金もなんにも入らなく、唯もう此人ならではと、共に誓ふ處の者が無くては、人間何處に樂みがあらうぞ。唯矢鱈に女にチヤホヤされ、そしてまた其女の機嫌を損ねまいと、ヤキモキ氣を揉み心を配る、それでは體のよい幇間同然、苟も今日色男たるものゝ、作すべき事にあらず。と斯う悟つて見れは、吾ながら愚の極痴の至り、まだ〳〵修行が足らぬ〳〵。然し此處へ氣が付いたを幸ひ、さしづめ此の八人の中から、此の白之の情を專にすべき、白之の情婦として耻かしからぬ者を、一人撰み出さんではならぬが。まづ斯う見た處で、さて誰と一人拔んでたものもないて。……糸柳の細面もよいが、田面の丸顏も憎くあく。汀の目元の涼しさは他に無いか、淺瀨の口元の可愛らしい處、又捨て難い風情がある。小簑は下ぶくれだが顏に愛嬌が破裂しさうにあり、松か枝はちと愁ひ顏だが、また云ふに云はれぬ可憐な所かある。越路は色が滅法白く、苗代は理か無暗に濃かくて。形こそちがへ、容貌はいづれ劣らず勝らず、また其心根の情らしい處は、誰も彼も一樣で、微塵も其間に差別が無い。いづれもいづれ、似たりや似た

り花菖蒲。頼政が目移りも、萬更の初心とあざけるは野暮。此白之ですら此の驗査にはちよいと迷ふから……と白之は心の中で、人知れず工夫を凝らして居たが。やがて一策を案じ出し、舞踏の濟むのを待ちかねて、突然座敷の眞中へ飛び出し。《サアサこれから目隠しをしやう、皆總立ち〳〵！》ト號令をかければ。皆々心得取り、散けた膳部を片付けて席を廣くし、總立ちに成て白之のそばへ來り、ジャン拳で鬼を極めやうとするのを。白之は押し止め、私が最初に鬼になるからと、手拭取て手速く自分の目を隠した。……これで運を天にまかし、一番最初に捕へたものを、まづ自分の情婦にする白之の了簡。《サよろしいかつかまへるよ。》《白さん此方、手の鳴る方へ！》ト飛んだ忠臣藏の十段目。白之は一生懸命、よろめく足を踏みしめ〳〵、右左と追ひまはしても、袖にさはつたり帶に觸れたりするはかりで、誰もつかまらず……。其中に誰とは知らず、突然白之の側へよつて、唇へ血の出るほど吸ひつくに、〆めたと其者を確と捕へ、片手で手速く手拭を取て見れば……南無三！

辨天の池の眞中に、泥水の中から半身をあらはし、以前のまゝの紀白之。唇に吸付た蛭つかみ捨てゝ、恨めしさうに見上る岸の柳に、眞白な鷺八羽。中の一羽がスーッと舞ひ下つて、白之の腦天へ一嘴。……なんとこたへたか頂門の一針！

◉ 梢の月

《お歸り！》

ト云ふ聲表の方に聞えて、車の音玄關に止まれば、主人兼良敷臺に下り立ち、出迎ひに出でし下女尻目に懸て、《お愛ハ居るか。》《奥樣はまだ御歸りになりません。》《また會堂か……………》熟柿臭い意氣跡に殘して、奥の間へ通れば。此處には母のヽ鳥が、洋燈の下に只一人、新聞眺めつゝありしが。兼良の歸りしを見て、《今お歸りか。》《ハイ只今……》《そとハ寒からうネ。》《ハイ……。お愛ハまだ歸らんそうですネ。》《ハア今夜ハ祈禱會だとか云つて、今しがた出て行ました。……大層お前顏色が惡いが、どうかおしかへ？》《ハイ……イ、エ別に。》《また寒さに當てられたのではないか、早く寐てはどうだネ。》《どうも寐られません。》《ナニ寐られない？それハ又どう云ふ譯で？》《おッ母さま、私ハ實にとんだ事を聞て參ました。》《何處で、どんな事を？》《實は先日から薄々耳に這入つては居りますが、申上れはあなたに御心配を懸るばかりと、今日まで默つて居りましたが……》《オ、それはアノお愛の、不仕陀落の事であらうネ？》《よく御存ジで。そんならお母さまも矢張り？》《とうから聞いては居ましたが、妾もお前に苦勞を懸まいと、……それに噂ばかりで、たしかな事もわからぬ故、實は口へも出さなんだが……》《それでハ今更隱す事もございませんが、實ハ今日も席上で、その話か出ました時は、穴へも這入りたい心持で……これもみな私の目鏡違ひ、おッ母さまに面目がございません。》

さてもこの子細、委しく語らば斯く！
今田兼良、今は去る官省につかへて、官員錄に住所記さるゝ身なるが。金鈕に角帽子頂きし頃、交結びて親しかりける乙女に、島村愛子と云ふありけるを、卒業の後國元より母をむかへし折、母にも篤と話して、天下晴ての妻とぞなしける。此愛子生れ付いて温順に、心まめなる女なれば、姑との折合もよく、夫婦の中は極めてむつましかりしが。半年ほど以前より、近所の妻君に導かれて、最寄の教會へ通ふ事となり。はじめの程はどうやら妙なものよと、薄氣味惡氣に思ひ居たるも、沃土に蒔し種なりけん、鳥も啄ます茨も妨げす、次第に聖靈の驗力現はれて、何日の程よりか眞の信者となり、閑さへあれば聖書を開らきて、教の道を研究なし。折ふしは姑良人に說き勸むれども、姑は元よりむかし氣質、切支丹は魔法なりと、幼き頃より覺へし事の去り難くや、万更の頑固にハあらねど、わたしには阿彌陀樣が付てござると、一向に念佛三昧。嫁の此頃の教會通ひを、あらずもがなと心にはおもへど、元より優しき老人なれば、表にそれとは現はさす。さしたる不都合の出で來ぬをまだしもの仕合と、思ひ居るこそうたてけれ。また良人兼良は、學問の淺からぬだけ、宗教心は起りがたく。基督教も佛教も、歸する所は皆一ッ、世間に惡物の殖ねぬやう、甘い工合に懲しておき、つまらぬ苦勞を求めぬやう、よい程に諦めさせる、いはゞ小供だましのやうなもの。神經質の者か、女性にハ功德もあらうが、男らしい者の信じられた義理でないと、自分から極めて聖書一枚讀んだ事なく、モーゼはアラビヤの豫言者、イ

エスはユダヤの聖人と、萬國史にて知れるのみ、總して宗敎には冷淡なるかはり、又攻擊も試みず。たま〳〵愛子が聖書を進めても、二三行讀んで、ウン中々よい事が書いてある位のもの。日曜日に敎會へ出るよりは、芝居へ行た方か結句放樂と、更に取り合はねば、それを一ッの苦勞にして、愛子が祈禱の度每に、まづ此事を神に訴へぬ。さればとて又不德義な事はせす、尋常の人よりみれば、學もあり才もあり、世の交際さへ巧みにて、上下共に受けのよき、あつぱれ一個の紳士なれば、吾から進んで敎に入り、身の道德を固めんと、思ふ念の起り兼ぬるも、あなかちに無理ならず。總てさる程に愛子か信仰は、日に月に堅うなりて、此頃は信者の中にても、指ををられる程とはなりぬ。女は心淺墓なれは、少しばかりのもの知りたるも、そを誇りたがるか常なり。謙遜を旨とする基督信者か中にも、折ふしは斯樣な婦人ありて、妾は敎を聞そめてより、更に罪を犯せし事なし、妾は安息日に敎會に出てぬ事なし、妾は幾人道を傳へたり、妾は神の爲なられ、財も惜ます擲つべしなと、只管に云ひふらして、吾は斯くまて信仰深き者ぞと、人に知られん事をつとむ、此等は所謂僞善者の、己か前に笳をふかして、施濟をなすものゝ如し。イエスもこれを誡め給ひぬ。自から立てりと思ふものは、傾むかざるやうつとむへきものにこそ。さるに彼の愛子は、まだ年若き身なから、心素直なる質なれば、更に右の如きことなく、眞の愛もて人と交はり、口數用ひず行狀もて、神の榮を彰はすなんど、まことに稀なる信者なれは、かくてこそ世の鹽なれと、牧師傳道師も又なき者に思ひ、先頃より愛子をば、婦人會の執事に推選し

て、萬の事相談なすに、愛子も神の爲なれは、更に骨を惜しむ事なく、心の限り働らきけり。神の子なるイエスすら、謀反人といふ汚名を受けぬ。ましてや不完全なる人間の、行爲いかばかり正しければとて、誤失多き浮世の常、思ひ設けぬ噂をうけて、あらぬ濡衣きせらるゝ事あり。此頃誰か云ふとなく、愛子は敎會の傳道師吉元と云へる人と、――基督信者にあらう事か、――道ならぬ契りをなせしと、怪しかる噂芽出しぬ。敎會の仲間には、さすがに信ずるものもなきやうなれと、下樣なる出入の者、下女車夫なぞが口善悪なく、陰にまはりて云ひ合ふにぞ、悪事は千里の駒より速く、いつしか兼良か耳にも入りしが。元より兼良と愛子とは、互ひに相思ひし仲なる上、連添ふてからもはや一年あまり、心の程はよく知りたれは、何ぞの間違ひとは思ふ物から、疑ひなき人とてはなく、ましてや愛には疑ひの伴ふものなれは、兼良か心の中にも、もしやと思ふ念も起りぬ。此一念起り來ては、此頃の愛子の振舞、どうやら心におちかね、疑かへば連夜の祈禱會もあてにはならず、相談會もいぶかしきとなり、斯くては捨おくべきにあらずと、ある時は眦も逆立てど。さて面と對つては、罪の無い顔に心も折れ、信切な待遇に氣も後れて、かりそめにも疑ひしこと、今更勿體なくなり、心の中に詫言もをかし。風聞聽けは實らしく、樣子を見れは虚らしく、今は兼良か心も、彼是二ッにさまよふて、吾なから定めかねしか、今夜計らずもさる酒樓にて、友人か洋行の送別會ありし、その席上にて親しき某か、眞面目になりての忠告だて。君は知るまいかとの枕を置て、仔細は斯樣云々と、一々胸を突く事のみ。町内

で知らぬは亭主ばかりなどゝ、はては冷かされる無念さつらさ。こゝに疑ひも實となりては、罪のない顏も信切な待遇も、むざ／＼人を誑らかすかと、一入憎らしさは増す斗り。常は沈着なる性質なれど、もはや我慢はならず、やけ酒ひつかけて家に歸れば、愛子は今宵も留守。これさへ怒りを増さしむれば、自然と色にあらはれしを、母に見咎められて包むによしなく、仔細をわかせば母も同様、此頃の嫁の不仕陀落、きつう案して居りました、これもわたしか屆かぬ故と、はや涙浮ますれば。かゝる時にも親は親。惡業をした嫁よりは、神聖な聖書恨めしく、イエス憎らしと思ふ心、勿體なきことながら、慈愛は溢れて有難し。

兼良暫時思案にくれしが、やゝあつてキッとなり、《よろしうございます。今にも歸りましたなら私がきつと……》《イヽエそれは惡い、よして下さい！それよりはとつくりと、妾から云ひ聞かして、直るとなら今の中に、改心させて去まひましやう。あれも元より馬鹿ではなし、若氣の誤りで出來たこと故、自分て惡いとさとつたなら、又元のよい嫁にならうから。》《イヤあんな性根の腐つた奴が……》《サさう荒立てはよくないから、今の處は妾におまかせ！そしてお前は何處までも、知らぬ風にして居るかよい！》《それに致してもあの評判……私の顏を汚した者を、妻にしておく氣はございません。アヽ今更思へばみな私か誤り、阿母さまに迄飛んだ御心配を……》《それを今から云ふても及はん。實にあのよい嫁か、こんな事を仕出すとは、これが世に云ふ魔がさしたのであらう。それにお前は一端顏を汚した者を、もはや

女房にはされぬと、名譽を思ふ心から、その言葉ハ道理だが、人の噂も七十五日と、諺にも云ふ通り、直きに噂は消えやうから、そんなことを苦にするにも及ぶまい。》《そんなら阿母さまに、何もかもおまかせ申ますから……》《ハア〳〵、マア安心してお居で！》《それに付けてももう歸りさうなものですか、何をグヅ〳〵して……》《歸つて來たら今夜にも云ひ聞かしてやりますが、お前が居てハ間が惡からう。》《左樣なら私ハ、御免蒙つて御先へ臥せりましやう。》《さうしてお呉れ！》《さやうならば……》

言葉殘して椽に出で、急ぎ足に己のか寐間に入れは。付添ひし下女の某、小聲になりて、《旦那樣！》《なんだ？》《アノ只今妾か赤坂までお使に參りました途中、山王樣の下を通りますと……》益々聲を低うして、《アノ御新造樣と男の方と、たしかに山の上の方へ…》《ナニお愛が？ほんとか？》《ハイ今がた。》《ヨシ。》

兼良は下女の注心に、怒氣再び逆上りし上、加へて充分の酒氣もあれば、前後を考ふるに暇あらず、下女を次へ追ひやりし後、押入の中に納めたる、備前物の二尺一寸、袋のまゝ取出して、地震口より庭前へ飛び下り、程遠からぬ山王へ、踵を空に走り行きぬ。

冬の夜はまだ宵ながら物凄く、茶店に燈の影見えねば、社殿に鈴の音もなく。梢をならす木枯、落葉を

ちらす夜の風、折ふし肝を冷させて、肌に粟を生ぜしむ。兼良は息つぎあへず、裏手の坂より走り登り、其處か此處かと尋ねめぐれば、あやしや彼方の小山の上に、ほのかに聞ゆる人の聲。耳を側れば一人ならず、しかも正しく男と女。さてこそ不義ものござんなれと、露にすべる足ふみしめ、枯たる草の根にすがりて、漸く邊り近く進みよれば、しかと聞ゆる話し聲、（……さうおつしやいますけれども、元より妾とても潔白な身の上、此世の人には彼是云はれても、天に居ます神様の前には、露恥つることはございませんつもり。……然し此世にある限りは、どこまでも御榮を現はしたく、それはかり始終心に掛けて居りますに、どうした間違か貴君と妾、……つまらぬ浮名をたてられまして、今では教會の人までも、妙な考を持やうになり、此分で參つたなら、仕舞にはほんとうの罪人にされて……）（サさうです。神様の前さへ正しければ、此世の事はどうあらうと、かまはんものでは決してないので。此世にある限りは、やはり此世に賞められるやう、神の榮へを現はすやうにするのが、吾々の務めであるのですから、私共は何處までも、この濡衣を晴さなければなりません。……これと云ふのも此間から、傳道上の相談で、あなたか度々私の家へ入らつしたり、又此頃は連夜祈禱會で、毎晩お宅をおあけなすつたから、つまりあのやうな馬鹿なとを、云はれるやうになつたのでしやう。實に好事門を出でずで、よい事は目に立ちませんが、惡い評判はよろこんで仕たがる世の人情、實に悲しい譯です。然しかうやつてあんまり永くなると、またお宅に惡うございましやうから、早く祈禱を致して、歸ることに致しま

しやう。これからは夜分などは、あんまりお出にならぬがよろしい。お若い方に種々な事をお願ひ申たのか、私共の誤りですから、私から牧師に話して、これらは他の方にお願ひ申すことに致しましやう。》《さう願はれますとなら……妾も教會の爲に、充分働きたうはございますか、先程も申ました通り、何分良人はまだ信者てございませず、母もまた教を知らぬものてございますから、どうも心を許して呉れませず、思ふ樣に働らくことのできませんのが、いかにも殘念でございます。どうか此事を貴君からも、よくお祈り遊ばして……》《ハイそれはおつしやるまでもなく、何日も祈つて居る處てこさいます。左樣なら晩くならぬ中、はやくお祈りなさい！》《どうか貴君から！》《さうおつしやらすに！》《そんなら御一所に默禱致しましやう。》

二人は腰掛け居たる株をはなれ、左右に別れて首を垂れ、眼を閉ちて口の中には、祈念をこらす祈りの數々。身は異なれとも心は一ッ、此頃うけし二人か濡衣を、晴らすよしなく今宵しも、約して共に此に會し、神に訴へて助けを乞ふ、これ偏に教のため。譯知らぬ人をつまづかせじと、思ふ心の眞實のみ。「我れ」ト云ふ事その間になし。夜風も今は定まれば、心もすみて更に淸く、眞心こめし祈禱には、なぞて耳を傾けさらん、天に在す吾等の神！

祈しはてゝ眼を開らけば、思ひ設けす一人の男、矢庭に木蔭より躍り出て、驚きためらふ二人か前へ、持たる刀をカラリと投げすて、女の手をジッと取て、《お愛許してくれ！》《オヤあなたは！》

折しも木枯し雲を拂ふて、再び清みけり梢上の月！

◉ あの聲で
蜥蜴食かよ

山時鳥

人は見かけによらぬ心
寫眞にもこれは取れまい

金高蒔繪の重箱も、中實が蒜では此奴鼻摘物だ。親友何某此頃思立て亞米利加へ洋行、付ては是ッ非君の寫眞をと、所望されて嫌もならす。こんな顔寫眞に取らすも、隨分づう〳〵しい業とはおもふが、さうでもない、亞米利加には又どんな好奇なレディがあつて、なんぞ此の鼻の低い男にと、不了簡起さぬものでもあるまいト、吾と腹の中で冗談云ひながら、俄に剃刀合して鼻の下を清め、十二時頃の光線が丁度よからうと、時刻をはかつて遠くもない、馴染の寫眞師まで車を走らした。《まづ此方へ》ト内弟子の案内につれて、這入たは待合の一室、眞中にテーブル置いて、上には見本五六冊。あけたのもあり閉ぢたのもあり。やがて汲て來た茶を呑みほし、椅子に腰かけて正面にある姿見に對ひ、まがつた襟飾を直すうち、表に車の止まる音がして、ドヤ〳〵上つて來たは三人の女連、廿三四の腰元に四十前後の老女、まん中は本尊樣、これが大したもので、年は十九か……廿才。御衣裳なら御容貌なら、正に令付の御夫人、花付の嫁御前。日本服の裳さばきしとやかに、這入て來る鹽梅、……其時身中から後光でもさ

すやうに、確と見ることはどうも出來なんだ。

今此美人は部屋の中へ這入て來たが、直ぐに椅子にも掛けず、暫時ためらつて居た後。吾とはずつと離れた椅子へ漸く座をしめた。そしてその間に、二人の女が陣取つて、時々吾に目を配る用心の堅固さ！《御新造樣何云ふ風がよろしうございませう？》老女は取なしがほに見本を開いて見せた。《矢張り御半身に遊ばせ！》腰元は首さしのべて嘴を入れた。《さうさネー。》わづかに初音をもらした。三人が一處に鬠をあつめて、餘念なく見て居るのを、此處ぞと此方から仔細に觀察するに。――まづ頭はチト大形の丸鬠に、緋の鬼絞りの手柄、琥珀色の鼈甲の笄に、金脚の五分玉。水が滴りさうな鬢工合よくふくらみ、畵にかいたやうな生へ際に、地藏眉毛も故意でなく。眼は細いながら何處やら凛として涼しく。鼻格好よくきざまれて、口可愛らしく綻び。フックリと二重頤、まッ白な首筋に、撫で肩のしほらしさト、念入れてみるほど、美しい處段々現はれて、微塵朱の打處ない美人。これほどの美人前に据ゑて、正むきにしたり横むけたり、片時たりとも自由にする、寫眞師は果報者、此商賣羨ましや。それより第一に羨ましい、此人の所夫。いかなる善根に由て、どんな日の下に生れたか、思へば面憎く妬ましく、決闘でも申込みたい。それに付けてもまゝならぬ浮世、總して駿馬は伯樂に逢はず、美人は醜男と連れ添ひ易いもの。もしや此人の所夫と云ふは、髯むしやの隼人でないか、大藥鑵の阿爺でないか。そんならばなほ面憎し。浮世自由になるなら、一日たりともその男になり代ッて見たい。あ

の軟かな手で我が後から、羽織させ掛けてくれたなら、どんな寒い日にも風邪ハ引くまいにト、相好くづして更に正體ない處へ。又候内弟子が出て來て、《どうぞ彼方へ！》《ハア。》返事の調子此時妙であッたかも知れぬ。やがて二階へ上り、暫時窮屈な思いをして用もすまし、また以前の待合室へ歸つて見ると。何やら知らず先刻の老女か、内弟子を捕へて談判。《それでハ賣て頂けますか。》《ヘイお賣申しましてもよろしいさうで……》《御新造様賣れますそうで……何枚買ひましやう二枚づゝでよろしうございますか。》《ハア。》吾に憚ッてか返事さへそこ〳〵。《それではあとで御一所に拂ひますから。》云ひ殘して三人ハ二階へ上ッて行た。あとに吾一人、ハンケチに鼻打ちかんで、匂ひ袋の殘り香聞て居る所へ。例の内弟子が出て來た故、何日までに何枚と注文聞かせ、拂も濟してさてその序に、《今のハ何處の奥さんだ？知らんか！》《初めてゞすから知りません。》《さうして今一體何を買てたのだ？》《あれですか……驚たものです。》《どんなものか、磐梯山の寫眞か。》《イヽエ。》《ぢやア此間あッた佛蘭西の寫眞帖か。》《どうしてそんなものなら驚きはしません。》《それぢやアどんな物だ？》《矢張り寫眞で。》《寫眞……誰の？》《只今御覽に入れます……これで！》手近の見本一冊取て操て居たが、やがて指で敎へて、《これと此の二枚です。》《どれ……アッ。》なるほど驚た。何と思召す？——正に是一枚ハ音羽屋菊五郎、今一枚ハ成駒屋福助。いづれも中版の

素顏。《これをあの……》《へイ奥樣か買いたいとおッしやるので。》《人ハ見かけに……。》叱ッ下りて來る音、今度見た時は、菩薩の面に變りハないが、もう嫌で〳〵、人が居らずハ唾はきかけて遣りたく。――今と成てハ所夫不憫、先刻羨むだも漣一生の過失、吾と額を打て――馬鹿め〳〵！

◉京自慢

（一）京の藝妓の穴探し

あら好かんワ

吾妻男に京女と、往古より相場極まりて、京の名物數ある中に、まづ第一は是なりと、日本六十餘州の人々、皆見ぬ戀に咽喉を鳴らせど、京の中なる京の粹、女の中の女なる、藝妓にはちと中分あり。まづ第一に、其身藝妓の名ありながら、容色を先にして藝を後にし。座を持つ道に疎くして、却つて客に遊ばせて貰ひ。座敷に出れば其儘に、ズッと客の側へ通りて、お盃をと所望すること、東京ならば小格子の、女郎ならではせぬ事なり。元より座付きの祝儀無ければ、初見の客の照れるも搆はず。やゝともすれば帶の間より、用意の眉刷毛鏡など取り出して、顏の修覆の忙がしさ、成る程猫とはよく付けた名なり。三味を所望する人を、モッサリと云ふて嫌へば、唄ひ囃すを喜ぶ者を、お上りさんと云ひて輕蔑む。されば大方は三味を携へず、用ある時は妹藝妓に借るか、手を鳴らして茶屋の稽古三味線を取り寄せ、

地歌の駒の掛りたるまゝ、撥も用ひず爪弾に、情歌甚句を掻き鳴らすこと、東京の場末にも見られぬ圖なり。坐つたら立つことを嫌ひ、酌も碌々すればこそ、自己が用すら仲居頼み。其癖無心はよく云ひて、芝居見物遠出の遊山、果は衣服、櫛、簪。朔日ぢやと云ふては箱を入れさせ、紋日の度に約束の書入れ、客の迷惑は一切思はず。殊に人前も憚からで、昨夕の坐敷の噂から、新規の客の惚話やら。此間はあれほど心配したに、なんで貴女はお逃げたと、茶屋の仲居に尋ねられて、あの時は誠に濟みまへなんだが、ほんまに不淨があつた故と、何やら譯は解らねど、何うやら汚はしさうな事を、隱語も用ひずに云ふは、あんまり聞き好きものでなし。中にも分きて面憎さは、名有る舞妓の容態面。裸にすれば出來合の代物を、紅い物白い物のお蔭と知らで、作り付の人形の如く、言葉かけても碌に挨拶せず、ツンと取り濟ました處は好けれど。次第に座の崩るゝにつれて、段々と正體を現はし、仲居が取り分けるを待ち兼て、鉢に盛りたる鮓の撰り好み、妾海苔は否やワとの御託宣。これぞ初めは處女の如く、終は餓虎の如しとや云はまし。水揚と云ふては古物を喰はせ、其都度に大枚の枕金、之も出す馬鹿がある故なれど、思へば〳〵勿體無し。手切れの金をマツと云ひて、之にも大分の腹を痛めさせ。多年勤を引かされて、身一個に家藏まで注ぎ込ませながら、いざマツの聲掛るが最期、後足にて砂を蹴上げ、再び元の泥水に飛び込み、明日とも云はで其日より、又河竹の浮き商賣。其所業の面當がましさ、亭主の逮夜に入夫するにも似て、假にも義理を知る者の、出來た話にあらざるなり。まだ此他の欠點を算ふれば、濱の

眞砂のそれならで、鴨の河原の石の數、大八車で運ぶとも盡きまい。誠に外面菩薩の如く、内心夜叉に似たりとは、京の藝妓の事なりと、力味返りて罵しるは、云はでも知るゝ關東べい。——イヤサ東京のお客人、それはちと口が過ぎやう、成る程東京の藝者とやらは、口も八町手も八町、座の取り持ちは巧しと聞けど、藝に於ては憚りながら、京の藝妓に遠く及ばず。ましてダラリと下げたる帶、其自墮落を表に現はし。雛妓とやらが短き裙も、京の舞妓に較ぶる時は、孔雀の傍なる雞は物かは。ツレ御銚子ぢやお酌ぢやと、目まぐるしく立働くこと、此方で云へばおちよぼの役、あれに半助の祝儀とは、さて〳〵東京にも馬鹿は多し。又其方は京の藝妓を、藝が無いと罵れども、是一を知て二を知らぬ、井の蛙の言葉と云ふもの。知らずや彼の祇園町には、女紅塲と云ひ歌舞練塲と云ひ、それ〳〵立派に設けありて、常に藝妓の本分なる、遊藝の道は云ふに及ばず。讀書、裁縫、刺繡、押繪。さては茶の湯活花まで、女の手技の數を盡して、敎えずと云ふ事なければ、知らずと云ふ者も無し。されば春秋の大温習には、近くは大坂遠くは名古屋、其他近在近國の者共、態々見物に上り來るも、偏へに藝の德あらずや。殊に京のは舞にして、東京のは躍なれば、優美と高尙の點に於て、中々足下にも追付かず。さるに何ぞや藝無しとは、釋迦に向つて破戒を責め、孔子を文盲と罵ると等しく、言語に斷へたる向不見、何ぼ江戸ッ子は氣が強く、五月の鯉の口計りとて、無茶議論も物にこそよれ。これでも其方の腑に落ちずば、春の秋のと待たうより、さしづめ手近の祇園祭、あの練り物を見たがよい。十年振りで再興の催し、練妓は何

れも一粒撰。衣裝に千金を吝まぬが、所謂る京の着倒れたる處。東京では氣の毒ながら、夢の外には見られまい、之を拜んで肝潰すなイザ案内と立上れば。未だ關東の客人は、何やら云はんとせしかども、兎角見ぬ物は貶しもあらずと、口の中にて呟きつゝ、急かれるまゝに連れ立ちて、祇園町へぞ急ぎける。

(二) 處自慢の力瘤

あんぢや負けるものか

酒屋へ一里豆腐屋へ二里、三里四里の山路を越へねば、鍋釜一ッ買ふ事の出來ぬ、山家住ひの杣藏も、傾きかゝりし破屋を、親代々と大切がり、給事まで付く旅籠屋よりは、矢張りわが家の寢心が好いと、日暮れてから只一人、峠を越へて歸りを急ぎ。餘所の人に會ふ毎に、わしが在所はとの自慢話、側から見れば氣の知れぬ樣なれど、此處等が住めば都とて、何處やらに好い處のあればなるべし。況てや京は桓武以來、千年續きし帝都の老舖。王政復古のゴダクサまぎれに、株は關東に取られしかど、自然と殘る都風俗。三方山の竈屋敷と、誹らば誹れ其中に、御所もあれば御城もあり、神社佛閣名所舊跡、さては天然の美術より、人造工藝に至るまで、美の美を極め、粹の粹を聚めたる處、此地の他にあるべきや。されば京に住む程の人の、京を褒めぬ者なければ、京を誇らぬ人も無く。誠に身贔負處自慢は、なべての人の常なれど、京の人ほど甚しきは無しと、去る老人の云ひけんも、万更嘘にはあらざりけ

り。

玆に紙形屋税六とて、寺町通りに名代の分限者。信長時代よりの太物店は、今も曲まぬ大黒柱、七福神も此處を本陣にして、それ〳〵出稼するかと覺しく。奥藏には今も封の儘の千兩箱、山の如くに積み上げたりとは、夢の樣なる話なり。されども主人税六は、持て生れた吝嗇坊、轉んでも只は起きず、砂を拾ふてわが庭に敷き。貰ふものなら元日の葬式、其山菓子を取て置いて、一年中の客の饗應、さりとは京にも珍らしかるべし。慶應三年の神無月、此寺町に産湯を使ひしより、廿七年の春秋を、京の他に暮らした事無く。蒸滊船は畵にのみ見て、滊車は大坂と大津とへ、生てから五度乘つた切りと云ふ、世間見ずの事なれば、隨つておいどの穴も狹く、京都の外に町は無い樣に思ひて、大日本とは京の異名と心得、万事につけて京自慢。其上大の粋がりにて、年の中に二度か三度、町內の寄合の崩れに、茶屋の煖簾を潜るの他は。藝妓の酌の酒を呑まねば、世間並の旦那の如く、昵妓の半分も出來し事無けれど、寫眞やら新聞やらにて、其顏と名を覺え、誰は何うで彼は斯うと、十年も親交の樣な話振り。鋸の目立屋ならでも、人の齒を浮すこと、自然と其妙を得たりけるに、友人は云ふに及ばず、店の者まで面白がりて、煽動てゝは喜ばせ、貶しては腹立ゝせ、力は入らぬ口頭の胴揚げ、上げたり下げたりする程に、益々逆上あがりける。

此頃此家に滯留の客は、東京の本町通に、全ド物を商法にする、關東兵衞と云ふ男。先代よりの取引先

にて、緣こそ結ばね親類同樣、交際にも氣を張らず。此方の手代が東京へ行く時、何も東兵衞方にて賄へば。彼方の番頭が京へ來るに、必ず紙形屋に宿を取ると極めて、差引雙方損德無し、其處に商人の拔け目あらうか。

此度は東兵衞、用事を兼ての京見物に、初めての京入りなれど、兼て親父の話やら、番頭の噂にて、京の風俗も大畧知れば、褒める事の無きにあらねど、また貶す物も少からぬに。稅六も亦負けぬ氣者、平常手代が東京土產に、惡口混せて語りし事ども、見て來た樣に罵り返へして、日々爭論の斷間も無かりしが、不圖藝妓の比較より、又たもや雙方衝突して、甲論乙駁果てしも見えぬに。兎角は今宵の練り物を見せて、東兵衞の鼻を明かしくれんと、先には丁稚の見物に行くを、入らぬ事ぢやと叱りし口で、今は稅六吾より誘ひ出し、日頃の吝嗇に似もやらず、冗費も何も忘るゝ事、此處等が京自慢の極點、其京は狂にして、正氣の沙汰とも見えざりけり。

(三)　十年振りの練物の賑

まアえらい人わいノ

練り物や顏から落る紅の露、袖女が秀句も道理や、日の本なれば照りもする、旱續きの此暑さ。今年は分けて嚴敷に、一入御苦勞に存ずれど、之も身の爲め土地の爲め、氏神樣の御爲めと、更に厭はぬ練妓共。名に負ふ鴨川の水に曝らせし、河東屈指の優物に、丹靑を凝らし綺羅を盡したる扮裝、金魚の落雁

を追ふて波間に沈むが如く、名月ハ彼の中華饅頭、雲井に餡を閉づるに似たり。されば其身ハ磁石ならで、京に住む程の人の足、一度に東の方へと引き付けたる、力の程こそ恐ろしけれ。四條の橋より見渡せば、河原も町も燈火の、星を降らせし其中を押され押されて粹も不粹も、吾先にと寄り來る程に、遠くハ本願寺の上棟式、近くハ福島中佐が入京も、これには如かじと思ふ有樣、女ならでハ夜の明けぬ、岩戸神樂の初めより、今も變らぬ神祭り、是も泰平の餘德なるべし。

さて祇園の社内に入りて、圓山公園の北林へと行けば、只見る一帶の黒山、これが皆人かと思へば、京も中々馬鹿には出來ず。又彼方には本業の新舞臺、まだ檜の香も高く、之に照り添ふ篝火は、天も醉えりし景色なり。

群集の中を分け行けば、人の體熱に蒸さるゝ如く、之に混るは物の臭氣、手織木綿の紺臭きに、白地浴衣の石鹸臭き。女の頭の油臭きに、汗臭は丁稚の伊賀栗。片時も鼻持成ずと、團扇一心に動かせば、其柄が髷に障りしとて、隣の嬶にぼやかるゝもをかし。前が高い坐らんか、帽が高い扇子が邪魔ぢやと、後より罵れば、押すな動くな足踏むなと、前にも小言の聲起る。果は警官も制し切れず、手に持つ扇子を振りかざして、云ふ事聞かぬ頭をば、ハツシ／＼と光秀扱ひ、虎髯生やせし蘭丸の、俄かに出來るも一興なり。

兎角する程に、コンチキ／＼の囃子の音、次第／＼に急忙くなりて、木綿垂の舞揚幕に納まれば。それ

練り出すぞ見損ふなと、人波打つてどつと計りに、其道筋に向ふ有樣、さながら蟻の群るが如し。道筋には太き麻繩を張りたれど、兩方より押し寄する人に、間三尺程に狹められて、二人とは列びて步めず。「園の賑」と記したる大神燈を、辛ドて眞先に押し立つれば、續いては作り物の華表、先囃子の家臺。其後よりは七八の練妓、眞先には稻田姬。次は素盞雄命、名計り聞けばいかめしけれど、髭も無ければ力も無き、優にやさしき女神なり。さては櫻の如き八重垣姬に、梅も羞らふ女三の宮、菖蒲に似たる文奴、芙蓉を欺く靜御前、さてどん尻は木綿垂の、蓮步靜々と運び行くさま、眼も眩む計りなり。その又女一人每に、男四五人附き添ひて、床机を舁くもの、蠟燭を差出すもの、提灯持が先に立てば、團扇持は後に附きて、自己が汗は拭く暇も無く、呼吸を切らして煽ぎ行くなど、昔時の大名も之には及ばド。さて下坐見には、一段高く神馬の貼り物、殿と云へば外聞好けれど、これや誠の尻馬なるべし。

拜殿の邊より囃子を入れ、南門より靜々と練り出して、神幸道を西へ降り、八軒通を祇園町へと出づれば、此處等は家每に格子を外づして、靑竹欄に緋の毛氈、金屛風など立て繞らし、團扇使ひも大樣に、混雜を餘所なる有樣、零時は人を羨ませしが。其練物の來る頃は、何時の間にやら家の前は、人の堤を築きし如く、追へども去らず拂へども行かず、仕樣事無しに立ち上り、果は踏臺に乘るもあれば、子供は人の肩に掛りて、頸の痛味を我慢すれど、見えしは漸う胸の邊まで、裾は如何なる摸樣やら、人幾人の足を切らねば、其處までは見えぬぞ氣の毒なる。

何時まで見ても同じ事、早く此混雑を抜けばやと、税六東兵衛の兩人は、膳所裏より清元町に出で、縄手を北へと急げば、此處等も茶屋はありながら、大和橋を境にして、表を常の如くに〆め、軒行燈の見ゆる斗り、二階に太皷の音の聞えぬも、道筋ならぬ故なるべし。

(四)　負けぬ氣からの全盛自慢

エイどうなと成ろかイ

なんと此には魂消たかと、税六誇り顔に語りかくれば、東兵衛さほどに驚きもせず。これしきの事に魂消ては、膽が幾個在つても足らぬワと、鼻で答ふるが面憎く、税六少し勃然として、其負け惜みは通らぬ〱。なんぼ其方が威張つても、今日の練物は東京にあるまい。如何さま練物と云ふは無けれど、神田祭や山王祭に、新橋さては柳橋の、藝者盡しの踊り家臺、左無くば毎年夏の末に、新吉原ではにわかの催し、名こそ違へ同じ物ぢや。此間も其方は、祇園祭の繪を見せて、これが乃ち天下祭、鷄鉾ぢや蒲鉾ぢやと、仔細らしく講釋して、是も東京には無いと云はしやつたが、昨日建てた處を見れば、なんのあれなら東京の山車の、人形の代りに鉾を立てたばつかり。廣言云ふほど沽劵が下るワと。頭ごなしに擯斥されて。税六いよ〱躍起と成り、それは知らねば比較は出來ねど、今日面り見たあの賑ひ、あれほどの人は初度ぢや、よも東京では見られまい。なんの〱、廿二年の紀元節、憲法發布の賑も見いで、今夜の群集を珍らしがる、其の了簡が氣の毒ぢや。そんなら待てよ。あの練奴等が衣裝の代金、これを聞

いて驚くまいぞ。まづ少くも二百圓、多きは五百六百圓。其出處を聞かそうなら、之にはそれ〴〵客ありて、一手に引受る者あれば、二人で出し合ふ者もあり。何れ當人が懷中は、微塵兎の毛も痛めぬとは、何と凄い腕では無いか、京の藝妓の器量の程、まつたお客の腹の大きさ、此一事でも知れたものぢや、と大分得意に極め付くれば。東兵衛又も冷笑ひ、其樣な衣裝が難有くば、東京藝者の春衣を見よ。帶一本に三百兩、それを惜し氣も無く引〆めて、偶々酒を掛けられても、牛の角を蚊の刺した程も驚かず、平氣で笑ひさゝめくと、京の藝妓には眞似も成るまい。また其金を出した客を、腹が大きいと褒め立つれど、それらは東京に箕で計る程ある。斯く云ふ東兵衛も先達て、柳橋の去る者に、玉入二百五十圓と云ふ、金の指輪を買ふて與へしが、此等はほんの當座の手土産、恥しうて話には成らぬと、噓か眞か知ねども、大分と大きい出樣に。粹がりの税六默ッては居られず、それは〳〵日頃の勘定高いに似合はず、猪子才な事を仕て退けられたが。拙者にも亦た似た事がある。此春工藝展覽會のありし折、馴染の藝妓四五名を連れて、見物に罷りしが、陶器漆器はざつと眺めて、さて織物の段に成れば、女共の足は根の生へし如く、眼は西陣の出品にへバリ付きて、容易に動くべうも見えず。あの緞子をと一人が云へば、あの繻珍がと又一人。さては仲居お針婆まで、此處を戰度と無心を云へば、居合せぬ茶屋の內儀の分までも、一ッ〳〵買はされて、其拂〆めて二百七十兩、それに往復の車代から、藝妓の花代仲居の祝儀、歸てからの散財を〆めれば、ざつと三百兩は一日の煙、ハテ狹斜に顏が賣ると、つまらぬ事に物の入るも

のと、負けぬ氣からの全盛自慢。元より嘘は見へ透きたれば、東兵衛心にをかしけれど、此奴一番苦めてやらんと、俄に降服の體を見せ。イヤ恐れ入た御全盛、兼ねて粋者と聞及べば、こりや左う無くては叶まい。吾等如き青二才の、中々及ぶ處に非ず、此處に至て關東兵衛、兜を脱いで降參々々と、態と帽子を取て見せたも、頭の痒き故と知ねば、税六グッと反身に成り。ハヽヽヽ五月の鯉の江戸ッ子も、とう〳〵降參とは神妙々々と、鼻うごめかせし得意の面付。仕濟したりと東兵衛は、尚も税六を煽動てあげ、時に京都の大粋先生、其お馴染の藝妓とやらの、御名は何と申さるゝ。イヤ名と申して數われば、一々覺えては居らねども、現に今宵練妓に出でたる、あの小〇と申す者も、以前は新聞にまで出されし間、イヤもう他愛の無い事でと、云を早くも聞き咎め。さてはあの小〇とやらも、兼て其方が馴染しものか、これは又耳寄り千万。先刻は混雜の中にて、篤と顏も見覺えざりしが、罰の當らぬものならば、近い處で拜み度い、何と紹介せてはくれまいかと、疊みかけたる東兵衛の言葉に。税六少しくひるむと見えしが、それはお安い御用なれど、今宵と云ふては間に合はず、明晩まで待たれなば、如何にとも計らうべし。其は明晩が明後晩でも、拙者が滯留中ならば、何時でもよろしく案内頼む。それなら吃度請合ふたと、退引ならぬ行掛り、口には奇麗に引請けしが、コリヤひよんな事に成たワと、思ふ心は、自ら、面に見えてさても笑止や。

（五）　悪口の罰金今夜の勘定

ハテよい態なア

瓢簞から駒とは此事、税六入らぬ京自慢より、飛んだ散財を引請けしが、エイまゝよ何うなと成らうと、其翌日の夕暮より、彼の東兵衛を伴ふて、イザ宿坊へ案内せんと、我が家を出はせしもの〻。元より新地先斗町にも、此顔とんと賣れて居らねば、親交なる茶屋も無きに、ハタと迷惑せしかども、噯にもそれと見せず、只目的もなく寺町通を、三條の方へと下り行く中、不圖思ひ出だせしは、わか家の番頭芳兵衛が縁家、木屋町の彩霞樓なり。

彼處は此春座敷開の時、芳兵衛に伴はれて行きし事あれば、仲居も婦もまだ見忘れまド。然し今宵が二度目なれば、御氣の毒ながら御座敷が、生憎皆閉がりましてと、表で捌かれるとの無いにも限らず。さる時には東兵衛に對して、ちと面目無さ次第なり。兎角少しは費用の入るとも、外聞には代へられず、彼の芳兵衛に案内させて、大きな顔して通らんこそ、此場に取て肝要なれと、又小戻りして芳兵衛を呼び出し、耳に口あて云々と通ずれば。下地は好きなり御意は芳兵衛、グッと計りに呑み込みつゝ、手速く羽織引掛けて、追從タラ〳〵先に立てば、是で天下は無事なりと、俄に大盡氣取りの税六、人こそ知らね腹の中には、はや今宵の豫算案、遠く晦の慮するは、治に居て亂を忘れざる、商家の秘訣と知られけり。

やがて彩霞樓の玄關に來たれは、一足先に馳け込みし芳兵衛に、續いて婦と仲居共、敷臺の左右に小腰

を罵めて、オヤ旦那はん御出でやすと、さも馴々しく言葉を掛くれば。直に圖に乘る税六大盡、また今夜も御邪魔に成よと、毎晩來るかの樣な挨拶。まづ癪の虫に障れど、色には出さぬ內儀の愛嬌、毎度御贔負に預りましてと、合槌打こそ苦しけれ。

夏は兎角床の事、此の尻の下を水の流れる工合は、鴨河ならでは出來ぬと、イザ悠然と涼み玉へと、主人顔して差し出す團扇。東兵衞手に取てつく〲見れば、深艸形の仕入物に、表は紅で桐の紋、裏には藍で筆太に、何の何鶴と記されたり。一寸物が伺ひ度い、是れは矢張り藝妓のでと、下手に問へば無造作に、それが皆暑中見舞さ、拙者の家には腐る程ムる、ちとお土產にお持ちなされと、云ふを皆まで聞かず、はや東兵衞持前の惡口。これが藝妓の暑中見舞か、さりとは〲御麁末千萬、吾等が家では勝手使ひにする、澁團扇の澁を忘れて、誰ぞ樂書したのかと思ふたと、云へば税六大いに不興らしく。コレサ〲又しても京の惡口、其方の疵はそれ計りぢやが、鄕に入ては鄕に從ひ、彼樣な塲所では禁物になされイ、折角の酒が不味うなる。成る程それは御道理、吾等重々惡かつた、さらば今宵一晩は、京の惡口吃度云ふまい。其云ふまいが目的にならぬて。目的にならずば何うなと仕やう。さらば賭事にしては何うぢや。其賭事も面白からう、シテ何を賭けたものぢや。何の彼のと云はうより、若し其方が惡口云たら、今宵の會計殘らず持たさう。安き間の御事ぢや。そんなら手打ち。シャン〲〲！

さても東兵衞は、今宵は税六の驕りなれば、一番花を持たせんと、封せらるゝまゝに惡口を愼みて、暫

時が程は無事にすみしが、如何にしけん下物とては、初めに出せし黄瓜揉と、小鮎の鹽燒のみなれば、此のしみたれた事は何うぢや、是れでは酒も呑まれぬと、腹の虫もそろ〳〵小言を云ひ出さんとする折から、ヌッと現はれし一人の藝妓は、年の頃廿三四、背はヒヨロ〳〵と日蔭の桃の木、色は椋實の如くにて、眼は而も鈍栗目、團子鼻に藥研口、笑ふ時には奥の虫齒まで見せて、其呼吸さへも鼻持ちならぬに、東兵衞頗る避易して、團扇を楯に顔を外向け居しが。小用と見へて次へ立ちし間に、そつと税六の袖を引き、あれは一體何者ぞと問へば。あれが昨夕も噂をした、小〇と云ふ名代の女と、云へど東兵衞承知せず。イヤ〳〵欺してもそれは通さぬ、昨夜見た小〇なら、もそつと色も白うて、鼻も高うて、容色もズッとよい筈ぢや。イヤ左様見えたは其方の僻目、總じて女は遠見のよいもの、まして昨夜は衣裝を着け、紅白粉を無上に塗りたれば、美しう見へもしたれど。其正體を剝いて見れば、どれもこれも斯うしたものと、云はれて見れば道理らしく、左様な事もあらうかと、其儘虫は押へしものゝ、最前からの不平まぎれと、芳兵衞が勸め上手に、何時か自棄酒の度を過し。次第に醉が廻はるにつれ、先刻の約束もウカと忘れ、時に税六殿、今宵は其方の御骨折で、今祇園町に名代の藝妓、小〇殿の正體を拜んだは、誠にはや辱い、近頃持て辱い、……が、税六殿、あれが昨夜の小〇なら、吾等大きに不服でムるぞ。イヤサ聞きたまへ、總じて女は遠見のよいもの、その御説も御道理ぢや。また紅白粉で胡麻かせば、どんな醜女も美人と成る、其御説も一理ありだが。シテ見ると京の女は、皆化物でムるてな。お化でムるて

な。其お化を難有がつて、ヤレ合方に取り持ての、馴染にしやうのと騷ぐ奴等は、白痴の至極馬鹿の度天井、呆れて物が云はれぬワと、床の搖動くばかりに笑へば。稅六俄に手を打て、それヤこそ〳〵めたぞ、もうかうなれば此方のもの、ツレ眞物の小〇を呼べ、他に舞妓も五六人、義太夫はんも連れて來い、下物もどん〳〵持て來たと、芳兵衞諸共騷ぎ立てるに、東兵衞初めて心づき、南無三一杯喰はされたかと、急いで口を押へても追付かず。さても京の商人めは、きわどい處で小股を取りよると、今更の樣に悔む處へ、やがて眞の小〇も來たれバ、イザ化物の正體を、近うよつて御拜あれと、さし付けられて眼をすり〳〵、見れば見ほど昨夜とは、近優りせし美しさ。流石の東兵衞戰慄して、——イヤ勘定は持つとも〳〵。

題詩　滴天情仙

奈此祇園神事何。七人練妓若仙娥。却看秘訣商家在。敢道濃粧化物多。青竹欄中紈扇閃。彩霞樓外鈿車過。涼床寫出鴨河勝。書有歌川文小波。

贅云　可憐得意東兵衞。惡口徒誇這氣揚。孰若一篇京自慢。入鄉只管欲從鄉。

◉吉野記行　花の旅（序）

夫れ日光を見ぬ者は、結構と云ふ事を得ず、未だ吉野を知らざるもの、いかでかこれは〳〵の語を發し得んと、去る先生は語られき。誠に吉野の名勝は、吾等乳母の懐中にありて、吉野葛を甜ぶりし頃より、寐物語に聞かされて、はや耳には胼胝を出來しぬ。さればにや物心付く頃より、あはれ一度は見まくほしと、夢に描き幻に寫して、不見戀にあくがるゝと茲に十餘年。此年明治癸巳の春、時節到來天運循環して、遂に御見の機を得たれば、本望成就の喜ばしさ、旅日記を繰り返して、獨りニコ〳〵たるに忍びず、さてこそ此處に今度此度、お目拜借と出掛けしなれ。まいて此行只に芳野に止まらず、まづ途を伊賀路に取りて、上野に桃青の古跡を尋ね、月瀬に嵐の忘れ物を拾ひ。笠置の岩に慷慨の涙を灑げバ、奈良の京に懷舊の念を寄せ。さては法隆寺の寳物に涎を流し、三輪の故事に身を震はせ。初瀬の宿に同者を罵り、多武峯の峠に油汗を絞るなど、書くべき處も少からず。殊に同行は東都の詞友、紅葉、水蔭、花痩、乙羽、及社友國松の諸子にて、何れも氣の揃ひたる輩なれば、旅は道連の諺に反かず。掻き棄てにせし恥を拾はゞ、記すべき事又澤あり。されども吾に珍らしきもの、強ち人に珍らしからず。吾が面白しと思ふことも、人は釣らぬと云ふもあるべけれど、そは十人十色にして、止むを得ざることなれば、たゞ大目に見許したまへ。されば此の行を記する意は、此等の名所を案内せんとにはあらず。たゞ斯樣なことをなせしと云ふ、お話までのことなるを、題して「花の旅」と云へる仔細は、彼の不識庵宗匠より、吾が此の行に餞せられたる、十七文字に因みてなり。茲に引いて謌と

爲す。

道連は蝶よ雲雀よ花の旅　　聽秋

(其一)　大江の小波出陣の事
附　關東勢合體の事

去る程にさても其後、山城の國京都の住人、大江の冠者小波は、明治廿六年卯月十三日の、巳刻半ば過ぐる頃、住み慣れし唯想樓を後にして、心細くも只一人、吉野をさして打ち立ちける。其日の扮裝見てあれば、秩父銘仙の綿入に、久留米絣の長羽織、疋田鹿子を染め出したる、大巾メレンスの兵子帶を、太く逞しき膝折に引き結び。大坂博覽會にて求めたる、南蠻鐵延鐵の煙管の、其丈二尺許りなるを、金襴の袋の年經り手摩れて、襤褸の錦と見紛ふ樣なるに收めて、左腰にブラリと引提げ。黑羅紗製の大黑帽子を、腦天に押し戴き、監獄署の製品に係る、水艸鬼編のカバンと、二合入の西洋吸筒を、左右の肩より十文字に横へ。右手に犬頭鐵柄の洋傘を突き、盲縞の脛當に、牛皮の深靴踏み鳴らして、ユラリ〱と出でたる有樣、如何なる天魔鬼神なりとも、面を向くべき樣あらじと、吾身ながらも賴母しかりしが、人は何とも思はざりけん。

かくて七條の停止場に到り、上等待合所の椅子に憑れて、時刻の來たるを相待つ處に、俄かに車聲轟きて、東洞院の彼方より、砂煙を蹴立てつゝ、驀地に走せ來たるものあり。誰なるらんと立上りて、車上の

人を見てあれば、赤縞二子の道行振に、三度笠をば小脇に抱ゐ、脚絆草鞋に足を堅めて、眞寫器械を左右に提げたり。是なん京都の浮世畫師に、其人ありと知られたる、歌川法眼國松が、昨日の約束に反かじと、後ればせにも走せ付けたるなり。

ヤアと呼べばオウと應へ、共に袂を聯ねつゝ、青切符眞向に挿ざして、午前十一時三十分、滊車の室内に飛び入れば、車長が吹き鳴らす呼子と共に、車はガラン〳〵と、東をさしてぞ走りける。

抑も我等が志ざす處は、和州吉野の山にありて、此處よりは南に當れば、大坂へこそ向ふべきに、路を東の方に取ると、吾が敵は本能寺にありてふ、明智が軍畧に似たれども、こは伊賀の國柘植に於て、源惡太郎紅葉、惠美の骨法師水蔭、衣笠次郎花瘦、渡邊太郎乙羽なんど云ふ、關東勢と合體して、月瀬笠置の間道より、大和路かけて巡らむと、兼てよりの手筈なれば、さてこそ斯くは脇路より、向ふことゝはなりしなれ。

稻荷山科は忽ちに過ぎて、逢坂山の土手ッ腹を突き拔き、石山寺を横目に睨んで、程なく艸津の停車場に着けば、此處より關西鐵道に乘り換へ、右にはお半の石部宿、左に藤太が百足山、花を三雲や暗雲に、過ぐる深川は譯もなく、さてはお六が横櫛の、柘植の宿にぞ着きにける。

此時漸く未の下刻、關東勢の來らんには、尙一刻の間もあれば、只在る茶店に腰打ち掛け、暫らく息を休むる程に、法眼國松は、宿の老嫗に打ち向ひ、やよ此の邊に名所やある、語れ聞かんと尋ぬれば。老

嫗は小首を傾むけて、されバよ殿聞き給へ、此處より上野に出で給はゞ、聞ゆる名所は數侍べれど、柘植にはさるべき處もあらず。只だ彌平兵衞宗清が墳墓の、此の邊にありとし云へど、そは口碑に傳ふるのみにて、定かに此處と知る人無し。意しあらば殿達よ、訪はせ給へと云ひ捨てゝ、厨の方へと罷出でけり。

法眼やをら膝を進ませ、什麽にや小波ぬし、和殿も已に聞かるゝ如く、彌平兵衞宗清とし云へば、木幡の關にて常盤の御前の、操に愛でゝ三人の稚兒の、命を救けて放ちたる、情を知れる武士なり。さるに其の後は石工と化けて、御影の里に佗住居せしより、更らに終焉を知らざりしが。今の其墓の此處にありとは、是れも不思議な御縁ならずや。いざさらバ是れより立ち出でゝ、其の所在を尋ね見ん。彼には眉間に黒子のあるを、兼て芝居にて見覺えたれば、解らぬとはよもあるまじと、言葉を盡して勸めしかど。斯くて時刻の移りなば、關東勢の來たらん時、定めて便惡しかりなん。訪はで已まんは本意無けれど、今日は思ひ止まるべしとて、只茶店の後なる、雜木山に菫を摘み、前なる溜池に蛙を追ひなどして、霎時無聊を忘るゝほどに、關東勢が乘りたる滊車は、鈴鹿の山の麓を廻りて、早くも此處に着きしかば、小波國松の兩人は、打ち連れ立ちて停車場に出迎へ、將に取り付きて滊車を見れば、後の方より第三番目なる、下等列車の窓の中より、小波と同じ扮裝したる男、二人計り面差し出して、頻りに此方を眺めたり。小波斯くと見るよりも、まづ帽子を打ち振りて、此處ぞ〳〵と呼ばゝれば。彼方はやがて車より

降り立ち、線路を越えて歩み來たりぬ、眞先には骨法師水蔭、二番には衣笠の次郎、續いては渡邊の太郎、一足後に引き下りて、隻眼を白木綿の眼簾にて掩ひ、左の脚を重たげに引ずりて、いと苦しげに歩み來れるは、是なん武州横寺の住人、源　惡太郎とぞ知られける。

小波まづ件んの人々を、先の茶店に導きて、まづ一別以來の口誼を陳べ、互ひの無事を祝したる後、彼の國松を紹介すれば、こは思ひもよらぬ道連よ、殊に寫眞器を携へたるは、此上も無き幸福なりと、喜悅斜ならざりけり。

小波又紅葉に向ひ、先きに東都よりの通信には、助三入道思案にも、同行とこそ聞きつるに、今彼の大頭顱の見えざるは、怪訝しさよと尋ぬれば、紅葉さも憎さげに答ふる樣、彼は三芳野の山櫻より我が家櫻のいとしさや、乳房離れぬ稚櫻、其可愛さに惹かされて、一味徒黨の契約を、仇になしたる仇櫻、それ故にこそ此許處に、犬櫻とぞ申しける。

（其二）　伊賀の上野宿泊の事

此時同勢〆めて六人、七騎落には一騎足らねど、四天王には二人多し。實にや是こそ戰國の六雄、泰平の世の六歌仙、天に在ては文昌の、六星にも適ひたれば、いと賴もしき數なれど、勇み進んで茶店を出で、腕車六臺を駈り立てゝ、上野をさしてぞ向ひける。

上野へ行かば友生屋こそ、旅籠の中の頭なれど、兼て人にも聞きたれば、一トまづ其處へ陣取りぬ。此

時已に黄昏なれば、まづ浴を取り飯を喫する程に、はや何と無く草臥を覺へて、褥の上に横たはりたるまゝ、生欠伸嚙みしむるもあり。されども乙羽、水蔭等は、聞えし足の豆男なれば、此儘眠らんは旅の本意にあらず。いでく其處等を散歩せんと、頻りに促がしたてたれど、小波を始め紅葉花瘦は、倚肱枕の頭を擡げず。久し振りなる對面に、積る話は石川や、濱の眞砂の數あれば、今宵ハ此處に語り明かさん。見物ならば明日にせよ、太陽樣もはや草臥れて、何處ぞの山蔭に寢み給ふに、燈火無くては闇を見られぬ、吾等人間の分際として、身に錦をも纒はぬに、夜步行かんとは入らぬ醉狂。出たいものは出るがよし、吾等は此處に引込んで、茶腹を肥やすが此方の勝手と、更に取り合ふ氣色無きにぞ、兩人は頻りに焦燥立ちて、云ひ甲斐無き味方の奴輩哉、かくまで腰の拔けたりとは、今日まで知らざりしぞ不覺なる、嗚呼止ぬる哉くと、疊を蹴立てゝ立ち出づれば、歌川法眼は之を見兼ねて、さらば僕御伴せんと、やがて其跡を追ひ行きけり。

後は紅葉花瘦小波の三人、巴形に寢轉びて、暫時談話に時を移すほどに、夜も初更を過ぎしかば、宿の婢を呼びて夜具を運ばせ、ゴロリと計り横になりて、天井を眺めつゝ言葉を交はす中に、何時しか身は飄然として、はや三芳野へ彷徨ひ行く頃、咄何者ぞ！枕元に足音喧しく、起よくと呼ぶ者あり。連忙し何事ぞやと、頭を擡げて見上れば、是なん先の三人が、今しも宿へ歸り着きしにて、途々も云ひ合はしたるにや、面白き芝居を見たり、興ある歌曲を聞きぬ、乙なものを喰ふたり、珍な處へ行て來ぬな

ど、さも誇りげに陳べ立てしかど、高の知れたる揑造事と、此方は更に取り合はず、囀るまゝに捨て置きて、又もやムニヤ〳〵の境に入りぬ。

明くれば十四日、空は昨日の如く晴れたれば、いでや今日半日は、此處の名所を探らんと、車夫虎藏となん云へる者を、案内の爲めに引連れて、皆々宿をぞ立ち出でける。

先是小波は、不識庵の宗匠より贈られたる、月瀬紀行の小冊を、兼てカバンの中に藏め居しかば、此時之を懐中にして、途すがら讀みもて行きぬ。

（其三）　上野名所見物の事

名所見物の手初めとして、まづ芭蕉翁が故郷塚を弔ふ。塚は農人町の愛染院にあり。本堂の左手なる門を開けば、百坪餘りの墓場ありて、其左の方なる隅に、一際茂れる竹藪を背にして、少やかなる草屋あり。作りは庵室に似て床無く、左右に圓窓を穿ちたるが。中に高さ三尺計りなる石碑あり。何時の頃何人の建てしものにや、いと年經りて碑銘も定かならねど、前なる花立の水を灌ぎかけ、辛うじて讀み下せば、芭蕉桃青翁生地と刻める如し。例の虎藏に命じて、樒阿伽の水を取り寄せ、形の如く之を手向けて、一同禮拜なしたる後、國松は兼て携え來りたる寫眞器を取り出だし、他の五人を思ひ〳〵に立たせて、碑石と共に寫し取りぬ。

それより間道を經て上野公園へと志す。公園は舊の城内にありて、吾等が辿り行きしは其搦手なるべし。

今ハ塀も無く石垣も無く、只赤土の壊れかゝりたる懸崖を、くの字形に攀ぢ登るさま、乗取の時など斯くあらんかと、何時か其心に成りて、頻りに鯨波を作るもをかし。

忽ちにして一搆の屋敷あり。黒塀嚴めしく圍ふたる中より、木劍などにて打合ふと覺しく、頻りに戞々の聲聞ゆるにぞ、さては此泰平の世にも、尙此警備を忘れぬにや、賴もしき事よと語り合へば。虎藏後より笑ひながら、否とよ此處は監獄署にて、あれハ米を搗く音にて候と云ふ。吾等は今花を探りて、樂しき旅をなすなるに、彼等は鐵窓の中にありて、苦役に娑婆の春も知らず。實に此板塀一重こそ、人世苦樂の境なれど、坐ろに憫を催しぬ。

此監獄所の門前を過ぎりて、本丸の大手に掛るに、此處にも城門らしきものなく、只高き石垣の間の、山坂を登り行くに、道端の草に混りて、菫の咲き亂れたるいとしほらし。斯くて頂上に登り行けば、石垣高く、濠深く、老松枝面白く茂りたる間に、山櫻の今を盛りと咲き誇りたる、例の桃青ならでも、種々の事思ひ出でられて哀れなり。

此處を出でゝ途を右に取り、行くと五六町、鍵屋の辻と云ふに出づ、伊賀越の復讎ありし舊跡にて、以前は町家立て列なりたるも、今はやゝ巾廣き田舍道の、十文字に成りたる處に、古びたる煮賣屋一軒あるのみ。この煮賣屋こそ、寛永十一年十一月七日、彼の渡邊數馬が助太刀荒木又右衞門等と共に、鎗の頭を踏み潰して、敵を待ち合はせし處なれど、案内の者の云ふがまゝに、皆々立寄りて澁茶を飲めば、宿の

老婆進み出で丶、彼の復讐の有樣を、見て居た樣に物語るに、小波戲れて、さらば其時數馬が喰ひ掛けたる、鰯の頭は殘り居らずやと問へば、老婆倘眞顏にて、それは生憎殘つて居りませんが、兎に角手前共は其頃から、少しも變りは厶いませんと云ふ。何と云ふても二百年餘も前の事、確な話は分らねど、何方にしても損の無い話なら、感心して聞くがよからんと、老婆の話に耳を傾けぬ。鰯の頭も信心からとは、是より初まりけるとなん。

（其四）　月瀨途中の事

さても此處を、何故に鍵屋が辻と云ふにやと、重ねて小波尋ぬれば、傍に居合はせたる、田舍商人らしき男、物知り顏に進み出で丶、されば候聞きたまへ、此先十間斗りの處に、其頃いと大いなる煙艸屋ありて、家號を鍵屋と云ひけるより、此辻の名となりぬと云ふ。

かくて宿へ歸りたる後、主人が秘藏せる芭蕉の眞蹟を見る。一は短冊にて、彼の「古池や」の句を眞中になし、

花にこそ表書院でおさかやき　其角
草〳〵に人の氣を取る花野哉　嵐雪

の二句を左右にして一幅と爲し。他は懷紙樣の橫物にて、

早稻の香や分け入る右は有磯海　翁

しほらしき名に小松吹萩薄　同

あなむざん兜の下のきり〴〵す　同

の三句に、それ〴〵言葉書きを添へたり。又別に園太暦の寫本一冊、是は兼好法師に關したる處のみを記せり。

晝飯をちと早めに濟まし、いざ月の瀨へ向はんと、彼の虎藏が持てる車に、六人の荷物を積ませ、後よりガラ〳〵と挽かせつゝ、悠々として立ち出でしが、兼て此處の日向町と云ふ處に、翁が舊跡簑虫庵のあると、聽秋宗匠が記行にも見えしかば、訪づれで止まんは本意無しと、二町斗り途を廻はりて、此處ぞと云ふ處に至りて見れば、門には堅く錠を卸して、叩けども開かんやう無し。生垣の間より透見せんとすれど、生憎庭木の生ひ茂りて、それかと思ふ庵室だに見えず。此垣一重が黑鐵のと、皆々表にウロ付けば、こは討入でも初まるのかと、近所の者は怪みて、吾等が擧動に目を着くるに、咎められては面倒と、心ならずも其儘に、呟きながら立ち去りぬ。

自是上野の町を離れ、畑道を行くと三里斗り、此間別に見るものも無ければ、退屈まぎれに虎藏に向ひ、其車を挽かせて見よと、紅葉は其梶棒を取りて、五六間斗り歩行しが。チブトの痛さに忽ち弱はりて、誰か代れと云聲に、さらば某に貸したまへと、續いて車に取りつきしは、渡邊の太郞乙羽なり。此人陸奥の産にて、力飽く迄強ければ、難無く二三町駈け拔けたるにぞ、皆々一度に手を打ちて、ヤンヤ〳〵

と呼んだりける。それに續いて小波も、シャ何程の事あらんと、梶棒おつ取り走りしが、慣れぬ業とて是非もなく、車は頻りに波打ちて、積みたる荷物の落ちんとすれば、人々あれよ〳〵と危ぶむにぞ、入らぬ心配させるも殺生と、半町斗りにして止みぬ。

花の木村と云ふ處にて、茶店の椽に腰打ちかけ、暫らく憩ひたる後、治田村にさしかゝれば。兩方は山になりて、間には五月川の潺々たるあり。溪流に沿ひたる岨路を辿りゆくに、景色次第に月の瀨臭くなりて、疲勞も漸く忘れんとす。半町斗りにして渡船場あり、溪流の速きが爲にや、舟を遣るに竿を用ひず。只兩岸に掛け渡したる、藤蔓の綱を手繰り行くさま、いかにも面白しとて、向ひの岸に例の寫眞器を開き、皆々舟にて渡り行く處を、速撮にて寫し取りぬ。

自是嵩村に移り、尙も歩を進むる程に、やがて月瀨村に着せしが。彼の有名なる俗橋の、去年の出水に流れしより、今その普請の最中にて、石材堆く前途を遮り、而も一本の制札を立てゝ、往來止とぞ書いたりける。

（其五）　車夫虎藏怪力の事

こは抑什麽に、こは什麽に？車留にて候ぞ、外には路のあらざるかと、眞先に進みたる中村花瘦が、當惑の頭を搔きて、高らかに弱い音を吹けば。血氣に逸る面々は、玄や車留何程の事かあらむ、唯揉破つて通れかしと、安宅の關にさし掛りし、四天王の如くにて、各力足蹈鳴らし、曳々聲をあげけるは、勇

ましかりける擬勢なり。

爾時車夫虎藏、武藏坊を氣取りていふやうは、逸らせたまふな旦那方、此制札を蹈倒して通らむは、いと易き事なれど。あれ〳〵見そなはせ、橋普請用の切石は、ごろ〳〵と前途に塞がりたる、賽河原を遠眼鏡で見る如し。一夫路に當る時ンば、萬卒も容易に進み難き要害なり。(此時後の方から、イヨウイヨウの聲懸かる)然れば一人單身にて、越ゆることさへ難義なるに、車を曳て行かむなど〻は、言語同斷。賤生願くは策を獻せむ。三四人の旦方、各一臂の力を假したまへと、車に積みたる荷物を下し、後樣に車を背負ひ、いで〳〵かくして越え申さむと呼ばゝれば、こりや面白し、やれや者ども、北ぐるものは撲たむと馳寄りて、半人力を顯はすは誰々ぞ。法眼國松、骨法師水蔭、同行隨一の猛者と聞こえたる、渡邊乙羽之に續き、車夫を合せて四人の同勢、眼よりも低く車を扛げて、覺束なくもよた〳〵、と足塲危く進行く。後より荷物を引擔げ、小聲にわれらの馬鹿さなど〻、好見になりて進みしは、小波花瘦紅葉なり。

此險阻も、高が十間か二十間の事と想ひしに、行けども〳〵盡きざるに、畠山の庄司ならぬ、彼三人はいつか力弱りて、腰ふら〳〵と一歩に休み、五歩に憩ひ、宛然虫の這ふごとく、兎角してかの梨子の心を、思ふ所まで扛き行けば。骨法師水蔭は地に倒れ、歌川國松は片息になりて、流石の乙羽もべつたりと、尻餅撞きて疲れたるを、かくやわらんと察せしゆゑ、暴虎馮河の勇を愼み、臆病卑怯と見せかけて、私に

力を養ひたる、我等か明智に驚きたるかと、高慢なる顔をして、小波花瘦紅葉は、弱り果てたる三人を、ねんごろに介抱なし、魁春洞指してぞ辿りける。

抑此魁春洞といへる旅館は、小山の總頂に在りて、登り數町に餘んぬべし。加之峻坂胸をも撞かむずばかりなれば、それと謂はねど一同は、顔見合はせて愕然たり。かくと見るより江見水蔭、眞先に躍出で、やあ〳〵方々、此山の案内は、某能く識たり。此坂一ッ登るならば、あれ〳〵彼所に見ゆる屋根こそ、魁春洞にて候ぞ。此處まで來れば此方のもの、進め〳〵と帽打揮りて、飛鳥のごとく翔るといへども、誰ありて續くもの無く、口ばかりは草臥れで、唯其勇氣のほどを稱ふるのみ。

（其六八）　笠置越の事　（上）

漸うにして魁春洞に着きしは、午后五時少し過ぐる頃なり。二階の欄干に凭れて見渡せば、彼方の峯此方の谷間、今は雜木の如く見ゆるも、皆梅樹ならぬは無し。今十日許りも前の景色、嘸なと思ひやられたり。

此魁春洞と云へる旅館は、俗名を鍛冶屋と云ひ、昔時より此處にありて、家に秘藏せる雅帖十數冊には、古今の名家の眞蹟多く、何れも此處に笻を曳きし時、筆を揮ひしものなりとぞ、皆々打ち寄りて之を眺め、彼を評し是を判ずる中、端無くの美術論となり。尾紅葉を初めとなし、風俗書に熱心なる渡邊乙羽、浮世繪に堪能なる歌川國松等、口角泡を飛ばして論ずるを、小波は床の上に按摩取らせつゝ、時々横合

より嘴を入れぬ。此時骨法師は醉ふて眠り、花瘦は此行の勘定奉行なれば、坐敷の隅に算盤を扣へて、二一天作に餘念無かりき。

此夜宿帳を持ち來たりしかば、もしやと思ふて前を繰り見るに、果して樂々會の面々、幸堂、露伴、思軒、永洗の、諸豪傑を初めとして、浪華の南翠翁が名も見えたり。

明くる十四日は空曇りて、今にも降り出さんかと思はるゝに、皆々安き心も無かりしが。降らば降れと血氣の者共、荷持治三郎を先に立てゝ、勇み進んで出で行きぬ。

宿の後手の山を越ゆるに。降り坂の急なる、足の止め度も無き程なるに。かゝる處は斯うして行けと、小波體を横樣にして、蟹の如くに歩む程に、疲勞も左程には覺えざりき。

兎角して桃ヶ野と云ふ處へ出づるに、叉山坂になれば、之を登り行く程に、此邊は花少し晩れて、見返へりたる彼方の谷間に、素枯れながらも一叢の梅樹、尙雪を殘せるも嬉しと、小波取り敢へず、

　一と谷は吾に殘りて梅の花

と、手帳の端に書いつけしが。かゝる名句を短冊にして、其枝に下げ得ぬぞ恨なる。

かくて山路を辿ると四里許り、王子奥ヶ原等を過ぎて、和州柳生の里に着きぬ。折からまだ正午には一時間許りも早けれど、之より笠置山にかゝれば、休むべき處もなければとて、此處の市場屋と云ふ家に、一同晝餉を認めぬ。

此柳生と云ふ處は、彼の但馬守が領地にて、此邊の山中に、天岩立と云ふ名所のある由、曉の鐘成が繪圖にも見えたれば、見殘すは殘念なりと、案内者を傭ふて出で行きぬ。此時彼の紅葉のみ、チブトの痛味劇しければとて、一人宿に殘り居たり。

（其七）　笠置越の事　（中）

市場屋を出で丶八町許り、小高き雜木山の奥に至れば、檜杉なんど一叢茂れる處に、高さ一丈に餘れる石の、二枚重なり合ふて斜めに立てるが、其形いかにも扉に似たり。是あん天の岩戸の扉にして、彼の手力雄命の爲に、虚空遙かに投げ揚られし時、此山へは落たるなりとぞ。されば此處を戸岩谷とも云り。昔時は老杉空を掩ひ、碧苔途を埋て、いと物凄き處ありしかば、天狗住めりと云ひ傳へて、里人更に歩を運ばず、只柳生家の臣下の中にて、劒道人に優れたる者のみ、故らに此處へ丑時參して、天狗と仕合なしける程に、時々は行衛知られずなるものありきと、案内者が實らしき物語に、皆々そろ〳〵恐怖立ち、愚頭々々して股割かれては大變と、急ぎ途を取て返し、柳生家代々の墓場を一見して、再び市場屋へ歸りぬ。

先是小波は、宿の土間に山駕籠ありしを見付け置きたれば、此時一足先に歸りて、まづ紅葉に打ち向ひ、君も腫物と眼病には、嘸かし途中も難儀なるべし。殊に此より笠置へ掛れば、山路一入險しくて、動もすれば千仭の谷底へ、轉げ落ちん計りありとぞ。徒歩にて行くはいと危ふし。幸ひあれに山駕籠あれば、

一番乘つて見る氣は無きか、さすれば吾も付き合ふて、一挺賴むも苦しからずと、さも信切氣に說き勸むれば。紅葉元來我慢者なれど、小波の信切にや絆されけん、然らば兎も角も計らふてよと、音無しく贊成なせしにぞ、ますましたりと喜びつゝ、小波やがて宿の廝に向ひ、私かに駕籠二挺を誂へしに、折あしく山駕籠は一挺のみにて、他は普通の垂駕籠ありけり。されども其中廣くして、出入に自由なるべければとて、紅葉をそれに載せける程に。皆々之を見て、いよ〳〵大谷刑部に成りたりと云へば。刑部の紅葉片眼見開きて、いやとよ彼の小波こそ、自己が疲勞を隱さん爲め、吾を欺して駕籠にのせ、一人好兒になりたる姦智は、石田治部にも似たらめと、頻りに小波を罵りける。

かくて二挺の駕籠を眞中に、四人の同勢前後を守護して、柳生の里を立ち出でしが、午後一時頃にてやありけん。腹の朽くなりたると、足の樂に成りたると、駕籠の動搖の心地好さと、斯う三拍子揃ひたれば、何かは以つて堪るべき、忽ち眠氣を催して、コクリ〳〵と初めける程に、曉の夢なら醒ましもする、コケコウの森(鷄の森とも云ふ)も何時しか過ぎて、さして行くてふ笠置寺の、門前にこそ着きにけれ。

(其八)　笠置越の事　(下)

自是案內者の口吻を假りて、此山の名所を列記すべし

一鐘樓　此處に掛くる處の鐘は、建久七年八月、解脫上人の鑄玉ひたる所にして、高さ三尺徑二尺二

寸厚さ一寸八分。あまり大きな鐘では無けれど、金は閻浮檀金を以て鑄たれば、其響の大なると、日本に比類はムりませぬ。――ゴ――ン……（成る程好い音だ）

一駒止の松　天武天皇樣御登山の折、此松に御馬を繋がれたと申す事で。尤も只今では代が變つて居ります。

一菅公廟の址　延喜の帝御登山の時、菅丞相樣御伴にて、頻りに此山をお褒め遊ばされたと申す事で、御薨去の後に此に御廟を出來へましたので。只今では當所の氏神に成て居ります

一藥師石　高さは四十尺、巾三十一尺。

一文珠石　高さは廿二尺、巾十六尺。

一彌勒石　高さは五十二尺、巾四十二尺。是が笠置寺の本尊で、昔時は此處に本堂があつたのであの通り彌勒樣が彫り込でムいます。（あれが彌勒か、乃公は又海坊主かと思つた。）此處にて又寫眞を取る。

一十三塔　あの文珠石の下にあるのが、十三塔と申して、解脱上人の母御の墳だと申します。

一金剛界石　高さ四十尺、巾は三十六尺。

一胎臟界石　高さ四十八尺、巾廿七尺。

此を金胎兩部の石と申して、此間の窟を千手の窟とも、又龍穴とも申します、良辨僧正此窟に參籠して、

千手の秘法を修め遊ばした處で。(何故其樣な御苦勞な事をしたんだ)それハ聖武天皇樣が、南都の大佛殿御建立の時、木津川の川上から材木をお取寄に成つた處。此川に岩石が澤山あつて、舟も筏も通りません。其處で良辨僧正が、此處へ籠つて法を修められると、忽ち川に水が出て、如何なる大木も難無く通つたと申す事で。良辨樣はえらい方でムいますなア。(フーン感心なもんだチ)

一虚空藏石　弘法大師が御彫りに成たので、高は四十二尺巾は廿四尺もムいます。(弘法は石工も仕ましたかイ。器用な男さチ。)

一貽內寳　此上の石は四十年前の地震で、あの谷底へ落ちました。

一太鼓石　其上の處を叩いて御覽なさい。太鼓の音が仕ます。――(トン〳〵、成る程、中が空虚にでも成てるのだらう。)

一ゆるぎ石　押て御覽なさい動きます。(オウ〳〵動くは〳〵)處が中々落ちませんのさ。

一平等石　此處がまづ頂邊でムります。此が東の覗と云ふ處、此下に不動樣があるんですが、誰も見たものが無いので。(オウ恐わ、成る程これぢやァ覗かれぬワ。――下へ廻はつて見ると、二間計り下に岩蔭一尺程引込んで、少さき石の不動像立て掛けたり、――何の事だ。)

一菅公冠掛松　菅丞相樣が此處で御休憩の時、冠を掛けられたと云ふ松でムります。

一行宮址　丁度彌勒岩の上にあります。乃ち後醍醐天皇樣の御宮のあつた處でムります。

一貝吹岩　元弘の戰爭の時に、此岩の上で陣螺を吹いたと申す處で厶ります。（登つて見ろ〳〵。なんと好い景色ぢやないか。此處で一枚寫すべし〳〵。）

一繪岩　向ふの山の中途に見えるのが繪岩。（さう云や似てる樣だ。）

一笠置石　此は其昔し天武天皇樣御登山の折、大きな鹿が飛び出して、天皇樣へ突いてかゝつたのを、神佛に祈誓してお助かり遊ばしたから、後日の標に此上へ御笠をお置に成つたと云ふ石で。それから此山を笠置山と申すので、高さは五尺巾一丈、丁度藥師石の上になります。

一毘沙門天　楠正成公の守本尊に厶ります。

まづざつと此でお仕舞で厶ります。（大きに御苦勞。案内料は、）ヘイ十錢頂きます。

（其九）木津川下りの事

笠置山見物を畢れば、後は坂路を驀地に、やがて南笠置村に出で、森源と云へる茶店にて、一ト先づ息を入るゝ事となりぬ。

是より船場までは二町斗り、徒歩にて行くもいと易ければ、此處にて駕籠を歸さんとしたるに。國松傍より進み出で、「駕丁さん一寸待て頂戴、船場で寫眞を取り度いんだが、是非駕籠が欲しいから、御苦勞だが河岸まで遣つて下さいな。少し位酒手は出しますよ。」（此處の言語も皆寫眞と知るべし）と云へば、駕丁も元より拒むべき處にあらねば、快く承引て、二挺の空駕籠を擔きゆかんとするを。花瘦急はしく

呼び止めて「空で行くのは勿體無い、一寸乃公に乘らしてくんな。」と云ひつゝそれに打ち乘りしが。此人元來東京に育ちて、鐵道馬車には乘り飽たれど、駕籠に乘るは今日が初めてなれば、「思ひの外工合の好いものだ、これなら最初から乘ればよかつた。」ト咳くを、水蔭傍より冷評して「でも君は鈴森迄、乘つた事があるぢやないか」と云ふ。――元來花瘦と云へる男、眼大に面長く、何處やら圓洲に似たれば、其幡隨院長兵衛に、思ひ寄せたる評言と知るべし。

かくて河原に出でたるに、何時の間にや説きつけたりけん、國松は今休みたる茶店の娘の、其年未だ十六計りにして、容貌も鄙には稀なるを伴ひ來たり、駕籠の中なる花瘦を追ひ出して、代理に此娘を載せ、殘りの者の半は船に移り、他は駕籠の邊に立ちて、くさ艸紙の挿畫か、世話狂言の幕切れにでもありさうな圖を、中板の寫眞に寫し取りて、これさへ濟めば用は無しと、娘には懇ろに別を告げ、駕丁には少し斗りの酒手を與へて、おさらばさらばと夕波に、船は忽ち岸を離れ、木津をさしてぞ走りける。

川は元より急流なるに、而も十分に揚げたる帆は、雲雀東風を一杯に含みたれば、船の疾さと矢の如く、其心地快さ云ふ可らず。酒無きに心は浮かれて、彼方に詩を吟ずるあれば、此方に駄洒落を闘はすものあり。其中にも小波は、如才無く船頭に向ひて、「いかに尉殿、見え渡りたる山々ハ、皆名所にてぞ候らん、御敎へ候へ」トありけるに。船頭さも得意になりて、「さんざうらふ。まづあの山蔭より水の落ちたるは、鳴瀧と申す瀧にて候。此方に見ゆるが駒返し、椽の岩とも申すなり。「其由來はそも如何に。「さればよ

此處は元弘の昔時、楠正成と云ッし忠臣、帝の安否氣遣ひて、笠置をさして走せ行きけるに、遙かに焰の揚るを見て、さては笠置も落ちけるか、御痛はしやさりながら、今は行きても詮なしとて、駒を返せし處ぞかし。「又あれに見ゆる一村は。「此處ぞ今も錢司村とて、我邦錢の嚆矢なる、和同開珍を鑄出せし地なり。「此方に見ゆるあの河は。「あれこそ瓶の原、分きて流ると讀み置し、泉川にてさふらへ。「右手に見ゆるあの山は。「其名も流岡山とて、昔時此の川に大水出でし時、何處ともなく流れ來たりて、此處に留まりし山ぞとや。「左手の方は「加茂の里、河原に掛けたるあの小屋は、芝居小屋か面白や。地打ち出す太鼓どう〳〵と、鳴るは早瀬の水の音、はや程もなく木津町の、河原にこそは着きにけれ。

（其十）奈良一見の事（上）

木津より馬車に乘りて、奈良に入りしは黄昏時なり。京街道の行き當りに、此頃新たに建ちたらんと覺しき旅館あり。古き瓦など塗り込みたる、土塀もて表を圍ひ、門に一片の額を掲げて、菊水とぞ誌したりける。

一行は相顧みて、今宵は此處に宿るべしと、玄關近く進み行くに。婢等多く居合はせながら、「お出でやす」とも「入らつしやい」とも云はず。是には少し拍子抜けせしが、紅葉小波の兩人ハ、さも鷹揚に婢に向ひ、「宿を頼む」と申し入れたるに。婢怪體な顔して吾等を打守り、其儘奥へ行きて、何やら耳語き居りしが。やがて再び出で來りて、氣の毒さうなる顔もせず。今宵外國人の客込み合ひたれば、お宿はお斷

り申すとの事なり。さても失敬な奴輩哉。吾等を何者と思ふぞト、一番力味度くは思ひしかど、旅の耻は掻き棄てよと、思ひ直して門を出で。さて退いて一行の姿を見れば、何れも壯士か田舍書生、中にも三度笠に草鞋穿きなる、歌川法眼が異樣なる扮裝、成る程これでは斷られもしやうと、果は笑ひながら其處を立ち去り、此上は雞口と成て巾を利かすに如かずと、更に魚屋と云ふ旅籠屋に入れば、此處は流石に吾等を見損はず、座蒲團も新調の絹物を出して、部屋の狹さを詫ぶるなど、茶代の効驗とハ云ひながら、勿體無き程の大モテなりき。此時歌川法眼は、無據用事あればとて、夕飯を濟ませし後「明日の夜此處へ來られずば、吉野にて落合ふべし」と、言葉を殘して京へ歸りぬ。

此夜十時頃より雨降り出せしかば、明日は如何にと氣遣ひつゝも、白晝の疲勞にて他愛なく眠り、七時頃に起き出づるに。雨は漸う上りたれども、空は尙曇りて、誠に危き景色なるに、午前の中は籠城こそ然るべけれど、其儘又床に入りて、十二時迄は夢を貪りぬ。

かくて午後宿を出で、まづ春日神社へと志しぬ。一の鳥居を這入れば、はや名物の神鹿左右より寄り集ひ、袖を扣へては物を諫る如く、首を垂れては事を告るに似て、其樣如何にもしほらしきにぞ、皆々交る〱財布を開きて、卯の花團子糠煎餅など、求めては之を與ふる程に。慣れたるは手より受けて喰へど、慣れぬは遙かに離れて、人の去りたる後拾ふて喰ふ。博覽會の猿に胡蘿蔔遣るとは、又異りたる面白味あり。

右手の芝原は淺茅か原と云ひて、野守の池、雪消澤などの名所あれど、取り立てゝ記すべき程にもあらず。只十抱もあるべき老杉の、惜し氣もなく立列べると、大蛇かと思ふ計りに、年經りたる山藤の、無遠慮に蟠れるなど、都に住む人の目には珍らし。中にも其質は灌木にて、其花雪の如くなる木の、幾株と無く生へたる、遠くより見れば卯の花に似たれど、まさか鹿に因みたる洒落にもあるまドと、二の鳥居の邊にて、只在る茶店に憩ひしとき、茶酌みの婆に尋ぬれば、あれはバチコと云ひて、奈良の他には無きものなりと、さも勿體らしく語り聞かせぬ。バチコとは如何なる字をや書くらん、其後調べたれど解らず。定めて奈良の他には無き方言なるべし。

二の鳥居を這入れば、兼て奈良通と聞えし水蔭、得意に成りて是からが見物だト云ふ。何故だと聞けば、あれを見よとて、路傍の燈籠を指しぬ。誠に春日の名物は、鹿と燈籠なりと聞きつるが、昔時より奉納せし石燈籠、道の兩方に列を爲して、其數幾千と云ふを知らず。而も其形一々異りて、俗なるもあれば雅なるもあり、苔に蒸されて面白きもあれば、雨に洒れてをかしきなど、坐ろに數奇心を催せば、何れも其前に涎を垂らして、足の運も次第に緩みぬ。

それより奥の院まで參詣なし、若宮の神前にて神樂を奏しぬ。まづ住所姓名を通ドて、神樂料を納むれば。神官それを帳簿に留め、やがて設けの席に就き、笏拍子と和琴に合せて、神歌朗かに謠ひ出せば、十四斗りなる神女二人出でゝ、長き五色の房の付きたる、鈴を振り鳴らして靜に舞ふさま、いかにも優

美なるものなり。かくて神樂の畢りたる後、御札と神酒とを戴き、禮を陳べて立ち去りしが。此時流石の豪傑等も、云ひ合はさねど口に錠をおろして、咳拂さへせざりしもをかし。

若宮を出でゝ本社に至れば、此處には四方の廻廊に、鐵の燈籠數多釣り下げたり。何れも奉納の物なるが、蟬、鬼形なんど云へるは、中にも名作と見えて、故らに札を付けたり。

(其十二)　奈良一見の事　(中)

春日の社内を拔けて、若艸山の麓に出づれば、名物の人形あられ酒なんど賣る店、軒を並べて頻りに往來の人を呼ぶ。中に何某とやらん云ふ刀劍店あり、店頭に扣へたる手代らしき男、人の顔を見る毎に、手頃の仕込杖引拔きて閃めかし、これは何の國の住人何の某が、精神凝めて鍛えたるものなり。馬觸るれば馬を切るべし、人觸るれば人を切るべしなどと、手品の口上の如く饒舌り立てゝ、頻りに賣り付けんとす。

今太平の難有き御代に、政治家ならば知らぬと、筆を戈なる吾等が身に、かゝる物の用無しとは思へど、一寸冷かすも面白からんと、立寄らんとする乙羽の袖を、水蔭雲時と引き止め。止みね〱乙羽ぬし、買はぬ氣ならば無用にせよ。此家は聞ゆし商賣上手、客に腰を掛けさせたが最期、辯口に委せて代物を押し付け、刺身庖丁の如きものなりとも、買はせでは措かぬと、誠に奇體の手練を得たれば、立寄らんといと〱危ふしト、忠やかに諫めしかば、乙羽もさらばと思ひ止り、其儘其處を素通なし。其二三軒

先なる、三笠野と云ふ家に腰を掛け、あられ酒一杯宛に舌皷打ちて、前なる山を見上れば、其名に背かず若艸の、昨夕の雨に一入色増て、綠の毛氈もて掩へる如く、又剃り立ての月代にも似る中に、蚤の匍廻る樣に見ゆる人影、あれハ何するぞト聞けば。宿の亭主答へて、蕨を取るにて候ト云ひつゝ、奥より一束の早蕨を持ち出で、是は昨日取りしものなり、お土產に如何ト云ふ。只ならば貰ふて行くべしと、其半を分けてあられ酒の空德利に入れ、やがて立出でんとする時、不圖傍を見れば、欅の看板に筆太く、名物青丹よしと記したるを、例の輕卒しき渡邊乙羽、さては花がるたは奈良より初まりけるよト云ふ。をかしな事を云ふものかなと、皆々顧みて其仔細を問へば、あれ見玉へ看板に、青丹よしと記したり、花がるたならで何ぞト、眞顏に成りて答ふるに。皆々どつと打ち笑へば、宿の亭主も聞きて笑ひながら、いやとよあれは青丹よしとて、青タンよしには候はず、斯樣な菓子にて候ト云ひつゝ、一包取り出して見せたるに乙羽極まり惡る氣に見てありしが、さらば土產に買ふて行くべしとて、四包計りぞ求めける。知らぬ言葉の讀み違へより、入らぬ散財なせしこそ、氣の毒にも亦笑至なれ。

それより手向山神社に詣ふで、三月堂より二月堂に至りしが、石壇の下なる茶店の看板に、わらび餅と書いたるを、花痩まづ見つけて、これは定めて乙なるべし、一箸試むる氣は無きかト云へば、吾はその隣に記したる、あま酒こそ望ましけれト、チンバ引きつゝ一番に進みしは、關東一の頑白者、惡太郎とは知られけり。

（其十二） 奈良一見の事 （下）

二月堂を一見して、大佛の鐘樓に至れば、傍の柱に札ありて、一撞一錢と記したり。安い樣で高いものなれば、五人一時に撞くこそ然るべけれと、乃ち番人に一錢拂ひ、五人撞木の綱に縋り、曳々と掛聲して、三度目にボンと打ちつけしに、其響一人にて撞きしよりも低し。何の事だと呟けば、番人笑ひながら、そは皆樣の力が揃はぬ故なりと云ふ。さもあるべしとは思ひしかど、重ねて撞く氣にもならず、其儘博覽會の方へと急ぎぬ。

博覽會會場には、大佛殿の樓門を中心にして、左右の廻廊を其儘用ひたるなど、資本入らずにて好き趣向なり。まづ樓門の右の方より入るに、東京の淺艸にて見たる如き、活人形幾組もあり。中にも久米仙人墮落の圖は、さして巧妙と云ふにはあらぬに、誰も其前には足を留め、そと俯視きて見るぞいぶかし。名物の奈良人形、春日卓、團扇なんど思ひ〳〵に求めて、漸く大佛殿に至り、名高き大佛殿を拜めば、成る程大きな物には相違なけれど、傘を開きて鼻孔に入るべしと、幼稚きころ聞きつるは、全く乳母が法螺なりけり。此大佛殿の後には、佛像古器物なんど、數多の寶物を陳列したるが。中に石川五右衛門が煮られたりと云ふ釜あり。是も芝居で見し程大きくはあらねど、近よれば何となく氣味惡し。此處を出づれば繪畫室なれど、是ぞと思ふ物もなく、骨董店をざつと冷かして、遂に表に出でたり。

此時日は山の端に傾きて、足も疲勞を覺えしかば、今日の見物も是までぞと、皆々歸途を急ぎて、南大

門より春日の社内に來掛る時、彼方に喇叭の聲聞えぬ。何事ぞと見遣れば、こは鹿を小屋に集むる相圖にて、老若取り交ぜて數十匹の神鹿、蹄を揃へて構内へ駈け入るさま、油畵にでもありさうな圖あるに、水蔭手を打ちて妙々と叫べば、紅葉は傍より成る程妙は妙なれど、あの眞鍮の喇叭が妙ならず、慾には角か竹螺にして欲しいと云へり。

されど月の瀨にペンキ塗の橋出來て、須磨明石に汽笛の聞ゆる世の中、此等はまだ／＼好き中なるべし。それより兒觀音の地内なる、昔時石子詰の刑を行ひしと云ふ處を、往還より塀越しに見て、あな無殘と眉を顰め、猿澤の池の頭なる、釆女が衣掛の柳を眺めては、さても不憫やと眼を數瞬き、やがて宿へぞ歸りける。

かくて其次の日は、早朝より立ち出でゝ、初瀨へと志す筈ありしが。昨日の疲勞に寢過したれば、寧そ後れ序にと、朝餉の後宿を立ち出で、邊近き南圓堂を初め、金堂に列べたる名ある佛像、花の松八重櫻など、話の種に一見して、再び宿に歸り、やがて支度を調へて、停車場へと車を走らせしは、午前十時半頃なりけり。

(其十三)　法隆寺巡覽の事

十一時發の汽車を法隆寺にて降り、野路を十町斗り辿り行くに。今日は空も殘り無く晴れて、長閑なる景色得も云はれず、

是蓋し實景なり。

草鞋から蝶々踏み出す野路哉

やがて法隆寺の裏門前なる、加世屋と云ふに中食を認め、案内者一人を傭ふて、法隆寺見物と出掛けたり。七堂伽藍の殘り居るは此寺斗りとぞ、誠にさもあるべし。夢殿舍利殿を初めとして、金堂なる曇徴が壁繪、五重塔なる塑造の須彌山など、一々目を驚かす斗り。其他本堂には寶物の陳列あり、廻廊には骨董の賣店あれど、恥かしながら古美術には、一向眼の利かぬ吾等なれば、昨日も今日も寶物の食滯して、只譯も無く感心するのみ、委しき有難味は知り難し。

本堂の前を横ぎりて、峯の藥師に詣れば、此處は小高き岡になりて、遙に金剛葛城の諸山も見えたり。堂の前に番所の如き物ありて、前に瓦數多積み、之を寄進する者には、堂の内陣を見すべしと云ふに、二枚ほどの代を拂ひて、裏手より内部に入りて見るに、六角になりたる堂の、破目鴨居の嫌無く、刀脇差、鎧、兜、さては鏡、櫛、笄なんど、數限り無く掛け列べて、古道具屋の藏の如し。こは何事ぞと案内者に尋ぬれば、案内者得意になりて、抑も此の御藥師樣は、靈驗殊にあらたかにして、願ひし事の聞かれぬ例無く、其願の叶ひしものは、皆わが大切に思ふ物を、御禮の爲に奉納なす故、かくの始末となりけるなり。

されば脇差を奉納するものは、武道を研く武士にして、矢立は町人の品なるべく。櫛笄は云はでも知る

き、御婦人方とは知られたりと云ふ。乙羽此時口を開きて、何なりとも大切な品とならば、吾等は筆を奉納せんやト云へば、いや〳〵筆を納めるなら、天神樣こそ然るべけれど、誰やら傍より混せ返しぬ。
此見物に思ひの外時移りたれば、急ぎ宿へ歸り、先に誂へ置きたる人力車に乘りて、初瀨をさしてぞ走らせける。

（其十四）初瀨の宿に同者を罵る事

法隆寺を發せしは午後一時半なり。これより初瀨に向ふに、大方平坦なる畠路なれど、陰と云ふもの少しも無ければ、日は正當に照りつけて、暖かきより寧ろ熱く、此半日の道中には、可惜優男を代無しにする事よと、私かに心を痛めけり。
田原本の町を出づれば、右手に小高き山見ゆ。車夫の指して告ぐるを聞けば、これぞ畝傍山なりけるに。さては皇祖の陵のある處かと、遙に伏し拜み。更に前の方を見れば、眞黒なる山一ッあり。あれはと又尋ぬれば、車夫は汗を拭ひつゝ、あれが三輪の山にて候、それより左の方に當りて、あの高き山の麓に、淡紅の雲の掛れるは、柳本の櫻とて、此邊にての名所なりと云ふ。されども此處よりは一里餘も迂路なれば、立寄りて眺めんともならず、只車の上より見やりつゝ、倘搖られ行く程に、やがて三輪の里に着きぬ。
明神の前なる茶屋にて憩へる時、例の乙羽淨瑠璃を思ひ出して、奈良の旅籠屋三輪の茶屋とは、吾等が

身の上によく似たり。シテ其の二口村と云ふは、矢張り此近所とか、茶屋の小女に尋ぬれば。此女も變物にて、いかにも此處の近所なれど、二里許りは離れたりと云ふ。それではお三輪の家はと聞けば、それは直き此先きでムんすと答ふるに、逢ふたら宜敷云ふて呉れト、串戯を云ひながら其處を立出で、明神の境内に入れば、聞きしにたがはず杉木多く、而も大方は三抱へに餘れり。されども社殿の邊は、思ひし程に物凄からず、殊に今は櫻の若木など植へて、里人の遊園となりたれば、此處にも俗塵の立ち昇りて、三輪こそ神寂たる處ならめと、兼て想ひしは仇となりぬ。

此より初瀨までは二里なれば、一時間許りに走り着きて、井谷屋と云ふに宿を取りしは、入相近き頃なりけり。

何處ぞ廣い座敷へ通せと、云ひ樣に二階へ上らんとすれば。番頭後より呼び止めて、誠に申譯無けれども、今宵は生憎込み合ひたれば、何卒此にて御勘辨と、氣の毒氣に案内したるは、帳場の隣に十二疊許りなる、薄暗き座敷なり。吾等は頗る不平なれど、先客とあれば追出すともならずと、其處に陣取り。先づ浴して埃を清め、膳に向ひて飢を凌ぎなどする程に、二階座敷次第に騷がしく、やがて音頭を唄ひ初め、手拍子打ち囃しなどして、夜更くれども尙止めず。さては調子外れの三味線に、濁たる聲の流行唄、それに合はして立舞ふと覺しく、椽の板を踏み鳴らして、天井も崩れん許りなるに、下なる客の呟けば、宿の者は氣を揉みて、今少しお靜にと云へど、中々聞入るゝ氣色も無く、尙も意地になりて騷ぎ立つ

るに、吾等眠らんとすれど眠られず。仕様事無しに話をせんと思へば、二階の物音に遮られて、聲さへ通せぬ程なるにぞ、もはや許すべき處にあらずと、蒲團をガバと跳ねのけて、源惡太郎眞先に進めば、續いて衣笠の二郎、大江の冠者等、寢衣の儘に躍り出で、梯子段に片足かけて、二階の方をハッタと睨めつけ、如何にや同者共承はれ。汝等田舍漢の分際として、吾等江戸ッ子の上に陣取るさへあるに、野路ならば知らぬ事、家の中にありながら、蛙の樣なる聲を立てゝ、肥料臭き歌を唄ひ、吾等が安眠を妨害すると、近頃奇怪千万なり。速かに鎮まらば可し、かくても尚鎮まらぬにおいては、其分には棄て置かぬぞッと、大喝一聲呼はれば、元より烏合の同者共、口計りなる江戸ッ子の、威勢に皆々舌を捲きて、忽ち水を打ちたる如く、鎮まり返つて見えたりけり。(此處少々おまけあり)

(其十五) 紅葉途中より歸らんと覺悟の事

かくて二階の同者の喧擾も、漸う鎮まりて見えしかば、皆々又枕に就きしに、此爲に眼冴えてや、如何にしても眠られず。隣座敷の高鼾を、心憎くも思ふ折から、紅葉重たげに頭を擡げ、吾に向ひて云へるやう。喃小波、吾今日までは我慢したれど、例の腫物頻りに疼きて、今は中々に堪え難し。眼の患は漸く癒えて、花を見るに故障は無けれど、山路を辿ると覺束なし。されば誠に無念なれど、明日は吾のみ此處にて別れ、まづ京都へ赴きて、心靜に保養せし後、一人出でゝ吉野に登らん。君達は足が達者なれば、豫定の如く多武峯を越へて、ゆる〳〵吉野を見物せられよ。と心細げに云ひ出でたり。常ならば如

何なる險山も物の數とせず、吾先にと進む惡太郎の、病の爲めとは云ひながら、斯く弱き音を吹くと、遂には泣かぬ辨慶の、一期の涙もかくあらんと、いと氣の毒に見えしかば。小波と花瘦とは、交る〳〵之を慰め、途中は吾等引請く可ければ、共に吉野迄行きたまへ、車もあれば駕籠もあるべし、何でう恐るゝことあらんと、言葉を盡して勵ませしかば。紅葉尙も首を打ち振り、其信切は嬉しけれど、かゝる苦痛の身中にありては、花を見るとも面白からず、折角行きし甲斐も無し。吉野の山のあらん限りは、花は今年にも限らねば、此度は思ひ止らんと、覺悟を極めし體なるに、吾等も今は強ひても勸めず。さらば君の言葉に委せ、明日は吾等に先立ちて、京都に入るこそ然るべけれ。尙彼地に入りし上は、まづ吾が家を宿となし、云々の醫師に治療を乞ふべし、吾君の爲に紹介せんと、小波は床を出で、旅硯に墨磨り流し、一通の添書を認め、是を持ちて吾が家の、留守居の者に示されよ、惡き樣には計らうまじ。共に行かぬは友達の、交誼に欠くる樣なれど、折角此處まで來しものなれば、吾等は明日吉野へ赴き、一日後れて歸るべければ、許し玉へと云ひつゝも、件の書狀を紅葉に渡せば、紅葉はそれを受取りて、頭陀袋の中に收め、又元の枕に就かんとする時、不圖傍の屛風を見れば、今迄は氣も付かざりしが、雲龍の圖の書きたるを、逆樣にぞ立てたりける。

紅葉之を見るより、かゝるものゝあればこそ、吾一人友に別れて、歸るとはなりしなれ。不吉なる哉逆屛風と、眼を怒らして睨めつけしが、又之を立て直す勇氣も無く、之も吾が花運の拙き故かと、其儘ゴ

ロリと寝返りして、呟きながら眼を閉ぢぬ。

此時乙羽水蔭の兩人は、逸早く華胥の境に入りしが、此事の夢に見えてや、頻りに切齒なしたりけり。

（其十六）　紅葉日限地藏に祈誓の事

かくて其翌朝、皆々一度に床を出で、面を洗ひ口を嗽ぎし程に、宿の婢出で來りて、昨夜の客の早朝に立ち去りしかば、此方へ席を換へたまへと、更に表二階へ案內しぬ。

此時紅葉は。何思ひけん椽側に立ち出で、頻りに足を踏み試み、小首を傾け考へ居るに、乙羽傍より戲れて、此處にも鶯張りのあるにやと問へば。紅葉首を振りて、いやとよ、昨夜の苦痛に引かへて、今朝は脚もいと輕し。元より全く癒えしにあらねど、此分ならば吉野まで、行かれぬ事もあるまじと云ふ。小波斯くと聞くよりも、そは此上もなき幸なり。昨夜は君が苦しむまゝに、吾も吉野行を止めしかど、今朝は苦痛も薄らぎしとならば、吾等と共に行きたまへ。折角思ひ立ちし花の旅、未だ當の敵の吉野にも會はで、はや味方一人を失ふと、何ばう口惜しき事ならずや。少し位の痛疼ならば、勉めて行くこそ然るべけれ、今一日の辛抱なりと、又も切りに勸めしにぞ。紅葉も遂に志を翻へし、さらば君達の言葉に從はんと、此處に漸く愁眉を開けば、他の人々も打ち喜び、花運長久花の旅萬歲と、異口同音にぞ祝しける。

それより皆々打ち揃ひ、まづ與喜の天神より、長谷寺かけて見物に出でぬ。

與喜天神は天神山の半腹にあり。石壇を上ると二町斗り、老杉鬱蒼として生ひ茂れる中に、少やかなる祠宇あり。さして立派にはあらねど、流石に神寂びて見えたり。

此處より長谷寺へ行くには、女坂とも覺しき石壇を下りて行くなり。此時芝居好の水蔭、四邊の景色を見廻はして、此儘道具立に遣ひ度し、物凄き立廻りには持つて來いなりと、はや浮かれ出して、何やら小聲に饒舌りながら、反身に成て石壇を下り行く中。忽ち最後の一段を踏み外づして、仰視樣にズデンドウと倒れぬ。石の上ならば嘸痛からんと、小波進みよりて助け起し、怪我は無いかと尋ぬれば。水蔭面を皺めながら、いや何處も痛めず、吾柔術の覺あれば、かゝる折にも油斷なく、左の手にて大地を打ちしかば、身體に微塵も痛所無し。是も偏へに柔術の德、君等もちと習ひたまへと、いと誇り顏に語りながらも、人目を盜みて袖をまくり、右の肘なる擂剝瘡に、そと唾付けてぞ居たりける。

長谷寺に至れば、兼て噂に聞きしに違はず、樓門より本堂まで、一町に餘れる石壇に、廻廊の如く屋根を設けたるが、其半は二三年前燒失せしより、更に新しく建ちしものとぞ。又此石壇の左右には、牡丹數多植へ列べたり。是ぞ長谷の牡丹とて、昔より名ある所以なるべし。本堂は京の清水を小さくしたる如く、舞臺よりは初瀨の町を見おろして、天神山の森も景の中なり。例の如く瓦を寄進して、內陣を見物すれば、本尊には十一面觀世音、總身は金箔塗にして、其高さ三丈に餘れり。先年鎌倉の長谷寺に赴きしとき、大和の長谷寺は元木にして、此處は其裏木なりと聞きぬ。元木に勝る裏木無しと云へど、吾が眼

には何方も同じ様なり。
此地内に日限地藏と云ふあり。茶湯を患部に塗りて、日を限りて祈るに、如何なる難病も癒えずと云ふ事なしと、番人の得意になりて語るに、佛嫌ひの紅葉も、背に腹は換へられずや、ツカ〳〵と進みより、賽錢を投じて茶湯を貰ひ、之を例の腫物に塗りつけ、南無大慈大悲の地藏菩薩、佛は嘘をつかぬものなら、日限と云ふ其名に反かず、今晩迄に癒させたまへト、合掌なして祈りければ、さりとはあまり火急な注文、地藏樣も呆れたまはんと、番人苦い顏をなしぬ。

（其十七）乙羽、山蔭山路に爭論の事

これにて見物も畢りたれば、いでや吉野へ向はんと、一ト先づ宿へ引揚げて、思ひ〳〵に支度をなしぬ。此時例の紅葉は、足の苦痛の氣遣はしければ、吾等に先ちて車に乘り、直ちに吉野へと志せしが。小波を初め四人の者は、車を櫻井の町端に乘り捨て、勇み進んで多武峰の、頂差して登り行きぬ。
麓なる石の鳥居より、談峰神社までは五十町に餘れり。されども路さほどに險ならず、一町毎に立石ありて、麓よりの町程を刻みたれば、辿るにいと便宜し。
先是水蔭は、東に殘れる母への土產に、奈良にてあられ酒を求め、二合入りの德利をブラ〳〵と提げ居りしが。小し斗りの荷物でさへ、あらずもがなと思ふ山路にさし掛りては、件んの德利漸く邪魔に成り、誰ぞ持つてくれぬかと云へど、呑ませぬならば嫌なやと云ふに、水蔭ほと〳〵持て餘し。果は小し

自棄を起して、よし〳〵吾に分別あり。あられ酒は奈良の名物にて、母の好む處なれども、今は交通の便利なる御代に、之を販ぐ家強ち奈良にも限るまじ。京大坂には出店もあらん、其處にて買はゞ同じ事なり、さうぢや〳〵と點頭きつゝ、はや其栓を引きぬきて、口よりガブ〳〵と呑み初むれば。さもあらんと兼てより、待ちかまへたる他の面々、吾にも呑ませ、吾に貸せと、右左より寄りつきて、今迄は邪魔物にせし德利をば、寶物の如くに取り合ひて、見る〳〵中に二合の酒は、一滴だも殘らざりき。

山路來て矢鱈にうましあられ酒

とは、此時骨法師水蔭が、舌鼓打ちての秀逸なりけり。

かくて尙登り行く程に、忽ちにして路の傍に、年經りたる山櫻の、今を盛りと咲き誇りたるあり。さてはもう吉野へ來たかと、乙羽醉眼を見張りて云へば。水蔭廻はらぬ舌を卷きて、君とぼけては困るじやないか、まだ多武峯へ登らぬ中に、吉野へ來てたまるものか、君はあられ酒に醉ふたなと、一番極め付くれば。乙羽カラ〳〵と笑ひて、縱令ひ吾地理に暗くとも、それ位の事は知つてるさ。元より洒落に云つた事を、眞面目に聞く君こそ醉ふてる。イヽヤ君が醉うた。ナニ君がと、鷄卵屋の喧嘩の如く、君が〳〵との爭論に、小波花瘦の兩人は、まづ〳〵と双方を宥めて、表に櫻茶屋と札掛けたる、傍の掛茶屋へ兩人を連れ込み、澁茶に仲直りの茶碗を擧げさせ、果は笑に機嫌を直して、又もや路を辿り行けば、程なく多武峯の半腹なる、談峯神社にぞ着きにける。(此處事實無根と、取消の申込あるべし)

(其十八) 多武峯を越る事

抑も此談峯神社と申すは、藤原氏の總本家、大職冠鎌足公を祀れるものにて、俗に大和日光と云ふは是なり。成る程奇麗には相違無きも、彼の日光の東照宮に比しなば、其麓にも及ぶまじく、東京の上野東照宮にて、此相手は澤山なり。此位のものを大和日光と誇りては、大和の沽劵が下りはせずや。

されども境内は流石に清淨にして、楓樹のいと多きは、秋の眺めも思ひやられぬ。まづ社殿に至り、例に依て神樂の所望せしに、十二三計りの神女二人出でゝ、神前にて舞を奏しぬ。其樣春日にて見しに變らねど、此處の地方は只一人にて、同じ年頃なる神女の、圓座の上に坐を占めて、聲高らかに神歌を唄ふのみ。琴も笏拍子も無きは、聊か物足らぬ心地す。それより寶物を一覧し、鎌足公が天竺の土産なりと云ふ、菴羅と云ふ樹を眺め、また名高き十三塔を見物し、拜殿より秡殿の前を過ぎて、花中宿と云ふ旅亭に入りぬ。

此家は元花中房と云ひし寺なりし由、花の中宿とは嬉しき名ならずや、此處にて晝食を認め、それより上市へと急ぎぬ。

吾等初め初瀨にて尋ねし時、多武峰は登り五十町なりと聞きしかば、もはや是にて登り詰めたる事と思ひしに、何ぞ計らんこは其半腹にて、是より上市へ下らんと思へば、尚四十町餘り登らねばならず、而も其險岨と今迄の比に非ずとは。流石の豪傑等もこれに少しショゲ返りしが、まゝよ乘り掛けた船なら

で、登りかけた山なれば、今更弱い音を吹く可らずとて、仕様事無しに勇氣を振ひ、やがて小僧一人を傭ひて、之に一同の荷を擔がせ、吾等は脚絆の紐〆め直しつゝ、悠々として立ち出でしが、聞きしに違はず路急にして、登る時は胸を突かんとし、降る時は背を摩らんとす。あまりの苦しさに小波嘆息して、此處こそ今度の旅行の中にて、一番險しき處ならめと云へば、水蔭後を顧みて、笠置も隨分苦しかりしと云ふ。小波尙も首を振つて、イヤ〳〵笠置などの比にあらずと、氣張つては見しが、なんの君は駕籠の中で、居眠をして居た癖にと、傍なる花瘦に横鎗を入れられて、是には小波一言も無かりき。

兎角して上市に出づれば、例の吉野川を間に挾みて、兩方に小高き山あり、荷持の小僧指して、あれが妹山背山なりと云ふ。されども山櫻の一本だに無く、只青葉の茂れるのみ。

左右に櫻花の爛熳たるは、矢張り芝居の噓なりけりなど、小言云ひつゝ來る程に、忽ち左手の河原に當て、鯨波ドッと起りぬ。スハ伏勢よ油斷すなと、皆々キッとなりて其方を見やれば、是なん河原に小屋を掛けて、相撲の興行なすにぞありける。

こは面白し〳〵とて、吾等は此方の岸に立ち、暫らく見物せしが。角力取はいづれも斬髮なるに、さては素人相撲かと云へば、小僧答へて、今日は三月のお節句故、村の若者等が遊戯に、かゝる事をなすなりと云ふ。これにて初めて心付けば、成る程今日は舊暦の、三月三日なりけるも。桃の節句に妹背山の邊を通るも、よく〳〵深き緣ならずや、と乙羽感心したる體にて云へば。さればこそ此處許に久我助あれど

も、似合はしき雛鳥の無きが恨みぢやと云ふは、例の芝居好の水蔭なりけり。
やがて櫻の渡船場に着きしかば、皆々船に乘り移りしに。先きに多武峯を越る頃より、吾等が後に從き來りし一匹の牝犬、此處にて遂に取殘され、恨めし氣に此方を打守る樣、いと憐れに見えしかば、小波水蔭の袖を引きて、あの雛鳥では何うぢやと云へば、乃公は犬芝居の事は知らぬと、水蔭大に腹を立てぬ。

（其十九）　小波大に吉野を罵る事

櫻の渡船場を渡りて、尙行くと五十町、彌々吉野に差し掛りぬ。
見渡せば彼方の山の半腹は、霞か雲かと云ひ度けれど、僅に淡紅の綿を積みたる如し。さてはあれが櫻かと云へば、眞先に立ちたる水蔭は、二三年前に一度來しとあれば、案內顏に吾等を顧みて、あれが一目千本ぢや、なんとすばらしい物であらうがのと云ふ。乙羽花瘦の兩人は、之を聞きて感心の體なりしが。小波一人は不平顏にて、あれが一目千本なら、吉野で一番の見所かと問ひ返せば、尙奧の千本と云ふもあれど、櫻は此處が尤も多く、貞室がこれは〳〵と驚きしも、此處の他はあるまじと答ふ。
於是小波大に嘆じて曰く、吉野々々と喧ましく云へど、此處が所謂一目千本とて、吉野一番の見所ならば、他は推して知るべきのみ。名物に甘い物なしとは云へども、さりとては吉野の名のみ高くて、其實之に反するとの甚しさよと云へば。水蔭は少し勃然したる體にて、こは小波の口が過ぎたり。苟に

も日本一の吉野山、昔より詩人も歌人も、口を極めて褒め置きたるに、君一人貶すは心得ずと、皆まで云はさず小波カラ〳〵と打ち笑ひ。さては水蔭も吉野贔負か、其小理窟が片腹痛し。見給へあの山續きは、平々凡々たる雜木山ならずや。木深き峰もあらねば、水清き溪も見えず。一目千本と大袈裟には云へど、其半は新出來の公園にでも植ゆべき、高の知れたる稚木にて、緣日ならば一本が、拾錢宛には買はるべし。されば遠くより望むとも、峯の白雲とは思ひもよらず。近く之を眺むればとて、誰か路を踏み迷はん。去年の栞にも今年の栞にも、路は一筋よりなきものを、西行が心配は入らぬとにて、貞室がこれは〳〵と云ひけんも、恐らく二度吃驚の意なるべし。其外口を極めて褒稱せし、古今の詩人歌人等は、何れも氣の少さき奴ならずば、吉野の山靈に追從せしのみ。之を思へば、嵐山盆山の如しと雖も、隅田堤俗に堪えずと雖も、吾が眼には遙に吉野に勝れり。かゝるくだらぬ處とは、今日只今まで夢にも知らず、此年頃戀ひ焦れしこそ、返す〳〵も不覺なりけれと、小波頻りに憤懣して、氣色惡さに脇目も振らず、件の一目千本を、スタ〳〵と登り行て、やがて佐古屋と云へる宿に入りぬ。

まづ奥の座敷に通れば、紅葉はやゝ二時間程前に着し、退屈まぎれに一寢入りせし後なりとて、一人欄干に憑れて茫然たりければ。小波まづ進み寄り、いかに紅葉、吉野はつまらぬ處では無いかと云へば、紅葉も點頭きて、吾等も大に同感なり、まづ之見たまへとて、差し出したる半切に、

夢に見し吉野は花の名所哉　紅葉

とあり。小波はまだ〳〵手ぬるしと、筆おつ取りて其次に、

花は是吾は吉野に驚かず

と走り書きにぞ認めける。

此時花瘦は又紅葉に向ひ、例の足の腫物はと尋ぬれば、されぱよ、先きに初瀬を出で、車に搖らるゝと半日、壺坂の石路にて遂に吹き切り、一時は苦痛に堪えざりしが、今は大に樂になりぬ。此分ならば日限地藏も、萬更馬鹿には出來ぬやうなりと、打ち戯れて答へたり。

（其二十）吉野を去る事

今宵ぞ艸枕の打留と思へば、流石に名殘惜しき心地して、枕には早く就きしかど、左右無くば夢を貪らず、四方山の話より果は文章論となり、彼論ド是駁し、甲談じ乙辨じて、口角泡を飛ばす程に、隣座敷の客の迷惑も、さこそと思ひやられけり。

明くれば十九日、いでや見物をなさんとて、朝の八時頃に宿を出で、足弱の紅葉のみを駕籠に乘せ、殘りの四人は其前後に立て、まづ邊近き藏王堂より、吉水神社へ參詣しぬ。此處には延元帝の玉座を初めとして、源廷尉が閉居の間、其他南朝の遺物種々あり。まづ案內料を納めて拜觀するに、何れも懷舊の淚を催さゞる無く、中にも玉座を拜する時には、胸は忽ち迫り來て、直ちには去り難かりき。

それより岨路に沿ふて、如意輪堂を一見し、延元帝の御陵に參拜せり。御陵は近來修繕を加へたりと覺し

く、掃除も亦行き屆きて、いと貴とげには見ゆれども、却りて感慨の情を誘ふに力無く、「延元陵上落花風」なんど云ふ句は、漸く嘘に成らんとせり。

此御陵の前にて、圖らずも吾師甕江先生に會しぬ。先生は元是諸陵頭、今朝京都の旅館を發して、此處に參拜せられしなり。

それより元來し岨路を引返すに、此邊にも櫻樹多く、路の左右を擁したれど、今は盛を過ぎたれば、花洞を行くと云ふ程にはあらず。やがて竹林院に入り、芝山の上なる床几に腰打ちかけて、四方の景色を眺むれば、數奇を極めたる庭の面に、幹太く枝振面白き櫻の、處々に咲き亂れたる、流石に飽かぬ眺望なり。

かゝる處へ宿の厮の、兼ねて申し付け置きたる、辨當を持ちて來たりしかば、まだ時刻は早けれど、直ちに開きて之を食し、尙暫時休憩する中。尙是より奥へ登りて、西行庵苔清水、けぬけの塔をも見物すべくやなど、云ひ出づるものもありしが、何と無く心進まず、もう止さうぢやないかと云ふ、因循說勝を制して、其儘宿へと引揚げたり。

これにて吉野の見物も、まづ一ト通は濟ませしかば、いでや出發と皆々支度なし、佐古屋を出でゝ下市へと急ぎぬ。先に奈良にて別れし時、吉野にて落合はんと約せし歌川法眼は、如何なる障や出來にけん遂ひに姿を見せざりけり。

歸途には昨日來し坂路を降だらず、山の春をウチ〳〵と行くと五十町、村上義光の墓、吉野神社等の前を經て、漸う麓に出で、其處より車に乘り、六田渡船場を右に見て、吉野川の岸を下市に出つれば、千石橋と云ふ橋あり。例のペンキ塗吉野川には似合はしからねども橋上より見下ろす時は、又捨て難き感して

若鮎や筏うねらす吉野川

と、其實景を手帳の端に書きつけ、後の自慢の種となしぬ。

それより車坂と云ふ峠を越ゑ、高田の方へ向ふ折から、不圖彼方を見れば、眞四角なる面に、鍔廣の帽子を載せたる、一種異樣の人物の、此方をさして來かゝりながら、車の上に伸び上りて、もう皆さん歸るのですかト、聲を掛けたる者ありけり。

（其廿一）一同唯想樓へ引揚之事

聲を掛けたる其人を、誰なるらんと見てあれば、是ぞ先きに奈良にて別れし、歌川法眼國松なりける。眞先なる水蔭は、かくと見るより大音に、遲かりし〳〵と、由良之助扱ひに呼はれば、國松は又辭を卑うして、大層お早いではありませんかト、仲居の樣なる口調にて云ひぬ。

されども今更引返す譯にもゆかず、且つ此處は往來中、蟻の物言ふ如く立ち止まりては、他の往來人の邪魔なればと、名殘惜しくも袂を別ち、彼は吉野我は亦、高田をさして車を飛ばしぬ。

戸毛と云ふ處の立場にて一寸休み、御所の町を過ぎりて、菜の花の間を行く程に、今日も日和いと長閑く、平坦なる畑道に、よどみなき腰車の搖れ鹽梅、何とも云へぬ心地好さに、吾が前の車に乘りたる乙羽は、帽も落ちん計りに首を傾け、他愛も無く眠り初めしが。車の小石に當る每に、驚きて四邊を見廻はすさま、後より見るにいとをかしく、彼の不識庵の宗匠が、月が瀨記行の途上に、

鶯にまた取られけり駕籠の夢　　聽秋

の句あるを思ひ出で、

菜の花や車の夢の醒むる時

と、燒き直して獨り打笑みぬ。

かくて高田の停車場に着せしは、午後二時半なり。滊車の出づるまで尙一時間もあれば、此處にて腹を拵へるべしとて、只或る茶屋に入り、生玉子と生節にて、時ならぬ晝食を認めたり。

三時半に乘り込みし滊車を、五時頃湊町にて降り、それより腕車にて大坂の町を橫切り、又梅田より滊車に乘りて、京に入りしは八時前、はや日は全く沈て、四邊に客待の腕車の提灯、星の如くなる頃なりき。まづ一同を伴ひて、柳馬場なる唯想樓に、一週間ぶりにて立歸れば、留守居の者共嬉しげに門に迎へて、御機嫌ようお歸りとの挨拶、流石に惡くは無きものなり。

此處まで來れば用なしとて、例の革提を肩より外づし、永々御苦勞と劬はりつゝ、其裏に記して曰く、

花の旅今年は人を羨まず

短編小説　明治文庫第壹編　終

明治二十六年九月十二日印刷
明治二十六年九月十五日發行

定價金拾五錢

明治廿六年八月三十日內務省許可

版權所有

編輯兼發行者 大橋新太郎
日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 杉原辨次郎
京橋區元數寄屋町四丁目二番地

印刷所 杉原活版所
京橋區元數寄屋町四丁目二番地

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

內外古今逸話文庫

毎月壹回發行

毎編讀切木版密書入 洋裝美本印刷鮮明

正價 一冊金拾二錢●六冊前金六拾七錢●十二冊前金壹圓廿五錢●郵稅一冊金四錢宛

古今の長き、萬國の廣き、

其間名賢奇傑偉人巨匠の言行に關する、快談奇話珍說妙語、その他百事萬物、大にしては、歷史を補ひ、智見を廣め、然らざるも以て話柄に供し消閑に資すべきの談話を求めば、何ぞ啻に百千萬億件にして盡きんむや、本書は廣く此種の逸話の、殊に正確にして興味あり資益あるべきものを網羅し、各々十項に繫けて逐月刊行、以て幽を闡き光を揚け、異を攟め智見を博くするの料に供せんとす。

項目

文藝　武事　洒落　豪爽　機智

德行　品藻　立志　畸行　博聞

凡そ記載すべきの事項、此數種に限れるに非ず、是唯だ其大要を示すのみ、乃ち天下笑ふべく泣くべく喜ぶべく怒るべく樂むべく哀むべく、以て智を廣め德を養ふべきの談は、必ず網羅して遺さゞらんことを期す、希くは文獻徵するに足らざるの嘆を免れしめむか。

●第一編 九月二十日發兌

博文館編輯局校訂　（製本既成）

校訂 眞書太閤記　全三冊

洋裝背皮金字入　正價　一冊五十錢　一通運料一冊金拾錢
紙數四千五百頁　　　　全部一圓九十錢

皇祖開國以來茲に二千五百有餘年、英邁非常の士實に千を以て算ふべし、然して一時俊傑雲の如く英豪林の如くなりしは元龜天正の際を尤も盛なりとす、中に就て身僕隷より起り風雲に乘して天下を席捲し職關白の尊に至りて位人臣の榮を極め所謂一世の智勇を推倒し萬古の心胸を開拓するの偉畧を備へたるは豐太閤その人に非すや、勳業の隆經綸の大洵に千古比なしといふべし、眞書太閤記三百六十卷、その一生の經歷を模寫曲盡して人をしてその炯々の眼光を覩、喑啞叱咤の聲を聽くの懷あらしむ、惜むらくは魯魚頗る多く亥豕亦少からず、仍て善本數種を取りて參訂比校し、廣く世に公にす、蓋し英雄の面目を全するに庶幾からんか、此書一讀以て悶を消し鬱を排するの小說に充つべく、以て正史の闕漏を補ふべく、亦以て勇武節義の氣象を養ふに足るべし

博文館編輯局校訂　（製本既成）

校訂 源平盛衰記　全一冊

洋裝背皮金字入　正價　一冊五十錢　一通運料拾錢　郵稅拾六錢
紙數一千三百頁

我邦演義の稗史中殊に舊くして尤も面白きは源平盛衰記に若くものなし其事其文共に千古に傳ふべきに足れり、古來版本寫本十數種ありて、廣ろく世に行はるゝも之が爲めなり、但當時文運未だ開けざるの際に成り、而して歲次の久しき彼此傳寫したるが爲め、魯魚亥豕の訛謬頗る多く、假字の用法を誤れる、假字文中に往々和習の漢語調を雜へたる等は諸本何れも然らざるなし、隨て世人が此書の流讀に不便なるを歎ずること久し、仍て今回數本を集て互稽參訂し、字を正し、假字を改め、句讀訓點の謬誤を校正して、以て世に公にす、盛衰記の版本世に多しといへども、恐らくは本書を以て唯一の正本となさゞるを得ず、猶ほ古劍の新たに磨を經たるものゝ如く、精氣光怪、千歲始めて顯はるゝものと云ふべし

博文館編輯局校訂　（製本既成）

校訂 南總里見八犬傳　全三冊

洋装背皮金字入 紙數三千五百頁　正價 一冊五十錢 全部一圓四十錢　通運料 金拾錢

文の妙、事の奇、馬琴氏の八犬傳は實に宇内有數の珍書なり、唯其卷帙浩瀚にして藏架に不便なるを憾むるのみ、本館仍て之を三卷に約す、用紙精良、印刷鮮明、製本は美にして堅く、挿畫は密にして麗し、且卷首に附するに依田學海先生の細評を以てす、先批評を讀みて後本書を味ひおば、必ずや手の舞ひ足の踏むを覺えさるの妙味あらん

博文館編輯局校訂　（製本既成）

東海、木曾 奥羽、江ノ島 道中膝栗毛　全一冊

洋装背皮金字入 紙數一千三百頁　正價 金五十錢　通運料拾錢 郵税十六錢

快活磊落ある二人あり、膝栗毛に鞭ちて海内を跋渉し、足跡大八洲に遍し、頂天立地、旅を家とし形骸を土石とす、放浪自恣、滑稽洒落、その胸中實に光風霽月の如し、三伏の炎暑に苦しめらるゝの人、世途の塵熱に勞るゝの人、無事に困しむの人、匆忙に倦めるの人、共に一本を購ふて以て、清涼の仙丹に當て給ふべし。抑も二人を誰とす、曰く彌次郎兵衞、曰く喜多八、二人の言動を爲したるものは誰ぞ、人も知たる一代の奇人、十返舍一九その人なり、一九は如何ある人物ぞ、卷首の評傳を讀みて、一九と膝栗毛とを知悉すべし。

博文館編輯局校訂

校訂 **梅暦、春告鳥** 全一冊

洋裝背皮金字入 紙數千三百頁 正價金五拾錢 通運料金拾錢

爲永春水の小説は天然の美人の如し、敢て意を用ゐて修飾せざるも、情致纒綿、愛嬌滴れんとするものなればなり、その人を動かす處はその天眞爛熳の處にあるなり、梅暦、春告鳥は、爲永流即ち人情本中の傑出たり、これによりて彼の馬琴、種彥、一九、三馬等と併稱せらるゝを得るなり、梅暦は惠の花、梅暦、辰巳園、英對暖語、梅見舟以上は五種の總稱にして春告鳥は春告鳥、雛の梅、春の若草三種の總稱なり、本編は此八種を集めて、例の美麗鮮明なる印刷、堅牢精良なる製本を以て發刊せられたり。

博文館編輯局校訂

校訂 **通俗三國志** 全二冊

洋裝背皮金字入 紙數二千五百頁 正價一冊五十錢 通運料一冊拾錢

古人曰く陳壽の三國志は遙に歐陽修の五代史に勝れり是れその人の然るに非ず、その時代の面白きが故なりと、その時代の面白きはその時代の人物氣運の面白ければなり。玄德、曹操、孫權、皆不世出の雄なり、之に從ふ人物亦皆希世の人物なり、天下三分、幾多不出希世の英雄豪傑出でゝ、各々鹿を中原に爭ふ、非常の勇者あれば更に之に勝れる勇者あり、非常の智者あれば更に之に勝れるの智者あり、奸人あり廉士あり、義者あり仁人あり、龍騰虎踞、雲蒸霧變、眞に天地間一大劇場。

尾崎紅葉山人著　（富岡永洗畫）

鬼桃太郎

全一冊和裝
正價金八錢
郵稅二錢

本書はむかし〳〵の、鬼桃太郎物語を、有名なる紅葉山人が、記されたるものにて、從來の桃太郎とは、大に異なり、其面白きこと、實に譬ふる物なし。幼年諸君は錢を惜しまず、ドシ〳〵購讀して、其愉快を感ド賜まへ。

巖谷漣山人著　（武內桂舟畫）

猿蟹後日譚

全一冊和裝
正價金八錢
郵稅二錢

本書は、猿蟹合戰の後日に起りたる譚を、漣山人が麗筆を以て、面白ろおかしく、握飯と柹の種子の一代記を、述べたるものなり。而して其間に果因應報の、所謂德性涵養を含蓄せしむ。本書は實に子女ある家への贈物には、至極輕便にして、廉價なる上品本なり。

巖谷漣山人著　（藤島華僊畫）

新御伽草子

全一冊大判
正價二十錢
郵稅四錢

可愛らしき詩境の家元を寫して、小供にヤンヤと喝采せらるゝ、漣山人は今又た滑稽と訓誡との二種を、巧みに渾和融合して、奇妙なる舌切蛤、かち〳〵山狸紀念碑、七羽鳥、由良太郎武勇譚、極樂園、手枕艸紙など色々の譚を集められたるは本書なり。爺婆の陳腐なる趣向を脫し、文章と挿書は新麗なれば、秋夜の伽には又となき小供諸君が、最上の好珍本なるのみならず、幼年子女への贈物には無二至極的當なり。

幸福散史著

西洋妖怪奇談

全一冊洋裝
正價十二錢
郵稅四錢

本書は小學生徒が修身講話の材料として泰西の原書有名なるグリム其他種々の原書により面白き奇々怪々の昔物語を集め勸善懲惡の道を說きたる好書なり。

巖谷漣山人著　（武内桂舟畫）

こがね丸

全一册和裝　正價拾二錢　郵稅四錢

むかし〳〵、或る里の莊官が家に、月丸、花瀨、となん呼べる、雌雄の犬ありけり、年頃忠實に主家に事へけるが、或る時、其近傍の山に住みける、金眸大王と云へる、いとあら〳〵しき虎の爲めに、嚙み殺され、あいなき最後をとげけるが、そが雌雄の間にもふけたる、一子黃金丸、艱難辛苦薪に伏し、膽を嘗め、首尾能く親の讐、金眸を打取る、一種新趣向の復讐談を、漣山人が例の艶麗流調の筆を以て、面白くかきつらねたるものあり。

紅葉山人著

●二人むく助

正價十二錢　郵稅四錢

江見水蔭君著

●今辨慶

正價十二錢　郵稅四錢

巖谷漣山人著

暑中休暇

全一册和裝　正價十二錢　郵稅四錢

暑中休暇に於ける少年の行樂、敘し來りて、理想淸く着眼潔し、天使謠ひ、星文舞ふ、神韻躍り、琴線鳴る、少年が滿腔快樂の情、天眞詩美の境、穿ちて微に入り、畫きて神に通す、嬉々として父母の前に盤旋し、怡々として弟妹の傍らに談笑す、山川の色、雲煙の美、悠揚相迎へ、夜々睡遊の夢を勞せし莊麗なる城外の風景、翠雲參商を隔て鯨山の低迷、樂事を談せし朋友の面貌、愛せし所の花卉、植ゑし所の樹木、或は蒼波萬里の海に投し、時に萬丈怒雷の瀑に浴し、幽勝千仭の境を躋り、白雲靑山の邊を踏みし、凡て彼等が天眞の詩境、自然界裏、巧みに少年の品性を描き、讀者をして坐ろに明治少年の面貌を想はしむ、本書は實に天國樂園の記事、品性涵養の好文學談なり。

嵯峨のやおむろ君著

姉と弟

全一册和裝
正價十二錢
郵稅四錢

和樂の園に咲き溢れし笑の花は實に人生の純善純美なる者にして一家團欒の樂玆にあり。一國平和の樂玆にあり姉の仁愛は菩薩の如く弟の悌友は神子の如し。一國民の君に仕へ國に盡くし親に盡くす皆此仁愛と悌友の心を擴張せしに外ならず。本書は嵯峨の屋君が一種神靈純潔なる筆を揮ふて姉と弟との無邪氣淡泊なる談話に托して父母の厚恩若くは人生彝倫の大道を説示したるものなり西人は稱して日本を童子の樂園といへり、我明治世界の童子文學社會の大家より這般の面白き物語を受く、其趣向感想共に著者自から子供らの位置に轉して著述せられたるものなれば、あどけなき兒童一度本書を繙かば忠孝彝倫の大海に先つ立動かす巨濤となり、億萬の兒童は喜んで之を誦せん。

南新二君著

甲子待

全一册和裝
正價十二錢
郵稅四錢

甲子待は是れ禍福巡環正直爺が家門繁榮の好譚筆致婉曲意匠純潔其正實なる好漢を解剖して精細深刻其肉幾塊其骨幾節其靈驗ある大黑天を寫すや他の舌頭より捻出して尤も巧妙秀穩本書の發端は大黑天信仰の商人亡命して東叡山護國院の大黑天を失ふに始まる家門繁榮の商人一度之を失ふや數奇落魄窮して死せんとするもの幾度渠が再び大黑天を得るや幸運の曙光漸く輝き生別せし我愛子は手を舉けて再び現はれ落魄せし我家門は日を逐ふて再び榮ふ。其好漢を描き兇夫を寫し正實を叙し虚僞を彩とるの處かの少年讀者をして不識不知道德の素を思はしむ他に趣味饒多なる滑稽譚を添ゆこは實にこれ愉々快々なる三題噺筆は流麗輕快にして滑稽縱横意は諷世嘲俗にして冷笑百出大珠小珠の盤上に落つるか如く輕舟に駕して急渓に下るか如し甲子待庚申待幷に是れ一雙の美觀早く讀者の眼前に輝かむ

村井弦齋君著

紀文大盡

全一册和裝
正價十二錢
郵稅四錢

商界の大英傑千古の快男子紀文大盡の性行、精描神に入り潤彩目を奪ふ文情絶世實に是少年文學の壯觀雄色、紀文身漁村の邊隅に生れ早く呑海の氣あり、至孝舜の如く、病父の爲めに竹蜻蛉を賣り明智天の如く村閭の爲めに大鰐魚を仆す、商家の秘訣幼時の口に發し、冒險の精神髫垂の口より辯す、百里の洪濤、密柑數千筐、京阪の境裏鹽鮭數千尾、生死の巷を踏み窮命の路に入り天下の豪商となり宇内の壯觀を集む、忽ちにして有國の大經濟、忽ちにして豪游の大快擧、爽快雄濶、遠く漢高に駕し、機智深謀近く南洲に逸するの狀、躍然として目にあり、著者獨得の文思壯麗渾成の光彩手に從つて發揮す、實に少年文學の絶世なるものなり。

高橋太華山人著

河村瑞賢

全一册和裝
正價十二錢
郵稅四錢

河村瑞賢は實に人間の眞價として驚くべき天冠を有せり、然り。渠か明敏の才幹渠か富贍の智略新井白石をして端なく讚美せしめ老中某侯をして坐ろに嗟嘆せしむと雖も詮し來れば固是れ一箇の愚鈍なる車力。一度逆旅の老爺に誡めらるゝや胸中に醞釀せし反動の靈力を呼び起し滿眼皆黃金世界と化し手の動く所目の閃く所悉く是れ富貴功名の好材料ならさるなし祭餘の果瓜踏破せる朽鞋、紙鳶を飛ばして高堂の欠磚を修め肆火に乘して巨材の專賈を試む才思は泉の如く貨利は海の如し若し夫れ官命を奉して蕪地を墾き河流を通し奥羽の海運を開き大坂の水害を治するに至ては渠か一代の功業爀々として輝き渠か絶世の才望隆々として高し本書之を叙して快麗簡勁殊にかのインスピレーションの高潮を描きては側寫正寫直ちに其心を指し其腸を剖く實に一部の好傳記なり、啓蒙談なり、妙小説なり。

村井弦齋君著

近江聖人

（富岡永洗畫）

全一册和裝
正價拾二錢
郵稅四錢

桃李言はざれども下自から蹊を成す中江藤樹先生の徳化宇内に洽く近江聖人の名聲八道に高し而して先生の幼時父是純孝赤誠の性斗膽敢勇の質商家の小僧を扶けて無賴の少年を呪咀し故園の慈母を慕ふて滿天の風雪に間關し至誠發して惡兒を感化し德行逬りて全國を薫浥するの狀弦齋主人が繊麗光明の筆を借りて之を寫す所謂匹夫にして百世の師となり英名偉績天下後世に燿燿するの風采殊に少年の時代性行敍し去り敍し來りて精靈天に潮す

原抱一菴主人著

大石良雄

全一册和裝
正價拾二錢
郵稅四錢

正體瞪目滿を引て容易に發たさるの忍耐力、是を稱して蓄積力といふ、英雄巨人の大事業大偉功、皆蓄積力の原動、大石良雄亦此琴線を彈撥したるの士なり、主人が玲瓏の意匠、透徹の彩筆、能く此好漢を書き來る、小奇徹激主君の主命を死より救びたる一少年池田休馬が、秋水一閃元祿の變となり、社稷亡び、祿奪はる、や、端しなく彼の胸中に醸釀せし蓄積力の變動を呼ひ起し、風雲雷電、龍驤虎變忠心義勇の士、大石良雄の名、永く千載に炳燿するに至る狀、手に從て縱横發揮す、描寫精妙夢靈炯射、人生の粹美を扶く、少年諸君一度之を讀まは、大石良雄と其交を通し、其事業終りたる原動力を感得するや必せり矣。

幸田露伴君著

二宮尊徳翁

（藤島華僊畫）

全一册和裝
正價十二錢
郵稅四錢

廿四年十月十六日尊徳翁特旨を以て従四位に敍せらる翁一代の事業之に由て大に光あり近頃朝野の間に盛なる信用組合法の如き西洋發明のものに非ず尊徳翁の卓見夙に之を案出して現に實行する所あり翁の偉人たるを察すへし其の性行事業等露伴氏一種の筆を以て平易簡潔、婦人小兒にも解し得る樣に敍述せり今や天下有爲の士多く心を實業に寄す尊徳翁を悉せる此書ハ特に有志者の一讀すへき價あり豈啻だ少年必讀のみならん

高橋太華山人著

太閤秀吉

（富岡永洗畫）

全一册和裝
正價十二錢
郵稅四錢

矢部五州君著

徳川家康

（藤島華僊畫）

全一册和裝
正價十二錢
郵稅四錢

三遊亭圓朝講演　水野年方書

八景隅田川

全一册洋裝
正價貳拾錢
郵税四錢

我が帝都の未だ風葛蕭條たる武藏野たりし時に當て隅田川の名は已に詞賦辭章に知られたり、次で徳川氏の江戸城となりて蕭條の曠野は、草より出で、草に入りにし月も瓦屋に出て瓦屋に入るに至り、海内無比の大都となりしにつれて、隅田川の名もいよいよ流れて遠近に響きわたりぬ、かくて文人詞客爭ふて月に棹さし花に歌ふの名勝となりしより好事の人遂に兩岸の勝區八所を選びて隅田川八景をぞ定めぬ、眞崎の月といひ、白髭の暮雪といひ、待乳山の夜雨といひ、淺草寺の晩鐘といふ、其間をトして富商豪賈の別業莊園を營むものも少からずなむ、玆にさる類ひの物持に何某といふ人あり、眞崎の邊にいと風流なる隱宅を搆へて住みたるか一人の娘をもてり、此家に希代の强賊の入りけるにいかなる宿世や有けむ此の賊に懸想しけるより萬變千化の奇談を生ドたる顛末を彼の有名なる三遊亭圓朝丈が例の得意の辨舌を揮ひて述べられたるもの即この八景隅田川なり、丈の辨舌意匠の巧は知る人ぞ知る、世に面白きといふことを嫌ひたまはぬ方々は早く一本を求めて讀み給へかし

三遊亭圓朝講演　水野年方密書　（三版）

政談月の鏡

全一册洋裝
正價拾五錢
郵便税四錢

三遊亭圓朝丈一本の扇子と一握の手巾を以て巧に人情の眞を寫し人をして喜笑怒罵禁せざらしむ元とより尋常小說家の牽强的述作の比にあらず本書は寶曆中依田豐前守曲淵甲斐守の二明奉行か江戸に起りたる毒殺事件の裁判にして圓朝丈の口演を一言一句も改めず速記して美麗なる讀み本に仕立てたるものなり

採菊散人條野傳平君著　水野年方書

痘痕傳七郎

全一册大判
正價二十錢
郵便税四錢

痘痕傳七郎とは何人ぞ、痘痕面に滿ちて醜さ言はん方なき人なり、されども文武の才幹衆に秀で世に稀なるべき人傑なり、沈魚落雁の美貌、而も威權赫々たる要路の貴顯の姫君に思はれて其婿となる、さて姫君は思はぬ横戀慕に逢いて貞節に斃れしより千緒萬端の奇談となりし面白き小說なり

佛國學士會院長ジュマ氏原著
日本文學士 小川忠武君譯述

佛蘭西二人皇后

全二册大判洋装頗美本正價廿四錢郵便稅八錢

文章の脚色の巧妙なると多くの評者を傀儡として夙に名聲を博せるは佛國有名なる學士會員兼小說家泰斗アレキサンドル、ジュマ君にして紅家の俠勇及び革命の慘劇と並ひ稱せられて歐洲各國の好讀者を感立風動せしめたるハ本書佛蘭西二人皇后なり筆ハ剪紅裁彩、意ハ風霜雷霆寒犬花影に吼ひ皇后蒼苔を踐むの情事、奸佞の美人、放逸の僧正、有無變幻出沒自在、讀者をして茫然、呆然而して遂に本書を讀終りし其妙味を忘るゝ能はさらしむ

文科大學敎授内藤耻叟先生
東京盲啞學校長小西信八先生序文
流楊子 佐藤治郎吉君著

新伊蘇普物語

全一册大判密畫入洋装正價拾五錢郵稅四錢

本書ハ佐藤君親しく教育の任に當り多年經驗事實の鍛鍊を以て本書を編纂されたる者なり實事の繁簡難易を鑑みて以て成るへく兒童の思想に親切ならしめん爲め多く耳に馴れ易き俚諺を採り種々の斬新奇絕なる譚柄を列叙せり加ふるに鮮明なる美畵數十個を挿入し以て兒童の目を惹けり故に一度本書を繙けハ兒童をして容易に倫理道義の大本を知らしめかの德性を涵養せしむるを得へし世の教育家亦參考の材料とするに充分の眞價あるを信する也

福地櫻痴先生著

十二時會稽曾我

（富岡永洗畫）

全一册和装正價拾八錢郵稅六錢

此劇は故人近松門左衛門が著作の院本曾我會稽山を根據として櫻痴居士福地先生が需に應じて演劇の脚本に更作せられたる新著なり夫れ會稽山は近松が名作中の名作にして趣向斬新頗る妙案なりと雖ども脚色の易からざるが爲に未だ是を劇場に上らしめたる者なし然るを先生の健筆を以て巧みに之を修正して潤色を加へ更に其奇觀を添へ殊には先きに歌舞伎座に於て團十郎、菊五郎、左團次の三名優これを演するを以て其非凡の新著たるを知るに足れり請ふ此書を繙きて松櫻雙美の文彩如何を觀よ

福地櫻痴先生作　富岡永洗書

東鑑拜賀卷

全一册大判
洋裝頗美本
正價拾五錢
郵稅四錢

附錄　春興鏡獅子

此作は櫻痴先生の健筆に成れる新著にして先生の傑作中の傑作なり賴家を修禪寺の浴室に弑し公曉を誘唆して實朝を弑せしめたる北條義時の奸惡うの事實を摘發して見るが如く寫出したる先生の筆力、精神讃み來て痛快極りなし此作の成るや歌舞伎座におひて團十郎、菊五郎の諸名優先生に乞ふて之を場に演せり以て其妙作たるを知るに餘りあり請ふ一讀して排悶の料に供し玉へ

福地櫻痴先生作　富岡永洗書　（再版）

關原譽凱歌（せきがはらほまれのかちどき）

全一册大判
洋裝頗美本
正價貳拾錢
郵稅四錢

此編は先生が歷史に據て著作せられたる新案にて趣向神逸文章絕妙實に今代近松我國の沙翁先に歌舞伎座に於て團十郎、菊五郎の諸名優これを演するに付き即ち之を刊行す一讀三嘆の名著近來の奇書なり

福地櫻痴先生作　富岡永洗書　（再版）

女楠

全一册大判
洋裝頗美本
正價拾五錢
郵稅四錢

此書はさきに歌舞伎座に於て興行し大喝采を得たる演劇の脚本なり身替新田は櫻痴居士が近松の原作を改良したる妙案女楠は居士が近來の傑作新田楠兩將の忠烈慨慷淋漓精神紙上に溢れ鬼泣き神哭す實に歷史劇の上乘なり購讀あつて其然るを知り玉ふべし

福地櫻痴先生作　桂舟永洗二氏書　（四版）

尊王美談　平野次郎

全一册大判
洋裝密畵入
正價二拾錢
郵便稅四錢

本書は先生の健筆を以て其事蹟を演劇脚本に著述し次郎が江戸にて西郷に會して志を合せたるに起り情を忍て妻子に別れ月照を助て薩摩に下り西郷の溺死を援ひ大藏谷にて黑田侯に謁して尊攘の事を論し日華丸の船中にて捕はれ福岡獄内の苦を許されてより澤主水正を戴きて但馬の生野に義兵を擧け戰敗て幕兵に捕縛せらるゝ迄を七幕につゞめ實に慨慷悲愴當日の狀を見るが如しさきに川上音次郎に授けてこれを演せり一讀して神泣き鬼哭するの趣ある絕妙の愉快の文字なり

明治文庫

短篇小說

博文館發行

第二編目次

雪折竹　川上眉山
福れ碑　村井弦齋
佛魔一紙　廣津柳浪
薄命乃鈴子　嵯峨のやおむろ
姥櫻　石橋思案
驚く鷗　江見水蔭

◉雪折竹

眉山人

(其一) 涙の雨も凌げぬ浮世

苔衣重ねても寒し、月洩る庇風に戰き、九尺間口の敷居落ちて、積る年に腰弱き雨戸二枚、節々の釘ゆるみて身に寸分の隙間勝に、いつも居住居悪るく、柱より曲がみて立てば、内の樣は外より見えすき、冬ハつれなき風も遠慮なく吹込み、障子も破り果てゝ隔てとはならず、袖屏風さへ無き家の内ハ分けて哀れなり、長屋作の壁一重に隣わるは德ある身すがら悲しく、摺足では歩かれぬ古疊八ッ敷たる一間に居間寐間客間殘らすを兼ねて、天井とては屋根裏の外になく、先代の住人が殘して行きし天滿宮の御符煤に汚れて柱に貼られ、今日買立の襖實は骨露はれをり。胝割し壁落かゝりて腰張の新聞紙効驗薄く、遣戸の手垢の見分けられぬ程古びぬ、去る程に鼠穴又も殖えて防ぐ事もあらず、隅々の蜘蛛の巣拂へども又掛くる。座敷の眞中に二分眞のランプ、紙の笠も狐色に變りて、周圍三尺と離れては物の色もよくは見えず、況して隅々は月夜の陰よりは暗し。土燒の火鉢の身代の胝出たるを、古き錦繪を張りて一時を

凌ぎたる、其脇に一人の女——十六七の娘、内職に人の縫仕事して、夜もやう〳〵深きに休みもせず。見れば、顔形人に勝れて、世の常の美しさにはあらず。負けぬ氣の眼キリヽと釣り上りて、リキンだる處男らしけれど、口元愛くるしく、小形の鼻にれとなしき處あり。眉は優しき地藏形にして、額の富士は東洋の女の見せつけ處なるべし。一體の肉疲せたれど。滑かに清く麗はしき羽二重肌、これが臭骸を包むものとは見えず。ことさら節々の引〆りたると、爪先の如何にもすなほなるは、中々かゝる裏店に望まれるものにあらず。情なき雨も風も、此人の花の姿は損はれぬなるべし、綿銘仙の綿入に、怪しき色の褪めたる半襟を重ね、髪に油氣なければ、後れ毛の顔にバラ付たる樣、姿に合せて見すぼらし。同じ年頃の娘の中には、顔に白粉を離さず、髪に香なきこと無く、今日は鹿鳴舘に、明日は歌舞伎座に其日〳〵を遊び暮して、浮世に如何なる風が吹くかを知らざるもあるに、此娘今から世帶の苦を知りそめて、頬に血の氣なく、額に寒氣立ちて、今が娘盛り、隱したき年を一ッも更けて見せる、其身にしたらどれほど悲しかるべき。

しきりに縫立る手もと不圖暗くなりたるに、見上ればランプの眞短かくなりて油のある所まで屆かず。見る内にあたり薄暗く、油注さうにも一合小買の身代の餘裕ある筈もなし、詮方なしに水を注ぎ入れて油を浮かせば、眞やう〳〵油にひたりて前の如く明るし。嗚呼誰がこんな事を敎へしぞ、貧苦の入智恵と見るほどいぢらし。

娘は今袖口を縫ひかゝりしが、『今夜はなぜ捗が行かないんだらう、お向のお重さんはこんなものは、一晩に仕上げてお仕舞なさるけれど、私は慣れないからいつも遲くつて……遲いといへばお父ッさんはいつもよりお歸の遲い事……もしや何か有つたんではないかしら（思はず仕事の手を止めて）お父さんも取るお年だやあるし、此寒いのに夜風に吹かれてさぞおつらいだらう……此頃は活計に御心配なさると見えて、身體も大さうお瘠なすッた……今朝髮を梳いて上げた時、白髮のふえたのを見た時はどんなに悲しかつたらう（ホッと息をついて懷に手を差入れ）何うかして樂にさして上げたいけれど、女ぢやあるし、意久地がないから、ホンの手助しか出來やしない……ア、兄さんが生きておいでだと、此樣なしがない事はしまいに……さうしたらお父さんも、奇麗な座敷を隱居所にして、巨燵の中で新聞でも御覽なすッてゐられるだらうし……私も今時分は琴のお浚でもして……それが、濟んだら人形の着物を製ひてやつたり、毛糸の編物をしたりして、さぞ面白く暮らせるだらうし……ア、〳〵そんな事思つちや濟まない……それよりかお歸も間があるまいから火でも起して置きませう』

火鉢の灰搔探れば、桃の種ほどな炭團の火僅に息をつきたり。『オヤこんなに成つちまつたよ』

樅の荒木の炭取より、量炭取出して、澤山には注かず、消炭を交せて火を吹立つる折しも、表の雨戸ガタゴトとつかえながら明きて、五布風呂敷の包を肩にかけたる五十恰好の男、結び目に手をかけて上り口に荷を下し、『お露今歸つたよ』『オヤお歸りなさいまし、さぞお寒うござんしたらう、包はさうやつて

お置きなさいまし私が直しますから》《ナア――ニ私がやるよ、イヤどつこいしよ》

壁ある方に片寄せて、火鉢の前にドッカと座り、耄碌頭巾をはづして首にまきつけ、顔をしかめながら――さも痒さうに――兩手で顔を掻く、娘ハ縁の欠けたる團扇で火を煽ぎながら、《お父さん今夜ハ大さう遅かつたヂやありませんか、何うか成すッたかとヒドク案じましたよ》

老爺ハ古びたる桟留の煙草入を取出し、紙の襟巻したる眞鍮の煙管に、青臭き煙草をふかして、《さうだつたか、今夜ハ寒いもんだから、九時頃からはまるで人通が無いのさ、だから早く店を仕舞つて、直ぐ歸らうと思つたが、道序だから庄兵衞さんの家へ寄つて來たそれで、遅くなつた〳〵》《マアそれハ……私ア又間違でもあつたんぢやないかと思つて、つまらない心配をしてゐましたの、女ッていふものはをかしなもんですねへ》

ニッコと見する笑ひ顔、口元に自然の美を作りて、糸切齒の虫喰ひたるに又いはれぬ愛嬌を添へたり。

《ア、先程子、お隣のお家内さんに頼まれて、手紙の代筆をして上げたら、お禮だといつてお父さんの好な鮒の甘露煮を下さいましたよ》

といひながら、燒繼のある皿に盛つたる僅ばかりの甘露煮を見する、《さうかそれは氣の毒だつたの》《それからね、お歸になつたら、上げやうと思つて晩方針を買ひに行つた時少しばかりお酒を買つて置きましたよ》《どうもお前はいつもさう優しくして呉れるので、私はこんなに零落ても樂みがある、ホンニい

つも心の中で禮を云はない事はない』『なんですねへそんな事を……子が親にするのは當然でさね……おやア直ぐつけましやうか』『どうも濟まない』『またそんな事をおッしやるよ……威張つて召上れな』捧げ出る能代の膳の上には、澤庵、櫻味噌、薑の紅漬、さては今の甘露煮の外になけれどこれに、籠る情は山海の珍味に望んでもなし。大家高樓の內、うつくしき戎氈を敷つめたる座敷に、本膳二の膳三の膳をつらねて、玉の盃は電氣燈の光にかゞやき、瑠璃の器には、東海の鯔條西山の鳳哺。氷裡の鯉を羹にし、雪中の筍を木芽合にして、白魚は中落を食はず、甜瓜は二月の走りをよしとする、寛活紳士の饗宴に比べて、いづれか樂しかるべき。京の友禪に身の內の痣を隱したるは、木曾の麻衣に雪の肌を包むに若かず。玉の臺には、九華の帳の中に胸の機關を隱くし、賤の伏屋には、さし込む月もあらはなり。誠あるお露の胸、柔らかき手はダイヤモンドの指輪に飾らねど美くしく、淸き胸は垢染みたる半襟の中より水氣だちたり。それが花の唇に言葉の花は咲かさねど、たゞ一筋の紅の舌、三寸不爛に縱橫の惡氣なし、老爺も機嫌よく呑みかけて、いつになき高笑ひ、盃にうつす影も二ッ三ッ若く見ゆる、此酒の銘は養老といふか、それと知らず、『アヽいゝ心持だ、大さう醉つた』『まだありますよ、今夜は久しぶりですから些ッとお過ごしなさいな』『ナアーニモウいゝ、餘り過すと身體に惡い……時にお露、さつき庄兵衛さんの所でかういふ話があつた、アノそれ今度通の三丁目へ煉瓦作の大きな家が出來たらう』『エヽ戴春館といふ額が掛つてる……』『さう〳〵あすこがその……大さう高尙な品のいゝ料理

屋に成るんで、昨今貴紳方の相手になるやうな行儀のいゝ女中が欲しいといつて探してゐるさうだ、尤も向で仕着を出して、給金もよし、それに貰もあるから隨分いゝ仕事になるといふ事だ、ヲ庄兵衛さんの云ふには、お露さんが行つたらいゝとは思ふがいゝ所とはいへ奉公だから何うだと云つて相談があつたが、私も今かういふ場合でお前が行つて呉れゝば大變都合がいゝんたが、何うだお前行つて呉れるか』

斑なる齒を楊枝でせゝッて居たりしが、此時其手を膝の上に置いて、ヂッと娘の顔を見る、娘は鬢の後れ毛を撫上げ、『私でよければいつでも參ります、かうやつて人仕事をしてゐてもおもふ樣には行きませんから……ですが私が居なく成つたら跡でお父さんが一人で御不自由でしやう』『ナニ家の事は何か私が始末をつけるよ……それに時々暇を呉れるさうだから、其時にマア男に出來ない事は遣つて貰ふやうに仕やうよ』

と云ひながら袂より塵紙を取出し、火鉢に烘つて鼻を嚙む娘は火箸で灰掻きならしながら、何か思案の樣なりしが、『しかしお父さん先ハ慥かな家なんですか……若し又まんがちに極めて仕舞つて後悔するやうな事があつてはいけません……』

老爺は白髪頭をしきりに點頭かして、『ウヽそれもナ、能く聞た所が先は極く手堅い家で、女中のうちには隨分家がしッかりしてゐて唯行儀見習に來てゐるといふも有るさうだから、決して不取締な事は無いさ

うだ》《さういふ事なら私は安心して參りますよ……しかし行けば幾日頃でしやう、其前に出來るだけ內家の事をまとめて行かうと思ひますが……》

綱は鳴門を越ゐて骨に節出來るとか此娘が先程よりの言葉は同じ年頃の娘御前に云はれ可きものにあらず。暮しに足らぬ勝なれば、浮世の味を自と知りて、萬に氣の付く事も早し。綿銘仙の薄綿入に北風を凌いでからは、身の內の血凍えて、艱難の中に、心いつとなく大人びたりと、知るや知らずや、老爺は煙草を捻りながら、《それも二三日は間かあるだらう……何にしてもお前が行つて呉れると私も大きに助かる、私だつてお前を奉公などに遣りたかァないけれど、以前と違つて今じやァ思ふ樣に暮しも出來ないし、山本の方からも段々催促されてゐるが、これも早く方を付てやらなけりやならないし、それやこれやでお前に賴んだのだ、お前も厭たらうけれど暫の間辛抱して行つて呉んな、其內には私も何うかするから》《イエ〳〵厭だなんてソンナ事がありますものか……私も始終何のこれと云ふ手助に成るやうな事をト思つてゐた所ですから丁度ようござんす》《お前はさう云つて呉れるから有難い……今日もナァ買出しに行つたら、問屋の娘が奇麗に着飾つてゐたから、何方へお出と聞いたら、新富へ行きますと云つたッけが、其時私は、ア、家のお露も同ド年頃だ、さぞ芝居へも行きたからう、遊山もしたからうにア、やつて家で仕事をしてゐるかと思つて、ツク〳〵考へて立つてゐたよ》《何事も時節ですから仕方がありません……そりや私だつても奉公に出たかァありませんが、それも身過世過とやらですからねへ》

（其二）　昨日の冬はゆきの下草

昨日、今日、新聞の裏に廣い場所を埋めて、戴春舘の廣告人の目に大きくうつれば、門前の砂利に、手車馬車の轍繁昌のしるしを深く刻んて、玄關に纒半天着た男の顔も春めきて陽氣なり、家は外を煉瓦作りにして内は總檜木普請、三階の手摺から富士筑波を見下ろし塗縁薄絹張の障子に大きな體裁を見せ、どの座敷にも目に餘る程の額あつて、在朝の方々の筆の跡墨つき大きくのこり一間幅の長廊下に優しい足音を轟かし、色白の女が小笠原流に捧げて來る廣蓋の上に、當世の喜助が庖丁の鹽梅、料理通の口を喜ばす方にはあらねど、隅田川に尺餘の鯉はねて、尾鰭に勢ある客人常に絶ゑず、髭と高帽子の品をかへて引きりなく、玄關番の女中の欠伸はつひに見た事もなし、懇親會、慰勞會それの祝宴、これの賀宴、次第に數を増して、帳場の筆の先に福の神ニコツキ給ひぬ。お露は此家に梯子段を上り下りして人の樂の爲めに働く身の上となり、源氏の機嫌、平家の氣褄、薩摩の御前に愛敬を賣つて京の殿様に程を宜くし、奥州の御國訛分らねど分つたやうに調子を合せ、筑紫の磯臭きも不知火のやうに待遇し、いつか杯洗の中に酒を呑ませる器用な手品を覺え、及び腰の御酌も疊にこぼさぬ程になり、惡口を當座に聞流し、からかはれても耳の根を赤くせず、冷かされても顔を改めず、自然と心は知らぬ白齒を見せ、靨は口の端に作りつけのやうになりし。されど此頃の殿様チント裀の上に行儀よくして居られず。盃を取らせて無理強の酌に御自身撿分の目を据えられ、苦しさうに呑むを見て悦に入り玉ひさては、騒々し

き惡洒落に、結立の髮を破はされても腹を立つこともならず。分けて厭なのは齒の浮くやうな障文句並べたつるお客樣、それもそらさぬやうに仕向けねばならず。何事も柳で送る月日のうちには、つらい事、おぢきない事、度重なれど、お父樣といふ事胸に浮べば、又辛抱する氣になり、心に叱つて元氣よき笑聲を洩らし、眼に物思ひの露を消して、朝日の花のやうに身をつくろひしが、少し閑暇の時は、溜り部屋の火鉢の前に、手の先の冷めたいこともありし。

開業の當日よりこゝに贔負の足を繁くする人あり。蘆澤樣といふ名帳場に受よく、女中のうちに分つた方といふ褒美を戴いて、誰にも樣子のいゝ男。洋行歸りの肩にM.A.の羽をつけて、口にくはへるハバナに少し鷹揚の烟を吐き、生得薄い髭を能の面のやうに生やしパッチリとした目に金縁の目鏡をかけ、髮は五分刈にして、色白の額の中に何處となく氣高さところあり。丈は人並より高く、胸の幅廣さにフロツクコートの着附見事なり。今はさる會社の顧問をして、名刺の幅廣く世間を渡り、今年三十の大人株に這入り、自然と浮世ずれて、角の取れた言葉付に書生のアクを抜き、樣子素振、何處から見ても氣の丸い人としか見えず。

六時の鐘夕暮を誘ひつれて、障子のうちやう〳〵薄暗く、南の座敷にお手が鳴つて、燭臺廊下を馳ける頃、竹の間に一人お客樣來たれり。お露は番に當りて出て見れば、此頃見なれた蘆澤樣。これはようお越しなされましたと丁寧にお辭義をして、御料理はと窺へば、見つくろッてといふ。心得て立上り、程

なく杯洗の波おだやかに、一ト通の料理あらはれ。袂をくはへてのお酌二三杯のうちに、客の目の縁ハ早く召上ッた招牌をかけて、口の下紐解いたなりに、大きな前歯を遠慮もなく見せかけ、《今夜はいゝ時に來たねへ》《何故で御坐います》《お露さんの番に來合せたからさ》《オヤ飛んだおつけあはせですねへ》《イヤ正直の話がそれだ。どうもお前が居ないと大さに酒がまづくッていけない》《貴郎は誰にでもそんな事を仰有いますよ》《そうだッけかの、更に覺はない……》

右の手で一寸眼鏡の位置をかへ、態と眞面目な顔をして見せれば、お露は笑ひながら、《お年を召したからお忘れ遊ばしたのでしやう》《可愛さうにまだ耄碌する年ドやない……ヒドイ事をいふ……お前もなか〳〵口が惡く成ッたな》《貴郎のお仕込で……》《人聞のわるい、そんな敵役をつけられて堪るものか私こそお前に仕込まれてこんなに成ッたのだ》《アラあんなお人の惡い事を……》《それでお互の帳消にしやうドやないかハヽヽヽヽ、サア仲直りに一つ上げやう》

盃を出せば、會釋して受け、一寸口をつけて、《今夜ハ御ゆるりとして居らしッても宜しいのでしやう》《イヤさうでも無い。これから濱の松岡といふ家へ行かなければならない》《松岡といふ方は歌の先生でハありませんか》《よく知ッてるね》

取りかけた箸を又下に置いて、不思議さうにお露を見れば、《私が以前稽古に上ッて居りましたから……》《ヘエー中々話せるね……お前歌を詠むのかい》《詠むといふ程ドやアありませんが少しばかり習ひまし

たの……何にも出來ハ致しません》《何うも些ッとも知らなかッた。さう成ッて見るとお前の素性が聞きたいが……ぶしつけだが何うして此家へ來るやうな譯になッたの》《そんな事をお聞遊ばしてもしやうがありませんよ》《さう云はずにマアお聞かせな。話したッて減りはしまい》《ドやアお話し申しましやうか》《ア、是非……》《何だか變ですねへ》《話し憎くけりや蔭でも引かうか。チヤチヤチヤンサア合方キッチリと成るんだ》《オホ……お芝居じやアありませんよ》

私生國は上州。明治十五年頃より橫濱に住居して、親父樣は生糸の貿易に萩岡といふ名前は其頃の商館に知られたりき。店藏大きく、角地面を折廻はつて奥藏は三戸前。番頭手代十五人程を使ひて、店の弗匣の動きなき身代。臺所の窓一杯に烟を上げ、波止場の波の寄せて來る繁昌、夕凪の威勢よく今日を暮しぬ。去る程に花は散るに早く、月は缺くるに遲からず。私が十三の春、商賣不圖左前になり、それよりは何してもよき事なく、親父樣身をあせり給ひて一か六の賽の目を眠つて弗相場に手を出し玉ひしが、それが又帳面に嵐を吹かして、家藏もめり込むべき大きな穴を明けし。私一人の兄樣を持ちしが、本鄉の學校に、ザユリスディクションの奥を窺いて卒業の曉までに枕の數も僅かなれば、親父樣はそれを來る年の杖に當てゝ、次第に瘠せて來る身代の尾を人前に見せず、北斗は拜まねど、骸骨の上の玉藻を羅綾の衣と見せて、苦しい挺に傾きかゝる家を支ゐるうち、かねて目をかけて遣りし勘藏といふ番頭、金の手詰まる年の暮に、餘程の賣懸金を持逃して行方知れなくなりしに、其年の凌きドット差支えて店

も立ち行かぬやうになり、最早暖簾も取はづして仕舞ふ事と、屈託の手を胸の上に組まして、親父様の顔付日毎に淋しくなる時、兄様成業の冠を着てめでたく歸り來たれば、それに氣を盛返へし、これからは兄様の手にて心安く浮世を送るべしと、樂みに思ふ春は果敢なく散りて、恨めしや兄様は腦病の爲めに血氣の命を奪ひ取られぬ。わるい事にわるい事重なり、果は土地にも居られず。年頃住みなれた家を人の物と眺めさして、澁團扇に煽ぎ立てられ、東京に立退き、さま〴〵の商買何しても思はしからず。筍の皮の一枚二枚、次第に資本の上着を剝がれ、其内に母様を亡くして、哀傷の涙の袖干すやうな面白い事もなく、自然と裏店に其日だけの活計を立てるやうになり、親子二人の命を繫ぐ朝一度の烟糸より心細く、着物といへば洗洒しの二タ子、それも水に入る程縞も分らぬ程に尾羽打枯らして、いつか座蒲團なき疊の上に膝いたからず。今日は昨日よりさもしき事を知りそめ、天神様の反り橋より渡り苦しい浮世のいとなみに、心の舟もあやうくなれば、少しの手助けとて此家への奉公。年の瀬の流れて行末の海に波の花咲かすべき當もなく、これから何んな渚にうき身をかこつ事か。私はともかく、一人の親父様の殘り少なき年に苦勞をかけさすとの悲しく、夜もいやな夢に寐覺苦しい身の上となりにき。

《何うも……マア……不思議な緣だ……お前は萩岡の妹かへ》《貴郎兄を御存じですか》《知ッてる處か兄さんとは極く親しい朋友だッた。途中で私はベルギヤムの方へ行ッて、彼地で兄さんの亡くなッた事を

聞いたが、家はそんな風に成ッてゐることは些ッとも知らなかッた》《それでは兄が寄宿舍に居りました時分……》《アヽ其頃さ……兄さんにはいろ〳〵世話にも成ッたし舍に居た時分も大さう力に成ッて呉れた人……其妹と知ッてはこんな所に置いておく事ハ出來ない、親父も共々引取つて、及ばずながらお世話をして、お前も行〳〵は立派な所へ嫁付けるやうにして上げやう》《マア……有難い思召し……親父が聞きましたら何んなに喜ぶで御座いましやう》

うれしいにつけ悲しいにつけて女の附物、心の感動を目に見せて、手を合はせて拜まぬばかり。蘆澤ハ眞面目になり、灰の中に火箸を杖にして、それからは盃も手に親まず。シンミリとした物語り、燭臺の上に堆かく蠟のとりつく頃、機嫌よく笑ッて立歸りし。其夜はお露の心落着かず。始終影のやうなものにつきまとはれ、行末の蜃氣樓を先から先と眺めつくして、最早此家は出たやうな氣になり、《マアうれしいトやあいか……親父さんのお傍に居て……面白くれ伽をして上げて……天氣のいゝ日にはお供をしてお花見にでも行ッて……何んなに面白いだらう……蘆澤さんハ學校へ遣ると仰有ッたが……さう成ッたら屹度勉強して外の方に負けないやうに……お世話甲斐のあるやうにしましやう……琴も中許にならない内に下がッたッ切、モウ行かれないと思ッたが、又お稽古が出來るやうに成ッた……有難いのハ蘆澤さん……此御恩は決して忘れない……兄さんもいゝお友達を持ッて下だすッた……兄さんといへば一時ハ私達を置いてお亡くなりなすッたのを何んなにか恨めしく思ッたが……兄さんがありアこそ今夜の

やうな事……此家を出たらば直にお墓參りをしやう……兄さんも蘆澤さんの御深切をお聞きすッたら何んなにかお喜びなさるだらう……ア丶これからは毎日學校へ行ッて……歸ッて來たらば蘆澤さんの部屋へ御挨拶に行ッて……それからお父さんの處へ行ッて其日の新聞の事でもお話し申してそれから明日の課業の下讀をして……それが濟んだら琴のお浚をして居るとお友達が遊びに來て……二人で面白いお話をして……其次の日曜には音樂會があるんでそこへ行く約束をして……それから氣晴しに庭へ出て可愛がッてる花に水でも遣ッて居ると家の猫が來てヂヤレるから叱ッて……ア丶猫ハ憎らしいからカナリヤを飼はう……先の家で飼ッたやうに能く馴れさして肩の上へ止まらしたりなんかして……晩に成ッたらお父さんの好なお茶を立て丶上げて……それから蘆澤さんの靴下を編んで……肱付を製へて……着物も縫ッて上げて……それから何をしやう……歌を詠んで蘆澤さんに直して貰はうかしらん……手習をしやうかしらん……押繪をこしらへて見やうかしらん……折据の細工物をしやうかしらん……ア丶何にしても早く明日に成れバい丶ねへ……今夜の時のたつのが遲い事》

折から帳場の大時計が眠むさうに打つ時の聲、口のうちで數へあがら、《まだ十時だよ……マアいつ夜が明けるんだらう》

(其三)　戀の流れをせきとめた思川

ひとしきり春雨の空南より晴れて、雲はちぎれ〴〵に、やがて青天井の中より、日の影濡れ心の庭先を

照り返へす晝過。花を洩れて滴たる雫の口にいはれぬ美くしさ、佐保姫が身を飾る玉か、ならばそれを糸遊の糸に繋いていつまで春の筐と眺めたし。艶は櫻にとゞめ、嬌は海棠に團扇を上げて、只見れば松にとりすがる姫蔦の前に、蜘蛛の圍につなぐ露の玉簾、秋の古宮とい事かはりてたゞなまめかしき風情なり。一本柳のしげみに隱れて華美を見せぬ早咲の山吹、そこに雨宿りの蝶々が、羽を濡らしたか、さも重さうに低い所をたよ〳〵と飛んで行く。春景色何處を見ても厭と云はれぬ四方一面植込の小天地、其持主は門の表札に蘆澤隆三と筆太の名前、郵便の配達夫が能く覺えこんだ名といへば中〳〵新らしき住居でなし。今南の離坐敷の障子を開けて立出つる女、あちら向ひたれは顏は分らねど、都風俗の姿やさしく、高島田の髮ふさ〳〵として、拔ける程白い首筋に人の羨やむ襟足、撫肩の如何にも花奢なる、腰のすらりとして、踵の引きしまりたる、美人の相にこれといふ不足の處なし、銘仙の着物に、帶は檜垣に菊を織出した繻珍を少し胸高に締め、褄先のきりゝとしてそこに微塵媚めいた處なきは、如何なる育ちのものか心柄もゆかしく、庭下駄を履いてこちら向いた顏を見れば、アッ！これはお露がかはりたる姿なり。花は吉野に眺めて春はこれにきはめ、月は須磨にめでて秋の只物でなきを知る。お露の美は此時に活動して、飛石を輕く踏んで行く樣、美術に血を絞る人に一目なりとも見せてやりたし。やがて目の前の櫻の下をくゞり、右に差出した枝を折らうとして手を上げた途端、後に足音を忍ばして近づく人、お露の美くしい指先の今花に屆く時、ツット其枝を動かせば、雨が殘こして行きし露はパラ〳〵と

新らしく一ト時雨顔から手へ掛けて一面に降りかゝれば、《ア、冷めたい》
思はず飛退く後に時ならぬ笑聲《ハ、、、、、》
驚いて振向けば蘆澤隆三、お露の顔を見てまた笑ひ出せば、《オヤいつの間に……わるい惡戯をなさいますね》《何にもするものか》《噓……今私が花を取らうとしましたら枝をお振なすッたらう……コラこんなに濡れましたよ》《私ア何にも爲はしないよ、大方風の所爲だらう》
言葉終らぬうちまことの風が颯と雫を落せば、アラと又脇へよけるお露、蘆澤は笑坪に入り、《ソレ御覧何より證據だ》《そんなら何故お笑ひなすつたの》《そりやアお前の風付が餘りを可笑かッたからさ》《まだそんな事を仰有る》《まだそんなに疑がッてる》《マアあゝ云へばかう云ッて……》《何だッて？》《私はとても貴郎には叶ひません》《トやアお過まりな》《知りませんよ……お人の惡るい》《ハ、、、》《貴郎東屋の方へお出なさいませんか、あちらの花が誠に奇麗ですよ》《とんと前のやうだらう》《アラそんな……》
《サア行かう》
二人は東屋に、飛石を拾ひながら庭下駄の音を運ばして、蘆澤は先に腰を掛くれば、お露も其傍に内輪の足を休めぬ。蘆澤は目鏡を指で一寸押し上げて、《成程能く咲いた》《アノ花の上に露を置いた鹽梅は何とも云はれませんねへ》《お前は花と露とどッちが美くしいと思ふ》《それア何うしたッて花の方が奇麗ですワ》《私ア露の方がいくら美くしいか知れないと思ふ、何んな花だッて露に及ぶほどのものはありやし

ない、況してそれを名にして居る人は……》《エッ》
二人の目と目ハ見合ッたまゝ暫くハものも云ハず。蘆澤は顏付で繼ぎ足す言葉の跡、お露ハ返事もなく俯向くを、《露の美くしいのはつくろハない美だから態々こしらへたやうな花の美くしさと較べてずッと上に位してゐる、其さッぱりしたのと、邪念が無いのと、見た所で如何にも可愛らしい樣子は、花は勿論世界の何んなものにも有りハしない……私ハそれ程にいゝと思ッてるよ》
熱心に顏を見詰めて云へば、お露ハ花の辨護もせず、靜かに小さな聲で、《若し露が生きてるものであッたら何んなに喜ぶでしやう》《然しそれは分からない》《何故？》《こゝに生きてる露があるけれども少しも嬉れしがつたやうドやないもの》
ソッとお露の頰を突けば、今更のやうにザッと紅くする顏、見られまいと横に俯向け、盜むやうに蘆澤を見れば、折惡しく見合す目、ハッと一ト刷其上色を紅らめるを、蘆澤はつく／＼見て何か又云はうとする時、足音間近く聞えて淸といふ赤ら顏の下女が、《旦那樣アノお客樣がお出で御座ります》
蘆澤は氣まづさうに、《誰だ》《山川樣でござります》《さうか仕方が無い通ハう》
お露を一寸見て客間の方へ立つて行く。跡にお露は暫くそこを動きもせず。襟に手を入れて、前のやうに俯向いたまゝ、《今のお言葉は眞實か知らん……それともホンノ冗談半分におからかひなすッたのかも……男といふものは能くそんな事をして蔭で笑つて居る事があるもんだから……だが今日の御樣子はま

さか……それとも私の弱身からさう見ゆるのかしらん……若しホントにおゝ云つて下だすつたのならそれこそ私は出來るだけの誠を……アヽそんな氣を出してはいけない……だけれども何うも……私もこゝへ來るまではこんな風な事は少しも思はなかつたけれども……だん〳〵氣に掛けるやうに成つて……私は蘆澤さんを思ッて居るのかしらん……然し私の方で何んなに思つて居たつて先のお心が分らなければ……だけれども先程のお言葉……》

又も考へこむ折、濕めつたやうな風髮を吹き上げて、雨催ひの空合に日の影もなくなれば、お露は氣が付いて顏を上げ。《モウ〳〵考へまい……お父樣の處へ行ッてお茶でもたてゝ上げましやう》

立上がッて、後れ毛を掻き上げ、進まぬやうに以前の櫻の前に來かゝりしが、不圖客間の中よりお露といふ聲幾度となく聞ゆれば、思はず耳を引立つるに、紛れもなく自分の事、お露は胸を轟かして、二足三足立戻りしが、又氣をかへて、知れぬやうに次の座敷に行けば、客の聲か落ついた調子で、《さういふ譯か、君の義俠心は實に感心だが、世間では中〳〵さうは思つて居ない、實は僕ァ其風説を聞いて驚いて來たのだ……》《何う云ふ事を云つている》《お露さんハ戴春館でも有名のものであッたから、今度の事に付ては或る一方では余程やかましい。君がお露さんをこゝへ引取ッたのは全く色に迷つたからだとして、それから種々の搆造説をこしらへて、實に思も寄らん事を云ひ布らしている》《何とでも云はして置かうじやないか、衆口の諤々ドやァないが僕は搆はない》《それは大きにいけない、君能く自分の身の上

を考へて見玉へ。君は今賣出しの人間ぢやないか、だから今君に必要なのは社會の信用だらう。それを輕〱しく見過のは餘程過まつているだらうと思ふ。さうぢやないか』『それは實にさうだ。然し事實は早晩流言に打勝つだらうと思ふ』『だが世間は眩まされやすいものだ。流言が勢力を得ると中〱恐ろしいよ……それはさて置いて君はお露さんを細君にしやうなどといふ下心は無いだらう』『ウー……まだ……さう云ふ事は思はない』『お露さんは實に申分のない婦人ぢやけれども戴春館に居た事は世間に知れ渡ッて居る、今君の位置で若しさういふ考を持ッて居るならば君の身に取ッて實に不得策だ。これが社會の潮流に關係しない人なら兎も角も、君だから其事に付いては大きに不贊成だ』。『君の忠告は誠に有難い……決して仇には聞かない』

お露は襖の外で溜息一トッ。靜かに引下がりしが。父親の方へも行かず。自分の部屋へ歸ッて、投げるやうに机の前に座はり、袖の中に顏を埋めたまゝ、暮れて行く日を全で知らざりし。明くる日からは其部屋の中に、讀書の聲も聞えず。琴の糸の響もなし——お露は病氣となりぬ。

（其四）　梨花一枝打込んだ露の命

東の丸窓の障子に、今宵十五夜の月一杯に照らしかけて、程近き松の木の影法師は、面白き墨繪の枝振を見せ、風の音訪れる度に、木の葉は騷き立つれど、こゝに友づれの音もなし。今を山吹の咲き亂れたる下の水際に、昨日を啼はじめの蛙は、馴れぬ調子を遠慮の節をかしく、遙か西にあたりて、何處の色白

の仕業か、風につれて聞ゆる糸の音は、途切れ〳〵に耳の邊を掠めて行く。晝は心にとまらぬもの、舞臺に上るやうになれば、夜はやう〳〵靜かなり。障子一枚内は、それにまして淋びしさうに、ランプは蓋を深くして、あるほどの光をかくし、押入に近く黄八丈の蒲團二枚重ねて、天鵞絨の襟つけたる更紗染の夜着の中に、高い括枕して、――やつれて、力無さゝうに――お露は横になれり。枕元には、師宣の筆に元祿踊を畫いたる六枚折の屏風を建廻はし、黒塗の手箱の上に、歌集二三冊を載せ、脇に二三枚の新聞紙ありしが、取り散らしたる事もなくて、丁寧に重ねてあり、病氣は次第に長びきて、暫らく櫛の齒を忘れたれば、髮は淺猿しく亂れ、元結ゆるんでがつくり落ちかゝる島田も、形は分らぬ程につぶれ、鬢はをかしく寐癖つきて、後れ毛は野分の跡のやうに、たぼは何處にあるやら知れず。瞼の肉落ちて、眼の底いつとなく濁り、鼻の分けて高く見ゆるゝ、やつれたるの鏡なるべし。蒲團の上からさへもあらはに衰へた姿、生の母親の命短かくて、このやうな處に居合はさぬを幸と思ふほどの心、割つて見たらバ、涙の泉は何うして堰く事がなろうぞ

隔ての襖あけて入り來る蘆澤、見るよりお露は直に起直らうとするを、無理にとめて、《さうしてお出よ。何うだい今日はちつとは氣分はいゝかへ、昨日よりは顔色もいゝやうだぜ》

氣遣はしさうに慰めた言葉、其聲に力はなかりし。これも常平よりは面やつれして、色は蒼白く、いつもは知れぬ程の頰骨も、少し際高にあらはれ、元氣のない眼附で、つく〳〵お露を見れば《有難う存じま

す、どうも同じやうでいけません。』『何でも氣を落してはいけない。そんなに大した病氣でもないのに、自分で勵まして癒らない事はないよ。』

お露はヂッと蘆澤を見詰めて何とも云はず。眼はいつか涙ぐんで、枕の上に落ちかゝる雫を、見られぬやうに顏をそむけて、細ッた指先でソッと拭く。蘆澤は重ねて、『大體の病氣は、心さへ慥かに持ッて居れば直によくなッて仕舞ふ。だから一生懸命になッて早く愈して皆揃ッて芝居へでもゆかうじやないか』『さう致したいものですが……』

睫毛を傳つて又一ト雫。顏は影になつて、蘆澤に見えねば、それとも知ず、『お親父さんも心配して、先程もいろ〳〵醫者に賴んでたッけ。私もお前が寐てゐれば兎角氣にかゝッて何をしても面白くない。早く皆に喜ばせるやうにしなくッてはいけないぜ。』『貴郞はそんなにお氣にかけて下さるの。』少し力を入れた言葉、意味ありさうに云へば、『氣にかけなくッて……こゝを離れても始終案じてばつかりゐる。』『ア、有難い、私れ死んでも結構です。』『ナニ……死ぬなんて忌はしい事を……』『貴郞。』『何だい。』『私は貴郞に一生のお願が御座ります』『大さう改たまッて、……何ういふ事だい。』

お露はうつむけに寐返りして、うるさく垂れかゝる後れ毛を耳の上にかき上げ、其手を枕の上に置いて、『こんなに御厄介に成ッた上で、又此樣な事を申しては濟みませんけれども、御深切な貴郞の事ですから、押してお願ひ申します。私れかうやッてわづらつて居りましても、只氣掛なのは親父の事、……若し私

が萬一の事がありましたら、外にたよりの無い親父ですから、何うぞ――どうぞ貴郎力に成ッてやッて下さいまし。』

思ひ込んだやうに、力を籠めて云へば、蘆澤は少し驚いて、不思議さうに顔を眺めしが、態と高笑して、『アハヽヽヽ、何を云ふかと思ッたら、詰らない事を……お前は自分の病氣を餘り大さうに思ひ過ごしてゐるからいけない。そんな心配をするから身體に障るんだよ。』『ですが何うぞ此事を……』『それは云ふまでもない。だがそんな事より癒す方を精出さなければいけないよ。』『私はとても癒りません。』『サアそれがわるい。何も思ひ定める程の病氣ぢやアないぢやないか。ツマリ自分で自分を殺すやうなもんだ。』『私は癒らない方が望みです。』『エッ。』

堪へかねたか、お露は枕の上に顔をかくして、ワッと聲を上げて泣伏せば、蘆澤は呆れ顔。『そりや何う云ふ譯なんだい。何も搆ふ事は無いから云ッてお聞せな。エ、何うしたの。』

お露は涙を添へた瞼を見せて、『これは決して申しますまいと思て居ましたが、私はモウとても快復ませんから申して仕舞ますが、私の病氣の本は貴郎です。』

蘆澤は思はずギックリ。又お露を見まもりしが、心は顔に出てゝ、額に一叢の雲行き、口は結んだなりに何とも云ひ出さず。お露は鼻をすゝりながら、『貴郎、先達庭の東屋で仰有ッた事をお忘れなさいますまい。アノ時私は、貴郎が御冗談に仰有ッたのかしらん、それとも本氣で仰有ッたのか、若も本當であ

ッたら何んあゝ嬉しからうと思ッて、獨りて考へて參りますと、お客間の方でしきりにお露といふ聲が聞えますから、誠に濟まない事でしたが、ソッと立聞を致しました、しますと山川樣が貴郞に向ッての御異見、承ッて居るほど一々御尤な事で、私見たやうなものと若しそんな事があつたら、それこそ貴郞のお名前になること丶思ひましたら、それまでお慕ひ申した事も空恐ろしく成つて、――ア丶私の身の不運、戴春館へ行つたのも、決してすき好んで行つた譯ぢやないけれども、……せめて兄が居たらこんな思もしないだろうに、親父は失敗ひ、兄は亡くなる、私は何故こんな不幸な家へ生れたろうと、部屋へ歸ッて獨で泣いて居りました。それからは貴郞は何だか御心配さうに、始終考へてばかりお出なさいますから、若しやその事でおふさぎなさるのでは無いかと思へば、私の心苦しさと申すものは誠にお話し致すとも出來ません程です。』

言葉の征矢は、究竟の矢坪に、矢先白く射通したり。戀と名とは、此頃蘆澤の胸の中に闇仕合して、いづれをいづれ、痲の糸のもつれ出して、何處と緖を見付るともならず。よしあしの繁りあふ世や、分て行く小舟の障がちに、いつか心よき流に身を置く事か、此頃の顏のやつれ、胸の開けぬも、たゞこれの苦み。お露の病は、我への戀にやつれた姿と、知つて我慢がなるべきか、思ふ方に思はれては、隔の垣の結ひ目もいつか、一念に破られ、手を拱いて俯向く中に、決斷の鞘を拂ひかけたを、お露は知らねば吐息をついて又、『貴郞のお爲にならないと知りました上は、私は何んな切ない思をしても諦めやうと心

を決めました、けれども始終そればつかりが胸につかえて、クヨ〳〵思ひつめてとう〳〵こんな病氣になりましたので、私は自分の身の上が惡いんだと諦めて、とうから覺悟をきめてゐます。今では一日も早く死……死ぬ方を願つて居ります。』

冬の夜の霜寒く、凍つくやうな蛩の聲、ものあはれにかこたれて、蘆澤の心も共音の悲しさに、胸ハわけも無く亂れ、戀は一身を支配して、お露の外は何もかも忘れ果て、『ア、それほど迄に思つて呉れたのか。……お露さん改めてお前に賴むが、何うか女房に成つて呉れないか』『それは身に餘ッて嬉れしうハ御座いますが……私ハ……い……いやです』

言葉終らぬ內、目は袖に隱されて、跡はしやくり上る聲ばかり。蘆澤は輕く、『何故？』『貴郎ハ山川さんのお言葉を何とお聞きなさいました。』『世間の事か……ナーニそれは事情を知らないものハ兎や角うふだらうが、浮世は名聞ばかりではない。お前ハ私の妻として何處も不足の處は無いぢやないか實力で當ッて行くのに、少し位の妨害に勝てない事はあるものか。』『イ、エ貴郎の出世のお邪魔になるやうな事は、私ァ何うあッても出來ません。』

蘆澤は言葉に念を入れて、『お前は何うしても承知は出來ないかへ。』

お露は又目をうるまして、心が許さぬか、口重さうに、『ハイ……何うしましても……』

聞きすました蘆澤態とわら〳〵しく、『ム、こんなに云ッても不承知なのか。トやァ先程云ッたのは嘘で、

實は私が厭なのだね。さう事ならい丶。》すねて見せるも一ッの手、ズンと立上らうとすれば、お露はせき込んで體を前にのり出し、《貴郎そりやア餘りです。私は何が見得で嘘や僞を申しましやう。》云はれても又手強く、《口でばかりは何とでも云へる。厭なら厭でい丶。》立かける膝を、あわて丶押えるお露。病氣となる程の心の中、諦めても諦められぬが習ひ、まして其人に同じ心を云はれて、厭といふ切なさつらさ、それを堪えおほしたもの丶、流石は女子、胸わすえても、覺悟はしても、戀の力には張よはく、《それはモウ私のやうな足はない、――人並の事も出來ないものでも宜しくば、……》《眞實にさうだね。》《ハイ。私の身に取ッてハ有難いとも何とも申さうやうな言葉はありません。……ですが……》《ナニそこに（ですが）がいるものか。モウ外の事は云ッこなし――サア涙を拭ひて笑ひ顏をお見せな。》《でも何うも……》《未だそんな事を……私を厭とお思でなければモウ云ふのはお止し》。《それは貴郎御無理です。》《これからはモット無理を云ふよ。》笑ひながら云へば、《これからとハ何うこれからです。》《お前が蘆澤と名字をかえてからさ。》《さうなりましたらさぞ……》心の素肌あらはれて、眞底うれしさうな顏色、久しく見えなんだ口元の愛敬は、蘆澤の目に何れ程の價値を見せしか。《そんなに身體を出して冷ゑてはいけない――夜の空氣はよくないから》云ひながら肩へ手をかけて見て、《大さう痩せたねへ》

これまでの苦勞察したと云はぬばかりの様子に、お露ハ何となく嬉しく、少し起直ッて着物を搔合ハせる時胸のほとりにチラリと見えた黒いもの、蘆澤は目早く見付けて、〔何だいそれは〕手を出して取らうとすれば、押隱くして、〔何でもありませんよ。〕〔隱さなくッてもいゝじやあないか。〕〔貴君がお笑ひなさらなければお見せ申します。〕〔ナニ笑ふものか。サアお見せ。〕手に取つて見れば、蘆澤の半身の寫眞。優しい心根は、千句萬句より、男の胸に染みて言葉も出ず、お露はポッと顏を紅らめて、俯向いてゐるを、ヂッと眺めて、〔アヽこんなにも……お露さんこれは決して忘れない〕〔貴郎のお言葉も決して仇にハ……〕見合はす眼の中に、心を籠めた働き振。春宵一刻、月は南の窓に今を春の最中、いつか濡れ心の花におしたの露は、さぞかし美くしかるべし。

◉福の神　弦齋居士

新商店（お世辭を言ひな）

神田小川町の中央に新に開けし唐物店あり間口二間に足らず奥行も亦た之に準ドたる小見世なれども品

物の澤山硝子戸棚の內に見ゆるは卸せし資本の多きなるべし、主人は近頃まで或る御役所へ腰辨當にて通ひし小官員なりしが名古屋の地震よりも怖ろしき官海の地震に搖落され外に賴むべき技倆も無きものから蓄へし金を資本にして馴れぬ商法を始めしなり、最初は何事も內輪が好しと店に小さく人も雇はず、妻と娘を相手にして天晴商賣を爲す量見、店の飾付杯は懇意な商人に手傳て貰ひし故見掛は首尾好く出來たれども馴れぬ事とて客扱ひが何より困難、主人は物識顏に商賣の心得を諭さんと妻や娘を呼び《オイ和女達は是から商賣人になつたのだから何でも腰を低くしなければ不可ないよ、腰を低くすると云てなにも屈膝で步く譯では無いが客を見たら先づ勢好くイラッシャーイと言葉を掛て品物を出したら無闇にお世辭を言ふのだ、商賣ハ愛嬌が肝腎だからお世辭を旨く言はなければ不可ない》十七八の容色好き娘はホヽと笑ひ出し《其癖阿父さんが一番家中でお世辭の無いのですよ》四十恰好の父ハ頭を搔き《イヤさ己も是からは言ふよ、己も商人に成たのだから今迄の樣に人民に向て威張りは仕ない積りだ》傍なる妻も打笑ひ《ソラ御覽なさい、まだ人民だなんぞと被仰るから不可ません、大切なお客樣ではありませんか》主人《成程爾云へば爾だが今の內は何でも宜い、それから和女達が第一番に覺えなくてはならないものは符徵だて、元來己は品物に皆な正札を着けて置かうと思たが好い物に正札を着けると外の店でそれを見て直く其價より廉く賣ると云ふから大概なものは皆な符徵を着けて置た、家の符徵は《メデタイコトバカリ》と云ふので九つの字が一二三四と九までに配當してある、即ち（メ）が一で（デ）が二

で（タ）が三だ、若し札に（タ）と書てあれば三錢の事で（タコ）とあれば三十五錢だから是を能く覺えて置きな》

主人が符徴の講釋を爲す折から店先に人の來りし樣子、娘は早くも之を認めて父の袖を惹き《阿父さん來ましたよ》父《誰が》娘《誰がつてお客樣が》父は横柄に頷き《オヽ人民か、來たなら和女出るが宜い》娘は頭を振り《アラ妾ァ馴れませんから阿父さん出て下さい》と辭する、父は妻を顧み《和女出な》妻も立上らず《旦那、貴郎が今講釋をなすつた位ですから御自分でお出なさいまし》主人も動かず《己は今疝氣で腰が痛いから和女達出てお呉れ》と三人が押問答中店先に聲あり《オイ誰も居ないのか、此帽子は幾何だ》

客に呼立られて主人は詮方無く店に出たるが心にこそ思へとも被入いの聲ァ口より出ず、突然客の指させる帽子を執て《是ですか、是ァ》と裏を撿めしが如何にしけん附徴の札は無し、《オヤ》と四邊を尋ねて奥の方を顧み《コレ〳〵和女達は是に貼て有つた札を知らないか》奥より娘が襖の外に半ば顏を出し《イヽエ存ドません》客は三十前後の若者今十七八の美人が奥に在るを認めて屹と其方に目を注げり、主人は頻に四邊を搜し、《札が落たのか知らん、貼たものが落る筈は無いが、ア、分つた、是は遲く來た分でまだ札を着けなかつたつけ》と漸く心注き、《先生、是は價格がまだ確定しませんから外のにおすつたら何です》客は其樣子の可笑しきを心に笑ひ《イヤ此形が至極氣に入たのだから價が分らんければ一つ調

べて下さい》と言葉も漸く丁寧になりしは奥の美人に對してか、主人は據無く《少々お待ち下さい》と言葉を殘して奥へ入り、帳面と算盤を執出してエート此口が一ダースで十八圓か、十八圓を十二に割れば一つが一圓五十錢に當る》と漸く勘定なし終り、急ぎ店へ出來て《お待遠でしたな、此の山高帽子は一つ一圓五十錢に當ります》客は暫く黒羅紗の帽子を打眺め、《是は羅紗も好し、一圓五十錢でハ中々廉い》此時主人は何思ひけん突然客の持てる帽子を取り《イヤ是は失策、實は勘定を間違へました》と帽子を持て再び奥に駈入りぬ、

妻と娘は客に對して氣の毒にもあり、妻は娘を顧て《お糸や、お客樣にお茶でもお進げ》と云ひながら主人に向ひ《旦那何なすつたのですチー勘定なんぞを間違へてさ、》人主は再び算盤を出し《ナニ勘定を間違へたのでは無い、元價を言て仕舞たのだ、是は丁度一つ一圓五十錢で問屋から買たのだから幾分かの利益を見込まなければならん、幾何に賣たら宜だろうの》妻《幾何でも損を仕ない樣にお賣りなさい》主人《では二圓とも仕て置かうか》妻《若しや外で夫より廉く賣ると不可ませんね》主人《困たな、昨日だと馴れた人が手傳て居たから都合が宜けれども今日は困る、昨日來て下さいと言はうか》

娘は母に促されて茶飲茶碗に茶を注ぎ、茶卓に載せて店先に出たれども平生懇意な客に向ふとは事變り初めて來たる店の客に對するなれば何となく耻かしく、手先も顫へ顏も紅み、父に敎へられし被入いの聲を出すどころでは無く、漸くの事にて客の前に茶碗を置けり、客は脇目も振らず娘の顏を凝視居る、

娘は父が教のお世辭を言ふは此時なりと思ひしが口咨咀て言葉も出ず、胸は躍り氣は喘り心の內にて《ア、切ない》

娘が胸中の苦みを知るや知らずや父は漸く出來り《先生、甚だ失禮を仕ました、只今篤と協議を遂ましたところ二圓以內ならば宜かろうと申す事で》客は笑ひ度けれども美人に對して笑を忍び《二圓以內とハ一圓何十錢の事です》主人《左樣ですな、何十錢と決定しませんから、先生外の店では何程に賣却しますか御存知ありませんか》客《知りませんね》主人《困りますな、先生一つ適當な價格を評價して下さらんか》客は此主人全く馴ぬ人なりと察せしが他の店ならば此機に乘じて極く安く買ふべけれども今此にて左樣の事を爲さば嬋娟たる美人に卑しまれんと妙な處に俠氣を出し《御主人、爾ならば二圓に買ひませう》と損得搆はぬ大奮發、主人は首を傾け《ナニ二圓、二圓ではチト高いかも知れませんよ》客《イヤ搆ひません、此帽子は至極氣に入たから》と客の方より價を昂て遂に此帽子を二圓に買へり

此客の去りし後主人ハホット息を吐きて奥に入り《ア、實に苦しかつた、疝氣が頭へ昇たものだから實に溜らん、今度は和女店へ出てお呉れ》と妻を促す、妻は今茶碗を持ち來る娘に聲掛け《お糸や、茶碗は其處に置て和女少しの內店に居てお呉れ、》娘は止むことを得ず、店の片隅に蹲踞て表の方を眺め居る、通る二三人の書生、一人ハ他を呼び《オイ、君、鳥渡見給へ、非常な美人が居るぜ》他の書生《ウム、君は目が速いよ、何か買はうか》と相連りてドヤ〳〵と店に入る、娘は初めより此樣子を見て居りしかば

猶更極り惡く《阿父さん》と言ひながら顏を紅くして奧へ逃込まんとす、父は奧より娘を止め、《和女少し出て居てお呉れよ、己も今疝氣が愈ると助太刀に行くから》娘は當惑、良ありて漸く一世の勇氣を出し轟く胸を無理に抑へて店先に出たり、書生は彼方此方と頻に打眺め《オイ姉さん、其所に在る絹手巾は幾何だ》娘は客に言葉を掛られてハッと顏を紅くせしが漸く《是れですか》と手巾を執り符徵の札を見て口の內に《是は(イコ)と書てある、エート(メ)が一で(デ)か二で(タ)(イ)か、(イ)は四だな、四に(コ)が五だから四十五錢か》と漸く算用し《是は四十五錢》と思切て言放てり、書生は他の手巾を指さし《此方は》娘は再びそれを執り《エート(カト)か、(カ)は幾何たつけ、メデタイコトバカリ》と左右の指を折りて一々數へ《八十六錢》と極く簡單なる挨拶、書生は復た他の手巾を指さして彼よ是よと價を問へば娘は一々指折り數へて胸算用する樣子のさも苦そうに見ゆ、一人の書生は之を見兼て他を戒め《オイ、君、贅問すのは好い加減にして早く何か買ひ給へ》他は猶ほも店中を見廻し《ウム買うよ、手袋を買はうか、姉さん此の毛の手袋は幾何だ》と玉羅紗の手袋を指さす、娘は蒼蠅きことよと心に悲みしが是も時節と諦めて手袋を執り《エート(メデ)か、是は十二錢》と斷切たる如き言葉、書生は不審顏、《十二錢とは馬鹿に安いな、間違ひでは無いか》と是も荒々しき言葉、蓋し此外に優しき言葉を知らざるなり、娘は斯く言はれて自分にも餘り廉過ると心注き手袋を持て奧に入り《阿父さん、是は(メデ)と書てありますが十二錢では廉過ぎますよ》父は手に執りて能く撿め《馬鹿を言ふな、一圓二十錢だ》娘《爾なら

(デ)の字の下へ零でも書てお置きなされば宜のに、(タコ)とあれば三十五錢だと被仰るから間違たのです、今度は妾が出るのは嫌ですから阿父さん往て下さい』と父を促す、父は止むを得ず自から店へ出たり、書生連は美人の引込みしを見て何も買はずに歸り去る、

此等を始めとして客の店へ來る毎に家内中の人狼狽せさること無し唯娘が店に居れば客の來ること多く、居らざれば甚だ寡き故主人は強て嫌がる娘に店番を爲さしめたり、

良あり店に來りしは年頃二十五六にて服裝も身體も極く意氣に造りたる一個の美男子、供に小僧をさへ連れたるは然るべき大家の若旦那にやあらむ、

百度參り(倦厭ました)

小意氣なる若旦那ハ此店先に立ちて先づ中の樣子を眺め『姉さん、憚りさまですが其の卷烟草入を見せて下さい』と腰も低く言葉も丁寧に賴むが如く言ふ、娘は皮製の卷烟草入を硝子蓋の筥より取出して客の前に置けり、若旦那は店に腰掛けて己れが腰なる日本流の烟草入を出し烟管に烟草を籠めてさも氣長に燻しながら卷烟草入を一々手に執りて撿め總て代價を尋ねて其中の一個を買ハんとせり供に連れたる小僧は後ろより低聲に『若旦那爾なものをお買ひなすつて何なさる、家に往けば澤山好のがあるでハありませんか』と不審顏、若旦那は此言葉が娘に聞えもやせんと顏を紅らめ『宜から默てお在』と小僧を制して遂に卷烟草入を買へり、

代價ハ拂ひぬ、品物ハ受取りぬ、小僧ハ若旦那が最早店を立出るならんと念ひて二足三足先に出掛けしが若旦那は尚は立出でず、烟管を口に咬へて要も無き煙草を燻しつゝ店の內を彼方此方と打眺めて娘に向ひ《姉さん、此の御店は此頃お開きのですか》と物柔に問ふ、娘は耻かしさうに《ハイ昨日から始めましたのです》とまだ人馴れぬ口上振り、若旦那《大層お装飾が好く出來ました》娘《何致しまして》若旦那《此邊ハ賑かですからお商賣が御座いませう》娘《何致しまして》若旦那は烟に咽びながら尚は煙草を止めず《能く斯なに好い物ばかりお店へお揃へですな》娘は矢張り《何致しまして》と一樣の挨拶、蓋し此娘未だ客にお世辭言ふ事も知らねば客に言葉を掛けらるゝが何より心苦しきなり、此時店の主人も漸く疝氣の愈りしと見えて奥より出來れり、尋常なれば先づ被入いと言葉を掛け輕く叩頭して客の前に坐すべきなれども役人性質の新主人中々左樣の事は出來ず、眼光鋭く若旦那を睨めて嚴めしく其前に坐を占めたり、若旦那は手持無沙汰、自分の方よりお世辭を言ひて《今日は大分お暖氣ですな》と主人の機嫌を取る、主人は少しの愛嬌氣も無く《イヤ朝來中々寒氣です》と符合ぬ返事娘は餘り無愛相の事よと竊に父上に目配すれども父ハ頓と心注かず《何かお入要ですか》と客に催促、娘は劇て父を顧み《今巻烟草入を買て戴きました》と場合を取繕ふ、父は大柄に頷を揚げ《ウム、最早濟だのか》と客を眼下に視降しぬ、若旦那は這々の體にて立上り《大きにお邪魔を致しました》と詫るが如き捨言葉、娘に心を殘して出て行く、跡にて娘の聲《阿父さんハ眞誠に無愛相ですよ》と父を戒むる、

若旦那は店を出て二三間先に進みたり、最前より待居る小僧、『若旦那は何を仕て被在たのです』と不平顔若旦那は頭を掻き『ウム、今鳥渡外の品物を見て居たのだ』小僧ハ屹と若旦那の顔を覗て『若旦那、お家が唐物屋で巻烟草入でも何でも澤山あるのに何故彼樣家で巻烟草入れをお買ひなさるのです、お負に彼所の家は直段も割に高いではありませんか』と遠慮無き質問、若旦那は少し答に究せしが良ありて『イヤ和子にはまだ商賣の樣子が分らないのだ、商賣と云ふものは折々外の店を撿點て見て品物の相場や物を賣る工合なども調べなければならんものだ』と急拵への口實、小僧は中々承知せず『若旦那は急に妙な事をなすつたのですな、それならば今迄も外の店をお調べなさりそうなものですに、今日に限て彼家で買物をなすつたのは急に商法氣をお出しなすつたのですか、若し若旦那が商法氣をお出しなさる樣なれば早速大旦那に申上げて大旦那を御安心させ申します、私なんぞが申さないでも貴郎は御承知でせうが大旦那は何位貴郎のお身の上を案ドて被在るか知れません、好いお年をなすつて商賣の事には頓と身を入れず、女郎買ひや藝者狂ひに金計りお使ひなすつて眞實に仕樣が無いではありませんか』と生意氣な小僧若旦那に異見を言ふも可笑し、若旦那は『叱ッ〱』と制し『コラ往來で爾な事を饒舌る奴があるものか、人聞が惡い』小僧は平氣『だつて若旦那、私が斯ふやつて大旦那のお眼力を以て貴郎のお供兼見張役にあつて處々へ追蹤て歩くのに若旦那は何時でも私を欺して途中で放棄てお仕舞ひなさるのですもの、其度に私が家へ歸て大旦那に叱られるのは餘り感心致しません、今日と云ふ今日は決して

貴郎に放棄れませんから外へ往かずに眞直にお歸りなさいまし》小僧が斯くまで輕蔑したる言葉を放つも敢て之を叱り懲さゞるは此若旦那餘程身に弱みのあるならん然れども今日は何を感じけん小僧と共に速く家に歸りければ小僧も安堵せり、家の人も亦た安堵せり、家は日本橋に近き大通りにて間口も廣き土藏造、唐物は店にあれども小賣は片手間、卸賣が本業と見ゆ、翌日も此若旦那は所用ありとて小僧を伴て家を出しが外へは往かず一直線に小川町に來りて例の新店の唐物屋に入れり、此日は雜貨二三品、價の高き物を求めて戻りぬ、小僧は不審《若旦那、商法で品物を買ふのならば外の店のも少しお買ひなさい》と勸むれども若旦那は承知せず、《己が斯ふやつて彼家の品物計りを買ふのは今に大金儲をする事があるのたから此事は決して外の人に饒舌るな》と小僧に口止めして毎日續けて此家に來れり、小僧は其度毎に必ずお供、或日も例の如く若旦那は家を出たり、供の小僧は同じ道に倦み果けん《若旦那、今日も小川町へお百度參りですか、隨分モー倦厭ましたな》と足も進まず、若旦那は之を勵し《コラ今から倦厭て何するのだ、人間は辛抱が肝腎だ、和子の樣に辛抱が無くては迚も商人になれないぞ》小僧《辛抱も物に依りけりです、斯な辛抱は何の役にも立ちません、それに若旦那は妙な事がありますね、彼店に娘が出て居る時は直ぐ入て何かお買ひなさるが外の人が出て居ると態と一旦前を通越て要も無い勸工場なんぞを素見して復た戻りにお寄りなさる、商賣の爲めに物を買ふなら誰が出て居ても搆はないではありませんか》と委細搆はぬ質問、若旦那は困り《イヤ彼店へ

頑固阿爺か坐て居てウムと睨められると壽命が縮まるからな》と譯も無き事を問答して小川町に來りけるが例の店には幸ひ目指す娘こそ出で居れり、

若旦那は天の與へと忽ち店に入る、娘も最初の內と事變り此頃は商賣にも馴れお世辭も口より出る如くなりしかば若旦那を見て《オヤ被入い》と溢るゝ計りの愛嬌、若旦那は魂有頂天外に飛上り品物の直段は高くも此愛嬌が千兩の價値ありなぞと心に理窟を着けて店中を見廻しけるがハテ買ふべきものは最早無し、帽子も買ひ、手袋も買ひ、手巾も買ひ、シャツも買ひ、洋刀も買ひ、襟卷も買ひ、此店に在る目欲き品は大抵一個づゝ買ひ求めたれば今度は之れを呉れろと注文すべきものも無し、何か好き物にてもあらぬかと品物を撿めるに事寄せて先づ一二服の煙草を燻しぬ、《今日は好いお天氣です》と娘が言出す愛嬌言葉、此方はそれを好機にして天氣の善惡より饒舌り出し果は劇場の噂にまで談話は飛廻る、娘は好い加減に返事して人の氣を外さぬも商賣の氣轉、

斯る處へ店先の片隅に來りたる二十二三の若者、此寒天に單衣と袷の重襲したる見苦しき服裝にて背に大なる風呂敷包を負ひ《今日は如何さまです》と腰を屈めて慇懃に問ふは何か品物を賣ものにやあらん娘は若者を見て愛相好く《オヤ吸口屋さん、待て居たのです、モー皆な無くなりましたから百本計り置て下さい、》若者は若旦那に會釋して店の片脇に風呂敷包を卸し、中を披て竹にて製したる卷煙草の吸口を取出したり、娘は客の居る前にて場合惡しと念ひしが此客急に歸る氣色無ければ詮方無く、客の方を

打捨て若者の前に來り《此吸口は工合が好いから好く賣れます、二三日前から品切れで困て居ましたが貴郞は滅多に此へお入來なさらないのですネ》と言葉も至極丁寧なるは此娘まだ初心なる故と若旦那は念へり、吸口屋の若者は《へイ難有ふ御座います》と禮を述べつゝ五本十本と數へて前に出し《私は遠方に居りまして滅多に商賣に出ませんから御無沙汰を致して濟みません》娘《遠方とは何方です》若者《へイ田舍で御座います、雜司が谷の先ですから此まで二里もありませう》娘《マア大層遠くですネ、此吸口は貴郞が御自分で御拵へなさるのですか》若者《へイ自分で拵へて溜めて置ては賣りに出ます》此問答中若旦那は漸く買ふべき品物を捜し出けん《姊さん、その奥に見える上等の石鹼の筥を一つ下さい》と三個入六七十錢の物を一つ買ひ、尙は四邊を調べてありけるが娘の一旦此へ來て石鹼を賣りし後再び吸口屋の方へ赴きしに閑却されて止むを得ず店を出たり、《難有ふ御座います》と娘の妙なる聲も耳に殘りて足進ます、

娘は奥より茶など汲來て吸口屋の若者に進め《貴郞此邊へ出てお入來の時には何時でも此へ寄て下さい》若者《へイ難有ふ御座います、御贔負になすつて下さいますから此方へ一番先に品物を持て參るのです、然し貧乏暇無しとやらで物を賣に出ますと其日一日は潰れて仕舞ひますし、と申して便利の好い處は、家賃が高ふ御座いますから容易に住めませんし、夫故三日目に出るところもッと五日目になる樣な譯で誠に濟みません》と哀れなる辨解、娘は倩々其容貌風采を窺ふに服裝は汚しと雖も人品左まで卑

しからず、擧動進退の折目正しきより詞遣の丁寧なる所ハ何れ素性ある人の零落たるならんと坐ろに憐みを催し《貴郎はお家で其吸口をお製へなさるのに一日何本位出來ます》と手間賃の安さを察しての言葉、若者も此娘が優しく尋ね呉るゝ事の懷かしく《ハイ朝の六時から夜の十時頃まで休まず勉强して漸く百本位なものです》娘《一本を五厘位にお卸しなすつては手間賃が何程にもなりますまい》若者《竹の代價などを引きますと一本で二厘ほどの手間に爲ります》

世には斯る仕事を爲す人もありけるかと娘は哀れに感じ《それでは餘り酷ふ御座いますネ、元來此吸口は外で買ひますと一本六厘か七厘に當りますが貴郎のがお安いから今は貴郎から計り買ふ樣になりました、斯なものは安くも高くも店の商賣にそれほど違ひもありませんから外で買ふ直段にして貴郎のも一本七厘づゝで買ひませう》と此男に利益を増して遣る心持、吸口屋は兩眼に涙を泛べ、《難有ふ御座います、それならば私も品物を精撰しまして極く好いの計り此方へ持て參りませう、然し今日のは尋常のですから以前の通り五厘づゝで宜う御座います》と飽くまでも正直なる口上、娘は聞かず、《イヽエ、今日のから七厘にして進ませう》と帳場より代金を持來る、

今表の方より仕入物を携へて戻り來りし此家の主人若者を見て《オヤ吸口屋か、今日も置て往て貰はう》と言葉も大柄、娘は早くも《今買ひました》主人《爾か、幾干に買た、彼は五厘では高い、四厘宛に負て置かないか、外では四厘で卸す處がある》若者は無言、何を感ぜしか愁然と頭を低れたり、娘は呆れ

顏に父を顧み『それでも阿父さんが過日仕入て被入たのは七厘宛ではありませんか』父は叱ッと制し『コラ爾な內幕を言て仕舞ふ奴があるものか』

○古帽子（それ見たか）

人の心ほど違ふものはあらじ、娘ハ七厘に買はんと云ふ、父ハ四厘に負けろと云ふ　蓋し勞力の價値を知るものあらば誰か之を四厘などと評價すべき、左れども世にハ此娘寡ふして此父多し、ア、怨むまじ怒るまじと吸口屋の若者ハトッと堪えて何事も言はず、主人も極り惡るければ奧に入りぬ、娘ハ代金を若者の前に出せり、若者は五厘宛に數へて餘れるを戾し『お孃さん、旦那ハ四厘に負けろと被仰る位ですから若し今七厘宛に進た事でも知れますと是切お賣込も出來ません、何卒此の餘分ハお納めなすつて』と辭して更に受取らず、娘ハ奧の方を顧みつゝ『イ、エ、妾が承知して居るのですから宜う御座います、何卒取てお置きなさい、爾して是からハ妾が店に居るときを見て來て下さい、何時でも七厘宛に買て進ます』と強て代金を若者に渡す、若者ハ其厚意を感じて幾度も拜謝し遂に金子を受取りて歸り行く。

何人も他人に恩惠を施したるほど心に愉快なるものはあらじ、况して此娘先頃より吸口屋の若者が屢々來りて品物を卸すに他の才取商人の如く狡猾卑劣なる擧動少しも無く、輕薄なる追從口も利かざる代りに品物を衒ふ如き事も爲さず、最も正直に最も親切に商賣するを見て珍らしき人よと念ひ居りしなり、商業ハ利を重するものとハ云へ今の世の商人の如く、唯目前の小利のみに走りて道德心も無く俠義心も

無く買ふものハ蹈倒し賣るものハ衒賣し卑劣貪婪是れ事とするハ豈に人たるもの丶道ならんや、稼ぐものにハ福來る、吸口屋の若者の如く勤直正路に働きなば他日天晴の商人たらんと根が怜悧なる此娘竊に此若者を末頼もしく覺ゑしあり、左れば其の日夜勞働して額の汗を聚めた品物、五厘ハ愚か一錢にも二錢にも買て遣り度しと念ひしハ惠を知りし人の情、他人も斯くこそあり度けれ。

娘は今買ひし品物を硝子筥に納めて奥室に入りぬ、奥にハ今主人が問屋より仕入れ來りし品物を並べて一々帳面と引合せ（お糸や、何でも商業をするには身體を勞働して處々當て見るものだの、同じ品物でも仕入る家に依て大層直段に違ひがある、己も此頃ハ大分仕入が上手になつて割の高い品物ハ決して買はないが和女も店に居て卸商が來たら直段に搆はず直切れるだけ直切て見るが宜い、己なぞハ今或る問屋で此帽子を三割も直切たら直ぐ負けた、彼の樣子ではまだ負けたかも知れんが高く價を着けて惜しい事を仕た）と娘に向て手柄談、娘ハ其帽子を手に執りて打眺め（阿父さん是は去年のでハありませんか、形は古し、恰好も惡し、斯なものを店に於ても賣れハ仕ません）父ハ頑として頭を振り（イヤ去年のでも決して搆ハない、直段さへ安ければ買て置て損は無いよ、何れ長い内に賣れる事があるだらう）娘ハ幾分か商賣の事に馴れし故父の意見と事變り（阿父さん、それハせめて去年の秋時分ならば暮の内に賣ることも出來ませうが最早春になれば冬帽子を買ふものはありません、入要のある人ハ皆な買て仕舞いましたから此次ハ徐々夏帽子の仕入に移らなければならんのです、問屋でも今安く賣らなければ復

た此秋まで持越さなければならんから直段も負たのでせう、爾なもの計りお買ひなすつては始末に不可ませんヨ』と却て父の手柄顔に反對の意見、父ハ之を聞て益々激し『和女ハ何時まで立ても爾な分らん事を言ふから困る、コレ能く聞けよ、仕入と云ふものハ堀出物を捜して安い物を買ふのが何より肝腎だ、安くさへ買て置けば何時賣ても屹度儲かる、今年賣れなければ來年賣ても明後年賣ても儲かる味ハ同ト事だ、ソラ和女も記臆て居るだろう去年己が道具屋へ十五圓で賣た彼の朝鮮燒の茶碗を、彼などは己が明治元年上野の戰爭のあつた時に彰義隊で討死した或るお旗本の奥さんから外の茶の湯道具と混て一兩二分に買たのだそれが近年茶の湯の流行に連れて追々直が出たものだからホラ見ろ十五圓に成たでは無いか、其外明治十年に銀座の夜店で二十錢に買た本彫の置物は過日の道具市で三圓に賣たでは無いか何でも商賣するには爾云ふ旨い事を考へて買ふときは極く安く買ひ賣るときは極く高く賣る樣に仕なければ不可ん』と己が骨董物で儲けし事を例として時好物の唐物商賣詭くも可笑し、

娘ハ呆れて復た何事も言はず、父ハ得意になりて品物に一々符徴を着け、仕入れし物を店に並べて尚ほ娘に商賣の講釋をなせり、娘は心の内に若し先刻の吸口を七厘宛に買ひたりと知れなば嘸ぞ父が怒るべしと念ひ、餘分の代金は自分の小遣錢より繰入て遂に此事は父に言はざりし、父は左樣の事を知らねば吸口を見て『お糸や、今度吸口屋が來たら四厘か三厘位に直切て見な、殊に依ると負けるかも知れない、何でも買ふものを直切て見ないのは損だ』娘ハ餘りの事に念ひ『阿父さん若し家へ來るお客が其通りに

何でも直切たら負けて遣るのですか》父《何して〳〵、家で賣るものを負けて溜るものか》翌日例の若旦那は小僧を連れて相變らず店に來れり、娘は此人何の必要がありて毎日唐物の一品か二品を買ふにやと心に可笑しく念へども馴染の客故愛相好く《彼入いまし、サアお掛けなさいまし》と漸く物馴れたる愛嬌言葉、こは何人に向ても言出すべき愛嬌言葉なれども心ありて聞く若旦那の耳には鶯の初音も物の數ならず。

若旦那のお供なる小僧は店の前に茫然と立ちて店の品物を面白そうに眺めてありけるは流石唐物屋の小僧品物の殖へしに心注きしなるべし、良ありて小僧は急に笑出し《ヤア可笑いな、若旦那鳥渡御覽なさい、家で厄介物に仕て居た古帽子が彼所に懸て居ます、彼の帽子は昨日番頭さんが旨く素人の小賣屋に賣付けて遣たと言ひましたが此家で買たのですぜ、何ぼ素人だつて今頃斯な物を店に並へて置くとは餘程目先が利きませんな若旦那貴郎は何せ無駄に買ふのだから其帽子でも買てお遣りなさい、功徳になります》と若旦那が頻に目配して制するにも搆はずペラ〳〵饒舌り立つる。

若旦那は大に弱り《コラ錢を遣るから汁粉でも喰て來な》と十錢銀貨の鼻薬、小僧は洒落者、錢を貰て忽ち外へ赴きながら《是は旨いな、汁粉が喰たくなつたら復た饒舌ろう》と一參に駈て行く、若旦那は娘に對して極り悪く《姉さん、彼小僧は變り者で折々妙な事を言ふのに困ります》と言紛らすも一時の究策、娘は《ハア爾ですか》と言紛らされし如く答へたれども心中窃に怪しく念へり、小僧の

言に依れば此客人も矢張り唐物屋にて父が昨日帽子を仕入れしは其家なりと見ゆ、唐物屋の人が毎日此へ唐物を買ひに來るとは心得ずと念ひしが復た思返して悄然と差俯けり、頰は熱し目は眩くさも耻かしさうに横を向きし嬌態、若旦那は心に（占たな）と悦ぶも自惚此時主人は外出したりと見えて家に在らず、奧には內儀が針仕事に氣を入れて此方を顧みず、若旦那はモヂ〳〵して頻に娘の顏を覗き込み懷中より手紙の如きものを出さんとせしが娘はチラと見て急に身を退けぬ、斯る所に小僧は歸り來れり、若旦那は顧みて《モー歸たのか、餘り早いな》小僧《エイ、今度は蕎麥に願ひ度ひもので》若旦那《馬鹿を言ふな、》

表よりドヤ〳〵と入來る二三人の客、彼を呉れ是を呉れと種々の注文を爲せば娘は好き機會にして品物を其客の前に並べたり、若旦那は手持無沙汰、何も買はずに去ることもならず、《姉さん其の古、、、、イヤ黑い帽子は幾干です》娘《ハイ二圓五十錢です》若旦那《それを下さい》と遂に小僧が豫言の如く己が家より出し古帽子を購ひて歸りける、途中にて小僧の調戲ふこと限無し。

跡にて娘はホッと一息《ア、苦しかつた、人を馬鹿にして艶書でも呉れようと仕たのだよ、顏は美麗でも心は餘程馬鹿な人だ、彼な息子は親讓りの身代を潰すと極つて居る、可哀想に》と獨語、

此日主人が歸宅して娘に店の樣子を問ひければ娘は一々賣れたるものを告げぬ、《阿父さん昨日の帽子も賣れました》と娘が吹聽せし時は主人の低き鼻も俄に高々となり《それ見たことか、和女は昨日己の事

を惡く言たが今更己の眼力の高いのに感心したろう、》娘《些とも感心しません》父《ナニ、だつて賣たと云ふでは無いか》娘《賣れは賣れましたが買た人が大馬鹿者です》父《何故、誰が買たのだ》娘《毎日小僧を連れて何か買ひに來る若い人です》父は頷き《ウム彼の色の白い好い男の意氣な人か、彼人が何故馬鹿だ》娘は流石に實際の事も言ひ難く《それでも彼な帽子を買て行くのですもの》父《何處まで負惜みを云ふ》と叱る、

誤謬の功名、主人は己が誤て買ひし古帽子の忽ち賣れしより意氣揚々として一層得意になり《お糸や、己の言ふ通り堀出物を買て置けば屹度儲かる、今日も一つ彼の問屋へ行て何か旨い物を捜して來よう》と天晴黒人にありし量見、再び家を出て日本橋の此方ある唐物問屋に至れり、

唐物問屋の店には丁度若旦那も居れり、例の小僧も亦た居れり、此方は其顔を見て《ヤア貴郎は》若旦那ハクスリ、小僧は後ろより《ソラ帽子〳〵》

好都合（どし〳〵儲かる）

期せざりき此問屋にて店の常客に逢はんとは、唐物屋の主人は不審顏に打眺め《貴郎は毎度》と言ひ掛けるを、それ言れては番頭達へ體裁惡しと急に遮る若旦那《イヤ過日は失禮、今日はお仕入物ですか、何なりとも極くお廉く致して置ますから澤山お持ちなさい、それに貴郎の事ですから代も即金には及びません、通帳を拵へて置きまして月末にお拂ひ下されば宜う御座います、今日横濱から大分新物が來て

居りますからお目に掛けませう、サア御覽なさい、是は割の廉い品です、是は當今流行で賣口が宜う御座います、是は巴里の本場で、是は獨逸製で、是は今度初めて來たので、是は夏場に大層賣れる品です》と無闇に品物を前に並べ且つ斷間無く饒舌り續けて唐物屋の主人に口を開かしめず、此方は唯愉快限り無し、品物は安く負ると云ふ、代價は帳面で宜しと云ひ、何も彼も非常に親切に仕て呉れる嬉しさ、《それでは是を一ダース彼を二ダース、》と五六種の品物を注文するに若旦那は一々品撿めて最も好きものを擇取り是は非常に割引して差上ます》と算盤を膝の上へ横に翳して勘定を示す、此方は視て悦び、《成程格が大層お安い、以來はお店へ計り仕入に來ませう》若旦那《爾なさい、外よりは必ずお安く差上ます、然し私が店に居るとき計り來て下さい番頭では復た高いことを申すかも知れませんから》

唐物屋の主人は益々悅び若旦那に後來の事ども好く賴み仕入を濟ませて家に歸りぬ、此度は復た以前に增して自慢顔、《コレお糸や鳥度來て御覽、己れは實に仕入が上手だろう、此に在る品々は何位の元價だかマア當て見るが宜い、エ、幾何だと、ツラ爾な事を言ふから和女はまだ素人だと云ふことさ、是はの其價より三割も安いのだ、爾して品物は一粒擇だから並のより餘程好い、何だ恐入たろう、》と鼻蠢して物語る、娘も之には恐れ入たり、《眞誠で御座いますね品物は好し、價ハ安し、阿父さん、是は何處でお仕入になりました、》と不審顔に問ふ、

父は得々然たり、《是を仕入た家は昨日彼帽子を買た家だ、ところが可笑い事がある、此店に例の若旦那風の人が居ての、色々親切に物を賣て呉れた、彼人は其店の息子だが屹度商賣研究の爲めに毎日此へ買物に來るのだと見える、何にせよ彼息子さんが皆な卸して呉れたのだ》娘は初めて其原由を悟り《道理で阿父さんに似合はない仕入をなすつたと思ひました、》父《何だ似合はないとは、爾云ふ割の安い問屋を捜すのが己の腕前だ》娘も明白には辨解せず《お腕前には違ひありませんが外の人が行ては爾安く賣りませんよ》父《だから己に限るのだ》娘《其代り彼息子さんが店に居ないで外の番頭でも出て居たら阿父は復た昨日の樣な惡い帽子を高く賣付られたのでせう》父《馬鹿を言ふな、然し彼息子が居なければ斯ふ旨く行かんのだ、以來も彼人の居る時計り仕入に往く約束を仕て置た》娘は何となく案じらるゝ所あり《阿父さん、彼處で買ふのはモーお止しなさい》父《何して止されるものか》

品物は店に並べられたり、元價は安し、品は好し、賣るにも賣り好ければ忽ち客に持去らる、阿爺は鼻高々、娘は心に濟まぬ所あり、何種の商業にもせよ新に店を開きし當座は客も物珍らしく試買を爲す故に一時は中々繁昌するものなり、然れども一二月を過ぎ店の者商賣に馴るゝ頃になれば客足漸く減じて店の淋しくなるが例なるに此店はお糸孃と云へる一種の引力ありて年若き客は之に吸收せられ、復た若旦那と云へる隱密の保護者ありて品物を安く送れば勘定高き客は皆な此店に聚りぬ、朝より暮に至るまで店の開きある間は客の入來ること斷間なく、お糸孃と母親のみにては中々手廻り兼ぬる場合となれり、

主人の悦びと自慢と講釋とは尋常ならず《是だから遣て見ない事は分らない、商賣して此位旨く儲かるものなら何故早く始めなかつたろう、腰辨當を下て役所通ひなんぞをするのは實に馬鹿らしい、此新店で此位儲るのだから世間の商人は必ず非常な利益を得て居るのだな、何ぞと云ふと不景氣で儲かりませんなぞと泣事を言ふが彼は全く虚僞だ、此位儲かるなら店へ番頭と小僧を抱へて奥へは下女と小間使と置かう、爾して店の商賣も復た問屋の仕入も番頭達に任せて置て己は毎日碁でも打て遊ぶか、其間には旨い堀出物を認けて遊びながら儲けるなんぞハ洒落て居るな、今に見ろ、此店が東京一番の大問屋になるから》とハヤ大商人になりし心持、妻は夢中なれども娘は眉を顰め《阿父さん、今儲かるのは眞誠の儲けではありませんから此で爾な懶惰た量見を丸出しなさると不可ません》父は其意を解せず《眞誠の儲けも虚僞の儲けもあるものか問屋へ行けばズン〳〵安く賣て呉れるし、家へ持て來ればドン〳〵客が高く買て行く、此上の望みには問屋の息子さんが家へ婿にでも來て呉れば宜い》娘は横を向き《オ、嫌な事だ》父は笑ひ《耻かしいか、和女もまだ子供だの》

問屋の息子先生は此主人に品物を卸し始めてより復た此店に來らず蓋し身元を知られては何分にも唐物を買ひ難き故ならん、其代り主人が仕入に來る時は心を盡しての愛相、此愛相は主人を目的とするものならず、主人を越して其先の人まで通せしめん爲めの愛相なり、然し一向通せざるこそ笑可しけれ。

此息子殿は生來温袍の中に育ち世間の苦を見ずして唯世間の樂をのみ知りしかば早くより金を散ずる事

を覺え、商法界より先に狹斜界の天地を探究せり、况して此息子ハ勝れし美男にて殊に富家の若旦那なりければ其道にてハ中々の幅利となり、自惚と岡惚と内外より責上て一時ハ家を外にする道樂三昧、兩親始め親類の者も種々に心配して耳蒼蠅までの異見、此異見ハ左程骨身にも應ざりしが自分の經驗にて狹斜界の浮薄なる人情を看破せしが最も効驗ある異見となりて近頃漸く身を修るに至れり、して見れば左まで愚なる人物にもあらず、否、稟性は誰しも人並の智能を備へて世に出るなれども兎角我邦の富人ハ子を敎ゆるの務を怠り、之に無形財産を與ふることを勉めずして唯有形財産をのみ賦與する故に、第一に覺ゆるは之を散す道、多くは遊蕩に身を崩して道樂息子と變ぜしむるなり、若し心ありて世態人情を觀察すれば此息子ならざるも亦た狹斜塲裡の浮薄佻利に走り義を忘れ翻々として賴むに足らざるを知るに至らん、此社會の眞實は金錢に向て盡すなり、此社會の人情は自家の利にのみ切なるなり、斯く悟り來りてハ此息子殿も從來の境遇に倦厭て別に淸潔なる新天地を求むるに至りしは自然の情、淸潔なる新天地とハ苦樂を賴もしき人と共にするに在り、賴もしき人とは眞實女房に優るもの無し、即ち此息子漸くホームの樂境を空想し始めたるなり、然れども此樂境を造るは是れ一大難事、世間幾多の娘達を見るも眞にホームの樂境を造り得べき人物は滅多に無し、之に要する資格は第一美ならざるべからず、又智ならざるべからず、既に美、既に智、而て復た快ならざるべからず、既に快、復た順ならざるべからず、此の如き注文に應ずべきもの世に果して幾人かある、此息子殿ハ唯一のお糸孃を見出せしのみ、

お糸孃が風丰は美なり、其の商業を爲す樣子は智なり、其の客に對する愛想は快なり、其の父母に從ふ有樣は順なり、是こそ我家の妻として耻かしからじと息子の心は一に此孃に附着し了れり、然るに其父母は此頃息子の漸く謹愼なるに乘じて再び魔の入らぬ内早く好き嫁を迎へんと親戚始め出入の者に心當を賴み置く、固より富家の嫁の口、有ること〳〵其の候補者、何處の娘、誰の妹仲に立つ人の口上を聽けば何れも天晴なる花嫁の資格を備へざるは無し、是なら好けん彼なら氣に入らんと頻りに息子に相談すれバ息子ハ見合もせぬ内から唯顔を振て辭するのみ、扨は怪し、兼て約束せしものにてもあるかと父母ハ再び心配番頭に内意を告げて其樣子を探らしむれば、番頭は流石老功だけに平素若旦那の供する小僧を詮議、此小僧ペラ〳〵と饒舌りて若旦那が小川町の唐物店へお百度參りせし事を白狀す、是で讀めた、當の敵は唐物屋に在り、

此後番頭と息子と父母との間に如何なる相談ありけるや、或時お糸の父が仕入物に此家に來りし時、番頭某ハ《貴郎、御用が濟みましたら鳥渡其所まで被入て下さい》と外え誘ひ出したり、父も何事か知らざれども番頭の用事とあるからは何れ碌な事にてハあるまド、今迄息子より餘り安く品物を買ひし故其詮議にてもあらねば宜しと竊に心配しけるに番頭ハ近所の小料理屋に伴ひたり、

○目出度いな（アーラ目出度いな）

小料理屋の奧座敷問屋の番頭は小賣屋の主人に酒を勸めつゝ《御主人今日此へお招き申したのは少し妙

な御相談があるのですが貴所のお家に娘子さんがお有りですな》主人《ハイ》番頭《彼のお娘子さんは外へ御縁付になるのですか又はお婿でもお取りなさるのですか》小賣屋の主人は前の心配に引換て扨こそ福の神が來れりと心竊に悦びしが然し婿の口なるや嫁の口なるや迂濶に答へて福の神を逃しては一大事と思案なし《ハィ彼は婿を取りましても嫁に遣りましても宜いのです、婿に來たいと被仰るお方があれば婿に取りますし、嫁に欲いと被仰れば嫁にも遣ります、併しそれは先樣の御人物次第ですが何かお心當りでもありますか》と急に膝を進めてニコ〳〵するも慾の爲め、

番頭は其樣子を見て心に笑ひ《實は家の若旦那が大層貴所のお娘子さんに御執心なのですが、彼の若旦那は內の獨り息子で親御さんも非常に可愛かつて彼在るのです、お若いお方ですから先頃まで大分お遊びになつて御兩親に御心配もお掛けですが近頃はパッタリそれも止んで全く改心なすつた御樣子、何卒此の內に好い嫁を取て悉皆身を固めさせ度ひと親達も頻に嫁の口を捜がしてお在の處何なのが有つても決して若旦那のお氣に入らない、御氣に入らない筈です、若旦那は疾くから貴所の娘子さんを見て彼で無くてはならないと言ふ御執心ですからな》主人《御感心な事で》番頭《イエ別に感心でもありません其の事が御兩親の耳へ入りますと、そこは子故の闇で悴の氣に入たのなら何でも宜から嫁に仕て遣るとの仰せ》主人《御感心な事で》番頭《イエ別に感心でもありません、身代から云ふと餘り釣合はない樣で私には色々止めましたけれども御當人が好いと被仰るのですから仕方がありません、そこで貴所にお

聞を申して一時も早く此事を極め度ひと此方の相談は極りましたが如何です貴所の娘子さんを若旦那のお嫁に下さいますか》

主人ハ大悦びで早速承知すると思ひの外頭を捻て考へ始めたり、《ハテナ斯程迄に向ふで言出すからは能く〳〵惚て居るのだ、それを二つ返事で承知して仕舞ふと却て安く見られて損だから爰は何でも一つ勿體を付けて容易に承知しない樣に見せなければならん、そしたら向ふから仕度金の一万圓も出すと言ふだらう、それでもまだ勿體を着けて一万圓や二万圓では不可ませんと強情張るとそれでは三万圓それでは四万圓と段々競上て仕舞ひには五万圓位になる、五万圓になつたら己は向島邊りへ樂隱居の身分になつて其上に本家から隱居料が毎月三百圓位來るか、成程旨い〳〵、何して己は斯ふ智惠があるだろう》と我ながら感心し《番頭さんの前ですが今申上た通り私の娘は婿を取る積りで居りますので容易には進げられません》番頭《爾ですか、それならば能く若旦那を諫めて諦めさせませう、實を申せば外の好い家から澤山娘を呉れ度ひと云ふ申込があるのですから貴所の方は止めた方がお家の爲めに宜のです》と極く冷淡なる挨拶、主人は驚き《イヤ〳〵お止めなさるには及びません、進げますよ、貴客は御短慮だから不可ないナニも進げないと申した譯では無のですが獨り娘だから其お積りで御相談を願ひ度ひと思ふのです》番頭は此老人中々慾の深き人物かなと思ひければ態と談を誇大になし《イヤお獨り娘を無理に貰ひ度ひとは申しません、實ハ此方の家が東京稀なる金満家で地面は五百ヶ所に公債證書の八十万圓も

お持ちの位ですから大抵な家から貰たのでは中々身代が釣合ません、それに復た來る嫁も粗末な仕度で來られてハ世間へ外聞も悪いから先の家次第で仕度金も澤山遣らなければなりません》主人《難有ふ御座います》番頭《イエサ貴所に遣げると申したのでは無い爾ふ云ふ譯だから成るべく立派な家から貰ひ度ひと思て居るのです》

小賣屋の主人は戻かしく思ひ《番頭さん、折角若旦那がそれ程までに御熱心な事ですから獨娘でも差上ますよ、若し娘を進げなければ若旦那が御病氣にでもお成りなさると不可ません》番頭《イエ御心配なさるな、爾な馬鹿な若旦那ではありません》主人《成程、併し番頭さん愈々差上る事になりましたら仕度金は何程出ますでせう》番頭《御両親の仰せには幾何でも向ふの欲しがるだけ仕度金は遣て其親達へは隱居料は毎月出しても宜いといふ事ですが》主人《御感心な事で》番頭《御待ちなさい、併しそれは向ふが極く貧乏人か何かの事で貴所の樣に立派な店を張て居る人に爾な事を言ふのは失禮に當ると申して》主人《イヤ些とも失禮に當りません》番頭《御待ちなさい、先づ兎も角も先方の親の心と當人の心を聞て見た上で無ければ迂濶には極められないと申したのです、假令貴所が御承知なすつても御當人が御承知なさらない時にハ爾な事を言出して置くと却て耻を掻きますし、或ハ親が慾に迷て無理に嫌がる娘を嫁に呉れても跡で直ぐ逃出して仕舞ハれる樣な事でハ何にもなりません》主人《大丈夫です私の娘は固より若旦那に惚れて居りますから、若旦那が店へお入來なさいますと娘ハ何時でもニコ〲し

て居る位です》番頭《オヤ若旦那が貴所の店へ度々お往ですか》主人《ナニ店の前をお通りなさる時です》

番頭は遂に相談を極め《それでも一應は御當人のお心をお聞きなすつて確とした挨拶を仕て下さい、仕度金や何かは其上で御相談致しませう》主人は心の悦びを包み難くホク／＼して《イエ別に聞かんでも娘の心は分つて居りますから今此で御相談申し度ひもので、確として居りますよ、確と》番頭《それにしても私の一量見には行きませんから一應大旦那や若旦那に貴所の早速御承知なすつた事を申上ます、其上で復た貴所の方へ申して進けますから貴所も能くお歸りなすつて相談を極めてお置きなさい》主人《難有ふ御座います、然し番頭さん、若し仕度金のお話なんぞが出ましたら成るたけ貴郎の御盡力で多くなる樣に願ひます》、番頭《多くしては主人へ不忠、私は出來るだけ寡なくする積りです》主人《イヤハヤ》

小賣屋の主人は御馳走の酒に醉ひ旨い話を耳にして意氣揚々として家に歸りぬ、家にハ娘のお糸が父の遲さに心配しておりしが其の微醺機嫌にて歸りしを見不思議の事よと怪みける《阿父さん、お珍らしく大層御機嫌ですな、何處で御馳走に成て被入た》此父の醉ふは御馳走の酒より外に無しと見えたり、父は娘の顏をトッと視て《成程美しい、親が視てさへ惚々する程だから人が惚れるのも無理ハ無い》娘ハ横を向き《何ですネ阿父さん、早く奧へ被往いよ》父ハ店より奧に入りながら《お糸や和女も鳥渡此へお

入來》娘ハ復た仕入の講釋かと思ひつゝ奥に來れり、

主人は妻と娘を前に置き《今日ハ久振りで鰻飯でも奢らうかの、跡で五錢位の丼を誂へて來な》妻は笑ひ《五錢の丼ハ何處にもありませんよ》主人《直切て買ふが宜い、物は呼價で買ふものでは無い》娘《オホヽ、阿父さんハ今日珍しい事を被仰るが金儲でもなさいましたか》主人《イヤ大儲を、一度に五万圓取れて毎月三百圓宛取れるのだからヱライだろう、お糸や、和女ハ今日から一日に三度宛湯に入浴つて來な、そして平時の樣に烏渡洗て出るのでは無い、能く頭から尾まで洗て三時間も入浴て居るが宜い、そして白粉も平時使ふ樣な惡いのは一切止めて仕舞て上等の西洋白粉でも買て來るが宜い、そして和女の顏には惜い所に一つ黑子がある、湯に入浴たら能く輕石で耳の下を擦つて其黑子を落して來な、そして髮も毎日一度宛洗ふが宜い、そして外へ出るときは顏が汚れると不可ないから西洋人の樣に薄い布片を被つて行きな、そして、ゝゝゝゝ》娘《モー澤山、阿父さん、何なすつたのです》醉中の父は呵々と打笑ひ《アハヽ、何も仕ないが併し見れば見るほど和女は別嬪だよ、今日は猶更能く見える和女の阿母さんも若い時は可なり別嬪だつたが中々和女ほどは美しく無い、和女の美しいのは全く己の好い男が遷つたのだな》妻も《何ですねー貴老》

娘は久しく店を明けて置くも心掛り《阿父さん、何か妾に御用があるのですか、無ければ店へ出て居ますよ》父《ナニ店なんぞはモー構はんでも宜い、壹圓や二圓宛儲けて居たところが仕方も無いから店は

モー止めだ、そして己は是から樂隱居をするのだからの』娘は返事もせずして店へ出んとなす、父は呼止め『オイ待つた〳〵、少し待てお呉よお糸さん、イヤお糸さんでは無いお糸夫人、少し話があるから待ち給へ目出度ひ話だよ、實に目出度ひ、アーラ目出度ひな目出度ひな、昔は厄拂ひが爾云て來たものだ』娘は戻かしく『何ですお話は』父『お話かえ、お話は容易に話されない、話せバ和女が嬉しがる話だが、爾云ふ話は仕舞て置て樂みに仕て置く方が宜い、今にの己が彼の番頭に能く掛合て仕度金を澤山取れば和女の前に並べて悦ばせて遣るから待て居な』

仕度金の一語は聞捨になり難し『阿父さんお嫁の口でもあるのですか』父『大有りだ』母『お糸には婿を取るのではありませんか』と左右するどく詰寄する。

○神　爭　ひ　（何れが眞誠）

豫てお糸孃には好き婿を迎へて此家を讓らんものと母と娘がより〳〵の相談、斯る人は好けれ斯る人は惡しけれと常に心を注けて若き人々を觀察し母子の間には既に心當りさへ出來居る矢先なるに今俄に父より嫁入の口ありと言はれ母と娘は互に顏を見合せて驚ける風情、母は父の前に進み『貴郞お糸は獨娘ですから外へ遣らない積りではありませんか、』と詰問、父は酒の機嫌と悦びの機嫌にてニコ〳〵顏『イヤ其の遣られない所を遣るのには譯がある、己はお糸の爲めだから遣る事に極めて來たのだが先の人は福の神だ、お糸も福の神の所へ嫁に行くのだから嬉しかろう』娘は屹として『モー極めて仕舞たのです

か先の家とは何處です》父は獨りで嬉しがり《何處だと云て此處だと云てマアこれ程目出度ひ事は無い、實はまだ話さないで和子の樂みを仕舞て置かうと思たが爾う聞かれては仕方が無いから話すよ和女嬉しいだろう》娘《些とも嬉しくはありません》父《マア聞けば嬉しくなる、和女の嫁に行く先はの、嬉しいだろう》

娘は獨り悔しき心地《阿父さん何處ですか早く被仰いまし》父《アハヽ嬉しいものだから聞き度がる、聞て驚くなよ、和子の行く先は日本一の金持でお婿さんハ日本一の好い男だ、和子だつて内々惚れて居るのだから尚は都合が好い、彼の唐物問屋の若旦那だよ》娘は呆れ氣味《アレ嫌な》父《ナニも嫌な事ハあるまい、金持で好い男で其上和女に心底惚れて居るのだからいハば和女の爲めの福の神だ、是程目出度ひ事ハ無いでハないか》母は傍より《貴郎向ふで娘を呉れろとでも言たのですか》父《言たところでは無い、呉れなければ病氣になつて死ぬと云ふ騒ぎだ、先方の言ふには獨娘を無理に望で貰ふのだから決して粗末には仕ない、先づ仕度金として五萬圓それから隱居料として毎月三百圓宛己達に呉れるとも何ともただ言はないが多分其位な事に極まるだろうと思ふのだ、和女も嬉しからう》妻《そして家の跡繼ハ何なさるのです》父《家へは外から好い娘を貰て持參金の澤山取れる婿でも捜すのさ》妻は娘の氣を兼ねて何とも言はず、

娘は默然として暫く思案せり、軈て何か心付きし如く《阿父さん、妾も福の神の樣なお婿さんが欲しい

と念て平生神様に祈て居ましたら昨夕大層目出度ひ夢を見ました》父ハ得意顔《ソラ見ろ、今日の知らせたらう何な夢だ》娘《先づ斯ふなのです、妾が福の神の社へお參りに往く所で、何でも大層賑かな町の中央に立派な社があつて其中に綺麗な着物を被た人達が酒宴を仕てドンチャン〳〵陽氣に騒いで居ました》父《其所が福の神の家だから》娘《ところが其所へ往てお參りを仕ようと念たら門番の言ふのに此ハ福の神の社では無い貧乏神のお宮ですとさ、それから妾が福の神の社ハ何處に在ると聞いたら其先の極く淋しい處だと敎へて呉れましたから段々往て見ますと丸で田舎の様な處に小さな汚ない祠があつて福の神ハ其中で一生懸命に何か働いて居ました、阿父さん能く畫なんぞに福の神や貧之神が描てありますが丸で違ひまする、畫に描た福の神が眞誠の貧乏神で眞誠の福の神ハ着物も汚いし色も眞黒でしたよだから今阿父さんが福の神だと被仰る唐物屋の息子は全く貧乏神なのです、妾しハ貧乏神ハ大嫌ひです》父ハ氣の拔けた顔、馬鹿を言ふな唐物屋の若旦那こそ眞心の福の神だ、和女ハ詰らない夢を見るから不可ない夢は逆夢と云て逆さに見るものだから和女が福の神だと念たのハ全く貧乏神なのだ》娘は熱心に《イ、エ、汚い服裝を仕て一生懸命に働いて居るのが福の神で、好い着物を被て遊んで居るのが貧乏神です》

父と娘が貧福兩神の爭ひ、雙方共に其言ハ偏する所あり、妻ハ中に入り《貴郎爾う一概に言て仕舞てハ分りませんがお糸の言ふのは末の話しです、今福の神の様に見えても奢り散して遊で居れば末には貧乏

神になりますし、又今貧乏神の樣に見える人も精出し稼いで居れば末には福の神になると言ふ事です、今彼仰た嫁入口も矢つ張り其の通りで唐物屋が如何に金持でも彼な馬鹿息子の代になれば忽ち貧乏神になつて仕舞ひます、それだからお糸の嫌がるのも無理はありません、貴郎早く先へ斷つてお遣りなさい》と娘の心を知れる言葉、父は頭を振り《何して是が斷はれるものか、彼の若旦那は己に品物を廉く卸して呉れて感心な人だのに馬鹿息子とは何の事だ》妻《馬鹿に違ひありません、自分が唐物屋の癖に毎日此へ唐物を買ひに來たり又は自分の家の損をするに搆はず品物を廉く貴郎に賣るなんぞとは餘程馬鹿ではありませんか、若しそれが家の息子でゞも有つたら貴郎は何と彼仰るでせう》父は流石に答を爲し難し。

妻は益々膝を進め《貴郎に兼て御相談しようと思て居たのですが、そんな貧乏神の處で無く、眞誠の福の神が有りますからそれを家の婿にお取りなさいまし、お糸とも毎度其人の咄を仕て居たのですが、是こそ眞誠の正味違ひ無しの福の神ですよ》父は興あり氣に《眞誠の福の神だ、唐物問屋よりも金持か》妻《イヽエ、金持ではありません福持です》父《それでは地面家作でも澤山持て居るのか、何處の人だ》妻は娘を顧みてニコリと笑ひしが俄に言出し兼ぬる風情、《貴郎能く考へて御覽なさいましよ、今貧乏して居ても末に好くなる人が福の神でせう》父《イヽヤ今も能くつて末も好くなければ不可んのう》妻《爾は往きませんよ、今こそ彼樣に眞黒になつて稼いで居ますが末は必ず福の神になるのです》父《眞黒に

成て稼で居るとは誰か》妻は再び躊躇しつゝ《アノそら家へ巻煙草の吸口を卸しに來る若い人がありませう》父は驚き《何だ、アノ乞食か》と呆れ顔。妻と娘は期くあらんと期したるなり、期したればこそ今迄父に言ふを憚りしなれ、左りながら吸口屋の若者を福の神の芽生なりと洞見しはお糸孃が眼力此眼力を竊に母に傳へて常に其擧動を注意せしめしに成程今時には珍らしき若者、斯る人を婿にして娘と共に稼がせなば家の繁昌疑ひ無しと母も遂に此若者に心を傾けしなり、雨の降る日風の吹く夜、店の閑なる時に乘じて母と娘は徒々の物語に彼の若者の噂を爲して折あらば父にも此事を相談せんと念ひ居りし處に圖らずも今日嫁入口の話を聞き斯る矢先に多分六ヶ敷いとは信ドながら一應父の前に言出せしなり、父は案の如く唯呆れ顔《御和達は飛でも無い事を言ふ、人もあらうに乞食同様な彼の吸口屋を婿にしろとは怪しからんとも何とも言様が無い、己は眞誠の福の神だと言ふから持參金の十万圓も持て來る奴かと念た、爾で無いのなら早く唐物屋の方を極めて仕舞てお互に樂をするのが肝腎では無いか》母と父が問答中は默然として聞居たるお糸孃忽ち屹と身を正し《阿父さん、何と被仰ても妾は唐物屋へなんぞ往くのは嫌です》と斷然言放つ、其辭色の決然として容易に動かし得べくもあらぬを見て父は驚き《今更和女に嫌と言はれては困るよ、何故嫌だ》娘《彼な馬鹿な人は死でも嫌です》父《でも好い男では無いか》娘《好い男は嫌ひです》父《金があるよ》娘《金が有ても貧乏神です》父《和女に惚れて居るのだよ》娘《尙は嫌です》父は大切な娘なれば無下に叱り懲して不量見を起されては却て損を増す基な

りと經濟上より言葉を柔らげ《お糸や、それでは和女も彼の吸口屋が好いと云ふのか》娘は流石にハイとも言へず顔紅らめて下を向く、妻は引受け《好いのですよ、お糸が是非彼の人を婿に仕度いと言て居るのですよ》父は娘の顔を覗き《爾か、眞誠に爾なのか》と強て問ふ、娘は漸く《ハイ、何卒》

此家にて斯る相談のありとも知らず吸口屋の若者は例の如く荷物を肩にして店先に來れり、何時も此店に來れば内儀と娘が我身の服裝の汚きにも搆はず茶など出して親切に扱ひ呉れ又品物も他より高價に買て呉れるより自然と頼もしく念ひて此家を唯一の休み處となすも人の情、況して餘所の店に往けば價の廉き爲め品物をこそ買ふ人あれども服裝の見苦しきを忌みて碌に口も利かず、少し長居すれば店の邪魔になるとて追立らるゝ世中に此家の母子のみは人の情を知るものよと頼み少き身は恩に感ずる事も深く此家に來れば頼まれもせぬに店先の塵を掃きなどするに至りしなり。今日は何時も店に居る娘の姿が見へねば奥にでも居るにや店先より聲を掛け《今日は好いお天氣さまです、吸口はまだ御座いますか》此聲奥に通じけん妻は娘を顧みソラ來たよと注意する、平生なれば直に飛出す娘なれども斯る場合故顔を紅くして立ちもせす、父は吸口屋と聞てガバと身を起し《貧乏神か、己が出よう》と立掛る、娘は急に袖を惹き《アラ阿父さんお待ちなさい》

○御茶菓子　（買て來ませう）

吸口屋の若者ハ此家に何事のありとも知らず店先に來りて平生の如く音なひしに奥より飛出したる主人

は突然大聲揚げて怒鳴りつけ《コラ吸口屋、和郎はモー此店へ來ることはならんぞ、サッサと出て行け貧乏神め》と頭から叱りつくる、若者は驚いて其顔を眺むるところに奥より馳出したる娘と妻、娘は父の袖を押へ《阿父さんマァ奥へ被入いと頻に引戻さんとす、妻は若者に向ひ《吸口屋さん勘忍して下さいよ今旦那は少し酔て居るのですから良人も何の事です子ー、大きな聲を仕て外聞の悪い》と之も頻に良人を宥めんとす、主人は益々吼り《イ、ヤ、外聞なんぞは構はないコレ吸口屋和郎は何で家の娘を欺かした》妻は困り《アラ吸口屋さんの知た事ではありませんよ、吸口屋さん御免なさいよ》と雙方へ氣兼

吸口屋の若者は出し抜けに怒鳴られて何事か分らざれども兎に角自分の事より主人か立腹なし居るに相違無し、これ必ず娘が我が品物を高く買ふ事の露はれしにてもあらんと氣の毒に念ひ《旦那私が悪いので御座いますから決してお嬢さんをお叱りなされますな》と娘の爲めに詫る積り、主人は頬膨らし《ソラ見ろ、矢つ張り和郎が悪いのだろう》娘は傍より《イ、エ吸口屋さんが少しも知た事ではありません》と辨解、

此のゴタ〳〵の矢先へ表の方より突然入來るものあり、主人は其人を見て急に笑顔を造り《是れは〳〵番頭さん、サァ何卒奥へお通り下さい》、自ら案内して客を奥に導き《お糸やお茶を進げな、平生のでは不可ない、玉露か何かを點るのだ、ナニ無い、何故買て置かないのだ、阿母さんに爾言て買て來てお貰

ひ、阿母さんハ何を仕て居る、コラ〱店で貧乏神と話なんぞをするでハ無い』と獨りで饒舌り散らす、

母を主人の呼ぶをも顧ず店先にて吸口屋の袖を押へ『イヽエ決して貴郎の事から起つたのでハありませんから何卒お腹をお立ちなさるな、是非貴郎にお話を仕度ひことがあるのですから御迷惑でも少し待て居て下さい』と歸らんとする若者を引止むる樣子、奥より劇て〻出來りし娘も言葉忙しく、吸口屋さん〱後生ですから少し待て居て下さい、何卒妾を助けると念て』と言葉の終らぬに奥よりは主人の聲『お糸々々、和女まで店へ出ては不可ない、早くお茶を點ないか』娘『今お茶を買て參ります』主人『和女が往かなくつても宜い阿母さんに往てお貰ひ、和女は大事な人でハ無いか』と力を入れて目配せする、娘は知らぬ振り『イヽエ妾が買て來ます』と立か〻る、吸口屋の若者は此樣子を見兼て『お孃さん、何ですか私が買て參りませう』娘は敢て拒まず『それでは誠にお氣の毒ですが玉露のお茶を少し許り』と錢を渡して買物を賴む、主人は奥より此樣子を見たれども娘の出て往くよりは增しと想つて咎めもせず、番頭へ對して耻かし顏に『今日は生憎下女が居りませんで』と體裁を繕ふも可笑し、番頭は『何卒モーお構ひなさいますな』と極り文句の遠慮を言ひ『扨御主人彼の一件は如何お極りになりましたお手前どもの方でも篤と大旦那や若旦那と相談致しました處、お一人のお孃さんを無理にお貰ひ申すのたから仕度金は五千圓ほど差上げて御隱居料は毎月五十圓位進げたら宜からうと荒增相談を極めました然し手前の

方計り相談を極めても此方のお返事を聞かない内は不安心ですから態々伺ひました譯です》主人はヒヨコ／＼お辭義を仕《誠にはや難有い譯で御座ます、仕度金が五千圓で毎月の隱居料が五十圓、想たよりは少いがそれに仕ても結搆な事で》無闇に悦べは番頭は容を正し《御主人それよりも御當人が御承知なさいましたか、先づそれを伺ひ度ひのです》主人は頭を搔《それはその誠に何で、前にも申上げた通り承知も不承知もありません樣な譯で》番頭、《イエ貴老は爾でも御當人のお口から直に御承知の旨を伺はない内は大旦那に返事が出來ません、甚だ勝手な申分ですがお孃さんに私から直にお話を致し度ひと存じますが如何でせう》と詰め寄する、

主人は急に娘を呼び《お糸や此へお入來》娘より先に入來る女房、先づ番頭に向ひ《貴郎被入いまし、毎度宿がお世話に相成りますそうで難有ふ御座います》と初對面の挨拶、番頭も答禮する、女房は屹と膝を進めて《妾から申すのも異なものですが娘は》と言出すを主人は急に制し《和女は何も言はんで宜いよ》と目で知らせたり口で知らせたり《お糸や／＼早く來ないか》と頻に娘を呼ぶ、娘は店に在りて中々奥へ來らず《今店番がありませんから》主人《店番なんぞは宜いよ》娘《でも今お茶が來ます》主人《お茶なんぞは要らないよ》

此時女房は氣轉を利かせて奥より聲掛け《お糸やお茶計りでも何だから和女はお菓子を買ておいでな》成程と悦ぶ娘《ハイ買て參りませう》と矢庭に下駄を突て表へ出たり、主人は驚き《コウ出ては不可ん》

と制すもハヤ遲かりし、

娘は行くこと二三間、向ふより吸口屋の若者か茶袋を持ちて來るを見《モシ吸口屋さん、先刻は誠にお氣の毒でしたね》若者《何致しまして、私こそ貴娘にお氣の毒でなりません、貴孃が私の吸口を高く買て下さる事が大旦那に知れたのでせう》娘は急に顔を紅らめ《イヽヱ、爾なのではありません、外に譯のある事です》

往來にては立話も心苦しと想ひ娘は《吸口屋さん少しお話がありますから蕎麥屋の二階へ行きませう》と若者を誘て四五間先なる蕎麥屋の二階に登りぬ、吸口屋の心中は此慈善なるお糸孃が我身の慈善を爲したる爲め父の怒に觸れしならば我身飽くまでも娘の爲めに詫事をなして遣らんと念へるなり、娘は吸口屋に實際の事を話して塲合に依れば其心中をも聞かんと念へるなれども何となく自分よりは言出し難し《吸口屋さん、何ともお氣の毒で嘸お驚きなさいましてせう、實は少し妙な譯で》と言ひかくる折蕎麥屋の女登り來り《お誂へは何に致しませう》娘は邪魔なと念ひつゝ《モリでもカケでも持て來て下さい》下女は尙は《モリに致しますかカケに致しますか》娘《ザルでも持て來て下さい》下女は口の內に《でもつきの誂へとは可笑しい》と呟きつゝ降りて行く、此時吸口屋は膝を進め《お孃さんそれでは私の吸口の事で旦那が怒りなすつたのではありませんか》娘《ナニ其事ではありませんが少し妙な譯でネ》と隨分言出し兼ねたり、

トン〳〵と階子段を登り來るは下女かと思ひの外お糸の母親にて《お糸や妾は今和女達が此へ入つた處を奥の窓から見て居たから阿父さんの前は和女を迎に行くと言て出て來たのさ、吸口屋さん誠に先刻はお氣の毒さまでしたチー》吸口屋《何致しまして、》母は娘に《和女今のお話を仕たの》娘《イヽエまだ》母《それでは妾がお話を仕やう》吸口屋さん貴郎に御相談があるのです、實は此頃餘所から娘を嫁に貰ひ度ひと言て來て宿では是非遣ると言て居るのですが妾も娘も其所の家は極く嫌なので眞實に困つて居るのです、何とか之を逃れる工夫はありますまいか》斯く突然言はれては吸口屋も返事に困り《それはお困りの事で御座いませう、別に工夫もありませんがお嫌ならお嫌だと被仰つたら宜う御座いませう、》母《それは爾う言ふのですけれども先の家が金持で宿では其金に目が暗んで居るのだから何と言ても承知しないで困ります、それに就て一つ折入てお願ひが御座いますが貴郎妾の家へ婿に來ては下さいますまいか》

吸口屋は突然妙な事を聞くものかなと念ひ《それは復た何故です》母《何故だと聞かれては困りますが實は妾も娘も是非貴郎を婿に仕度ひと疾から爾想て居るのです、貴郎の樣な能くお働きなさる人を婿にすれば末は屹度善くなると娘の望み、何卒是非お聞入なすつて下さいませんか》と膝を進めて返事を俟つ樣子は餘程思ひ込みしものと見えたり、お糸孃も吸口屋の顏を熱心に打守りて何と言ふやと窺ふ有樣、

者は再び感動せり、自ら斯くこそ期して居るにハヤ此人達に洞察れたかと頼もしく覺えて《左樣です、私も永く斯んな事を仕ては居りません積りで御座いますが然し世中の事中々當には成りません》と尙ほ謙遜、

唐物屋の母は頷き《イヽエ貴郎なら屹度エライ人にお成りですよ、貴郎の樣に正直に稼いで被在れば必ず大きくお成りなさるのは知れたこと、それを見拔いて是非婿になつて戴き度ひと申すのですが然し被仰る通り家の老爺は中々承知する氣支はありません、平生なら兎も角も今は外に好い嫁入口が出て居るのに況して慾が深ふ御座いますから今貴郎を婿に仕度ひと申しても決して聞入れ無いと極つて居ます、其代り復た現金な人物ですから貴郎が立派な人にお成りなすつた上ならば大悦びで婿に取ると云ふに違ひありません、就ては兼て娘とも相談をして置きましたが貴郎が妾共の言ふ事を御承知下さればそれに就て一つ御願ひが御座います、》と云ひつゝ娘を顧みて《お糸や、彼の事をお話して見ようかのう》と娘に問ふは其心を兼ねたるなり、娘は固より同意の事《御承知さへ下されば妾は何年でも待て居ますから何卒お話しなすつて下さい》

お話し〳〵と二人の言ふは何事にやと若者は膝を進め《身分の違ふのも何も貴女の方でお構ひさい無くば私に取ては此上も無い難有い事、何んな苦しい事でも我慢して御言葉に從ひますが其お話しとは何て御座います》と問掛けたり、二人は若者の承知せる樣子を見て大に悦びでは《愈よ御承知下さいますか》

《眞誠ですか》と母と娘は左右より進み寄り、母《御承知下されば此約束ハ三人の間で致し置てソコで貴郎へお願ひと申すのは外で有りません、妾共が老爺に內証で溜めた金が百圓程あります、それを貴郎に差上ますから、貴郎はそれを資本にして何なりともお稼ぎなすつて二三年の內に立派な御身分に成て下さいませんか、貴郎が妾共の家と見劣りしない御身分にさへ成て下されば其時は妾共が如何様にでも老爺を勸めて表向き貴郎を婿にする事に致します、今の內は何分老爺に勸めても無駄ですから何卒爾うなすつて下さいまし、妾共から推して願ふ位ですから娘も妾も貴郎のお仕出しなさるまでハ何年でも待て居ます、何卒爾して下さいまし》と賴むも人の爲めならず

吸口屋の若者は此言葉を聞て物をも言はず唯兩眼より涙を流し《ア、勿體無い、それほどまでに私の樣なものをお欲召して下さいますか宜しう御座います、資本まで拜借しては濟みませんが御言葉に甘へて腕限り稼ぎませう、ナニ貴女の御家位には二三年立たない內に》と力味かけたが俄に心注き《是は失禮》と口籠る、

母と娘は平生の願ひ始めて達したるを悦び尙は後の事を相談しけるが母は娘に向ひ《今直ぐ資本の金を進げて置き度ひが金は用簞笥の中に仕舞てあつて今お客が居るから困つたねと思案の體、娘は考へ《阿母さん、阿父さんも定めて待てお在でせうから直ぐ家へ往て隙を見てお出しなすつたら宜う御座いませう》母も成程と想ひて吸口屋に向ひ《それでは貴郎も店まで來て待て居て下さい、》若者は《今日で無く

とも宜う御座います』と辭する、母『イヽエ、今進げて置かないと安心しませんから』と此に於て三人共
に蕎麥屋の二階を立出でたり、
唐物屋の店にては主人と客と差向ひ、主人は頻に妻と娘の歸りを待てども中々急に歸らねば一人で心配、
番頭も肝腎な娘が出た切り歸らぬを怪みて是は必ず縁談を不承知なるにやあらんと『御主人、お孃さんの
お歸りにならんのは今度の事を御不承知なのでは御座らんか』主人は胸ワク〳〵『イヱ何う致しまして決
して不承知どころではありません、彼も大層嬉しがつて居りますので、モー程無く戻りませう』と頻に
店先を覗きて居たるに此時漸く妻と娘は歸り來れり、
主人ハ劇てゝ呼入れ『和女達は何を仕て居るのだ、お客樣を置て何處へ往て居るのだ』と客へ對して辨
解の小言、妻は席に入り『ナニ今鳥渡其處で何でしたものですからツヒ遲くなりました、貴郎鳥渡お顏
をお貸しなすつて下さい』と臺所の方へ招く、主人は何事やらんと席を立て臺所に來れば妻は聲を潜め
『貴郎妾が能くお糸の心を聞きましたら何しても此縁談は不承知だと言ひます、番頭さんへ貴郎から斷つ
てお仕舞ひなさい』と突然言ふに主人は顏色を變へ『今更爾な事を言ては困るでは無いか、和女の言て
聞かせ樣が惡いからお糸が彼是言ふのだ、假令ひ跡は何うなつても今お糸の口から承知したと云ふ事を
番頭に言て聞かせないと折角の仕度金を取り損なふよ、和女で聞かなければ己が一つお糸に聞て見る、
お糸や〳〵』と小聲に娘を呼ぶ、

娘は此暇にと客に會釋して急ぎ用箪笥の側へ寄り兼て母と打合せたる金包を取出して店に在る吸口屋に渡さんと此室を出掛ける折、臺所よりは父の呼ぶ聲、又客ある番頭も今聞かざれば聞く時無しと《お孃さん、少しお聞き申し度ひ事が御座いますから鳥渡お坐りなすつて下さい》と引止むる、娘は流石に是も振放されず《何か御用で御座いますか》と振返りて客の前に扣へたり、番頭は言葉短かく《定めて御承知でせうが今度の縁談は貴孃も御得心なのでせうな》と念を推す、娘は此なりと容を正し《イヽエ妾は婿取りで御座いますから外へ嫁には參りません》番頭《イヤ其所を御主人にお願ひ申したのですが私共へお入來下さる事は》娘は斷然と《お氣の毒で御座いますが母と妾は不承知です》

番頭は呆れ顔、主人は臺所より《コレお糸や、鳥渡來いと云へば》娘はズッと座を立ちて店頭に來り彼の吸口屋に金包を渡したり、

若者はそれを受取て押頂き《然らばお孃さん、遠慮無く拜借して行きます》と懷中へ入れ長居は店の邪魔と荷物を肩にして立出る、娘は殘り惜し氣あり、先程よりも呼へど來に堪へ兼ねて店先へ出來れる主人《コレお糸々々と後ろより呼立つる、吸口屋の若者は今主人に逢ひてハ場合惡しと急ぎ表へ立出る、其途端に向ふより怪し氣なる人物若者に突當るよと見えたるが若者を仆して一目參に駈出す、若者起上りながら劇てゝ追駈け《泥棒々々》と呼はりたり、店に見て居たる糸孃《オヤ掏兒だよ》と驚きて是も表へ飛出さんとす、後ろより急に引止むる父《復た何處へ行く》と引戻す、

奥にて番頭の聲《御主人、お孃さんのお心を伺ひましたから私はお暇致します》主人は娘の袖を執へしま丶《少し待つて下さい》と泣聲、

○身　投　（助け度ひ）

唐物問屋の若旦那は番頭が歸りの遲きを待詫て幾度と無く店先より往來の人を望み《オイ貞吉や番頭はまだ見えないか》と小僧に向て埒も無き相談、小僧は若旦那の心を知るや知らずや落着拂つて平氣な顏《若旦那に見えなければ私にも見えませんな》若旦那は氣をいらち《口の減らない奴だ、外へ出て番頭が來るか來ないか見て來て吳れ》小僧《見たからと云て來ないものは來ますまい》若旦那《コレサ爾な意地の惡い事を言はずに鳥渡出て見ろ、若しまだ來ない樣なら一走り小川町まで往て來い》小僧は仕方なしに店先に立出で《來ました〳〵》若旦那は悅びて《番頭が來たか》小僧《イヽエ鐵道馬車が》若旦那は擔がれて悔しがり《人を馬鹿に仕ないで小川町まで往て來い》小僧は減らず口《迷子の〳〵番頭さんやあい》と低聲に叫びながら彼方の町へ駈けて行く、

入れ代つて番頭は他の方角より飄然と歸り來る、若旦那はヤレ嬉しやと先づ悅び《番頭大きに御苦勞だつた、スッカリ話は纏つたか》番頭は何と無くモジ〳〵して《ハイまだ少し……》と曖昧な言葉、左れども若旦那には別に曖昧とも見えず《まだ少し殘つて居るのか、大方先方で仕度金を澤山貰ふからそれで娘の嫁入道具を買整へなければならん、就ては十日でも二十日でも仕度の出來るまで待て吳れろと云ふ

のだろう、構はんよ、仕度なぞは跡で拵へて遣るから先づ身體だけ寄送す樣に爾云て呉れ、若し先方で是非世間へ對して仕度を立派に仕度ひと云ふのなら一時の間に合せに損料で仕度をするが宜い、此頃は葬式の道具を貸す損料屋があるから嫁入道具の損料屋もあるだろう、夫れとも亦先方の人達が舊弊で今月は月が悪いとか何とか云ふのでは無いか、月が悪るければ暦を書直して一月繰越すが宜い、御法事なんぞには能く繰越しと云ふ事があるだろう」

番頭は苦笑ひし（葬式だの御法事だのと縁起の悪い事ばかり被仰います、實は爾な譯で纒らないのではありません、當人が何だか少し）と口籠る、若旦那は聞咎め（エ、當人が何した、ア、分つた、當人の言ふには今迄人中へ出た事が無いから此へ嫁に來て舅姑や小姑の機嫌を取るのが六か敷い、成ろうなら二人切りで外へ家でも持たせて貰ひ度ひと言ふのだろう、ウム持ちますとも、私も實はそれが望みだ、此のゴタ〳〵した中へ嫁なんぞを貰つたところが中々氣樂に遊ぶ事は出來ない私は商賣が嫌いだから店の事ハ老爺に任せて私達はズッと斯う向島邊りへ隠居する積りだ、決して案トなさんなと言て下さい）

（番頭誰も爾な事を案じは仕ません、若旦那、悪い事は申上ませんから彼の娘の事ハ斷然モー思切てお仕舞ひなさい）

斯く言はれて若旦那も漸く心注きしと見え今迄の嬉し氣なる顔色は忽ち氣遣はしき樣子と變ト（番頭や、オイ番頭どんや、マア此へお座り、和郎は昨日私に何と云た、先方の親達は固より大悦びで居るし、當

人とて決して嫌と云ふ氣遣は無い、貴郎のお嫁に成るを嫌だと云ふ様な女は盲目より外にあるまいと云たではないか、彼の娘は眼が二つ有たろうな》番頭ハ頭を掻き《眼は二つ有りますが明盲目同様で全く心が盲なのです》若旦那は顔の色漸く變ド《番頭どん和郎が私の事を先方の人に悪くでも言はなければ此話の毀れる事は無い筈だ、世間の女で私を嫌ふものはあるまいし、親達は大喜びで居ると云ふのだし、中へ入つた人が打毀さなければ決して纒らない譯は無い、若し此事が出來んと云へば和郎が悪いのだから私は和郎を親の讐と就覘うよ、》

番頭ハ驚きて《是れは驚きますな、と兎も角も一應大旦那と御相談致しませう》と逃るが如く奥に入る、若旦那は望みの綱の切れし思ひにて茫然たり、此時立歸りたる小僧貞吉《若旦那何處を探しても番頭さんは居ませんよ》若旦那ハ默して答へず、小僧ハ怪み《若旦那何かなさいましたか、ヤア此に番頭さんの下駄がある、モー歸つたのですか、如何でした吉左右は》と生意氣に問へど若旦那は溜息を吐くのみにて何とも言はず、小僧は輕蔑せる如き笑を含みて《若旦那、彼のソラ小川町の別嬪ヲ》と言掛くれば若旦那急に顔を突出し《ナニ彼が何した》とキヨロ〱する、小僧は笑ひながら《今此先の横町を通りました》

若旦那は何思ひけん忽ち下駄を穿きて表に出たり、足速に行く次の横町、若しや彼の娘に逢ひもせんと往來の人に目を注くれども似寄りたる人さへあらず、又しても失望、エイ儘よ、斯樣の時は古き馴染の

處にでも赴きて氣晴しにでもなさんものと車を命じて走らせ行く柳橋、折しも花の頃なれば先づ船宿にて屋根船を仕立てさせ、妓を載せ波に隨て向島の花見と出掛たり、

花見の人も種々ある中に此若旦那は不平の花見、一時の氣晴しに鬱懷を花に散せんとするなれども生憎花は不平の人を照さず、若旦那は隅田堤の奧に登りて或る酒樓に花見の宴を開きぬ、斯る時には醉ふてそ好けれと強て杯を執てやけ飮みを始め終に席上に醉倒れて日落ち人散ずるも起上らず、軈て目覺むれは春月朦朧として淡しく長堤の櫻雲を照す、月下の花見も後は格別と再び舟に棹さして暫く中流に上下せしが夜の深くるまゝに舟を兩國に返さんと廐橋の邊りに來かゝれり、船の中にては若旦那が酒にも飽きけん藝者どもを相手に威しの怪談《オイ首尾の松も晝間見ると好いが夜は怖いの、今夜の樣な晩には首縊りだの情死だのがあるものだ、其首縊りが化けて出るなんぞは面白いではないか》とからかへばお酌の子供は之を聞て急に怖氣立ち《アレ怖いナワ姉さん、若旦那爾な話しはお止しなさいよ、情死ならまだ意氣だけども首縊りなんぞは嫌だワ》外の女《オホヽ情死は好きかえ》お酌《好きでは無いけれども意氣ですワ》若旦那《アハヽ、和女も今に情死でも遣るが宜い、首縊りが嫌なら身投は何だ》お酌《倘は嫌だワ》

若旦那は笑壺に入り《爾でない身投が一番意氣なものだ、それも婆さんや爺さんの身投では不可ないけれども好い娘か何かゞ許嫁のお婿さんを嫌つて身を投るなんぞと云ふのは洒落て居るでハ無いか、誰か

身を投げれバ宜な、己は身投の女を助けて見度ひのが兼ての願ひだ、なるべくなら親孝行の娘が親の病氣を直し度いから身を賣て金を拵へたところ其金を掏兒に取られて家へ歸れないとか何とか云ふので橋の上から此舟の中へ身を投げれば宜な、爾すれば己が親切に介抱して遣て金も出して遣るし親も引取て世話を仕て遣、ところで娘が貴郎の御恩は生涯忘れませんと來ればメたものだ》坐に居たる藝者《爾して下さるなら妾が身を投げませうか》一座《アハヽ》此時橋の下に當つてドボンと一聲怪し氣なる水音《ソラ身投だ》と船頭の聲、若旦那は立上り《助けろ／＼、船頭早く引揚げろ》藝者どもはウロ／＼船頭は忽ち船を漕寄せ手を延ばして引揚げたるに粗末な服裝を仕たる若き男なり、若旦那は之を見て《男かえ》と氣の無き言葉、船頭《ハイ男で御座います、まだ息がありますから大丈夫です》と船頭どもは水を吐かせて介抱しければ其男は忽ち生氣付きぬ、若旦那は不性無性に奥に呼入れ《和郎さんは何で身なんぞを投げなすつた、身を投げると命がありません》と酒の機嫌か言ふ事も眞面目ならず、側に居たる若き女は今迄此騒ぎに氣を吞まれて茫然としてありしが此時若旦那を顧みて《眞誠ですチ若旦那、死んで花實が咲くかいなつて淨瑠璃の文句にもある通り死ぬほど溜らん事はありません妾は今ドボーンと音の仕た時には吃驚して息が止まりそうでした》と是れも譯の分らぬ繰言、

助けられたる若者は暫く若旦那の顏を眺めて心の内に何か考へ居る樣子、左れども若旦那は頓と心注かず《嘸寒かろうから先づ一杯お吞みなさい、爾して和郎さんは何の譯があつて身を投げたか酒の肴に一

つ話してお聞かせなさい》若者は顔を揚げたり、身を投げるほどの事實、酒の肴とは餘り人を侮りたる言葉かなと無念の様子、若き女も興ある事に想ひ《和郎さん搆はずお話しなさいよ、屹度面白い事があるのでせう、此若旦那は是非身投を助け度ひと云ふのが心願で金故ならば金は出して遣る、親が病氣なら親も引取て遣ると云ふ位なものですから遠慮なしにお話しなさいよ》若旦那は眼にて制し《コレ〳〵叱ッ〳〵》

○谷の水　(末ぞ目出度き)

助けられたる若者は若旦那の傲慢なるに快からざれども、斯く問ひ質されては其事情を述べざる譯にもならず、幾度か歎息して膝を進め《貴郎方に向て私が身投の事情をお咄し申したら嘸小心な奴とお笑ひもありませうが貧乏人の境界は復た格別で僅な事に心を苦めるもので御座います》と冒頭に先づ其驕奢傲慢を暗に諷し置き《私は詰らん手内職を仕て幽に其日を送るもので御座いますが此頃或人が私に立身の道を得させ度ひと云ふ親切から商賣の資本に仕ろと百圓の金を貸して呉れました、然し其人とても有り餘る金では無し辛苦して溜めた金を私に貸して呉れたので私は身を粉にしても其恩に酬ひなければなりません、然るに世には神も佛も無いものか今日其金を受取ると直ぐ掏兒に取られて仕舞ひました、それを取られては私も恩人に言譯がありませんゆゑ死んで詫事を仕様と此橋から身を投げたので御座います》と一伍一什の物語

若旦那は此物語を聞て左程感ドたる様子も無くフヽムと輕く笑て杯を手に把れり、座に居たる藝者は若者を顧みて哀れを催し『それは飛んだ事でしたな、死んで言譯を仕樣と念ふのは無理もありません、然し生きて居れば後は稼ぎ出して人に恩返しをする事も出來ますが死んで仕舞ては其人に二重の損を掛ける樣なもので却て其人が貴郎を恨みませう、それだから決してモー死ぬ氣なんぞをお出しなさるな、幸ひ此若旦那は金が有り餘つて使ふのに困つてお出ので今も噂を仕てお出のですよ、イエサ和郎さんの噂では無い身投の噂ですがネ、若旦那の被仰るには斯んな晩には身投があるものだが、己はまだ身投を助けた事が無いから是非一度は助けて見度い、爾してそれが金故の身投ならば二百圓や三百圓は直ぐ出して遣て其上に親が病氣で居るなら親の世話も仕て遣り度ひ、是が一生の願ひだから何卒身投があれば宜い、身投は無いか、身投は無いかと身投を搜して此に居るのですから和郎さんも丁度好い處へ身を投げたので、其お金は今若旦那が出して下さいませう、それを資本にしてお稼ぎなさい、ネー若旦那と』親切やら物好きやら無闇にべろ〳〵饒舌立てゝ頻に若旦那を促す、

斯くまで餘計な事を饒舌られては若旦那も默つて居られぬ場合『爾んなら仕方が無いから私が其百金を貸して進げよう』藝者は眼を揚げて『何ですネー若旦那貸すなんて、綺麗に進げてお仕舞ひなさいよ、今何と被仰いました、二百圓でも三百圓でも金は直ぐ出して遣て身投を助け度ひと、被仰たのではありませんか、今更貴郎が爾な吝嗇臭い事を被仰るなら妾はモー貴郎のお贔負になりませんよ、是から柳橋

へ舟を着けて直ぐお暇を頂きますよ》若旦那は此藝者に嫌はれては大變なりと云ふ様子にて《イヽエ遣るよ、百圓遣りますよ、仕方が無い》藝者《仕方が無いのならお止しなさい、何の百圓位、妾が拵へて此人に進げますよ》若旦那《イヽ仕方が無くは無い、和女が爾なに怒ては困るよ》と澁々ながら懐中の金を出して若者の前に置く、

若者は金を眺めて手にも執らず、斯る恩惠を受け度くも無しと默然として思案顔、藝者は側に進み《和郎さんお執りなさいよ、折角若旦那が出したのだからお執りなさいよ、和女さんが執らなければ妾が貰て仕舞ふ位なもので何うせそー二度と若旦那の懐へは入れは仕ませんから搆はず執てお置きなさい、ヨー無駄に成りますから》と頻に勸めて無理に其金を若者の懐中に押込む、若者は快くはあらねど斯る場合故遂に之を貰受け《それならば是は暫時拜借致します、何れ稼ぎ出した後にはお返し申しに參上ますがお宅は何方で被在います》と慇懃に言ふ、若旦那が《家は……と言掛けんとするを藝者は打消し《和郎さん爾お事を聞かないでも宜う御座います、それは和郎さんに進げたものだから決して返すには及びません、又返したとてそれを取る様な淋しい心の若旦那ではありません、ヲー若旦那、爾して名を名乘つたり家を明したりすると却て何時までも心が殘つて双方の爲めに好くありませんから此儘でお別れなさい、オヤモー柳橋へ來たよ》

舟は柳橋の船宿に着きぬ、一同は船を出たるに藝者は若者を促して《和郎さんは搆はず、此儘お往なさ

い』と勸むれば若者は藝者に幾度も禮を述べて何處とも無く立出たり、
此若者こそ乃ち彼の吸口屋の若者にて其後此金を資本にして横濱に小間物唐物の店を開き身を粉に碎きて必死の勉强、勉强すれば繁昌するは世の道理、忽ちの内に多くの金を儲けゝれば追々手を伸ばして商館へも出入し安き品物を買出しては之を東京へ卸しけるほどに數年ならずして一の大なる問屋とはなりけり、此に於て平生の志も漸く達したれば東京に出て銀座通りに廣大なる唐物店を開きぬ、
其の開業式の當日は店の前に紅燈を山の如く掛け並べ品物を店一杯に積み累ねて世に珍らしき盛大なる景氣なり、兼て廣告をも四方に配りて當日は小賣物も卸物も非常の割引を爲すと知らせたるに此時までも依然として商賣を續け居たる小川町の唐物屋の主人は今日こそ此新店にて安き品物を買入れんと早速銀座なる店に出掛けたり、昔ハ吸口屋の若者、今は唐物問屋の主人は店に在りて入來る客に對せしが忘れもやらぬ小川町の主人の來りしを見て大に悅び《サア何卒此方へ》と下へも置かぬ取扱ひ、小川町の主人は更に其人の昔馴染たるに心注かねば唯へイ〳〵と挨拶して二三の品物を注文するに若者は澤山の品物を持ち來り《サア何卒何れでもお取りなさいまし、貴老の事なら極くお安くして差上げます、時に旦那、貴老は小川町へ唐物店を出してお在のお方ですな》と突然言ふに老人は驚き《ハイ在樣で御坐います、能く御存知です》と不審顏、若者は膝を進め《れ見忘れですか、私は四五年前卷烟草の吸口を持て能くれ店へ出たものです》斯く言はれて老人ハ倩々其顏を眺め《成程爾言へば見覺えがあります、へ

ー不思議なものですな、失禮ながら其貴郎が何して今は斯んな店をお持ちなさる樣におなりでした』と昔を思ひて失禮な事を問ふ、

若者は此失禮なる言葉を怒りもせず、『ハイ其頃或る人から資本を出して貰ひ先づ橫濱へ往て商館向の商賣を始めたところ意外に利益がありましてそれから段々唐物の問屋をする樣になりました、是と申すも昔し貴老方に御贔負になつたお蔭故其御恩返しに昔馴染のお方には極く安く品物を差上ます、して貴老のお家ではお內儀さんもお孃さんも皆なお變りがありませんか』老人『ハイ變りもありませんが貴郎が斯なにお成りだろうとは少しも知りませんでした、尤も娘が爾う申した事がありますよ貴郎は福の神だつて、能く見れば何處か大黑樣に肖て被在る樣だ』と今に成て始めて娘の先見を感服する、若者は茶菓などを出して厚く老人を待遇し『時に妙な事を伺ひますが彼の頃貴老が能く品物をお仕入なすつた唐物問屋が日本橋の先に居りましたが彼れは今何うなつて居ります』と問ひ掛たり、老人は此事を聞かれ舊時を想起せし如く悚然として『ハイ人の浮沈は分らんもので彼の問屋は其時分大層盛大に營業て居ましたが間も無く主人が死去なり息子の代になりますと其息子が米相場へ手を出して忽ちの內に財產を失なして仕舞ひ、今では下谷邊に幽かな生活を仕て居るとの人の噂に聞きました、實に世中は分らんものです』と頻に自ら感じ居るは此息子に就て痛く心に悟りし事あるなり、

斯くて老人は去れり、若者は二三日過ぎて店の隙を見計下谷に赴て彼の若旦那の家を種々に尋ね漸く

の事に捜し當てヽ其家に至り見るに大家の息子が零落れし習ひとて見る影も無き淋しき姿、且つ以前我身を助けし時側に居て骨折り呉れたる藝者も今は女房になりてまめ〳〵しく立働き居れり、若者は懐中より三百圓の金を出して先年助けられし禮なりと若旦那に與へたるに若旦那は非常の悦び、昔を語り今を告げて頻に其厚誼を謝したりける、

此後若者は此若旦那を我店の番頭に抱へ入れて何呉と無く世話をなしければ若旦那は愈々其徳に感し、遂に此若旦那が小川町なるお糸娘の父に申込みてお糸娘と若者をば兼ての望みの如く夫婦とはなしけり、古歌に《末遂に海となるべき谷水もしばし木の葉の下潜るらん》福の神の末ぞ目出度き

◉佛魔一紙　柳浪

(上) 淺草の捕物

是は何事？しかも白晝。明晃々たる短刀を右の手に拔そばめて、淺草の並木を藏前の方へ逃行く壯者。歳は二十一二、色は飽迄白いが、眞青になつた顔に脣も色を失つて、りきみのある眉に掛る散髪は風に亂れて、血を注ぐ外眦凄まじけれど、見るから平生の男振が思ひ遣らるヽ。三紋の黒絽の羽織にせる、おぢの單衣を着て、白の中巾縮緬をぐるぐると卷帶になし、其兩端は捻合して前に挿む。それにからみし龍頭の金時計は、鎖の端が僅かに帶に留まつてぶらりと下り、走る膝頭に當りて今にも落ん風情、なれ

ども危急の場合、之を卷直すの猶豫は勿論ない。賤しからぬ打扮、紳士と見ても耻かしからぬに、追はるゝは何の罪ありてか。刑事巡査二人追すがりて、此も十步を一步の韋駄天走り平日から往來の頻繁並木の雜閙を、白晝の白刄別して人の眼を驚かし、右往左往に逃迷ひながら怖い物見たさの人情、前に散るかと思へば、また背後から圍んで——狂人を追ふ狂人——人浪は藏前に向つて崩るゝ樣な。是も見物の一人の、半纏着の職人らしい男が、驀地に駈て來たが、前に走る三尺帶の遊人らしい男に支へられて、進む事ならず。素より氣早い職人、三尺帶の肩先を突飛して——えいッ浮雲ェ——と駈拔る。突れて倒れて起上るが早いか、遊人は直ぐ職人に追附き、背後から鐵拳を揮つて——こん畜生——腦天を打ると、職人は二三間斜めに飛んで振返つて、此も同じく鐵拳を揮つて、此處にも小戰闘が始まらうとしたが、互に顏を見合せて、《やッ！吉か。》《熊の野郎め！非道い事をしやがる。おゝ痛ェ。》頭を擦れば熊は笑ひて、《篦捧めッ！手前が前に突飛すが惡いや。これ見ねェ、如此に膝頭を擂むいたい。》

熊も膝頭に唾液を塗るので、吉も打笑ひ《お互ェだ。手前も勘辨しろい。一體喧嘩てェな何だ。熊、手前見たのか。》《見たの、見ねェのッて、吉公、素敵な捕物だせ》《えッ！捕物。何人だ、〳〵。手前知らねェ奴か。》

熊は吉の耳に口を寄せて小聲になり、《知らねェ處か。それ手前も知つてる、三次哥々だせ。》《えゝッ

！三次哥々。そいつァ大變だ、如何して喰込んだろう。』『大概知れてらァ、そら上野の……。』『お雪坊を殺害した一件か。』『まァさうとしきや思へねェ。乃公もあの人にやァ世話になつてるから、如何かして助けてェと思つて、今奥山に行て見たんだが、仲間の奴らァ悉皆逃て仕舞やァがつて、一人も居ねェんだ、迚も乃公一人トやァ仕樣がねェから、切ては結局丈も見届けてェと思つて、また出直して來た處だ。手前に此處であつたなァ幸だ。手前も知らねェ人トやねェせ、乃公と一處に一骨折て見ねェか。えー、吉。』

如此無耻の徒にも――狐死して兎悲しむ――人らしい同情の起るものか。熊は其名の樣に勇ましく、頻りに三次とやらを助けやうと云へど、吉は逡巡して、『相手は三尺棒だらうトやねェか。それに眞晝間だぜ。如何して手相になれるもんトやねェ』『弱ェ事を云ふない。手前も隨分世話になつてるトやァねェか。義の爲めにやァ友達の事にだつて命を捨なくッちやァ、好い漢にやァなれねェぜ。手前も其位な事ァ講釋で聞てるだらうじやねェか。其樣意氣地のねェ事を云ふない。さァ乃公と一處に行ねェ。』

熊に勵まされて吉も勇氣づき、共に跡を慕ふて一散走り、忽ち雜閙に隱れて姿は見へず。

藏前の通りは何處の家も此騷ぎに、家内一同店前に出で、噂とりぐ。或家の店先に十六七の娘、愛嬌づきて花の樣に美しく、乳母の肩に手を掛て、身材を伸して往來を眺め、『如何したんだね。まァ大變な人だ事、何が始まつたのかね。』『何がつて、お孃樣、私がお呼申した時、直駈出して入ッしやる

と、御覽なさいましたのに、眞實に惜しい事をなさいましたよ。』《だつて母樣とお裁縫をして居たもの。ま、何なの。』《盗賊ださうで御在ますよ。』《えッ！盗賊。』
娘は顏色を變へて、覺へず乳母の肩を抓めば、《おゝ痛。お孃樣、其樣にお畏怖なさいませんでも、此方へ參りは致しませんよ、盗賊だつて、普通の盗賊とや御在ませんの、如何好男子で御在ましたらう。あれが御家人か何かなら、川崎屋にさせたいやうでしたよ。どうして川崎屋よりまだ／＼ずつと好男子で御在ますもの、眞實にお孃樣にお見せ申したう御在ましたよ。』
娘は顏を赧めて、さげすむ樣な眼で乳母を見て、《川崎屋だつて――新駒だつて、賊盜ではいやだわ。』
傍に聞居し店の若ひ衆、乳母面の奥勤め顏を、平生から凹まして遣らうと待構へて居た、一人の若者。
《乳母どん、此には一番降參しましたな。乳母どんの盗賊へ岡惚あんざア、開闢以來、神武以降、維新初まつての大珍聞でげすぜ。』
また一人が、《さうだ／＼。乳母どんがあの盗賊のお神さんにあつて、二人が中に該兒生んでと云つた樣な其子が何でげしやう。然り而して即ち、豪傑譚の自雷屋なんでげしやう。』
皆々《何故、／＼。』
其男ぐつと反身になつて、咳拂ひ二ッ三ッ、《エヘン、エッヘン。蝦蟇衣で御在やすと云つたつて、君等無智文盲の輩には、憚りながら猫に文殼で、お了解にならんのは無理もありやせん。エヘン、其、其自雷

也がよく蝦蟇に化るのは、君等だつて眞逆、僕の樣な其大學者を、エヘン苟くも朋友に持た冥利には、此位な事は先づ知て居るものと大負に負てあげやせう。エヘン、其自雷也の蝦蟇が大蛇に出喰すと油汗を流して、近い譬へが其エヘン、長松と番頭さんの睨合と云つた樣なものでげすそこでエヘン、蝦蟇がこそ〳〵逃出して、其蝦蟇衣の下に潜り込むでげすそこで乳母どんの子が自雷也へは、エヘン妙でげせう。エヘン、エヘン。』『はゝはゝ。何の事だか些とも分らないの。エヘン澤山の君我輩。權利義務の出ない中が、まだしも罪が輕い位なもんだ。』

皆々打笑へば、若者は眼の中に冷笑を含んで、『えゝ了解ねェ奴に逢つちやァ、縁なき衆生は度し難しで。あゝ、溫石何ぞ膚と肌としつとり合し體溫の嬉しさを知らんや。抑も蝦蟇衣と云つぱ、衣と云ふ字に拘泥で、君等が春秋二季のお仕着と誤解るべからず。時珍と云ふ毛唐人謂つて曰くさ、蝦蟇喜んで此草の下に伏藏す、故に蝦蟇衣と名付と、本草綱目二千二百五十卷の百八十三枚目の裏面に慥に明瞭に判然と書てありやす。そこでエヘン、極無筆に講釋しやすとね、また車前草とも書て、之を大和ぶりに假名で書と、エヘン、其お、、、んばことなりやす。エヘン、妙でげしやう。』『はゝはゝ。出來た〳〵。』

皆々哄と笑へば、乳母、、、やつきとなつて其男の背をいやと云ふ程喰はせ、『彦どん、覺へてお出よ。』また振上る拳の下をかい潜りて、彦七逃出す途端に虻蜂蜻蛉の長松。手拭の後鉢卷して、『御注進〳〵。』土間に駈込み來り、乘地の振をするので、皆々呆れた中にも番頭、長松をぐッと睨まへ、『此野郎、何處

へ行て居たのだ。其眞似は何の事だ。』
手に持つ烟管ぶる〳〵と顫へるので、長松は四ん這にあつて乳母の袖の下に鳥渡隱れる。『長松どん、何をするんだね、氣味の惡ひ。』
乳母は飛退て長松の腦天をぽんと打ば。長松は假聲、『エッヘン、近ひ喩が長松と番頭さんと睨合た樣なものでげす。そこでエッヘン、長い物には卷れろ、番頭さんには勝れやせんから、蝦蟇になつて乳母どんの袖の下に、どうでげすお孃さん、立花屋の自雷也と見へやすかね。エヘン、〳〵、チヽンプイノプイ。』『はゝはゝゝ。』
皆々腹を抱へて笑ひ出し、番頭の澁面も崩れる。娘も笑を隱して、『長松や、お前見て來たかへ。』『おつと忘れて居た。其御注進〳〵。』
又もや手拭で鉢卷して、ぐつと氣取れば、『長松、お前其樣に氣取らなくつて、早く話してお聞せよ。』『そらお孃さんの所望だ。話した〳〵。』『心得ました。』『もう氣障だよ。氣取なくつッてお話しッたら。』
長松は漸々鉢卷をとり、『お孃さん、お聞なさいまし、斯うでげす。私が駈出して行ますとね、あの盜賊が駒形堂の處へ追込れて短刀を眞額に振冠つて、芝居ならつけが這入てぐつと睨んだ所でげす。巡査さんが二人洋刀の欛に手を掛て進むのを、駒形堂の白壁に背中をぴつたりと着て、身搆をした所は、まるで音羽屋の辨天小僧――散髮でこそあれ明治の辨天小僧はあれだらう。淺草で云ふなら、まるで當り屋

の長松どんの樣だと、傍に見て居た櫓下の藝者が云ひましたぜ。櫓下のお酌が……ヱヘヽヽ。長松も餘り馬鹿には出來ませんぜえお孃さん。』《長松め、極りを云つてやがらア。手前が相手なら。奥山に出勤して居る、子守位なもんだ。はヽはヽ。』《ヘン、彦さん、長松だつてヘン。お前さんの樣に奥山の鈴木屋の……。』《叱ッ！叱ッ！》《僕に文を屆けて呉ろつて、はじけ豆五厘の賄賂あんざア……。』《叱ッ！叱ッ！》《長松、其樣事は如何でもよいよ。それから其辨天小僧が如何したの。》《やー可笑しいなアお孃さん迄辨天小僧だつて。お孃さん、貴孃此長松に釣込れましたね。彦さん如何でげす、長松は色男でげせう。》

娘は顏をぽつとさせる。乳母は長松を睨みて、《長松どん、お孃樣に其樣事を……。早く其先をお話しよ。》《はい、〳〵、畏りました。乳母どんは直にお神さんに、味噌を摺のはありやお三どんの役目で……。話すよ、〳〵。お孃さんお聞なさいまし。巡査さんが洋刀に手を掛てじり〳〵詰寄つて行ますとね。盜賊も强膽んですね。身動きもしません。巡査さんも輕卒は傍に寄られないんです。丁度三尺計りの處で。睨合て居ましたがね、如何間隙があつたのか、盜賊は突然一人の巡査さんに飛掛ると、巡査さんが弱いのではないんですが、浮雲ないもんだから二間ばかり逃出したんです。すると見物は。わアい〳〵と喝采たてましたね。僕なんぞも、餘まり喝采たもんだから、それで如此に聲變りがした位なもんです。》《それから、〳〵。》

皆々膝を進めて、番頭も帳合を忘れ、筆を啣へたなり長松の話に聞惚れて居る。長松はいよ〳〵興に乗りて、（逃出した一人の巡査さんを、盗賊が追掛る間際を覘つても一人の巡査さんが組付のを、盗賊は振解いて逃出しましたね。往來の方は見物が一杯になつてるのに、巡査さんが漸々驅付たもんだから逃る事が出來ないんですそれで、盗賊は河へ飛込積りで、河岸から飛込うとすると、先日からの大雨で、大川の水が増して濁つて流るゝ勢てつたら素敵なもんですぜ流石の辨天小僧も之には驚いたと見へましたな、鳥渡慌忙處を、一人の巡査さんが泥棒の短刀を持てる方の手に組付たから堪りません。外の巡査さんもばら〳〵と泥棒を取捕樣とする時、二つ三つ石が何處から飛んで來たのか、組付てる巡査さんの顔に命中つて、外の巡査さんの背中にも命中つたもんだから組だ手は放して倒れる、泥棒に助太刀があると思つて巡査さん達は驚く其間隙を見て、實に素早いの何のつて、泥棒が見物の中に飛込ましたから、あつと思つた時、私の頭の上で御用だッと云はれたから、私は吃驚して抜けましたな——腰ががくりッと抜ましたな。あゝ、口が酸ぱくあつちまた。）（其から如何したい。肝腎な所になると氣を持せやがる。惡い癖だ長松どん早く話さないか。）（長松、晩に御馳走をして上るから、其後を話してお聞せ。）（え、お孃さん、晩に馳走て下さるッて、眞實ですか彥さんや何か當にあらないけれど、お孃さんなら、大丈夫だ。話しますよ、話しますとも。何だと思て見ますとね、奥山で能く見掛る掏摸の吉とか云ふ奴なんです。其奴が石を投やがつたんだッて。巡査さんがぐる〳〵巻に縛つちまつたんです。あゝ、來た、來

た、彼處に來ましたせ。』
皆々見返ると此時往來又々騷しくなつて、一人の遊人らしい者を、巡査が高手小手に縛め引行く
賊は駒形堂の大難、意外の救助に僅かに切拔け、わつと逃迷ふ雜閙の中を、拔けつ潜りつ、露路横町身を遁るべき所もあらばと、探しながら駈來れど警察の手當隙間なく巡査を配つたので、道の角々にて取押へられんとしては、切拔け〳〵、廐橋の角近く迄漸く逃延び見れば前路は鐵道馬車、圓太郎馬車、人力車等進行を止められし物道を塞いで、まるで自然の城壁。殊に廐橋への曲り角には巡査の派出所があつて、翼でもなければ迚も遁れられうとは見へぬ。跡から追迫る巡査の手が既に賊の羽織に掛る。あはや、捕へられたかと思ふと、何程の間に紐を解たか、羽織は巡査の手に殘つてあまされて背後に倒れて。派出所の巡査ばた〳〵と驅來り、御用と聲を掛る時、また〳〵一箇の礫が飛で來て、其巡査の額を打割る。度々の危難度々遁れても此時無數の巡査は此處に集まり、白鷺に交る烏一羽、今ぞ盡る賊の運命?

（中）　上野の小夜嵐

降續いた雨に人の氣も飽々した今宵、夕刻からちゝらゝほゝら星も顔を見せ、殊には摩利支天の縁日、上野の廣小路は中央の馬車道も僅かに軌道を殘したばかり。此邊に如何して如此に人が住んで居やうと、或統計家に膽を潰させた程の賑ひ。時は八月の始め、人それ〴〵の浴衣掛に、打扮も輕い團扇遣ひ。小間物屋の前には人の花を咲せ、植木店の前には朝顔の蔓に袖を牽れて、足を止むるも多い。氷水屋汁子屋店

から店の繁昌、久しく飲だ怨を今夜一度に晴して、歡呼の聲は鳥の市の熊手八ッ頭も三舍を避る。洋燈薩摩蠟の焔は冲天に映つて、二三町四面は田舍に見られぬ霧が立登る。其雜閙の熱さ、涼に出て汗をかく人心笑ひ顏に、上野の天王臺の石阪上に一人の男、團扇に藪蚊を退ながら人待顏。歳は二十一二、顏の色くつきり白く、眼は凄みあれど淸しく、つんと高い鼻、〆つた口元、まづ是等が苦み走つた好男子。眞岡の白地に雪輪の中に三の字崩しの形を大きく置せた浴衣に、淺黄と白の手綱染の縮緬のしごきをぐる〴〵卷にして、下駄は八幡黑の女夫鼻緒を鳥渡突掛け、踵は一寸も殘つて居る。阪の上に長く屈んでも居られず、彰義隊の墓の前に腰掛たり、また天王臺から山下を見下したり、淺草の方を眺めたり、彼方此方を逍遙て石阪を上つて來る人の足音を待兼る風情。軈て袖からかめをと燧火を取出し、火を摺て煙草を吹す事稍少時。また石阪の上に來り、阪下を眺むる事。又少時欠伸交りに何か獨語きたれど、はきとは知れず、待てども來ぬ人への不平らしい。また墓の前、見晴を一廻りして、石阪の上に來て見れど、下から上り來る人の影もない。少しむつとした顏にて、時計を出して月影にかざして、『もう十時だ。九時迄來る樣に云ッといたのに、まだ來やがらねェ。如此事なら、彼女と一處に出掛りやァ能つた。藪蚊に刺るゝ丈でも大概ドやアねェ。もう來さうなもんだ。』見下す石阪に足音。此かと待つ中に上り來る人、見れば其影は男。官員らしい男の、此も納涼か團扇遣ひしながら、見晴しの方を逍遙樣子。彼樣奴が來ちや邪魔になると見送る中に、また石阪に足音。然も

優しい足音は女、と思ふ中に話聲が聞ゆる。二人來る筈がない。叉手は此も違つたかと見る中に、上り來るは女の二人連――屋敷風の美しい娘と下女。これは山越に根岸に歸るらしい。また違つたか、今度はと待ども、また上り來る樣子もない。清水脇の阪から來るかも知れぬと。其處に行て樣子を見れど、此處からは上るもの一人もない。鳥居前の方に行く人ちらりほらり。若やと月影にすかせど、それらしき者も見へず。其中に聞ゆるは石阪の足音。此も違ふかと思ひながら急いで阪の上に來る時、其人は既に上り仕舞ひて、《三次さんか。》

彼方から呼懸る優しき聲。《おゝ、來たか。お雪、何だつて如此に待しやがるんだ。もう、十時過だろうドやねへか。》《だつてお前さん、待合す處を能く極といて呉ないんだもの。それに、何ドやアないかね、緣日の植木を素見ながら待てゝも能い。それから松月か、松兼かに行うとお云ひだつたから、私は植木の處をずつと探して、それから松月にも松兼にも尋ねて見たんだよ。》《篦棒めッ、此處に待てると、あれ程云つといたんドやねェか。》《御免なさいよ、私が悪かつたから。三次さん、此如處へ待合すなんて、何だか出合でもする樣で可笑しいじやないかね。お前さんと私の事は皆が知つて居るし今ドや私の母親も承知でお前さんの世話になつてるんだもの、些とも搆ふ事アありやアしないやねもう遲いから、其樣に暑い事もないよ。緣日でも素見して。早く歸宅ドやないかね。お前さんの好な物を拵へて待てると親母が云つてたよ。》《そりや難有がッお雪、今夜少し話してェ事もあるし緣日なんかまた何日でも來

られらアなアッ。些と其邊を逍遙いて見やうトやねェか。》《お前さんと一處におら、私や何處でも行がね、お前さんに迷ひ出した時分は、夜の二時頃迄も奥山の淋しい處に待てた事もあるがね、斯うなつて天下晴て人に隱れる事も入なくなると、如此淋しい處を歩行のは何だか怖い樣だよッ。》《手前はさうか知らねェが、乃公は矢張昔の事が忘れられねェから、時々如此處を、手を引張合て歩行て見てェよ。》《すんなら歩行うがね。私 は如何したのか、今夜は變に怖い樣な氣がして、何だか淋しくッて仕樣がないよ。》

女は身體をぶる〳〵と顫はせるのを、男はド、、、ろりと見て、これも何か心の落付ぬ樣子。《それは氣の所爲だ。權現前の方へ行て見やう。》

男は前に立ば、女は進まぬながら惚れ切た男と歩行事いやでもなければ男の傍にぴ、、、つたりと寄添ひ、手と手を握合つて、梢に篩はれて月影のこぼれた上をぶらり〳〵。

女の歳は漸と十八か九。少々色の黒い顔も月影に照せば、實物よりも餘程白く見へる。これは眞から白い上に磨上た肌合、眞綿に白蠟を掛て、眞似をする程鳥渡本紅をさしたら斯うか。眼はぱ、、、つちり。口は莟。顔の四ッ道具に一點の申分もない。若し難を云へば額際が少し薄い。これは多くの美人が多くは批難される。此に充分な望みを云へば、千人に一人まづ六しい。して見れば、之は許されもする。髪は櫛巻にして、白元結で十文字に止た瀟洒加減、此社會には粋と嬉しがる。衣服は男と對摸樣の中形浴衣。

下トめも男と對の手綱染。帶は唐繻子と中形縮緬の晝夜帶。下駄は男物、鼻緒も八幡黑、唯女夫でないばかり、何もかも對にした樂み若い男女には之が命？

三次はお雪と手を引合ひ、淸水堂の傍の阪を下りて、權現前にさし掛る。月は全く梢を離れて、玲瓏たる光輝に二人は實に一双の玉。權現の鳥居を潛つて石疊に足踏掛る三次の袖を押へて、お雪は立止り、《其樣暗黑い所へ行のはお止しよ。屛風阪を降て家に歸らうトやあいかね。》

三次は振返つて見るお雪の顏――水の滴る樣な眼が落付かず、眉根の皺に心の進まぬも見へて、月影に拭ふた美人の愁顏。三次は元來お雪の色に迷つて、今の身――お雪にも知られたくない――にもなかつた譯。此程嫌がるは虫が知らすか、其美くしい顏を見れば見る程、覺へず心も消々になり、懷抱へて接吻も仕たい。それもわが身には換へられぬと思ひ返して、《なに、怖い事があるもんか。權現の阪から池の端へ下りて、廣小路に出やう。まァ乃公の行通りに來ねェ。》

お雪は猶は三次の袖を確と握つて、石燈籠の背後の暗黑な森の中の凄さに手も顫へど、曳れ〳〵て權現前から左りに石阪を下るかと思へば三次は右に曲るお雪は足を止めて、袖の手を放さず、《如何したの今晩は。其樣處ばかり、嫌あなね。》《五月蠅なァ。乃公の行く方に來りや能いじやァねェか。》

三次の聲は少し怒る。お雪は素より何も知らず、惚切た男の云ふ事、深く辭むでもなく、唯何となく氣味の惡さに、我儘を云つては見るもの丶、男を怒らす程なら、如何怖い思ひもする氣。此森の下蔭の暗

黒！お雪は爪先で落葉を探り〳〵、漸と動物園の前に來れば、月影は何時の間にか薄くなり、空を見れば星もちらりほらり、どんよりと曇りて、三次の顔も明瞭とは見へず、心細さは一入。まだしも心強いは、谷中わたりの人の縁日歸り、行合もすれば、森を隔てゝ話聲も聞ゆる。三次も、もう此山に飽たか、中門通りに曲るので、此道の眞直は屛風阪、それを下て歸る心とお雪は落付き、足の運びも自然に早い。中門前も通り過ぎ兩大師の角に來た途端、《お雪か、其處に來るのは。》二人は吃驚足を止め、見れば片蔭に人影、《お雪か。大層遲かつたの。》

お雪は早速に返事も出ぬ。三次は忽ち起る嫉妬、われを除けて外の忍男、惡しと聲も急込み、《手前は何だい。お雪に何の用があるんだ。》

先の男は何故か返事もなく、つか〳〵と二人に近寄る三次は覺へず拳を握れば、お雪は三次の背後に隱れて身はわな〳〵。

《お雪ぢやないか。　お雪〳〵。》

お雪は聲も顫へ、《私はお雪ですが、お前さんは何人です。》

其間に男は近寄り、二人の姿をつく〴〵見て、《やーお雪じやない。これは失禮をしました。御免なすつて……。》

打詫るは官員體の年寄の男、天王臺の阪上で出會た人らしい、《娘と下婢とが縁日から歸るのを待合し

て居ました處へ、お二人のお姿を見違へて、意外の失禮をしました。』
丁寧な挨拶。二人も安心して能い加減に挨拶をして別れる屛風阪を下るかと思へば、三次は新阪行の道に曲る。お雪は又如此處をと思へど、怒られてはと男の背後からすご〳〵。三次は振返つて、『お雪、手前も油斷がならねェ、如彼男と媾曳するたァ知らなかつた。
お雪は三次の傍にずつとより、男の手を確と握り、『え、今の人かい。お前さんの樣でもない、何だね人違ひだろうトやァないかね。昨日や今日斯うなつたんじやあるまいし、私の心を知らないかなんぞの樣に。』
三次は握られた手を振放し、少し身を退て『おゝ、知らねェ。手前の心は乃公にやァ飲込ねェ。』
お雪は三次の傍に寄り、甘へる樣に其手を引張り、『お前さん如何したの、今晩に限つて其樣事を、戯弄ちやァ嫌だよ。』『先刻から默つてりや、手前は乃公と斯うやつて歩行のが、嫌で〳〵ならねェんだな。』
『あら！ さうトやないよ、お前さんとなら私しや何處へでも行くよ。だけども此樣……。』
云掛て言葉を切り、また怒らしてはと惚たが弱身、『其樣氣トやないんだけれど……私が惡かつたよ。私が惡かつたから、え、堪忍してお呉れ。え堪忍して……。』
男の帶に兩手を掛け、其顏を見詰めて身を任せたお雪。可愛さに弱る心を、三次は鬼にして、『それトやァ乃公の行く處なら、何處へだつて可否は云はせねェぞ。』『あー、屹度何處へでも行ますよ。』

お雪はほつと呼吸をして、曳れて行けば新阪の下口。將軍手植の五葉の松、空を凌いで闇ながら朦朧と見ゆる凄さ！一天まるで黑流し、星も見へず、雲の斷目もなく、今にも雨が落さう。左方を見れば靈廟道‖道と云ふよりも寧ろ闇の住居、しいんと感ゆる凄さ！覺へず身も顫へる。

三次は此闇を進むに、お雪は怖さ！淋しさ！齒の根も合ねど、また疑はれやうかと何も云はず、男の手とわが手を組合して、それをぶる〳〵顫はしながら、わが顏の有處も見へぬ闇路を夢の心。折も折、梢がざつと鳴る。お雪はあつと三次にしがみ附ば、あら！大粒の雨がばら〳〵。《あら、如何しやう。お前さん如此處へ來て……。》《仕方がねヱ。此處で一休み休みねヱ。》

連込れたは何の下か。森の下か。ばら〳〵と聞ゆるは、屋根に當る音か。そつと後手に探れば、確かに靈廟の門下。三次は燧火を取出しかいめを吹す。吸ふ度にぽつ〳〵と明るくなる煙草の火の光に。お雪は待兼た樣に男の顏を見れば、如何したか惚た眼にも、其顏が何となく凄い。お雪は摺寄り、《お前さん、今日は如何したの、如此處ばかり歩行て。》

三次はドろり見て、《お雪、手前に聞てヱのは外でもねヱが、手前は乃公の商賣は何だか知つてるだらう。》《え、お前さんの商賣、いゝえ私は知らないよ。》《確と知らねヱか。此迄長年如此交情になつて、ヽ其男の商賣を知らねヱ樣な不實な女でもあるめヱ。知てるなら知てると云ひねヱ。》

お雪は三次を普通の遊人とは思へど、折々不審な事がないでもなく、若しやと心に悟つた樣でもあるが、

素より半信半疑。自分一人の心に納めて、それにも戀は覺めず、三次を綱とも命とも。でも、其心の所爲に見へた事もあるか、三次の今宵の詰問《私しや眞實に知らないよ。好んば知つて居たつて、お前さんの爲めにならない事を、何で人に云ふものかね。》

思はず出るお雪の答。三次は聞と其儘面色變り、もろいは口！身の一大事はこれ！總身電氣に打れたも斯うか。唇がぶる〳〵と顫へる。《お雪確と知らねェな。》

また念を推す。《あゝ。知つてたつて安心してお出よ。》

三次は心に點頭く。折柄雨も小降、雲の斷間も二ッ三ッ。《お雪、出掛やう。雨も止んだ樣だぜ。》

お雪は手に試して、《まだ降てる樣だよ。》《なァに、もう大した事ァねェ。手拭を冠んねェ。》《あゝ、さう仕樣よ。おや、手巾は如何したらう。》《ねェのか。無りや乃公のを貸して遣う。其方を向きねェ、乃公が冠らして遣うよ。

男の優しき言葉は、女の心に雪の朝日。お雪は嬉しく、背向になれば、三次は懷中を探る手も顫動き、手拭を出すかと思へば、《あゝッ。》

一聲叫んで、逃出すお雪の髱を握む三次の片手には明晃々たる小刀。お雪は仰向に倒れて起んともがき、《人殺しい、〳〵。》

悲鳴山に應へて響く果敢なさ……三次はお雪の首を抱へて口に手を當て動かさず、《お雪、堪忍しろ

ッ。』
疑念の刃また閃めいて、また一突き。
折から雲の斷間の月影、寫出す光景、無殘！無殘！無殘！

（下）　隅田の玉柏

連日の大雨に隅田川兩河岸、水の溢いた處もあり、毎時も水防方の氣を揉す厩橋。今日は雨の止つて六日目、水量も餘程減ドて、水防方も今朝引上げ、先づ橋は今度も無難。が、平水に比ぶればまだ〳〵中々の水勢、泥色に濁つて渦を卷く樣な流れ樣、見るからの凄まじさ？好し、水練の達人でも、無頓着に帶は解けまい見渡した處通行の舟は一艘もない、唯首尾の松の蔭に水上警察の端艇、職掌なから危險いもの。犬猫の死骸丸太戸の壞れなどの流れ來るのを、見物の老若男女、これ故に橋もゆらめく。
時に藏前の方に人聲が騷がしい。何かと水を捨てゝ人に趨くものもある。藏前の角より橋迄は、其間僅に半町にも足らぬ。其間も忽ち織るやうに成る人の中を、巡査に追はれて逃來るは三次。巡査の手は既に三次の領に屆いて、わはや捕へられしか。やット三次が振向なり閃めかす短刀、美事巡査の胸を突て、仰向に倒れる瞬間。他の巡査の手を摺抜け、厩橋の上に韋駄天走り、橋を越へて落延ん心か。橋上に殘りし見物、わつと云つて片端に寄る間遲し、三次は逃る中も白刃を打振り〳〵、既に橋を越へんと

して見れば橋詰の派出所の巡査三人。橋の前路を塞いで、手負猪に對ふ獵夫。前面に敵あり背後に敵あり、左右は逆卷水、游泳不鍛練の三次は、蠅取瓶に陥た蠅、もがいてもそれは少時迚も逃るゝ血路はない。はら！大膽。何らにも捨る命を的、欄干に手が掛るか、橋下に聞ゆるは水音。橋の上の見物は――やア！飛込だ、〳〵。――と三次が飛込だ上手の欄干から見下したが、既に賊の姿も見へぬ。またどろ〳〵と下手を覗く途端に、無殘！七歳ばかりの小兒筋斗を打て逆卷水に……。

三次は漸と橋杭に取付き、手早く衣服を脱んとする時、水音高く飛込んだは、われを捕へん爲めの巡査か。逃るゝ丈はと、少しく水心ないでもなければ。既に潜らんとする耳に聞ゆるは――助けろッ、〳〵――と云ふ人の叫び。助けろとは何人をか。乃公をか。何か知ねど見ば、七歳位な小兒が浮つ沈つ。やッ――不便、助けたい。無殘強惡の三次にも此心の發るは流石に人の皮は粧飾でもない。思へば、乃公も脱るゝ身、あの兒を救はんとすれば、共に死ぬか。捕へらるゝか、死は何人も怖ろしい、三次も此故に愛婦を殺し、巡査を殺し、此水に飛込だも、萬死の中に一生の望み。えゝッ背に腹、人の上より我が上……。思案も瞬間、三次は逃る丈はとまたもや潜らんとする時――助けろッ、〳〵――橋の上で叫ぶ聲はまた耳を貫ぬく。見れば小供の姿は見へぬ。やッ！もう流されたかと思ふ中、小さい手が波の上にもがくは、苦しさも想像られて、あゝッ不便だ。――助けろッ、〳〵――其聲は三次の腦――心にびんびんと響いて、あゝ可哀想だ。不便だ。苦しかろ。不便だ。えッ、此迄の罪滅し。儘よと橋杭を離す心の

變轉も刹那一瞬。水の流に隨ふ拔手、早くも小兒に追付き、手を掛れば小供はまだ死なぬか。三次の右の手にひしと取付きて放れず。此に働きの自由を失ひ、其手を放して背中に取付せんとすれど、取付た手の力は小供ながら一生懸命。三次は此水に片手泳ぎ六かしく、忽ち水に捲れて二人とも姿は見へず。首尾の松の木蔭に艤つて居た水上警察の端艇も、三次が飛込む水音を聞くと其儘漕出したが、水勢に押されて四挺橈も思ふ樣には進めぬ。橋の上からは端艇を目掛けて——二人を助けろッ〳〵。——と呼掛るので、端艇も死力を出して、橈のひらめきも漸々早い。

三次は小供と共に浮つ沈みつ流され、小供は既に死んだか、少しももがく樣子もなく、三次の腕に取付た手は放さず、三次は水を飲で死を待つばかり、今は現心。自分の此迄仕て來た惡事、お雪の事、死絶た親兄弟、朋友の事、凡ての事が殆んど一時に心に浮んで、それが悉皆今の死ぬのを諦らめさする助けになる樣にも覺ゆる。今度はもう浮くまいと覺悟した時、水上に引上らるゝ樣な氣がして、明るくなつたので、偶と目を開けば、やッ。水上警察。

端艇の巡査は漸く二人を尋ね當て、鉤を小供の帶に掛て水際迄引上げ、小供の衣服を抓みし時、男は眼を開いて巡査を見るや否、力を究めて逃やうとする。巡査は何やら知れねど、此奴胡散と小供の衣服を緩めず、男も共に引上んとする途端、子供の手は男の腕を放れて、男は再び沈んで、遂に姿は見へず。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

兩國の回向院に新しい石碑、其表には三次の墓としてある。それに線香を供へて居るは七歳ばかりの男の子。聞けば三日過て三次の死骸、百本杭の杭の間に挿まり、杭の中程を兩手で確と抱いて居た、それで死骸も流れず、撿視も濟んで此處に葬られた譯。施主は其時救けられた子供の親。其家は此傍か、小供は毎日の樣に此墓に線香を供る。不思議なは人の行末！水の流れ？

◉薄命の鈴子

嵯峨のやおむろ

（第一回）母とむすめ

遠寺で突く鐘の音が四方に立込めて居る夕霧を潜ッてさも重々とさも悲しさうに夜の來たことを觸れ廻ハッて地底に深く沈んで仕舞ッたッイ今しがたまでヒラリ〳〵と風に飜めいて居た乳屋の旗も何時の間にやら下されたと見えて早や音もしない唯何處でやら餘程の遠い所で雷鳴の樣な音がホンの幽にして居る計り是は大方街道を馬車が通るのでもあらう世間はシンとして物淋しい草葉の露を命と鳴く虫の聲も霜枯れて物悲しく姿の哀な七日の月は心細い幽かな光を糸の樣に窓に垂れて居る

但見ると紙窓に變な影が朦朧として寫つて居る……何んであらう鮲霧の如く煙の如くで善くは分らぬ然し形はトント振亂した女の髮の毛と見える其に折々窓の邊りで木の葉の散る樣な壁土の落ちる樣な幽かな音がサラ〳〵とするスルト例の影が彼方へ往き此方へ往き窓の上を徘徊する……怪しい……一陣の冷

颪がサット窓を吹き拂ッた影は忽焉として消へて殘るは白い障紙計り……ハテ不思議な……ト見ると又寫ッて居る

有るなと見るとふと消へる伏屋におふる箒木か朧月夜の幽かな影マア果して何者であらう歟右に動き左に靡く姿トント窓外人あッて家の中を伺ふ樣である家と言へば此の部屋の隅の方から氣味の惡るい凹んだ誰やらの兩眼が此怪しい影を見詰て居る是は一個の娘の目である壁際に薄い四布蒲團が敷いてあるが其上にお鈴といふ娘が悄然として坐ッて居るナニ坐ッて居る坐ッて居るのではない後ろの夜具に倒れて居るのである是は恐らく病人でもあらう見るから痛ましい瘦きッた膝の上へ落て居るのが瘦た手で其手先には薄い掌と誠に細りきッた指とが着いて居るがトント小さな熊手といふ格好である貌を見ると頰肉は悉皆落ちて腮の骨は恐ろしく立て居て色は靑く灰よりも靑くて憔悴た樣な顏で如何にも痛々しくやつれた姿其に目は恐ろしく凹んで凹の字の形ほどに凹んで而して其凹んだ底の方でピカリと瞳が光ッて居る

お鈴の目は一寸見ると例の影を見て居る樣であるが實は見て居ない委しく言ふと目は見て居るが心は見て居ない恐らくお鈴の目の中には目前に何事が有らうとも恐らく這入りはしまい何故なればお鈴の心は今甚だ忙しいからで他に思ふ事があるからで彼の身邊を圍んで居る此現在の境界を離れて更に別世界を想像して其世界の中を彷徨ッて居るからの事である全體人間といふ者は年をとると昔は如何して斯して

と兎角に昔の自慢話又若い中は斯して彼して兎もすれば未來の事で心をつからすが自然の道理でさうして見れば此娘もヤハリ其未來の事を想像してゐるのであらうイヤ左樣ではない娘の行末は昏闇冥々として咫尺も分らぬ昏闇彼の前途は黒幕で彼の身は匣の中に葬むられて有るので西へ出やうとしても出られず東へ行かうとして行かれず南も塞ッて居れば北も塞ッて居るたとへば百方塞り殆んど八陣の中へ落た人の如く前後左右皆敵如何して陸遜其人の如き豪傑でも是を切抜けるとは六ケしい況して妙齢の處女の身で殊に病み疲れた處女の身では一層六ケしい唯靜に歸路を求めて退去するの外ハ仕樣仕方もない左樣彼は實に退去して居る越方を思ッて居る

扨て越方を思ひ出すにお鈴ハ忽ち年が二ッ三ッ若くなッて三五二八の美しい乙女となつている目の前に西洋館が出來た越中島洲崎の濱が霞の間に灣形を描いて美しい右手は一面品川の海庭を見ると種々な草が今を盛りと咲いて居て若葉の芽萌は青く鳥は歌ひ蝶は舞ッて居る好風景此景色を前に控へた此家の一室にお鈴ハ二三人の朋友と机を並べて椅子に掛ッて居る其向ふには敎師のマダム某が面白さうに小説を讀んで居る少女は皆耳をすまして聽いて居るに優しい聲が或は高く或は低く音樂の如く聞ゆる而して愉快な話や樂しい話や悲しい話が此乙女たちの感情の糸を色々に彈いて色々に響かせている敎師は本を讀み終ッた人物の性質を解剖して小説の意匠を説明して文章の講義をして居る嗚呼お鈴の爲めには此家に寄寓して居た頃は誠に面白かッた好時節眞地目な稽古の間々にはマダム某は院本や小説を讀んで聞かし

て解剖して批評して説明してくれた此頃お鈴の身の周邊には可愛らしい鳥の聲とうつくしい景色と親切な敎師と氣の置けぬ朋友眞にお鈴は幸であッた
ソラ日曜日お鈴は敎師の家を出て我家へ歸ッた女中が出迎びに出てお孃樣がとふれ込むと弟の孝次郎まだアドケない罪のない徒らッ子の孝坊が姊さん〳〵と飛んで出る可愛さ奥へ往つて見ると母もチヤ待て居たと嬉しさうな顔父の所へは年中絶えぬ數多の客落磊な父の性質を値段して來る客もあるしお鬚の塵を拂ひに來る賤しい人もあるし活路に苦しんで救を求めに來る哀な人もある庭には花守の植木屋臺所にはお出入の商人何時も絶えた事なく女中部屋には下女はしたがかや〳〵ワヤ〳〵打々ドッといふ笑ひ聲がして何となく賑やかでドン〳〵して柳靡き花笑ふといふ春の景色眞に此頃はお鈴も浮世の鹽知らず花なら梅の蕾《好月日の下にお生れ遊ばしたの》と門番の老母が入齒を吹き出して噂をした事もあッたが其はお世辭ではなかッた
然し浮世は塞翁の馬賴みにならぬものは今日の幸福である一家の運命を握ッて居る手幸ひの源ともいふべき父が病氣になッた一家の人は額を集めて眉を顰めて心配を始めた此樣子は恰も朗かな夏の日遙かの地平線上に一朶の黑雲が現はれた樣な者見る〳〵黑雲は滿天に蔓こッて雷轟き電閃めく恐しい景色となッて女中までが笑聲を止め出這入る人までが足を竊み話す聲までが低くなッて急に物淋しくなッてきた然し低い聲が以前の高い調子より寧そ能く聞える父の病氣ハ日増に重る計りモウ枕も上がらぬ今に一

大悲歎の事件が破裂するであらうモウ破裂する時期が迫ッて來た誰が見ても今日明日となッてきた然しお鈴は《今にあほる今になほる》と心の中では繰返して居た然しお鈴の心底の極の眞底では《迚もなほらぬと》いふ聲が始終して居た然しお鈴ハ如何いふ了見である歟此聲を聞くと吾と吾手で耳を塞いて《イーエなほる》と言ッて氣をなぐさめて心を安めて居た……が實は針の席にゐる心地お鈴は今此時の事を思ひ出した

ある日の事で母が《チヨイとお鈴》と呼んだ見ると母の目には涙が一杯溜まッて居たお鈴は胸を轟かした母が何歟一言言ッてホロリと落涙に及ぶとお鈴も露を膝に置いた…………………ソラお鈴は母と二人で奥座敷に坐ッて居る其の向ふには醫者がおちつき拂ッて手を洗ッて居るお鈴は人間の壽命は醫師の手一ッにあるとは夢聊かも思ッては居ないが然し此時は父が死ぬると生るとは醫師の一言に因ッて明白になると思ッて居た早く此方へ向けば好い一秒も早く聞いて《如何歟〳〵》と思ふ此疑ひの此定まらぬ痛いとも掻いとも何とも付かぬ此苦しみを遁れたいと思ッたり又さうでもない若助からぬと言れたら其こそ大變命の糸も切れる此最後の宣告ハ恐ろしい寧そ遲い方が好いと思ッたり……マサカから明白にも思はなかつたが……此樣な氣もして實に聽たくもあり聽たくもなしと言ふ場合然し聽かぬ譯にはならぬ仕儀ソラ醫師は此方を向いたお鈴の胸ハ波を打ッた手は震へ出した顏は一生懸命の樣子目は醫者を見詰たソラ母の聲が震へた醫者の顏が變はッた氣の毒さうな風に唇が動いた愈々宣告お鈴は息を殺した恐し

い宣告お鈴は胸に白刃喉に利劍暫しは息も吐けなかッた……お鈴は今此時の事を思ひ出した而して重さうな溜息をホッと吐いた

國手の一言が果して中ッて其夜父は無常の風に誘はれて歸らぬ國へ旅行した家内には苦痛悲慘眞に哀なツラゲヂーの一幕があッたが然し涙の中に父の遺骸は葬ッて七日〳〵の追薦も滯りなく濟した、けれども濟ぬは家の活計お鈴の父は磊落で廉潔で義俠心が有ッた故歿後餘財がなかッた唯に餘財のないのみでなく少々借財も有ッた故地所家屋敷も人手に渡ッて仕舞ッた年頃住馴れた我家をお鈴は振返り〳〵此寂しい鄙の此小さな此古ぼけた此汚らしい此白屋へ引移ッたモウ下女も居ず下男も居ず母と弟と何にもかにも僅に三人誠に寂しいトント火の消へた跡誠に物寂しくなッたモウ斯なると今までおへい〳〵を言ッて居た辭儀專門の人々は如何いふ譯歟一個も來ぬ親類にも生憎と頼になるのは一軒もなく母が頼みに思ッて居た神樣も佛樣もチカラ頼甲斐もなかッた樣子お鈴は腐甲斐ない女の身ながら一家の生計を身に引受けて是非とも立ませうと小さな肩に其責任を背負ッて立ッた然し、可哀さうだな、心は矢竹に思ふが元より纖弱き女郎花の壹本浮世の風に當てられて病氣となッた……お鈴は今一伍一什を思ひ出して眞成に情ないと落涙に及んだ

嗚呼然し活氣〳〵何事も活氣であるお鈴は如何程衰弱して居てもまだ年は二十如何して活氣はお鈴を見捨はせぬお鈴は越方を思ひ出しても自然の順序で現在へ戻りまた更に未來に向ッて《病氣がなほッたら

病氣がなほッたら》と疑問を起した然し梨の礫の音沙汰なし未來となると何時も唯疑問で一言の消息もなく四邊默々又黯淡嗚呼可哀さうに迚も病氣はなほりさうにも無い日にまし重る計りお鈴は首をうなだれて深い憂に沈んで居る此時窓の外で誰だか低い聲で《早く死ネ〳〵》と言ッたお鈴はブル〳〵と首を振ッて佶と前を見て喫驚した窓の外に誰か居る髮をおどろに振り亂した人が朦朧として立て居る此時冷い風がサット窓を吹いたパット影が消へた機會にパタ〳〵〳〵と誰だか跣足で驅出したお鈴は頸元から水慄ッとして下を向いたスルト又氣味のわるい冷たい風が窓の外から吹いて來てサラ〳〵といふ音がした怖い怖いと思ても怖い者の見たいは人の常でお鈴は怖々首を擡げた……影はある……お鈴は目を一杯に開いて瞬きもせず僻目もふらず唯一心にヒタと影を見て居たが莞爾笑ッた

隣家の垣根ぎしに大きな柳と白楊があるとシテ見ると此影は多分其柳の影でサラ〳〵といふのは葉の散るのであらう又パタ〳〵といふのは白楊の業で莖の長い葉の丸い團扇の樣な白揚の葉の風に騷ぐ音であらうお鈴は是に氣が着いて覺えず莞爾として太い溜息を肩から吐いた然し眞暗な闇の夜鬱蓊と枝を垂れて居る柳の下を一人で通ると何となく氣味のよくない者お鈴も柳と知ッて居て倘何となく氣味がわるく後の見られる心持がする世間は深々として物淋しく悲しさうな小兒の泣聲が遠い隣から幽に聞えるが何となく心細い聲は止まッた四邊は又寂寥として居る《アヽ是だ此影だ私の身は此影と同じだ右へ往き左へ往き色々に苦しんで而して仕終に風がサット吹くと私はモウ此世には居まい死ぬ死ぬのだ》

シッカリ自分の膝へしがみ着いた死なぬ樣に而してしがみついた儘に影をジーと睨み詰て居た不意にカタリといふ音雨戸が開いたお鈴はビクリとした誰か家へ這入ッた樣子足音は母の足音であッた《母上さんですか》《アヽ私だよ只今》

隔ての障子を開けて這入ッて來たのは何處かゆッたりしお人品のよい年頃五十計りの老女であるお鈴は母の顏を見て餘程安心したらしく嬉しさうな聲で《お歸んなさいまし大層お早うございました……嘸お足勞れなさいましたらう》《イーヘ足勞れはしないが話がまとまらないのでツイ遲くなッたのにお前を一人置くと思ふと氣が氣でないから飛ぶ樣にして歸ッて來たが急いで來たら是でも暑いことさ》手拭で顏を拭きながら《お前藥をおあがり歟、エヽまだかい何故飮まないのだチー飮めば宜に早くおあがりモウ今に八時半だらうに》

枕元の藥茶碗をとつて注いでやるとお鈴はチヨイと戴いて呑む《如何でした叔父さんは居ました歟少は話がまとまりました歟》

母は氣のない顏をしてさも重ッくるしく《イーヱ話が解る樣なら宜けれども中々解らないのさ》

お鈴は萎々として《折角往ッて下すッたのに誠にもう……》

溜息を吐く《其も仕方がないが憎いではない歟照のいふには斯さ姊さん貸ても宜が返す當はと言ふからチー左樣さお返し申さない事はないが今返す當がある歟と言はれては差當ッて困るが先年夫の繁昌の時

貸て上げた金も少くはないが其は夫のした事で私の知らない事だから別の事だが如何歟少し計り用立てくださいと種々譯を言ッて頼んだら》如何にも口惜さうに顔を皺めて《眞成に能彼樣事が言へる眞成に憎くッて照が斯さ「其はお兄さんには金を少し計り拜借した事もあッたが其はモウ疾うに皆返却して仕舞ッた」と拔け〳〵と迂詐を吐くのだよ其から言ふには「其に有りさへすれば幾らでもお貸申たうございますが何しろ四百圓だの五百圓だのといふ大口が二三軒も倒れたので私も今困ッてるのだから如何も今が今と仰言ッては出來ません」といふのさ其にお前お清までが色々な事を傍から一所になつて「今良人が言ふ通りの譯で」と並べ立るのさ眞成に自分の困る時には姉さんマア如何歟して下さいと來て泣付くから可哀相だと思ッて彼が困る時には如何位みついで遣ッたか左樣〳〵は父上にも言へまいから內證で私の衣服や帶をやッたり五圓や十圓の金は幾度やッた歟知れやアしない牝鳥勸めてといふ事もあるから少しは傍から取做して吳たら出來るかも知れないに垣根計り結ッてるのサ眞成に揃も揃ッて彼樣不人情な奴は有りはしない恩知らずめ》

お鈴は涙ぐむ母、佛樣の樣な母がよく〳〵の事なればこそ斯樣に怒るのでと其心を汲んで口惜くまた悲しく覺えず涙を催したが目をしばたゝいて《眞成に餘りですねー斯して母上が態々お出なすッたに實に……》《其れにお前憎いではない歟御膳時分になッても》

母は何故だ歟輾然と笑ひ出した《餘りで腹も立てやアしない御膳時分になッても御膳を一ッ喫べろと言

ヤアしない其から歸らうと思ッて人が挨拶して下駄を穿きかけたらお清めお姉さん御膳でも上つてから
お歸んなすッたらと斯さ》
お鈴は顏色を變へて怒ッたが顏をそむけて《如何せ叔父さんは高利でも貸さうといふ人ですから並の人
間では有りますまいが叔母さんヽ義理も有ッたものだに其を其樣事をいふとは實に見下げ果た……》
此時表で男の聲《皆川さんは此方でございますか》

（第二回）　晴初める歎きの霧

居間を兼帶した六疊の客坐敷、置替たり敷直したりして、モウ何年を過したか、萬遍なくケバだらけに
切れた疊、歩く度に爪先から塵がパッと立ッて舞昇るのを、天井の蜘蛛の巣が引かけて、所々方々にぶ
ら下げて居る、何時張替たまゝの障子か、上の方は焦茶色に薰ッて薄昏いが、下の方は穴だらけで、寒
の中の朝が思ひやられる、鼠の齒形でギザ〳〵になッた押入の戸、ヒヾと雨漏で摸樣の出來た古壁、曲
んだ柱、朽た閾、總て見る物が薰ぶり返ッて、幾年の貧苦を語ッて居る、唯一ッ光澤々々とした欅の長
火鉢、立派すぎて此家には釣合はぬ、アヽ是は昔を思はせる種でもあらうか、
長火鉢の向ふに坐ッて居る年寄は、前回に見えたお鈴の母で、茶煙草盆を前に据えて、其向ふに坐ッて
居るのは、今尋ねて來た若い男で、人品もなか〳〵キッとした男、苗字は何といふかまだ知れないが、
老母は親しい樣な疎遠な樣な調子で、只三郎さんと呼びかけて居た、

話も餘程熟したと見え、年寄は目に涙をうかめ、《それに貴君、お鈴までがはじめはホンの風の樣でございましたが、段段に重りまして、いまだに臥せッて居ります樣な事で、外に力になる人もございませず、私ハ此通り意氣地はなし、如何したら宜からうと思いますと、まことに心細う厶います、それに……》言ひかけて老女は横を向いて、袂からわる紙を取出した、三郎も流石にゑはれた體で、《其事も一寸承はりましたが、嘸御心配でございませう、お察し申します、私が思ひつきました考がございますが……少し考へて、マ兎も角も、一寸お鈴さんにお目に掛りませう……が御病氣に障りませうか。》後の言葉だけは極小聲でさゝやいた、《イエ、如何致しまして、難有うございます、寔にむさい所でございますが》

お鈴は次の間で話の樣子を、臥りながら聞いたと見えて、兩手を杖にして起直らうとする、三郎は目早く見て、《如何ぞ其儘》と押とゞめたが、氣丈な病人は聞かない、生來禮儀が正しい質故、母に助けられて起直るのを、一目見て如何樣に驚いたであらうか、

三郎がお鈴に別れたのは、今より二年程以前の事、三郎の胸に畫いて居たお鈴といふ娘の貌は、其故に無論其頃の貌で、今お鈴の母に向ひ、お目に掛らうと言ッた時も、縱ひ長病で衰へてゐやうと、充分承知して居たにもせよ、彼の愛らしい清しい目と、彼意味の深い緊ッた口は、元の儘に心に映ッてゐた、所が豈圖らん、目の前に現はれた此病人の、お鈴の貌を見れば、昔の面影は何處へいッたか、變はりは

てた今の姿、見るからが痛々しい痩せた體、骨と皮ばかりの樣に見える、是がお鈴だと言はれおければ、恐らく氣がつかぬ位であらう、目は凹み頰骨は出て何となく物凄い、幾分か不快な心持がしたであらうが、タッタ二年餘り前かたには、是が美しい健かな、愛らしい乙女であッたかと思ふと、縱ひ三郎が此娘の、おさな馴染でなかッたとしても、アカノ他人であッたとしても、可哀相と思はない譯にはゆくまい、

お鈴はやう〳〵に起直ッて、重々と貌を上げて、莞爾と笑ッたが、其は只口元ばかりで、目はイッソ涙ぐんで、小さい聲で三郎の口議に答へた互に問いつ問はれつする間も、娘はきたないのを氣にかけたか、其處等を片づけて母に賴んだ、三郎がとめても親子はきかない、母は繰返して今の不幸を、立働く間にも語ッて居る、果は袂から惡紙を出して、橫を向いて鼻をかむ、親子の不仕合を見るにつけ聞くにつけて、三郎も思はず鼻をかんだ、色々に親子に力をつけて、慰めたり勵ましたりする間に、三郎は四邊を見廻はした、病人が着て居る夜具蒲團、アヽいつ洗ッた儘であらう、心持のわるい臭氣、實に目もあてられない、三郎でない人が見たら、スグにも此部屋を出たであらう、

三郎は我知らず歎息したが、靜にお鈴の方にむいて改めて當時の容體を問ねて、又其樣子を熟々見て、此娘の病を直さうとするには、良醫良藥は無論の事、他人の同感と將來の望を持たせるのが、最も肝要な藥餌だと思ッた、扨暫く考へて、まづ良醫にかけやうと思ひ、入院の事をすゝめかけたが、親子共に

生返事をして、却て恥たやうな樣子に見える、其處で三郎は忽ち察して、入費ならば心配には及ばぬ、それは私がひきうける、決して心配に及びませんと、色々に言葉を盡して、ヤット親子を承知させた、母親は昔堅氣娘は自立心が強いので、如何位三郎は骨を折ッたか、恩賜の拜領を願ふ計が、容易ならぬ口前を要する者と思ふ、不見識な人間にきかせたらば、親子と三郎の押問答を、どの樣に呆れて聞いた事であらう、アヽ人心はさま〴〵なもの、

中一日を置いてお鈴は三郎の世話で、大學病院へ入院した、

抑三郎といふ男は如何なる人で、又お鈴の家とは如何なる關係を持ッて居るので此樣に世話をするのであるか、先づ其事を語ると致さう、

三郎は姓を松本と言ッて、信州松代の豪農松本某の二男である、幼い時はお鈴の父の徹齋に從ッて、漢學を學んで居たが、徹齋が住居を東京へ移す時に、自分も從ッて出府して、或官立學校にはいつて、佛語を學んで居た、其後法律學を修めて代言人となり、傍らある新聞社へ勤めて居た、折々は在野の名士に隨ひ、演說會討論會等へも出席して、新主義の政治論を唱へて居たが、まだ其頃にはこれと言ッて、確定した未來の目的はなかッたので、唯古今の英雄豪傑が草莽の中より起り、天下を經營した偉業を欽慕し、且は少年の血氣充滿して、一日も安閑と暮されぬが原因で、何か一事業しやうといふ、漫然とした望を抱き、譬突に奔走して居たのであッた、ガ尋常の少年ではなかッた、才畧もあり、溫厚でもあり、

且學識にも富んで居たので、先進には可愛がられ、後進には慕はれ、追ひ〳〵世の中に名を知られた、二十六の時郷里の縣會議員に撰まれ、議塲に出席したが、言ふ事も實着で、辯舌も爽やかで、且東京で名があるといふので、縣地の人々にも推されて居たゆゑ、三郎が動議を起す時は、四莚を驚かすといふ程でもなかッたらうが、頗る勢力があッたといふ事、然し其論旨は席上論が多く、到底實際には行はれぬと、老成の議員は非難したが、中には賞賛する者もあッたとか、其後考ふる所あッて、英國に遊學する事となッたが、蓋し三郎の値打は是から後に定まッたので、

三郎はオックスホルドの大學生となり、專ら法律學を修めて居たが、螢雪の効空しからず、明治十……年の秋首尾よく卒業して學位を得た、此間三郎の交遊中間は大概勇壯活潑の青年で、大學生もあり、新聞記者もあり、某會の會員もあり、下議院へ出て居た政治家もあッた、其中には確乎たる目的と期望とを抱持し、且之を達するには、如何なる方法に依るべきかと、思ひを凝らして居る者もあッた、さうでない者と雖も各々功名心に富んで居る者で、氣力の盛なる者のみであッた、其故其間に往來して、議論を上下した三郎の利益、蓋し小少ではなかッたであらう、

卒業後三郎は倫敦に尙一年間滯在し、朋友の紹介で、其朋友の親戚知己であッた、當時議院の坐席を占めて居る、有名な人々とも知己となり、其風采を伺ふ事も出來たし、又是等の人が其黨員に對する樣子から其社交上の模樣などを知ッて、幾多の知見を開く事が出來た、此樣に三郎は其學問に於ても、社會

上の經驗に於ても、過去の三郎に比較すれば、著しく發達した人となッて歸朝した、
歸朝後三郎は、兼て倫敦で其訃音に接した、幼少の時の漢學の師匠、皆川徹齋の家族を訪ねた所、思ッたより甚だしい零落の體に、哀にも思ひ氣の毒にも思ッて、其で前の如く助力した譯で、
是が三郎の履歴、是が三郎と皆川との關係、是から又本文に戻ると致さう、
俚諺に鰯の頭も信心からとはいふが、マサカ、カンナ屑を細末にして、それを飲せたとて癒らぬが病、氣から弱るとのみ言はれぬが人の體、お鈴は病院へ入ッてからメッキリと力づいた、醫者もよし、空氣も清し、食物もよし、手も屆く、心よくなるのも自然の話、當人が久振で起て坐り、氣力がついて物を言へば母は喜び、母が悅ぶ顏を見れば當人も思はず莞爾と笑ひ、當人が莞爾笑ふのを見れば母も又愈々悅ぶ、斯いふ手續で次第に癒るお鈴の病氣、アー病院のお醫者さまは、流石に違ッたもの、大したものと、母は落涙して有難がッたが、其實良藥より良醫より、更に一倍の効力のある一種の力があッたので……が病人も母親も其時にはそれに氣がつかない、イヤ氣がつかない譯ではないが、兎に角其力が醫者や藥餌に、まさッて居やうとは思はなかッた、それは何か……三郎の同感……即ち親も子も保護者を得て、アヽ嬉しいと安心したのが、第一の幸福の曙光であッて、第一の良藥であッたなれど、其恩人の行ひがガラスの瓶に入れてある、水藥と同ドとは氣がつかなかッた、
松本三郎は二日とは間を置かず、幸ひ此邊を通ッたからとて必ず見舞に立寄ッた、其度に容體は尋ねな

いが。然し醫局へは度々立寄り、醫師に內實を聽く樣子で、眞實に親子の爲を思ひ、厭り、慰め、力を付け、御介抱の甲斐が見えて、と母親の心を安ませ、お前方の骨折で、と看病の女をさへ疎略にせず、且其たびに注意を述べて、而して何時も用がすめば、急ぎますからと歸ッて往く、親子を慰める爲の外には、少しもムダことを言ッたことは無ッた、如何かすると一時間位話をつゞけて居る事もあッたが、其時も矢張同じ主意で、老母と物語をする時には、成る丈年寄に解り易い舊幕の頃の昔話、故郷に居る頃の浮世雜談、又お鈴と話す時には、淡白の中にお可笑のある、病氣に障らぬ樣な話をして、靑ざめた口元に笑を含ませ、心の結ぼれを解してやり、折々は爲になる樣な評を添へて、冗話にも光を附け、其で成程と感心させ、親子を快活に感じさせた計か、隣の床に居る病人までが、仁愛の餘光を被ッた、其故三郎が這入ッて來ると、此靜な病室が急に賑になり、話の調子も高くなり笑聲も聞え出す、恰も深山の草木が雲間を出づる太陽に、俄に照される樣であッた、

お鈴の弟の孝次郎といふのは、當年齡が十四、まだ肩上のある小供なれど、遊ばして家に置く生活でない故、他人の家に養はれて、身に暇のない居候の身の上然し、姉思は持前、姉の病氣を氣遣ッては、時々見舞に來た殊勝さ、『姉さん』といふ一聲には、お鈴の心の慰むこと幾ばくぞ、孝次郎の來る度に、母は此子をつかまへて、居るから歸るまで三郎の噂三郎は如何に信切な人で、如何にやさしい人で、如何樣に萬事に氣のつく人で、如何樣に立派な男で、年は若いが如何樣に學問の出來る人で、如何に如何で

と、其人品を賞めたて丶、而して其人は沒した夫の門弟であッたと、目をうるませて自慢をして、ア、自慢するのも無理はない、縱ひ佛敎は衰へても、因果應報に僞りはない、老女の夫が若不義不德の人であッたら、如何して此輕薄な世の中に、三郎の樣な義理がたい書生を、マアこしらへる事が出來やうぞ、

お鈴は追ひ〳〵に快くなッた、其故三郎も安心したか、又は別に事務があッてか、八九日顏を見せなかッた、お鈴はある日臥臺の上へ起直ッて今屆けてくれた或る新聞を、何の氣なしに讀んで居たが……これは過日來退屈消しにとて、三郎から送ッてくれるのであるが……フト目に着いた者でもあるか、一ッ所を傍目もふらず、一心になッて讀み始めた《母上……急に顏を上げて事ありさうに、今度松本さんが書をおこしらへなさいましたよ〕》《チヤ、さうかい、何の書だい》《吾人の前途といふ六日しい書ですけれど……新聞に大層賞めて》《さうかい、眞成に彼人は感心だ、小さい時から大變に利口で、今に出世すると父上が常々お賞めなすッたが、眞個にさうだ、父上の目は違はない》

是れから又三郎の噂、總じて同じ人の噂を毎日繰返し繰返されては、隨分退屈する者であるが、其例外ともいふのはお鈴で、其をうるさいとは思はぬと見ゑて、淋しい顏に笑を含み、却ッて嬉しさうに聞いて居る樣子、イヤそればかりではない、偶母が話を止めると、自分から水を向けて、又誘ひ出す以前の話、ア、三郎といふ者がなかッたらば、親子は話をする種もなく、無言で一日……イヤ一年も、一生涯も空

しく暮したかもわからない、

併し暫らくして母は話を止めた、お鈴の目は又新聞の上をたどり出した、見出しに松本三郎、お鈴は目に力を入れた《松本三郎氏ハ兼テ政論雜誌ヲ發兌セント專盡力アリシ所最早其準備モ整ヒタレバ不日發刊ノ運ビニ至ルト云フ又同氏ハ一ツノ青年倶樂部ヲ設立シテ大ニ全國、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、是ニハ在野ノ諸名士モ概ネ贊成ノ、、、、、、、、》讀み終ッたが顔を上げず悄然として紙面を見詰て居た、何か考へて居たらしい、何を考へて居たか、其は當人も知らなかッた、他人は倘更の事、併し此日の夕方、弟の孝次郎が尋ねて來た時、二人は左の如き話をした《姉さん、松本さんが書いた今度の書ヲ、大變な評判だよ、濱田さんなんざ、大變に賞めてたよ彼は豪傑だッて、請看他日廟堂の上群雄を叱咤するは是此人、いゝだらう姉さん僕が作ッたのだよ》

お鈴は莞爾して《大層お詩だネエ》《だが姉さんは如何思ふ、松本さんは豪傑だらうか、エ、エさうかもしれないネ》《ダガサ、姉さんはなんと思ふい》《さう、エライ方だらうと思ふのさ、學問もあるし、才識もあるし……》

扨一週間過ぎた、お鈴は庭へ下立て、秋の日影の斜にさす樹の間樹の間を徘徊して居ると、一個の男が足を早めて此方へくる、見れば松本三郎で、二人は顔を見合せた《モウ其樣に歩けますかい、歩いても

宜いのですかい》《ハイ大丈夫でございます、モウ此様によくなりました、モウ一週間もたッたならば退院しても宜からうと、昨日醫者さんがおッしやいました、誠に有難うございます、》《其は結搆（喜ばしさうに）然し癒り際が大事ですよ、油斷しては不可ませんよ、（ハンケチで額を拭ながら）今日は餘程温で心持がよい日ですチエ、庭を少し歩きませうか、御一所に》

二人は並んで歩き出した、お鈴は人目を羞てのか、何となく打解けず、きまり惡さうに俯向いて居たが、病室の裏へ出た時は、モウ全く打解けて話を始めた、三郎の著書の事、其倶樂部の事、雜誌の事、其から英國の交際社會の事、婦人の勢力の強い事等を、其から其とお鈴が聽けば、三郎は深切に語ッて居た、

此時の二人の樣子を見るに、三郎はお鈴をいたはッて、始終保護するといふ樣子、お鈴は又安心して、餘念なく話を聞きながら折々黒目勝な清しい目を、三郎の方へ向けて居た、

此時の談話の樣子で三郎は彌々此娘が尋常の娘の場合とちがひ、啻に學問が出來る計りでなく、性質が頗る慧敏で且おとなしいといふ事から潔白で質樸で見識があッて、且幾分か西洋の思想を、內心に呼吸して居ると悟ッた、お鈴も亦此時に於て、三郎の爲人を益々敬慕し、彌々信仰する心を生ドた、此人は政事家とは言ひながら、今の所謂、自稱政治家とは違ッて居る、政客と、權謀と、利己と、愛國とを混同して、國家と社會とを度外に置き、予れ一人を本尊とする、卑しい政事家とは同一ではない、全く熱

心に、誠實に、社會を思ふ人と信仰した、併し公平に評をすれば、お鈴は何事も三郎のいふ事を、正直マッタウに信仰して而して此樣に思ッた事故、彼子に於ける親の目鏡と、似たりよッたり、多少顯微鏡の趣きもあッたらう、其よい點を見る時には、

二人は種々と話に浮かれて、往くともなく知らぬ間に、大きな池の邊へ出た、

元來此庭は、昔でいふ百萬石、元の大諸侯の屋敷跡で、領內幾萬人の無形の苦痛が、一變して此愉快なる築山となり、此面白い泉水となッたもので、今尙しのばれる昔の豪華、四方に起伏する人工の山々、中央には碧をたゝへた雅致ある池、築山にはびこる七葉樹は、鬱蒼として日の目を蔽し、地を這ふ樫の枝は、池の水ぎはにさし出て、蛟龍が水を飲むかと見える、風に琴を彈く庭の松は、今尙殘る御殿の跡、盛んな昔日の榮花を語り、葉越に見える西洋館、是も一種の趣で、開けゆく世を語るやうだ、二人は草原へ腰を据へた、

見渡せば風柔かにして、水紋畫くが如く、落葉は大洋の小舟の樣に、フワリフワリと穩やかに、幾ッともなく浮いて居る、四方の空氣はシットリとして、常盤木の色は光澤を增し、青地の錦かと眺められる、遠くではねた小魚の潑剌、風のまに〳〵斷絶して、遠音に聞える打斧の響、寔にヒッソリとして靜なこと、

此幽邃閑雅の景色に、二人は心を奪はれて、我を忘れて眺め入り、宛然感に堪たる如く、折々顏を見合

せては、莞爾として笑ッて居る、蕭々たる風は情多くして衣裳を吹き、蒼々たる池水は心あッて雙影を寫すといふ風情、然し二人の心は、其淸きこと瑠璃色の天よりも淸く、纎雲一片の影さへもない、彼等は、彼うるさき、かしましき紅塵の中を離れて、彼汚れたる有漏路を出て、遠く仙鄕に遊ぶやふな心地、天堂樂國に登る樣な心地で、此庭上を逍遙して、其感を樂み、其樂を樂んで、其感の消へるのを恐れ、其樂の散るのを恐れて、未だ一言の言葉も出さぬ、が其默々たる無言の中に、果して如何なる感情があッたか……、

第三回（分りかねる心の底）

ある小さな家の小さな庭、見れば手拭を被ッた若き女が椽側の柱に張板を寄せかけ、日向で一心に張物をして居る、椽側の方へ背向になり、斜に生垣の方へ頭を向け、横から覗く樣な格好で張板の上へ顏をさし出し少し屈身加減になッて、張物に餘念のない、其姿の美しさ、大陽の光線を斜にあびて居る顏の半面、其額際で弓なりに取ッた手拭の端が眞白な頰に自然半圓形の影を畫き、其影の中から右の方の眦と象牙細工の樣な美しい鼻がチョイと覗いて居る愛らしさ、脊中でうつくしく十字形を作ッて居る桃色縮緬の玉襷、其襷の爲にまぐれて居る兩の手、地體が色の白い所へ日に燒けた故か、ホンノリ赤みを帶び、扱折々は腰を屈めて盥の中のキレを絞り、其を板の上へ張付て、而して其上を白魚の樣な、細い、しなやかなる指の先で、輕く柔かに叩く取なし、ア、誰が是を見て美しくないと言はふぞ、それに付て

も氣になるは障子の內の男の聲、書物を讀むのか、其かあらぬか、幽に聞えるも心憎い、『孝さんと、』娘は呼かけた、——『お湯は沸いたかい、私は直モウおしまいになるが……アヽさうかい、そんなら宜が』娘は張物をしまッて顏を上げた、今まで屈み加減で居た其疲勞を癒さうといふ無心の働き、兩手をダラリとぶら下げて、力なさヽうに肩を落して、首をかしげて、溜息をした其風、誰に見せやうといふ野心もなく、生來の儘の無心淡白、何處かおちついた風もあッたが、其淸しい目元と其意味の深ひ玄まッた口元を見れば、見ちがへるまでもない皆川お鈴で昔のおそろしい風は少しもなかッた、

お鈴は庭へ水をこぼし、盥を輕く右の手に提げて、キザムやうに裏の方へ向ひ、忽ち柘榴の木の影へかくれてしまッた、此時正面の障子が開た立出たはお鈴の母、向ふの火鉢を小楯にとり、兩足を前へ投出して、新聞を讀んで居るはお鈴の弟、

母は軒端に釣してある小さな鳥籠の前へ立ち、上から餌をまいてやれば二羽の小鳥はチヨイと留り木から飛下り、愛らしい嘴を動して、籠の底をコト〳〵と突一突ながら、頻りと餌を拾ふて居たが、小さな胃囊は忽ち充溢になつたものか、早貌を上げて喫やうともせず、嬉しさうに身を顫はせて、互に嘴を吸合ひ、留木の上や籠の横の方へ飛上つたり、飛下たり、キヨト〳〵と四邊を見廻はしてハ、チヨチヨと囀る可愛らしさ、母は此樣子をさも樂しさうに見て居た、『母上お茶が這入ました』呼びかけたのはお鈴の聲、お鈴はモウ裏口から這入つて、火鉢の傍で茶を入れて居る、呼ばれて母は嬉

しさうに莞爾して坐敷へ這入り《チヤモウお前張物はおしまいかい、よく早くしまへましたネエ、胴の方は如何であつたい、色がさめたらうネ洗ッたら》《さめましたとも、眞赤な水が大變に出て》《さうかい、如何も今の物は其で困るのネ、一時奇麗なばかりで》

母は佛前に初茶を供へて、火鉢の傍へ坐りながら後の日ざしを見て《チヤモウ十時だよ》《大變に變りましたことネエ、日ざしが、先の日曜日には此所等までしか射ませんでしたが、眞に今から此樣では冬になッたら如何樣にさし込みませう、其代り此家は温ですよ》《さうだらうよ、モウ〳〵其が何より私には結構さ》

何事をいふにも嬉しさうな顏色、やがて孝次郎の方を向いて《孝やお屋敷で戴いたお菓子が戸棚にまだ一つあるから、彼を持つてお出》《ナニ菓子、夫奴は嬉しい》

出して來た西洋菓子、ナイフを右の手に持て見詰て居る《如何したの》《如何したのッて？ 此菓子を三ツに分るのだが、是が公平に切れない樣では總理大臣にはなれないからネ、如何切らうかと思ッて見て居るんさ》

やがて少年の陳平は菓子を三に切ると《サア眞中を母上に、僕は是だ、サア姉さん》

孝次郎は菓子を頰張り、茶を一息にグッと飲干し《姉さん、西洋菓子は乳が這入ッているから滋養になるッてネ、姉さん今にスウサントンを敎へとくれ、今日の所は中々六ッかしい所だ僕のクラスにや出來

る奴は居やァしない、僕位なもんだ」
母は眦を下げて「其は其筈さ、姉さんに教へて貰ふからさ、お前一個の力では、如何して左樣は出來はしない、其だから姉さんのいふ事を、よくおきゝと毎日いふのさ」「其は左樣さ、姉さんに見て貰ふからさ、ダカラ出來るのさ、此間もさう言ッた學校の奴が、「君ハ姉さんに見て貰ふッて姉さんは如何樣に出來るッて」僕はさう言ッてやッた、「如何樣にッて僕の姉さんは西洋人の家へ塾に這入ッてたから、西洋人と同じに出來る」ッて、さう言ッてやッた」「チヤ、マア馬鹿な事をいふ子だチェ」
娘が笑へば母も笑ふ、嗚呼此靜な、此安全な生活、別に斯といふ樂しさうな事もないが、然し心おきなく打くつろぎ、つまらぬ事を面白さうに其から其と話して居る、氣樂な水入らずの親子の體、嗚呼誰かいふ幸福は權力の集まる所にありと、誰かいふ快樂は富の寄る所にありと、富の寄る所にハ苦勞があり、權力の集る所にハ爭が宿る、幸福幸福、汝ハ如何やうな所に宿るか、勤むべき勤めを仕果て後、一家一所によりこぞり四方山の話を茶受にして、一杯の茶を味ふ時、嗚呼汝ハその邊をうろつかぬか
三人ハ茶を飲みながら四方山の話に浮世を忘れて、睦じく樂しく談話をして居たが暫らくして孝次郎ハ俄に思ひ出した事と見え突然に大きな聲「ドウ僕は往ッて來なくッては、伊藤の所まで」
毛糸の帽子をひッかぶりながら「姉さん歸ッたら教へとくれ、」部屋を横飛に飛び出したが入口の邊りでかんばしッた聲。「姉さん、山口さんが」「チヤさうかい」とお鈴は嬉しさうに莞爾して、いそ〳〵として

立上り《如何ぞ此方へ、よくマア》と先に立つ、案内につれて通る人、見れば、堅く言へば星眼隆鼻器量優れた男であッた、《先日は有難うございました、スッカリ拜見を致しました》

坐が定まッた時お鈴が話し出した《其からアノウ論文を松本さんが讀みたいといッて、ツイ持ッて往きましたから、何卒今暫らく》

山口と云ふ男は飲みかけた茶を下に置いて《松本君に？　ナヤ〱其は汗顔でしたネ》《ナヤ何故でございます、松本さんも一寸讀んで大變に敬伏して、斯申しますと失禮ですけれど、私は眞成に口惜しく思ひます、何故貴君はあれ程の御見識もあれ程の御學問もお有んなさいますのに、何故斯やッてお在なさるのでせう、無用人さへ出世しますのに何故御立身なさいませんでせう、私は此事を考へますと、眞成に口惜しく思ひます》

此言葉に因ッて見ると、山口といふ男は今こそ草莽の中にかくれて居てまだ世の中へ現はれないが、如何やら一器量ある人物で、而して此人の書いた論文が強くお鈴の心を支配したといふ樣子に見える、扨熱心に話し出したお鈴の樣子を山口は微笑を帶びながら見詰て居たが其言葉の途切れた時、極打解た調子で《貴君は大變に贔負して下さるけれど、其は贔負目です、よしあッた所で夫は名譽心のある人でなければ》

半分言ひさして其も無益と思ッたか、唯一笑に付し去つたが、お鈴ハ了悟した《ア、其でハ名譽を求め

るのがお厭なので、其であのなんなのでございませう、然し世の中へお出なさるのも名譽の爲でなければ宜いではありませんか、世を濟ふ爲めなれば宜いではありませんか、一體只今の日本社會は眞成に開化して居りますのでせうか、黄金世界なのでありませうか、左樣ではありますまい、貴君の御論にありました通り腐敗した世界なのでございませう、我々同胞は此腐敗の淵へ溺れて居るのでありませう、其ならば有識者は傍觀する時ではありますまい》

日頃謹み深いお鈴が何時にない此熱心、尚種々と理屈を述立て、段々に論じ詰たトヾの詰り、若し山口にして其經綸の才をふるッて世を救はうとしないなら、力を國家に盡さないなら、山口は自己主義の人であるとまでに言ひ切ッた、然し彼方は平氣莞爾して何でもなく《自己主義だからではない、力がないからです》

唯の一言、然し動かぬ一言、お鈴はモゥ言ふ張合はない、が其でもまだ未練、臆病さうに頭を上げ、目元に無量の眞心を込めて、ジット山口の顏を見て低ひ聲《ダッテ貴君が左樣事を仰言いましては力のある人は有はしません》

顏の赤くなるまで熱心に述べた前の千言萬語よりは凋れて述べた此一言が……柔よく剛を制すで……却て山口の心を動したか、山口は眞地目な顏をした……が直又笑顏になつて《如何して飛んだ事だ、然しある力はある、是でも貴君よりはあるかも知れない、腕押か角力なら》

取付島もない此言葉……ガ松にはからむ蔦かつら、剛氣な心程やさしい心を惹くもので……お鈴は山口が歸つてからも《如何して彼人を世に出さう》

永らくの間思案に暮れて居たが暫くして《ア、三郎さん、彼人に説ひて貰はふ》

此一段の話はお鈴が病院を出てから、一年餘も過ての事で、お鈴の出院すると間もなく、三郎の週旋で、番町邊の女學校、玉振舘の教師となッた今まで貧苦の瀬に漂ッて居た親子の者、定まッた重寶を得る身とあッた時の喜び、マア如何樣であッたらう殊にお鈴は、ハテ解りきッた事、人知れず三郎の爲めに縫戀衣扨斯なつて見れば瀧野川村からも通へぬので今の所へ移ッたとの事、又山口といふ男は其名を剛といッて同玉振舘の教員で、三郎とは莫逆の友で、お鈴が同舘の教師となッたも實は三郎から剛に言ひ入れた故であるといふ事、シテ其爲人を言へば、博學にして思慮深く人に接するに言葉寡く、多くは口元に笑ひを含んで人の話を聞いて居る斗り、然し時々警語を發して人を驚かせる事がある何となく奥の知れぬ人であッたお鈴は此人を以て尋常一樣の士ではない、稀有の英才非常の人物と尊敬して居た、然るに此頃剛の書いた論文を讀んで愈尊敬の念を増し、扨こそ右の如く思ッて居るので、

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

西洋風の書齋、是が主人三郎の居間、窓の所に一脚の机を据え、腕掛椅子に掛つて孤燈に對し、片手を椅子の肩から落し、左も疲れたといふ風の男、是が當家の主人三郎で、三郎は今這入ッて來たお鈴を見

て、忽ち滿面に笑を現はしット椅子を離れて《ヤ、よくこそ、今夜は心持がわるくッて困ッて居た所でした、サお掛なさい》と目で知らせる椅子、お鈴は引寄せて机の傍、親しむが如く莞爾して《アノ此間お約束申した寫眞モウ出來てまゐりましたか》三郎が取出した三四枚の寫眞を、お鈴は手に取ッてながめながら《マアよく取れましたチエ、其にお年より若く、此洋服は貴君によく似合ひますことチエ、あのスコッチのはお似合ひなさらない、貴君には薫んだ物が宜ございますよ》ト遠慮のない評、餘程親しい中でなければ《其では一枚戴きますよ、孰れが宜からうかしら、エ、孰れも同ド？ホヽ、、、そりやさうですけれど……マ是を一ッ戴きませう》暫くは寫眞の話、其から山口の事となり、其から又二ッ三ッ問答があッて、例の論文の評も出て、山口の評にうつッた時、お鈴は熱心に賞め出した《彼程の學識があるのに、あゝやッてつまらない事をして居るんですもの、私は眞誠にお氣の毒で……如何か貴君の御周旋で、どうか……眞誠にあの位な人は、多くは世の中に……》三郎は眉を顰めた、是は不快を感ドたからで、其原因は？山口に對するお鈴の同感、然も三郎の心はさう言ッて居ない《言ひ樣が氣に入らぬ熱心に賞めるのが氣に入らぬ、何だから山口が其樣に大切だ》と

思ッて居る、お鈴は答を待ッて居たが、三郎は俯向いた儘頭を上げない、何か考へて居るらしい《さうではありませんか》

此言葉に心付いて頭を上げた、モウ皺は消へて居た、恐らく思ひ直したのであらう、不快を感ずる道理はない、お鈴の如き善良の者なら斯思ふのが當然だと、而して早口に《勿論さう思ッて居ましたけれども、……只山口さへ承知すれば》

ト言ッて見る目附、何處となく睨む樣な氣味であッた、がお鈴は無心氣も附かず、唯顏色のわるいのを見て《如何かなさいましたの?》《イーヤ如何も》《其では失禮ですが私と一所に山口さん所へ往ッて貴君からさう言ッて、よく説いて見て……》

言ひかけて三郎の顏を見て居れば益わるい樣子、早案ト出す女氣《今夜はよしませう、貴君の顏の色は大變にわるい》

三郎は意地を張り出した、廉耻心に對して義理だてをして居る《イーヤ往きませう、往きませうよ、今夜の方が都合が宜いから》

駿河臺の松本の住居を出たのは恰ど夜の八時頃、四角で一輛の車を雇ひ山口の家へと走らせた、冴渡る月、木々の姿、道往く人影、露に玄める屋根、草に鳴く虫、そよぐ秋風、軒端の風鈴、嗚呼心が清む種、三郎はモウ愉快さうな顏をして居る、車が鈴木町へかゝつた時は二人は思はず《嗚呼好月だ》

一度にいふ二ッの聲、一ッ感、一ッ樂、讀者諸君想像して御覽なさい、かゝる月夜に美人を、清淨潔白の處女、然も自分が人知れず思ひを懸て居て、而して彼方も竊に自分を憎からず思ッて居る其處女を伴ふて行く人の心を、今宵の月、今宵の景色、彼の爲めには何と見えやう、膝を交へて居る二人の間には一ッに寄る肩と肩、かた糸をよりかけて居る愛の玉の緒、其を傳ッて居る微妙の電氣、心と心は抱き合ッて居る、二人の話す其言葉は耳にはおんと聞えやう、遙かに遠き雲の旗手で天女の奏べる樂の音か其かわらぬか夢現、走る車も車とは思はれぬ、神聖なる鳥の翼に乘ッて、次第〳〵に汚土を離れ、無垢の天上界へ昇る思ひ、下界遙に見おろせば、所々にきらめく軒の點燈は白光の中の無數の星、二人は夢路をたどる心地、折からゴトといふ物の響き、車は傾く、車夫はよろめく《オー怖い》

お鈴はすがりついた三郎の腕へ《危ぶない》

三郎は抱へたお鈴の體を、車は一散に鈴木町の坂を……俄に騷しい夥多の人聲、見れば一群の書生が三崎町の方から戯むれながら、ワイ〳〵、

第四回　（巻藏める話の筋）

既に前回に述べた通りお鈴三郎の兩人が山口の家を訪問て其著書を公にせよと勸めた其結果として一書が世に現はれた、標題は國體論、其論の高尚なる、其觀察の緻密なる聊世の注意を惹起したが、國體論の著者山口剛とは如何なる人と、當時知る人同士出遇つた時、何時も話の種となる程であつた、サ

ア斯なッて見ると剛はお鈴並に三郎と益親しくなるが自然の道理、其上剛はお鈴と三郎の間には愛憐の糸が引いてあッて而して其糸に因ッて二人の心が結ばれてゐると知ッて居る、其故是で剛が月下翁となり、二人に縁を結ばせれば此話は目出度局を結ぶが、扨まゝならぬが浮世の常、却て此剛の計畫から二人の中が糸が切れて離れ〳〵にある事となッた、其仔細を尋ねるに、

抑此剛といふ男は前にも言ふ如く、才知も人に俊れ學問も衆に優る天晴一器量ある人物だ、なれど道徳の觀念と言ッたら毫末もない、此人が今日迄不道徳の事をしないのは、出世の妨と思ふからで、若し事情が許したなら酷い事卑しい事如何樣事をも爲かねない男だ、今此男が窃かにお鈴に懸想して……恰も猫が鼠を捕らへた時一寸爪にかけてはドやらし一寸ドやらしてハ玩弄にする樣に……折があつたらお鈴をなぐさみ物にしやうと、野心を抱いて居る、實に不快極まる事で、

其中に好機會、勿論剛の爲で、お鈴三郎の爲めにはわるい機會、其機會が見附かッた、恰ど此時國元の三郎の母が、モウ三郎も年頃の事故早く嫁を持たせたい、其にハ氣心の知れぬ者より、寧自分の姪、即ち三郎の從妹が怜悧でもあり、柔和でもあり、學問も出來、其に眉目容も美しいから彼を嫁にしてと、內々親同士は相談の上で、お花といふ今年十八になる姪を同伴て態々出京した、剛は是を見て思ひついた一工夫、無論剛も老女が何の爲めに出京したと、知ッて居らう筈はないが、若い娘は三郎の家に居るとぞ幸ひ、是を種にて一工夫、

剛は斯思ッた其翌日學校でお鈴に遇ッた時、今度松本は親戚の娘と結婚するとか、其爲でもあるか國元から母が出京した、と話した、之を聞いた時のお鈴の驚き、マア如何樣であッたらふ、お鈴は心を痛めながら授業を終り家へ歸ッて來ると家にも一ッ驚きの種、其は三郎の母が來て居て而して其話に、今度姪のお花を三郎の嫁にする積りで出京したとの事前のは他人の噂、是は現在の母の話、お鈴は驚かずに居られやうか、

扨剛はお鈴の心を騷せた后、直其足で三郎の家を訪問て種々の話の末、お鈴は敎師の某と可笑な間柄にあッた樣だと、眉を顰めての讒間、然し才士丈に《若い娘を獨身で置くのは元來親の不注意で》、と讒間と見せぬ爲めの歎息詞、是が誠しやかな瞞着手段、嗚呼是を聞ひて三郎の心は如何樣感情を起したであらう、

剛は元より眞底お鈴を愛して居るのではない、其故二人の中をさくのにも、少しも心を碎きはしない、唯一寸指の先で突いた位の事、然し無慈悲な惡魔が不義の應援を剛に與へて、三郎の母からお鈴の耳へお花を嫁にするとつたへさせた、とはいふもの丶他人が何と言はふとも、親が何と言はふと、三郎とお花の間さへ深く約束した中ならば、何の事も無ッたらうが、二人は心で思ッて居たのみ、また打出して其と言ッた事はない、其故一寸人から水を注れると、直に馬猿が動き出す、三郎はお鈴の爲人を考へて、マサカ其樣事はと辨護して居るもの丶、其癖又一方では浮薄者と罵ッて居る、お鈴はお鈴で三郎と約束

した譯でもなければ、三郎が誰を妻にせうと恨む道理はないと、善く合點しては居るもの、其で居て餘りなと怨んで居る、嗚呼二人の心が斯う曲ッて居ては、迚も滑かにはまとまらない、二人は疑惑と怨恨の眼鏡を懸けて見て居るから、ソラ其目附、其擧動如何しても平穏でない、モウ斯なッては次第に疎遠になる計り、其癖愚痴な事、互に心を苦しめて居る、殊にお鈴は女の癖として、くよ〳〵胸を痛める、食事も減る、身も痩る二重の帶も三重となる、モウ此上はほんの一擊、一寸一擊を加へたなら、恐らく起ては居られまい、必ず其儘倒れるであらう、有ッた一擊が、其は剛が來ての話に《昨日鶯谷の温泉の二階で松本が妻と一所に來て居たが、中々品の好妻君で》となんでもない樣に話した、が一寸した此話もお鈴の爲には酷い話、扨は愈あの人がと思ふと可哀さうに、お鈴の心は汚れた、嫉妬の焰が心の底の方へ燃上ッて來た、お鈴は悲しさ口惜しさ、終に病の床へ着いた、

スルト剛は此頃自分では一ッの政治雜誌を發兌して、其擴張に盡力際中故、中々多忙の身ではあるが、時々お鈴の元を尋ねて、色々と深切に心を盡して慰める、剛は諸君も御存の如く元々お鈴の尊敬する人で、其尊敬する人が多忙の身を顧みず、優しくも自分の身を慰めてくれる、お鈴は心に嬉しくあるまいか、嬉しいに違ひない、然も尊敬の念は、敬愛の念に遷り易いもの、お鈴の心鏡に寫ッて居る三郎の影其が變らずに居やうか、次第〳〵に薄くなると、其度に剛の影があッ〳〵と寫ッて來る、モウお鈴の病氣も直ッた是は全く剛のお影で別行其中に又一ッの話から愈お鈴が三郎を見かぎる事となッた、或る日

の事例の剛が來て言ふには、此頃知人某が熱海の湯治から歸ての話に、隣室に松本の母と妻が來て居たが、ある夜妻が母への寢物語りに、兎ても旦那があゝいふお氣では、末の見とめもない事故、國へ歸りたいと言ッて居たのを母が種々となだめて、居た、と話したが、松本も存外情のない男と見える、シテ見ると、才子多情とも限らないが、尤も情の字の意味が違ふかハア、、、と獨り合點して笑ッた』嗚呼女子と小人はやしなひ難いと言ッた古人の言葉、元より盡く眞理とも言はれぬが、然し幾分の眞理は籠つて居る、小人の事は姑く言はず、女子は理想に乏しくして感情に强ひ者故、事理の判斷に至ると、身勝手、手前勝手の事が往々あるお鈴も左樣だ、剛の此話を聞くと、剛の愛に驅り立てられて、成程三郎は浮薄な人だと思ひ出した、曾て自分を救ッてくれた其信切の三郎も今の三郎も同性質の人だなどゝいふ事には少しも考へを及ぼさない嗚呼是でモウお鈴は剛の掌中の人、剛がお鈴を虜にするのはモウ何でもない事だ、左樣、剛の炯眼は少しも其機を失はない、或時二人差向の時、剛はお鈴の心を引いて見て、言はず語らず摸稜の間に恐ろしい無禮な振舞をしたが人情は變なもので、お鈴は此時驚きもし恐れもしたが、又何となく嬉くもあッて、少し躊躇樣子であッた、然し其でも終に情に打勝ッたと見え、容を正して其非禮を責め、其から公然人を以て結婚を言ひ込みたまひ、『然らば其内に』といふ事で其日は別れたといふ、

其後お鈴は剛の便りを待ッて居ると、待つ方かられ便はなく却ッて思はぬ三郎の元から結婚の儀を申入

れた、
是より先き三郎は前に述べた樣な原因からお鈴とは殆んど絶交の如く、極めて疎遠に日を送ッて居たが、其で居てお鈴を愛するの念は少しも減じはしなかッたので、其故お花を嫁にしたといふのは無論剛の企から出たので、尤も母からは色々と勸めたがお花の人柄が知れぬ故、マア〳〵後の事と拒んで居たので然るに此頃になッてから、お鈴は教員の某を秘密の關係があッたといふのハ、全く空事だと知れた故、大に自分の過を悔ひ、又も斯る事のないうちにと思ひ、人を以て結婚を言ひ入れたので、然しモゥ遲い、お鈴の心は他人の所有、三郎の申入は空しく斷られて仕舞ッた、
お鈴は三郎に斷はッてから、今日は剛から便りがあるか、明日は何とか言ッてくるかと、頸を延はして待ッて居たが、何の便がある者で、剛は元よりお鈴を妻にする念ハ毛頭ないので、唯一時の戲其を相手が眞に受けて、公然結婚をと言ひ出した故、掛合ッては厄介者と冷飯草履を捨てる樣に、忽ちふり捨て顧みもせず、稀に此方から訪問ねても留守を使つて逢もしない、不思議に思ふ心から、お鈴は剛に氣を着けて、世間の評を聞いて見ると、昔に變はる其行狀、種々な事が耳へ入る、或者は剛は恐ろしい陰謀家で他人の弱點を直に見拔き、其弱點から人を誘惑、其人を玉に使ッて、奸計を行ふと言ふものあれば、又或者は剛は實に當世の才士で中々大きな山をやるが、甘く其山を當てるといふ者もあり、あるひは又剛は實に不道德の男だ、ある豪商の娘と此頃只ならぬ樣子だといふ者もある、總て是等の評は一ッとし

て剛の不道德を語らぬものはない、其中に此評が事實であつたか、間もなく剛と娘との婚姻、婚姻をしたかと思ふと、直又二人は父上母樣と言はれる身になッた、

是を見るとお鈴の胸には嫉妬、怨恨、憤滿、憂愁、一時に破裂して、ミッチャに其心を擾き亂した、が物の破裂といふ者は其當座にぞ猛裂であるが、暫くすると其勢ひも弱るもので、お鈴も四五日經ッてから大に落付て來た、扨落付いて來ると種々と公平なる考へも浮んで來る、三郎の人柄も分ッて來る、剛の人柄も分ッて來る其ではまだ妻を持ちなさらないのなら、山口の言ッたのが計かしらん若しさうなら此間辭絶てすまなかッた斯思ふと恩義、良心、後悔、愛情、是等のものが非常に勢力を以て一時に胸を突いて起ッて來る、モウ一時も心を落付ては居られない、其とはなしに母を松本へやッたなら、其樣子も知れようかと、お鈴は今日久しく松本へ無沙汰をしたから何卒往ッて來てと母を勸めて往ッてもらッた《チヤ、お歸んなさい、居ましたか三郎さんは》

お鈴はせき込んで問ひかけた、母は松本から歸ッた計り、まだ坐りもしない《三郎さんは居なさらなかッたが、母樣が一昨日熱海から歸ッたッて彼地の話などが種々出たものだから、ツイ其で遲くなりました、ヤレヤレ足勞れた》と、

火鉢の傍へドッカと坐りて、先ヅ茶を飮みかければ、お鈴は三郎とお花の樣子を何より先へ聞出さうと、徐々鑿を入れ、次第〳〵に其問を目的の點へ向けて往く《お花さんはまだ小兒のも出來ませんか》《ナニ、

小兒？小兒所か、お前、お花さんはまだお嫁になッたのではないとさ、可哀さうに、彼子も三郎さんのお嫁になる積りで態々お國から出て來たのに、三郎樣の氣には入らないのでもあるか、母上が種々と勸めて見ても、彼子の氣心も知れないから、今少し樣子を見てからと言ッて、お嫁にしやうと言はないとさ、其だものだから彼子も種々心配して湯治中も寧國元へ歸りたいと言ッたのを、母上がマア〳〵となだめて置いたのだとさ》

是を聞いてお鈴の疑團忽ち氷解、扨は皆僞りでと思ふと、胸を穿ッて來る良心の責、お鈴は其處に居たたまらず、イキナリ自分の室へ飛込むと疊に喰付いて泣伏した《此間斷はッて濟なかッた、惡るかッた、山口め、彼奴のお蔭だ、僞君子、彼奴が彼樣事を……》

斯思ふと剛の影がありく〳〵と目前に現はれて來る《手前のお影だ、人を玩弄にして……玩弄に、玩弄に、人間……玩弄に……畜生……如何したらマア定めし怒ッて、恩知らず、義理知らずと》

モウお鈴の目には三郎の影が見えて居る《私がわるい、皆私がわるい、義理に反むいて、皆私の罪だ、ヱ、モウ此心は……ヱ、汚らわしい》

斯なると人といふものは吾と吾心を卑しみ、而して其心をかきむしり、摑み出し、叩き付けて、他の潔白の心と替たくなるもの、お鈴の心も今恰ど其樣な塲合で《モウ眞成に山口め……如何したら宜からう、斯して此儘では、迚も斯してハ、寧驅けて往ッて……皆打明けて……迚も斯しては》

せき上げて來る涙を袖で拭いてイキナリ部屋を飛出す、母ハ吃驚呼止めて何處へ往くと聞く、斯いふ時には兎角怒を遷すもの、聞かれたのがお鈴の癪にさわッたらしい、睨む樣に母を見詰めながら、投る樣な調子で《松本へ、マア往くなら往くでも宜いが、マアお待ち、お前、如何かおしなのかい、往ッても三郎さんは居なさりやアしないよ、明日は京都の方へ旅立するので、忙しいさうだから》《居ても居なくッても……イヽエ、宜ございますよ、搆やアしない》《ダカお前、大層貌色が》

と言ッた頃はお鈴はモウ門の外。お鈴には胸に思ふ事言ひたい事が有や無やと山の如く有る樣に思はれる、而して其有や無やを三郎の前で摑み出して、打まけて、奇麗さッぱりに話して、假ひ元通りになられぬまでも、自分の後悔と自分の今の心の中を是非知らせたい、今知らせなければ時がない、二人の間の永く絶える、絶えると思ッて居る、扨斯思へば氣が氣ではない、一層身も世もあらぬ思ひ、車で宙を飛せて松本の家へ往ッて見れば、果して母の言ッた通り、三郎ハ留主との事、爲方なき儘其夜は萎々と我家へ歸ッた、母はお鈴の貌を見ると、さも心配さうに《お前、如何しなすッたのだい》《如何も爲やア去ません》

と口には立派に言ッて居るが目元は慥にうるんで居る《其でもお前、先きは大層周章て出てお出だし、今又塞いで歸ッてお出だもの、母さんだッて心配だらうではないか、何か心配な事でも出來たのかい、何も私に秘さなくとも宜ではないか、エ、お言ひな、エ、》

陰しはせぬが是計りはお話し申す譯にもならず、勿體ない苦勞をかけてと心で詫て、宜程に言ひ拵らえて逃込む自分の室の內、明日になッたら早朝に往ッて、萬事の樣子を打明けて詫をしやうと思ッたがイヤ〳〵迚も明日は多忙から話をしては居られまい、寧の事に手紙を書いて、お渡し申すが上分別と、筆に言はせる胸の中、書き終ッた頃はモウ東雲、手早く食事を濟まして、鬢を撫上げて、洋服を着て、花帽子を被ぶッて、臥て居る母に是から松本を見送ッて、直學校へ廻はるからと言葉を殘して表へ出で、賴付の車夫を賴んで車へ乘ッて、松本へ往ッた、取次の書生に聞けば一番滊車の事なればモウ出立したとの事、扨は遲れたかと周章ふためき、物をも言はず其處を飛出し、待たせて置いた車へ飛乘り、新橋の停車場へ走らせた、一分違へば山川萬里、當分お目にもかゝられまい、是非滊車の出立前にと心は急ぐ氣はあせる、早い車も遲く見える、心も心でない、吾も吾でない、車が停車場へ着いた時第一に目に入るのは時計、見れば、嬉しや發車まではまだ十二分、ホッといふ息を吐いて急いで上等室へ入ッた、向ふの椅子に腰を掛けて三郎は一人の西洋人と若い紳士とを相手にしてさも愉快さうに笑ひながら頻りに何か話して居た、其中に何かおかしな事があつたと見え三人反り返ッて笑ひ出したが、一人三郎は俄に眉を顰め出した、是は今顏を上げた時お鈴と顏を見合せたからで、お鈴は一生懸命といふ顏で目に一杯淚を溜め、三郎の顏を見詰ながら慇懃に目禮をした、三郎も同じく目禮をしたは、直又西洋人の方を向いて頻りに話を始め掛け、其から多忙さうに手帳を取出し、鉛筆で一心に何を書くか書いて居る、而

して時々二人の相手に其を示して話して居たが其樣子、何か大切の用事らしい、お鈴は一圖意の心から、是非遇ッて而して而してと思ッて居たが、此に至ッて失望した、見送りの人か同行の者か、三郎の周圍を取捲いて居る、可哀さうに、心は矢竹に思ふが正可に人の見る前で、手紙を渡す事も出來ず、アノ話が切れたなら都合を見て唯一言、一言言ッて渡さうと此方に扣へて待ッて居る、が憎らしい其話、生憎と途切れもせず、其から其と續く樣子、其間には發車の時刻は迫るであらう、逼るであらうと思へば、お鈴は居ても立ても居られない、立掛ッては又坐り坐ッては又立掛る……鳴呼無殘、滊笛一聲停車場內に鳴響いた、轟く人の步く音、物と物との打突かるゝ音、人の叫ぶ聲も激しくなる、其處此處に居た人達は皆其々に此室を出で往く、向ふの三人も話を止める、ドラ然らばと立上る、お鈴は周章て《松本さん》

振向いた其顏、額に八の字が寄つて居る、口元に冷笑を含み、突貫樣な冷淡な調子で《足下も何處かへお出なさるか》

鳴呼此一言、お鈴は昨夜から今が今まで三郎に遇ッたなら唯一言、一言言ッて手紙を渡さうと思ひに思ひ詰て居たのに、今其人に遇ッて、其人の名を呼ぶか呼ばぬに聞すら氷の如き一言、お鈴ハ胸に五寸釘ハット思ふとドッカと長椅子へ腰を落し、物をも言ハずさし俯向く、淚ハモウ淚道を責めて込上て來る、が人前もある事故、正可に泣かれもしない、竊にハンケチで顏を拭き、暫らくハ其儘で居たが、稍なッ

て儼然顔を上げ四方を見廻はして蹴る樣に立上り、急いでませがきの方へ馳て往ッた、が遲かッた、汽車は煙を吐いて轟然に動き出した而して見る〳〵彼方の家の蔭に蔽れて、早見えなくなッて仕舞ッて、暫時の間お鈴は天に立昇る煙を眺めて悄然と立て居たが、思ひ直したものと見え突然踵を旋らすと直に學校の方へ向ッて往ッた、

お鈴は定めて歎くであらうと思ひの外、實に案外とは此事、少しも歎かない、平氣、が善く視ると些し樣子が變はッて居る、仲間の教師に向ッては調子はづれの聲を出だして面白さうに話しをしたり、左のみ可笑しくもないことを調子はづれの聲を出だして左も可笑しさうに笑ッたり何處と無く輕はづみで、何處となく活潑で、其顔色を見ても、其目の中を見ても、胸に橫はる者は愉快か失望か殆んど分り兼ねる程で、平常は喋々しく世辭を言ッた事のないお鈴が今日に限ッて最も如才のない、最も世に馴れた彼のパリスの交際社會の婦人も及ぶまいと思ふ程、調子よく世辭を述べたてる、時々一二分位何か考へる樣な時もあつたが其は人の目には止まらない、直又元の活潑な舉動と愉快さうな顔をして居る、其から學校の授業も終り、歸宅してからも其通りであッた、然し人も話して居る間こそ誠に活潑であッたものゝ、其夜床に這入ッて一人になるや否や、種々な事が胸へ浮んで來てモウ押へる力もない、柔弱いお鈴の胸の中で、悲哀、怨恨、憤懣、後悔、幾多の感情が戰を始める、人間も斯なると氣がひがむお鈴は世界の人が寄集つてお鈴一人を意地目附て箝制て苦惱を嘗めさせるといふ樣な氣がして、此世が汚土と

見え火宅と見え、何の望みもなくなッて、寧死にたいとまで思ひ詰て、身を震はせて息もつまる計りしやくり上げて小兒の泣く樣に泣いた、

其中に鷄鳴曉を告げて夜は明離れた、お鈴は神經が過敏になり、體も恐しく疲れた故病氣と言ッて學校を休み其日一日は臥て居たが、夜に入ッてから雨がしよぼ〳〵と降出して、世間も森として來た、何處の寺で鳴すやら夕勤の觀經の鉦の音が簷の點滴に和して蕭然に聞える、斯世間のしづまるに附て神經の狂は鎭まッたと見え、お鈴は石の如く氷の如く身動きもせず臥て居る、其代り胸には積る無量の憂愁、顏色も宛然灰の樣だ、

お鈴はモウ學校へは出ず、四五日は家にのみ垂込めて、鬱々と日を送ッて居ると、ある日の夕方江田政子といふ朋友が來て、此人は玉振舘の女敎師で、熱心な耶蘇敎信者、お鈴が悄然と床の上へ起き上り重々頭を上げて力無さゝうに會釋をするのを政子は女氣の優しさ色々と其氣を慰め、其から眞心を込めて《わるい事を申しませんから、貴君も神を御信仰なさい、心も體も何も蚊も皆神に捧げて唯一心に御信仰なさい、神は我々哀な者此汚れた體も汚れた心も皆救ッて下さいます、神の大御心は……》と是から耶蘇敎の有難い節々を濃々と說いた其深切、お鈴は耳を傾けて居た、

お鈴は政子にも勸められ、一ッには母も心配するし、又一ッには三郎とて何時を限りと旅衣果しなく歸らぬ譯でもなければ其内には歸るであらう、歸ッたなら又逢はれやう、逢ッたなら心も語れやうと氣丈

にも思ひ返して學校へは相變らず勤めて居た斯る間に何時か一月餘も經たが、三郎はまだ歸らぬと見え何の便りも聞えない、然るにある夜お鈴が日課の下讀をして居ると、隔の襖を開けて、《姉さん松本から》と弟が手紙を持ッて來た把る手遲しと上封を見れば女の手跡是は三郎の母から來たので、急ぎ封目を切ッて讀んで見れば二三日前三郎事も漸く旅路より歸ッて來たが、何時ぞやお話申した婚姻の事も急に話のまとまッて態と內祝を明後日するから母上同道にてお出を願ふといふ慇懃の書面、お鈴は讀終ると顏色死人の樣になッた、

是から二月程過ての事、小石川區某町の耶蘇新敎の敎會へ年頃二十歲計の婦人が何時も日曜といふと來始めた、此人は何時も神前に跪ついて一心に神を念じて居る、容貌を見るに何となく物寂しく、秋の景色を描いて居るが、如何にも柔和さうに見える、名は言はずと知れて居る本篇の女主公《をはり》

◉姥櫻

思案外史作

(其一)　霞かくれに見る心地

《芳川君、どうもまた此上野の櫻は格別だネ、墨堤の櫻樹も決して惡くはないが、僕抔は上野の方が土地が幽遠だけ、俗を離れてい〻やうに思ふよ。》《そりやア平田氏の云はる〻通り、此東臺は隅陀と自から其趣味を異にして、樹の古いのは中々隅田の及ぶ所に非ずサ》

上野公園――摺鉢山の下あたりをそゞろ歩行きする兩人の紳士。芳川と名のるは年の頃廿三四にもあらう？キリツト通ッた鼻筋、パッチリと開いた明眸、色もなか〳〵白く、何處となくリキンだ處に愛嬌がある當代の美男子、それに着服は、黑綾のモーニングに堅縞羅紗のヅボンを穿いて、帽子は云ふに及ばず靴から手袋まで――所謂頭のテッペンから爪先まで凝りづくめでミヂンケ厭味のない扮裝は大に此人の品位を高尙にします。一人の平田と云ふは芳川から見ると四五歳の兄で、男振は二三等下つて居ますが、決して威嚴を落す容貌ではありません、スコッチの大ガラの背廣を着て、口のあたりに一寸シガアをくわへて居ました。餘程親密な間柄とは兩人の話振でも分ります。（時に君モウ恰度一年になるが。去年の今頃此公園で行つたピクニックは愉快だッたネ）（サウ〳〵アノ時は實に愉快だッた未だに覺えて居るが、君ッてばソラ例の君江孃と鬼事をして、君が櫻の根ッ子に躓いて出來たてのヅボンを大なしにして流涕した事があッたッけ。）（アハゝゝ、君はよく記臆して居るネ。）（記臆して居るッてば、そらあの……エゝ何んとか云ッたッけそうあの……さう〳〵柳瀨令孃ネ、とう〳〵例のと婚儀を擧行したのを君知ッて居るかい。）

云はれて芳川とやら痛く驚いた風で暫しは返答もない樣子。（……さうかい　そりやア……僕はチッとも知らなかッた、が、さうしてその例のとは誰の事だい？。）（エゝッ君にも似合ないゝ、それが察しられない樣では、君も推理法の試驗には一番に落第する方だゼ。）（アハゝゝゝ推理法がいゝさうして　ッ

ノ婚禮した相手と云ふのは誰れだい？。』《相手かい、ソノ相手といふのは、ソラ君も知ッて居る、エ、ぢれッたい、ソラ君も知ッて居る、アノ……。』《エ、　君こそ自分でぢれてるくせに。》平田といへる方暫く考へて居たが、漸く思ひ出したのやら、頻に首肯て、《さう〳〵ソラ君も知ッて居る林サ。》《ウム》。

云ッたぎり暫しは呆れて居ました、が頻に嗟歎を語氣に現はし、《さうかい、柳瀬と林とハ兼て變な評判もあッたが……旣に當人同志の意志ハ成り立ッて居たが、さうかい　とう〳〵契約を實行したと見へる子。》《どうもこんな情事篇にまで、法律上の言語を應用するのハチト恐れるよ。》

芳川ハ何故か笑ひもせず、少しふさいだ樣子で太い吐息を洩らし、《併し柳瀬ハ才智といひ標緻といひ學校でも評判な婦人だが……それにあんな林なんぞを……ア、どうしても戀は思案の外と見へる子。》《君ハさう頻に慷慨するが、今更云ッても始まらない談話サ。》《君はてんから訴訟權を放棄するが、僕の立案ではどうしても柳瀬を林の妻にするのは惜しいと信ずるよ。》《ヘン　君ハ柳瀬から賄賂でも貰やアしないか大層柳瀬の方を持つぢやアないか。》《なに別段方を持つといふ譯ではないが全く柳瀬の才能を羨望するの餘り言こゝに及ぶといふ譯サ。嗚呼何時も云ふ事だが美人はどうしても才子には遇へないと見へる。》《ハヽヽ、駿馬痴漢を載せて走ると對したい樣だ　アハヽヽヽ。》

云ひながら平田は鳥渡上を向き、《ア、　くだらない　とんだ隣家の疝氣を頭痛に病んで思はず時を移

した　もう暮れるせ　早く此處の櫻狩を切り上げて珍らしく精養軒で夕飯でもやらうぢやアないか。』『それがよからう。』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

此處ハ上野の精養軒の大廣間、其食堂のテーブルの隅に椅子を〆めたのは以前の兩紳士です。兩人とも肉指と小刀とを兩手に持ッて、皿の中の肉を攻めながら、『平田君、何時來ても此處は不忍の池を見晴す故か、景色は頗る絶佳だチ。』『眞然矣、どうも又忍ばずの忍ぶに餘る此風情といひたいチ……。』『アハヽヽ君も何時の間にか、文學者の口調を暗んトたチ……。』『チヨッ　失敬ナ、僕の和文學に長じて居るのを君はまだ知らなかッたのかい?。』『アハヽヽヽ向きになッて怒る內がまだ俗物の範圍を脱せぬテ。』『こりやア大失策だッとんだシッペ返しを喰ッたものだ。』『此上喰ッたら腹が裂るだらう。』『アハヽヽヽこりやア　いゝ〳〵。』

何か笑ひながら幾皿か前へ出された料理も喰べ終ッて、今やボーイが運んで來たカッフエーを飲まうとする處へ、靴の音高く此食堂へ這入ッて來たのは男女の二人連、男は洋服で女の方は年の頃十八九、少し肥り過ぎたかと思はれるが、これが當世に向く顏立と云はれたら一言もありません、お召の一寸小がらなのを着て上に黑チリの羽織を引ッ掛けて居ますから、後姿だけでは帶や下着杯は詳く分りませんでした。何かサモ睦ましさうに話して居ましたが、食卓が大きいから此方の兩人には何を話すのやらさッ

ぱり分りません。其内に兩人はチヨイと其婦人を見ると═噂をすれば影とやら═今も今とて話した……柳瀨孃。以前に替る奥樣風。兩人も暫し呆れて茫然。柳瀨孃も何んだか═後ろ見られる樣═極りわるさうに下を向きました。平田は芳川に囁いて、《オイ　柳瀨だぜ、アノ奥樣氣取で濟ました横顔を見てくれ。》

芳川は右の手に持ッて居たカッフエーの茶碗を下へ置いて《エ、ッ胸が惡くなッた。折角喰べた馳走も何んにもならない、サア、カッフエーなんどはどうでもいゝ平田、仕度をしてモウ歸るとしやう……》

(其二)　戀！　募るほどいぢらしい

《オヤッ》

音聲の調子が深く沈んで居ましたから、ヨシ脇に人が据ッて居たにしろ聞こえません程、又假令脇の人に聞えたにしろ、云ッた當人には聞こえないと思ッた位、妙に澁ッて居る不透明な聲音でした。《ハ、ア……》

二分間も吐息を續けた頃、發したのは僅かに此語でした。云ッて仕舞ッて又候何か頻りに考へて居ます、ハテ？《ア、　幾度……幾遍見ても柳瀨は美形だ、どう思ひ直してもお吟さん（急に微笑を顏に現はしながら）……吟子（口の內で──チヨッそんなに丁寧に云ふ譯もないッ──夫も漸々聞こえた位で）何時見ても綺麗だ……幾度云ッても同ト事だが……ア、……（深く息を洩しながら）柳瀨君こそいゝ月

日の下に生れたと云ふものだ……あんな美麗な……才藻のある……技藝のある……美術心に富んだ……かゝる吟子令嬢をして我が爲に薪掃の勞を取らしむるとは實に……チエッ　クソ！　雄三郎こそ……（恐ろしいもの！　目附ばかりか　人の名まで呼棄になッて仕舞ました）ア、……どうしても（一層語氣に力を入れ思はず聲を張り上げ）可惜ダイヤモンドを泥中に埋める樣なものダッ』

丸で狂氣を仕給ふ爲體。そも如何なればゞ？　語ッて見ます聞ひて下さい。前回に述べて置いた通り彼の紳士……學識ある當代の紳士芳川春雄ハ柳瀨が婚禮の時に未練を預けて置いたかの樣に痛く――寧ろ呆れる程未だに慕ッて居ます。婚禮もない以前――まだ救濟の策を講ずる事の出來る內からよりは、却ッて最早隣家の櫻――垣根越に見る花の姿に切ない思を焦がす樣になりました。實に今更の樣――戀程世の中に不思議なものはありますまい。不成戀を成る樣に……出來る昔を今出來ぬ樣にわが身か我身で改めて仕舞うとは、實に情けなの極です。外史はさう思ッて居ます、梅も野路にあッてこそ艶けく見へるであらう、艶けく見えるなら手折ッてもいゝです、家土產に持ッて行ッてもいゝです、が、既に床の上、遠州流に枝を撓られて仕舞ッた跡は、其花の色も俄に其艶けさを失ひます、又假令殘んの色香があればとて、枝態が面白いにしろそれを無下に手折るのは仇なる戀です、不遂戀です。仇てふ戀、遂げぬてふ戀に其身を窶すのは未だ戀の神髓を得ないんでせう？　戀といふはそんなものではないと眞面目で叱る外史の方が却ッて戀不知かも知れません、イエ夫に違ひないです。こんな知れ切ッた議論（？）をするのも

全く當編の主人公芳川氏の爲です。芳川はゆくりなく柳瀬に精養軒で遇ッたそれからは家へ歸ッても、どう云ふものか黒チリ姿＝ニヤリと笑ッてツシテすましたアノ、ソノ顔が目先を離れません、我れから一人の人形を造ッて、夫に髪を丸髷に品よく結はせ、黒縮緬の羽織を着せて、シカモ縞銘仙の着物を着せて、ソシテそれを非常に可愛がッて、サモ嬉れしさうに眺めて＝心で眺めて居るとはテモ！。《アヽ……あゝやッて午過まで二時も打たない内から湯へ行く處を見ても、ほんとに癪の虫に障る――羽織を女中に持せて……いゝ御身分樣だッ、夫にアノ艶々しさ　薄化粧！　地が白いから夫れ程白粉が白く見へないが並の人の厚化粧よりもうつ……アノ唇、口紅を附けて居るのかしら？　アノ目附、何氣なく此方を向て睨んだ目附、エヽッ　震い附きたい樣ダッ》

茲に於て芳川は暫し失神の体！《オヤ　どう〳〵行過ぎて仕舞ッた、　オヤ見えなく……ア、又アノ後姿は格別だ、　主人がいゝと下婢までヒッタッテ見える、　どうして〳〵なか〳〵アノ後附では踏めるぞ、　強將の下に弱卒なしか　オヤ　エヽッ　モッ……トウ〳〵見えなくなッた、　全體何處に居るのかしら？　何れ近處に居ると見える　彼奴何處に引移したか。》

（其三）　撮し出す心の寫眞

《ア、口惜しいッてば　こんな口惜しい事はないよ、こんな事だとは夢さら思はなかつたッ　エーッ　かうやッて此處へ來てから今日こそ面白い樂しい日だと思ッた日は一日もありやァしないよほんとに……

エヽッ口惜しい　どう考へて見ても口惜しいッ》

語るにも其相手ハ無し、叱るにも其當人は無い、が相手の無いのが却ッて其當人を勸めるかの樣に、愚痴がましくクド〳〵云ッて居ます一個の婦人——年若な婦人、髮を小判形の束髮に品よく結ッて、ゴム製寶石入の西洋櫛を前に挿して、簪ハ態と用ひません。服裝は年に合せて餘程フケてヂミに造ッて居ますが、さうかと云ッて一家の主宰をする純然たる奥樣風はどうも備へて居ない樣です。惡くすると＝アラ！　よくッてよと＝教場で先生の横顔を見て舌ッたるく云ッた風が未だに拔け切ないと見えます。

何か餘程口惜しいぢれッたい事でもあると見へて、可惜愛らしの眉を逆立てソシテ今自分の前に取り廣げたアルバム中の寫眞を目ばたきもせずに見詰めて居ました、《アヽ　こんな時分は妾も餘程面白かッたんだね、ソラ　アノ松田さんとさう〳〵梅本さんの處へ遊びに行つて、三人で新シ橋の丸木で撮した寫眞だよ。アノ時は……さう〳〵みんな三人ともお揃ひで髮を島田に結ッてサ、學校のお方が其時分は殘らず束髮に結ッて居るから一トつみなさんを驚かしてやらうと三人で申合せて揃ひも揃ッて島田に結ッたのサ、島田も島田大島田、それに金糸の丈長をフサ〳〵と掛けてからに……學校のお方ッてば妾等の風を見て＝チヤ　梅本さんも松田さんも柳瀨さんもお揃ひで復古主義ねェ＝と一人がさうおッしやッたら岸邊さんてば＝チヤ花嫁御が三人揃ッてよ＝と大笑をした事があッたよ……》

少し笑を含んで又次の寫眞を見て居ました。《サア　此寫眞だよ一番氣にくわないのは……梅本さんて

ばあんなに平田さんの事を悪く云ていらッしやッたくせにかうやッてとう〳〵御婚禮までなさるし、其上御夫婦お揃で寫眞をお撮しになッてわざ〳〵贈ッておよこしになる處を見ると御夫婦中も吃度いゝんだよ、いゝに違ひないよ……（少し考へ）今頃はお勇さんはどうしていらッしやるだらう——　吃度身裝にもなんにも構はすに例の氣象でテキパキ臺所から何から何まで一人で仕切ッて働いてゐらッしやるだらう……吃度鍋炭なんぞを手足に附けてからに……眞逆……）

云ひながら又他の寫眞を見て、（アヽ　これ〳〵原さんへお方附になッた石川のお芳さんは梅本のお勇さんと違ッて、大のおめかしの方だから毎日〳〵朝から晩まで鏡臺と睨めッくらばかりして居らッしやるに違ひないよ、もう花いかだや小町水なんぞでは使ひばねがしないとおッしやッて今じやア吃度翁やのポマドンヌールやハンドコロンをベタ塗りに顔中——處か、身體まで塗ッてゐらッしやるに違ひない……此寫眞なんぞも餘程前にお撮しなすッたンだが、どうしてなか〳〵氣取ッて本包を小脇にかひ込んでツント濟まして立ッてゐらッしやる目附と云ッたら……ほんとに厭やアになッて仕舞うよ……併し御亭主も評判のニヤケ男だと云ふから却ッていゝかも知れないよ氣が合ッて……家内中サウ目かしたらお仕舞にハ化粧料で身代をつぶすかも知れやアしない……）

考へて少し笑ッて居ましたが又急にふさぎ出し、（併しみんなかうやッてお友達がお方附になッた處を見ると皆なさん御夫婦中もいゝし御家もいゝし……夫を聞き是を見るに附け妾程世に因果なものはあり

やアしない……旦那樣ッてば此方へいらッしッた當座こそ少しは優さしくして下すッた事もあッたが夫れも長くハ續かず一月か二月經つか經たぬ中アノ放蕩、夫れからと云ふものは一週間眞面目に續けてお家にお泊りなすッた事がありやアしない……夫れにお歸りになるッても……十二時過ぎグデン／＼にお醉ひになッてヒヨロ／＼して歸ッていらッしやッて深更深夜もお搆ひなさらずに、如何に御酒の上とは云へ＝奉公人の手前もあッたもの、夫に第一年寄られたお母樣の手前……ほんとに妾は面目がなくッて冷汗を搔いた事は幾度あるか知れやアしない、夫もあアやッて御夫婦になッたのだから御意見もしないではないが、何時も空吹く風……却ッて夫れがお氣に障るのやら尙々お家へお寄り附きなさらない……アヽ此れを思ふと……考へれば考る程、モウ／＼憂世はいやになッて仕舞ッたよいッそ死んだ方がいゝ……》

さりとは恐ろしの恨言！俄に目に附く一個の寫眞、《アヽこんな事ならイッソ芳川さんと御夫婦になればよかッた、才能と云ひ氣立と云ひ今の旦那樣から見ると……夫に氣心も知ッて居るし、アヽ芳川さんと芳川さんと……御夫婦になればよかッた、芳川さんも初手は妾とエンゲーヂしやうか抔とおッしやッた事もあッたよ……》

此時後方より奧樣が耳元を貫くカンバシッタ聲《奧樣ッ、何にをそんなに考へ込んでいらッしやいますの！、芳川さん……芳川さんがどうかなさいましたか》

此方は驚いた風で眉をひそめ《エヽ、清がやかましい、突然に……》
下女は笑傾け《ダッテ奥樣……貴女が何がお嬉しいのやらニコニコ笑ッてゐらッしやいますから……》
《オヤ、清とした事が、何時私が笑ひました？》《甘くおッしやッていらッしやるよ……何か……誰方かの御寫眞を御覽じてニコ〳〵ものでいらッしやるくせに……》《エヽッ、失禮な！何時妾がそんな事をしましたッ。》
急に睨め附けられて下女は、《ヘィ御免あそばせ、ツィ粗忽を申しまして……さうして奥樣、貴女大變ふさいでいらッしやいますネ、さうお思ひなさいますのも決して御無理ではございません、ほんとに此頃の殿樣の御所業は餘程……妾が考へましても。》《アラ清がそんな顏附をしてからに……妾はほんとにモウ浮世がシミ〴〵いやになッた……清！妾は早くモウ死んで仕舞たいよ……》《アヽレ！奥樣が何をおッしやるかと思ッたら……マアそれよりかアお髮があまり亂れて居りますから撫附けて上げませう、サア納戸へいらッしやいまし、清が今撫附のお湯を持ッて參りますから》
誰が爲に髮を直す？誰が爲に化粧を擬す？思へば……やがて力なく鏡臺の前に据る。
鏡面に映る我姿？やつれたも尤もか、思へば……忠實な仲働のお清は氣の毒顏を押し隱して態と笑を含みながら、艶けき綠の髮を梳る、暫しは宿る鏡面に月二つ影さへうッとりとして居る折柄、小女が此部屋の入口へ手を支へ《アノウ奥樣只今芳川樣がいらつしやいまして殿樣が御留守だと申上げました

ら其れなら鳥渡奥様にでもと……》

お清は手の櫛を鳥渡持ち替へ、《オヤ……評判をすれば影がさす……》奥樣吟子は暫し無言、お清はイツ〳〵顏、《何もそんなにお考へなさる事はありやアしません、サア早く芳川樣にお遇ひあそばせな、》《ダツテ何んだかお可笑いもの……》《オホヽヽヽ、奥様が……今年お幾つにおなりなさるとお思ひなさいます》

吟子は暫らく下を俯いて考へて居ましたが急に首を上げ小女の方を向ひて、《そんなら其御客樣を何時もの御客間にお通し申しておきな……只今すぐお目に掛るとさう申して……》

（其四）　昔は物を思はざりけり

八疊の應接間、下には燃え立つ様な眞紅の絨氈を敷き詰め、部屋の眞ン中にある一基の圓卓夫が美しい色糸の繡のある萌黄のテーブルクロースを着て居た圓卓の上には卷煙草の吸殻でも入れるのやら瀬戸物で造ッた鮑貝が載せてマッチまで傍に添ゑてあります。壁の三方には窓があッて一方に戸が附いて居ます窓掛は蒼色で此にも縫がしてあります、部屋の南北二隅には黒檀製の四半形の臺があッて其棚の上には目覺の附いた置時計やら大理石の立像やら其他種々の美術品が群をなして一番上の棚に小形の九谷焼の花生其中から白薔薇が得意顏に香を放ッて棚の柱には何處やらから到來と見えるクリスマスカードが懸ッて居て

May affection full and deep
O'er your life's fair verdure sweep;
Making music as it goes,
Bearing joy where' er it flows.

杯の愛らしい文句も夫に記してあります。此部屋の装飾萬端を全體から評すると和洋折衷とでも云いゝませう?花生の坐布團は妻君が御手製の毛糸細工誠に立勝ッて華麗に見へます。

此應接間にサッキから待ッて居る――圓卓と差向いで退窟がッて居る新來の客は彼の芳川春雄です。自分の前へ持ッて來てくれた茶もとうに飲み干して仕舞ひ、せう事なしに四邊を見廻しながら悠長に卷煙草を燻らす樣なものゝ胸の海は風も無いのに波だッて居ます。暫く經ッて開戸を音させて這入ッて來たのは柳瀨の夫人吟子です、此方は見るより椅子を離れて立ちながら目禮しました吟子も亦目禮したきり兩人とも暫らくは無言で同じく首筋を垂れて仕舞ました、男は始めて口を開き、《ヤ 誠に暫く 其後は、》

挨拶も妙にブツ〳〵途切れて居ます、吟子は下を向ひて只《ハイ》

云ッたばかり賓客――芳川に對して椅子にお掛けなさいとも又自分も其前の椅子を取らうともしませんで腰を少し曲げて佇立で居ました。其處へ行ッては男の方が先鞭を附けるものと見え(御免下さい、)

輕くから云ッて叉椅子に腰を掛けました。女も漸く氣が附いたか脇にあッた椅子を鳥渡自分の方へ寄せて夫に腰を打掛けました。男は尙も語を繼け（先達鳥渡お門前を通りましたら表札が出て居りましたから、オヤ何時お引移になッたか、御近所ではあるし其後上らう〳〵と思ッて居りますばかりで御承知の通り自用にかまけましてツイ御無沙汰を……）

誠ばッかり、お門前を通ッた。口は重寶なもの？　先達不圖此細君が下婢を連れこの湯歸にチラと艶々しい鬢のほつれ毛を認てから我れから迷ひ出た煩腦の街、夫れからと云ふものは此吟子の爲に思慮を焦す幾遍？風吹きすさむ朝、雨ソボ降る夕此吟子の事が念頭に浮ばないことはありません。どうかして一度逢ひたい、タッタ一度でいゝ、一度親しく逢ッて談して見たい、夫れはなんでもない事、夫雄三郎は自分が舊友ではあるし家も近所ではあるし……併し其處が妙なもの……慕ふ心ではなんだか變でどうもオメ〳〵と尋ねて行かれない、成程雄三郎は古くから知ッて居るが此一二年はシミ〳〵逢ッて話した事が無い、只宴會で時タマ顏を合すばかりで打過ぎた。（今日は雄三郎君は留守で、何に別段用もありませんが、あんまり御無沙汰を致しましたから　お詫かた〴〵鳥渡……）

此處で今迄時々上を向ひて愛らしい目眦でヂロリ〳〵芳川を見て居た吟子は始めて言葉の封を切りせした、（マア　ようこそ（嬌笑を洩らして）生憎の事で……雄三郎が居りませんので……どうも私方からとうに御機嫌伺に上りませんではならん處を……昨日もさう宿と申して居るンで厶いますよ、かうや

ッて御近所へ引移ッて參りましたから鳥渡なりと貴所方へ伺はんければならんと申して居りました處却ッて貴所の方から御運び下さいまして有がとう厶います、さアどうぞ御寛りなさッて其內には宿も歸ッて參りませう、》

流石は學校で交際學を修めた丈あッて其處へ行ッては普通の婦人とは又違ッて居ます。芳川は笑ひながら《イヱどうぞもうお搆ひなさいますな》

吟子はテーブルの上の呼鐘をチ――ン聲に應じて此部屋に現はれました、小女が。《花やアノウお客様にカッフヱーのおあついのを……ミルクを入れてくるんだよ、ソシテあのビスクイトをお皿に入れて持つて來ておくれ》《どうぞもう決して……お搆ひ下さいますナ》《イヽヱ芳川さん……お搆ひ申すッてなんにも出來やァ致しません……どうぞマアご寛り遊ばしまして何か又昔話でもいたしませう》

云はれて芳川の胸は尙更騒立つて來ました。吟子も昔し思へば流石少しは……頻に芳川の風采を夫となく見て居ました、《アノウ（口籠りましたが僅に語を繼け）何時で厶いましたッけ。貴所と御一所に大勢で上野へお花見に參りました事が厶いましたッけ》《ヱヽ ソウ〳〵大勢でヒクニックをやッた事がありましたよ》《其時誰方かお名前はモウ忘れて仕舞ましたがお轉びになッてお召物を大なしになすッてオホヽヽヽ》《どんなに可笑しう厶いましたらうオホヽヽヽ》《さう〳〵あれは平田です、平田がアノ時轉んだンです、過日も平田と兩人で彼處を通ッて其話しでした、時に（ト少し考へ）雄三郎君は毎日

役所へ御出になりますか》《ハア　毎日朝九時から參ります》《シテお歸りハ何時でも……矢張三時のお引けで厶いませう？》《ハア　三時に役所ハ引けるンでせうが、毎日の樣に外へ廻りますから大概日が暮れてから歸宅いたします》《ソリヤア……矢張り御役所の御用で……》《イヽエ……ハアどうで厶いませうか》《夫れなら夜分に伺ひましたら御家で厶いませう？》《ヘイ夜分なら……併し夜分も遲くまで歸宅いたしません事が厶いまして……どうも家を明けますにハ困ります》

女子の敢果なさは我夫——今ハ厭ふにしろ——元は生命までも取り交した最愛の夫の事を新來の客に夫れとなく壁越しに訴へて居ます、芳川も柳瀨が其夫に愛待されないと知ッて、どう云ふものか、ひどく氣の毒さうに《どうも夫は嘸御心配で厶いませう》から親切に云はれると猶の事柳瀨夫人の弱い心根は動いて來ます、モウ直に何んでも此人に打明けて賴みたくなるものやら？《妾は又さう思ふンで厶いますよ、どうして アレと夫婦になりましたらうかと……》

さりとては又蓮葉過るものかな、なんぼ夫が虐待するからッてさう客に向ッて一身同體の我が夫の事を惡く云はなくッてもよさゝうなもの　ト一應は思ひますがまたよく考へて見ると柳瀨のかう云ふのも全く無理ではないと見えます。又芳川の心では、今日行ッたら吃度夫婦差向か何かで猶々羨ましからうと尋ねて見たら主人は留守だし、餘程其儘歸らうとは思ッたが折角來たもの、吟子に遇ッて見やうと此部

屋へ來て首尾よく吟子に遇ッて見ると此卿言、芳川の心では實に一種名狀の出來ない程の妙な感想が浮んで來ました、此感想こそなか〳〵拙ない筆には寫し出されぬ程のものです。それはおいて芳川は餘り長く居ると却ッて惡るいかと考へ附いたか、《それならもう私れお暇いたします》

吟子は周章て引止め《マアいゝぢやアありませんか、モット話していらッしやい》《へイ有がとうムいますが餘り遲くなりますと……》《ダッテ　ツイ　御近處ではありませんか》《御近所ですから又近〳〵出直して御邪魔に上りませうそれならどうぞ雄三郎君が御歸になりましたら宜しく、チトいらッしやる樣に……》《へイさう申します、夫れなら又どうぞ是非……又》《へイ有がとう、》

男は立ちながらニコヤカに目禮しました吟子も又嬉れしさうに立ちながら辭儀をしました、芳川は玄關へ出ました、吟子も其跡へ附いて出ました《これでございますか御帽子は、》《イヤ　こりヤア恐れ入ります》

吟子が手づから取ッてくれた帽子を芳川は右の手で受取ッて《ハイ左樣なら》

取次の書生それにお氣に入りの淸女も皆打揃ッて式臺で辭儀しました。吟子は首を上げ未だに芳川の後姿を見て居ます《サア　奥樣お奥に參りませう》《今行くから、おまい先へおいで》《オホヽヽヽ奥樣ッ》《なんだい　なにか用でもあるのかい?》《ですが》《ですかゞどうしたい?》《ですが奥樣芳川さんとやらは誠にいゝ……お奇麗なお方ですな》

吟子は忙然として居ましたが、悄然と自分の居間へ歸ッて偖其夜の夢は？　ハテ何處をさまよひましたらう？　如何なる想像を腦裡に書きましたらう？

（其五）　人生勿爲婦人身　百年苦樂依他人

朱塗の圓行燈の灯影も最早油の不足を告げたかぼんやりとして、枕元の煙草盆の火とうに消え失せて仕舞ッた、六枚折の屏風がションボリと襖子の脇へ番を仕て居るが部屋の闇いので太い字が書いてある丈は分るが誰の字やらまた古いか新しいか其な事は薩張分りません。此所ハ柳瀨吟子の寐間です、今迄此部屋に寐て居た吟子は最早夜も更けて居るが何か氣に掛る事でもあるのか落ち附いて寐て居ない首を左へやッて見たり右へやッて見たり、そりやァ〳〵なか〳〵落ち〳〵しない樣子であッたが今しも寐返りを打ッたと思ふと鳥渡首を擡げ（オヤッまた行燈が暗くなつたぢれッたいッ）云ひながら床の上から一尺程も身體を延ばして起き上りさま行燈の火を搔き上げながらかうつぶやきました（又今夜もお歸りが無いのかしら？オヽ寒い……）思はず身體をモグル樣に引き込ませて夜着の中に這入ッたがまだ中々寐附れないから又首を少し擡け鳥渡首を傾け（モウホントニ幾時になるだろう？此寒いのに旦那樣は何處を歩いていらッしやるかしら又屹度醉ッぱらッて淸吉（車夫の名）を困らせていらッしやるに違いないどうか早く歸ッていらッしやればいゝのに何がそんなにお面白くッて毎晩〳〵夜ふけ更ふけまでかうやッて步行いていらッしやるのだ

ろうね》
云ひながら枕元にある煙管に煙草を附けて仕舞ひ夫を煙草盆の火へ附けやうとしたが火までとうにも拔のから衣《エッ》
云ひながら又候首を延ばして行燈の火で附けてスッパ〱吹きながら《ホンにどうしたらうモウおッつけ二時だらうに……今晩もお泊りかしら？お泊なら一層戸〆をして仕舞うがホントに淸も可愛さうだよ旦那がお歸りにならない內は自分たちも寐られないと見えて……アレアノ薄明は未だに夜鍋に繼物でもして居るのかしら？（聲を少し張り上げて）《お淸お淸ー》
二聲呼んだが返事もなか〱ありません。《エヽ淸もモウ餘程遲いので寐て仕舞ッたと見える夫れとも又假寐でもして居やアしないかしら、風邪でも引くといけないが……併しかうやッて每晩〱遲くまで起しておいては假寐をするのも無理はないアヽ（太い吐息を吐いて）ホンに奉公人の手前も氣の毒だしどうしたらよからう口惜しい》
云ひさま思はず黑天鵝絨の夜着の襟を嚙んだが氣が附いたか又起き直ッて今度は夜着をのけて床の脇＝行燈の傍へシヤンと据ッた其顏附葉隱の月見るやう凄くッて又美くしいが叢雲にたとえる鬢のはつれ毛は房〱と可惜愛らしの額に懸ッて居た。此時次の間の柱時計がチンチンチン《オヤモウ三時だ（一寸首を傾け）エヽッいッそモウ戸〆りをして仕まをう若し歸ッていらしッたら淸吉が叩くだらう》

力なさそうに立ッて帯引きしめ枕元の雪洞に火を附けて夫を持ッてヅン／＼此部屋を立出で玄關の方へ行かうと納戸を通ッた、

たわいなく寢そべッて居る侍女清に花、《清引 花引 オヤよく寐て居るモ一度呼んで見やう(聲張り上げ)清やア引》

夢破られて驚いたが澄し顏の清《誰方?》《誰方ではないどうしたんださう皆なうたゝねをしては又明日風邪を引から早く眞實に寐ておしまいよ》《風邪、かせッたッてモウこれしかございません、》《ア、清ッてばまだよく目が覺めないと見えるよどうしたんだいサアちやアんと寐ておしまひ戸〆りは妾がするから……》

云はれてお清は合棒のお花を搖り起し兩人とも眠むたげな目を擦り／＼一禮して寐に附きました妻君は又戸〆りも夫れ／＼して仕舞ッて軈て自分の寐室へ這入ッて寢やうとしたがどうしても寐附れません、千感万慮交も／＼其狹い胸に登ッてくると見えます、が餘りに考へ草臥れたかツイトロ／＼と吟子も華胥の國へ發足しました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

トン／＼／＼《コリヤ清吉モツトひどくドシ／＼叩け／＼》《ヘイ／＼ドシン／＼トン／＼／＼殿様モウあんまり遲いもんだからみんな寢たと見えてなか／＼起きません》《ナニ起きない搆まア事アねエモ

ツト力を入れて叩け〳〵》《ヘイ〳〵ドシン〳〵殿様私の手が痛い程叩きましたがさッぱり返事がございません》《サウカそんならよろしい己れを車から下ろしてくれこんだはおれが叩いて見るから》

車夫は仕方なさゝうに梶棒を玄關の前へ下ろした、殿様は矢庭に飛び下りまだ醒めそこなッた醉に乘じて滅方矢鱈に「ドシン〳〵ガラ〳〵〳〵トン〳〵〳〵」

此方は奥の一間寐耳に這入る戸を叩く音今迄夫の歸りの遲いのを待詫びて若しやお歸りがと立ちさうにしたは幾度か水鷄の仕業と心で憎んだ事も度々、とう〳〵氣草臥がして今ツイトロ〳〵とした處へ玄關で戸を叩く音若しやとは思ッたがモウ彼此四時になる時分餘り遲いから若しや……と思ッて居る内に烈く叩く音今は……と起き出て雪洞片手に玄關へ立出でゝ見ると正しく夫の歸りとは思つたが餘りの事に腹も立つたか《どなたです今時分に》《どなたッておれだよ》《只おれだでは分りませんチヤントお名前をさうおッしやい》

外へ立つて居た雄三郎ハヤ怒氣滿面に溢れた《誰れだッていゝぢやアないか己れの家へおれか這入るンだからサア早く此所をあけろ……あけないと此所をぶちこわして仕舞うぞ》

云はれて此方は有繫に婦女子、《今明けますよ》

ト云ひながらカキ金外づして戸を一枚明けるトタン飛び込む夫此方は出合頭得も云はれぬ酒の臭氣に堪

りかね首を下げて《お歸りあそばせ》

夫は振り向きもせず奥へヅン／＼吟子は表を覗いて《清吉御苦勞だッた此所は妾がしめて行くからおまい早く行ッてお寐モウ四時だよ》《ヘイモウさうありますか》

吟子は又元の樣に戸〆りをして奥へ行きますと夫は長火鉢の前に大あぐら《サアお吟一トつお燗をしてくれ》《貴郎モウ今夜はおよしあそばせそんなに召し上ッてはお身體の毒になります》《なに毒だ毒だッていゝおやアないか搆ア事アない己れの身體で己れが飮んだから》《サ夫れが貴郎お惡るいと申すものです》

半ば涙を交へてから云ひましたが相手の火の手はなか／＼消えないと見えます、《ナニ飮んではいけないの飮ませないの飮ませないのおら己れが勝手に獨りで出して來て飮むからいゝヅ》

云ひ樣立たうとするのを妻は見兼ねて引止る其ハヅミに妻の橫腹を蹴る妻は痛さと口惜しさに暫しは泣き沈みました。有繫の雄三郎も生醉本性たがわず少し氣の毒とや思ッたかブッ／＼云ひながらプイと立つて次の寐室へ行ッて仕舞ました。暫らくして吟子は起き上りサメ／＼と泣いて居ました其の心の中マアどんなでありませう? 此れを見ても元をたゞせば……吟子も雄三郎とビニックでエンゲーヂをした時分は眞逆に此れ程虐待されるとは思はなかッたでせう、此れ程不愉快な生涯を送らうとは夢更思はなかッたでせう。若いときは一生の春です、四季の內で春位心の陽氣で浮き立つ時節はありませんから迷

ふこともある迷ふことがあるからよく氣を附けなければいけません。何人でも春が肝腎です、春にいゝ種子を蒔いて置かなければ秋の收獲にロクなものは出來やァしません。心の春に浮かれては心の秋に眞面目にはなれません。嗚呼人生の春！一生の春！最も氣を附けべきものです、殊によい種子を蒔かねばありません！

（其十八）　眺めにくい眞如の月、

《今夜もお留守ですか？》

襖子の脇に立ちながら突然に問い掛けた芳川春雄。《オヤよくいらつしやいまし、今退屈して……恰度お待ち申して居た所でしたよ》

振り向きざま答へたのは柳瀬吟子です。兩人の交際振のさも馴々しさ、這入ッて來る者も挨拶もせず又此方の者も首月たばかり……實に他から見るとどうしても變といふ批判は免れない程です。さてどうしてこんなに兩人の間柄が親密になりましたらう？　前回に述べて置いた芳川が吟子を其應接間に訪ッた跡は、以前ピクニックやダンシングで知り合ッて居たもんだから——其上近所の事ではあるし、始めこそ二週間に一遍夫が二遍になり三遍になり今では下世話で云ふ所謂——三日に上げず……春雄が此柳瀬家へ入り込む樣になりました。夫に主個の雄三郎は常時留守勝これもまた三日に上げず我家に腰を据ゑた事がない。吟子の心中では我が夫——しかも他家から養子に來た雄三郎が痛く自分を虐待して更

に宿の妻と云ふ所が無い、夫婦の情合が極めて薄弱だ……吟子の心では皆無と思ッて恨んで居る、女は己を知る者の爲に形づくる其正反對で自然夫を厭ふ樣になッて來た、其所へ芳川が一方ならず親切に勦ッてくれるから――地獄で佛――始めこそ夫れほどに思はなくッても段々交際で行く內に少は嬉れしいと云ふ觀念が吟子の腹中に發生して來た此嬉れしいと云ふ觀念が時を經る內にありがたい、、、、と云ふ觀念に變ッて來る、此芳川が親切をいとゞありがたいと感謝する其觀念が今ではラブ！　愛情に變形しさうになつて來た《マアこッちへいらッしやい――其お布團の上に、》《有がたう、》輕く答へて座に附いた芳川はいとニコヤカに《お吟さん今夜も御主人は何所らかへお出になりましたか？》《ハイ、何所へ參りますか始終出て……御承知の通り出てばかり居りますから……大方今夜も柳橋あたりへでも參ッて狂ッて居るンでせう……》

柳橋……度重ッた阿漕が浦に引く網とやら、吟子も今は雄三郎が柳橋あたりの隱れ家を氣取ッた樣子、芳川は鳥渡眞面目になり《柳橋ッ　雄三郎君の事だから男はよし口前は巧だし仕打に隙はなし三拍子揃ッて居るからサゾ女子が戀着するでせう》

芳川のこの云ひぶり、丸で火事場に石油をそゝぐ樣なもの、火の手はます／＼猖獗の勢を逞うします、《なんですか……あゝなりましても誠に仕樣がございません貴郎も御承知の通り三日と家に落附いて居た事はございません》《そんなにきびしいのですか、それァあんまり》（急に言語に力を入れて）殘

酷です、》(妾はかうやッて貴郎の前で自分の夫の事を悪く申すのはなんだかおかしい様ですが、今日此頃のあの仕打が夫の妻に對する仕方であらうかと思ひますとシミ〲浮世がいやになりますよ、》(さうですチ、柳瀬君だッて學問はあるし學校にいらしッた時なぞは品行方正と至極評判のいゝお方でしたが、どうしたものですか……嘸貴女が御心配でせう……》態と親切ごかしにかう云ひました。吟子はます〲其圖に乘せられて進んで行きます(ほんとでございます、こんなに苦勞をいたします位なら妾は一層尼にでもなッて一生樂に暮さうかとも思ふ事がございます》

尼！　薙髪とは又非常の決心。これが夫に死に別れたと云ふではなし、又去られたと云ふではなし、さりとては短氣な！　綠なす黒髪なんでムザ〲切りとられやう？　紅なす唇の色どうして無下に剝がされやう？(アハヽヽヽ吟子さんが何をおッしやるかと思ッたら尼になる……とんだ事をおッしやる、誰が亭主にいくら酷く待遇れるからッて尼になるものがありませう？》(だッてあんまり夫の仕打がひどう厶いますもの……》

何時の間にやら目尻がキリヽ、素早く見て取ッた芳川、鳥渡ハンケチで鼻をかみながら(雄三郎君もさうかも知れませんがまた貴女もひどくおッしやるンじやありませんか》(ソ、ソれで妾は誠に困るンです、さう人樣に云はれるのが妾は非常につらいンです、どうせ人間並にいかない妾ですから世間の

皆樣のやうにさう行屆きますまい、さう〳〵妾は夫の壓制は受けていられません》
云はれて芳川は聊か當惑の眉を顰めた《さう貴女の樣におッしやッては花も實も無い談ですが……何にも私だつて一概に貴女が惡いと申しません》
吟子も少しムッとして《だッて貴郎の樣におッしやッては何んだか妾が餘ッ程嫉妬でも燒く樣に思はれますもの、そりやア貴郎、妾だッて女ですもの少しは嫉妬も燒きませうが世間の女房の樣に妾は丸こげに燒く積りではありません芳川さん》(佶ばりと云つた)《さう貴女の樣に直ぐお怒りになつては甚だ私が……》《何も怒るのなンのッて譯ではありませんがマア考へてごらんなさい、世の中に婦人程間尺に合はないものはありますまい……何故と云つて見るのに、先づ年頃になつて或る處へ緣附くでせう、さうすれば世間に一人者は少ないからいづれ先方に舅や姑や、それに鬼千疋にも掛け合ふといふ小姑なんぞが居てごらんなさい、そりやア一生浮ぶ瀬がないと思いますよ、それから見ると妾なんぞは餘ッ程仕合せなんでムいます、兩親も早く死去りますし外にこれと云つて頭の上に立つ者もありません勿論一人叔父がムいまして夫の世話で今の雄三郎を養子に貰ひヤレ嬉れしや……(語音忽ち澁ぶる)と思ふとアノ放埓、實に世の中に妾程つまらないものはありますまい……アレが一トつ優しい言葉を妾に掛けた事がありません、先晩もこないだでした夜晩うく歸つて參りまして、ヤレ酒を出せ、ソレ燗をしろッて申しますからそりやアお飲せ申すのもよろしうムいますが餘り飲み過ぎては又お身體にで

も障りますから今夜はよしてと頼む樣に止めましたらどうです妾を足蹴……足蹴にするンですもの妾ははんとに……どんなに口惜しうムいましたらう。併しこゝが辛棒の仕處だ、これと云ふのも妾の仕向が悪るいからだッと我身で我身を責めてジッとこらいて居れば夫れをいゝことにして日がな夜がなのあそび歩行き、アヽ……これを思ふとをんなほど世のなかにつまらない者はありますまい》

半ば歎いて半ば恨みました。《吟子さん何もさう御失望なさる事もありますまい。世間に其妻を愛さない夫がないではなし、貴女の樣な御婦人を可愛がるものはいくらでもあります、夫に雄三郎君は御養子ですもの氣に入らなければいくらでもこちらから離縁が出來ます、法律上正當に離婚か申し込めます》

吟子は急に言葉に力を入れ《だッて芳川さん、外に又養子を貰らッたッて、妾はモウ養子では懲り〳〵しましたから外に縁附きましてもいゝから……可愛がッてくれる亭主が持ちたいので……が妾見たいなお婆さんを可愛がるものは所詮ありますまいねエ?》

妙に甘えた樣に。可憐の目尻を芳川に濺いだ、芳川はまた笑み傾け《お婆さん……貴女がお婆さんぢやアそれこそ世間に若いものはありやアしません、よく話す事ですが英國なんぞでは家政整理に經驗があッていゝからッて故意を再縁の婦人を撰ぶさうですよ》《さう云へばさうですけれどもそりやア外のお方達の事でさアねエ、妾見たいなものを誰がなんといゝませう?》《誰がッて第一わ……》《第一わッ……て誰れ?》

何故か息詰ッた芳川、さらぬ體で《なアーに、そりやア、第一わ……たくしにも分りません》吟子は急に思ひ附いた風で《オヤ妾は自分の勝手なお話ばかりして居て芳川さんに御馳走するのをすつかり忘れて仕舞ましたよ、今日はあのゥ到來の白葡萄酒がありますから召し上れな》《どうも毎度上るたんびに御馳走樣になるばかりで……》

云ふ中吟子は立つて次の間に行きましたが盆の上に葡萄酒の罎、臺附のコップ、それに青梅の蜜漬まで取り揃へて持て來ました、《サア芳川さん一杯召し上れ》《ハイ有がとう》なる口と見ゑて一杯息も吐かず《どうぞ御遠慮なしにタント召し上ッて下さい、お燗酒がよろしくば差しあげませうか》《イヽヱ私は此頃醫者に日本酒を禁せられました》《アラ！　いゝ氣味ですこと》《失敬な　いゝ氣味なんて》《マアさうお怒りなさらずにサアもう一杯》《お吟さんこんどは貴女に一つ差し上げませう。私がお酌しますから……》《有がとう……併し妾はよしませう、また醉ふといけませんから》《なアーに一杯位は……サア一つ召し上れ》《さうですかそんなら一杯……》コップ一杯を幾口にも飲み干した頃は吟子の心も春の彌生、妙に騷わ立つて來ました——井の端の櫻あぶなし酒の醉、櫻に見とれて居た芳川も醉心地して《暫く酒をよして居ますと葡萄酒でも中々醉が廻ッて來て實にいゝ心持になりました……………またあんまり長居をして掃木のお厄介にでもならない内にドレお暇と致しませう》《マアいゝぢアありませんかまだ亭主ではなか〱歸ッて來る時分ではありませ

んから……貴郎がお歸になると、妾一人で誠に淋しくッていけませんからモウ少し遊んでいらッしやいナ》長居をネダル、芳川何條否やを云ひませう、《それならモウ二十分ばかり……》《オホヽヽヽ、滊車でも待ッて居る樣ですネ、ソノ青梅を召し上ッてごらんなさいおいしう厶いますから》《エヽもう先刻から澤山頂きましたが大層結構です矢張長崎製ですかなか〳〵此頃は支那製も及ません》《さうお賞めにあづかつて有がとうございますお禮で却ッて痛み入りますがオホヽヽ》《どうも大變醉ッて仕舞ました》《貴郎もさう……妾も大變醉ッてしまッて……》《甚だ恐れ入りますがその水藥罐を鳥渡……》《お待ちなさいお冷水をおつぎになるのなら此湯呑が大きくてよござんすよ》吟子は脇にあッた自分の湯呑を芳川の前へ出した、芳川は夫に水をついで二三杯さも心地よげに飲んだ《アヽ實においしう厶います》《オヤ妾にもどうか一杯》《お待ちなさい今湯呑をゆすいで上げますから》《なアーにそのまゝで結構、其上に少しついで下さい》《ダッテ半分ばかり殘ッて居ますよ》《それで結構》引ッたくる樣に其湯呑を取ッて飲みながら《アヽいゝ心持ですねヱ　芳川さん》

（其七）　手折易げに見へる姥櫻

人の心程妙なものはない、其心の中でも情程妙なものはない、其情の中では戀程妙なものはありません。

さてどう云ふ處から戀情が發生して、どう云ふ處に戀情が發育して、どう云ふ處に變化するか、實に玄の叉玄妙の叉妙です。……女子の七ッ八ッ。可愛らしいお煙草盆と云ふもの頭の上に載せ、名も知れない雜草を採り集めて食事の眞似、青ッ鼻啜りながら《アラ妾の方がみーちやんの處よりたんと御馳走があるのよ》罪もなく云ひ放つ時は戀丸で知らぬ樣。十二三になッて戀僅に知り初め《お向ふのお君さん見たよな根掛が欲しいワ、アノサ着物のがらが……》モウ身裝を氣にして鳥渡外を歩行くにも振り返ッて自分の後姿を見る樣になッてから、十六七唐人髷緋鹿子の色染め、束髮でもマガレート面白くない、舞踏結び氣恥しい、さうかと云ッて矢鱈結は可笑しい、イッソ古風に文金の高髷此間通りの勸工場で見て來た金糸の根掛ふさ〳〵と掛けて見たい、黑塗の駒下駄少し高か過るか穿いて見やうか、それもなんだかあまりドットしない、いッそのこと銀杏返か印刷局結び……思ひ切ッて櫛卷にでもして見やうか、さう〳〵例の書生羽織を少し丈長にして着ると仕やう、夫もあんまり意氣過ぎる……下卑ていけない……サアかうなッてくると當人でさへどうしていゝのやら分らなくなると、どうしたらよからうと心配する、心配するのは誰れしもいやな事、だが併し此いやな事は求めてする樣になる、かうも身裝萬端に苦勞するのは果して元をたゞせは何んでせう？つまる處は少しでもよく見せやう、少しでも天賦の美形をも一段と高めやうと云ふ野心に違ひない、美形が一段と美を增したら自然人の目に附く樣になる、人の目に附く樣にするのは果して何の目的？人の目に附く樣になれば夫相應に苦勞も出來てくる、此苦勞が

即ち戀知ッてからの苦勞であらう、此れが戀の生み出した苦勞に違ひない、云ひ替へれば戀が發育した時機に違ひない、此また發育した戀がどう云ふ工合に變化するだらう、此れがまた苦勞の種を蒔くものだ。嗚呼？　戀と云ふもの若し天帝が此人間に與へたのなら天帝も至極の無慈悲ものに違ひない、こうやッて罪もない天帝迄をお恨み申すも全く戀の爲め、コ、ないたづらものめが……

柳瀬吟子も戀の爲に苦められて居る、芳川春雄も戀の爲に艱されて居る、柳瀬雄三郎も亦戀の爲に弄遊ばれて居る。さて〳〵戀と云ふもの餘程の癖物に違ひあるまい。今の吟子の考へでは強ち芳川を慕ッて、跡は野となれ山となれ、どう云ふ目に遇てもいゝから我が夫雄三郎を見棄てゝ其跡に春雄を入れやうと夫れ程までには思はない、イヱ今からやッて春雄とさし向ひで酒酌み合すまではさう思はなかッたに違ひない併し、夫雄三郎を厭ふ念慮は元より深かッたに違ひない、厭ふ念慮が深くなるに從ッて春雄を慕ふ……慕ふ程でなくッても——賴みに思ふ依賴心が深くなッて來た、賴みに思ふ念慮が深くなるに從ッて兩人の間柄にあつた遠慮といふ垣根がだん〳〵に取り毀はされて來た、《サア　モウ一トつお酌をいたしませう、》

僅か一杯の葡萄酒もどう云ふものか今宵は醉が早く廻ッたやら？　目の縁ピンク色に染め附け、黒い愛らしい眸少しトロつかせ、罎持つ手に霞が見え、そして何時の間にやら居住も崩れかゝッて來た、《モウ廢しませう、又苦しくなるといけませんから今も水を飲んだばかりで……》

此れもさッきから飲み續けた葡萄酒に顏中薄紅をさして、片手を疊に附けながら、語音も亂調子でかう云ッた、吟子は鬢持ち直して凄味の笑ひ一トつ、『マア……折角ですから一トつ召し上れ！　併し妾のお酌でお氣に入りませんの？』

態とツンとすねた、『なあァに決してそんな……』『それあらア、』

芳川は半ば迷惑さうに半ば嬉しさうにコップを片手に持ッて指し出した、吟子は波々と葡萄酒をつがうとした、『モウそんなに……こぼれます、』『マアいゝぢやァありませんか、何もお搆が出來ませんから責て葡萄酒でも澤山召し上て下さい』『飮みます事は飮みますがまた苦しくなッてツイ倒れでもするといけませんから』『お倒れになッてもいゝぢやありませんか』『倒れて何がいゝ事があるものですか、』『いゝ事があるから不思議です、』『へエー（呆れた風で）何かいゝ事でもあるのですか、』『エー／＼ありますとも／＼、』『へエー（ます／＼呆れた風で）どんないゝ事があるのです？』『いゝ事とも／＼實にいゝ事です、』『アハヽヽヽこりやァ面白い、サアどんないゝ事ですか敎へて下さい、』『そんなに敎へて貰ひたければ其處で三遍お辭義をなさい、』『三遍お辭義……又正直に三遍お辭義をした跡で煙草にしよ抔の洒落はいやですせ、』『なアーに洒落ですものか大眞面目でさアチ、』『それならサア三遍此の通り……』（云ひながら鳥渡首を下げる眞似をした）吟子は益笑壺に入ッて『それなら敎へてあげませう、貴郎がそんなに醉ッ張らッて倒れたら其時妾がお介抱して上げやうと思ッて……オホヽヽこんないゝ事は

ありますまい、》《何の事だ（少しむッとして）どんな事だと思ッたらエ、ッつまらない、》《サアだまかされた罰金に……》

吟子はかう云ひながら矢庭に左の手をさし延べて芳川の左の手を取ッてコップを握らせ夫に自分は右の手で罎取り上げ無理やりにコップに葡萄酒をついだ、《モウ私には飲めません、》舌ッたらずに芳川はかう云ッたのを吟子ハ打消し、《まだ一二杯は……若し貴郎に召し上られなければ妾が……》《飲むとおッしやるのですかこりやア面白いサア夫れなら、》云ひながら芳川は一息にコップの酒飲み干して吟子にコップを渡したと思ふとコップは忽ち紫色に變ッた、吟子は一向平氣な顔附で《エ、〳〵飲みますとも、ソラこの通り立派に、》ジロリと芳川を睨め附けるかと思ふと一息にグイと飲み干した、《サア、こんどは芳川さんの番だ、》と云ひながら兩人とも同ド様な事操り返し、コップの獻酬數回、とう〳〵兩人ながら今は醉ッて仕舞ました。吟子は兼ねてそんなに飲めぬ酒、今宵は飲み過して今は胸が何處となく苦しくなッて來て――むか附く様になッて來て――さし込む様になッて來て其座に堪へず其處に其儘うつぶしになッて仕舞ました、芳川は醉眼朦朧とこれを認め《そんなに……苦しいのですか、》

吟子は此聲聞て首を僅に擡げ、片手で鬢のほつれ毛さも五月蠅相に掻上ながらヂーイと芳川を視て《貴郎もあんまりです、こんなに醉はして仕舞ッて……》

云ひ終ッて又俯ぶしになつて仕まひました、此處で芳川はヂリ〳〵ッと吟子の方へ座を進めた《なんで私があんまりです？　そんなに貴女に恨まれる程の罪はいたしません、》吟子は再び重もたげに首らを擡げ、《だッて……貴郎もあんまりです、ゲープ、ア、妾は酔ッて苦しくていけません》

芳川は氣の毒さうに《オヤ、そんなに苦しいのですか、ほんとに……》

チヨッ！　芳川の右手は既に如才なく吟子の背を撫て居ます《そんなに苦しいの？　何かお藥でも上げませうか？》

吟子はます〳〵苦しいかして最早首も上げられないと見え思はず其黒髪を芳川の膝の上に載せた《ア、苦しい……》《そんなに苦しいのなら水でもあげませうか》《エ、……（息急しく）水は飲みたくありません》《それなら胸でも擦ッて上げませう》

おはや吉川が左手は吟子の胸の上に及ばんとしたトタン、今迄苦しがッて俯ぶしになッて居た吟子は急に立ち上ッてチヤント掘り直し威儀正しく吉川に對ッて《貴郎ほんとに妾を可愛がッて下さいますの》

（其九）　割ッて見せたい心の眞實

一ト抱へあッても何處となく床しいしほらしい姿を持ッて居る柳、其名を冠せた橋、其袂から遠くもない或る小路、兩人一所に連れ立つてゝ樂に歩行けさうもない程な狹い小路、其小路の右側の外れ、右手

に川を隔て丶向ひは或る有名な割烹鋪、松の植込からチラホラ二階の人影を認めたのは今しがた、夫も跡なく消ゑて仕舞ッて、今まで水底に聞えて居た撥の音も漸々静まッて來て今はとう／＼聞えなくなつた。只四隣しーいーんとして、往來を流して行く上下の聲ばかり遙に笛の音と交も／＼聞えて居るばかり、今迄月こそなけれ星二ッ三ッ空にきらめいて居たがそれさへ雲に包まれたか可惜姿を隱くして、細い雨が瓦へ當る音のみ冱かに聞えて居ます、此所或る家の中二階それ程綺麗な部屋でもありませんが流石に床の間の違棚の隅に象牙の撥が載せてあッて次の間の三疊へ處せきまで黒繻子の丸帯が友禪のしよい上げとだらしもなく散らかつて居る鹽梅、妙にむさい様な所に味を持つて居ます此六疊の座敷に只ックチンと人待顔に据ッて居る一人の男、ランプの脇に四ッ足の塗膳を扣へて居て其上には何かしたドでも入ッて居さうな青磁のどんぶりにうにの入れてある蓋物夫に小皿が四五枚載せてあります、膳の脇に置いてある德利の酒を獨酌でガラスのコップにつぎながら《どうしたんだらう、何時迄人を待たせる積か、何をこんなにぐづ／＼して居るンだらう、其くせわざ／＼人を呼んでおきながら（云ひながらコップの酒を一息にグッと飲み干してしまひ）エーッ自烈たい酒までいやに温くなつて仕舞た、ほんとに早く歸ッてくれればい丶のに》

何か獨り言云ひながら頻につぶやいて居る處へ階子段を音させて上ッて來たのハ五十に近い女、年に比べて若く見える愛嬌者、片手に持ッて來た德利を差し出しながら《どういたしましたんでございませう、

もう歸りさうなものでございます……嘸お待ちどうでございませう、サアマアお一トつお熱い處を……》《ウム》と男が差出したコップに酒をついでやりながら《ほんとにどういたして居るンでございませう、さアッき十二時を打ちましたのに何をグズ〳〵して居りますのですか……併しもうおッつけ歸ッて參りませう、只今例時のお蕎麥を取りに遣しましたからそれでも召し上ッてお待ち下さいまし《鳥渡先の德利を振ッて見ながら》どうなさいました、ちッとも召上りませんぢやアございませんかサアもうお一つ》云はれて男はさも重もたさうな語氣で、《なアーにもうおッかアさう搆ッておくれでない、さつきから獨酌でグイ〳〵遣ッて居る處だよ》《モウ少し時刻が早いと何かお口に召しますものでも取ッてあげますが……》《イエナニもう決して搆ッて下さるナ、來るたんびにさう〳〵お世話になッてハ濟まない》《オホヽヽヽとんだ事をおッしやる、もう決してお搆ひ申しません……またお搆ひ申さうッたッて出來ませんもの子》《何時見てもおまいの容子のいゝ、其口ッ振の巧いのには感心するよ》《オホヽヽヽ貴郎の方が餘程お口がお巧手で居らッしやるくせに……》《さう云やアおまい何時見ても若い子》《サア大變です、何をか返禮に驕りましよか子、さう思ッてお酌をいたしましやう》《オヤそれならさう思ッてお酌をして貰はう》《エヽお口の惡るい……》《併しこれでも誰れかの口に比べては餘ッ程いゝ積りだが子》《ヘエー（呆れた風で）貴郎より口の惡るいお方が此世の中にございませうか子ー》《可愛さうに、そんなに口が惡るかアないや子》《オホヽヽヽ向きにおッておくやみなさる內がいゝオホヽヽ

ゝ、》《とんだこりやァ擔れた奴サ、サァ一杯お前にあげやう》《マァ貴郎お一トつお改めの上で……》《さうか》と又候つがして夫を飲み干して女にさす《これハ貴郎のお酌で恐れ入ります、オットもうこぼれます……》
男ハ少し眞面目になッて《時に春坊から其後音信かあッたかチ？別段變ッた事も無いと見ゑるチ》女は飲みかけたコップを下において《ハァ四五日前千住まで用達に參ッた序に鳥渡寄りましたが、そりやァ〳〵大きくなッて、どんなに肥ッて可愛くなりましたらう》《さうかそんなに大きくなッたかい》《エ、〳〵もう貴郎少し這へる樣になりましたよ》《さうか、もう這へる樣になッたか早いものだチ》《妾がお土產にお玩弄物を買ッて參じましたら嬉れしがッて何をおッしやるのですか口の中でブッ〳〵云ッてニコ〳〵笑ッてほんとに……お口の鹽梅杯は段々貴郎に似て參りましてどんなにお可愛うございませう貴郎にお目に懸けたい樣でございますよ》《さうかそんなに可愛いゝか》
男は思はず膝を前に進めた――坐布團を半分もすべり落ちたのも知らないで、《そんなら先方でも可愛がッてくれるだらうチ？》《そりやァ〳〵可愛がりますともチ貴郎、先方にはまだァノ年になッて子供と云ふ者がない處に男のお子さんだからどんなに可愛がりませう、チヤホヤしてそれこそ荒い風にも當てない樣にして……》《さうかい、さう可愛がッてくれるか（悄然として）夫れは何より嬉れしい……己れも其後鳥渡尋ねて行きたいとは思ふが若し家へでも知れるとそれこそ面倒だから……》《さうでご

ざいますとも若しまた家へでも知れますといけませんから……何れ其内妾がこちらにお連れ申して參りますから其時……》《さうサ其時よく逢としやう、そりやそうと先日話して居た種痘は其後何も障りはなかッたかい？》《エヽ、先日大野さんに願ッて植へて戴きましたら右の手にこんなに（手まねをしながら）よく生えましたよ》《そうか別段熱も出なかッたと見ゐるネ》《エヽ、至極輕かッて仕合だとあちらの兩親もひどく喜んで居りました、オヤとんだ長話でまだ御返杯をいたすのをスッカリ忘れて居りました》

云ひながらまだ半分飲み掛けておいてあッたコップの酒を飲み干して仕舞ひ、鳥渡其コップを膳の隅に倒に振ッてそれを男にさしながら、《サアお一トつ召し上れ……モウ娘も歸りさうなものでございます、ドリヤ下にお喬麥が參ッて居るかも知れません》

云ひながら下へ下りて行きました、程無く引違ッて上ッて來た唄妓、ヅカ〳〵と男の前へ來てベタリと兩手を支へ《へイいらッしやいまし》《オイ待たせるにも程があるせ》《ゲーップいヽ心持だ》《御自分樣ばかり心持ちがいゝもよく出來た、少しは待つ身にもなッて見るがいゝ、人を態〳〵呼んでおいてからに……早く用があるならさう云ッてお仕まい》《何もさう今歸ッたばかりの者をつかまへてッベコべへこませなくッてもいゝぢやアありませんか、早くッて……どッか行らッしやる處でもあるのですか、ハヽア分ッた、成程お内方が嘸お待遠しがッていらッしやるのでございませう、ゲエーッ早くお歸りな

さいまし、妾が用なんぞは……そりやアどうでもよろしうございますから……》《おまい今夜どうかして居るチ》《エどうもしては居りません、ちやアんとかうやつて話しております》《いよ〳〵こりやア變だ》《エヽ〳〵變でございませう、どうせ妾は變でございますとも……》

云ひながら矢庭に膳の上にあッたコップに酒を波々とついで二三杯息も吐かず飲み尚飲まうとする其風情に男は呆れ果て《おまいまたそんなに飲んでは身體に障るぜ》《大きなお世話です、妾が妾で飲むのにどうぞもう決してお搆ひ下さいますな》

此言葉に流石の男も怒氣を含んで《大きなお世話だ、ヨイヨ大きなお世話をする者の側に居ないがいヽ……》《さウ云ふお方こそこんな處に居ないがいヽ》

男は堪らずカッと急き立ち《誰がこんな處に居るものか、人をつけ用があるからッて呼んでおいてさんざッぱら待たせて置いて、いヽかと思へばやう〳〵歸ッて來て大きなお世話だもよく出來たそんな奴には以來話しも出來ナい（怒りに語句いよ〳〵亂れて來た）

女は空吹風《エヽ〳〵貴郎がお話し下さらずと……（思ひ切ッた語氣で）外に話してくれる者がありますからようございます》

此一語を聞いて最早此れ迄と男は突然立つて打ちもかヽらうとする風情で立ち上りましたが打つのもけがらわしいとでも思ひ直したか其儘足ざわりも荒々しくスタ〳〵次の間へ出て階子を下りやうとする處

へ下から何事だか何時に似げなく聲の荒々しいのを氣遣ッて上ッて來た以前の老母、行違ひざまに歸らうとする男の容貌をすかし見て痛く驚いた風で《旦那樣マアどうなさいました、何をそんなにお怒りですか、マア〱譯を話して下さいまし》《譯もなんにも己れは知らない（言葉急しく）こんな犬畜生の居る處には一時も居られないからそれで歸るのだ》《マアそんなにおッしやらずに、何か又娘がお氣に障る事でも申しましたら此妾に免して御勘辨下さいまし》《モウ己りやア誰が何と云はうと勘辨する事は出來ないからどうしても歸る》《マアさうおッしやらずに……コレ娘（答なし）春、何を又こんなにお怒らし申したんだい、早く此處へ來てお詫言を致さないのだ》《おッかさん、歸るッておッしやるのならお歸し申したッていゝぢやアないか、何もそんなに無理にお留め申す事はない（憎くさげに）犬畜生の處へさう居らッしやるにも及ぶまいからチ》

飽くまで嘲弄の語勢に、何かは堪りませう、男は老母の切に留めるにも══袂を押へんばかり留めるのにも搆はず、階子段を荒々しく音させて下へおり下駄を穿いて其處へ立てかけてあッた蝙蝠傘取るより早く表へ出て仕舞ました其早さ騎虎の勢、老母もつゞいて下りて來ましたが最早止めるとが出來ません只呆れに呆れて此れには何か深い意味があらう……兎も角娘に聞いて見やうと忙然と又階子を上ッて來て見ると俯伏になッて居る小春、母の上ッて來た足音に首を上げ其顏を見ると其儘ワッと泣き伏し《おッかさん…ほんとにわ…わたしは…ど…どうしたらよかろう》

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

《オヤお歸りあそばしませ、大層今夜はお早うございましたね》相手の男、話しかけられても隻語を發しませんでズン〳〵自分の居間へ通ッて、坐布團の上にどッかと据りながら《お吟、水を一杯くれ》《お冷水でございますか、今お茶を入れる處でございますのに……》《なに茶より水がいゝ》《チヤさうでございますか、それなら今汲みたてを持つて參りませう其れ藥罐のはもう溫くなつておりますから……》

云ひながら納戶の方へ行きましたが、暫くしてコップに水を一杯酌んで持ッて來て《へィ召し上りませ》差し出した水、男は取る手遲しと飮み干して仕舞ました《モット持ッて參りませうか?》《ナニもう澤山だ》

女は以前から何か頻に男の容子を見て居ましたが《旦那樣、どッか今夜はお加減でもお惡うございますか、大層お顏色がお惡い樣で……》《ナニ……少し……》《小春さんが何時もの樣に貴郞をお取持しなかッたんぢやァございませんか》

云はれて男は犇と胸に答へ、ど…どうしてそれを……とァハャロまで出やうとしたがさあらぬ體で居るのを早くも此方は見てとッたか《貴郞は妾がちッとも知らないと思召して居らッしやいませうが、妾はちやァんとよチォく何も存じておりますよ、あんな性根の腐ッた女はおよしあそばせ……貴郞にアレ程

までにお厄介になッて居りながら外に……》《エ、あれがほ……ほかに》《外にちゃんヮと出來て居りますのを貴郎はご存じあさらないの、それだから妾ァ不段さう申しますのです……大概にあせいましと》云はれて男は向きになり《おまい其男と云ふのを知ッて居るのかい？》《エヽエ、知らないでもございません》《ナニ知ッて居る、誰れだ、誰れだい？》《妾が又餘計ないひつけ口でもいたして貴郎がお怒りなさるといけませんから》《ナニ怒るものか、あんな人非人な犬畜生を相手に誰れが怒るものか》《きッとお怒りなさいませんチ》《決して怒らないから誰れだか其名を己れに聞かせて呉れ》《それなら申しますが（一息吐いて）アノ小春の情人といふのは外でもありません、……アノ……ツノ……》《アノツノ誰れだい？》《貴郎もご存じの》《己れも知ッて居る誰れだい？》《アノ（思ひ切ッた語氣できッぱり）芳川さんです》《ナニ……芳川……》

聞ひて男は呆れ果て――くわへて居た卷煙草取落すまで。

（其十）　此處にも一トつ張と意地

母は驚きました、實に呆れるまでに驚いたに違ひない大事――な我身は勿論最愛の娘までこれまで非常に厄介になッた、また此れから世話にならうとした大恩ある旦那、その旦那は何が氣に入らぬのやら娘と口論の果ては袂ちぎれるほど止めても弗と歸ッて仕舞ッた、此れには何か……深い譯があるだらうと忙然又元の二階へ上ッて來て見れば、娘は俯伏になッて居た、ハテナと其脇へ來て見れば、娘は其物音

に顔を上げて自分の顔見るや否、岸破と打伏してワッとばかり泣き出した所以を知らぬ老母なんしに驚かずに居やう？　ます〳〵驚き呆れて只娘の泣顔を打護ッて居るばかり、暫しは語句を發し得ませんでした、が氣を取り直したのか《お春、さうやッて只泣いてばかり居ては何が何んだか妾にはちッとも譯が分らない、マアどう云ふ譯であんなに……旦那樣を怒せ申したんだい？》慇懃に問はれる程答は尚躊躇する道理、言葉は無く只さも切なさうに歔欷して居るばかり、母は尚更不思議さうに尋ねて居ます、《何がそんなに泣く程悲しいのだか、マア此母に話してごらん膝とも談合と云ふでは無いか、それとも旦那樣がお春の外にお目をお掛けなさる方でも出來たとお云ひのかい？》《そんな事なら妾はどうでもいゝんですが……》僅にかう答へた、母は重ねて《さうでないなら、どんな事だか只泣いてばかり居ては妾には薩張譯が分らないから……マアどんな……そこにアヤがあるのだが何もかくす事はないから、マア其譯を此母に話してお見な！》《實はね……》云はうとしたが又泪に遮られたが咽び入ッて仕舞ッた、今漸く見へかゝッた雨後の月また叢雲に掩はれた心地。母は老の癖もどかしいと思ッたか《只お春の樣にさう泣いてばかり居ては何が何んだかチッとも譯が分からアしない》少し怒氣を含んでかう云はれたから小春も泪を收め《實は……夫れなら話しまするが、お母さんも御存

知の通り今日柳光亭からお名差で口が掛ッて行ッて見て、偖お客樣は御大勢かと帳場で聞いて見ると「イヽエお一個……」と姉さんの挨拶、「シテ何んなお方?」と 容子を聞いて見ると「丈のすらりとした、全體が瘦キスで何處となく凄味のある、目が涼しくッて鼻筋の通ッた、そりやア〳〵いゝ男……」ハテそんなお方は……と考へて居る内に二階の階子段を下りて來たも一人の姉さんが、妾を見掛けて「オヤ小春さんお客樣が過頃からお待兼少しも早く……」との事「オヤそう」と階子を上ッて偖其お客のお部屋へ入ッて其お方にお目に掛ッて見ると、ツイぞ見なれぬまだ一度もお目に掛ッた事のない初のお客樣オヤ! どうして妾の名を……と不思議に思ッて居る内に、其お客樣のおッしやるにハ「おまいが小春さんとお云ひのかい?」とお尋ねなさるから「ヘイ」と申上げると「さうか……」と暫く妾の顏を見詰めて居らッしやるから妾も妙なお方だと思ひながら脇に置いてあッた三味線の調子を合せやうと、撥包を膝の上で廣げやうとするのを其お客樣がお止めなすッて「お坐附は跡の事としてチト私がお前に折り入ッて是非聞いて貰ハなければならぬ賴みがあるが聞いてハくれか?」と眞面目になッての其を客の口上「何んでございますか、此妾に出來ます事なら……」と笑ひながら御返事いたすと「屹度此私の賴みを聽いてくれるか?」との押てのお言葉、「マア何んでございますか、おッシやッてごらんあそばせ」「それなら話すが、實は柳瀨の事でチトお前に賴みたい事がある」とおッしやるから「オヤ柳瀨さんをご存じていらッしやるの」と申上ると「實は……その柳瀨との緣をスッパリ切ッて貰らいたいのだ」と佶ぱ

りおッしやるから、妾はまた驚いて「どうしてそれを……」「サ其驚愕は道理だが、これには深い譯がある、マアよく聞いてくれ」と夫れから旦那樣と奥樣との間柄をお話しになる一伍一什を伺ッて見ると、奥樣のお怒りなさるのもご尤も、妾も實は夫れ程迄とは思はなかッたんですが、よく其お方から色々事情を承はッて見ると、成る程奥樣の些の間遠ざかッてくれろとおッしやるのも至極ご尤の事、伺へば伺ふ程我が身の罪も恐ろしく、よくこれが世間にある通り、昔しなら丑の時參でもなさる處を恨みがましい事は、露これ程もおッしやらずに、事を分けての其お頼み「妾もかうやッて賤しい稼業はして居りますが、心まで腐ッて居りはいたしません、よろしうございます、さう云ふ譯なら見事柳瀬さんと今迄の緣をスッパリ切ッてお目に懸けませう」と申上げると、其お客樣は手を合せないばかりにお喜びになッて「それで私も大きに頼み甲斐があると云ふもの、よく思ひ切ッて聽いてくれた、決して仇おろそかには思はない、私だつてお前と柳瀬との間柄はよく知ッて居るから、さう野暮ばかりもいやあしない、何れ其内にはどうかして又元の樣に……とも行くまいが、一週に三度遇ッた處は、責めて一度位、柳瀬を此方へよこす樣にしてやらう……」とおッしやるから「なに、さう事を伺ッてみれば、もう妾は決して未練は殘しはいたしません、二度と再び柳瀬さんにはお目にかゝりたくはありません……」と佶ぱり申上ると、其お方も太層恥ぢた御樣子で「さうおまいの樣に覺悟がよくッてれ、却ッて頼んだ私の方が恥かしい程だ、それなら何分頼む」「よろしうございます」と夫れからすぐに使をやッて柳瀬さんを家へお呼

び申して、さんざッぱらお待たせ申した上句心にもおいアノ愛想盡し、嘸此春を畜生にも劣ッた恩知らずだと、お怒りなすッていらッしやるでせうが……此れも浮世の義理、奥様の御心配の一伍一什を伺ッてハ、妾ハどうしても今迄の様に、柳瀬さんをお呼び申す事は出來ない、また憖じお呼び申すと、却ッて未練を増す道理とヂッとこらへて、アノ通りの惡口雜言、おッかさん、妾の心の切なさを少しは察しておくれ、》

云はれて母は二度吃驚《さうしたおまいの心とは妾は今迄ちッとも知らなかッたから……併しそれハいゝおまいの覺悟、決して此母も惡くは云ない……が、そうしておまいアノ春坊は此後どうする積りだい?》

云はれて小春は泪を浮べ《春坊かい……アレはあアやッて今迄の様に里へやッておいて、學校へでもやる年頃になッたら引取ッて……なアーに小供の一人や二人……どうでも妾の痩腕で……》

聞いて老母は喜びの皺を寄せ《さうおまいが云ッてくれると妾も大きに心丈夫だが……併しこれから春坊は……》

跡は母の言葉も端なく泪に掩はれて仕舞ましたが、氣を取り直したか《アヽ　とんだ長話でモウ夜明に間もあるまい、お春此處を形附けて早く寐るとしやう》《アヽ……》

と力なく答へた唄妓小春、恩愛にむせぶ涙の雫か、小雨の軒打つ音のみ、いとしめやかに聞こえて居る

ばかりです。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

今迄迷の雲に包まれて居た柳瀬雄三郎、偖てはさうした情男が小春に出來たのか、小春に限ッてそんな……とは大きな己れが愚痴、そんな性根の腐ッた女と片時席を同じくする譯には行かぬと、怒氣に足の進むも逸早く家へ歸ッて見れば、常時に變らぬ妻が款待、よく聞いて見れば、小春には芳川といふ情男がある……それ聞いては尚更、憎ッくい奴、引ッ捕へて吠え面かゝせうとまで思ッたが、それも大人氣ない……とさアかう思ひ返して見ると、人間は正直なもの？　妻吟子のする仕打今迄と變ッた事は無いが、雄三郎には非常に變ッて見える、朝起きて顏洗ふ時から夜食仕舞ッて眠に就く時まで、世の中にこれ程親切な可愛げな、己のが手足も同じ樣な女子があらうか？　こんな親切な、可愛げな女子を今迄どうしてアゝも憎くかッたらう？　厭やでありたらう？　これと云ふのも元をたゞせば、あゝした惡魔が所業かと思へは思ふ程、夢は醒め家内和合して柳橋の方へ振り向くのも厭やになッたとはテモキッイ思ひ切りのよさ……外にヒケる處が無いから自然職務を勉勵するから、同僚中の評判もよく、此春一等昇進した其頃から、吟子が身重、殘んの色の姥櫻、美しい花葩名殘りなく散ッて、今は櫻ン坊チラホラ梢に見えるとはめでたし〱。

◉驚く鷗

水蔭亭主人

（上の卷）　涙の様に見ゆる山々

避暑てふ事世に流行てより、其名愈々高くなりし、上總の國鹿野山上、東の方の隅に當りて、廣やかなる平地あり、苅やらぬ夏芝の、緑色もて封ずる中に、鐘草と山百合とハ、眞白なる花咲せて、共に色を競ふてあり。近頃植たる杉の若木も、蔓草に枝を縫れて、葉ハ織り出す青錦の、風に吹れて綻ぶるも、皆興ある眺ながら、苔蒸たる石碑の横、丸木づくりの腰掛の前より九十九谷を見降したる、其景色の面白さハ、山中一の見物にして、他に又この類なからん。

この平地を西より東へ、横切たる路の傍に、大方朽たる木の鳥居の、危うげに立ちてあり、續て辿るは小山にして、松の老樹杉の大木、恐ろしき程繁れる中を、細く通ずる石段の、去年の枯葉にうめられつつ、二百餘階も上に延たり、そを登りたる頂にハ、白鳥と云ふ少さき社、前の鳥居になほも倍して、あれたるまゝに一坐のをさへ、實に白鳥の名にめでゝや、鳥ハ軒又額の裏に、白きをほこりて巣をつくれハ、蜘蛛も同じく軒より枝、枝より鈴の手綱をあて、張る其糸の力強に、風のさそひも何のそ

の。

此所は少しく木の間を離れて、空行く雲の見ゆるなれば、火蓋の落ちたる石登籠も別に苦にとてならざれど御手洗に水はなくて、只蛐蜒の跡を止め賽錢函の木の葉にうもれ、山蟻のつたふを見ては、詣づる人のなきを悟り、心細さは髪の根に立ち、恐ろしさは爪先よりぞッと身にしむ山風は、夏とし云へど冷やかなり。

鳥か、鳥の鳴音か、否左にあらず、空ふく風か、否左にあらず、不思議や社の裏にあたりて《アレ……》

と云ふ叫び聲して此所へ飛來る其物は、下女體の若き女、少しをくれて細き喉より《なんだチイ、何んにも居ないじやアないか》

と云つゝしづ〳〵と歩み出るは年の頃十七八縮緬にしだれ柳を、こまかく染た一重衣に黒繻子の帶しだらに〆て赤ィ下紐の見ゆる所、チト古風の出裝ながら、頭はグッと氣取ッた束髮、一本さした薔薇の花にて、大概身分の目當はつけど、よく知れぬは此人の心、よく知たるは此人の顔にて、雑と玆に誌して見れば色は餘り白くはあらねど、淡りつけた花の雲に、めつきりと艶の見へて、天然の紅唇、眞白なこまかき齒は、これに比べて又一段、パッチリとして目通りし鼻など、おあつらへの美人なり、先なる下女體の女は一寸身震をして《インエ、居ましたヨ、どうも大きな……大きな蛇》

跡なる娘はムッとした思入にて《なんにも居ないのに驚イてさ、逃出したり……餘ッ程お前は精神が亂れてるヨ》《インエ、貴孃、どうしても居ましたヨ、鳥度杉の木の下の……》《アレはお前木の根だァチ》《木の根ですと……マー、……妾はドゥしても蛇だと思ひましたヨ、全體あんな所へ木の根があるッて惡ィんですものチ》《トンだやつあたりだチー、しかしお前は蛇はこわくなィッて夕も意張ッたトやァないか、今日に限ッて急にこわくなッたの》《そうドやァーありませんが、不意でしたから、それに貴孃此山はさびしくッて……》《そう、いや——凄ィのチィ》《だからお止あそばせッて申たしやァありませんか……此山は土地の者でも、めッたに登りませんヨ》《妾はこんなに淋しくはないと思ッたからサ、だがこうやッて登ッてをくと東京へ歸ッてお話が出來らァチ》《貴孃はそれでよう御座ィましようが妾はつまりませんワ》

太き首を低れ太き手を懷にさし入てホッとつく太息は美人が說敎の糸口となりて《お前だッて何年までも因循して旅宿の下女をしても居られまィ、一ッ奮發して東京へ出て御覽な、左樣すれば……》半分云せず眞顏になッて《インエ、いけません、この間も御客さんが見晴臺から橫濱の方をお見なすッて、ッヒ一またぎの樣に見へるとおつしやィましたが、ドーふんばッても東》《ふんばる、ふん……チホヽヽヽヽふんばるッて》

眞地目の論鋒此所に碎けて、笑の旗色面に飃へる、《貴孃そりやァ可愛そうしやァありませんか、妾に

そんなむづかしイ事をおつしやッたッて」

とは理のある下女の詞に「しかし、メード、奮發位は知ッて居なィと不自由だアチ」

とは娘が無理な望なるべし

さてもこの騷にて暫は二人詞切て調子の拔た穴ふさぎに、娘は四邊を見廻しつ古びたる繪馬などに目を止て居たりしが不意に下女にむかひて「モー〳〵碁はお止なすッたかしらん」「お親父樣ですか……モー餘ッ程になりますから」「ジヤ――歸うチィ、だがお待ヨ、御父樣はまだ此所へはお上りなさらないだろう……これは面白ィ事が出來るヨ

と云つゝ懷中へ手をさし入れ何か尋ぬる樣なりしが「アヽしまッた、ツィ忘れて」「何をお忘れなさッたの」「鉛筆を」「鉛筆を何にあそばすの」「鉛筆で此柱へ名を書ていてサ、それで宿へ歸ッては何にも云ないでをくのさ、そうすると今度おとつ樣と登ッた時に、實はお先へ參りましたッて不意に出て面白いぢやアなィか」「チホヽヽヽそりやア面白う御座ィますチィ、……だが鉛筆とかゞなくッちやア……」「……お前其釵をお借なチ、それではりつけてをこう」「これだけは眞平、曲ッてしまィますから」「曲ッてもよいではなィか、一寸お借、一寸お借……お借ッてば」「イヱ、こればかりはいけません、エーどうしてもいけません」「いよ〳〵お借でないとこうするヨ」

あられもない貴女の有樣、活潑と云ふも古し、お轉婆と云ふも愚、はしたなき下女を相手に、キヤッ、

キャッと云ふ大さわぎに、以前のこわされ何處へやら、消て雪てふ肌さへ、見へつ隱れつ風のまに〳〵」まだ新ィ夏服のエリカザリに、金鏈のキラをかざり、縁廣の麥藁帽子を、後の方に頂きて、一握の黑髮を、額の上にバラつかせ、櫻組のゴム靴に、光をはなつ一人の書生、片手に絹の半拭を摑み、片手に蝙蝠傘を杖となして石段をのぼり來る

以前の貴女は下女を追ふて降んとする出逢頭見合せる顏と顏《チヤ……鶉居君トやアありませんか》とは貴女のかけ詞《ヤ、伊砂さんですか、これは奇遇だ》とは書生の受け詞

莞爾と笑ふと見しが、いつの間にやら兩の體の、間にかゝる手と手の橋に渡り合ふたる挨拶は、さすが下女には知かねて不思議な顏も無理ならず、さても書生はハンカチーフで汗を拭つゝ《大へん淋ィ所ですチィ、貴孃は何樣して此所へお出なさッたの》《感心でしようこんな凄ィ所へ登ッて》《左樣……ですが貴孃、周章て下の方へ降りかけなすッたトやアありませんか、アハヽヽヽ》《インエ、今のは左樣云やアんりませんヨ……》

と云つゝ笑ふて居る下女を上目で睨み《モー借おイヨ、……貴郎鉛筆を待ておいでなさイますなら、ドうか》《待ッ居ますが何用なさるの》《その、紀念に名を誌してをきたイのでス》《それは易う御座ンすチィ私もどうかお跡へ》《イエ貴郎どうか、イエいけません、貴郎のお跡でエーどうシテも、そん

なにおつしやッては妾は止めますヨ》《それではお先へ書きますヨ》と捨詞種々ありて杜に誌す筆先にあらわるゝ字を見れば「鵜居駒次郎」次にしるす娘の筆には「伊砂涙子」とあらわれたり《出來ましたチー（立派）にサー下へ降りましよう》《エー參りましよう、……チヤ、お松は何處へ行ッたのかしらん》《アーあれ御覽なサイ鳥居の所へ降りて行ッてます》《チホヽ、ヽ、これは大笑ですチイ》《所謂、粋を通して當らざる者でスチイ、アハヽヽヽ、サーあぶなう御座ンすヨ、此手につかまッておいでなさイ》《ほんとに劒呑ですチイ、ジヤ――つかまりますヨ……然しお氣の毒でスチイ》《ナーに男子が婦人を保護するのは義務ですものを》

この長き石段を降り行く其間に、一寸二人の身上と關係とを書しるさんに、この娘は或省に勤めて、中々巾のきくお役人、伊砂方一と云ふ人の一人娘にて、母人は何とか云へる橋の邊に御住居ありしとの事なり、隨分一ぱいに教育を施されしものと見へ、非常に意氣が過て、束髮と洋服とは、通學せる女學校中、一番槍との御自白なり、既にこの鵜居と懇意になりしも、交際會の爲めとかにて、今度父上を進めたて、山上へ避暑のお樂みも、餘程高尚な議論ありしと、又男の方は或る官立學校の生徒とかにて、國より出し二三年は、評判の强勉家なりしも、フト小說熱に浮されて當時は非常にお艶を初め、變化したとの評判なり、

かくて二人は漸く下へ降りて彼の芝原、杉の木の中、石碑の横を過て、丸木造の踞台に腰かけ、九十九

谷を見降して《どうも良ィ景色ですチィ、一歩進めば山が逃出し一歩退けば山が追ふて來る樣ですチィ……綠の小山の間に青ィ田の見へる處……アレ御覽なさィあの曲ッた赤松》《貴郎のおつしやる事ハ文章ですチィ、チホヽヽヽ》《イヤ文章ッて、文章にも何にもかけるもんですかアレ〳〵雲の影が景色を變化させます》《チホヽヽほんとに絕景ですチィ、瑞西あたりでも恐くも斯んな所はありますまィ、……チヤ〳〵見る間に霧が懸ッて來ましたョ、あの霧の中に見へる山は何處ですチー》《あれは何んでしョー鋸山でしよう此方のが小說上有名な安房の富山》《左樣ですか、行ッて見たィ樣ですチィ》《お歸には木更津よりか金谷からお出なさッた方がよいでしよう、其時は鋸山も見物が出來ます》をりしも鶯の一聲《チヤ鶯が居ますチィ》《鹿野山は夏の鶯が名物です、チヤ〳〵氣を取れた間にトウ〳〵霧が懸ッてしまッた殘念〳〵》《景色が見へなくッちやア面白う御座ィませんチィモーぽつぽつ行きましようか》《割愛〳〵》

名殘をしげに踞臺を離れ箕輪の方へ立去れり、此時石碑の後より朝鮮帽子を目深に冠り垢つきたる浴衣を着たる一人の壯士あらハれ出《咄、何等の痴體ぞ……驚く可し今の有樣、ウー兩手を組んで齒ぎしり轟く、慷慨の情面にあらはれ、絕がたき有樣にて睨んだる其先には霧も左右に開たり》

中の卷　（海か山か。一面の霧）

霧深く山を包みて、綠と云ふ色今いづれにある。底知れぬ谷かき消されて、高き峯影を止めず、木の枝

をつたふ雫の落て、下なる草を靜に擲けば、左に流るゝ水の音も、今日ハ右かと思ハれたり、只一面の夢の中に、此所いづくぞと見れども見へず、心を定めて窺ふ耳にハ、心細げに名乘出る、野牛の聲こそあわれに入りぬ。

松を懐きて蟬なきそめぬ。濕ひたる杉の上に、濁りたる日の姿も見へたり。吹寄る風のある毎に、立迷ひたる山霧も、次第々々にうすらぎて、疎に竝ぶ木の間より、漸見へそむる景色ハ、佐貫の里まで續く山の根、たかく低く、ひきく高く、下に行く程小くなりて、末ハぼかしの烟こそ、家ある方の表なり。この家のある里を離れて、雲かと疑ふ江戸の海、茫々として横れば、鳥にも見ゆる船浮びて、面白さ遠見を造れど、かなし、木の間に限あれば、道傍に立つ草屋の軒にて、全く影を止めたり。

抑も、このあわれに荒はてたる草の屋ハ、簑輪より十町ばかり降りたる「鳥居さき」と云へる處にありて、此所安房へ行く要路に當れば、往來の人の繁をたよりて、茶を賣る老母の出店なれど、今日ハ朝よりかゝれる霧に、人來なしとやあきらめけん、山を下りて未だ來ねば、薪折る音の更に響かず。

今まで氣もつかざりしが（心づきしとて一面の霧の中）小家の後の草の上に、年まだ若き一人の女、玄たゝる袖の露をもはらわず、息たへだへに横れり。髮ハ亂れてかゝる面ハ、青を染て物すごく、紫色の唇ハ、白き前齒にたゝまれて、なほも眞芝の艶まかせ。其後に腰をかゞめ、介抱なす一人の男、これハ先ッ日白鳥の、社の前にあらわれし、異樣なる書生にて、今日ハ帽子をぬぎ捨て、信切そうに背

をなでつ《コリヤ、こりや。氣を慥にもたんか、コリア女、チ――イ女、》
女ハ漸く口を開き、之が答を爲さんとすれど、聲ハ喉の管をかすりて、ハッきりと聽取れねば、書生は大にもどかしがりて　寳丹を捜り出し、口元にかゝる髮毛を掃ひ、紫色の唇にすりつけて、同じ掛聲を操り歸すに、今度は力づきて、舌の先を重げに動し《み……み……水》《水な。コリヤ平降。今やるぞ。……水……エート一寸待て。……水。チヨッ近所にあればいゝが。チッと今。今やるぞエ――マア誰か來れば宜いが。……そうだ此小家にありそうだ、取ッて來う。イヤついでに小家までつれて行ふ（草の上に寢て居るハ惡イ）サ此手へつかまッて、イヤこの肩へ……ムウ――立てなイか》
この書生日頃の力自慢を、此場にもあらわさんと、女の脇の下に兩手をさし入れ、腰に充分力を入れて、立んとすれば瓢路瓢路々々
これはと思ふそれと同時に、前を過る若き男女共に洋服の出裝にて、睦じく語りて居しが、此體を見て二八一度に、顏をくずして吹出す笑。書生は之に氣もつかず、佳き處へ人來り、力を借んとふりむいて、見合す顏に　忽に、赤くなりたり眼の中、青くありたり額の筋、思はず握るこぶしの強さに、女は閉たる目を見開く
この體に洋服の男女ハ、倍々笑の聲を高め、何か互に密言つゝ、下の方へ行きながらに（野路の露）と云へる新體詩第六句目を幾度もくりかへし〳〵

（……草葉に宿る其白露を……）
（……怪しの蝶の吸ふ事よ……）

これを聽や忽に、書生ハ女をふり捨て、跡を追んと走りかけしが、二足三足あとがへり、《ウヌ我を嘲弄したな侮辱したな、ウヌ、イ、ナ、ナ、なぐり倒してやる奴だが今更此方を捨ても行れず此所まで介抱したのだから捨て行くのも不人情。ナニなんだと「都はなれし山里に、あやしの蝶の舞ふ事よ……」だとチョッ失敬極る失敬な……失敬なシッ……シ……》

くやしげに見送りて、後ドさる足元に、つまづく女。氣をかへて。この度ハ轉びもせず、小家に女を運び入るれば、果せるかな桶に水。これよと杓にて酌みあぐれば、其手にすがりて、がッぷと一口、書生も片唾を飲み下して、《ドーだ氣がついたか……》《ア……あり……ありがたふ》《そんな事はどうでもよい。が全體何樣したのだ何處が惡ィのだ。ウ、腹が、アー腹が痛いのか。でなィ……腹かフウ——子持なのか。そうでなィ、ウ腹が空ッたと》

苦り切りたる顔ハ碎けて、笑の波の溢れかゝるを窮屈そふにをさへつゝ《ツーか空腹でツ——かそれハ烏度い、此所に握米飯を持ッて居るから遠慮なしにやるがいゝ。だが澤山とやると後の爲が惡ィ。ナ——に今朝田倉村の楠見物に行くつもりで宿屋を出た所だが又出あはしてもかまやアしなィ。ド——だ少しハ佳いか》《ありがたう御座ィます信に有難う御座ィます此御恩ハ此……》

凡そ空腹ほど神變不思議な物はなし今に死なん樣の人も忽に歸る其はやさ《イヤそんなに禮を云ふにゝ及ばぬが全體お前ゝ何樣して腹が》
と問ひかけしが心づきて、急に他を云ふ《お前ゝ全體何國の者だ、又何國へ行くつもりのか》《ヘイ妾ゝ房州金谷村の漁師安右衛門の娘でお岩と申しますが父が久しイ事煩ひましてそれでもッて家業が出來ないもんですから妾が海へ行ッてかせイでゝ居ましたものゝ。女の手でゝ充分に行きませず夫に病氣も次第に惡ふなるもんですからドウしたら宜ふと實に案ドて居りましたが。或夜の夢に此鹿野山の御藥師樣へお願をかけりやァどんな治らん病氣でも治ると云ふ有難――イ夢を見ましたので。夫から後ゝ一生懸命に信仰致しましたが……貴郎樣今でゝすッかり快くなりましてイヤモ――爭れぬは佛樣のお影コリヤ御禮參りをせねばすまぬと昨日の晝頃からボッ〱登ッて參りましたが二里の間ゝ人家ゝなしソレに細道が幾個もありますからッヒ道を踏み迷ひコレハマ――とんだ事をしたと途方に暮て居ましたが……其内に夜にはなるし……霧もかゝッて來ますると。ですが只無茶苦茶に山中をぐる〱廻ッて向不見に行ッたもんですからト――どう腹を空し朝方此所まで來た事ゝをぼへて居ますが迹ゝなんだか夢の樣で御座イます》
田舍者の常として、句切もなく一本調子、のべつにしやべり續けしかば、書生は大に驚きて、又も疲れて倒れやせんと、心配そふに見つめ居るも、無理ならぬ事ぞかし。されど今の處にては、別條のわらぬ

樣子に、漸落着けるをりからに、此小家の主、茶を賣る老母、霧の晴しに便を得て、此所へ來るに會しかば凡て之に委せをき、書生はやをら去んとするに、お岩は忙て止めつゝ《手前話に實が入りまして……どうかお名前を……》《イヤお岩さんとやら其父親の病氣は佛の力で全快したかはしらんが全く佛にのみ依賴せずと注意するがよい、我の名を聽くよりか醫者に藥を聽てをく方が餘ッ程益になる事トや。ソレにお前も氣をつけんと不可ぞ》と親切なる詞を遺して、まだ消へのこる霧にかくれ、姿は見へずなりにけり、老母ハお岩に打向ひ《あの御方ハ箕輪の富士屋と云ふ家に暑中ハ泊ッてお出なさる、書生さんで越美と云ふ御方だが、よく此所へハ遊びにお出なさるのサ》

イデヤ作者ハ見へずなりし、越美が行末を見出して讀者に御報知仕らん。イヤ其前に越美は如何なる人か、夫を明めるも肝要なり。

越美の名は定勝と云ひ、年は二十一とやら、元中國の生にて、早くより東京に出たれば、國の訛は拔けたれど、さりとて都の水にも染まず、珍竹林の出裝に、根ぬきの杖を携へて、市中を往來するものから、友人仲間の評番は、「氣取奇人」と云ひあへり。されど元來が輕薄にあらぬものから、或點に至りては、非常に信切をほどこす事あり（鳥居さきの介抱）又非常に非憤する事あれど（九十九谷の慷慨）其奥底を捜り見れば、實は奇人と云はるゝが、嬉しさの餘響なるべし。世間にこの類の人幾人もあるものにて、

イザ眞の舞臺に登れば、二の足を踏むこと多し。

さても越美は、富士屋と云ふ宿屋の一間に歸りて、足をのばして休むをりしも、隣の室にてヒソ〳〵と、語る男女の聲に氣をつけ、聽き居る耳にはかくとぞ入りぬ、《マー宜しィではありませんか、そんなに私の所をお厭なさらなくッても……よいだろふと私れ思ひます》《さらう……さらう、なんと云ふ事はなくッてヨ、ですが餘り長くなるト》《だつて何んでショウ、父君は散歩した事れ御存なんでショ―、なら、かまやアしますまィ又昨日の事でもして遊びましよウ》《昨日の事……ア、輕多》《イソエさあの……》《あの……チホ……あれ、イヤですヨモ――イヤ、どふしても貴君にれ勝なィから、……厭なこッた》《ソリヤ勝てるはずがあィの、アハヽヽヽヽ》

相違もなし、九十九谷の前、今も今とて鳥居さきにて、出會し男女に相違なしと、悟る越美の顏は、雷の樣ある聲張あげ《是はしも――人にやあると――能く見れば――あらぬ獸が、人の皮さる――》さても窮したり唱歌の復讐。得意然と吟じ終れは、隣室の男女は驚きて、暫詞は切れたるが、つなぎ止めんと男の方より《蝶あの……草葉の》《そウあやしな》《アハヽヽ》《チホヽヽヽ、蝶に怒つけられぬ內に御暇としまショウ》《そうですか、ジヤ――留ますまィどうかお父樣へよろしく、そうして今度はお松だの皆んなつれて昨日の復讐にいらッしやィ》《キッと來ますヨ……それはそうと貴郞はイッお歸りなさるノ》《東京へですか、エ――と二三日したら歸るつもりでス》《なるべく御一所に行き

たいもんですチィ……さやうなら》
障子を開きて出る女、送り出る男の通るを、待設けたる越美定勝、勢こんでつき當れば、聲に應じてつく尻餅、これと同時に鋭き聲《失敬な君は失敬な事をするナア》《失敬だと。ドッチが、失敬だ》《ツ――君の方が失敬だ》《ナニ……》《コリヤ何も腕力でやらんでも分かる》《くそッ……》《待ち玉へ》

涙子は側より金切り聲にて《あなた失敬ぢやァありませんか》《くそッ、どッちが失敬だ》

鵜居は少し愚弄の氣味合にて《ハヽ――鳥居さきの事を根に持ッて御坐るナ、笑ふべき理由があるから笑ッたのが失敬か》《笑ふべき理由がある、……だまれへ惻隠の心を出して……》《ツ――かァレが惻隠の心か》《だまれへ、貴様は何んだ、九十九谷の前……白鳥の石段》《あれか、アレは即ち婦人を保護する男子の義務を盡したのだ》《男子の義務だ、チヨッ西洋主義に心醉した馬鹿野郎》《これはケシカランいつ西洋主義に心醉したか、よし一歩を譲りて僕が西洋主義の者とした處で其西洋主義がなせわるイ、其欠點を上て見玉へ、》《又馬鹿野郎とは人を罵詈したな》《馬鹿だから馬鹿野郎と云ふたのだ、苟しくも神州に生れた男子豈に唯唯として洋奴の糟粕をなめるとは實に貴様は亡國の奴だ、西洋主義の毒を流す事を知ッて居ながら、情の爲に、愛の爲に、之を行ふとは亡、亡國の奴だ賣國の姦臣》《僕が問の要點に答へられんか、イヤさ貴様の詞は亂れてるナ――さ心經が亂れてる狂人だ》《狂人だと》

すでに掴みかゝらん有様なるに、浪子は思ず聲を出し　《チョイと誰か來て被下ィ、はやく、ハヤク》臺所より走り來る此屋の亭主《マ‖‖お待なさイ、イエ　サマ‖‖お待なさイ、なんで御坐ィます、つまらなイマ‖‖マ‖‖お孃樣はやく鶉居さんをお連なさッて、コレサ越美さん》《エヽ。わかッた……エヽワ、こりや鶉居とやら果して婦人を保護するの義務を盡すか》《マ‖‖マ‖‖私におまかせなサイ》《イヤこりや改ッて聽のだ》《無論。みんなと、無論。……しかし貴樣は非常な道德家だな》《打ヤッてをゝきなサイ、サ‖‖妾と一所に行きませう》

(下の巻)　山の樣に寄せ來る浪

後は立切る鋸山。前の一面の海原に、つき出たる明金崎は、今満潮に半かくれて、鳶色なせる岩の面を、打て碎くる浪の花の、咲けば散り、散りては咲く。見渡せば相摸の山々、通路繁き汽船の烟の、中を通トていとかすかに、空との間に畫してあれど、水に終りの姿は見へず、只沖間なる岩の影より、白鷗の一群高からず飛出て、立迷ひたる烟の中を、縦横無盡に突て入る。

この面白き景色を、目の前に控へながら、柴もて厚き垣を造り、家の一面を蔽ひたる、一軒の小家あり。(抑もこの厚き柴垣は、此所のみに限るにあらで、村の大方は斯くなしたれば、物慣ぬ都人の目には、いと興なく見ゆるべけれど、此所に生れて、此所に死する、里人の慣たる眼は、景色の眺を望むにあらで、濱風の砂を送り、網の目すくふ妨げを、厭ひてよりの仕業なるべし)片貝は蘆の家根となりて、雨の入

る穴を塞げば海芽は竹の柱に倚りて、風の通る際間を隱す。障子のなき窓に菅笠のかゝる。曲りたる軒に腰蓑のつりある、其入口に船道具の、混雜に竝べある。裏手の柳に網の干しある。以て住む人の稼業は、漁師なること明かなり。さてもこの有様にては、家の中は如何に亂れ、如何に汚くあるやらんと、疑ひは起るべけれど、思ひの他に秩序整ひ、清らかに掃除してあり。

眞中に切りてある圍爐の上に、さがりたる自在竹は、煤に染りて其艶よく、爲に安物の古土瓶も、何様やら價ありげあり、この自在竹の上にあたり、三升餘も入るべき、大きなる瓢箪をつりてあるは、これも艶をつけなんものと、主人が大方の苦心なるべし。時しも土瓶に滿てある湯は、其熱極度に達したりけん、湯氣高く吹き上る、其音を聽きつけて、裏より馳せ來る一人の男は、年の頃は五十餘、茶色の髪をチヨン髷に結び色の黑き體は、あはれ白地の浴衣に包まれ、雪と墨てふ古き洒落の、標的となれり。

さても爺は忙だしく、土瓶をはづして火を埋めつゝ《モー茶が湧いて來たのにお岩は何をして居る事か、早く歸ッて米飯にすればよいに》

と云ひつゝ表の方を打見やりて《ドやが。我の子ながら感心な者だ、この暑ィのに休みもしねィで、山へ石を積ミに行き、夜は夜で海へ網うち。大概の者なら體がつゞかんが。マー男まさりで丈夫だから持ッて居るのだ。……我も早く働ィて彼に樂がさせたィが、患ッてからと云ふものは、何様も仕事に出る氣がない、これでは後があんじられてイヤこまッたものだナ》

風通しの惡き小家の中に、火は赫々とおこりてあり。さなきだに三伏の日中、暑を水邊、山中に、避行く人の多きに反して、圍爐の側に思案せる、爺の心ぞ氣の毒なる。時しも門口に娘の聲にて、(父さん今歸ッたョ。そして大事な御恩人をお連申したョ。早く出て御挨拶を……)

と云ひつゝ、急ぎ足にて入り來るは、娘のお岩、扨て其客人は、彼の越美定勝なり。定勝今日の出裝は、昔、親父が禮服なりし、麻の白地に五ッ紋の帷子を、筒服になほしたるを、可笑げに着流したり。定勝元來衣物をたゝみしこと皆無と見へ、腕のあたりに幾個となく輪の様に皺よりたり、併し感心なるは〆たる帯にて、古形ながら博多織の、崩れざるを結びたり、定めて國粹と云ふ心なるべし。例の朝鮮帽子を右手に持ち、肩より懸たる提皮籠の、赤と黒とのインキに染り、斑色なるを左にをさへつ、上り口に突立たり。お岩は再び父に向ひ(このお方が越美様とおつしやッて鹿野山でお助け被下ッた御恩人。はやく御禮を云ふて被下ィ……モシ越美様これが父の安右衛門で御坐ります)(このお方が越美様か……ヘィ越美様まことにむさくろしィ内では御坐ィますが何様か此方へサーサずうッとお上りなさッてィヤ、其處では御挨拶が出來やせん)(あなた、マー御覧の通りで御坐ィますが、お足を御洗ひなさッて……まだ船の出まするには餘ッ程間がありります)

越美は與なげに腰かけて、皮籠を肩より端すや否や、手拭もて顔をふけば、お岩は側より新しき、澁團扇もてあふぎつゝ、(お暑ふ御坐ィましたろふ、只今は暑ィ盛りで御坐ィますから)(中々暑かッた。も

チ萩生村わたりまで來た時は乘りをくれてもエ、から休もチと思ッた》《左様で御坐ィましたろふ……お岩……何か……越美様には何様してお目にかゝッた》《妾が山から下りて明神の前まで來た時、鳥度向ふから御出になッたので、無理におひき止め申したのですが、何んの御愛想もなく、又御禮をするにも心にまかせず……》《そうか夫は鳥渡よかッた。それで越美様、あなたはもチ東京へ御歸りで御坐ィますか》《そふだ、今日氣船で歸るはずだ》《それはマー殘念なこんだ、せめて一晩でも御泊り被下ればのーお岩、御口には合ふまィが、おぬしが取ッて來る新ィ魚でのー》《それに鋸山の羅漢様……つまらぬ處では御坐ィますが十州一覽臺なぞへ御案内をして》《イヤ好意はかたドけないが、急用あるから……》越美でさへ虚言をつく世。ハテ《御急用とあれば致シ方が御坐ィませんが、今日は沖の摸様も余り能くなィ様で御坐ィますし、そふなくッても房州の沖合は暗礁が澤山ありますしそれに名代の難所で御坐ィますから、御待なさる方が……へゝへエー》《ウンニヤ荒くッても船に乘ッてしまへば僅か五六時間で東京へ着くから》《所が其船にのるまでが劍呑で御坐ィます》《かたドけなィが今云ふ通り、急用があるから……チ＝今、滊笛が鳴ッた……縁があッたら又逢ふ》

と急ぎて、立出んとする様子に、安右衞門は暫しと止め、《では無理にお止めは申しませんが少々お待なさッて》、

と圍爐の上なる大瓢簞を、取り下し煠うちはらひて、前にさし出し《これはまことにおドやまになりま

しようが、東京への御土產。お禮の表しまでに、さしあげますれば、何樣ぞお持なされませ』《フーこれは珍しィ瓢簞だ……が……禮と云ふては……』《名目はなんとでも宜しィでは御坐ィませんか、夫をおトやまでも御持被下ィませば親父までか妾までどの樣によろこばしゆふ御坐ィましやう』《成程志を無にも出來ん、では、これは慥にもらッて春の花見、秋の月見、瓢乎瓢乎で鍾愛しやう》と笑をのこして立出る、越美。親子二人は濱邊まで。跡を傳ふて送り來れバ、越美はこれにて別を告げ出んとする通船に、飛んで入れば其儘に、舟は沖へと出て行く。

偶然か、抑も亦互に知りての事か、今しも沖に碇泊せる、汽船めがけて漕ぎて行く、通舟の其中には、鶚居と伊砂の二人、睦じそふに乘りて居る、越美は之を未だ知らずか、遠くありても濱邊を去らぬ、お岩親子を眺めつゝ、安右衛門が注意つけし、海の荒さの信なるを、獨り心にうなづきつゝ、他に餘念なきが如し。鶚居も亦伊砂浪子も、彼の奇僻なる書生越美が、此舟にありとは、知らでかありけん、再び鹿野山上の、出來事なぞを語り出で、幾度も話の中に、越美々々と叫びたるが、其最後の一音は、正しく定勝の耳に入りて、ふりむくはずみに見合せる、顏と顏と顏の落合ふ。

時も惡し立ち來る浪の、舟を巖に打つけんと、勢ひ鋭く寄せて來るを、心得たりと船頭が、水棹以て張んとする、これと同時に三人が、他の乘合のあるをも厭はず、再び起る二回の爭ひすでに、斯よと立上れバ、何かは以てたまるべき、岩に碎けて舟は微塵。事慣たる船頭は、子持の婦人を肩に載せ、磯を目

がけて泳ぎ行く。

泳ぎなれたる乘客は、大事な荷物を肩に載せ、磯を目がけて泳ぎ行く。

泳ぎを知らぬ三人は、多少の潮水飲みつらんが、幸にも岩の上に、辛じて取つきたり、されどこの岩と一ッは、十分の九分は水にありて、今にも高き浪の來らば沈まんこと是目前まして、敵と一所なれば。

越美は幸ひ安右衞門より、受たる瓢を力にたのみ、磯を目がけて無茶泳ぎ。

鶉居も今ハはや、人を顧るの氣は散り失せ、只一心に我が身を、助けん事のみこみあげて、ぶる〳〵と震ふのみ。

浪子は何の思慮もなく、死聲にて一生懸命《たすけて――、たすけて――》とかるゝばかりに叫び出せば、其聲の心すごきに、鶉居今はたまりかね、浮遺りたる船板を、しッかりと懷き〆て、これも磯へと無茶泳。

これを見る浪子の心、さても薄情な人、エーマー薄情な。噫生死の境になれば、人の心が分るとは、眞に、眞に、今の今漸く知れた、噫、道德家泳ぎ去りぬ、婦人の保護者泳ぎ去りぬ、あれあの山の樣に寄せ來る浪は、妾を載せて奈落へ送るか、あら立て行く鷗の樣に、妾にも羽根のあれよ、エーマー眞實妾は死ぬる事か、死ぬる……ほんに妾は死なねばならぬか、此樣な事と知らば、父上の詞に從ひ、木更津から御一所に歸ッたもの。ても薄情な不人情な鶉居に詐れて、空しく此の海の泡と消ゆるか。

煑へかへる心の中。湧出る涙の雫は。黒髪よりしたゝる潮と打まじりて、瀧なす事よ。それその瀧なす涙は、千々に碎くる浪子の體を、ざんぶとばかりにをし包みて、岩より遙か流し落せば、あはれ雪と見られし肌も、花と見られし顔も、あはれ消へなん、さても散らなん。…………

(まことに夢の樣に思ひます、併し便に思ッた人に見捨られ、思はぬ御方に助けられて……)(妾も思はぬ御方をお助け申しました……)

一面の砂の上に、濡たる衣をぬぎもせで、互に無事を喜び合ふ二人の女は、これぞ伊砂浪子孃と、漁女のお岩にぞありけり。

時しも松風につれて、里人の叫ぶを聽けば、(溺死人は一人もなかッた……)

短編小説 明治文庫第二編 終

歌舞伎新座狂言脚本

福地櫻癡居士新著（武内桂舟密畫）

大久保彦左衛門

全一册 洋装大判極彩色密畫美本

正價金廿錢 郵税金四錢

彦左衛門の質樸鯁直なる氣象を、櫻痴先生の雄文を以て、寫出したる一大傳奇なり。從來世間に流布する所は、狂妄悖戻の彦左なるを、先生之を慨し、博く舊記を尋ね偏く逸書を捜して此編を稿せらる。英主、賢相、奸吏、佞官、孝女、忠僕、邪徒、暴客等の業事叢出して變幻極なく、實に快絶奇絶の新著なり。稿成るや、歌舞伎座主は直に先生に請ふて脚本となし、現に名優團十郎をして之を演ぜしむ、以て其絶妙の名作たるを知るに餘りあるべし。苟も幕初武俠の眞相を知らんと欲する人は、早く一本を購讀して、當時の元氣如何を詳にせよ。

●十二時會稽曾我 正價二十錢 郵税四錢

●女楠 附求女塚身替新田 正價十五錢 郵税四錢

●東鑑拜賀卷 附春興鏡獅子 正價十八錢 郵税四錢

●平野次郎 正價十五錢 郵税四錢

●關原譽凱歌 正價二十錢 郵税四錢

●櫻痴滑稽談 正價廿五錢 郵税六錢

明治廿六年十月十五日印刷發行

定價金拾五錢

明治廿六年八月三十日內務省許可

版權所有

編輯兼發行者　大橋新太郎
日本橋區本町三丁目八番地

印刷者　杉原辨次郎
京橋區元數寄屋町四丁目二番地

印刷所　杉原活版所
京橋區元數寄屋町四丁目二番地

東京日本橋區本町三丁目
發兌元　博文館

圖書出版

東京博文館

明治文庫

短篇小説

博文館發行

江見水蔭作

明治文庫第三編

紉客。初嵐
疳癖大守。骨武者
畫師。斷絃
若楓。信天翁
故家水。漁郎
わかき霜。畫師の妻
一夜の宿。雲烟過眼

短篇小説 明治文庫第三編

◉ 劍客

江見水蔭

第一章

片男浪の騒がしき中に、遠雷の音響き初めて、潮の光空に通へば、名草峰の連山あきらかに見え。後より湧出る黒雲目ざし、突入る浦千鳥の引きも切らず。茲に妹背山の經堂より、伽羅岩の石段踏〆て、降り來る大一髻の男。左の肩に竹刀袋荷ひて、其先に懸たるは、三升も入るべき大瓢簞。五ッ紋の一重に白小倉の袴、素足に草鞋の身輕にも似ず、悠々として歩を運びつ、鐵扇に鍔を彈きて、登龍の微吟これは何者。

宗祇は、月を船として、時鳥に渡れよと云ひにき。此所紀三井寺よりの船着場、海に臨む舞臺に、觀海閣の額古びたり。妹背海苔の粗朶に纏ふ、花と見る牡蠣の白さも、沖の方より散りそめて、今は水杭の根にや碎くる。

見渡す漁村に燈火のかすかなるは、龍燈の昔人に知せて、布引の松は彼の下にやあるらん。大男此景を

喜び、手欄に腰を掛けて、欅の柱片手に抱き、口飲我には免して、天を仰ぐ幾度か繁し。

《命、命。》

深底より嬉しき詞。此上には彼の夕立雲、速に來りて和歌の浦一面を蔽ひ、大神鳴に蘆邊の田鶴を驚かし、電光穴に逃る獨蟄蟹を照し、根浮松引裂き、龜石打碎き、海風藤代峯を洗ふの樣見たし。忽にして雲霽れ、雨收まり、又慾は鶴に乗りたし今日の月の吟意見たし。さなくば遺る瓢の酒共に飲みて、語合ふ名士あれかし。よし、凡人たりとも、共に醉ふの人來れよと、君ケ代の太平樂、藻鹽草の數や是ならん。

醉ふて興を放つに物なし。立つて腰間の長刀、すらりと拔きて三畧に目附を定め。右劍左劍、亂劍を舞に作り。右轉左轉、陰かと見れば陽。此人自在の働きぶり、劍の光浪に映るか、稻妻の影劍に映るか。

今や土の香送る雨氣の風、閣内に滿來るを、松風の靈方に切拂ひ、颼々其響物凄し。

《敵手がのぞみだが、誰一人も參らぬには平降致した。よいわ明朝和歌山の城下へ出で、誰彼の用捨なく立合ひ、日頃の鬱氣を晴すと致さう》

未だ劍を鞘にをさめず、立ちたる儘の一息も、四重を守りてゆるやかなり。時に聽く大粒の雨、瓦を彈きて、ばらり—ばらり。沛然引きつゞきての大夕立、樋より溢れて瀧千條、軒を打ッて一面の霧。頭上に裂るは、雷。瞳を破るは、電。瞬間の絶間いそがしき中に、これだ〳〵と拔身揮ッて喜び、一口瓢より

味ふ處へ、濡て飛込む武士一人。家の紋一ッ玉子色の帷衣、腰物ハ黒絽の羽織に包みて、小脇に是を抱へてあり。大男はかくと見て、靜に刀を鞘にをさめつ。

《俄の雨にさぞ御難儀なされたろう》

急雨を望めば、急雨來る。下口か上口か、いづれにもせよ、喜ばしさに掛けたる詞。これに初めて人ありと氣やつきけん。

《まことに左樣で御座る貴殿も此雨にお逢ひ被爲ましたか》

一寸會釋したるのみ、濡し所しぼりあぞする樣。大男見て又も、

《拙者は其以前から、此屋の下に居ましたから、貴殿の樣には御坐らぬ。夏とは申しながら、夜中にお濡被爲ッては、定めてお冷被爲たらう。如何、一杯めしあがッては》

ずか〳〵と立ちて、瓢簞つきつけ。

《如何、御遠慮は無用に被爲て……》

《これは御酒で御坐るか。結搆、忝けなく頂戴致さう》

此人も酒戰の強者、額を擲いて甘露々々。

《失禮をおゆるしあッて、お飲み被下たか。實に滿足致した》

《拙者こそ無禮の段、これも好きな酒故と御勘辨被下れい》

《去からば無禮はお互と致し、打解けてお話申しては如何》
酒に亂拍子の面白く、知らぬ他國に知人多し。
《それは至極結構。御覽なされ雨は小降に相成し、雷鳴も城下の方にて響く様子、今宵は月こそ御坐らねど雨後は又別な物で、アハヽヽヽ、酒の量が進みますて》
《貴殿は餘程おやりなさるな》
《イヤ澤山もやりませぬが、膳香位は出來ますて。家中拙者より達者な者、指に折れば、三人、四人》
《御主君は和歌山侯で御坐るか》
《左様、紀伊家の譜代、加藤大次郎と申す者。去て失禮ながら貴殿は、何れの御家臣、又御姓名は……》
《これは日本武者修業、浮浪の白徒天邊左源太と申す者。以後御別懇に願ひます》
《扨は御修業の御身分に御坐りましたか、それはそれは、さぞがしお樂みな事で……して御生國は》
《武州江戸で御坐る。當春一月に思ひたちて東海道を上り、道々の劍客に一太刀づゝ立合を願ひ。五十三次も事の他長く存じて、先月漸く伊勢路へ這入り、天照大神に武運長久の御願ひ仕り。

紀路にては三熊野、栗栖の山坂を越えましたが、イヤなかなかの難所で御坐るな。それより、田邊の城下、湯淺なんぞにても二三日逗留致し、漸く當和歌の浦へ參ッた次第。明日は御城下へ參ッて諸先生方の御指南を受け申さうと、樂しみに致し居りまする》

《左樣あらば明日和歌山へお出あるか、何より面白い事で、拙者も實は家中の若者を預かり申し、劍道を指南致す者。さればまことに幸ひな事に御座る》

《扨は其道の御人でありましたか、これも玉津島明神の御引合せでがな御座らう》

座をあらためて、叮嚀に一禮なし合ふ。

《見受まする所、其の御袋にあります竹刀ハ、長づくりの樣に御座るが、御流儀ハ……》

《直神影、長沼の門人》

《さては柳川の大石御覺ドたか》

《立合ひまで致した》

《それに倣ふて長劍をお用ひなさるか》

《何んと言はッしやる》

詞荒く、調子高く、兩方睨合ふて、呼吸定まる。

《されば天邊殿、御存ドにも候はんが、我が鹿島神傳直神影の一流は、唯是一心の明鏡を以て、陰

陽の理虚實の法、一刀兩斷にこそ致すに、兵器の長に依りて必勝を喜ぶとは、近頃卑怯千万では御座らぬか》

如何あれば、峯の松溪の柏木、おあど嵐の音にやかはる。天邊左源太ハ、加藤大次郎に問ひかけられ、笑ふて答へず、即事一杯の酒を諳して。

《其樣にむづかしくおはせられな》

《問ふべき事は、何所までも問ひましやう。夫れ劍の德たるや、護身の寶器にして、邪を退くるに勇む。抑も太刀は斷切の畧語、理非決斷の闘する所、即ち當流靈劍の因て生する所なりとは、兵法に載せて誰しも知る所でハ御座らぬか。されば精神一刀にあつまり、飛入直入一氣を以て心とする神影流に、長劍を用ゆる者あり。時世につれて短劍を廢したる者ありと云はれては、當流の大恥辱と存ド、誰にか語りて、我迷へるか、彼が間違ふて居るか、立派に正して見たう、かねて望んで居ました所、はからず貴殿に面會致し、此樣に喜ばしき事は御座りません》

《いや、加藤氏。其樣に理屈ッぽく言はれてハ、なんとお答へ致してよいやら、手前とんと別らなく相成りますて。玄かし拙者が師より承はりたる長劍の利ハ、口で彼是言へる物でなく、實地お立合申した上でないと別りませぬ、それほどお望なら如何、此場にてお立合あッてハ》

《それは面白い事で、いざ御敵手仕らう》

天邊は竹刀、加藤ハ太く短き竹切、兩方身搆十分にして、式の如く禮を終り、立てバ直樣上段に振あげる大次郎。

《こゝだッ》

一聲、此所は時鳥山、天邊は突入る勢を示し。

《青眼に利なきを變ドて、長劍「突」一本參らしたり》

《如何樣ッ………もし拂ッて打入る時は》

《柄で受けて、餘勢を御面一本》

急々多羅利、多羅李急。殘月、村雲、右替左替。極意を盡して打合ふは、獅子洞に入りて洞を出る所。一重は足、二重ハ身、三ハ手にして、四口五眼。心氣力の三堅く守りて、玆に闇夜の太刀の鋭く、勝負いつはつるか知れず。天邊はいらちて聲高に、

《いまだに御合點が參らぬか》

《さらに其利が見えませぬ》

《事面倒なり、然らば武士軍陣の時に倣ひ、長途を走りて止る處、更に立合申さう》

《至極妙。いざや梵天帝釋四大天王、惣じて日本國中大小の神祇》

《殊に伊豆箱根兩所權現、三島大明神、八幡大菩薩、摩利支尊天。二人が勝負ハ長短兩刀の利不

利。御照覽あれッ》

雨は收まりて、星影映る水溜に、涙を散して驀地、走りゆく南──和歌山さして。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

狂亂とも見るべし、勇ましの人々。一里あまりの並木街道、走りつゞけし其名殘ハ、寄合橋の義母子にすがりて、大息二ッ三ッつきたるのみ、酒の醉ひ此時めぐりて、言合せし如く倒る。夢ハ身の意氣地なきを責てか、天邊ハ赫と兩眼見開き。

《南無三寶、氣を失ッて居たか》

忽ち立ちて身構へ、見廻す下に敵手加藤も、泥にまびれて倒れてあり。

《やッ加藤氏》

抱きおこして活一ッ、袖の雫を早速の水。

《加藤氏、氣をたしかにお持被爲れい》

《えい、何程の事あらん》

立ッて空拳を振上げる。

《これ加藤氏、心がつきましたか》

振上げたるまゝ、天邊の顏つく〴〵と打守り、未だ何等の詞もなし。

《如何で御坐る、御正氣か》

漸く合點の行きたるにや、ぱッたりと橋板鳴らして坐り。

《いよ〳〵以て分らない》

《長短の利か》

《いや〳〵此所まで參ッたのが》

第二章

あはれを門の柳に見せて、極意を庭前の古池にさとる、江戸深川に浪人の住家あり。中國の大名に先祖代々つかへ、系圖の朱も長く引きて、當代十一世、天邊左右衞門。過つる年御前にて、不首尾の事ありしより永のお暇たまはりて、いづれの岸にも無據、今の所に謠曲の指南。情けある家老を力に、御歸參かなふを指に折りて、今日か翌日かと待つ甲斐なく、一期ハ四十何歳、枯木流れて西方の客となりぬ。親もなく妻もなく、子は左源太と云ふ、十三に成る悪戯者一人。家ハ借金の方に取られて、四十九日屋の棟に居られず。迷ふは佛より子の行末、其まゝにも成るまドと、遠縁の何某がはからひにて、神影流の達人、長沼正兵衞の内弟子に頼み、道場の掃除番とぞなしける。

左源太の性質、浪々貧苦の中にそだちたるにも似ず、萬事ゆッたりとして酒呑の相あり。笑ふ時は愚、怒る時は霹靂、泣くは心に泣きて、面に涙見せぬ所、此男の貫目なるべし。されば寒稽古の朝、顔洗ふ

盥の氷、一番破りは天邊にして、暑中稽古の夕、長息の殿りは左源太と常に名乘れど、さて不器用者のかなしさは、太刀筋に術と云ふ物なく、一本向の力まかせ、打たるれば打たせ、突けばつかせ、たゞ眞中に立たるのみ。正兵衞常に曰く、汝の術なき所則ち術にして、正を守る心當流の極意なり。俚歌に、不器用も稽古を常に嗜みなば、器用の人を押て行べし、とある。ゆめ怠る事なかれ。左源太も亦、修勤愼行、岩をも徹す梓弓の、引き得るだけは引きしぼりて、百發百中は望にあらず、千發萬發の其中に、只一發の的の黒星射ぬきたしと、我と吾身に誓を立て、勵むこと破る竹刀の先皮にあらはる。玆に幾歳の春の野仕合、冬の兎狩り仕盡して、手の甲の皮、指に渡らず、鐵の筋腕に浮きて、靈劍、切髮、目録まで進みぬ。さて最期の免許を得るは、水中に月を取り、空中に雲を拂ふの覺悟そなはり、さる後ならでは及ばぬ事と、師よりも聞き、我も悟て、二六時中怠る事なく、工風鍛錬に心を碎き、岸の柳を縫ふて飛ぶ、燕の羽風に亂るゝ水の、影に驚く小魚を見て、これだ〳〵と獨悦び、其夜布團を蹴ッて、からからと笑ふ。或時は靜にして沈思默考。或時は月夜烏に飛びおきて、我も知らぬ處へ行きて歸る。既にして大悟すらく、木立打込む大濤の音、枕の下に通はせて、千丈の瀧に荒行の迹を訪ひ。山高く狼の遠吠に四面を圍らし。松ヶ枝の寒月。故城に叫ぶ老狐。總て日本國中到る處の大氣に心を養ひ、正氣の粹を攫みたしと、一日師正兵衞に語りぬ。正兵衞笑ふて、其道を求むるは、却ッて求め得ぬものなり。無心有心の内に得るにあらずば、其急所は知れず。爰に大熊あり、掌を以て蟻をつぶすに餘念なし。後

に狼ありて其虛を狙ひ、飛びかゝらんと幾度かあせれど、さて平氣なるが恐ろしく、己が心の邪を以て、熊にも用意あるやと、輕々しくは近寄らず。ためらふ内に一氣散じて、勇、十の七は滅じたり。殘る三を以て漸くに飛んでかゝれば、熊に不動智の感念ありて、難なく腹の下に敷殺され、又も蟻を弄する前の如し。如何に左源太、此活が分らずば、日本廻國したればとて、何の役にか立つべき、怠る勿れ怠る勿れと。左源太一言もなく、我が心の低さを愧ぢて、これより一心不亂にぞなりける。去程に二十六と云ふ年、初めて免許の卷物を得たり。十三より引取れて、男一匹に育てられし嬉しさ。正兵衞も世話甲斐ありと、一方ならず喜び。此上は希望通り、武者修業に出て、江戸長沼の門人に、天邊ある事を知らせよと、餞別に短刀一口、諸國の劍客へあてたる廻狀一封。旅は身輕なるがよし。

第三章

表は十一間に七間半の道塲、船大工に敷せたる板の間踏鳴して、矢當の聲勇ましけれど、此所裏口の井戸端には、下女を相手に着物洗ふ、大次郎が妹お房。年は十七の娘盛りも、親のなき上貧しき暮しに、早くより世帶なれて、立振舞甲斐々々しく、家内の取締引受けては、紅お白粉に粧ふ暇なく、髮も七日目に結ひなほせど、これは一筋も亂さぬ所、心がけの美しさ見へて、まことによいお孃樣なり。

《辰や、その水を此方へ入れてお呉》

《ハイ〳〵、只今酌みなほして差上ます》

《イヱ〳〵其の殘水でよいの、井戸が深いから、釣瓶をつるのが大體ぢやアないよ》

《どう致しまして、それが妾の御奉公で御坐います物。チホヽヽ水は澤山に御坐いますから、御遠慮なくおつかい被遊》

《チホヽヽでもねヱ度々だから》

上にやさしき詞多くば、下に無駄口の數少なく。心から目を掛て使ふ時は、働く者に影日向なし。

《いつも〳〵御稽古着が汚れるので、洗濯物は絶えた事がないねヱ》

《それにお孃樣、此お召物の泥は、まア如何あそばしたので御坐います》

《あれは昨夜お兄樣が、和歌の浦へ御遊歩にお出なされて、天邊樣と申すお方――あのお客樣にお出會申し、雨の中でお仕合を被爲たとやら、それでこんなに汚れたのだよ》

《まア左樣で御座いましたか、では貴孃のお洗ひあそばすのはお客樣ので御座いますか》

《左樣、天邊樣のお召物だよ。御覽丈巾の大きな事》

《まことに御立派なお體で御座いますね、それに御武骨では居らッしやるが、どッかおやさしい所がある樣で、とんだ面白さうな方で御座いますね》

《お氣輕の樣だねヱ、それに着物なんぞはお搆ひ被爲らないと見え、これこんなに綻びが切れて…しかし承れば武者修業を被爲れてお出ださうだから、別にお世話を仕てあげる人もなしねヱ、

無理もないのサ》

《チャ〳〵、武者修業さんで御座りますか、あのお方が》

《お内のお兄様も、いつ他國へお出がないとも云へず、其時には定めてあのお方の様に御不自由を被爲であらうと思ッて。妾は届くだけお世話をするつもりだよ》

《本統にさうで御座いますねェ、人事では御座いません、誰でも他國へ出ては、たよりない物ですから……》

話半なる時しも、庭下駄の音響かして、此所へ來るは、今も話の中なる天邊左源太と、兄の大次郎なり。

《お房、洗へるかの。泥が一通では落まい》

《早くから水へ漬ておくと宜敷ふ御坐ましたが……今朝に成ッて大騒で御坐います》

《お孃さん、まことに相濟ぬ事で。水でも酌みましやうか》

左源太ずか〳〵と井戸端に寄り、釣瓶繩に手をかければ、房に代りて女中の辰。

《お客様、恐入ります。それではお召物が濡れまするからお止あそばせ》

《さうか、だが酌かけた處を一言の下に止られては、折角の志が無になると云ふ物……左様では御坐らぬか、大次郎さん》

辰は眞赤になり、大次郎は笑ふ。お房はすかさず。

『さアく／＼それでは此方へ頂戴致しまえやう』

左源太井戸端を擲いて。

『うむ……』

釣瓶もんどりを打ッて、落つる水面。桶の底打ッて響き高し。

第四章

彼も此も一世の強者。逗留は數日の間ながら、親しさは千歳の知己。大次郎は左源太の爲めに、來る三日夕暮よりして、吹上の濱邊に大試合を行はんと、其用意に奔走すれば、お房も兄が親しき友の、晴の勝負と聞くからに、蟋蟀鳴く夜を更して、紺地に麻の葉を白糸にて貫き、稽古着一枚縫ひあげたり。

片帆に殘る夕日すゞしく、晝の暑さは濱松の枝に拂ッて、名殘は藻を燒く烟の潮になびく。此所吹上の濱邊に、陣幕めぐらし、紅白二流の大旗立て、法螺が音太鼓に時を報ずれば、はや着到狀つけむとて、群がる劍客迹よりく／＼。見物は其前より、小高き場所を我勝にえらびて、今や遲しと待構ゆ。

此日白軍の大將は、加藤大次郎忠光にして、白地に蜘蛛の巣さしたる稽古衣を着し、水牛皮銀げし蒔書の胴をはめ、黑塗の陣笠に夕日をはドきて、白絽に雲龍の陣羽織いかめしく、片手に白の采幣を持ちたり。赤軍の采幣を持ち、これは赤胴のおどけなきをはめたる大男。おまる手に一番竹四尺長束の竹刀を

捧げて、陣笠もなく陣羽織もなく、赤の鉢巻して常に莞爾たるは、天邊左源太義勝なり。兩方合せて二百餘人、皆それ〲に威風をつくる出裝。實にや武士のかくありてこそ。初め一人一人の勝負。終りて、炮烙割りの調練。此時は日全く影を收め、篝火に砂路一面を照して、見物遠巻に四方を圍ひ。人は皆面小手に五體をかため、いざや一番の太皷を相圖。山川の合詞、白の鉢巻――赤の鉢巻、各目標打破らんと、あるとあらゆる勇氣、竹刀一本にあつめ。來れ、來れ、足砂を蹴ッて勇む。

老人あり、腰曲りて腕常に震ふ。我十五年若かりせば、天晴一方の旗頭となりて、若者の肝つらぬき呉んものを、今ハ氣のみ先に立ちて、力ハ箸を取るに物うし。せめてもの事なり、今日ハ陣太皷打ッて打ッて、打ち破り呉んと、意氣込充分に待構へしが、旗色よしと見て、此所ぞとつゞけ樣に亂擊すれば、さしもにかたき樫の鞭も折ぬ。

加藤が若黨に法螺貝吹きの名人あり。日頃の自慢今日こそと、大息滿々と吹出せば、汗はら〱と額より流れ、目を黑白とする、其樣をかし。

鯨波の聲咽喉を裂き、空にきらめく竹刀の音。相詞の山川くづれて、血眼にハ目標見えず。敵か味方か、其所に一組、此所にも一組、只無的にぞ打ッてかゝる。赤軍の大將左源太ハ、勇まし、勇まし、只勇ましと、我が軍の利不利を忘れ、一人高所にありて躍り喜ぶ。時に見る、白軍の勇士三四人、赤の根城近

く寄來りて、鋭く打込む手練の程、目錄以上と見て取ッたり。守る者に不足なければ、我引受て呉んずと、采幣腰にさして、大喝長く引き、敵四人の中に割ッて入る。存外なりき——四人ハ弱武者。開きて只二三合の間を潛り、松原さして逃れ行く。面白し、二三歩追ふて見んと、威勢よく進む所、木立よりばら〳〵と出る五六人、磨きあげたる面金きらめかし、無二無三に打ッてかゝる。心得たりと松の木後に取り、渡合ひながら目を配れば。これハ如何に、紅白の目標なく、敵か味方か、味方も敵に交りてあらむ。竹刀に鐵の隱し物して碎けよとばかり打込み、切入る。

《やあッ、卑怯至極》

叱聲鋭く呼はれども、心に卑怯の聲を聞かず。

《何をッ……》

一同揃て、微塵になれとや、竹刀一時に振上げて、四方より擊ッてかゝれば、中には只松の立木。これはと互に顏見合せ、驚く處後より、撫廻しに打すゑる左源太。五人ばた〳〵と其所に倒れて、ゆるせ〳〵と叫ぶ聲。

《當國の武士ハこんな物か、あッはヽヽヽ》

十幾年來苦心の迹、吹上浦の砂には埋めじ。

《あッはヽヽヽ》

面見て笑はんか、それも氣毒。後日の語草には、鐵入の竹刀持行かんと、一人の上に跨る此時。又もや新手の三四人、いづれよりか飛來る。

〈己ッ、懲ずに……〉

打込む一人の首筋掴み、捻伏て砂深く擦りつけたり。遺る三人、今はこれまでとや、小手かなぐり捨て、手に〳〵砂を掴みて投げつける。無念、左源太は眼をつぶされ。千丈の瀧霧となりて散り、岩を碎く浪もありけり。只一本の竹刀、杖とすがり、我のみ闇の中を荒狂ふ。敵は此所ぞと群がりて、其所とも云はず、此所とも別けず、滅多打ちに打すゑて、どッとあげたる勝鯨波は、臆病武士の聲なりけり。嗚呼、當所吹上の神、靈あらば、此勇士が今の有樣、何とてすくひ給はざる。立たんとすれど、動かぬを如何。我足にして我足ならず。渇して水を思ふ事しきりなれど、行くべき方は抑もいづれぞ。此の時篝の火漸くおとろへ、源平の勝負定まりしか、世界靜にして、陣鐘の音響くのみ。

〈男子、これしきに……〉

大喝したる心なれども、かすかに舌を離れたるのみ。大の男綿の如くありて、呼吸せわしき此時しも、人を尋ねて大次郎、來かゝる足に踏む竹刀。

〈これは竹刀が落ちて居る、不心得千萬の事だ〉

〈加藤か……〉

《見れば鐵を入れて居る、卑怯な事をする奴だ》
《加藤……》
《誰だ……》
《左、左源太……》
《オゥ、左源太さんか、今まで尋ねて居た所だ》
《やられた……》
《何やられたッ》
《殘念だ、殘念ッ……》

第五章

幾度か過る雁の一連、更る程近く聽へて、雨戸を撫づる枯柳に、木枯の音や籠るらむ。

此頃續く秋雨に、加藤の家は雫洩りて、廣き屋ながら居る所なし。此所わづかに八疊の一間、晝の止み間に屋根へ上りて、疊物したる甲斐あれば、寢床のまゝ靜につりて、病伏す左源太を此所に運び、屛風一枚を境として、大次郎は內職の竹刀削り、お房は物縫に夜をや送る。

《今日は稽古が荒かッたので、大層疲勞致した》

小刀を臺木につきたて、腕をさすりつゝお房を見やれば、これも針を髮にさして。

《左樣で御坐ィましやう、お早くお休みなさいまし》
《寢やうかのう、今夜中に一本仕上やうと思ッたが……又翌日の事だ》
《妾も此袖口が出來ましたら、休みましやう》
《それは大層綺麗な着物ではないか、如何致したのぢや》
《これは此間中したでは御坐いませんか、御殿の伯母樣から頂戴致しましたッて》
《ウム、さうか。見る度に別な物かと思ふわ》
《兄樣……伯母樣からは、一日も早く御殿へあがれと、度々お文を被下まイすが、妾は當分見合せやうかと思ひます》
《なぜ又た見合せる。不束な其方を、御前樣のお目鏡で、姫樣の侍女にお使ひ被下と、内々伯母樣から御通知があッたのは、まことに家の面目ではないか。願ッても出ると云ふが當然だのに》
《それは左樣で御坐ィますが……決して參らぬとは申しませぬが、兄樣、妾が御殿へ參りましたら、天邊樣の御看病は誰が致しまする》
《ウム、誰がと云ふて、晝ハ道場へ出たぎりで、食事の時でないと此方へハ參らず……》
《誰も致す者ハ御坐いますまい。當夏の大試合に卑怯にも天邊樣を取圍むで、お疵をおはせ申したのハ、いまだに誰やら分りませぬが、まづ〳〵多分ハ當御家中の人で御坐いましやう。それに此

上、御介抱もろく〳〵致さぬ時は、紀州の者は薄情ぢや、和歌山の人は卑怯ぢやと、世間の人に囃されても、何と言譯も出來ますまいと、妾は考へます》

《それは其方が云ふ通りだ、如何にも其通りだ》

《左樣でなくッても、旅で病氣になッた時程、世に悲い事はないと聽いて居りますもの。妾は及ぶだけ御看病が致して見たう御座ィます》

《さうか、それならば勿論よいサ。充分に看病してあげるがよいサ。我も其方が行けば、さしづめこまると云ふには氣が着かず、只御殿へ出ぬと云ふのが心に着いて、とんだ薄情らしい事を申した》

解けて睦まじき同胞が、それやこれや語合ひつゝ、大次郎は其處邊かたづけ、床とりて枕に就き、猶も續く二言三言。迹はお房に物言はせて、受大刀に高鼾。

《おや〳〵、もうお寐ッたの……》

燈火是より一人を照して、針先の走り一時は早かりしが、次第〳〵に手元弛み、はては片袖膝に落して、手に繰かへすは、白の糸卷。心に過たる年の出來事。兩親世を去りて後は、御殿に老女勤むる、初瀬と云ふ伯母をたより。兄に着せる着物の縞がら、何が好きや。親類に吉事あり、祝物は何品がよろしきか。むづかしき事あらば、何呉となく相談かけて、通はす玉章の文言にも、いやしき調のある時は、遠慮な

く正して貰ひ。行きて語る時も、行儀作法。暇あらば生花茶の湯、女の知る事一通りハ習ふ。

* * * * * * * * * * * *

或年の暮なりき、伯母より手紙來りて、今宵より明夕まで、お奥に別の御用もなし、幸ひなれば泊りに來よ。其節春の事にて、種々話すべしとある。お房喜びて支度そこ／＼、使の者に伴はれて、表口より御殿へ至り、伯母の室に通ばやと、長廊下傳ひ行く時しも、小影より女中十四五人、同じ揃ひの浴衣を張り、赤の綿襷あやつりて、華美な手拭に黒髪を包む。

《お房さん、お目出度う御座います》

口々に言ひながら、兩方より手を取りて。

《サア御祝儀で御座いますぞへ》

《お祝ひ申します》

群寄られて、氣のつきしハ、今日お煤拂ひの當日なり。かくと知らば、裏口より廻りし物を。伯母も一筆書加へて呉たがよいと、眞赤になりて、取られし手を拂ひ逃れんとすれど、さうはならず。

《皆様どうか御免あそばせ、後生ですからおゆるしあそばせ》

帶の下に手を置きて、縮りながら云へど。

《これは仕たり、此場では通りませぬ。これがお家の御儀式で御座います》

目出度、目出度や、此家の庭に、鶴と龜とが舞遊ぶ。やんや〱と囃されて、散す手柄の京鹿の子。十四五人が手の上に、さしあげられて二度三度、手球の如くに搗揚られたり。紀三井寺の舞臺より、突落されし心持して、漸く元の心になり、見廻す頃には女中の人々、迹より來りし出入の商人、小間物屋の才助と云ふ色白男、北るを我勝にと追ふて、傍に一人の影もなし。扨も毎年の御家禮とは知れど、何となく口惜しく、悲しく。立もやらず其儘に打伏して、しく〱と泣きておる處。以前より曰く窓の簾隔ちて、始終御覽ありし奥方。不憫とやおぼしけん、お供したる腰元に、誰れと小聲にておたづねあれば。老女初瀬が姪と答ふ。さらば逢ふて見たしとの御意あり。それはあまりと止むるを、今日は上下の隔てなしとて、簾手ずから卷かれける。不意に驚き、涙顏つくろふ暇なし。北げむとするを、しばしと止め。

《初瀬の姪と云ふは、其方かへ》

これまでなりと恐る〱、底頭すれば。

《今宵伯母の處へ泊るかへ》

《ハイ…………》

《いづれ後刻逢ひませう》

簾は下りたり。やれ〱と胸撫おろし、いそぎ伯母の室へ行けば、初瀬は此所に居らずして、お松と云

ふ女中一人あり。
《伯母様は……》
と問へば。
《今日は御番で、お奥で御座います》
《それでは御手紙を被下たのは……》
《其事で御座います、お喜びあそばせ、お房様。貴孃は御出世なさいますぞへ》
《お松、何を云ふのかへ。妾にはちッとも分らない》
《お分りにならぬのも御尤。お房様、貴孃は御廊下で胴上におあいなされませう》
《大勢様で妾を取巻き……》
《其時お手むかい被爲いましたか》
《さア初めには逃げやうと思ッたけれど、兎てもかなはないから、其儘になッて居たが、妾はくやしくッて〳〵》
《其儘になッてお出なされましたか。あの其の儘に……》
《それが如何か致したかへ》
《如何かッて貴孃、惜い事で御坐います》

《何を云ふ事やら、お前ちッとも分らぬではないか》

《分るやうに申しませう。御當家のお姫様も、おひ〳〵御成人あそばすにつき、お守役に手のさへた方がなくッてはならず、それには誰がよからうと、お奥での御評議。初瀬様は、流石にお身内の事で居らッしやるから、貴孃とも言出しかねてお出の處。御前様が何人からお聽きなされたやら、初瀬の姪にこれ〳〵の娘があッて、兄とやらの仕込で、長刀の名人、其他の武術も心得て居るとやら。それを見た上でと難有いお詞。今日をば様からのお手紙は、それとなしに貴孃をお呼び申し、貴孃のお手の內をおためし被爲處で御坐いましたのに……エー惜い事では御坐いませんか》

疊をたゝいて口惜がるを、塵と共に袖で拂ッて。

《妾の樣な者が、どうして、お姫様の侍女になれる物か。又手向ふたッて大勢に一人、一人と一人でさへおぼつかなし。況して女の身であら〳〵しい事をして御覽。それこそ笑物になるわね》

冷やかに言ひ放つ處へ、上草履の音いそがしく、歸來る伯母初瀬。

《お房、お房。まことに目出度い事になりましたよ》

* * * * * * * * * * * * * * * * *

技倆ありながら、其技倆見せぬ處。女のたしなみ此所なりとて、御前樣殊の外御意に入り。是非にとの

らぬ曉なり。

御所望、伯母まで御內達ありしより小一年。いろ〳〵の事故あり、のび〳〵て今日此の頃、のッぴきな

《チヤ〳〵、いつの間にやら針を休ませ、つまらない事を考へて居ました。どりや一層の事寢ませうか》

兄の次ぎに夢結び所。枕紙かへして寢かけしが、氣に懸る左源太の樣子。立て屛風越しに見て、安心して、燈心一筋になしぬ。

天邊ともある身が、これしきの疵に足腰立たず。扼しつめる腕細り行きて、睨む兩眼の霞は取れず。赫と見開かんと、赫と、赫と、幾度か見開けど、夜も太陽に向ふが如く、眩む事の悲しさ。我不知聲を放ち枕に噛みつきて泣きぬ。

目さときハ女の常。お房ハ半身を起して。

《天邊樣、如何か被爲いましたか》

《これハお房さん、お目をさまして恐入ッた。なに、別に何とも致しませぬが……つら〳〵考へると考へる程、むしやくしや仕て、寢ても起ても居られませぬ。脆い者で、こんなに短氣ではなかッたが、我ながら知れる程、疳癪持になりました》

《左樣で御坐りましたか。妾は又さしこみでも被爲たかと思ひました。去かし天邊樣、氣をゆッく

りとお持になッて居ませぬと、お早くは治りませぬから、何もお考へ被爲れないが宜敷う御坐います。貴郎、決して御心配なされずと、氣をゆッくりとお持なそばせ》

《お房さん……貴孃の御信切れ、一生忘却致しませぬ》

《天邊樣、何をおッしやる。何事も行届きませず、さぞ御不自由で御坐いませうに……》

《何が不自由で御坐らう……これほど勞ッて被下るのに、なんの不足が御坐らう……故郷の江戸に居た處が、家もなければ、親もない者。情ある詞と云ふ者は、當年まで、曾て耳にした事のない左源太。旅へ出ては猶更、行く先々の道場で、いろ〳〵叮寧には取扱はれても、一寸の油斷もなりませず。結句山では木引小屋、野では稻村に寢た時の方が、餘ッ程氣樂で御坐ッた。ま、總體が此樣な仕末で御坐る物。岐路で行く村を敎へられてさへ、身に徹して嬉しう御坐るに、かく御信切に御介抱被下れて、なんの不足、不自由が御坐らう》

口數少なき大男が、濕り聲にて語るを聽きては、女の身の情には動き安く、ひそかに涙を袖におさへて。

《さぞ御辛抱が、おつらい事で御坐いませう。お話を聽きましては猶更で御坐います。お宅も同然にお思ひなすッて……》

《ありがたう御坐います、まことに忝なう御坐る……しかし、お房さん、貴孃はどうか御殿へお

出なさッて被下い》

《エッ、それでは兄との話をお聽き被爲れましたか》

《聽きました。此左源太を思つて被下る段は、實に難有う御坐るが、それでは拙者の心が安みませぬ。まこと拙者をお勞り被下るならば、何卒御殿へお出被下い》

《それが出られます位ならば……》

《それはいけぬ、それはいけぬ。貴孃が出世の門出を、拙者故にお止りあつては……》

《出世は女の望では御坐いませぬ》

第六章

左源太が疵の痛みも、次第〳〵に薄らぎて、所々に紫色の痣を止めたるのみ、眼も日影ならば開き得るより、氣散じにもならむかと、晝は道場に出で、人々の稽古を見物し。夜は近所の知人を訪ふて、歸るにも杖は入らず。かくまでに成りし事、一重に加藤同胞が介抱の、信切によりてありと、本人の喜びは言ふまでもなし。これより大次郎が舌の根には、酒と云ふ物の味をおぼえ。お房も安心して支度調へ、御殿へ上りて姫君の侍女となりぬ。

行秋や、枯野に何んの風情もなけれど、冬籠して、燈籠に雪を見るはつらし。埋もれたる精神、茲に起して中國筋より四國へ渡り、九州の荒武者にも出會ふて見たし、今は一刻も遲々する心なしとて、大次

左郎に其事を告れば。決して無理には引止めねど、未だ本の體でなし、來春を待てと云ふ。首を振りて左源太承知する事なし。

翌日出立と云ふ今宵。いざや飲みおかさんと、道場の眞中に火針を置きて、心安き門人四名、合せて六人車坐になり、肴には河豚汁。左源太が希望にて、大瓢簞に冷酒の飲廻し。大次郎は左源太にさして。

《房が居ぬので別に肴の致し様が御坐らぬが、まづ一杯受けて被下い》

《忝けない、頂戴致しませう……妙な御緣で一方ならぬ御世話に相成りました。此御恩報じ致すのは、何れの代に出來るかと思ひますて》

《なんの御恩も長瓜も御坐らぬ。手前が不注意から大事な御體に疵をつけて……萬一のことが御坐らば、割腹でも致すべき處、まづ〳〵なほッたから、よい樣な物で……玄かし、方々、此天邊氏が當地にお留り被爲れて、御教授を被下れたら、實に幸ひな事だが……どうも仕方が御坐らぬ、儘にならぬ事で……》

《折角おなドみになッた處でお別れ申すは、拙者もお名殘惜う御坐る》

《あゝ天邊さん、これぎりでお目にかゝれないかも知れず、其盃を頂戴。なんだか鬱して參ッた》

《アハヽヽ　先づ當分のお別れだ、獻ドませう》

飲みながら種々語りて、鐘の音に夜更を數へ。鷄鳴までは程あるべし、瓢の中空しくならば、臺所に樽の底たゝくべし。翌日はいづれの村酒にやむかひ酒仕給ふと、戯むれの中に別れを惜しみ。沈みかゝるを盃にかぶせ、重なる内に醉はめぐり、安坐くづれて臂枕、足のばしてぞ半は轉ぶ。

騎馬武者五六百騎、一時に踏込みしかと思はれたり。恐ろしき響して、燈火消え、身は強く投出されたり。方角更に分らず、闇の中を探り合ひて。

《地震か》

先づ左源太が聲、應じて。

《大地震だ》

大次郎が聲。聲、聲に應じて門人四名。

《御無事か》

一人氣轉きゝたる門人、火鉢の火を燧木にうつして、照す四面は驚くばかり。懸けたる稽古道具悉く落ちて、戸障子の倒れたる多し。行燈を見ればこれも倒れてあり、油を持ちて來んと勝手の方へ行きかけたる一人。

《ヤッ、勝手の方ハ大變だ〳〵》

古家の悲しさ、柱まがり、軒かたむき、哀れ今一搖ゆらめきなバ、象の足に踏れたる蝸牛の如くなら

む。

「これは容易ならぬ大地震だ」

「御主君の上如何」

「お房は如何が致し居るか」

「此時こそ命にかけて、お房さんは拙者がお助け申さう」

「拙者はこれより御本丸へ參り申すから。方々二人づゝ兩方にお別れあれッ」

矢の間に稽古袴、高くはきて、大小さしながら、六人一時に門へ出れば。又もや一ゆり、万雷此所に落ちしが如く、道場も家も小家も立木も將棊倒しにくづれぬ。

* * * * * * * * * * * * *

地裂けて吹出す泥水、天は赤銅色に染まりて、雲の行方恐ろし。狂ひ廻る犬。塒を落ちる小鳥。人は出端失ひて、只叫ぶぞ多き。天邊左源太は、加藤の門人を先に立て、雨と降る瓦の中、潜り、潜り、漸く着く御殿。表門よりは事面倒。崩れたる塗塀の間より、難なく奧庭に入込みたり。此中女ばかり、男子入る時は、家斷絶、割腹の痛事。

「天邊先生、これより奧へは進めませぬ」

「此所で樣子を伺ふより他は御坐らぬ」

仔細知らねば、天邊ハ急きて。
《えい、これまで參ッて何故お留りある。一刻も早く參りませう》
《天邊先生。お家の掟で、男子ハ奥向へハ參られません》
《これを破らば、割腹致した上、家までつぶれます》
《なに、男子ハ參れませぬかイヤ一應御尤もだが、それハ異常なき平日の事、非常の時に、何、お咎めが御座らう》
《たとへ、非常の時たりとも、別におゆるしハ御座りません》
《されば其儀ハ、まづ〳〵お留り被爲れい》
《如何にお家の掟ハ、命を召さうとも、家斷絶にならうとも。あれ〳〵聞かれよ、女小供の叫ぶ聲、あの聲耳に玄ながら、指を噛みて見物出來申さうか。お房殿にハ一方ならぬ御世話に成りし拙者、御恩報じは此時なり。拙者の命は入用に御座らぬ、斷絶するにも家は御座らぬ。何、御心配めさるなッ》
《玄からハ、それはそれと致し、御病氣揚句の先生、お足元もおぼつかなし》
《お房殿の處はお引受申すから……》
《天邊左源太は、最早や一命なき物なり。何とおほせあつても、留りませぬ》

止める二人を、えいッ面倒なり。厚意に報ふる荒男が力、突飛してぞ進み行く。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

扨も長廊下の通路に、鼻緒ずれつくりて、物の道五六里も歩きし様なほね。唐紙一重の明け立ても、力一杯の仕事なり。二字三字、四字名ハ老女様。一生御奉公と云呑氣な心ありてこそ、まづ御小性から、お腰元、侍女役ハ花形なり。夏の暑さにお白粉の上すべる汗をかくして、痛い椽側にまんぢりともせず坐り、我手に持し團扇に人様の暑さを拂ふ。冬の寒さも夜の御番、お次で寢られず、高聲で話も出來ず。二言目には御意で御坐ります、御道理で御坐りますと、三指ついての切口上。頭の上る事、己が言ふ事の通るはなし。源氏合せ、歌留多雙六、繪本錦畫に樂みて、宿さがりの芝居見物、之は人間の樂みとは思はぬなり。何山様は今日觀世音への御代參、まことうらやましきとは、何事ぞ、若き女の言ふ詞か。此夢は破れて、散る女の行方樣々なり。お房は女の中の女、奥勤の女の中では男なり。地震一度來りて、變りと知るや否や、我務めは此時なりと、甲斐々々しく身ごしらへして、半は潰れたる御殿の中、姫君の御寢室へと走る途次。又も一ゆり、脆くも軒の大柱折れて、落つる棟木に打伏せられ此所一寸も動く事ならず。

第七章

黒髪亂れて、目元うッとりとし、白き歯少しばかり見せ、寢間着姿に色を香はして、五體に力と云ふ物

なく、綿の樣になりたるお房の片手を、肩越しに握りて、背負ふて行く左源太。これも足元はおぼつかなし。奥庭越えて廣き芝原、漸くにしてたどりつき、まづ此所ならば安心なりと、お房を靜に落して、横に寢かして樣子を見れば、眉毛顰めて、何か口の内に聲あり。怪我はいづれと、撫で廻して、さはる膝の所、冷たきは血の衣に徹りしならん。

《お房さん、痛みますか》

身を縮めて、痛しと云ふ風體。

《痛みますか》

ます〳〵身を震はして、赫と見開きしも、空を見て忽ちふさぎ、浮言の樣に、姫樣、姫樣と云ふ。左源太の眼中に姫君なし。お房の疵を包むに何を以てせむか、見廻せども芝原に布はなし。詮方つきてお房の腰帶を解き、半分に裂きてしばりぬ。

又もや震動劇しく起りて、身は大浪に漂ふ木の葉一枚。二人が三四歩前の芝原、切瘡の如く裂けて、今にも泥血を吐かむ有樣。スハこそ大事、思はず立ちし左源太。此時お房の心初めて醒めたり、連て立ちし勢、雪を跳たる竹か。立ッて片足の痛みに、倒れかゝる所、しッかりと支へて、肩にする暇もなし。抱きたるまゝ走る事半町、幸ひなるは其所一面の竹林。命と中に入りて、ほッと一息つけば。笹物凄く騷いで、塒を落つる雀あり。

〔まづ此所まで逃れば大丈夫で御坐る。お房さん御安心被爲れい〕
〔ハイ、もうたしかで御坐ィます〕
〔御安心被爲れい〕
〔たしかで御坐ィます〕
〔えいッ、氣の弱い、しッかり被爲れ〕
左源太の膝に倚りたるまゝ、眠る樣にうッとりとあるを、勵まされて目のみ見開けど、五體わなゝき、心細げに見ゆる。
薄着の寒さ身に徹みて、疵口に風をあつるは禁物なりと、左源太は後より抱きしめて。繰りかへし〳〵。
〔大丈夫だ、大丈夫だ、氣を確固にお持なさい〕
お房は抱れたるまゝ天邊の顏、つく〴〵見上げて。
〔天邊樣、どうして貴郎は妾を……〕
〔今までの事を御存じないか〕
〔棟木が上から落まして、其下になりましたまでは存して居りますが、迹は夢の樣で御座ィます〕
〔其棟木に敷かれてお出被爲た所を、拙者がこれまでお連申した〕
〔左樣で御座ィましたか……したが貴郎は、どうして此御殿へお出被爲ました〕

《どうしてと申しておお房さん。お家の掟を破り、御門弟衆の止めらるゝも振切ッて、此御殿に參ッたのハ、貴孃のお身の上を心配致して……》

《あの妾を御案じなされて……》

《如何にも、大恩人のお房殿を、お救ひ申さむ爲め參りました》

お房ハ抱れし手を、俄に拂ひ。亂れし前搔合せて。

《只あればかりの御介抱を、其樣にお思ひなされて……御信切な……》

黑髮を左源太の膝に投げて、

《天邊樣……》

しばし其次の詞途切らしたり。左源太は思はず背へ手を載せしが、恐れて宙に浮かせ、又落して重々しく、撫てやる時指にからむ髮の毛。嬉しさうにそッと拔きて、懷中に入れぬ。

《天邊樣……何とお禮を申しませうやら、兎ても詞では演べられませぬ……それにつけても天邊樣、此所は、御男子方の參れませぬ所、妾ゆゑに貴郞がお咎お受なされましてはすみませぬから、少しも早く此塲をばお立去被下りませ。承はれば明日いよいよ御出立あそばすとやら、お勤のいそがしさに、お目にかゝる事もなりませず、其儘にお別れ申すかと思ひましたに、はからず貴郞樣のお助けを受けまして……貴郞のお顏を見ました上は、心殘りは御坐りませぬ。妾の所はお搆ひ

なされず、早う御門外へお出なされまし》
《如何にも早速立去りますが、貴孃の疵が心にかゝれば、假令お咎めを受くるとも、左源太は御介抱致す》
《それでは、天邊樣……近頃迷惑致します》
お房、居ずまゐ正して、首をたれたるまゝ。
《貴郎のお咎をお受けなさるは申すまでもなく、妾までが……男の方と只二人、竹藪の中に居りましては……同罪になります》
此人の詞とも思はれず。天邊左源太が此所に驅着、一命なきものにして救ひ出したる心、知らぬ君か、知ッて避くる君か。
《なるほど、同罪になるから此所を去れ、なるほど左樣おッしやれば御道理千萬、よろしい左源太は立去ります》
《人目にかゝりませぬ間に、少しもお早く……》
《立去ります、今去ります》
立てば袖にさはる竹、拂はんとすれど引かゝりて取れず、面倒と其の儘行きかゝれば、片袖破れて枝に遺る。見向もせず爰天邊左源太、此塲千兩澁い物なり。迹にお房は元の姿、小動もせず首をたれてあり

しが、遺りし片袖手早く取て、顔に押しあて伏しまろぶ。

第　八　章

夜は明けたれど、曉告ぐる鐘の音もなく鳥の聲もなし。加藤の家は全く潰れて、下女も下男も影を見せねば、大次郎も未だ城より歸らず。左源太此所に立て、考ふる事暫く、胸に定めて落散る板切取り、消炭持て、左源太は立去り申候、と書し。大瓢簞さがし出して、中の空しきを重さうに肩に懸け、和歌山の城下離れて、紀の川端に出るに、道々の混雜一方ならず。流言する者あり、今宵何の刻に大洪浪來ると。或者は何山火を吹きたりと、さても恐ろしき眼前の地獄。主從親子夫婦兄弟、分散離合生死の間を分きて、行けども行けども此景はつきず。

紀の川堤、倒れたる馬頭觀世音の石碑に、ゆッたりと腰掛けて。昨夜眠らず、病後の疲勞今ぞ知りて、一息休む其處へ、驅來る加藤の門人。

《先生、これにお出で御坐ましたか、先生大變な事が出來ましたから、一先お引歸しを願ひます》

《何に……大變な事が出來ましたと》

《如何にも大變な事が出來ました》

同じ事を、呂律狂ふて、無理に左源太の袖を引張り。

《先生、先生、何卒お立歸りを願ひます》

《大變な事とは、抑も何事で御座る》
《何んでも大變な事だと申す事で……》
思はず笑へば、彼も笑ひて。
《實は、途中にて同門の人に出逢ひました處。今朝天邊氏は御出立なッたが、俄の珍事が起ッて、是非とも天邊氏を呼戻さねばならず。それが爲め拙者も跡を追ふて參る處、貴殿は急足の名人なれば、高野街道の方へお出なッて、お目にかゝらば早速お連申せと……實は半分聽いて其儘に馳着ましたので……》
見れば馬鹿らしき面なり。人馬鹿なれど傳ふる詞は、正しく(大變)(珍事)、何事が起りしかと、左源太の心騷ぎて止まず。
《然らば御同道致しませう》
《御同道被下るか、これは忝なふ御坐ります。時に先生、貴郎は諸國をお歩きになッて随分御健足の樣に承はッて居ますが……拙者も家中の若者の中では、人に知られた急足で、大概負は取りませぬが、如何で御坐いませう、今日の如き一刻を爭ふ時には……一番驅競を致しては……》
愚物又面白い事を言ふ。時に取りての名案なり、病後ながら、何に、一里不足の路。
《面白い御發言、いざ驅競を致さう》

《御承諾被下たか、難有し〳〵》

佛に早き方あり。それにも劣らず二人竝びて、大小の音立てゝぞかける。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

半潰れたる古家の傍に、戸障子立かけて假家あり、此所なりと云ふ。左源太づか〳〵と入れば、門人達六七人、いづれも無言、悄然として座す。雨戸の上に疊重ねて、布團に血汐したゝる。上に寝たる者、誰ぞ、加藤大次郎なり。

《やァッ大次郎さん……》

近寄りてすがれど、無念、顔色青ざめて、此世の人にあらず。

《こ、これは何事で御坐る。方々、如何が致した事で御坐る》

門人の内重立たる一人。

《昨夜の大地震にて、師は御本丸へ参る途中、御覽の如く大怪我を致して……今方息を引取られました》

鬼をも挫ぐ劔客、皆涙を膝に落して、迹を次ぐ詞震ふ。

《さて先生をわざ〳〵お呼止め申したは、師の遺言をお傳へ申し、つきましては我々一同より、お願ひが御坐る爲め……》

大次郎が亡體見つめて、茫然たる左源太の耳には、一度二度にては其意通せず、漸くにして合點なし。

《なに遺言、如何樣な遺言が御坐りました》

《別儀でも御坐りませぬ、先生を是非にお引止め申して、加藤の道場をお次ぎ被爲れる樣、お願ひ申せとの事で御坐ります》

《何とおッしやる、拙者に道場の跡を立て吳との事で御坐るか》

《如何にも師が最期の際に、左樣申し遺しました。まことに御迷惑では御坐りませうが……》

と云ひながら、迹の人に目くばせすれば、一同刀の柄に手をかけて、片手に肌をくつろげたり。

《若し、御承諾なき時は、我々が他の門弟に相すみませず。先師に對しても申分が御座りませねば、先師の靈前に於て、一同割腹致して相果まする》

《割腹とまで御覺悟あるか》

《御承諾被下るか、我々七人が御介錯被下るか》

二ッの內、一ッの返答は、亡友への義理。金鐵より堅き丈夫の腸、見る〳〵裂して何とすべき。

《不肖ながら左源太、御承引致しませう》

《御承諾被下れたか……まことに難有い仕合せに御坐る、一同此通り〳〵》

喜びの中に、又一ッの凶報あり。お房の怪我淺手ならずと。

第九章

終に時鳥ハ、我が日本を去りて、知らぬ他國に其聲を放ち。閑古鳥と共に、名のみを發句帳に留めむ。天邊左源太に俗流の活眼なく、武一道、守る程浮世にて暮されず。御維新の騷に人に越えたる功名を投捨て、末ぢや末ぢやと竹刀をかついで、今も太古の大和の國、十津川郷に草屋を結び、今年六十三才。腰の曲りしも、白髮になりしも、可愛の女房を死なしたるも、此所なり。山の根を分きて流るゝ、蘆野瀬川のほとり、杉の皮封ト、板張りの一軒。あはれ猪ふせぐ柴垣破れて、これハ朝顔のまはらしさ。雉子、鶯、妻戀ふ鹿、友を呼ぶ猿、此頃ハ又河鹿の腸を寸斷寸斷にして、琵琶の音のみかは、物淋しき今日盂蘭盆。迎ひ火送り火、誰を迎ひ誰を送る。一人椽側に腰掛けて、空しく燈籠の繪紋樣見る、此左源太ハ白髮の老翁。

一山越して隣家の男が、親切に持來りし、肥松の根の小く割りしを、門口に積重ねて、苧がらの箸の長みトか。先師長沼正兵衞、義友加藤大次郎、身内の兩親、言ふまでもなく、妻のお房が迎ひ火。烟の立のぼる中に、昔の姿あり〳〵と見えて、手に取らばや、呼べば谺の人ならしな。

* * * * * * * * * * * * * *

淺からぬ疵ありしも、お房ハ跛者となりて助かりたり。我加藤が道場を繼ぎたれば、御殿より引取りて、出來るだけの看病仕盡したり。此親切ハ前のお房に報ふる爲め。竹藪の中にて言ひたる、輕薄な、薄情

な、情知らずなる後のお房に、詞交すも厭あり。全癒の後、用あらば一言、用なくば寒暖の挨拶のみ。向ふからも厭な顔して、終には朝夕も目禮に止まる。

噫、我は愚なり。先にお房が輕薄なる詞吐きて、我を怒らし、我を立去らしめずば、一命其時落せし物を、此故なりと悟らざりし我は愚なり。お房が厭な顔して、我をさげすむも道理なり。よし、よし、過失は我より謝せんと、懷中の黑髮見せて詫びぬ。彼も片袖出して心を見すれば、解けて氷か雪か別たゞ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

人あり、お房との緣、必ず結べと進む。我喜びて片輪者の花嫁御、跛者のお房を貰ふ事を諾す。まづ其前にお房と語りたる事あり。我が妻となる者は不幸なる可し、朝から晩まで酒飮みつゞけて、家事一切構ふ事無し、氣の持樣次第、何時何十里先きへ旅立ちて、何日立たば歸るや知れず。お房笑ふて、朝から晩まで酒飮まうと言はれても、妻たる者は留め申し、家事一切構ひ給はぬも、それはよろしき樣に致すべし、何時何十里旅仕給ふとも、妻たる事を忘れ給はずば、それにて萬事足りたる事。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

今から思へば不憫なり。其頃は何事も心着かぬまゝ、一より十まで手強く行き、お房々々と呵る樣に呼びて、いそがしく働かせたり。夏は浴衣我知らぬ間に洗濯して、行水の度に着かへさする嬉しさ、心に知れど別に禮も言はず、よい顏も見せず。冬の寒さにあつ物の機轉、夜更に寢酒の獻立ありがたくも、

飲めば其儘の高鼾、さぞつれなしと思ひしならむ。地震に受けたる疵に病む時、介抱爲したる左源太とは、生れかはりたるかと思ひしならむ。慣たとはいへ、親のなき世體、苦しき中を切廻し、我と同じ樣なる兄を助け、御殿に出ればこれは大洋、口姦しき女中達の中、忍ぶ一字で押通し。これより安心と云ふ緣定め、杖柱と思ふ夫の我は、無賴にして、家事の相談、酒の味分より他に知らねば、又一段の苦勞をや仕つらむ。流行の頭の物、房々として艶けきあの髮に、飾して人に見せたかりけむ。美しき着物に綺羅をかざりて、姿を鏡に寫したかりけむ。我此事にかけては、ます〳〵暗く、嘗て江戸歸りの土産に、土山のお六櫛買うて來て、これか奧樣の差物になりますものかと、女中供に笑はれしが、前後只一度。勿論鼈甲玳瑁の櫛笄、買ふてやる力もなし。買ふ力のみかは、お房の母よりゆづられたる、鼈甲の櫛賣したる事あり。其時少しも惡い顏見せず、光秀とやらの奧方は、黑髮を切ッて酒買ふたそうで御坐りますと、莞爾笑はれた時ハ、流石の我もはづかしく、うれしく、目の前で拜むで見すれば。山の神の祭禮かと戯れたりき。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

身は國の爲に死する覺悟、京へ門出の其時も、涙一滴見せぬ氣立。留守を案し給ふな。心遣りは刃の曇とやら、花々しき事櫻は武士の散り時といふて――其癖聲震はしながら――勵まし吳れしお房、今は無し。

世の變りて、刀の錆瘡にさわるも、薪は切れますと云ふ、世上の人濟度仕がたし。老ふる程愚痴かは知らねど、空拳を以て力なしや、此風を拂ふに。盗賊おどかしの爲めに、心得おく巡査方。運動の爲めにならふと云ふ書生輩に、劒道教ふべき我にあらずと、此十津川の山中に入りて、水は前の谷川、薪木は裏の杉林。同ゞ事して幾歳暮したる、其間の快樂は、誰も知るまし誰も知るまゞ。只お房のみぞ知って知って知り盡してあきたりとて、此世を去りける。

お房！、お房！、今は無し。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

力なげに立ちて、樋の口燃えさかる火にむけれは、白烟そよ〳〵となびきて、消えて行く空に一聲は——何鳥。此時燈籠の油盡きて虫の羽風ぞ命なりける。

◉初嵐

上の巻

天正八年七月の初旬、徳川家康が甲斐の武田勝頼と戰はむとて大井川の邊に陣取たる砦の入口に。物承はらむ、兄者人はおはさずやと言ひながら童一人立ちたり。年の頃十三四、黒髮の後茶筅、前

髮無雜作に取りて、二筋三筋毛のほつれたるも何となくいたく／＼し。此暑き中を長き路程歩みけるにや、色黒く容貌窶れ、しかも衣物さへ塵に染りて、一目見たらむに何處の牛追かとも思はるれど、目元凛々しく鼻筋の通たるなど、故ありげなる面相骨格。肩の處に横一文字の轡つなぎ、白地に紺にて染ぬきたる麻の帷子を着し。腰に指したる兩刀は朱塗の印籠鞘ぎ、菊鍔、丈夫をむねとしたる太糸巻の柬。誰が遺物にや此子の腰には重げなるを、左も得意氣に横へつゝ、又も。兄者人はおはさずやと言次ぎて、頻りに砦の中を窺ひ居たり。

かしましや誰の兄者人ぞ、味方は大勢、弟ある者も、兄ある者も、大井川原の小石より澤なりと晝寐の夢をや破られけむ、小言つぶやきながら出來るは髯面の番卒。夏ながら合戰最中とて小具足に身を堅め其癖人目の無き處にては、甲枕に鼻の穴から勝鬨揚る强の者。年齢の行かぬ童と見て、少しく調子を柔かに。誰を尋ねて參られしぞ、何人の弟御か。其所は日向なり、此陣幕の影に來られよと筋高の手を揚げて招きぬ。されども童は元の處に立ちたる儘。拙者は朝日小文治の弟にて千助と申しまする、故鄕より遙々と此駿河まで尋ねて來たは、母上の御言葉傳へたく、二ッには私の願望も語りたく、それは／＼種々の辛苦をして漸くこれまで參りましたと早く取次ぎて被下と言ふに、如何に爲しけむ番卒驚き。彼の朝日殿の弟御とや、彼の小文治殿を尋ねて御坐ッたとな。如何にも左樣あれば早く此由傳へて被下と言ど、番卒唯眼を見張り、一句の答も出さずして果は小走に奥へ入りぬ。

彼の人の氣味の惡さ、それにしても兄者人に早くお目に掛りたい物ぢやと獨言つゝ待つ處へ、程なく奥より出來るは鎧下に薄物の陣羽織、髪は大束の立茶筅、口髯美しく、でッぷりと太りたる武士——兄には似も寄らぬ人なり。　其方が朝日の弟とや。　左樣に御坐りまする。　我は菅沼大膳ぢや。　それでは豫て承はる兄者人の組頭、菅沼殿で御坐りまするか。　如何にも其大膳なり。　扨て兄者人はいづれにと恐る／＼問出せば、これも答詞に苦しむ樣子。番卒と言ひ此人まで、何を躊躇給ふにやと、又。　いづれにと小聲で問へば。　其兄者人は……もう……居らぬは。　此砦にて御坐りまするか。　此砦にばかりでない、最早や此世には居られぬのぢやと言切ッて涙と落しぬ。

不憫や朝日千助は、一人の母を迹にして、兄に逢はんと幾山幾川、慣れぬ草鞋に踏分きて、草に宿り露に伏し、遠寺の鐘に送らるれば、漁村の柳に招かれつ、驛路傳ふ一人旅。其苦しさも斯く告て、斯くと語らば其時の我の强さを賞め給はむ。故郷の樣を問はるゝ時は誰の上より語始めむか、何の事より言出むか、三才駒は今肥ゑて、天晴逞しく成りたる事。背戸の柿の木枯れたれども、兄者人と二人して畠の端に植へたる桃は、漸く此頃實りたる事。我か此度の立志母上が傳言など、落も洩さず告げむ物と、勇む心は張弓の、未だ放たぬに絃切れて、悲しいやら、口惜しいやら、泣くに涙の出やらず、茫然として立居たり。

すは戰場に乘出て敵と刃を交ゆる時こそ、夜刃とも魔とも言はるゝなれ。陣にありては大膳も情に脆き通常の人なり。涙を含む聲震はせ。　たよりに爲して來りたる兄小文治に死なれては無や途方に暮れるであらう、さりながら千助とやら、左樣に力を落すに及ばぬ。至らぬながらも大膳が、力を盡して遣はす程に、一先我が陣所に參れ。兄が遺物の品をも見せむ、朝日小文治が最期の有樣物語ッて聽かすべし。

中の卷

粗末なる板家に家々の紋附きたる陣幕を廻らし、青々とせる松葉を以て屋根を葺きたる下に、圓座代りの角莚を敷き、此上に座したるは菅沼大膳なり。同じく下手に兩手をつきて、蕭然と控へたるは小文治の弟朝日千助なり。

昨日まで誰か手枕に亂れけむ、無慘や蓬が下に懸る黑髮、武者が最期の有樣を、物語らむと座を搆へ。

抑も戰場は八幡山、しかも大雨の揚句とて、崎嶇たる峻坂益々嶮しく、敵も味方も足場を失ひ、此日を晴の甲冑に泥土を塗ッてぞ戰ひける。中に一段目に立つは、朽葉色の鎧に黑毛の冑猪首に着し、鹿毛なる駒に黑鞍置きてまたがりたる大荒の武者一騎。これぞ寄手の其中にても剛勇無雙と名も高き、西鄕伊織が粉裝なり。大身の鎗空に聲あッて從横無盡に驅廻るに、われよく〳〵と言ふばかり、只遠卷に圍みたるのみ。誰ありて我組むと進出る者なき時しも、一叢繁る藪影より、跳出たる一人の若武者。小

櫻威の鎧を着し、星目の冑を頂きたるは、これぞ誰あらう小文治重春、笠穗の鎗を流々としごきて無二無三に突きてかゝるを、敵も去者心得たりと、受けて穗先きを活止と合せ。右よりすれば左に薙ぎ、左より突けば右に拂ひ。上よりすれば空に舞はせ、下より突けば地を貫かせ。秘術を盡して戰ふ內、いらッて打入る小文治の、蛭卷の下二三寸。　ヤッ兄者人の鎗の蛭卷……。　如何にも蛭卷の下よりして、一斜無慘に折れたる處、突入る穗先き避けかねて、鎧はづれの脇の下。　ヤッ！西鄕伊織に兄者人は、脇の下を貫かれましたか。　おう血烟立ッて其塲の絶命、我も其時後陣にありて、惡き伊織が擧動かな。味方の耻辱、重春が修羅の無念を雪がむと、一鞭呉れて乘出せしに、如何に爲しけむ馬驚き、深田の如き濘路へ、四足踏入れ一寸も、進退茲に谷りて、躊躇なし居る其內に、勝ほこりたる西鄕伊織、血汐滴る鎗引提、いづくともなく立去りたり。今は詮方亡人の、遺物の鎗を取上げて、此陣營に歸りたるは、去かも昨夜の事なりと、一部始終を物語りぬ。

さらば一日早かりせば、一目なりとも兄者人の御顏を見る事出來たるに、口惜しい、口惜しい、何故早く步けざりし。鈴鹿の關所で引留められ、桑名の渡シで乘遲れ。一日泊ッたばッかりで間に逢はざりし無念さよと、袖噛裂きてぞ泣入りける。大膳も亦涙に暮れ、軍扇開きて顏を隱し、暫時無言に過せしが、漸くにして氣を取なほし、正座に立ちたる鎗一筋。刀の痕まだらなる上、蛭卷より折れたるを、千助の前に持來り。　如何に千助、これぞ小文治が遺物なるぞ。せめては之に名殘を惜しめよ。　何、

これが兄者人の手鎗とな。御なつかしやと手に取りて、幾度となく抱締め、生きたる人に物言ふ如く。

これ兄者人、千助で御坐りまする。私も兄者人と共に立身出世を爲したる上、お死になされた父上の隱れたる名を揚げむ物と、母上にお願ひ申し、おゆるし受けて參りましたに、たよりに思ふ其人は一日遲れてこれも亦、遠き彼世へ出陣の、後に成りたる一ツ雁、泣くより外は御坐りませぬ。家を出る時母上は、幾度となくおッしやる樣、兄に逢ひなば忘れずに、必ず斯くと傳へて呉れ。日頃の短氣を謹しみて、戰場にては殊更に、氣を早まりて犬死すなと、おッしやッたのは此所の事。今更言ふて歸らぬど、お情けなやと搔口說く、聲も枯野の蟋蟀、咽び勝にぞ聽へける。大膳此時氣を取りなほし、わざと聲音を勵まして。

未練なり千助、死したる人は最早や詮なし。斯くなる上は此より後、御身兄の後を受けて家康公に御つかへ申し、時節を待ッて兄の仇、討つと致すがよろしかるべし。

そは申すまでも御坐りませぬ、後とは言はじたッた今、敵陣深く切入りて、西鄕伊織と渡合ひ、兄の敵を打ちませうと、俄爾立上る其所を、まばしと留むる菅沼大膳。

如何に年齡が若しとてあまり無謀の致し方。敵は名にあふ西鄕伊織、女の如き小若者に、暗々打たるゝ物ならず、時節を待ッて其後に復讐なすが汝の爲め。

とは言へ其内西鄕の、戰場に出で戰ふ內、餘人の手にて打たれなば、かゝる無念は候はゞ。

さりとて是より討入りては、返打に成るは必然。

假令返討になればとて……。

さゝ、それが所謂匹夫の勇、母が言はれし犬死なり。若し今御身殺されなば、跡に遺りし母親を

誰が養ふと思居る。　やッ…………。　死したる兄や又父の、武勇の名譽を揚げる者は、他にありての決心なるか。　さアそれは。　待てと言ふたら朝日千助、時節を待つと致すがよい。

下の巻

時節を待ちて仇を打てとは菅沼大膳の詞なれど、如何して是が待たるべきや。好し我却ッて西郷が刄にかゝり死するとも、運は天ぞとあきらめて、無念を此世に遺すまじ。兄の敵を討むとて返討になりたるぞと、母上の聞かれなば、喜びこそ致さるれ未練の言葉は出さるまじ。左なり左なりと千助は早くも胸に思案を定め、上部は思留りし如く好き程に繕ひて、兎に角此日は大膳の陣所に宿る事とはなしぬ。

此夜又もや大夕立、電光劇しく燦きて、板戸突裂く恐ろしさ。夜警の柏子木今絶へて、外の篝も消へたるらむ。時ぞ來れる此砦を竊かに忍び出るには、これ屈竟と打喜び、高鼾にて眠り居る大膳の室に忍入り。心の中に厚意を謝し、死たる後は我が母の力に成りて給はれかし、朝日千助は亡兄の仇を討たむと志し、斯くこそ言ひたれ、兎こそ爲したれ、兄に劣らぬ氣性ありしと家康公に傳へて給はれ、遺物の鎗はたしかに納めて、一突なりとも伊織目の、身體を破け申すべしと、枕下なる鎗の折半、音せぬ樣に取出し、直樣庭に降立て、篠突く雨に身を潜め、陣所の裏より逃出たり。昨日は此所も戰場の流石迹とて血腥く、甲の下に鳴く虫や、鎧の袖に稻妻の、寫り甲斐なき夢の跡、其夏草を踏分けて、田中の城を指して行く、天晴凜々しき少年の腕生白き瘠力。戰く尾花に似つれども心は猛き金鐵の、岩を貫く勢ひ

こそ、ほなどり難くぞ見へたりける。

人目を忍べば電光も時に取りては道の邪魔。山田に立てる案山子さへ、もしや衛士かと身を搆へ、苦心に苦心重ねつゝ、敵城近く來りたり。

築かざれども山續き、自然に城の壁は高く。堀は大井の末流を、堰留めたる辰巳堀。水深して又急なり。玆に至りて千助は、日頃故鄕の淀川にて、泳ぎなれたる手練を出し、水音雨に隱しつゝ、何の苦もなく向ふに渡り、水門口より潜入れば、夜討にそなゆる要害堅固、篝火晝をあざむきて、照さぬ隈もあらざれば、進みかねてぞ居たりける。されど其儘止むべきにあらねば。小走に走りぬけて、濡たる幕の其影に身を隱して居たりしが。それにしても西鄕伊織の、寢たる所はいづれなるぞ。これを知るべき由なくて途方にしばし暮れたりしが、忽ち一策を案出し、誰が陣屋の前か知らねど、手當り次第に一臺の篝火燃ゆるを雨水にて消し、木隱れなして樣子を見るに通りかゝれる二人の衛士、消ゑたる篝に驚きて、水田豐後殿の陣中には居ぎたなく寢られしよ、篝の消えたるも知ずしてと高かに話しながら、又も一人は一人に向ひ。此樣子では西鄕殿の、陣所の篝もおぼつかなし。いざ見に行かむと連れ立ちて、急ぎ彼方へ立去ぬ。嗚呼これ天の惠みあり。好運我に落ちたるぞと、喜び勇むで從ひ行き、消えて居らぬに安心して立去る衛士の跡に廻はり、何んなく中に忍入り、樣子伺ふ一室に、殘燈一穗幕に映じ、漏來る風になびけるは、油の盡きて消ゆるなるか。下に眠れる其人の命も今や消ゆるなるか、此所瞬間の間一髮

一心凝つたる遺物の鎗　穂先きのあらぬ折を以て、兄の敵を刺殺さむ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

朝日輝く大井川原、家康公の陣前に、伊織の首を貫きたる鎗を、さも嬉し氣に指上げて。朝日千助の初見參、伊織の首を打取ッたりと高らかにこそ呼はりたれ。

◉疳癖太守

(上)

西國に隱れもなき大名、性得短氣の殿樣おはしけり。紋所に稻妻を附給はねども、近習を叩り散す聲雷の如く、御小言は白雨の樣に劇しけれど、これのみは春雨のしよぼ〳〵と長引くより好しと、此方には通の茶道何庵が語りぬ。

されども短氣は損氣の短氣にあらで、勇氣の留めがたきより割出たる短氣なれば、世に言ふ暗君の無茶腹とは異なり、理の當然には伏し給ひて、さうか余が惡かッたと御ゑとくある事、流石は御先代の御種なりと恐入り奉ッて影言を申す老人もあり。左るに依ッて國能く治まり、民も亦能く音無しくして殿

樣萬々歳とぞ祝しける。
十里先きの名物饅頭、只今直に求めて參れと早馬の御使あるかと思へば、船虫は如何なる物か見たければ速刻引捕へて差出せとの御上意、間違うてはいつも三太夫が瘤ぞかし。或日此殿小性二三人召連れられ、御庭内をそゞろ歩き仕給ふ時、築山の裏に丁々と高き大松の枝を、曾根六と言へる掃除役の登りて、技打ちを爲して居りけり。殿これを遠方より御覽じて。　彼奴猿に似たり。彼の高き松に登ッて臆ぬ働きぶり天晴感心な奴ぢや。是をいつぞやの鷹野に鷲の巣を見出しながら、躊躇致し居ッた金之進に比すれば、桂花蓮根の差があるとのおほせ。　御意に御座ります。　求女左樣ぢやの。
　御意に御座ります。　力彌左樣ぢやの。　御意に御座ります。　皆如何ぢやの。
　左樣に御座りまする。　ふゝふむ皆の思考余が胸中に符合致した、いつも余が思た事を、其方達の思考致すのと、寸分も相違せぬとは誠に滿足ぢやぞ。　はゝッ、臣水たる時は君は船なり。君水たる時は臣魚なり……。　誠に余も左樣思ふぢや、あはゝゝ何は然れ、彼の木の下に參ッて、彼の木の上に居る奴をほめて遣はそうと、ずか／＼と歩み給ふに、お跡から迷惑さうについて參る。
こりや／＼木の上の男子、誠に御苦勞ぢやのと忝けなくも御言葉を掛け給へど、曾根六はそれ處でなし、一生懸命に枝を切り居る時なれば、下に誰か來りしや知らず。只何か人聲のするに、　これ／＼下でごく／＼して居ると、枝が落ちて腦天を割ッて仕まふぞと言ひすて、なほも斧を揮ひける。　小性顏

色を變へて驚き、　　　これ御前のお言葉ぢやぞと心づくれど、曾根六益々平氣なり。　　何んだ御膳方だ、は、はァ御釜の下をたくのに此枝を呉れろと言ふのか。駄目〱生木だから迚も烟くッて……と、とんちんかんの挨拶に、今や一大事の起るべしと、誰しも安き心はなし。幸ひにして殿様の御耳には俗言の入れども分らす。脇で思ふ程にはなくて、　　これ樵夫、其の枝を切れ。此方へ差出たる枝ぢや、余が目障りなれば切拂うて仕まへとの御言葉。曾根六うるさげに大きな聲にて、　　どの枝だ——素人の癖に指圖がましくがみ〱と云うて……。　　素人！指圖！無禮な事を申す奴ぢや。余が庭内の松の木を余が指圖致すに何んの素人も長爪も入る物か。其枝だ、其枝だ。　　其枝だと言ッても分る物か、此枝の事かと言ひつゝ足の先に踏んで。此枝か〱とゆすぶれば、枯松葉ばら〱と落ちて殿の髷の上に止りけり。

（中）

ぷッぷッと唇を震はし、逆八文字の眼鋭く屹と松の上を睨むで。　　過言なり木上の下郎、今一言申して見よ。ぷッぷッ手は見せぬぞと高らかに呼はり給ふ時。又もや落來る枯松葉の額のあたりをグサと刺すに、いよ〱腹立青筋にあらはれ。己れやれ其分には致さぬぞと言ひつゝ、求女が持ちたる御刀を取らんと仕給ふ——これこそ大珍事の糸口なれ、豫て御家老よりの御注意に如何なる事ありとも臣下の者を御手討にあそばすと言ふ節には、決して御刀を渡す可からず、時儀に依らば御刀を持ッて逃出す

も苦しからすとの事、それよ逃けるは今なりと其儘引攫いで駈出すに。おや〳〵其方を手討に致すので
れないわ、刀を渡せこれに出せ、こりや〳〵待ぬの〳〵と後を追うて走り給ふに。これは早情ない事か
な、悪くすると此方へおはちが廻りさうあと、掛價なし正直一生懸命になり、ぐるりと築山を廻る時石
燈籠と鉢合せして、痛い〳〵と御刀投出し、思はず額をおさゆる時、鮒の瀧登りと言ふ見得にて、へと
〳〵と喘息ながら追來る殿樣。　ひやッまだお迹に御座つたかと、刀を其儘、一命を引攫いで生垣
の中に飛入り折戸ぴッしやり、　もう締めた〳〵。　明けぬか。　締めました〳〵。
　こりやれさへて居ずと明けぬか。　いえもう締めました。　無禮な奴ぢや明けぬか。
どう仕つりまして……。　明けねば破る腰の朱鞘は何んと仕た。　お腰の物は黒塗で御座イま
した。　えッ馬鹿者、ぐず〳〵致すと其方も手討だぞ。　御前、お腰の物は石燈籠の處へ投出
して御座い升。

話木上の曾根六に戻り、殿樣とは知らず雜言無禮、跡になりて氣が着き、恐れ入ッてまごつき、上に
登ッたり下に降りかゝッたり、五月旗の縫猿と言ふ有樣、脇より見てこそ面白けれ、當人の心中も上ッ
たり下ッたり、大騒ぎに騒ぎ居る時しも、殿樣は求女を追うて折戸の處に押問答仕給ふ樣子、此間に逃
出して一命助からんと、松の木をすべり降りんとする處へ、此體見つけて求女の方を振捨て、取る物取
るや否や一目散に驅戻る殿樣。忽ち松の下に御坐ッて、　降りるとて降ろさうや、其儘にて手討に

致すと罵言れしが、好く〳〵考へなほして。　いや降りて參れ降りて參れ。

斯くあれば曾根六も命がけの仕事なり降りて、首をちよん切られんより、寧ろ木の上にて餓死するが我杣たるの本意あれ。など丶不思議に臍を堅めて、松の頂上まで登詰めたり。

殿樣益々怒ッて左右の小性に向ひ、　こりや〳〵階子を以て參れ。　階子を何にあそばします。　御前其
　何と申して、分らぬ奴ぢやな。余が彼の松の上に登ッて彼奴を手討にするのぢや。
樣な長い階子は……。　ないと申すか、不都合千萬な。

（下）

殿樣松の頂上に達する階子の無きに、怒はいよ〳〵登りつめ、刀の鯉口を鳴して松の根に片足掛け。
　下郎如何致しても降りて參らぬか、余が申す詞を用ひぬか。　でも殿樣降りて參りますれば、御手討に成ますから、滅多に其下へは行かれませぬと、上より曾根六が見下して答ふれば。殿樣は釣上ッた眼で睨みあげ、　まだ〳〵左樣な事を申すか。　左樣おほせなされますれど、元々殿樣が御無理で御座います。　何、余が申す事が無理！ぷッぷッけしからん事を申す奴ぢや、降りて參れ〳〵と庭下駄の割れるばかりに踏石を蹴ッて、切齒高く碾らせながら。　何が無理か、主に對しての惡口雜言、好しそれはそれにて堪忍も致して遣はするが、足を以て示しながら此枝かとは何事ぞ。
　それでも殿樣、手を以て指しますにも、平地と違て松の上、手を放せば落ちて死にます、夫ゆゑ無

據足を以て申上ました。　手を放せば落ちて死ぬる……夫は致方がない主命だ、其位な事は覺悟致して居らねば相成らぬ。　お情ない、君の御馬前でこそ思ふ存分の働き仕り、武士のはしくれ相應の死様も御坐りまする。喩へ御庭番掃除役の足輕風情たりとも、松の木から落ちて庭石で頭を碎き何の御役にも立たず相果んこと如何ばかり殘念か存じられませぬと、滔々たゆみなく辯じけるに、殿様少しく御合點仕給ひ。　汝足輕の分際にて面白い理屈を申す、好し〱さらば兎に角下へ降りて參れ。　なぞと其手は御免蒙りまする、矢張り此儘々々。　やア余が言を疑ふとは不屆奴、大名に二言はないは。　處がありましたから不思議。　いつ有た申せ〱。　最早私の一命は無きものと覺悟の上、をこがましくも下々の者の爲を計り、御諫言申し上まする。　ぶッぷッ小ざかしき諫言だて、聽く耳持たぬは。汝いよ〱降りて參らぬとあるからは、一矢の下に射落すぞ。力彌〱。

はッ、はッ、何御用に御座ります。　弓矢を持ッて參れ。　はッ、持ッて參るは參りますれど、曾根六を御射落しあそばすならば何卒君の御大度を以ておゆるしあそばさるゝ樣、一生の御願に御座りまする。　えいッ持ッて參れと言ッたら持ッて來いと、ぐず〱すれば一刀の下と言ふ權幕恐ろしさに力彌お返事も申上げず、求女流に逃出しければ。　不忠な奴だ、即刻切腹申しつける。

こりや〱銀之丞。　はッ、はッ。　鐵、鐵砲を持ッて參れ。　はッ持ッて參るは參りますれど……。　其方も逃出すのか。　御意に御座りまするど。これも宙を飛んで走行く

に、今ハ一人も御傍に居らず。御自身取りに行かるゝ内にハ、木より降りて彼走らん。這ハ如何に爲さば好からんと、腕を組む間もなく急思案廻して、漸く見出す鋸一挺これ曾根六が下に置きしものなり。屈強の道具と早速手に取りて、づか〳〵と松の根に進み、二抱もあるべき大木を根切りにせんずくはだて。

　今に見よ、此木と共に汝も倒れて其儘絶命致すか、運好く命あらば引捕へて鋸引に致すぞ。

　恐れながら殿樣、其鋸を以て此大木を引切り給ふハ、半日や一日の仕事にあらず、殊に殿樣の御腕でハ……。　何を是敷が、引切れぬ事あるべきや。　いや切れませぬ。　見事切ッて見せるぞと汗をだく〳〵流しながら、一生懸命に鋸をつかひ給ひしが、如何で節くれ立ちし松の切るべき、息の方を切らして――かくても負惜しみに、ゴシ〳〵動かせども、中々に腕の痛さよ。上から曾根六氣を揉みて、　殿樣、それハ逆引で御座います。前の方へ力をお入れあそばして……。

　何是れでも切れぬ事があるものか。　いゝ、いけませぬ前の方へ力を御入れあそばして、後へお引きに成る時歯を浮せて……。　歯を浮せて……前に力を入て……此樣に致すのか。　左樣々々そして鋸の柄をお持ちあそばしますに、太刀をお握りなさるのと同樣ではいけませぬ。　何、是れでも持てぬ事ハない。　いえ、いけません。右の手を拳骨にして上に乘せまして……。　此樣に致すのか。　左樣々々。　中々苦しいものぢやの。　左樣に御座ります、一通の苦しさでハ御座りませぬ。　眞實に余ハ疲勞致したぞと言ひつゝ、がッくり其所に倒れ給ふ。

殿様！一本の木を切倒す事も容易な業では御座りますまいがな。左様ぢや誠に汝の申す通ぢやと、時の立つに從ひて一時の立腹もをさまり、彼の白雨の晴渡りて、曾根六が理の當然に伏し給ひ。成程余が悪かッた、大丈夫ぢや降りて來い。はて萬事ゆるす〳〵。

（完）

◉骨武者

朝鮮蔚山の籠城に糧食盡きての困難言ふに忍びざる事多かりき。加藤與平次は黄金七枚にて造らせたる大小の腰物を以て、櫓下をかせぐ商人より五升の米を求めけるが、之を五粒六粒づゝ分配して、傍輩に殘る所なく與へければ、若年ながら慈悲深き致方、翁も及ばぬ事なりと上下の者に感涙を流さしめける。玆に水賣の水を無錢にて飲みたふし、頓智の名高まりたる大河內茂左衞門秀元は、塀裏を堅めたる足輕人夫などの、様子如何にと見廻りけるに。昨日までは塀にもたれて纔かに眼のみは動かし居りし者今日は叉眼を見張り白身勝に睨んで、まんぢりとも閉がねば。不審に堪ず、鎗の石突にて動搖り見るに、これは如何な事五體は氷に封られ居て、倒るゝ時めりめりと響きぬ。

或日大河內は、死馬の肉を矢の根に貫きて、篝火にさし入れ燒きて食ふに、人々此香ひ臭つけてよろよ

ろと寄集り。　美味きやと問ふ。　美味き不味きハ我の知る處にあらず、腹滿ちて力量衰へず、毛唐人の髭面撫切りにする事さへ出來なば、何物たりとも食ふに別なしと、あはもむしや〳〵と食ふに。

實にもさうずと皆々合點して、同じ様に食ければ、これも後には無なりて、千里の馬骨堆高く遺りぬ。

大河内此頃は臑當を廢し、此に代ふるに脚半を以てせしが、緒も解けざるにする〳〵と落ちて足首に掛る事度々あれば、堅く引上げて結び置きしに、又も下る事前に同じ。心附きて能く見れば、臑の肉全く落ちて、骨の上に皮のあるのみ。鐵火箸立てたるが如き様なるに、我ながら我の瘠せたるに驚き、斯くてハ傍輩の中にても大兵肥滿の聞へある山川長兵衞の剛慢面、日頃自慢の鼻も低まりけん。様子見るべしと兩三輩打連て、山川をたづね出し、引捕へて、　瘠せたかと問ふ。山川鼻先きに笑ひながら、

何を瘠せたかとは誰への口上ぞや、我は此通り水々と肥へてさらに昔時に變る事なしと言ふ。見れば小手臑當も其儘にして、頬當も取らであるに、　それが誠ならば先〳〵甲を脱ぎ、其頬當を取つて顔から先きに拜ませよと言ふ。山川嚇ッと怒ッて、　大河内が言葉とも心得ず、敵勢俄に攻め來る時油斷は武士の大耻辱。假令大將よりのおほせなりとも甲は脱がじ頬當は取らじと、力味かへッて從はざるに、面白半分無理にせまりて、兩方より頬當を解き去れば、誠に何とも譬ふべき様なし。唯是繪に見る餓鬼の面に異ならねば、これは〳〵と只あきれて、互ひに苦しき腸を絞り、果ては思はず落涙

に及べど、眼中より他に溢れざりけり。

（完）

◉畫師

（一）

我が若い時は卒塔婆の折半で、鬼界が島まで漕いで行た……。

今の若い奴等は朝熊颪が一寸吹いても、それ暴風だ、帆を下せ梶を上ろとびく〳〵丸で生巣の籠を見た様に、潮次第で浮いたり沈んだりするぢやて、其様な弱い事で大王崎の沖合が櫂一本で拔けられる物か。日本で一番高い山を、底の方に見る程な濤が立ッても、揚板の下に眞水さへあれば、大胡座で煙草吸うて居て見せる。　船頭さん大分度胸を見せなさるの。　あれ〳〵客人、御領主小窪様と名桐方との合戰が間もなくぶッ始まるとの取沙汰ぢや、此位氣が荒う成ッて居なくては、船頭ぢやて〳〵、まさかの時の御役には立ちやせぬわい。　勇ましい事を言ひなさる、成程浦々の噂には今にも戰爭が始まるとて、上を下への騷ぎとやら。是から私の行く處は其御領地の小松が濱。　此船を着ける處も小松が濱ぢや。　なんと私を敵の間者と見て、あやしく思はれはせまいかの。　隨分思はぬで

もない、全體お前は何者ぢや、永年の船乘り職業、海渡船で客の顏も大勢見たが、他國人の用のない志摩くんだりの海の端、若芽荒芽の仕入なら、それ相應の風俗があるに、奇體な上張とやら言ふ物を着居ッて、爺臭い顏で濟してんで御座るが、年齒は未だ三十四五、四十には成り居るまい。　その不審は道理、私は他國人の用のない此國の景色が寫したさに、遙々都から來た畫師ぢやわい。　あゝ船越神社の繪馬を畫いたり、松魚船の艫を塗ッたりする人か。我が聞いて居るには、畫師と言ふ者は世捨人も同樣ぢやとて別物にしてほかしてあるとやら。それが眞實ならお前は氣樂なやうで窮屈で、神樣の樣でもあり穢多の樣でもある。　さ、それ故戰爭の初まると言ふ所も恐れず、言はゞ畫道の爲めに討死する覺悟で、伊勢名所から二見の浦づたひ、鳥羽磯部から安乘崎、其所の濱邊から此船に乘て、お前に小松が濱まで連て行て貰ふのぢや。　それで綺麗に合點が出來た。我の船に乘ッたのも好運なら、今日又小松が濱へ行のも好運ぢや。　とは又何故の好運ぢや。　されば聽んせ、いよ〳〵戰爭も近寄て來た昨日今日、翌日からは陸路も海路も通行留。他國の者は御領内へ這入れぬと言ふ事ぢや。　それは誠に上首尾と言ふ物、去かし左樣成ッては一刻も早く濱邊に着きたい、酒錢は倍益しぢや、急げ〳〵。　合點、日天樣の島隱れせぬ内が花ぢや。

船頭の老爺、艫綱たゆまず大ゆれに漕ぎ行けば、船底に綠破れて迹は白布を敷くが如し。玆に一羽其所に二羽、摸樣拔出す鷗の行衞に、小松隱れの白壁は、小窪の城と瞬もせず、畫師は見詰めて思はず一句。

あゝ好い城ぢやなア。

(二)

打寄する浪に船を委せて磯の砂路に乗揚れば、直樣老爺飛んで降りて、澪標の折株に纜を繫ぎ居る。此時潮は既に去ッて、船少しく傾きけるに、降りるは今なりと畫師も續きて、干潟の上に立出れば、早や足元に白珠碎けて、二步三步よろめきたり。老爺は此體を見て濁聲の笑ひ高く、わッはッはッ龍宮からお迎ひが來たげな。乙姫の戀婿は浦島ばかりでないと見ゆる。　それ處か此通り裾を濡した。

捨て置け、自然に干くは。古い奴ぢやが汐水には濡たくないての。　のんきな事を言ひなさる、　緣あれば龍の宮媛の何とやら、海士が苫屋の汐燒く竈で干かして貰ふと云やう。　と言ふ内それや又浪ぢやと老爺に氣をつけられ、驚き樣砂原驅出して、退ひはすまじと見返れば、きらめき渡る貝殼の光り、拂ふが如く消失せて、迹に白雲の俄に起り、ざんぶ、ざゞんぶ、汀を包み。散りぎは靜かに引いて行く。

酒錢好き程に取らすれば、水無月の空に燒砂原の此海邊、永居は無用と船頭の老爺、通り一遍の禮をのべて、兀頭ぢり〳〵と照されながら、水わか取りに櫂をかつぎ、磯づたひに立去りぬ。迹に遺りし畫師は是からが我の世界と、あたり見廻して一人點頭き、薄物の上張をぬぎて笠の上に虫たれの心をかしく。其時此所に濱風の微なる――小渦卷に砂を捲込む中を潛りて、磯の香を袖に含ませつゝ、急ぎて松原の

影に進みぬ。

曲りたる松、捻れたる松、根と根ともつれ、枝と枝とからみ、たまさかのおどけたる風に影は破れて又合ひ又破る處。暑氣を避くる影をねらばんとてか、腰を休むる木の根を尋ねんとてか、但し漫々たる大海原より跳出る入道雲を眺めて、懷に風を入れん爲めにか。三條皆はづれて影まばらなる所より、隈なく見ゆる小窪の城をきッと睨んで立ちたりける。

手荷物の中より大きなる手帳樣の物を取出し、腰に矢立を搜ッて此墨に筆を染め。城の裏手に起伏する小松山、眞砂ヶ岡。下を流るゝさゝら川、此水落る鴻沼の葦疊。これに沿ふ一筋の街道より、農家の屋根、寺院の塔。東は血染の森を限り、西は深田の畔に留め。城門、櫓、日光射返す白壁より、雲突破る物見臺、石垣の高さ、堀の廣さ、忍窓の蓋明放したる處までも洩さド物と寫し初じめぬ。此時は既に平凡たる客人にあらず、浪に驚きて逃げたる畫師にてもなし。景色を寫すに餘念なければ、假令頭上驀地に大磐石の落來るとも、更にびくともする事なく、自若として筆を走らす樣、天晴此道の名人と見えたりける。

（三）

松の木影より濁聲張揚げて船歌唄ひながら出來るは千鳥足の船頭、荒磯そだちの筋骨逞ましく、眞黑の面に酒の色見へたり。此暑さに堪へかねてや諸肌脱ぎ捨てたれは、一本藤染抜きたる麻の筒袖を砂路に

引き、己の土足に蹂躪り、一歩一歩汚れ行くを、一歩一歩邪魔ひろぐと怒り、益々踏めばます〳〵よろめき、透迤きながら至る畵師の後。急に歌の節を殺して、奇體なと云ふ顔附き先づ奇體なり。中腰の膝の上に兩手をつきて、暫し音無しく眺め居りしが、多辯は持前、無禮は酒興。うんと言ふ程背中を撲ぐるに初て人ありと氣の着きたる畵師、振向いて何者ぞと見詰むれば、生醉の方よりはッだと睨返し。

此奴大白痴奴、此小松ヶ濱へ何にしに來居ッた。此所は小窪新左衞門國安様の御領地で、扨て又斯く言ふ波切の船頭蟹面の度助が繩張り内ぢや。我に挨拶せぬ奴には、網一ッ干させぬ仕來りを、破れ着物の旅畵師奴、とッとッと〳〵止め居らぬかと、鈍眼少しく釣あげて、廻らぬ舌を叱咤しける。されども畵師は少しも騒がず、別に又可厭とも思はず。生醉元來海鼠の如し、我箸の抓む處にあらずと、すまし切ッて畵板に向へば。腹の中より揉揚げての怒り聲、

此奴が此奴が、度助が之程の大聲が和主の耳には這らぬか。扨ては聾者か啞者かと言ひ様、片手のばして畵師の右の耳をつまむに、斯くても平氣で筆を走らす。少く強目に引張れば、首を曲たる儘にて畵く。

わはゝゝゝ此奴阿房と見えると、此度は後より兩手のばして、庚申流の目隱しするに、隱されたる儘拂ふでもなく、筆を握ッて泰然とかまへ、却ッて腕休めと喜ぶ様なるに。度助さッぱり張合抜けして、今度は此法ありと、畵きかけたる帳面を奪ッて、微塵に引裂ん權幕。

眠れる獅子は眼を開き、霹靂一聲高く叫んで、俄爾度助の片手捻上れば。

あいた〳〵〳〵不意を

食はせるとは卑怯ぢや、誠の畫師のせぬ事ぢや。　元より畫師のせぬ事も、筆は武道の劔にたとゆ。時には鬼神を封ずる事あり、時には蛟龍を縛する事あり。大額には勇を以て畫き、密畫の彩色は是術なり。王道のさまたげする奴原は、劔を以て切拂ふ。畫道の邪魔だては此筆を以て成敗なさんと、度助の面を眞黒々と塗りたりける。

（四）

此濱邊には漁師ばかり。生醉の度助黑きが上の黑顏をしかめて、名に呼ぶ蟹面のぶつ／＼とつぶやきながら、道を横に縫うて立去るに、畫師其筆を捨て丶更に新しき物の毛並ぬれぬをも厭はず、今度は松の根に腰をかけて其次を寫し初むるに。又も入代りて一人、海に千年の功をや積みけん、今は天氣見の隱居役、目鏡無しに網の目を縫ふと言ふを自慢にして、杖をつかぬを年寄の伊達。づか／＼と畫師の前に進寄り。　これや中々精の出る事ぢやの。見取畫きの景色立派／＼と、獨語の樣に言放ちつ。

さて畫師殿、濱邊に一生老朽ちた此老爺。理屈も仔細も何一ッ知り居らねど、お前の遣らしやるは何んと言ふ流儀ぢや、耳學問さして年寄を喜ばしてくだんせと、さもなれ／＼しく話しかけられ。他人は晝寐に汝一人眠られず、相手無しの退屈晴しに、忙がしき我の邪魔ひろぐ氣か。此奴も生醉に劣らぬ大難物と、畫師は此時此樣に思ひしか如何に――濟し切て頓着せぬを、老爺其意酌違へて。　かうあうては協はぬ。何一ッするにも心を其方に打込んで、無言の行をさッしやると覺えた。ゑら者／＼

と何をか一人ぐず〳〵と饒舌る、其聲流石に耳に入りては、可厭からぬにあらざれども、其顏見せては我事破ると、畫師此時此樣に粧ひしか如何に――濟し切ッて一向に頓着せず。暫し無言と多辯との合戰續きしも、根氣負けして老爺我折れ。最後の詞は毒ありさうでうまい話。暑からうに、あの松林の中に行ッて、御佛岩の影に湧出る、弘法大師の御靈泉、氷の樣な冷たい清水で、顏でも拭いて來さッしやいと言捨て、すご〳〵と是も去りぬ。

迹より引切りなく種々な奴原近寄り來りて、見物高く立はだかり、信切らしく話仕かけ、樣々に爲すと雖も、畫師は只一心に城を寫さん、日の入るまでに寫し終らん、左せざる時は翌日よりは、他國の者一切入る事ならぬ小窪領。命は迹二時不足、一寸々々身を刻まれ。元氣は汗と成ッて流れ出づるに、目も眩むべし。好しや眼拔出で腕折るればとて、此事なし得では我畫師たるの義務を果さずと、彼輩には見向きもせず、一生懸命に筆を走らす。

日は中天より少しく西の方に傾きたり。今や風を送る松の枝も熱し、砂路は殊更熱し盡し、乾坤一氣總て炎熱。三伏の中での今日、今日の中にても極度の暑さに、枝を廻て横樣に射來る日光、あはれ畫師の顏と手先きとを、見る間に黑う染めあげて、白きは脣を噛〆めたる齒、城を睨みたる眼、只此二つあるのみ。

敵とも見たる俗物の影、漸く此爲に無くありたれば、此間に一息して新しき志想に勇氣を倍さんと、筆

を持ちたる儘腕をのばして、呼吸一つゆるやかに吹き去り、見るともなく見ぬともなし――ふと彼の老爺が語りたる靈泉の方に眼を注げは、這は抑も、其所に人ありと知らざりし。畫師急に叉筆を染めて前の如く畫板に向ひぬ。

（五）

畫師が靈泉の方に眼を注ぎ。驚きて叉筆を取りたる事故なきにあらず。

女松こんもりと繁りて影薄暗き處、豆蔦にからまれたる巖あり。苔土の小丘よりなだらかに茂る石菖の根を分きて、潺湲と流れ出る靈泉の源に、年若き海女の只一人。此所までの暑さを其水に拭き去らんとや、岩に腰掛けて、泉に足を浸して、今や手拭を絞らんとする處なりし。

畫師は言ふまでもなく其瞬間の後を見ねば、海女の如何にせしや知る由なく。海女は元より畫師あるを知らねば、絞りたる手拭を口にくはへて、腌胙さうに黒髪の肩に垂るを、雨手もて束ねてあり。此時薄衣の胸元ゆるやかにして、肉ゆたかなる處ほんのりあらわれ、此志摩の海女にあるまじき雪の肌美しく、これを千尋の海の底に沈めて、荒藻に障らするとは如何にしても思はれぬ姿。頬に言はれぬ愛嬌のしるし見えて、ふッくりと腮の二重なるも嬉し。露や滴らん目元細けれとも涼しく、鼻筋通りて紅唇の艶、梅の蕾より他にたとふべき物なし。

小窪の城の姫君たりとも及ぶまじき美人を、惜しや包むにそぎ袖の古びたる、浪に千鳥の摸樣薄らぎて

只麻の筋目正しきを、都よりいつ流れ出けん、名ばかり錦の金糸抜けたる細帯にて結びてあり。思へ、此極暑に烈火にも比ふべき砂原、しかも影なき礒をつたひて、漸く此松原に入り、此靈泉の源に來りしなれば、精神うッとりと成り、又其燒砂原を歩むべき勇氣——此乙女に起るべきや。嬉しさうに水を弄び、新しき息を吹返して、時には水に寫る己が顔を眺めても見たり。豆蔦撈りて松葉にさして見たり、これを流るゝ方に捨てゝ見たり。

されどもいつまでと言ふ限りあらねば、好き程にして行くべしと眉を顰めながら、厭さうに泉をはなれ、岩影に置きたる籠に汐滴る海草入れたるを負うて、重々しく立ちながら、濡手拭を髪の上に冠せ、心遣して歩みかけしが。遠くも隔たぬ松の木の下に景色を寫し居る畫師あるを知ッて、思はず顔の色さッと赤らめ、其の赤らめしに似もやらず、しづ／＼と其所に進みて、又も横の方に立ちながら、其畫く樣を眺めはじめぬ。

影の畫板に差したるに、人ありとおぼえて屹と見上る畫師。千曳の岩の姫葛に少しくゆらめき、夫となく其顔を見て、我未だ此樣な美人を描きし事なし。先人も恐らくは未發なるべしと、又も見上れば、つれなくもそむけ。そむけたるに氣の着きて、惡魔！　惡魔！　大惡魔！　これが爲めに橋一ッ寫し遲れたりと、身震ひして更に腕をあらため、一心凝らして畫き初むるに、早や其半面は寫し得たり、日も亦次第に傾き行きたり。

あれ〳〵と海女が叫ぶに、何事とこれには驚き、畫師あはたゞしく振向けば、小き蟹の畫筆抓みて持行かんとするあり。何んのそれ敷にと言へる風にて、荒々しく筆取かへし、更に禮一言のぶる事なし。斯くても海女は何が面白きか、背の籠さへ下におろして、暫し茫然と見とれ居りしが、堪へかねたる有樣にて。　逢ひたらばゆるして給へ。もしや貴郎は名桐領の御方では御坐んせぬかと、苦し氣に言ひけるに、畫師は餘所吹く風と空々しく。　いや私は都の者、名桐とやら言ふ處はまだ行った事もないと調子輕く言うてのけたり。

(十八)

つれなさに取着く島もなし。海女は再び言出る言葉なくて、極り惡く後に立つ事問はぬ前に同じ所作なり。斯くて又過す內今や畫の方次第に進みて、櫓門の下なる一筋道に、逆茂木建つべき要意の標杭幾本となく打ちつけたるを、見取畫きする處なるに、忍びかねて又も同じ事繰返し。　物騷しき時なれば、妾を怪しみ給ふも無理ならねど、何んの其遠慮に及びませう。何を隱さう妾も、以前は名桐領に生れた者。仔細あって此小窪の領內には居るもの丶、戀しいなつかしいは故鄉の空、加へて繼母の折檻にそれ〳〵酷い目に逢ひまする。噂に聞けば眞實の母親は名桐樣の御殿に居て、老女とやら言ふ御役を今に勤めて居しやんすとやら、自由にならば尋ねて行かう、逢うて名乘って貰ひましやうと、淚に呉れては寐ぬ夜の思ひ。なほ疑はしくば、それを晴して見せまするに、肌身放さぬ守袋もあり、籠入

りたる話も御座んす。道々聽けば小松ケ濱に名桐方の間者一人、都の畫師と觸れながら、城の地形を寫して居るとて上を下への騷ぎ。表向き追拂ふにも、他國人の入る事ならぬとは翌日からと言ふ戰せぬ城く々への知らせ文あれば、威權づくでは追ふこと出來ずと、小窪方からも間者を出して、最前からの人達はありやみな邪魔しやうとての擧動で御座んすぞへ。さ、これほどまでに打明けましたのに。貴郎の方で御かくしなさるとは恐ろしい罪な御方。つひそれと一言名乘ッて被下さんせ、事に依ッては賴まれもしましやう、品によらば御賴みも致しましやうと、搔口說く美人が辯舌、其聲愁ひを含み、圓やかなる内に強らしい角も見え、怨む如く訴ふるが如く、殆ど胸の急所をしぐられ、一句一句に腕も鈍れど、善惡いづれにもせよ女は魔物、油斷は大敵と心得て、一言も答へぬ畫師が心、鐵か石か木か草か。

妾を不憫とは思さぬか、御疑ひは晴れませぬかと、彼の愛らしい眼は濕ひ——濕ひたる眼は畫師の顏覗きこみ、如何に〳〵と返事を待ちぬ。

いつまで待ても答ふる事なきに、心細さは女氣の、つひ一滴の涙こぼして、袖の内にむせびながら、

かほどまでにつれなき方樣とは露ばかりも思はなんだ、もう言うて入りませぬと、松の木の裏表、後向きにもたれてしく〳〵と泣き居るに。

かしましい女ではある、されども母を慕ふ心根不憫さに、此畫の出來あがりたる其上にて、我は名桐の——名桐の間者にあらぬ事を好くとッくりと言ひ聽かさん。

え、間者でない事を言ひきかせるとは言はしやんすか。

されば、それに違ひなし、待

つ間詫しくば後に廻り、笠であふいで風でも送ッて呉れ。　おゥそれはお安い御用、から打解けてくださんすれば、何事も仕よいと言ふ物。お暑からうに此汗は瀧の樣なと恐る〳〵、手拭をもて襟のあたり拭かんとする、其手を下からやんわりと握りて、今までの恐ろしい顔何處となく消え失せ、莞爾と微笑むに、海女は心あり氣に驚きて。　あれ何をなされまするど靜かに拂うて、左程お暑くば御佛岩の清水でも酌むで參りませうか。　それは誠に忝けなし、早く〳〵と急ぎたつるに、好き潮時と早足に走り、湧出る源に行きて、鮑の貝に清水酌み取り、こぼさぬ樣に持かへり。それ冷めたい其の内にと、畫師の前に差出すを。　弘法大師の靈泉とは高野に流る毒の玉川と同じ水か。　ゑッ！と驚く海女を睨みて鮑の貝を打落し。　忘れても飲む物か、ムハヽヽヽ。

（七）

總じて計畧が淺い〳〵。美形を以て心を動かし、毒水を以て我を害せんとは、昔流行ッた卑怯の手段。時節にあはびの貝の水、迂濶に飲むでは筆が持てぬ。お前も其美しい顔を此墨で塗られぬ内に、早く此場を去るがよいと、飽くまで大膽不敵なる畫師の詞に興覺めて、今更涙の愧しく、海女はさもうらめし氣に。　是ほどまでに申しても、貴郎は、妾をお疑ひなされまするか。折角酌むで參りました水を、能うむざ〳〵とお翻しなされました。他に言ひ樣もある物を、我身を矢張間者か何にぞの樣に、當こすりの惡つらね、まだ〳〵其上に何事ぞ。たうとき御大師樣の御靈泉を……。　毒と言ふたが惡いか。

「悪う御座んす。」　白々しや！言はしておけばつべこべと、黒を白との言ひ開き、餘りの笑止に片腹痛いわ。これ此水を捨てたる下に忽ち死したる蟹の甲、紫色に變りしが血迷ふた眼には入らぬか――、其樣な腐れた眼玉故に、我を名桐方の間者と思ひ、自から招く心勞に責められ、畫道の妨げ爲さんとする、愚も程よく切揚げよ、とあざけり盡して見向きもせず、筆を矢立の壺にしたしぬ。

言葉玆に極ッて顔色青ざめたる海女、不意に籠の海草の中より、取出したる懷劍ひらめかし、畫師の後より飛びかゝッて、肩先き只一刀と切りつける。斯くあるべしとは疾くにも知りたり、心に要意五體には、わざと見せたる隙間とて、女の腕にやみ〳〵刺るべき。むづと利腕引抓みて、靜かに砂上へ組伏せながら。

小窪領には美人多し。日にやけぬ雪の肌、汐に染まらぬ緑の黒髮、思ふに眞實の海女ではあるまい、殿中の侍女が假に窶せし姿であらう。こりや御女中此樣なあぶない事は止めにして、早く城へ歸りたる上、小窪の殿に申上げて被下れ。潔白、拙者は旅を廻る畫道修業の畫師にして、間者とやら言ふ其樣な恐ろしい者では御座らぬ。又御城内に唐紙、襖、額面、軸物は申すまでも無く、殊に天井裏の曲書きは得意なれば、其御用おほせつけられる樣一重に願ひまするを言うて居たと傳へられよ……これは仕たり、彼是と言ふ内に日は次第に入りかけた。是から一息に寫して仕舞ねば、これまでの苦心が水の泡ぢや。今度は邪魔して被下るなと、組伏せたるを放しながら衣裳の砂を拂ひける。

海女は面目なくて顏を下に向けたるのみ、只しよんぼりと立ちてあるに引かへて畫師は甲斐〳〵しく。

懷劒を鞘みをさめて遣り、なほ樣々にいたはりたる後、身も再び矢立取出して更に筆を改める時しも、松原の中にて大勢の口々に。　それ戰爭が始まッた、名桐勢がせめて來た！　共に驚きて松原見渡せば、梢がくれに白旗飄へり、法螺の音高く響き渡る。近寄る儘好く見れば、旗は白紙、人は漁家の子の惡太郎達。時節に連れて戯れにも戰事して遊ぶかと、思はず二人顏見合せ、苦しき笑ひを無理に粧りぬ。

（八）

如何に濱風の吹來ればとて、松の大樹の動く可きにあらず。大浪小浪の打寄するとも、岩に碎けて彼より散る。酒の力に勢を倍し腕づくで來し暴漢も去り、妙に煽動て油をそゝぎ口火をさがせし老爺も去り。其後引續きて集りたる若き漁師も老いたる海士も、來る者は必ず去る者。今又姿の色と心の情とを以て近寄りたる年若き漁家の娘——小窪が城中の侍女も、去らではならぬ場合と成りぬ。

代りて來る者は五六人の海士の子達、鉢鬢奴の腹當勇ましく、笹を竹馬にして海草の采配、松毬を投合うて砂烟蹴散し。追はれて海中に飛入るを、次郎と言ふ子が呼留め。引組んで一所に轉び、二人泣出す弱武者あり。天下一河太郎と名乘ッて、相手の居ぬ方へ驅行くあり。扨も子供に寒暑の別なく、他人に遠慮の目先きは見えず。海士は松毬の飛來るに迷惑して、暫し木影に避たりしが、彼等の少しく遠ざかりたれば、漸く以前の處にかへり、面目なげに頭を低れて。　今と成りては隱すも詮なし、誠に妾

は小窪方の間者、恐ろしや女の身の主の御爲めとは言ひなから、罪もない貴郎樣を此方の狹い廻り氣から、害なさんと致しましたは、餘所の國への笑はれ草。殊に貴郎は都の御方、御歸りなされた其時に、國々の物語彼此とお話しなされまするやうに。志摩の女は此樣である、小窪の侍女はこれ〳〵と京 女郎の姬達に、お聽かせなされると思ふ程、一層愧しう御座ります。　その話をさるゝか厭なら、早く此場を立去られよ。御身が彼此申さるゝと、耳障り筆のさまたげ。十も合點百も承知、御身が言ふだけ、都へ行ッて吹聽する言葉が益す。　そればかりは堪忍して……。　くどい！　くどくも今一度申しまする——かへす〴〵も只今の無禮はおゆるされて被下りませと侍女の本性あらはして、他事もなく賴み入るに、畫師は只點頭くのみ。

此上言はゞ睨みつけん有樣なるに、重ねて語らず目禮なして、漁村の柳なよ〳〵と長汀づたひに立去りけり。

今は無心の子供等が戰事して戯れ居るのみ。それも隔たりし海邊なれは、又入代りて邪魔の來ぬ間、日の入切らぬ其内にと、畫面の砂を打拂ひ、矢立の墨に水を含ませ、筆の先き唇に濕す時。　伯父さんと後に聲あり。又來たか、誰ぞ——何者ぞと心に思うて見向きもせす、筆を走らすれば其袖に縋りて、　伯父さん畫をかいて居るのかと愛らしき子供の聲なり。　可厭し、邪魔ひろくと手は見せぬぞよ。　あら伯父さん、其樣な强い顏して睨むでは厭よと言ひつゝ、畫師が振上し手の下を潜

りて、脇の下から首を出し、怒れる顔つき覗きながら、にこ〳〵と笑うて。此の旗に名桐の紋を書いてお呉れと、罪もなく言ひよりける。

（九）

其紙旗に名桐方の紋を畫いて呉れと言ふのかと、子供の顏つく〴〵眺めて、意味深く畫師が問ふに。

あゝ其名桐の紋を畫いてお呉れ。　いと易き事ながら今は忙しくて兎ても畫けぬ。音無しくして其處に待つて居れば、後に美くしい花、もしくは鳥、望みとあらば源義經又は辨慶が釣鐘を持たる處など、繪具入れて畫いて取らせんと、すかして見れどいやいやと首をふり。　軍事に我は名桐方の大將！最前より負けてばかり居る故……。　負けてばかり居る――名桐方が？　これも其方の旗には紋が畫いてないからだと、小窪の大將船越の岩太郎が言ひ居ッた。我は口惜くて〳〵ならぬから、如何ぞ一筆畫いて被下れ、よう伯父さん、伯父さん。

畫かざれば袖を放さず、拂へば又も縋り、打たんにも頑是なき子の三蓋菱、名桐方の紋所を、一筆畫きに走らしなば、左程暇を費さずして、此首枷を拂ひ得なんと、惜しき寸刻を引裂きて。　さらば畫いてやる程に先づ此手に縋るを止めよ。　畫いてさへ呉るなら邪魔は少しもせぬ程に、早く〳〵と急ぎたち皺だらけの紙旗を恭しく前に出しぬ。

荒々しく三蓋菱畫き終ッて。　それよ約束は之にて濟みたり、疾く此所を去るべしと言ふに。此子

喜びて紙旗受取り、自慢らしく押立て振廻すに、これを遠くにて見たる他の子供等、我も我もと寄集り。
此の旗にも畫いて被下れ。　我のにも畫いて給はれと、可厭も袖にもつれ、厭と言へバ口を揃えて。
此子に畫いて遣りながら、我等には何故ぞと、口賢こくも言爭ふ。右を拂へば左に縋り、前を追へば後に集り。日の入るに間もあらず、それまでに此畫を寫し終らでは、又と再び時季を得ねば、暫らくの內待てと言へど、かぶりを振りて聽く事なく。これ程言ふても承知せねば、此方にも詮方ありと、威して見ても厭おやと言ふ。
怒らば拙し、腕立するは大人氣なし。蟻になやむ地上の蟬、羽衣ひろげて飛ぶにつらく、絕體にして絕命とは是や此の時畫師の有樣。毛髮一時に逆立ちて小窪の城の方を指し。眼は入る日の西の方を睨むで、霞は紫の小松山、眞砂ヶ岡も薄墨にして、血染の森に烏騷ぎ、さゞら川の水のみ白み渡るを、今日も是まで、畫も是限りと、握詰めたる筆を折ッて、空しく半日を汗に流し、功を奏せぬ畫師の遺恨。松聲心あッて嘲るが如く、潮音亦之に和するかとおぼふ。松聲情ありおはれむが如く、潮音相和してなぐさむるに似たり。潮怒り松叫ぶ。岩碎け風走る。
此時子供等は手拍子打ちそろへ聲美はしく唄うて曰く。
風に吹かれて高根の松も、老松、姬松、皆折れた。中に小松の根の強く、後の榮は千代八千代……。

打ちそろへ、唄ひつれ、いつしか遠く散りて行くを、腕組みたる儘見送る畫師。思はず一語の喉を破ッて、

此上は戰場にて……。

半寫せし城の畫圖を心遣さず引裂き捨て、子供が捨てたる紙旗の、名桐の紋着きたるを拾ひて、是を砂山の高處に突立て、後をも見ずに悠々と暮るを追うて立去りけり。

（完）

◉断絃

（一）

十六峯の雪明かにして、月は蛇柳の枝に懸る。杉の梢に佛法と鳴けば僧と和す雌鳥の聲。なほこれよりも哀れなるは、敦盛が菩提の爲めとて、蓮生坊が建てたりし五輪の塔――しかも建てたる人の墓石もこれと並びて、幾百年來の苔に濕ふ前、冷やかなる草の上に、琵琶の音の響くにぞありける。彈ずる人は廿三四、素面自然の美男にして、髪長く肩に垂れ、結ばゞ昔代若衆姿。女にしては少しく強かるべし。薩摩の若殿輩が膝を拳でなぐッて、腸を寸斷〱に刻まれながら、チエッストーの聲を漲らせし妙手。小敦盛の一曲今半なり。妙所、撥は自然に動きて、絃に騎馬武者二人、宇治川の瀬を亂す時か。城外の濠に鈴の綱を潜りて、水中一士の泳ぐ時か。夏の日中に羽衣蟬の今や鳴かんず聲に似て、忽ち飛んで彼の木に移り、餘音涼風を起すの情あり。冬ならば一氣樋の氷柱を碎きて、水さらに流れつべき趣きあり。訴ふる時天爲めに泣き、怒る時鬼神走る。今節ゆるやかに説く歌は、

　敦盛は駒を寄せ船に乗らんと思召し、駒の手綱を掻繰ッて、海中に颯と驅入り、浮つ沈みつ一段ばかり出たりしが、駒逸物とは申せども、逆巻く波にせかれつゝ、泳ぎかねてぞ見えにける。

毒なりと云ふ玉川の水も、これが爲めには清かるべく。楊柳山に風騒ぎて、萬燈一燈消えもやせん。此

所へ奥の院の御供所より、夜道を歸る番僧一人。此奴惡々しき面の中にも、涙含で石塔の影に突立ち、我を忘れて聽き居しが、思出す事やありけん、づか〳〵と進寄り、旅の人琵琶の手を御止めなされと、耳元に高く云へど、神に入りては更に通せず。依然として、

　熊谷此由見るよりも、如何に若君、まさあの平家の沖の御座船は、遙かに程を隔てたり。左かも波風劇しきに、よもや叶はせ給ふまじ、引返して御勝負候へ、返し給はぬ物ならば、長指を參らせんと弓に矢を打交へ、そゞろに引てかゝりけり。

これは仕たり旅の人、當山の禁止九ヶ條あるが中に、一番嚴しい管絃の禁制を破り、琵琶を彈じ給ふ事以ての外なり。お止めなされと、番僧が言へど。眠りたる眼に影なく、耳は音調を定めて、外物の爲めに妨げられず。

　敦盛駒を留め、爰を逃れ落んとせしに、斯く運の極まる上は、若も熊谷が鋳矢に射留られなば、平家末代の恥辱と思され、いざ御勝負致さんと、相圖を爲して、駒の手綱を引返し、海中よりさッと驅上り、染羽の矢を負ひ、斯とぞ詠じ給ひける。

　　あづさゆみ矢をさしわけて引時は
　　　返す心を知るか抑も君

番僧暫しあきれて——歌も面白し。石塔に腰を掛け、小言口の内につぶやきながらも、感ずる色は見え

けり。此所へ又一人の番僧來りしが、同じく茫然と立ちたる儘、聽入りてありたりしが、何かの拍子に前なる僧と、顔見合せて互に驚き、三山の内の別派同士、落度を睨合ふ所なるに、同じく糸の音を聽きし事――聽きて留めざりし罪、中々に重かるべしと、二人づか〳〵と先きを爭ひ、若者の前に進みながら、其肩を動かさんず處。俄爾、杉の木影を走出で、二人を兩脇に抱きて動かさぬ大男。搆はず遣るべし、其次ぎを遣るべしと叫ぶに。若者合點きて、

未だ勝負も見えざるに、敦盛いざ組んと打物かしこへ投捨て、心よく近寄り、直實共に打物がらりと投捨て、心よく寄て、馬上ながらむづと組み、互ひにかはす聲の內、一度に鐙を踏はづし、兩馬が間にどうと落ち、上を下へと返しける。

もがく僧も、もがきながら聽き。おさへし男も、おさへながら聽く。

（二）

一曲終れども大男ハ番僧を組敷たるのみなり。下なる二人も跳起んとはせずして、口の內に「うまし〳〵」と密言のみ。彈者の若者は撥を糸に挾みて、靜に草の上に立あがり、空をあふぎて長き息を吹くのみ、傍の人々に氣の着かぬが如し。

やがて琵琶を袋に納め、之を抱きて一心院谷の方へ行かんとせしが、此時大男は急がはしく、琵琶法師、待給へと、大音に呼びける。番僧二人ハ漸く隙を得たれば、むッくりと起上りて、今更の樣に

頰をふくらし、法衣の塵を拂ひながら、此塲の樣子を伺ひ居る。

我此山に登りてより、耳に聽く物は只誦經の聲のみ。山上十樂ありと聽けども、我には一の樂みなく、鬱鬱として日を送りしに、計らざりき今君が琵琶を聽きて、江州の司馬ならねど、思はず袖を濡したり。と大男があらたまりて辭儀するに、若者も同じく返へして、　拙き調をそれ程までに言ひ給ふは、身に取りて無上の名譽に存ずる。此事永く心に銘じ、忘れまじければ、何卒芳名を名乘り給はらずや。かく申す某は市橋季男と言へる者なりと、云ふに、大男喜びて。　拙者は江崎朝助と申して、當山の小林區署に勤むる者なり。鹿兒島の生れにして、東京に住する事十年。此山に入りてより、早や一歳の餘になりぬ。如何に厚顏しき事ながら、我一生のお願ひに、今一曲彈じ給はずや。小敦盛を聽きて、形見の櫻聽かざる時は、無念！寐ても眠られじ。　極めて安き事なり、無情の山河に對してすら徹夜も語りつべき我なり。君が所望如何で辭せんやと、元へ歸らんと爲せる時、番僧二人――一人は市橋に說き、一人は江崎に向ひ。　それは何卒ゆるし給へ、我等とて琵琶の音の面白さは知れど、如何にせん此山の禁制なれば、是非にお止めなされと謝するに、江崎一方ならず力落して。　誠に致し方なき事なり、それを無理にとも言ひがたし。殘念！何物か之れに過ぎんと、さも口惜氣に見えたるを、番僧の一人なぐさめて。　誠に我等とて本意なけれど、高祖の掟は破りがたし。今宵月寒して、君は此下の小林區署まで歸り給ふ事つらかるべく。若き御方も宿なくして、野に臥し給ふは厭なるべし。

されば御兩人共、我が宿坊に泊り給へ、誰やらが句に、土室に蕎麥の香りや今日の雪、其土室を圍みながら、山寺の何もあらねど、鹿柴に暖り給へと、連りに說き勸むるにぞ。江崎も仕方なく、　さらば市橋殿とやら、左樣致して今宵はしも、語り明すは如何にと云ふ。市橋も同意なして。　それは誠に面白し、何を怒りて山に入る君。　何を怨みて國を廻る君。　互ひに包まず物語らん。

（三）

哀れ過ぐる年の山火事よりして、七百餘坊大方に燒盡し、今は新しき板屋のみ、焦土の中に立ちぬ。されば頓阿法師が歌なりと云ふ、瓦には松さへおひて古寺の、苔のむしろも法ぞ敷くらむとは、只一歲を隔ちしのみにて、面影留めぬ今日此頃。影現院の一間なる、假の土室を圍みながら、薪木を燃して大鍋に、雜事登りが持來れる、若菜を鹿柴の獻立は、番僧二人が主人顏なり。大男の江崎は遠慮なく足を組みて、手に薪木を折りては投入れ、盛んに燃ゆるを愉快氣に見ながら。　如何に市橋君、我が一生を山守に送る事、厭世不平の徒と同じ連に思ひ給ふな。我は戀故の墮落にして、一度は彼の大藏とも成り、宗次の如き念友もありき。彼が天吹に合して我が詩吟は評判高く、天王寺山の兵子躍、殊に劍舞は共に得意。かつて曾我の夜討を二人して舞ひしが、これより兄弟の噂かまびすしく、敎場の塗板に横文字の相合傘、扨も此道にも邪魔はある物。芳志は松の葉にて、指の股に星を刻み、誓文取交して肌身離さず。春は飛鳥山の運動會、彼が競走に出る時は、聲を嗄して其名を呼び、勝つて決勝線に入ると其儘、

抱きて荒き息を養はしめ。秋は隅田川に短艇競漕、彼が乘込む其前に、濡手拭の用意より、梅干密かに手渡して、必ず勝てよと勵ましたり。それも夢か嗚呼夢か。他日天下に相携へ、打ッて出んと誓ひしも、誠に幻の又幻。左肺壞れて失せたわと、はら〳〵と涙をこぼし、迹得語らぬに律義は見えたり。市橋之を聽きて、顏色忽ち青く、身を震はして居たりしが。　我も其肺病故の廻國なりと、胸を撫て靜に咳一ッすれば、江崎は元より番僧等も、これはと驚き、顏打守るに。市橋は詞を次ぎて、　語るも甲斐なき廢人の、扨も昔は美少人。國の爲めには身を殺すも何の惜まど此體を、病の爲に果さんとは、知らぬが佛に成り給ひし、父も肺故と後にぞ聽きぬ。全國皆兵と成りしより、徴兵の撿査受けなんと、行く道すがら思へらく、今は學問修業の最中。同じく此國の爲めなれど、空しく兵卒に果なん事、如何にしても殘念なり。されど我體格の惡きとて、其撰に洩れん事、いよ〳〵殘念なれば、體格は甲にして、鬮の時に脫れたしと、樣々に念じたりしが、何んの一度醫員の見たる後、丁の組にて苦もなく脫れ、十七條とやらの規則に照して、免役の身とはなりぬ。十七條とは如何なる規則ぞ、癈人不具者は之を免ず——癈人！不具者！母の喜ぶも、親類友人の喜ぶも、許嫁の娘が嬉しがるも、我には少しも嬉しからず、喜ばしからず、直ちに知れる醫者の所へ走りて、何所が不具者か癈人かと、其醫者を呵る樣に尋ぬれば、醫者は暫らく眼を閉ぢて、我が體を見んともせず、默然として一語もなきに、我益々急きて、如何に〳〵と繰返すに。嗚呼今までは包みしが——君が神經質なれば、わざと包みしが、誠に御身は遺傳の肺病患

者なりと云ふに、我其時の驚き如何ばかりぞや。挨拶も碌々せずして、歸る我家の一間の內。過越し方後行く方、考ふれば考ふる程心細く。骨と皮ばかりに成りて、死期に紫がゝる血を吐く所、母人に見せて歎かするか。許嫁の娘には、およそ此世にありと云ふ不幸の中にて、一番あはれなる寡婦の味、我爲めに嘗めさするか。それを思へば斷然――切るに切りがたき緣ながら、斷然切りて我は獨身。此世に無用の癈人にて、一生を送るに忍びず。今や神州の元氣衰ふ、これを鼓舞する琵琶の一曲、到る處の士氣を奮起せしめ、眠れるを覺破せしめ。百萬分の一なりとも、國に報ゆる義務を爲さんと、身を養ふと吹聽なし、永の別れを遺書に言はせ、飄然東都を去りしより、數ふれば早や三年にもなりぬ。昨日一塊の濃血を吐き、呼吸既にせまり來ぬ。其呼吸苦しき聲を振立て、一段の長歌を吟ずる時は、身は健康の昔時に復し、更に病の何を知らねど、山か、野か、尾花が下に半埋れて、月にむせぶも近きにあらなん。

（四）

市橋又も語を起して、　　されば古戰場を尋ねて砂烟の枯草を卷上る處、地藏の首に破笠騷ぎて、名殘に烏の飛ぶを見ては、直に引きて撥の手につくり。古英雄が墓邊に立ちては、菜花かんばしく蝶ひらひらと舞ふ處、殘月霞を裂きて、影は沼より走る小川の行衞、それよと糸の音に合せ見る。山に渡る風、海に立つ浪、地中に吟ずる蚯蚓、空を覆ふ鶴、總じて我の感に入る物、何一ッとして琵琶の上に引かざるはなし。土地の由來記に傳ふる事、里人が口碑に遺る條、水夫が船歌、馬子が追分、子守娘がねんね

子歌、糸くる姥が在郷歌、節は取らねど音調の高低、人を勇ませ、泣かせ、眠らせ、樂ませるは抑も何邊にひそむやと、常に心を之に傾け。苦心行歩の中に練り得て、新曲の調を一村一段。先づ其地の粹氣を説き、此郷の故人が善行美事、洩さず彈じて其德を謠ふ。見られよ此一冊は、木曾路より京近在、西は長門より九州に渡りて、此間に得たる新曲を殘らず記しありと、厚き手帳を取出すに、番僧等は膝を進めて、先づ一人より云へる樣。

さる方樣とは存ぜずして、敦盛卿の墓前にては、無禮なる事を致したり。されば其意を酌得たる今、いで〳〵其一冊の中にも、高野の事誌し給はれ。君が琵琶の手に乘りなば、死ても此山上にては、聽く事ならぬ愚僧等。せめても素謠なりと聽せ給へと云ふに、又一人跡を次ぎて、

我は口重にして話術下手なり。此人より委しく語り給ふ程に、此材料は高野の我等より傳はりしと知らしめ給はゞ、我等が希望は足るなりと云ふに、市橋連りに合點き。

我よりこそ願出て、高野の話聽くべきなるを、貴僧達より語り給ふとは、何の喜びか之に過ぎんと、早や手帳に鉛筆を取りそゆれば、江崎も傍より。

そは一段と面白かるべし。我も拜聽せんと云へば、調子玆につきて、先なる番僧乘地になり。

此の曲の名を「兒の瀧」と名け給ふもよかるべし。扨も花折坂の下に、隈笹の根より絶壁十丈、落ちて岩碎く瀧の名を、兒の瀧と申して、夫は〳〵物凄き處なり。風にや折れけん、啄木鳥の嘴にや倒れけん。一抱もありぬべき杉の立木、上より下の瀧壺に斜形の一文字、水これに傳いて、氷柱とはこれぞかし。嗚呼此瀧壺に落つるは、木の葉載せたる水のみならで、美

童延之助も命を落しぬ。これを吊ふ爲めにこそ、行人一枝を折ッて手向れば、花折坂の名艷なれぞ、仔細知らぬ間もあわれを催し、花つゝし彼の世で咲けの吟も出めり。近江膳所の家中に玉村光十郎と云へる人あり。これが入念の友は則ち延之助にして、小澤は其姓なり。年齢十四歳の時、同ド家中に淺岡雄六と云へる男ありて、若衆爭ひの其末は、粟津ヶ原に命の遣取。晴嵐劒に曇りて、新川の氷爲に解け、無慘！光十郎は雄六の刃に消へぬ。雄六其儘國を去りて、姿を此高野に隱しけるを、復讐の念延之助の腸に燃て、迹を追ひ同ドく登山なし。義兄が形見の肥前忠吉、柄を握りしめて女人堂の關門にかゝれば。宿坊は何院と尋ねられ、不意なれば知らずと答へて、此奴不審と其儘留められ。律を守る役人の强き、情にからむ役人の玄わき、種々に詰問せられ。不憫や十四歳の智惠淺くして、復讐の爲めなりと云ふに、役人驚きて、如何なる大惡人たりとも當山に登る上ハ、其罪消滅して、復讐ハ御禁示。天下の大法を知らざるかと、呵られ、のゝしられ、終に關門より放たれて、無念ながらも今ハ詮なし。さりとて何をめく\と山を下るべき。萬が一、此關より雄六法師の出る事あらば、其時こそ只一刀に立割りて呉んずと、淸淨の不動に斷食して、待つ事七日七夜。嗚呼ー八日目の朝にハ、山霧深く封ド渡りて、鳴る瀧の水常にも似ず、昨日まで誰が手枕に亂れけん、其黒髮は岩間に漂ひ、杉の皮けづりたる所へ、鮮血にて誌せる二字「殘念」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

雪解の水に大童なる兒の瀧。杉の朽ちて倒れたるに足を掛け、瀧壺を見降して立つは、彼の市橋季男なり。江崎も、番僧二人も、姿は此所に見えざれと、「危し、早く歸られよ」と、市橋を呼ぶ聲は、木靈を起して響き渡るに、一句も答へぬ季男。只水の落行くをのみ打守り居しが、俄に胸を裂きて出る咳一つ。時ならぬ紅葉は水に濺ぎて、忽ち白雪の中に消えぬ。　(完)

◉若楓

(上)

人も若葉、若葉隠れの二人連は、綠色濃なる林を出でゝ、袖ケ浦を正面に見渡す小高き芝生の岡に登りぬ。

霧はいつしか消えて、沖の白帆に風の名殘は見えたり。日の光りは此方の小川にきらめきて、女が高島田の平うちに映り、矢蚊摺の袷衣に艶か露か、滴る如き色を含みて、藤の花のいつ此所に咲きしかと疑はれたり。其白きなよやかなる手を取りて、靴足袋に庭下駄を苦しげに穿きたる男は、絹セルの白味勝ちなる洋服を着て、餘る片手に躑躅の花捻りながら、物思はし氣に頭を低れて、時々溜息を漏すに。女

も紅唇を震はして、美しき目元に愁の眉は知れたり。同じく持てる躑躅の花を、見るにもあらず見ぬにもあらず、さりとて揉砕きて抛つにもあらず。

男は手を離ちて小川の根に近寄り、花をこれに捨つれば、靜に流れて姿を留めず。かくて女の方を顧みながら、凄しく面に笑を含めど、これに連れて彼れ笑はず。花を珍しきものゝ樣に、恐しきものゝ樣に、幾度か指に捻りて、遂に花瓣をばら〳〵と散し。遣る花髓に一滴の涙をそゝぎて、持つ手はいつしかわなゝきそめぬ。

必ずや今言ひし言の葉を忘れ給ふな、我が精神は斯くまでにありしと言ふ事を忘れ給ふなとて、男は力なく岸の庭石に腰を掛けつ、流れ行く水を怨めし氣に見送りぬ。

其御心を何故早う妾に知らせ給はざりし。今此館をおいとま申し、餘所に參る樣に定りて、其樣な事おほせなされては、遲し〳〵。はやくより斯くと知らせ給ひなば、何しに此館を去りていづれへか參るべきとて、女は強くも言切りぬ。

それを知らぬ我にはあらず、知ッて言ざるは何故ぞと、能く味うて見給へ。御身の我家に來られしは、抑もなにの爲ぞ、行儀おぼえん爲にはあらずや。我が母は昔みやづかへせし身なればとて、親御より御身の敎育をたのまれたる事、誰しも能く知るにあらずや。されば御身は我家には大事な客人にて、その人にすこしにても濫らな事ありたらんには、何と言譯の出來べきや。左なきだに世は樣々の噂繁く、娘

の品行に胸安からぬ此の頃。我も御身も謹むべきは此の道なり――さりながら、戀は一筋の裏を進みて、中々につゝむは難し。御身が親切のあたゝかさを知らぬにはあらねど、我是を餘所に受けて、知らぬ顔に過したる苦しさを唯推し給へと言ふに他なし。今や御身我館を去りて、新學士の梨川氏に嫁ぎ給ふと定まりたれば、此時こそ我胸の内を語りて、眞に我は御身を戀ひたるものぞ、情を仇に受けしは此故ぞとこのらず語りたる其後に――せめては我を不憫な奴よと、時には思出して給はらん事を願ふなり。

女は下を向きたるのみ。男は庭石を離れ、小川の石橋を行來うて、遣る瀬なげに空を仰げば、殘鶯空しく梢をつたひて、彼も優しき聲を洩さず。

御身は早や忘れ給ひしなるべし。去歳の春、庭に咲き亂れたる紅薔薇を一輪手折りて、色の美しさと香の清らかなるを愛でられ、果は頭に翳して連の娘とゑばし椽側に語り給ひし。其時萎れたりとて情なくも捨てられしを、人知れず拾ひて、是を御身が色香の清らなるに比べ。此花瓣は君が愛らしき 唇に燃ゆる様な接吻を受たる、むかしなつかしの片見ぞと、芳野紙に包みて花畳に作り。色の消え香の失せ行く後の後を計りて、水彩畫に巧なる友人に頼み、花の姿を寫生さして、うつらふとも艶々しき影のみは留めぬ。これを肌身に離さず懐中なして、夢はこれよりあらはれ、幻も亦ほんのりと出づるに、かゝる墓なき事も其當座の 喜しさ、何とも言ふに言はれざりしが――いかで此苦心御身にこれぞと届くべきにあらず。よしや届きたればとて、結ぶにつらき縁なるに、今にして思切らでは、後

の愁如何ばかりぞやと、明かに悟りたる量見にて、或夜花も其畫も寸斷々々に引裂きて、是より我に戀てふものなしと、束の間のしばし心地清々とおぼえたり。されど凡夫の悲しさは、花も畫も掻消えたるに、御身の姿は眼の前にあり〱と見え、拂はんとすれば、其手をしなやかに握られて、莞爾打笑まる樣に思はれ……。

これも亦同じ夏の夕暮。末の弟を遊ばせんとて、紙切にて蝶を作り、これを繫ぐものはなきやと尋ねし時、其房々として艶好き黒髮を、惜氣もなく三筋ばかり引拔きて、これにてよろしくばと出されしを、こよなき賜物とて、紙製の蝶を團扇の先に結合せ、あふげば狂ふ——狂ふは似たり我身も痴蝶。御身が情に繫れて、羽風に散らん勢ひもなし。此事すみて其黒髮は、大事に〱仕舞ひ置きて、我が生毛と結びても見たり。

左程までに妾を戀ひ給ひしならば、何故表向き打明けては給はらざりし。梨川へ參る樣に定まらぬ先、貴郎の母樣か但し妾の兩親のいづれへなりと、何故言出して給はらざりし。

それを言出し得ぬ我にもあらず。好し今又梨川氏との緣定りたればとて、これを打破り得ぬ我にもあらねど、それには種々籠入りたる仔細ありて——如何にしても言ひ惡き事情ありて、扨こそ思ひあきらめたるなれ。只々願ふは御身に斯くまで戀ひ焦れたると言ふをのみ知り給はゞ……。

水くさし其言葉、其仔細おほせなさらぬは——女の疑念深しとて、御さげすみかは知りませねど、外

に思ふ御方のおはしてか……約束仕給ひし御方のおわしてか。
如何にも其約束したる人があればこそ、御身も知り給ふべしそれ彼の人……。
存じませぬ誰樣にや。
知り給はぬ筈ハなし、我が友荒川政行を。
荒川！荒川樣と申す御方ハ、一昨年の秋頃より、行衞知れざる御方ならずや。
如何にも人には知れざれど、我のみは能く知るなり。政行は實に我が日本には居らず。

（下）

されど其行衞何處ぞとは明すまじ。語らば二人が間に誓ひたる仔細の——御身に知れたりとて他に洩すべき人にはあらねど、この仔細のヿは言ひ惡し。それよりは我が心の斯くまでにありしと言ふ事を、うるさくも今一言聽きて給はれ。

江の島は初契月に行くべき好き所なり。我は片瀨の濱邊に知る人ありて、連は學校の友達四五人、海士が子に負ぬ惡太郎とて、海水浴に肌を染上げ、男は黑からでは强らしく、丈夫らしく、又美しからぬ物なりなど囃して、打寄す浪を切拔け、飛拔け、樣々に戲れけるが。我も初めの程こそ打交りて、共に泳ぎ戲れたれ。心の内にわだかまりありては、身は潮に浮けばとて、氣は常に沈み勝なり。呆然物考へて油斷すれば、知らぬ間に大浪のざんぶとばかり打寄せて、藻屑を身に纒はする事幾度。斯て

は、成らじと磯に上りて——頃しも三伏の暑さ劇しく、風はあれども干雜魚の香を送りて、砂山の後なる松林に蟬の聲姦ましく、きら／＼ときらめきて、砂路一面は烈火の如く熱し居るに、急ぎ天幕の中に馳入りて、しばし此所に身を休めたり。さる時如何に爲したりけん、身內ぞく／＼と寒氣立ち、心地惡しくなりしかば、ふら／＼と此の日影を出で、我身我が心にもあらず、火坑の如き砂原に倒れて、鋭く日光に面を射られながら、半眼を閉ぢ居る時しも、江の島の方より濱邊を傳ひて、蝙蝠傘に面を隱す、若き男女の二人連、睦じく語りながら腰越の方へ行過ぎたり。この男女を見て砂路の我はいつしか消え、今蝙蝠傘に面を隱して過ぎたる男が、我身の樣に思はれ。睦じく語らひて過ぎたる女は……御身の樣に思はれて江の島より鎌倉へかけ新婚旅行なし居る樣に、戀にぬけがらの砂路の我、樣々に考へて嬉しさ、喜ばしさ、人間無上の快樂は、皆我身の上に集りたるやと、なほ奧深く尋ね居りしに、忽ち飛び來る物あり。我が傍近くに落ちて碎け、名殘の砂は烟の如し。空想の夢を破ッて、がばと身を起しながら向ふの磯をキット見れば、我が友等は漁村の子を相手にして、荒芽若芽の根など振舞はし、土塊を投げ合ひて戲れ居ぬ——中に荒川も居る樣に思はれ、漁村の子は阿弗利加の土人の樣に見え、身は重疵受けて再び起つ能はず。縹渺たる大沙漠に橫はりて、空しく天の一方を望むが如き感ありき。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

あはれ誰やらん人目の關は近寄りぬ。小川を隔ちて餘所の景色見渡せど、房總雲に包まれて、白帆も曇る袖ヶ浦。

◉信天翁

（上）

兵卒輩には横江の夜刃小尉と仇名つけられたる我なれど、一年餘の妻が病氣に、其瘠果てたる姿を見る時は、如何なる角も根から折れて、目には何時も涙ぞかし。過し鹿兒島の戰爭には、鐵砲の臺尻で賊兵の頭を打割りし事あり。其時は人の命の百や二百、今戸燒の貯金玉を碎くより易しく思ひしが。今年三十二歳、まだ活氣の拔ると言ふ年齢でもなきに、去年乘馬の死にたるより悲しさをおぼえ。人は何卒長命にてあれかし、妻が壽命は百歳の上たるべし。世は太平なれど國家の干城を以て任ずる軍人、いつ何時戰爭の起らずと言ふ可らず。夜は床の間の軍帽に軍刀、これ見て呉れの伊達にあらず。一朝事ありて出發の其時は、我より死に行く身の見事笑うて別れて見せんが。妻の死期を枕元にありて見送らん事、理屈は同じ死別ながら、如何にしても出來ず。不幸にして萬一の事ありたらんには、我は如何にして好

きや！我曾て鏡に對し、つく〴〵と顏を見たる事あり。眼玉大きく脣厚く、髯武者〳〵とはへて恐ろしき男なり。成程夜叉とは兵卒の名言、この面を恐れず能くも嫁に來られた物と、一人で吹出せし事あり。加へて酒戰の剛の者、暴上戸の狂亂を、優しく受流して能くも介抱して呉し物かな。我これに酬ゆるの信切なくては、男子たる者の義務がすまず。さりとて如何にしてやりたらば好き物やら、手を着けやうが分らぬなり。背を撫てやれば武骨なる腕の力強過ぎて、病める女の體には痛くて堪がたきよし。下女一人居らねば、馬丁と兵子を相手に、煮焚きは家中烟に成りて面倒臭しと、パンに鹽を附けて食ひ。たまには豚汁に腹を肥し、我は兎に角に過しぬれど、扨不憫や粥の煮樣いつも下手くて、妻の喉を安に通らず。雇女すれば美味き粥の出來ると言ふ事も、介抱の行屆くと言ふ事も、決して知らぬにはあらねど、又病院に入れると言ふ事も知りては居れど、實に貧と言ふ奴の酷なる、好きな酒を斷然止めても、思ふ樣に成らぬとは、これを我が一生の大恥辱として、身の意久地なさに腸はちぎれ。今更友達に相談するも、八分方男の下る業なり。我慢出來るだけ仕通して、せめても醫者のみは大醫の診察を乞はんと洋行歸りの醫學士、近所に玄關いかめしきをたよりて、必ず隔日には見舞ふて貰へど、刀の銹を磨くとは變り、目に見えてなはらぬに、嗚呼藥とて何の用に立つ物か。九層倍の水藥、仁術の看板でおどかすこと、昔日の藪醫者も同然なりと、憤然として立腹も仕て見れど、つまりは妻の可愛さには勝てず。兵營よりの歸途、藥瓶さげて髯面が玄關に待ちし事度々なり。茲に隣家の老母信切なる人

とて、何樣の御水とか、御符なりとか、種々の物を持來りて、信心のありがたさを說き呉れる內。或日あはたゞしく家に通りて、今日耳よりの事聽きたりとて我に告げらく。奥樣の御病氣ハ鶴の黑燒を一周間も用ひ給はゞ忽ち全快仕給ふ事疑ひなし。

（中）

蓬萊にさへ藥を求めたる人あり。鶴ハ日本に千歲の壽を保ちて、目出度き鳥とたうとばれ、昔時ハ隨分手に入りたれど、今ハ只動物園の中に飼はれて、これを鬻ぐ家のあるを聞かず。されども眞實それが老女の言ふ如く、妻の病氣に合藥とあらば、如何にしても求むべきが。確固ならぬ代物に時と金を費さん事、我身代にてハ兎ても出來ず。其儘にして過しけるが、これも早や一月も經ちたる後、所用ありて或日の夕暮、番町の土手下を通る時。もし〳〵と呼留むる者あり。何ぞとて振向き見れば、竹籠荷負ひたる三十格好の商人にて、連りに頭を下げながら。　旦那、鳥の仕舞物ハ買ひ給はずや。極價ハお安く差上げますと言ふ。　扨ハ貴樣ハ鳥商人か。　左樣に御座ります、雁に小鴨二三羽、皆新しき物なれど、夕方なれば原價にて如何や。　否、途中なれば入用ず。　御宅まで御供致ても宜しう御座ります。　うるさし、入用ずとて行きかけしが、ふと鶴の事を思出して、未練にも立留り。

これ貴樣ハ鳥商人とあらば、大概の鳥は賣るであらう。如何に鶴ハ賣らぬかと問ふに、彼小首を傾けてしばしの程考へ居りしが。　手に入らぬ事も御座りませねど、これハ年に一度か二度、殊に

高價の代物なれば、先き樣より御注文なくてハ、滅多に私の手にハ買ひませぬ。しかし御用とならば如何樣にも致してと、早や揉手するに。　さらば手に入り次第、居住ハ牛込神樂坂上、南町に横江と言ふて尋ね來れ。　きッと其内に伺ひますとて、後日を約し別れける。

四五日過ぎて、常の時間に我は兵營より歸り。服も着かへず妻の枕元に行けば。　お歸りなされましたかと息苦しき聲して言ふに。　如何にやと問ひ返せば。　別に變りたる事もなし。それより今少し前に、鳥商人が參りたれど、貴郎ハお留守なり。今日に限りて隣家の婆樣も、用事ありとてお出なきに、妾とて起出る事もならず。後程來よとて歸しました。　何、鳥商人が來りしとか、そは殘念なり、そして注文の品の事は何とか言ひ置かざりしか。　臺處の入口より申すなれば、しかとは聽き取れませねど、鶴を持ちて來たとか申して居りました。　さうか、能く早う手に入りたりとて、思はず我の喜ぶ顏を、妻ハ不思議さうにながめて。　其鶴ハ何になさるので御座ります。

何にか爲すべき、御前に食せて早く全快させたき故ありと言へば、常さへ病む人の涙脆きに、感情胸をついて哽咽入る。　こは何を泣くぞと、手拭を取りてやれば、尾花の如き彼が手に受けて、目の上をおほひながら。　其芳志を頂かば、それにて全快致せしも同じ事。生甲斐なき妾に物入れ給ふは、餘計お浪費となりまする。それよりは其お金にて、お好きな御酒をめしあがり、貴郎の御嬉しき御顏を見ますが、何よりの藥に成りまする。　否、否、今更酒を飲んで何んのうまかるべき。

如何で嬉しき顏の出來べきや。　お好きな御酒も美味からぬ樣に致せしは、皆妾が病氣の罪。それを思へば一時も早う、治りたうは御座いますれど、此樣子にては兎ても……と言ひつゝ、跡得言はぬに涙は知れたり。　ゑいつ！言ふて呉れるな不吉な詞言ふて呉れるな。鶴龜〳〵、其鶴の黑燒を服し早く治ッて呉れよ。我もお前の詞に從ひて、殘りの肉を肴になし、久々にて一杯やるべしと、笑ふて立ッて次の間へ行けど、肴にして飮むと言ふ、酒の錢さへ空しき今。高價の鶴を如何にして求むべき。

（下）

家財は大方に無くして、殘るは國宗の刀一腰。十文字とは腹搔切りたる姿と心得しが、今は入質の隱語と言ふまで知りて、袂から通帳の出る仕末。我かくまでに零落なしたれども、身はいやしくも軍人の籍にあり。不忍、士の魂を質屋の塵に汚さん事。さりとて他に詮すべのあらざれば、玆に拙き一策を案し。音せぬ樣に刀箱を取出して、先づ其目釘を拔き、中身は大事に取置きて、金むくの唐獅子の目貫き銀ぎせの鍔留、菊菱の鐵鍔、銀地に金もて千鳥浮かせたる小刀の柄。これだけを紙に包みて、馬丁を呼びつけ。空中に十文字を畫して、指を三本見すれば、この用には慣れた物にて、笑ひながら金具を受取るに我殊更に大聲出して。　酒を一升取りて來るべし、跡にてよければ庖丁の銹を落し呉れよ。
嗚呼これとても五十步百步、亡父が好みの太刀のつくりを、妻の病氣治したさに——鶴一羽買ひたさに、質屋の庫に入れんとは、見さげはてたる男なりと、我ながら愛想が盡きたり。

馬丁一圓紙幣三枚持ちて歸來れば、間もなく彼の鳥商人も來りぬ。我臺處に立出れば彼ぴよこ〳〵と辭儀をなして。　旦那、誠に好都合にて珍らしくも御注文の鶴、今朝私の手に渡りたれば、早速持ッて參りましたが、まだ御役所よりおさがりなされず。それ故再び伺ひました。　　添けなし、能く持ッて來た。どれ〳〵代物を見せよとて、上り口に腰を据れば。流し下に竹籠を下し、得々として蓋を取るに、まだ生々しき鶴一羽。　　見れば新しきに、如何にして手に入りしや。　　それにつきて旦那、面白い話が御座ります。御存じかは知りませねど、本所大川端に鶴の御屋敷と言へば、それが通り名の華族樣のお庭に、飼置かるゝ五羽の內の其一ッ。昨日の夕方若樣が御運動の爲めとて、お引きなされた大弓の矢が、これ此所へ當て其儘ころりと鶴は鶴らしい往生。庭番の老爺が死體を頂戴して、餘祿に私の仲間へ賣てこかしたを、無理に讓ッて貰ひ、扨てこそ此方樣へと、手柄一方の話に、我其信切を喜び。價はと問へば、二圓五十錢。高價とは思へども其儘にして價を拂ひ、なほつく〴〵と其鳥を見るに、嘴の先きと兩の脛とは、ぷッつり切捨てなし。　これ如何なる故ぞと聽けば。　切りし仔細は別になく、唯籠に入れるに邪魔なればと言ふ。　成程左樣か、御苦勞なりしと禮を言ふて、鳥商人を歸しぬ。

馬丁に毛を挘らせ、肉の好き處を黑燒の料となし、餘れる肉は如何なる大食家たりとも、なか〳〵に食盡さるべきにあらねば、かゝる時に日頃よりして、妻の病氣を心に掛け、信切に言ふて呉れる同僚の誰

彼。これにて饗應なしたしと馬丁を使者に走らせ、庖丁の方ハ我引受けて、骨も身もずた〳〵に切りぬ。遠からぬ所とて、早や四五人集り。共々に手傳ひ呉れて、生をさし身と望むあり。薩摩汁が妙なりと言ふあり。澤山の肉あれば、種々にして支度調へける處へ、遲れながら又一人來りて。　今日ハ信天翁の御馳走忝けなしと言ふ。　何、信天翁? これハ鶴なり。　あはゝゝ君ハ一杯食はされたり。鶴と言ふの珍らしさに、何處から手に入りしやと、道々馬丁に尋ぬれば、これ〳〵の名も知らぬ商人よりと言ふ。これぞ隱れもない僞物師とて、本所の華族よりとハ能くも言ひたり。此鳥の本場ハ房州沖か、此頃ハ羽根田邊にも下りるとの事。　何、信天翁?　されば其證據にハ嘴と脛があらざるべし。我も一度此手を食ひて酷く人に笑はれたり。　いや誠か……　なほ疑はしくば煮て見給へ、鍋の中泡立ちて、食はば古綿を嚙むが如く、其味更に無し。

これを聽きたる我失望、何に喩へんか——喩ゆるに物なし。氣拔して茫然たるに、他の同僚氣の毒とや思ひけん。信天翁とて食へぬ物かハ、いざ煮るべしと勵まし呉れ、それもさうかと氣を取りなほし。肝心妻の藥に成らぬ鳥、大食ハ身の毒となれど、食ッて食ッて食ひ盡し、人にハ語れぬ信天翁の味を知りしハ、我も其名に似た男なり。

(完)

◉故家水

大山の雪賣が聲も、何となく汗臭く聽えて、金魚鉢に入道雲の姿動かず。出雲松江は暑き處なりと、栃木縣より轉任したる山田何某がつぶやきながら、藤莚の上に横になれど、元來晝寐嫌ひにてありければ、風鈴の音のかすかに鳴るさへ、耳に立ちてなかなかに眠られず。かゝる時にこそ圍碁の友の來よかしと、天井を盤として、宿る蠅を石に見立、あの手でかうして此目を潰してと、これが誠の空中樓閣、畫いて待てども誰も見えざりける。

青簾に突當りて、鳴きながら又も飛び去る蟬の行衞を見送る方に、枝ぶりたくましき松一株、大さ一抱にあまるべし。此樣な松の屋敷内にあるは、己が故鄕にては見ぬ事なり。以前は如何なる人の住みしなるか、家の結構より見る時は、四五百石の地行取り、筋目正しかりしに相違あるまじ。此屋敷を今の家主に賣りたるは、菰着たるが爲なるか、錦をかざりて今は東京の住居なれば、入用なしとて讓りしなるか。左の家は明家にして、右隣は桑畑、此後の遷變は蒼海とやなるべしと、山田は心經質なれば、樣々に考ふる處へ、勝手の方にて。御免なされと音訪ふ者あり。妻も下女も葉蘭を枕紙の心持涼しく、暑さ忘れて寐て居るに、呼起すも氣の毒なり。息子は水練の稽古にとて、宍道の湖に行きたる跡なれば、仕方なく山田は立出。誰ぞと言ふに。少々お願ひが御坐りまするとて、叮嚀に辭儀する男、年齡は五十路の上に出づべし。日本廻國の道者姿、汗は皺をつたひて、薄汚き鬚を濕す樣、これさへい

とゝあはれなるに、なほも力なき聲を出して。　私ハ御覧の如く、諸國巡禮の道者に御座りまするが、承はれば此松江ハ、甚だ井戸水の惡き處とて、滅多に水ハ飲まれぬ中に、此方のお裏の堀井戸ハ、金明水とやら申して、如何なる旱魃にも涸るゝ事なく、此樣な極暑にも氷の樣に冷めたいとの事。旅を致す者ハ殊更飲水に氣を注ねばありませぬゆゑ、喉のかはきて絶えがたきを、漸くに我慢致して、わざ〳〵これまで參りました。あはれ一杯の水を惠み給へと、息切れ苦しく言ふに。　そは安き事なり、遠慮なく飲むがよしとて、井戸の方を教へやれば。　恭なしとて裏へ廻りぬ。

行きかけて幾度か家内の樣子窺ふに、此奴只者にあらず、水を呉よとは詞の表、裏へ行きて何を爲すや知れず。此頃晝盗の流行るあれば、決して油斷なり難しとて、山田は窓越しに窺ひける。かくとは知らずや彼の道者、井戸の端に手をつきて、暫し水底を覗き居りしが、やがて重々しく桔槹を釣りあげ、片手に釣瓶おさへて餘る掌に水うつさんとなし――うつしもやらず躊躇しが、思はず長き息をつき、はてハはら〳〵と涙をこぼすに、持し釣瓶の手も震へて、水はざぶ〳〵と外にこぼれぬ。

暫しの程は、飲むでもなく飲まぬでもなく、其儘にて居たりしが、思ひ切りてや一口がッぷと飲み、腸を裂れたるが如き顏色して、井戸端を離るゝに、釣瓶不意に落ちて、底撲く音響く刹那。窓の山田と顏見合せ、面目なしとや足早に驅出し、これよりいづれに行きたりけん、道者の影は松江に消えぬ。

山田は事の不思議なるより、夕方來りし碁友達に、これ〳〵と仔細を語れば、巡禮の人相を詞に合せて、

それぞ此家の舊主人、越水三左衞門が行末。

◉漁郎

上の巻　冬の海かせぎ

霙降る朝、靜なる濵を押切りて漁舟ハ濱邊に着きぬ。中より三人の漁師出て猾船唄を謳ひながら、艪を引上げ、濡れたる帆を疊み。一人ハ手網を以て水船より潑剌たる小魚を汕ひ、これを大きなる籠の中に入るれば。一人ハ網の目の藻草を拔去り、未だ潮水の滴るをも構はず大手擴げて抱上げ、砂原の眞中に蕭然と立たる小家の方へと運行く。一人ハ此中にての年若とて、働きぶりも甲斐々々しく、自分が持行くべき物ハ一番に運終り、小家の中より落葉、流木など取出し、燧石より火を移して軒下の狹き處に燃し初めたり。　知惠者〳〵藤六ハ働手ぢや、源も來いやい、手も足も腐る樣な此寒さに、眞肌で水を相手に稼ぐ我等ハ、先づ此焚火に暖り、それから温酒、其次ぎハ房州屋の厚布團、この樂しみがなうてハ一日も漁師が務まろかいと、口を突出して言ひける。源と言へる漁夫ハこれも胴聲の一本調子にて、　獨身ハそれが好らう、我なぞハ此所でぐず〳〵して居る内に、早く御屋敷へ歸ッて、圍爐裏の前に胡座を組むで、奥方の御酌で一杯遣かすと言ふ、三拍子揃ッた樂しみがあるから、ぼつ〳〵と先

へ行く。又翌日逢ふと籠の中のばた〳〵と音して、雫洩るを背負ひ、急足に此方へ來りぬ。　何言すぞ、厭ならば無理にわたるな、和主の嚊には懇意にならぬ代り、我等の焚火にも手を出して呉れるな。左樣ではないかと藤六の肩を押へながら、足の指先にて火を搔分け、臑毛焦して飛上り。　暑ッつゝと膝を擲きぬ。

藤六と言へる若者は、烟に咽びながら顏を反けて、兩手を差出したる儘言葉なきに、平九郎むッとして。　此蛭子奴、島の辨天の婿に成る氣か、にこ〳〵と笑ふばかりが能ではないはと、手酷く背中を撲りぬ。

撲られても平氣、撲りたるも虛心、罵りたるも嘲りたるも、焚火を厭と言ひしも、心から出ぬ言葉とて、三人睦まじく凍へたる體を暖め、濡れたる筒袖を干しなどする中、眞から絞る口痴話、そろ〳〵と糸口を開き、彼の家あり、家には自分を待つ妻あり、酒あり、圍爐裏ありとほこりたる源太、欠伸の樣な溜息を吐きて。　女護の島と言ふは話に聽いて知ッて居れど、男ばかりの濱に住む、人か鬼かの境界。待ッて居る嚊が出來たら、誰が命掛の稼に出る物か。昔から言ふ通り、板子一枚は奈落のどん底、今日有ッて翌日は知れぬ我等は、酒より他に貴い物はない處、今日の樣に不漁では半合嘗める事も出來ぬわいと、後向きになりて甲を焙りぬ。藤六籠の中より島鯵二三尾取出し、未だ腮に息して大きな口開き居るを、竹切に貫く無雜作。火の中に打込むで炙りながら。　源太、そりや遲い〳〵、手近に有難い

焚火と言ふ奴があるではないか、此縿が焼けたら、遣ひのこりの米飯を食ッて、早く親方の寢小屋へ歸ると仕やう。居らぬ女を戀しがり、飲まれぬ酒の話より、浮世話の其中に、面白い事が澤山あらう。

それは藤六の若思案、飲めぬと極ッた酒の話、扨て女と言ふ奴の噂は何時仕ても好い物さ。あは〳〵源太。

平九郎。 世の中は其處かの。 古い〳〵古い處で新顔の藤六、和主は未だ此濱の夏を知るまいがの。 此秋西浦の方から來た許り、何も知らぬわい。 先づ漁師の内でも、此の東濱に三年稼いだと言へば、何處の船方に出會ても大威張ぢや。總ドて難業の中の大難場、辛抱さッせい〳〵。 そりや家を出る時、母者が言ッたよ。東濱で角を折ッて歸る樣では、碌な漁師には成れねえから……親爺の相續には成れねえからッて……。 聽けば和主の親爺は大した者だと親方の話で知つて居るが、何んでも辛抱が肝心じや。 未だ〳〵今日の樣な霙は小鮑の茶椀、雪が降ッても暴風が吹いても、下した網を揚げに行かねば、何百兩、何千兩と言ふ損が行くとて、親方の大眼玉、まッた網を流しては此道の恥辱ぢや。 時に因ると異國へ流され、不思議な事は氷の山がある邊まで行くぢや。其間には鯨に出逢ひ、海蛇、海坊主、鮫の魚、なめら、とはうとてつもない、蛇章魚、人魚、人を喰はう、人を喰はうと跡を狙ふ、恐ろしい怪物に出逢はねばならぬ。 和主の親爺は四十八浦の爲めに成る、何んでもでッかい仕事に掛ッて、それが爲めに死んだとやら。其相續の和主なら、此位お目にも出逢ふが好し。 不時には、それ、面白い夏にも出逢ふが好いわえ。 此濱の夏が面

白いとは如何な事が始まるのか、次手に聽してくだんせ。　言はぬが花ぢや、のう平九。　さうとも〳〵言はぬが花で知らぬ處に美味い實が成る。　鯵も程好い燒け加減、どりや食はうかい。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

焚火を見捨て源太、平九郎、藤六、しよぼ〳〵と砂路を歩み、四面椿の生垣、貝の屋根、若芽の壁、これぞ親方の住家に歸れば。白髪のチョン髷、赤面の老爺、でツぷり太りたるが立出。　如何だと問ふ。　親方大駄目と、源太答へて頭を掻けば、老爺から〳〵と笑ふて。　左樣か、今日は潮が惡いと見えると、外の風車を睨み。　風は北だ、無理はねえは、どれ〳〵籠を出せと、藤六が前に持來るを、荒々しく蓋取り端を持ちて二三偏掻廻し。　大廻しにはならぬの、山の町へでもはかしに遣るぢや。寒くば臺所で一杯やらかせと、鷹揚に奥へ入りぬ。三人急いで勝手へ廻り、掟一人一杯の大茶碗、米飯方にぴよこ〳〵頭を下げ、涙々とつぎて貰ひ。源と平とハ一息に呑めど、藤六ハ手も着けず。　二人半分づゝやらんせと、寢小屋の方へ急ぎゆく。兩人ほく〳〵打喜び。　今の若さに肝心な奴ぢや、神助々々とて彼一口、此一口、相の手に米飯方が一口、三口にて皆無になりぬ。

寢小屋ハ十五六疊、眞中に大圍爐。茶ハ自在竹、生木も枯木もどん〳〵燃して、鐵棒の樣なる火箸あり。此所にハ今日漁に出ぬ者、出て歸りたる者、これより行く者、長半を遣る一組、負けて片隅にごろ寢する奴、勝て房州屋へ行きかけたる奴、種々樣々なり。藤六ハ戸棚より大漁としるしたる布子を取出し、

帆木綿かとも思はるゝ三尺を〆めて、圍爐裏の傍に膝を抱き、小くなりてあたりて居れば、いつの間にやら源太に平九、長半の一組に割ッて這入り、早や罵る聲響きぬ。

五體か惡いとて稼ぎに出ざる一人、火の傍にて振出を飲みながら、連りに考へ居る藤六に向ひ。

一勝負遣らぬか。　如何して〳〵厭ぢや。　和主ハ酒と勝負が嫌ひとハ漁師に似合ぬ奴ぢや。　如何しても其樣な事でハ駄目だ、遣らかせ、味をおぼえて見ろ、又と忘れられる物でハないぞ。

厭ぢや。　岩鐵野郎、厭か。　厭だ。　勝手に仕やがれと突飛しぬ。藤六突飛ばされても、只にこ〳〵と笑うて、漁村の柳見事に受流せば、暴風も脇を吹いて彼奴振出しに苦い顏。

誰も顧みる者なきに藤六退屈して、木枕取出し轉寐しながら、扨ても氣に掛るハ二人に聽いた夏の事なり。夏ハ面白し、それを樂しみにせよと言ふ。鎭守の祭禮ハ此秋にて、春ハ大漁の祝ありと聽けど、夏

——夏ハ何が面白いか。それにつけても思出すハ、故鄕に御座る母者、我の事を嘸心配して御座らッさやらう。母者、母者、大丈夫藤六ハ立派な漁師に成ッて、親爺の相續に成ッて見せるから、決して我が事は案ドて被下なや。酒も飲まぬ、勝負事も爲ぬ、それに喧嘩ハ一度も仕ませぬ。時にハ腹も立つ、彼の畜生舵で腦天打割ッてやらうかとも思ふが。待て待て此所が辛抱の仕處と、母者に縫ッて貰た守袋を握〆め、口惜泣きに泣いたのも幾度だか。親爺が生きて居たら立派な親方の息子株、こんな悲しい目に逢はいでも濟むにと、駄目とハ知ッても昔がなつかしい、何時か母者も左樣言ひなすッた。我でさへ

此樣だ物、女ハ又女相應の口惜しい事があるであらう、今日の樣な霙の降る日ハ一人で淋しい事であらう、此樣な時にハいつも思ふよ、手紙が書けたら郵便を出す物をと……。

一六に勝ちたる源太ハ、空想の藤六を足蹴に起して。　藤六、起きぬか。勝饗應に房州家の芋米飯食はすぞと、錢の音ぢやら〳〵。負けて眞裸の平九郎。　藤の代りに我を〳〵と、震へながら縋るに、益々源太浮上り。　誰も來い彼も來いやい福々ぢや〳〵。

中の卷　夏の島あそび（一）

素より源太平九郎の兩人が、夏ハ面白しと語りしも深き心ありてにあらねば、其後此事ハ打忘れて仔細をこれ〳〵と說明す事なく。藤六ハ又寡言の性質とて重ねてこれを問出でねば、知らぬ儘に月日を過して此濱邊の夏ハ來にけり。

三伏の中は大廻しの魚腐敗安しとて、磯近き海を遠く離れず。小魚のみ好き加減に漁りて、漁師ハ此頃閑暇なり。斯てハ美味き酒も飲難しと、北海へ出稼に行くあれば。此間に國の嬶見て來むと餘祿の鹽魚携へて歸るもあり。藤六も故郷へ歸りたけれど、家を出る時母親に送られ濱の松原で別離際。和主の體裏の梶九郎の肥大漢にも劣らず、漁事ハ隣家の胴八に負けぬ樣になるか。但し人の爲ぬ大きな事出來して歸るにあらねば、此松原より内の方へ一寸も踏入る可らず。梶九郎の體と胴八の漁事とを兼ねて、しかも四十八浦の總代に成り、漁の事にて上に願書を出し、夫が爲に異人と交際うて切支丹を行ふたと云ふ迹形も

ない疑ひ受け、遂に牢死せられた父親の事忘れなと、聲曇せて言れた詞今なほ耳の底に響て失せず。夢にもこんな事を見ては自分ながら耻しゝと、無二無三に我歸心を叱して、五六人と共に寢小家に還りぬ。潮に染り日に晒されて烟草色の顔髪を、安物の鬢付にて堅たる男髷のみ見續けたる東濱も、此夏になりて不思議なるは、島田、蝶々、唐人髷。天じん、銀杏がへし、桃われ。丸髷の中にも樣々あり。束髪其他種々の名も知らぬ髷の續々として入來りぬ。今まで締切りて淋しかりし家々の、俄に燈火燦き、烟立ちのぼり、夜も遲くまで聲騷しく。殊に房州屋などは湯殿近き室まで塞りて、急に建増しする勢なり。藤六不審に堪えず。此如き海岸に都より人々の集り來るは抑も何が面白きにや。女とて故郷にて見たる女とは異り、男とて皆髷を結びたるはなく、散髪、五分苅、香水の香をぷん〳〵さして、玄かも衣類は洋服、左なきは立派なる帷子、華美なる浴衣、海人の一生肌に觸らぬ品のみにて、傍に寄らば御光が差すかと自然に近寄れぬ程に思ひけり。

此人々白き物にて身を包み、麥わらにて造りたる笠を冠りて、朝より晩まで入替り立替り、海の中に這入りては潮水を浴び、焼砂に埋り、太陽に照され、綱に縋りて磯端にうろつく事、水泳の稽古とも思はれず。藤六或日他人に問へば、これぞ海水浴と言ひて一口に言へば海の中の湯治。三四年前より此濱が大當り、毎年夏になれば此通りに押掛け來りて、枯木に花が咲き、山吹の實入りは大枚、人々にこ〳〵月とは此夏とぞ答へける。

これより察するに、いつぞや夏は面白しと聽きしが、此事にはあらざるか。何んの可笑くもなし。大浪の立ッて舳より艫まで一本立に高くなる時、魚群目掛けて銛ぶんなげるか。眞帆十分に張上げて矢を射る樣に港入りするか。又は神輿を海中に舁込み水の打掛合をする時の方、遙に倍して面白し。去て見れば源太平九の言ひたるは、これにてもあらざるべし。夏は來れども面白からず、矢張冬の寒き中を大勢にて稼ぐ内が、漁師に取りては四海平穩、天下泰平の世の中かと、難風に雲を山、鳥を帆と見て迷ふに均しく、半迷半悟に日を過しぬ。

一日、親方寢小家に來りて、藤六其他四五人に向ひ。和主達は翌日より引續きて當分晝寢の出來ざる仕事あり、濱の小家に仕舞ひある地引網を取出し、東京より來て居る客人達を相手にして、地引一番始めて呉れ。保養旁々遣て見たしと彼の人達の依賴なればと言ふ。　合點だと勇ましく答へて。

これからだこれからだと他の奴等は叫びぬ。

翌日朝の内に漁事を濟せ、晝前より地引網を取出し、網を沖中に沈めて一艘を底持に遺し、兩端の網を輕船二艘にて引廻し、圍をつけて岸に歸れば、今や遲しと待兼ねたる引手。髯の生へたる官員らしき人、のッぺり面の華族らしき人、でッぷり太りたる紳商、目元に知れる取卷らしき男、若き書生連、老人、子供。女隊は奧方、權妻、藝者、令孃、町家の娘、女中、乳母、打交りて、我先に受取る、中には見得をして見物するあり。恥かしくて近寄らぬあり。眞から厭にて引かぬもあり。千差萬別心々に立別れ、

男は本式を履みて腰より細引の掛綱を掛けたれども、女は流石に斯くは爲さず。白魚の如き指先にて引くとは言はず只持ちたると言ふのみにて、力より興を添顔につながれたり。

藤六も打交りて兎こそ腰に呼吸を入るれ、斯こそ手に力を入るれ、掛聲は何と言ひ。一尋の浮標來る時は何と唄ひ。十尋よりは掛聲急に成り、いよ〳〵網の目にかゝりては、益々急になり。益々近き時は圍の中に水を打掛け、半組は魚掬ふ用意するなりと信切に敎へたり。

男兒は力を自慢にするあり、聲を自慢にするあり。女子はお轉婆の女中の他は唄はず。身分ある女子は話の種にもと一度は手にすなれど、大方は中途にして離れ、いざ網近くなり、圍の中にて魚の飛揚るを見る程にならでは來らず。中に子供連は男女入亂て大喜び。最初より終期まで我を先に争ひて、帽子の中に小魚を拾入れ、蟹に手を挾まれ、海鰻押へかねて騷ぐあり。砂の上にばた〳〵と跳る小鯛を抓まむとひしめくあり。海月に刺れて泣くはよく〳〵の不運ぞかし。

此地引網を始めてより興に入りしは、都より來りたる新漁夫のみならで、藤六殊の他嬉しがり、成程今まで解けざりし疑團はこれか。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

海に浪無く、空に雲なく。右手の出島の燈臺には十八海里を照すと言ふ燭火、日沒を相圖に輝きわたり、其影金龍と化して橫りぬ。沖遙に燦くは星か漁火か。十日の月は辨天島の上に懸りて、白砂青松冷

に相映じ、苫蒸す巖に忍音の潮滑なり。

船底燻べたる焚火の烟、消えのこりたる名殘を示して、そよともせず眞直に昇るほとりより、人影一個あらはれて渚近く來りぬ。晝間とハ違ひて淋しき濱邊に、しかも三五の娘一人とハ月も照見て驚きしや如何に三保の松原の天女ならで、髮ハ鬘下の舞子、眉毛剃りたるハ此の花の蕾に無慘の嵐ならずや。凜しき口元、身を雪の樣なる白地の浴衣にて包めど、やわ／＼と暖げなる肌。玉津島の女神か、島の辨天の化身か、振袖に月宿る海士の潮酌の風情あり。

唯嬉氣に海原を眺め居る處へ、靜にさし來る小浪一打爪先を洗去れば、驚く事一方ならず。小走りに砂路の方へ引返せしが、さりとて之に懲りもせず、恐る／＼又渚に進むに、此度ハ思ひの他に浪高くて、裾に飛沫かゝりたるに氣を遠くし、此方に引けば彼方より寄來る、此方に寄すれば彼の浪ハ引き、引きたる跡に貝殼の燦渡るを面白さうに打眺めて、後にハ眺入りたる儘佐用姫になりぬ。

たう／＼たぽゝ鼓岩、松風の調折節起りて振袖散す程になりけり。　涼しやと一聲、月に語りて、後に向く途端　怪しや鬼髮茨木童子とも見ゆる妖怪、すッくと立て大手を擴げ抱付かむと構へたり。

　あれッと言ひて一度ハたぢろぎたれど、思ひし程にハ驚きもせず。　誰、千代かへ、厭なびッくらしたよと落着きはらひたるに、妖怪持餘してくす／＼と笑ひぬ。　あら矢張千代だよ、厭だねえおどかしに來てさ。　ほんとに貴孃ハ落着いておいでなさるよ、惡しいぢやァありませんかと脫捨

てたる鬼髪ハ船頭の腰簑。　いつの間に來て居たの……。　貴孃こそいつの間にお出でなすッたへ、萬一間違でもあッて御覽ドませ、　妾が御師匠さんに濟みませんわな。　あら間違なんぞはありやァしないワ。　無樣で有る物が間違ですよ、如何に海が珍しいからッて、女一人で夜歩とはこんな險呑な事は有ませんよ。　だッて、ほんとに妾は海が好きだよ、生れて初めて見た物だから珍しくッて……。　其珍しいのが御藥、長谷川先生の御勸めなすッたのも其邊で御座いませうよ。

妾は此濱邊に何時までも住んで見たいワ。　それはこまッた事ですねえ、しかし折角左樣お言いなさるのを無理に引張ッて歸ッて、又御病氣が重る樣ではいけませんから、何時までも此東濱に居らッしやい、ですが、そら、お芝居や何かゞ始ッてもお迎には來ませんからそれでもよう御座いませうね。

あら、さうぢやないよ。　いゝえ〱何も無理に御歸りなさるには及びません。　厭な千代だよ、只居て見たいと思ッたばかしさ。　いよ〱降參なすッたね、さァ〱又夜風が當ッては惡う御座いますから、御一所に歸りませうと先に立ちて行きかゝるに、いや〱ながら迹に從ひ。千代はほんとに意地惡だよ、人が折角好い景色見て居たのに。　景色ならば房州屋の二階からでも見えますよ、それに此所が好ば又明晩になさいましと、無理に手を取て引連れ行きけり。

吾妻風俗、凛として動かぬ女の擧動敎ゆる踊の師匠、藤間橋代の養女にして、小扇と言へるは此娘の名なり。千代は下女と乳母との間を行く渡り物、氣轉に掛けては第一とて橋代にも小扇にも氣に入りなり。

橘代が繼ぎたる藤間の家は、代々女主人にて、一生亭主持たれぬ定めなるを、今の世に成りても守り居る昔氣質。六歳の時小扇を貰ひて、それより仕込む扇の手ぶり、トコトンの足拍子、振袖の振樣、裾さばき、大百の六法、傾城の外八文字、ある程の秘傳根氣好く敎へて、此他に鳴物の稽古にも通はせ。或時ハ祭禮の踊屋臺、或時ハ家元の大ざらひ、晴の塲所の後見にハ身を粉に碎て、餘所の名取におされぬ樣にと一方ならぬ苦心を凝し、漸く代稽古にも遣れる樣に成ければ、一先安心と重荷下しかけて、いやいやこれからがむづかしき瀨戸なり。女の年頃なる程油斷のならぬ物ハなし。今までの苦心水の泡と消えゆきて、繼木の枯枝を見るに至る事先代が好きためしあれば、何處までも小供仕立、女心を押込めて男らしき敎育方こそ肝要なれ。荒事に取りても情艶ハ禁物と、足袋も紺染、角帶をしめさせ、衣裳もこれに准ドたるをえらみ、思切ッた粉裝をぞさせける。

柳の風になびくも、萍の水に流るゝもこれ皆自然の道行とかや。此道に逆ふ室咲の梅、それハ花の早からむを願ひ、これハ情の遲からむを望む。終にハ幽鬱の病を起して、此濱邊に出養生の身となりたる小扇、扨も人間ハ脆い物なり。

中の巻　夏の島あそび　（二）

地引網の引手の中に又新なる興を添へて、一段賑はしく爲りたるハ、彼の面白き事能く饒舌る千代と言へる女中と、凛々しく美しき小扇の二人が交りたる故にて、今日ハ毎度になく張弓たりとハ一連一般の

取沙汰なり。
藤六ハ此漁濟みて、人々小休息に歸りたる後に遺り、磯に乘揚げたる漁船の水垢をさらひ居る處へ、彼の人氣者の小扇來りて。　船頭さんと、わどけなく呼掛けたり。　我かと言ひつゝ振向けば、むぎわら笠眼深に冠り、潮に晒す白衣の新しきを纏ひて、桃色の手拭に貝殼包みたるを持ち、莞爾と笑ひかけるに。　何ぞ用があるのかと、常の笑顏にも似ずつれなく答ふ。小扇は片手に絹の中の貝殼弄びつ。　あの此邊にねえ、こんな綺麗な貝殼が澤山ある處はないかえと、紅色の貝一ッ出して示しぬ。
彼の愛らしきにつひ釣られて、藤六にやりと面をやはらげ。　さうさ、無いこともなからうが……。
あれば敎へてくんな、後生だからさア。　でも知らねえ物仕方がねえ、辨天貝と言ふのあら知て居るが、それは其貝より不樣で色が違ふは。　其辨天貝と言ふのはどんなの。　さうさ、琵琶の形に似て居るさうだ、眞中に黄色の筋があッて……東京から來た人は喜んで土產に持ッて行くが、我等は餘り感心仕ねえ。　あッ、それ何處にあるの。　敎へたッて行かれねえ處だから駄目々々々。　何處敎へたッて好いぢやないか、何處にあるのと船端に倚ながら、打解けて問詰めるに、藤六垢酌の手を休め。　あれ、彼の島だ。　あゝあの島、それでは行かれないねえ……と、しは〳〵として其所を離れ、渚に進みて沖の方を打眺め。曲りたる松の枝ぶり、洞になりたる岩組、辨天の

社の屋根、招かば來る樣に見ゆる島の景色の普通ならぬに、むら〳〵と行きたき情起りて、行きたし行きたし、思立ちては留めがたく、不意にまた藤六に向ひて。　あの島へ連れて行ッておくんな。

厭な事だ。　おらそんな事言はないで連れて行ッておくんな、後生、お願ひだからさ。

行ッてもつまらないから止めに仕なさい。　つまらなくッても好いからさ、此通頼むのにさと、しきりに縋る樣何となく仇氣はなれて、可愛らしき希望、一念言出しては後へ引かぬ氣性見え、終の詞の力の入りたるは正しく大象を繫ぎとめて、如何せ遊びて居る身體なればと藤六枉げて承諾爲し。

えい乘るが好い、行くとせう。　其替りに直ぐ行て直ぐ歸るが合點かと、船より出て横木の濘りわく下に敷けば、さも嬉氣に船に乘りて、胴の間の隅の方に小くなりて座りぬ。

それ、船を出すから横の柱にしッかりとつかまッて居ろと言ひおき、外よりえい〳〵聲して肩で押せば、ゆら〳〵と左右に傾き、船底砂にかすらせて其儘輕く水に浮びぬ。如何にせしやと思ふ間に、ひらりと藤六飛乘り、楫を以て淺瀉を遣る事二突三突。此時小扇のにこ〳〵と笑みたる面眞底嬉しき者ならでは。

軈て楫を仕舞ひ、艪臍濕して小腰に漕ぎはじめ、後は大股に漕代へ、島を指して進む程に、小扇が思ひしにも似ず浪高きやにおぼえて、只一飛と見たる島も中々に遠く、今まで威勢好かりし心も如何やら萎れかゝりて、初めの内は船べりより片手出して、潮水を掬ひ、浮藻拾ふなど爲したりしが、いよ〳〵沖

に出るに從ひ、胸元は苦しくなりたり。大方船に眩たるなるべし。
藤六は知らず、疊の上を隣の室まで這行く心持。唯日光に照りつけられたるを五月蠅顔に漕ぎて、早く島に着きたしと急げば、船は艫に從ひて動搖劇しく、小扇の顔色は青白う變りゆき、彼も無言、此も無言、物言はぬ內に島近くなりぬ。

精神の病は忽ちに去りたれども、體の疲勞未だ全く治らぬ小扇。海は今日が渡始め、言問の渡船にさへ眩たる身が、如何で此浪に堪らるべき。さりとて我から望みての船出なれば、今更厭とは言はれぬ義理。厭と言ふは又嫌ひの性分。行けば好みの貝ありと言ふ、辨天島の御社に詣でなば、藝の上にも御利益あるべし。母親も喜びて珍らしき神心と賞め給はむ。少しの間の辛抱と齒をくひしばりて、今か今かと待つ身のつらさ。これより後は千代に向ひて海は大好きとは決して言ふまじ。

輕いは〳〵今日の船の輕さ、又速さ。いつしか島に着きて底に砂利の音響きぬ。　そりや島だと藤六が掛けたる聲に、蘇生の思ひの喜ばしさ。矢庭に船より出たる小扇、眼前ちら〳〵となりて其後は夢路。

纜繫ぎ居たる藤六、砂の上に小扇の倒れたるを見て、これは何事、霍亂か。大變な騷ぎと成りたる事よ、他には人の居らぬ島なれば、醫者は無論、藥の持合せあるべき理なし。如何したら好き事かと狼狽廻り。兎に角小扇を抱上げて、扨何處へ連れて行かむか、彼の松の下か、草の上か、岩の影か、荒れた

れども拜殿よかるべしと、社の中に伴ひ入れける。
先づ笠を取らせ、靜に伏さしめたるまでは藤六行屆たれど、これからは如何して好き事やら、何んと仕たら好き物か、うろ〳〵と其所邊を歩きて、心配の顔付一通ならず。枕下に突立ちて顔を見詰めたるは、餘所からこそ茫然とも思はるれ當人の心の中は一生懸命なり。
喩ば此頃の夕立に均し。船の眩は船を出る時一度に發し、跟に土を踏むを限りとして治る物なり。靜かなる社の中、涼しき木影の佳き風にあひて、小扇漸く心地づきたり。されども猶船にある如く思はれ、頭をもたげんとすれば、社ぐら〳〵とゆらめく樣に思はれ。立つにつらく、語るに苦し。これは念入の目眩、よく〳〵の船嫌ひと、藤六の介抱油斷なし。
不器用なれども眞情を絞りての注意、ゑみ〳〵と小扇の心に徹して此人は實があると喜ぶも、幾分か藥の内なり。
彼此する程に目眩も止みたり。起上りて黒髮を鬢の兩方より撫上げながら。　あゝ苦しかッた、妾死ぬかと思ッたよ。　未だ顔色が悪いが、最少し寐て居ればよいに、無理をするといけないぜ。
　いえもう好いの、ほんとに難有よ、お影で好くなッて……と口に述べたる禮の言葉より、言はむとする禮を、心の中に書きたる方、遥かに上なるべし。それ等は穗にあらはれて何處となく喜ばしげなる樣、岩鉄野郎にも知れるなるべし。

これより藤六の案内にて、御福井戸と言ふ島の眞中にある清水の井に導き、此所にて口を嗽がせ、顏を洗はすれば、氣持清々として又以前の小扇なり。社の裏手の岡一ッ越して向ふは、小石交りの砂原、辨天貝のあるは此所なり、今や入日に近き光此方を照して、上汐の浪のきら〳〵きらめく海の帆は赤く、千鳥ハ千々に碎けて見ゆるを、藤六も眺め、小扇も眺め、白砂の中を其所此所と歩きて、それ此所にも、これ此貝が辨天貝。ほんに琵琶の形と喜べば。それ彼所にも此所にも、一ィ二ゥ三ィ、其絹出しなされ、重くば我持たむ。此貝ハへ。其貝は他の貝ぢや、捨てたり捨てたり不用ぬ物はどんどと捨てたり。あれ、夫は大事な貝、別に取ッて置きし物を。知らぬからぢや勘忍々々、知らず〳〵寄添ひまたはなれ、いつしか、無二の友達と成りて、思はず時を過しけるが、今は入日の浪にせまりて、遠き海は暗うなりぬ。

驚かされて藤六我に歸り。　あッこれは遲うあッた。　あッさうねえ、ちッとも氣がつかなくッて……。　さア〳〵早く歸るとしやうと、火のつきたる樣に急立つれど、小扇ハ只立ちたる儘なり。淚含みたる聲にて。　妾ハ歸るのは厭。　なんだ歸るのハ厭だッ。　歸りたくッても船が厭。　船が厭だと。　さう、船に又眩から厭だわ。　厭と言ても歸るのハ船でなければ他に仕樣がない、そんな事言はないでさアさア早く彼方へ行かう――。

厭がる小扇を無理に乗せて、夕日を背に漕ぎ行く藤六。行きと歸途とハ大相違、船の重い事、遲い事、

昔語の土の船ハこんな物かとざんぶ〳〵。

下の巻　春秋是より夢の如し

面白き夏ハ去りたり。四方に散亂したる漁師共ハ、又此東濱に歸來りぬ。

秋刀魚の大漁、次ぎハ天鯛、眼魚、鯒、勘ばち、正がう。冬に成りてハ都の春を飾り海老、沖網の忙がしきに何事も打忘れて、海遙かに命懸けの帆も張り、奈落の底から富を汕ひて、資本の汗を冬も絞れば、藤六も一所に成りて、人に負けドと立働き、これより他にハ苦勞見えねど、樂しかりし夏を忘れかねて、如何しても忘れ兼ねて、忘れられぬ彼の辨天島、毎日船の島の前を通る毎に、なほさら思ふ可愛らしき娘。乘せて此所まで來りし事あり、半日樂しく遊びし事あり。それが縁にて女中と一所に我が寢小家を訪ねて呉れ、我も房州屋へ行きたる事あり。其時武骨な此指で、騎射貝の群に交りしが、つひ過ッて見當をそらし、お千代といへる女中の面に彈付て、彼は怒る、我と娘ハ思はず笑うて、なほ〳〵怒られた事もありけり。他に見る處なき濱邊なれば、遊びハ矢張島か、磯か。舟で章魚壺引揚る事第一等の慰みとて、厭と言ふを無理に乘せ、面白い味を知らせてよりは、船にも慣れ、我にも慣れて、毎日の樣に漕廻はりしが、嗚呼其夏は過去りて、又來る夏は何時であらうか、時を違へず夏は來るとも、彼の娘は如何であらうか。

かゝる事思續けて曖昧の内に年を迎へ、船方の正月は舊歷の事。初日の出、寶船は浪の靜かならむを

望み、枕の上で漕ぐ船は水無きの山に登るらむ。二日の朝の乘初め、これは又勇ましき物なり。先づ一同白木綿の鉢巻、腹帶、眞裸で磯に揃へば、親方悠然と出來り。　野郎供と呼ぶに、一同一句。　おいと答ふ。　氣を揃へて遣ッつけろと言ふを相圖に我先にと舟に飛乘り。幾艘の內一番先に進出たる舟を頭として、迹は順序定まらず、飾りを浪に弄らせつゝ、東に漕行く事艫の數十二。艗に立ちたる一人、拍手を打ちて東方を拜する事あり。次ぎに神酒を海に濺げば、又更に北方に十二手。同じ樣な事をして西方に廻り、南方に留りて又た素の中央に集まり、此所にて各々儀式ばかりの投網を爲し、終れば幾艘艗をつらねて、同時に岸へ漕戻る。親方は此前より、手に三寶をさゝげながら、一心に海神を念じてみんぢりとも動く事なし。最先に進みたる船の中より、一人ずか〳〵と駈寄りて。　親方と大喝。これにて眼を見開き。　如何だと問ふ。船頭の一人は三寶を見て。　こんな物に載せられるものか、いくら取れたか知れねえ、數限りもねえ事だと言ふ。　さうか、それでは大きな物を持ッて來うかと、陸の方へ行きかけるを。　親方々々と呼留め。　えかしあまり澤山だから海へあづけて來たと云。　さうか、それでは御初穗でもと大きく言ふをしらせに、豫ねて水船に入れある目の下八寸ばかりの鯛二尾、恭しく持來りて三寶の上に載せ、全くこれにて儀式を終るなり。

去程に、此一番乘は誰しも名譽の役目とて、我こそ神酒を濺ぐべけれ。我船先づ頭に成らむと、前日より夢中に成りて勵む中に、藤六ハ左程にもなく、地引網の頃の勢ひとは打ッて變りて、にこ〳〵の笑顏

も物思しげに鬱氣居るより、躰が悪いのかと慰めるあり。　其様な事では駄目だと叱りつけるあり。事に搆はぬ親方も、時に〻藤六を呼付けて、全躰和主は如何したのだ。辛抱が出來ぬ故か、何か氣に喰ぬ事がありての上かと、口數少き意見も身に徹して痛く、其當座は己れ愚鈍者、我は馬鹿だ、何故此様に愚には成りしかと、腕を挼ッたり、頬をつめッたり、氣を引立て稼にかゝれど、油の盡きたる燈心の如く、一時は如何やら明かになれども、次第々々に眠り行く事、如何しても仕方なし。

此乗初めには元氣を見せよと、親方の言ひしにも係らず、飛乗りには敗を取り、しかも艪の手のそろはざりし爲めに、其舟が一番の後になりぬ。

一同寐小家に歸りて、祝宴を開きたる席の隅に、藤六小くなりて縮り居れば、親方の不興は言ふまでもなく、同じ船に乗りたる船頭供、酒の酔の廻るに從ひて、一番乗りの景氣好さを見るにつけて、今日の藤六が悪くてならず。一人垢酌に酒をつぎて、藤六の前に蹌踉めき來り。　やい藤六、今日は御互に骨折りで御苦勞、御影でまんまと敗けたぢや。これさそんな面をするには及ばぬ、濟んだ事を彼此言ふのは女郎の爲る仕事だ。えいヮ、飲め。　まことに濟まねえ事をした。　はて其事は言はねえ、今我が言ふたのは飲めと言ふ事ぢや。　兄貴、堪辨して被下ッし。　何を堪辨ぢや、今日の事なら濟んだ事だ。　いえ、其酒を飲むのを……我の酒の不得手な事は日頃知ッて居てぢやないか。　默れ、何でも飲め。今日は目出度いぞ、乗初めの日だぞ。　如何しても我は嫌ひだから、

兎てもそれでは飲む事は出來ぬ。　如何しても飲まぬとぬかすか。おい藤六、和主は義理と言ふものを知らねえな。　でも無理な事を言ひなさるから……。　なんだ無理だ、咄、巫山戯た事を言す奴だ。無理な酒でも飲まずばなるまいと言ふ事を知て居るだらう。これさ藤六、えいッ此惰弱野郎奴と、垢酌の酒を頭より打掛ければ、一同やんやと傍から囃して、高笑をどッとあげたり。藤六酒を拭く手に涙を隱して。　我が惡かッたから、皆の衆、如何か詫を仕て被下せいと言ふに、流石親方も見かねたりけむ。　もう好いワ、免してやれと鶴の一聲に、龜の子の首をすくめて。

わい〳〵。

頭より浴びせられたる酒の、時立つに從ひて氷る程に、身内ぞく〳〵と冷渡りて其場に堪得ぬ藤六。人の醉うて倒れたるを幸に、すご〳〵と寐小屋を出て、逍遙ふ外面は寒風劇しく、いつしか曇る雪空に、鳶は舞うてなほ風を呼び、犬は長く吠へてなほ雪を招く。魚の腸を引裂きて濱烏の飛行く迹に、白砂を染る血汐腥く、心なき者も身の毛立つを、嗚呼。

去つて行く處は、いづれと言ふ定めなけれど、いつしか濱邊の物置小屋に來りぬ、中より例の枯木を出して、手慣れたる火打石に焚火を拵へ、濡れたる着物を干乾かさんとすれど、枯木も濡れて居て思ふ樣には燃ず。烟の中に自失して立てば、雲を裂きて忝けなき日の光、ほの〳〵と照し來りぬ。

背を日に照して、手を火に燻りて、兎にも角にも暖まれば、さう悲しき事のみは浮ばず。夏の面白い事

も思出して――これが惡いとハ氣のつかぬにあらねど、辨天島、辨天貝、辨天の樣な娘。

おや藤さんと聲を掛けて、若し此所へ彼の娘の來たらむにハ、其時何と答へ申べきか。それよ、何故今頃と我より問はむ。

病氣が又起ッたから、それで來たのと彼答へなば。其時の悲しさハ如何ばかりぞや。逢ふたは嬉しきに相違なけれど、病氣の爲めに又來たと聽かば、なんの少しも喜ばしからず。

あの島へ……あの島へ連れて行けとならば、我喜びて船を出さむ。

病氣の保養になる事ならば、何事にても我爲さむ。

* * * * * * * * * * * * * * * *

こりや如何した事ぞ。

知らず〳〵沖遙かに船を出したる藤六、白鷗の立騷ぐに氣のつきて。　大馬鹿奴！　親爺の相續どころか、こんな事でハ普通の漁師にも成れねえ。いでや今迄の愚鈍を取返して、大きな仕事を遣ッつけるにハ、ぐず〳〵して居てハ駄目の事だ。聽けば此の海の向ふにハ阿米利加といふ國があるさうだ、其處まで此の舟で漕付て――何ァに途中で死んだら運のない男だ。一旗擧げて母者に逢ふよと、陸の方を伏拜みて。　堪忍さッせい。

（完）

◉わかれ霜

（其一）

音羽護國寺の南の方に小高き岡あり、人は坊主山と云ふ。其姿の似たればなるべし。春なれど空は曇りて今にも雨ならむとする日、我は常の如く散歩に出て例の岡の上に登りぬ。

見渡せば火藥庫の避雷針白く梢を通じて立ち、小石川臺の森影薄黑く、武藏野にありては彼をも山と數へつべし。右手の方に谷を隔ちて街道の一線あり、板橋に通ずる路とかや。空車を馬に引かせて歸行く男のいそがし氣なる、これ眼の前にぞ見られける。北は杉松などの木立を隔ちて寺院の屋根高く、破風の赤く塗りたると瓦の黑きとも殊更に目立ちて光りぬ。藪の竹の鳶色なるは枯れしにや、麥青く菜花は黄金の色、紅紫は蓮華草の敷きつめたる荒田。畔脇の水の中に何を苦し氣に鳴く蛙の聲も聽ゑぬ。

我が立てる岡の左手より護國寺の境に至るまでの間に、生垣廻らして別に區域せられたる廣塲あり。これは陸軍の埋葬地なり。此所には軍人の死體を葬りぬ。勇ましき軍人の死躰を葬りぬ。世は太平にして一朝の變無し、喇叭吹起す出陣に、戰塲の露と消えしにはあらで、病の爲めに歿したる軍人の死躰を葬りぬ。此地雨夜に見る陰火は之等忠勇の魂魄にてこそあれ。

されば其忠勇の記念なる墓石は、曾て此世にありて軍隊に列したる時の如く、秩序正しく並びてあり。日に晒され、雪に包まれ、櫛風沐雨の中に、いつまでも、いつまでも、更に崩れず、亂れず、散らず、整々堂々として野營を張るなり。

只見る此墓地の中をさまよふ一人、旅裝仕たる老女なり。菅笠と竹杖とを持ち、脚半手甲を身に着け、小き荷を背に負ひたり。彼は誰人の墓をやらむ尋ぬるに似たり、されども見出しかねて難儀せるが如し。抑も誰の墓を尋ぬるにや、彼の人の親族のか、知人のか、息子のか、又孫のか、嗚呼遙々と此所へ來りしには、其所に深き芳志なくてやは。

(其二)

數多き墓石の事にしあれば見出し得ぬも道理なり。又其老いて朦りがちなる眼には碑面の文字を見分る事の難かるべし。彼は誰にか訪ひたげあり、されども四邊には人居らず。新塚に集りたる烏こそ惡けれ、老女を嘲るかの如く羽たゝきして鳴きぬ。我は岡を降り、生垣の破れたる間より入りて、老女の傍に進みぬ。彼は喜びて我を迎へ。其言はんとする時齒の無き口を淋し氣に動かして、　好き處へこそ來ましたれ、敎へて給はれ妾が尋ぬる墓を。最前此墓場の入口にて草取る翁に逢ひしかば、松坊の埋められたる處示し給へと言ひき。されども彼の人は妾と同じく誌したる文字讀得ぬ人なりければ、頭掻きて退きぬ。扨ても斯くまでに知れにくしとは思はざりき。故國の光華寺の墓地にゝ此樣に數のなきものを

……。　好し、心安かれ、尋當て得さすべし。何と言ふ名にて苗字は又何と呼ぶにや。只、松坊々々と呼びたるに……待ちて給もれ、此所に書きたる物あり、とて巾着の中より取出す紙切。それを受取りて讀下せば、峰松太郎と誌してあり。　峰松太郎とあり、これにや。　それ、それ、それに違はゞ、彼子は松太郎とも呼びにき。

我は先きに立ちて先づ東の端の一列より順次に尋ねはじめぬ。後よりとぼ〳〵と老女は從ひたり。軍曹の何某、兵卒の何某。彼は陸軍病院にて沒し。此は衞戍病院にて死す。皆其此世に出でたる年月と此世を辭したる年月とを分ちて誌しあり。同じく其側面に記しある出生の縣名、多くは遠隔の地なり。さればにや祖先と共に故山には葬られずして、此所豊島ヶ岡の土とは成りぬ。彼が徴兵に應ゞて勇ましく國を立出でる時に、これを驛頭まで送りたる人々、兩親、同胞、友人、皆又彼の勇ましく歸來るを待ちたりしならむ。

如何にも樂しみて待ちたりしならむ。それを遂に空しくなして彼は沒しぬ。醫官と看護夫との信切なるあつかひの中に沒しぬ。されども何一ッ成す事なく早世する事の口惜しさ、軍人の病に倒れたる無念さを其儘、冷めたき死骸に留めたるを、吾鄕里に送られて、只女々しき人々の涙と成らむ事、此人達の本意にはあらざるべし。死しても尙護國寺畔、靈魂永く留りて　皇城をこそ守るらめ。扨て漸くにして見出し得たり、峯松太郎の墓標。地の甚だ荒たる處にあり。盛りたる土壇ゝ雨に流れたれど、立ちた

る木標の墨色鮮かなりければ、幸ひにしてそれと知れたり。我は老女に向ひて。　これが御身の尋ぬる松坊の墓なり、と敎へぬ。　嗚呼、これが松坊の墓にや、彼の松坊は此下にか、あら不憫の子や、と言ひつゝ急ぎて其前にうづくまりぬ。目には心より絞りたる涙、手にハ袂より取出したる珠數。

（其三）

あはれは一入まさりぬ。抑も此峰松太郎と言へるは幼年學校の生徒なりき、そは墓標の側面に誌したるにて知れたり。花立の花は枯れたれども、兩脇の榊は根を下しぬ、これには幣や懸けつらむ。老女は少時ぬかづきて口の内に何やらむ唱へ居りしが、又袂より紙包を取出し、これを拜石の上に置きて供へぬ。風に紙の戰ぎて中の物見えたり、三ッ四ッの駄菓子なりき。

松坊、松坊、土手下の老婆は來れるぞや、其方の好める菓子を持ちて來れるぞや。其方ハ國を出づる時、嬉しき言葉を遺して行きゝ。たより少き此老婆に年を老らずに待てと言ひき。出世の姿見るまでは必ず死ぬなと其方は言ひき、言ひし其方ハ妾より先きに死せしぞ逆縁なる。望みの半もはたさずして其方は此所に埋められぬ。遺る此身を如何にせん、妾ハたより少きを、妾はたより少きを——其方もたより少くて、妾の如き世の外の、たよりなき身をたよりけり。其方の死せしと聽きし時、妾はあきれて茫然と、氣を失ひて立しぞや。最早や此世にあらずとは、知れど今尙此下に、其方が眠り居らむとは、如何にな

しても思はれず。其方の水を汲みたりし小川は吾家の邊なり。其方の草を刈りたりし野原も吾家の邊なり。今尚小川の水流れ、今尚野原に草繁る、其所に童の來る影を、其方の樣に思ひたる童は今に來れども、其方は此所に眠りけり。遙々都へ出來しは、何を見たさの旅と知る、其方の墓に詣でたさ、墓に詣で丶靈あらは、共に語らむ吾心、聽えしか抑もわが聲の、土の下まで響きしや。御身が情の其言葉は必ず下に通トたるべし。眠れる者ならば起きて答へむ、死したる人のはかなさは、幽冥路遠し十萬億土、謝する言葉のよすがなく、空しく下に咽ぶらむ。我はかはりて謝するぞや、遠き路をば遙々と、好くも尋ねて來ましたり。さるにても此峰と言ふは、御身の何にあたるにや、子か、孫か、親類か。此子に親も祖母も祖父も亦親類もなきぞかし。此世に一人孤兒の、扨てもあはれの松坊が、墓に詣で丶泣く者は、妾の他にあらずかし。

（其　四）

語れ、老女、我松坊の如何なる人かを知りたし。　聽き給ふか、喜びて語りはべらむ。扨て又涙もて語りはべらむ。語らば功徳になりぬべし、永くとも聽き給へよ。

* * * * * * * * * * * * * * * *

松坊は木の股から生れたり。村の獵人が山奥に行きて、これを松の木の上に見出したり。彼は何處の見なるらむ、鷲にさらはれて黒髮山に來りぬ。人に助けられて白石村に來りぬ。彼は何處の兒なるらむ。

情深き村長は彼を引取りて育てむ事を言出たり、猟人は喜びてそれを諾しぬ。良辨法師の幼時をひきて彼は必ず名僧に成るべしと人々噂しけり。名は松の木に懸りてありけるより、松坊とは付けられたり、扨て松坊に乳を與へたるは、奥州種の赤牛なりき。

田植。稲苅。農家折々、四季に忙がしき時には細帯にて柱に縛められ、其丈のゆるす限りの室の内を這歩く様に爲しおかれぬ。はじめの程は泣きけれども構ふ者なきに泣くたびれ、後には馴れて一人遊びぬ。小犬あり、一日彼と戯れ居りしが、如何なる拍子やらむ其細帯を噛切りぬ。意の如く成るを得て喜ぶ事限りなく、家の中を隈なく這廻はりて、心の儘に一日を過しぬ。されども幸ひにして危き事なく、人々の歸來るまで常になく快き樂しみを爲したり。

其後は一層太き物にて彼を縛めけるが、小犬は例の如く噛切りぬ。松坊は喜びて又這廻はりぬ。又一層太き物にて縛めけれど、後には犬の歯を借らず、自分の力にて帯より繋ぎたる紐の方を引切り、家中を廻る事常の如し。到底彼の繋ぎ得べからざるを知りて、其儘に捨ておきぬ。されども怪我過失は一度もなかりき。

四歳になれども彼は何事をも言得ず、唖にはあらずやと村長は心を痛めき。これに反して其手足の力強きは驚かれぬ。

宇都宮より兵隊の多く來りて、何處の家にも、十四五人、二三十人、室に應じて泊りたる事あり。其時

彼が如何に其喇叭の音を喜びしか、如何に其洋刀の光るを喜びしか。此兵隊の去りたる後、村長の妻の尺度を腰に下げ、村長の帽子の大いなるを――自分の顔を覆ふも厭はずして冠り、喇叭吹く眞似して駈歩きしにても知れたり。斯て又《進め！》と言ふ言葉をも此時に聽きおぼえぬ。これが啞ならぬ事をあらはしたる第一の發音なりき。

（其五）

人の顔さへ見れば進め〳〵と言ひたりし松坊の五歳、六歳、次第〳〵に長ずるに從ひて中々の惡太郎、隨分人々持餘したり。あまり惡戯を爲しける程に或日村長は山奥に連れてゆき、汝の親はこの松の木なりと敎へ、此上我儘の重なるならば、最初にありたる如く其枝に懸けて立去るべしと言ひきかせぬ。松坊の驚き何にたとゆる物なし、其時までも吾親は村長夫婦と思居りしに、其非情の松の木の子なるとは今の今まで思はざりき。如何にも悲しき次第なりと大いに萎れて見えたりとかや。これより何となくつゝしむ樣になりて、其後前よりは音無しくなりぬ。

されども七歳の暮に村の光華寺に遣られて、頭の髪をくる〳〵と剃れてより、又も勢ひは以前に歸りぬ。寺に來るまでは自分の如き身上の者は他にあらじと思居りしに、此所にはそれが澤山ありて、一人の小僧は橋の下にて拾はれたりと言ひ、一人の小僧は門の前にて救はれたりと言ふ。爰に至りて松坊も漸くに肩身廣く、得意になりて身上を言ふ。我は松の木が產むだのだ。

或日十六羅漢の中の一像の手を折りたりとて、納所の坊主に酷く呵られたり。かゝる事を爲す者は寺に置きがたしと脅逼されたり。松坊は仕方なくすご〳〵と村長の家に歸りぬ。何とて今頃來りしやと村長は尋問ふに、隱さずこれ〳〵と次第を語りぬ。村長も亦其惡戯を責めて、かゝる事を爲す者は吾家にも置きがたしと脅逼したり。松坊は愈々仕方なく、とぼ〳〵と其所を去りぬ。

斯くては最早や他に行くべき處なしとて、仕方なく彼の山奧、吾親と信じたる松の木の下に至りぬ。時は既に夜分、鎌の如き月は峰の岩頭と相磨して今や其銹びたる光を彼方の國に納めむとす、誠に凄き折柄ありき。

誠につれなき親なりき。只風に其枝の鳴りて、枯葉のばら〳〵と落來り、其子の袖に音するのみ。餘所の子が母の愛情暖き懷に抱かるゝが如き事はあらず。されども寺や村長の家にあらむより、此所にあるが彼には一番好かりしならむ、終に其根に倚りかゝりて、泣寢入りに生なく眠りぬ。夢も大方見つらむが……。

（其六）

狼にも食はれずして一夜を其所に明したりける。扨て松坊の大膽さ、これを聽きて舌を卷かぬ者はなかりき。此兒必ず後に至りて恐ろしき人になりぬべし、好き方に恐ろしきか、惡しき方に恐ろしきか、そは知れがたしと村の評判。

（其七）

去程に一夜いづれに行きしか知れざりしより、流石に村長も心配して諸所に手を分ちて捜したる末、見出して彼を連歸り、又寺へは詫をなして元の如く光華寺に納まりぬ。呵りしは納所の僧、和尚様は大腹の御方、笑ふて何とも言はれざりき。

此後又納所の意に觸れて、寺を逐はるゝ事ありても、村長の心にかなはで家を追はるゝ事ありても、松坊少しも驚かず。彼の松の木の親がりゆきて半日一日其所に過しぬ。さすれば必ず誰彼の迎へにと來るなれば、これを好き事にして度々行きぬ。斯くして一歳を送りぬ。山に遊び、川に泳ぎ、軍事の眞似して好く日を過しぬ。村の子等が彼を「坊主々々小坊主」と言ひて嘲るをいたく怒りぬ。扨て其坊主々々と呼ぶ言葉が何か不名譽の言葉の樣に感じぬ。されば從ひて己の坊主たるを喜びず、此後も亦坊主にて暮さむ事を好まざりけり。去て何に成るを望むかと尋ぬれば、松坊は軍人が志願とよ。

爰に一大事こそ起りたれ。永らく横濱に住みぬる――おぼえにくき名の西洋人何某、日本人の名もて土地を買はむ爲めに來りたり。夏を過すに涼しく見晴の好き處が入用とて、目指れたるは彼の松の木のある邊なりき。土地の所有主自分さへ利すれば好しと言ふ誠に賤しき心よりして、吾土地を裂て高價に賣るべく決定なしぬ。これが人々の感情をそこねたるは非常なる中に、尤も奮懣せしめたるは光華寺の松坊主なり。彼はこれを聽くや否や、直ちに走りて、彼處へ行きぬ。

既に早や繩張の後にして、二三日爲さば地ならしにかゝるべき模樣なりき。松坊は搆はず圍の中に入りぬ。入りて松の木を見上げたり、見上げたる眼には涙催しぬ。

傍に働き居たる一人の土方に向ひ、此松を切るにはあらずやと問ひしに、其問ひの突然なるにも心づかで、切るとも〳〵此松を切らねば家が建てられぬと答へたり。松坊いよ〳〵驚きぬ。又もや松を見上げたる儘、只立ッて少しも動かず、斯くして時の半時は過しつらむ。

何思ひけむ落ちたる松葉を拾ひあつめて、袂へ入れぬ。

入れて又立ち、いつまでも去る事なし。其所へ此地を買ひたる西洋人何某、周旋人の誰彼など、話しながら來りぬ。松坊が其西洋人の顏見て睨みたる時の顏は、それは〳〵恐ろしくきらめきたる眼光なりしと、其時の土方の一人が言ひき。

松は切られ、地は開かれ、其所に高大なる建物は出來たり。異國人は繁く出入なし、我等の友が杣に行き、我等の友が漁に行くを、景色の中の動物として眺めぬ。彼の飼犬は吾畑を荒し、彼の靴跡は貴き神前を汚しぬ。

或朝も見たりき、或日も見たりき、或夕、或夜。一人の子供の鐵垣に倚りて庭内の或處を恨めし氣に睨み居たるを見たりき。

村の者の某は大いに松坊を戒めて曰く。

彼の髯もぢや〳〵の毛唐人は徒に天狗平の地面を買上ぐ

るのみならず、蠶の虫の桑の葉を食む如く、此村を、此郡を、此國を、後には此日本の大部をも買上ぐるなり、注意せざる可らずと言ひぬ。松坊いよ／＼驚きぬ。左すれば我等の住むべき地はあらざるにと叫びぬ。

蓋し松坊の心にては、自分の眼にて見たる個所の他に村あるを知らず、郡あるを知らず、國あるを知らず、自分の知りたる區域中を以て日本全國とは思へるなり。されば眞實外人が之等の土地を買上るは仔細なき事と信じたれば、いよ／＼以て怒りぬ。吾親たる松の木を切り、吾住む光華寺、扨ば村長の家まで取はらひ、我等が蜻蛉を追ふ野原、我等が魚をすくふ小川、これをも亦奪はむとする外人、嗚呼何等の無禮ぞやと大いに以て怒り、其怒りたる極は化して異人征伐となりぬ。紙の旗、竹の劍、彼の帥ゆる軍卒は皆彼の遊び仲間なり。これが無二の武器は袂に貯へたる石と瓦、彼眞先に驅出して「進め！／＼」

（其八）

されども折角鐵門の傍まで攻寄せながら、手を空しくして歸らねばならぬ樣に、いつもなりぬ。故如何にと言ふに門番の日本人が一喝に恐れて味方が散々に逃出せばなり、松坊一人留りて奮戰なしても何の甲斐もなかりき。

九歳の春、村の小學校燒失なして假校を光華寺の本堂に移さるゝに會し、松坊は初めて普通の學問を知り得たりき、又普通の智識をも。

これと同時に人は人の子にして、吾親は松にはあらず同じく人なりし事を知りぬ。鷲にさらはれて此地に來り、彼の松の枝に懸り居たる事を知りぬ。村長は身に取りて大恩人たる事も知りぬ。

斯く知れて見れば一日も早く眞の親に逢ひたくて逢ひたくて如何も斯樣もならず、遂に意を決して親を尋ねに出立しぬ。何處と言ふ目的もなく、又誰にも此事を知らせず、不意と居なくなりて行衞知れず。

村の人々は言ふ、之ぞ神かくしならむと。

秋に成りても歸り來らず、冬に成りても歸り來らず、越へて春に成りても歸り來らず、夏に成りても歸り來らず、又秋も過ぎ、冬も過ぎ、彼が十二の春突然として姿を見せける。人々皆驚かぬ者なし。されども彼は平氣なり、何處に居りしやと人問へども彼決して答ゆる事なし。

彼の性質いたく異なりぬ。そは音無しくなりしなり。

村長の家は此時零落に傾き居りぬ。松坊は斷然光華寺を辭し又其僧となる事も止めて村長の畑を耕し、村長の牛を追ふべく働きぬ。其間常に書物を讀みて暇さへあれば勉強なす誠に希有の子供なりき。

此時なりき、彼の妾の家に好く來りて妾と親しくなりしは。彼は妾を祖母樣と言ふ、妾は彼を孫の樣に思ひぬ。三年前に死したる孫の蘇生りし樣に思ひぬ。

（其九）

語る松坊の身上の中に、少しく妾の事も交へむ。妾は白石の村はづれ、土手下の一軒家に駄菓子を賣り

て日を送る者。彼の松坊に父なく母なく、一ッの親類なき如く、妾には子も死失せ嫁も死失せ、一人の孫も亦死失せ、今は只の一人法師、世をはかなの老母ぞかし。

それ故にこそ松坊と互ひに親しくなりしなれ、淋しさハ誰も同じぞや。松坊常に吾家に來りて、左なふさぎ給ひそ、我は今にえらき者に成り、本家を元の様に興した上には、御身をも樂々とさしまするると、それは優しくも言ひて呉れぬ、其信切は子供に似合ず、底の底まで達きてきこえぬ。

牛の涎の地に引く夏の日、彼は妾の家に來りて晝寐の暇を讀書の時に宛てぬ。犬の狂ふ雪の夜も、昔は經文の師今は讀書の師と頼める光華寺の和尚がり通行く彼の姿を見たりけり。それ程までに爲したるも、終に村長の家は潰れたり。人は他鄕に去り、地面は外人の手に落ちぬ。

松坊は又光華寺に掛人して、扨てもはかなき有様なりけり。

されども僧となる心のなさは前の如し、これには役僧のもてあまして見えたり。大和尚は一人然らず、彼がする儘に爲さしめよと物事緩大のなされ方、それを好き事にして松坊は、村を去り東京に行かむとくわだてぬ。其出立の朝なりき、梅雨に散り、櫻雨に咲く、時は三月わかれ霜の、庭に落ちたる其上を、踏みてぞ吾家に來りける。

見れば旅立の姿なるに、何處へ行かむとするにやと、妾が問ひしに彼は答へて、只東京へ、と言ひたるのみ。

東京へは何しに行くにや、行きてはいつの日歸りて來るや。あな心細き事なるかな、と妾が重ねて問ひかくれば、彼又萎れて答へらく、いつの日我は歸るらむ、そはあらかじめ言ひがたけれど、歸る時こそ恩人の家再興と知り給へ。御身が此世に幸福を得るべき時と知り給へ、と何か望みを抱きて語りぬ。されども其れまで老の身の朝の露のはかなさを見るや知れずと言ひたりしに、年を老らずに待てと言ひき、必らず死ぬなと言ひたりき。さらば目出度き門出に、何を抑も送らむかと、見廻はすあたりに店の品、菓子は彼子の好める物、駄菓子なれども鐵砲玉、三ッ四ッ五ッ紙に包みて、芳志をば與へたり。嗚呼松坊が霜を踏み、小川を傳ひ、橋を渡り、野路幾度か振かへり、振かへりては行きたる姿、未だ眼の底に消えやらぬに。

（其十）

それが今此墓の下に永く眠りてあらむとは、如何にしても思はれず。或る軍人の世話に成り、軍人となるべき學校に入りしとまでは聽きたりしが、死せしときゝしは餘程の後、嗚呼松坊よ、松坊よ、何とて御身は死せしぞや。終に御身は世の中に親ある事を得知らずして、はかなくなりぬ、はかなくなりぬ。死して彼世で逢ふならむ、此世に最早やなき人に。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

語り終りて潸然と泣きぬ。我も亦涙あり。我は何故に松坊の此世より見はなされしかを知るに苦しみぬ。

天無情なんど言へる思想はかゝる時に起るならむ。我はさか思ふにあらざれども、解すべからざる人世の益々これに至りて迷はざるを得ず。されども雨空の一方の天に僅かに光る星の影を見留め得ざるにもあらず。

嗚呼、松坊よ。峰松太郎よ。我汝の死を憐む、汝の如き健兒は次第々々に死して行くなり、只速さと遲さとの差あるのみ。生きて働くの力を以て十と爲さば、死して其靈魂が或幾多の志士の頭腦に印するの力、十に對するの百たり、千たり、萬たり、無極不朽、大いに響かむ。只惜しむ好き種の好く長ずる能はずして、大空をおほひもはてず、枯るは抑も二葉の本意か。

時に空低く、風近く、雨從ひて來らむとす。老女は腰をのばして天を見上げつ。遙々來れども甲斐なし。松坊の顏見らるゝでもなし。松坊の聲聽かるゝでもなし。嗚呼たよりなき身は矢張妾、歸らむ、いざ、歸らむ。松坊、土手下の老婆は歸るぞや。

斯く言ひて老女は合掌なしぬ。わかれの禮を我にもなしぬ。杖にすがりてとぼ〳〵と墓地の出口に向ひゆく。我又去ッて坊主山の上へとのぼりぬ。街路。田畦。小丘。竹藪。寺院。悉く曇りたる色の中に包まれぬ。見る物皆何となくあはれなり。時に又彼の松太郎が墓を指して、詣でむとや、六七人の幼年學校生徒、一人は花を持ち、一人は桶に水、それ〴〵に芳志をさゝげて來りぬ。黑き上着、赤きズボン。腰のサーベルいきらめきぬ。彼等の帽は均しく取られたり。

嗚呼、松太郎の友なりしか。老女は路にて此人々にあひつらむ、如何なる心にて見たりしか。友よ、松太郎の友よ、勉めよや、それ！

◉畫師の妻

（其一）

幾歳の雨露を凌ぎけむ、大久保の村はづれに最早や倒れつべき古家一軒。中にはブリキ製の手洋燈を點して年の頃二十八九人品の好き一人の婦人の、石版摺の額畫に彩色するを夜業にして一心に畫筆を働かしぬ。

これは此頃の流行物、女には好き内職とかや。机の右には未だ塗らざるを積重ね、左の方には塗りて未だ干かぬ物をひろげぬ。

傍には六歳か七歳ばかりの娘、炭團の上に粉炭を置きたる火鉢に紅葉の如き手を出してあたり居りぬ。寒さにや灰を搔分けて埋りたるを出しつ、母親の顏と畫の面とを交代りに眺めては物待遠氣に欠伸を爲しぬ。

母は一枚を終りて吐息つき、凍えたる手先を暖めて一休せむと、此方に向き、
おゥ冷めたや、ト言ひつゝ娘のおぶり居る上より兩の手を差出せしが、ちよと下の手に觸りて見て、
　お前の手は大層暖かいねえ、妾のは、これ御覽な、こんなに冷めたいよ、ト又觸りぬ。　あら冷めたい……氷見たやうねえ、妾暖めたげませう、妾の手あッたかよ、ト言ひながら優しくも母の手の上に己が手を重ねむとす。そを返して今は身の冷めたきを忘れ、又子の冷めたからむ事も思はずして、しッかりと握締め。　好く言ッてお呉れだねえ、ありがとよ、お前がさう言ッてお呉れだと、どんなに嬉しいか知れないよ。お前は誰に似てそんなに優しいのだえ、ト淚含みたる母の顏を子はつく／＼と打見守り。　暖めなくッていゝの？暖めなくッてもいゝのト口の内にて繰返しぬ。
お前は此通り妾の身の爲を懷ッて信切にしてお呉れだが……お父樣のおかまひなさらない事！家を御出なすッてから今日で大方半年にもなるけれど、只の一度も御たよりがないとは、あんまり御打遣りのなされ方、留守には妻もあり、此樣な可愛い娘もあるのに……ねえ文ちやん、御父樣はあんまりだねえ。
　本統ねえ、母樣、御父樣はあんまりねえ。　妾が斯樣やッてるからまア如何にか暮して行ける樣な物の、それでなければ本統に仕樣がないよ……せめて葉書でも一寸よこして被下ればよいのに、何處にお出でなさる事やら、ちッとも御行衞が分らない。此間も戶籍調の巡查方がお出なすッた時に、どんなに極りが惡かッたらうか。　あゝ巡查方が來てねえ……。　しかし音信のないのは無事

だと思へッて、いつかお言ひなすッた事もあッたから、まア安心は出來るやうな物の、御召物などは如何なすッたか、夏着の儘で御出なさッたのだから……さぞ御困りなさらうに、いづれ冬着は何處で御求めなさッたらうが、先の一重を如何なすッたか、又いつかの樣に乞食にでも御遣りなさりは仕ないかしら、あの縞柄は好いからなほして文ちやんの衣服に仕やうとチヤンと見つもりが仕てあるのだが……衣服と言へば其衣服も餘程汚れて來たやうだねえ……。

母樣、母樣、ト不意に呼掛けて。　其衣服は武田の久ちやんの樣なの……　おほゝゝあんなに綺麗ではないよ——お前は知つて居さうな物だが、氣がつかなかッたかねえ、ト言ひつゝ、ふと傍の額畫を見て、中より一枚の圖を取出し。　此の人が着てるやうなのさ。　あゝ、それ、綺麗ねえ。

綺麗ぢやありませんか、ト濃き繪具の色を賞しぬ。本物はこれ程にあらぬをと思へば、これも苦しき種となりて、今日の雪催ひにきざしたる持病の胸痛、如何やら指込みて來さうなり。強くならぬ内に今宵は早く眠らんと思へど、又机邊に山の如く積みたる石版畫、未だ筆を染めざる方の多きを見ては、中々に氣の、休められじ。

お前眠むくはないかえ。　母樣は……。　母樣は未だ十枚程塗らなければ寐られません、だから眠むくば先きへ御やすみ、御床は直ぐと敷いてあげるから。　母樣がおよらねば妾も厭。

翌日の朝が又ねむいよ、それでもいゝの？それに母樣は又他に御用があるのだから遲くなるよ、それで

もいゝのかえ。　でも、母様と一所に寐ますの、眠くてもそれまで待ッてますの。　それでは仕方がない、火を澤山おこして待ッておいで、妾もちと加減が惡いから、四五枚にして寐る事に仕ませう。さア〳〵大急ぎて塗りませう〳〵。

母は又机に向ひ、子は又火鉢を擁しぬ。茶畑を渡る風の聲、淋しく。井戸綱の氷りて釣瓶の動くたびにめり〳〵と言ふ響き高し。子は寐に就かぬ母を待詫び。妻は良人の旅先より歸來ぬを待詫びて、良人の上、吾身の上、吾娘の上、樣々に案じそむれば、筆の進み遅うなりぬ。此時思出したる如く、娘は。

母様、母様、御友達がねえ、家の御父樣をねえ、ヘッポコ畫師だと言ひますが、本統……。

（其二）

其時母親は恐ろしく眞面目になりて、　文ちやん、そんな事言ふ物ではありませんよ、例令御友達が何と言ッても御父樣の事を彼此申すものではありませんよト諭すに、娘は尚これに伏せずして、

でも御友達が皆さう言ッてよ……妾知らないから母様に今おたづねしたの。　それは御友達は何と言ふか知らないけども、家の御父樣は決して御下手ではない、それは世間では何とか彼とか惡口を言ふであらうが、如何して〳〵、家の御父樣は何處へ出ても耻かしくない立派な畫師で居らつしやるよ。

さう、では之から惡口言ッたら、さうではない、御父樣は御上手だつて妾教へて遣りませう。

いゝえ、辨解するのではありません、言ふ人には言はしておゝきなさい、家の御父樣は世間に媚る

事が御嫌ひだから、御書きなさる畫がどの畫も〳〵眼の低い人達にはまづく見えるので、其人達に何程惡く言はれても少しも口惜しい事はない、只眞實に御父樣の技倆を知ッてる御方に賞めて頂けば、それで澤山だよ。　御父樣の技倆、知ッてる御方ありますか、ト娘は尋ねたり。これが返辭には母親躊躇なしぬ。少時して溜息と共に漸く、　それは無からうよト言ひぬ。此時は筆持たりし手のいつしかに帶の間に差込まれて、首を低れたり。娘は炭團の灰を拂ひつ、　さう、一人もないのト言ふ聲力なし。　無い證據には去年の春であッたか、競進會にお出しなすッた畫は大層好く出來てたのに銅の賞牌でさへ取れないのだもの。何新聞であッたか、大變に惡く評してあッたさうだよ。だが、いつも御話に入らッしやる水田の叔々ねえ——詩人の。彼方ハ好く見て、好く評して被下ので、御父樣が喜んでおいでなさるよ、だから眞の技倆を、知ッて居らッしやるのは、まア〳〵彼方一人——勿論賞めはなさらないけれども……水田さんも御不仕合、丁度御父樣と同じ樣に……なぜかう世の中は逆に廻るだらうか、妾には如何も分らない〳〵ト言ひて又筆を取りぬ。されども塗る方には心向かず、これも良人が注文を受けて畫きたる肖像の似て居らずとて先方より突返され、今は其紀念の額となりて壁上に懸るを見ながら。　それにしても早く歸つて來て被下なければ、母樣は困ッて仕舞よ。御相談申す事は山の樣に積ッて居るし、落合だの、小橋だの、それに大和田さんなッぞからの催促も度々來るのに、如何したら好いか、妾一人で誠に遣切れないよ。　なぜ歸ッていらッしやらないのねえ、妾だ

の母樣を御忘れなすッたのかねえ。　御忘れなすッたのかも知れないよ、父樣の事だから……此樣に永い事旅にいらッしやるのは、少しは好い事でもあるのか知ら、少しは好い事でもあるのであらう、但し思はしくなくッてか、今度こそは如何かして、殘して歸ッて被下ればよいにねえ。　御土産を持ッて御歸りなさればよいのねえ。　其御土産はアテになるまいよ。　でも餘所の御父樣は近い處からでも屹度持つて御歸りなさるよ。

此言葉は母親の急所をや貫きけむ。はら／＼と落つる涙は石版畫の繪具を散らして、紅色うるみぬ。俄に持病のさしこみ來りて、苦しさを兩手にて押へ、嚙しばる齒の音。娘は驚きて驅寄り、甲斐々々しく背を撫でぬ、痛きは腹なるを。

母樣、母樣と呼ぶ聲早や震ひぬ。　大丈夫、心配おしでない……………大丈夫よ…………それよりか御白湯を一杯酌むでおくれ、まだ丸藥があるはずだから、と言はれて、娘はうろ／＼仕つ。火鉢の傍の土瓶取上げ、　御白湯はぬるくッてよ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

今病伏さば此娘を如何にせむと、堪へ耐へし甲斐ありて、少しくやはらぎぬ。言ふまでもなく娘の介抱は藥よりもまさりたり。尙此上の好き藥は表の戶の開く音して。　今歸ッたよ、お光、お文と言ふ聲あり。

（其三）

あッ御父様だ、御父様の御聲だ、ト眞底から喜びて娘は飛上りぬ。母親も今までの胸の痛さを忘れて立上り。　文ちやん、嬉しいかえト言ひつゝ手洋燈持ちて出迎へにゆきぬ。既に早や娘は板の間に坐りて兩手をつき。　御父様、お歸りあそばせ！と辭儀をなしぬ。

今此二人に迎へられたる此家の主人は、年の頃三十一二。如何にも美術家たるの相をあらはしぬ。妻を見て、娘を見て、莞爾と笑ひながら、　歸ッたよ、歸ッたよ、驚いたらう、今頃歸ッたのを、屹度驚くだらうと思ひながら歸ッたのだ、ト言ふ。妻は甲斐〳〵しく下に降りて、盥を流下より運び。まア貴郎、此所へ御掛けあそばせ、そして草鞋を……ト言へど、それには氣も着かぬか。娘の方を見詰めて、　文公、眠いだらう、未だ寐ずに居たのかえ、能く眼がかたいなア、御父様が今好い物見せてあげるよ、それは實に面白い物だぜ。　なんです、御父様、それ、なんです……御土産？　まづ御土産さ。　さう、早く見せて頂戴なト、今漸く上口に腰掛けたる父の肩に縋りて娘は言ふ。此内妻は土瓶の微温湯を盥に注ぎ。良人の草鞋の紐を解去り。古足袋を脱がしむれば、それも氣の着かぬか早や娘との話に浮かされて、其儘上へあがらむとす。　あれ、貴郎、此通り御洗足が取ッてありますのに。　うむ、足か、足は綺麗だ、そんなに汚れては居やアしない、ト脚半も解かずにづか〳〵と上りぬ。斯くて虛呂〳〵と四邊見廻はし、石版畫に目を付けて。　なんだ、お光、……お前内職仕て居

るのかい、ト言ふ。　はい……貴郎……內職を……ト言ひかけて妻は良人の顏をつく〴〵と見ぬ。

モウなんだ、內職なんざア仕なくッてもいゝぢやアないか、お止、お止、ト勇立ちたる言葉、妻は良人の威勢好さに呑まれて全く胸の痛みを忘れ。扨て今までの苦勞をも忘れ、これまでの貧しさも忘れらるゝ事と、安心してこれも土間より上りぬ。

矢張家がいゝなア、ト言ひつゝ火鉢の前に坐り。　旅へ出てると旅がいゝが、家へ歸ると家がいゝ。出てから幾月立ッたかねえ、ト問ふ。　彼此半歲で御座イますとイ……、、、ズルを仕舞ひかけたる妻は答ふ。

何、そんなになる物か、　そんなに行ッてやア仕ない、ト首を振りぬ。娘は父の傍を離れず其膝の上に片手を載せ、片手の指を折りて、數へつ。　六月と、半よ。　さうか、それぢやア半歲の餘だ。そんなに出て居たかなア、ト初めて驚きぬ。　貴郎の御留守に落合さんがお出なさいましたよ。　あッさうか。　それに水田さんが度々御尋ね被下いました。　あッさう……。

跡は未だ澤山に入らッしやいましたが、申しますまい、あまり好い御話ではありませんから。

あッさう……ト言ッて頭を抱へ、何をか考へぬ。忽ち思出したる如く。　文公々々、好い物を見せてやる、御覽々々ト繪具函取出し、蓋を開けばパレットの下に見取書きの景色四五枚。　これ御覽、これは江の島の兒ヶ淵だよ、其下が鎌倉の御宮――綺麗だらう、未だ其方の包みには澤山にある。

御父樣、これが御土產、ト不平さうに娘は言ふ。　さうさ、それが御土產さ、ト一向に平氣なり。

母親傍より。　貴郎、何か他に買ッて來ておやりなされば好いのに、どんなに御土産を樂しんで居ましたらう。　さうだッけなア、　ト今此時に合點しけり。土産のなきこそ道理なれ、衣服さへ此寒さに夏着てゆきたる儘なりき。事にまぎれて妻は知らざりしが、あまりの事に肝潰れ、扨ては空だのみなりしかと俄に悲しくも亦痛くもなりぬ、愁は眉にあらはれぬ。待受の衣服さッぱりと洗張仕て縫直したるを取出し。　さア貴郎、御召物を御着かへなさいまし。

　さうか、それは難有い、ト得々として立ちぬ。其薄く、其汚きを見て妻は泣きぬ。娘は母に小聲にて問ふ。　妾の衣服にするのは、どれ……。

母は答へかねて咳入りぬ。妻が後にて如何に泣きしかを良人は知らず。只其待受の冬着を暖く着しぬ。かくて直ちに又包の中の見取畫取出し、稚き娘を相手にして説明にふけりぬ。

貴郎……ト呼掛けたり、妻は。　なんだえ、ト振向きぬ、良人は。　貴郎にいろ〳〵御相談申したり又御話し申さねばならない事がありますが……。　相談……。　御草臥と存じまして今夜は申しませんが……只一言伺はねばならない事が御坐ィます。　なんだえ……。　今度は如何で御坐いました。　今度かい……。　少しは好う御坐いましたか。　いゝや……ト さも言悪さうに答へぬ。斯くて頻りに頭を搔きつゝ、　お光、お光、途中で繪具が無くなッたもんだからね……。

あきれて妻は顔を見守るのみ。娘は繪具函の鉛管を一々取上げて見て。　あッどれも無いのよ。
貴郎、繪具が無くなるまで何を御畵きなさいました、ト涙を堪へたる震聲にて言ふ。良人は氣毒さうなる顔して、　人だの景色だの寫生仕たのさ。　寫生して如何なさいました。　大方人に遣ッたよ。　それでは旅へ御出なさッた甲斐がありませんねえ。　なに、さうでもないよト言ひて極り悪氣にレストスチックを弄びぬ。

（其四）

旅へは何しに行き給ひしにや、今となりては知るに難し。家計ゆたかなる人々が、脳裏に新しき詩想を貯へむが爲め、眼底に美しき風景を納めむが爲め、ゆるりと旅に出でたるとならば、他人に畵きたるを遣はすも好し。歸期を忘れて家を餘所に暮すも好し。左はなくして吾家の生活不如意なるより、田舍を廻りて稼ぎ給ふ筈の御方が、着替求め給ふ代もなく、可愛き娘に土産買ひ給ふさへ出來ぬとは、扨て〳〵無頓着にも程こそあれ……見給ひたる景色は如何に美しく如何に面白くありけむよ。あまり面白く又美しさに浮かされ、それに氣を奪はれ給ひて都に家ある事も家には妻子のある事も、其妻と子の如何に待ちつゝありしかを思出すべき暇持給はざりしならむ。斯くまで畵事に熱し給ふ眞の美術家にておはす事、今更知りたるわけならねど、度毎に新しく驚かるゝは、扨て其畵師の呑氣さよ。それか、あらぬか、御年齢よりは餘程御若く、御若きのみかは稚き子の樣なる處もあり、引きかへて妾の古たる事、世帯に窶

れて見る影もあらず、あらず、嗚呼それが見苦しとて御歸りなかりしにや、妾の所爲が面白からぬに、それ故長旅仕給ひしか。妾は兎まれ、此文子は——此文子は愛し給へよ。何につけても父上は未だや、未だ父上は御歸りなきかと申しつゞけて居たる心の、娘が慕ふを酌分け給へよ。

妾とても過ぎし昔は紫の袴穿きて朝行き夕に歸り、文讀むすべをはじめとし、女子のすなる事は一通り學びたる者。一度は叉裾摸樣の紋附着て髮を高島田に結びたる時もありき。此姿は御身の筆に寫されて、今は生家の壁に額とありてのこりぬ。妾の家は財に富み、妾の父は位高し。妾は箏彈く術こそ習ひたれ、水酌む業の敎へは受けざり、それが今にては裏とありて、米洗ぐ事の巧みにぞなりける。されども流石に忘れぬは文の上より得たる智識、足らぬ身ながら美術家の如何なる者と言ふ事を知る事得たるも此御影あり。故に此度の如く久しく歸り給はずとも歸り給ひても立出で給ひし時の目的を達し得給はざりしにもせよ、これにつきて何事も申すまじ。美術家の貴郎に向ひて理ある繰言は申すまじ。留守にておはしたる間のもろ〳〵の出來事、文子が餘所の子等の如く父母に手を引かれて團子坂の菊觀に行きたしとせがみたる時のせつなかりし事、內職の仕事途切れたる時の心細かりし事、尤も苦しかりしは大和田落合小橋其他よりの催促、中には賴みたる畫のおそしとて怒るあり、借したる物の返濟遲しとて腹立つもあり、それに向ひて一々言分したるつらさ。此他の小事は御先祖の御墓の掃除代の遣りてなき事、岩橋に產ありて女の子の丈夫なるが出來たるに未だ祝儀の品贈らざる事、東松氏の新婚を未だ賀せざる

事、あれもあり、これも未だなり、それは〳〵次ぎから次ぎと溜りて其儘の物數ふべからず。今まで一人にてむやくや思居たるを、打開きて一々語りたきは山々なれど、其言ひたきをぢッとこらえて、言ひたくてならぬを何處までもこらえて、惡しき事は少しも聽かせまゐらせぬ苦心、胸も張裂くるかと思はるゝなり。斯くまで美術家たる良人の心を酌み、妾は十分控目にして居ぬれば、かゝる事も好みて言ひたきにあらねど、是非とも少しばかり伺ひたき事あり。彼の美術の目的が口を糊す爲めにてはあらざる事、知りぬ。畫は人に食を與ふべき爲めの畫ならずとも、畫師は妻子を養ふの義務なしと言ふ掟やある。萬一其掟あるならば何とて妻をや迎へ給ひし、何とて子をや設け給ひし。旅より旅に暮し給ふならば、家も入らず、妻も入らず、御身一人にてあれかしな、扨ては此世を片輪にてすごし給へよ。一方には美術としての畫を勵み、一方には稼業としての畫を勉め給ふ事出來ざるか。御身の如く孰れにもなまけ給ひては詮方なし。後の世に傳はるべき千古不朽の妙の畫は、只一個にて事足らずや。其他は糊口の爲めに筆を執り給はずや――斯く妻の心の中には言はむとする言葉の湧出るより、此事說かむとて唇を震はす瞬時、速くも良人の方よりして。又何か言はうと思つて……、惡かッたよ、我が惡かッたよ。　でも貴郎……と言ひかけて――言はず。

（其五）

御覽、お文は眠むさうだ。早く寐かして遣れば好いのに――我には茶漬を食はしてお呉れな――家へ歸

ッたので空腹は忘れて居た。

この言葉に愈あきれて妻は答へもなさゞりき。されども捨ておくべきにあらねば、娘には床を敷きて遣り、良人には膳を出して與へぬ。娘は其床の中に入りて眠り、良人ば其膳の前に坐りぬ。火鉢を隔てゝ、妻は給使の盆を持ちながら。

貴郎、何んにも御坐ィませんよ。

何の御馳走が入る物か、これで澤山だ。

それに只今御洗足に皆ンな御白湯を取ッたものですから、ぬるう御坐ィますよ。

ぬるくッても結構、水と握米飯には馴れて居るから。

良人はかゝる境遇に馴れ給ひしか、妾とても馴れたり、文子とても馴れつらむ。それにしても胸の内のむやくや、今度こそ言うて見なむか、今こそ申上げて見るべきか――否、々、愚痴かも、女子の愚痴かも。此覺悟なくて此家に嫁ぎたる妾にあらず。言うて如何にか成る事なら、假令耳をふさぎ給ふとも、打明て御相談申せど、千度繰りかへして言へばとて御心それに傾かずば微盡動ド給はぬ吾良人――言ふも愚痴か、女子の愚痴か、女子の愚痴はいたづらに美術家を枯らす毒水なるのみ。

かく又思ひに沈入れは、給使の度に茶碗を箸で彈かれて――あれ又うッかりと仕て居ました。

故家の母樣御存命の時、いつぞやわざ〳〵お出あされて、それとなく縁切ッて娘を連れて歸れよとの御口裏。お情あまりて御情けなし。其樣なさもしき事が何として妾に出來べき。又良人を只一人、此淋しきあばらやに、御遺し申して行かるべきや。生の母樣とは言ひながら、あまりまゝしき御心根と御うら

み申せし事ありき。又此間久々にて、母樣の御手紙を取出し、御なつかしさに彼此と涙に暮れて讀行く内妹は貴族の令夫人、それを羨ましとは思はぬかとほのめかしての御書きぶり、それとなく良人の事をあざけり給ひし御筆の綾、これも吾身をいたはりての御眞實とは思へども——先つ考へても御覽ドませよ、畫師は天職で御座りまするぞ。神と同ドで御座りまするぞ。貧苦は如何にも貧苦なれど、其苦しさは通り雨、紅葉を染める時雨とは違ひまする。富貴は浮べる雲とやら、風に飛ぶでは御座りませぬか。一代の妙畫は千古不朽の寶なり。それを描きて筆を走らすべき良人の、世に知られざるは更なり、妾の母樣にさへ知れざりしこそ口惜しけれ。知らで母樣の御かくれありしこそ悲しけれ。嗚呼それも道理、世に知れざるも道理。妾の眼にのみ絶世の妙畫と見えても、未だ誰の眼にも見ゆる絶世の妙畫をかき給はぬ故ならむ。妾は何を畫き給ひても、良人の畫は美しく、言ふに言れぬ心に感ずれども、他人にては左なきなるべし。妾の眼が正しきか、世人の眼が邪まなるか、いづれにもせよ一代の傑作は、誰の眼にも好き物ならでは、古今絶無の神品とは言ひがたし。雅俗の別は抑も末、千萬人のうなづきこそ神が口うつしの賞牌なれ。

其賞牌を得給ひしか吾良人は。未だ。未だ。未だ得給はず——畫き給はず。それを勵まし、なぐさめ、すゝめ、傍にて守るべき衞士は妻なり。妻なる妾が義務なり。聽く西洋にては美術家の保護者となりて力を盡す資本家ありとかや。

吾國にかゝる資本家なし、ありとて其保護に頼る吾良人ならぬを。されども妻と言ふ保護者が出て、天晴其大畫を仕上げ給ふまで守らむを、よもや否とはの給ふまじ。

今箸箱仕舞ひてゆッたりと搆へたる良人。妻は御飯桶に倚りて考へ居りぬ。此時先きに眠りたる文子は、あはれ如何なる夢裡の言葉か。　家の御父樣……古木落水……畫師……いゝえ……いゝえ……あら、さうではないの——母樣々々久ちやんが、お父樣、ヘッポコ畫師だと言ひますよ。

（其十八）

雪を跳たる園の竹、妻は良人の手を取て、吾娘の傍に連てゆき、眠れる顏を指示して。　まア御覽なさい、此子を……ト、上の搔卷少しく捲れば、良人はにこ〳〵打笑みつ。　好く寐て居るねえ、何も知らずに、此まア好く寐て居る事わ……。　此可愛らしさを御覽あそばせ。　かうやッて居る處を見ると思出す、いつかキウピットを畫く時に、此子を摸範に寫生しやうと思ッて、木の葉一枚に仕た事があッたッけ。彼時厭だと言ッたのを、お前は今神の御使になるのだから、其樣に言のではないと言ッたら、本統に神樣の御使に成るのかと思ッて、音無しく、動かずに、しかも泣かずに、あの笑ひかけて、笑うてハ惡いか、今笑うてはキウピットたるの資格を失ふかと問ひたげに、ぢッと此方を見て居たが、噫、其神の御使たる品位はいまだに保ッて居る。此小さな手を投出して、蕾の樣な唇をしッかりと結んで、他愛もなう寐て居る處……喃、お光、此子は全く神樣だよ、ト言ひつゝ恐る〳〵指も

て其頬を撫でぬ。　あれ、お止しあそばせ、眼をさましますよ。　なァに神樣だもの、起きやァ仕ない……。　其神の樣な文子でさへ、夢にまで心配して居ますのを、貴郎には御分りなさいませんか。　何、文子が心配して居る……そんな事があるものか。　仕て居る處では御座いません、貴郎の事を大變に御案じ申して居ります。　何故！我には分らないよ、お前の言ふ事も分らないよ。　妾の申す事が御分りになりませずとも、最先文子が寐言の中に申した言葉は御分りに成りましたらう。　あゝ、何んとか言ッたッけ……。　家の御父樣はヘッポコ畫師ではありませんと申しました。　あゝ……。　あれは文子が自分の友達に、貴郎の悪口言はれて、それを辨護して居るので御座いませう……如何した物か世間では、貴郎の事をあまり賞めないやうで御座います。　それは我も知ッて居る、だが、我の思想で好いと思ッて畫いても、それが世間の眼では拙く見えるのだから仕方がないさ。　如何で御座いませう、此頃に世間を驚かす程の妙筆を御揮ひなさッて、後の世までも遺る樣なのを御書きなさいませんか、ト好き潮時に纜解きて希望の海に乘出さむとす、風も亦追手なりけり。　うむ、畫いて見やうか、ト勇立ちて良人は言ふ。　お書きなさいまし、是非お書きなさいまし、屹度よろしく畫が出來ませうよ、　妾は樂しみで御座います、貴郎が精神を凝してお書きなさるのを傍で拜見致しますのは、どんなに嬉しいか知れません。貴郎是非大畫におかゝりなさいまし。　だが、お光、急には出來んぜ。　それはもう一年おかゝりなさらうと、二年、三年

そればッかりにおかゝりなさらうとも、ちッとも搆ひは致しません。其間妾が何致しまするから、決して他の事には御心配なく、一生懸命に御遣りなさいまし。　遣ッて見やう！遣ッて見やう！ト彌々浮立ちて來りぬ。扨て又急に腕を組みて。　だが……お光！ト言ひかけて氣毒さうに妻の顔を見守り。　旅で餘程遊んで來たのに、又お前に仕事をさせて苦しい目さするのは……。　いゑ〱その御遠慮には及びません、妾も畫師の妻で御座います、それ位の事は致しまするから、貴郎は只お畫きあされば好いのです。　畫きたいのは畫きたいけれども、しかし如何してもお前に氣毒だからあァ、ト頭を搔きぬ。斯くて又思直して。　けれど其畫さへ出來れば、何ァに、お前にも文子にも苦勞はさせない、其畫さへ出來れば、何ァに、何ァに……。　それでは本統に御かきなさいますか。

畫くとも〱大いに畫く。　嗚呼それで妾もやッと安心が出來ました、如何か天晴見事の畫を御仕上なさるのを今から祈ります。

旅で鍊へて來た妙想を一生懸命に畫出せば、なァに、今の世を轉覆させる位の事はわけはない。後の世に傳へて、我ある事も、それを仕上げさせるにお光と言ふ妻のあッた事も、千萬年此地此人のあらむ限り知らして呉れるぞ。さァいよ〱それときまればもう今までの古木落水ではない、ト自から震ふ腕を撫りながら立ちぬ。これを見て心の底より湧出でたらむ如き笑は妻の面にあらはれぬ。雲散ト雨霽れて朝日に匂ふ家櫻花。

（完）

◉一夜の宿

月の瀬の梅、芳野山の櫻、何處の花にも遲れた。菜花は丁度此頃の盛り、それも到處で見て最早やそれ程嬉しくも無くなつた。待てば多武峯の藤、初瀬寺の牡丹も好いとは聽いたが、東京に殘してある要事の扱ていつまでも捨ておかれず、京の見物も一向に爲ずして一人歸京の途に就いたのは四月二十八日何となく曇ッて居る日であつた。

逢阪山の隧道を出ると丸で夜が明けた樣だ。湖水。大津の市街。三上山。好い景色だ。これを八景に限るとは狹い眼だなぞと考へて居る內に馬塲の停車塲へ着いた、此所で二三種の新聞を買ッた。——それから瀬田川の鐵橋を渡り、草津では姥ヶ餅賣る聲を聽流し、折返して新聞を未だ讀んで居た。

突然一人の老婆が尋ねた。それは、三雲へ行くのは矢張これに乘ッて居て好いかと言ふ事であッた。余が答へを待たで直ぐ隣に乘ッて居る商人體の男が、それはいかん、乘替ねば大變な間違いが起る、知らんとおいたら東京まで行ッて仕舞ふよッて早ふ此所を出おされと言ッた。老婆は泣聲で禮を言ッた、そ

して反對の側の窓から首を出して此所を明けて被下れよと叫んだ。商人體の男は笑ひながら此方ぢや〳〵と言ッて、これが信切に出口を敎へた。そして驛夫を呼んで戸を明けさした。老婆は檻を出た羊の樣にすた〳〵と下りて行きかけた、又立戻ッて忘れ物を仕たから取ッて被下れと言ふ。例の男は何かと思ッて見廻すと、それは竹皮に包むだ物であッた。これを渡すと殆ど同時に瀛車は進行を初めた。跡で車中に物議が起ッた、それは彼の竹皮の中の物は何であたッかと言ふ事であッた。

此所で少しは緩やかに成ッた。それまでは實に身動きも出來ぬ程であッた。此頃は岐阜で西國三十三ヶ所連合の開帳とかゞあるので、それへ參詣する者の多い故であると隈の方で說いて居た老人があッた。八幡。能登川。彦根へ着いたのは五時頃であッた。此所で下車したのは高宮に居る友人に久々で逢ひたいからである。京都を出發する時に電報を打ッておいた。無論出迎へに來て呉れて居るであろうと思ッた。扨て停車場から出た。出口に居るだろうと思ッた。居ない。待合所に居るであろうと思ッた。居ない。それでは茶店に居るであろうと思ッた。居ない。仕方がない。困ッた。大いに困ッた。これから高宮へ行かうかと思ッた。けれど友人の宅は取込んで居ると言ふ事を聽いた。知ッて居ながら行くのは無遠慮だと思ッたから止した。

又瀛車に乘ッて東京へ歸ろうと思ッた。でも少しの時間の差違で遲馳に友人が來はえないか。余が列車に乘る、それと同時に友人が停車場へ來る、お互ひに言葉を交す事も出來ずに別れると言ふ樣な事は無

待ッた。來ない。又五分待ッた。來ない。如何しても來ない。何故來ないのか。電信が屆かぬのか、それとも例の取込中だから來られないのか、さうだそれに違いない、これは我が惡かッた。我は兎に角世捨人、此方の樣に閑な人間は澤山は居らぬ。多忙の人を一里餘も離れて居る高宮からわざ〳〵呼出さうと言ふのは、之は過ッだ。ではあるが彼の友人は俗界に居ても詩人の資格のある男だ。多忙の中でも出て來る男だ。三四年逢はないので此頃の樣子は如何だか知らぬが、同じく塾に居た時の精神と大した變りがないならば、屹度來る、屹度來るに相違ない。待たう、待つと仕樣、何處で待たう、モウ夜に成るが、何處で待たう。

彥根は二三度通ッた事はあるが、扨て泊ッた事の無いので、宿屋は何處が好いか分らぬ。困ッた、聽いて見やう、何處で聽かう、誰に聽かう、斯う思ッてそろ〳〵歩いた。

しかし、自分ながら自分の偏屈には困つた。それは人が居ても何處に宿屋があるか口を切ッて問出さぬ事である。

誰か來て宿屋へ案內して吳れぬかと思ッた。無論それは出來得べからざる事だ、寢て居て米飯を喰ふと言ふ物草太郎の昔語に似た話だ。

扨てそれとは知りつゝも何んとなく人に聽くのが厭だ、何故斯う偏屈だろう、仕方がない、今始まッた仔細でハない、前からだ、前からだ、性質だ。

搆ふ物か、彥根中步いた處で何程も無い、行ッた處に突當ッたら其所で泊る分だ。其所から高宮へ手紙を出して來られる物なら來て貰ひ。來られぬのなら無理に來いでも好い、言はゞ何方に着かずの手紙を友人に出す事に極めた。斯う極めて步いた。軈て淋しい町に出た。昔ハ立派であッたろう、今は荒れて荒果て土塀が崩れて竹垣で繕ふてある。それさへ犬が破ッて覗かれる中は畑だ。家は明家が多い。行く內堀の樣な溝の樣な水溜があッた。水が青苔泥の爲めに蔽ハれて、岸の草の蔭に蛙が泳いで居る處だけ僅かに夕空の星を寫して居る。此所の端の朽ちた杭の上に釣竿を一本載せて餘念なく釣を仕て居る老人があッた。昔ハ武士だろう、其面影が何處かに見える。

此老人の脇には手桶がある。中を覗いて見ると鮒が澤山居た。白い腹を出して浮いて居るのもあり、腭で大息を仕てこれも橫に成りかけて居るのもある。底の方に固ッて居るのは時々跳合ッて少しばかりの水を泡立して居る。

其內釣れた、大きな鮒が又釣れた。老人は日の暮れるのも知らずに未だ釣ッて居る。

余は日の暮れるのを知ッて居る、只宿か無いので迷ふて居るのだ。空にハ急がしさうに烏が飛んで行く、これハ城の森へ行くのであろう。

余は此所を去ッて又のこ〳〵と歩いた。突當ッた、それは宿屋らしい家の前であッた。十三四の少女が門の行燈に火を點けやうとして出て居た。これに問ふた、此所の家は泊めるか、旅人をと言ッた。少女は驚いた顔をして余の顔を見て居たが、宿屋です、それは泊めますと言ッた。繩暖簾を潜ッて這入ッた。中には坊主頭の爺さんと十ばかりの男子が居た。其他に居たか居らぬか薄暗いので能くは見ゑない、晩方だから見えないのか、恐らくは何時でも薄暗いのであろう。家内の者は外で少女との問答を聽いて居たので、余の旅人と言ふ事は知ッて居るらしい。しかし何とも言葉を掛けないので何んとなく白氣た。余は又言ッた、泊めて呉れるか。

はい、如何ぞ此方へと言ッて早や先きへ立ッて案内する者がある。これは四十餘の女だ。此家の主婦か、これも薄暗の中に居た一人であッた。

此時漸く坊主頭は言ッた。奥の離座敷へ御案内しろ。奥の離座敷へ行くのには、今頻に燃て居る竈の前を通り、臺所の流の水のこぼれてじく〳〵して居る土間を通り、物置の樣な中を通り、鷄の塒の下を通ッて漸く奥の離座敷へ着いた。成程奥の離座敷には相違ない、しかも土藏造だ。座敷を土藏造に建てたのか、否、土藏が土藏の用を成さぬから座敷に仕たのである。

座板が低い、疊は踏しめると水氣の出る樣な丁度沼池の上に莚を敷いて其上に坐る樣な心持が仕た。四方は壁で破れたる處には長濱祭の番附が張ッてある。無理に附けた床の間には錦畫の天神樣の一軸が

懸ッて居て、前には百日紅の根の鷲の形の仕て居るのに貝殻で眼が入れてある。

窓を明けると直ぐ下は溝だ、溝の脇に椿がある、此花多くは溝の中に落ちて居る、今も一つ落ちた。

流石に疊の汚い事は此家でも知ッて居ると見へて男子が毛布を持ッて來て敷いた、或る一部分だけ。しかし其毛布の方が寧ろ不潔だ。燒穴。何かに染まりたる跡。豕の腹を見る樣に毛の拔けて居る有樣。二人乘を挽く爺の車夫も此頃はこれより好いのを持ッて居るのに。

でも仕方がない、座ッた。少女が茶盆と煙草盆と兩手に一所に持ッて來た。

煙草の火は直ぐ消えた。茶はぬるい、そして臭い。主婦が行燈を持ッて來た。何程搔立ても暗い、これでは晩食の膳部が案じられる、何を喰はせるか、心配だ。逃出すかも知れない、他の人ならば逃出したかも知れない。余は平氣だイヤあまり平氣でもないが仕方がない。一度來て又出ると言ふ事は自分には出來ない。それに隨分これより數等下ッた宿に寢た事が度々あるからだ。

後には此又汚なさが嬉しくなッた。何故だかそれは分らない。大方余の氣分が非常に沈鬱して來たからであらう。

何となく吾隱家の樣に思はれて來た。持病が次第に起ッて來た。總ての人間が嫌ひになッた、實に嫌ひに成ッた。總ての人類が厭になッた、これは我の病氣だなと心が附かぬでもないが、只もゥ人が嫌ひに成ッた。人を見るのも厭、人に見られるのも厭、厭で厭で溜らなくなッた。如何しても溜らなくなッた。

此處は丁度其時に我れと吾身を隱すのに好い家だと思ッた。
米飯を持ッて來た。無言で食ふた。少女も亦無言で給使した。何を食ふたか。
宿帳を持ッて來た。無言で書いた。子供も亦無言で持ッて行ッた。はて何を書いたかと迹で考へた。
直ぐ高宮へ手紙を出さうと思ッた。去かし殆ど兄弟も同樣に睦まじかッた友人、其友人さへ何となく好ましくなくなッた。去かも逢ひたさにわざ〳〵彥根まで來て居ながら。
只何となく悲しくなッて來た。此旅行は元來花を見る爲めに仕たのではない、景色を見る爲めに仕たのでもない、或人に進められ、自分も亦自ら進んで出た旅で、それは或る失望を忘れやうと思ふて、それで旅に出たのである。芳野の舊跡、奈良の古都、諸所を見て來たのはそれを記臆なさむよりも却ッて或る事を忘れたい爲めであッた。幸ひに同行の友人は皆吾身の悲境を知ッて居て呉れて、道中もいろ〳〵に心配して何事も余に考へさせぬ樣に勉めて吳れたので、如何やらそれに氣は迷はされてウカ〳〵と日は過した。
一人散り、二人散り、京都からは我一人に成ッた。一人で此彥根へ來た。今まで我と我を欺いて居たのも今宵此宿屋に來て破れた。
斯う仕た時に、誰か人に逢ふては話をするのが厭で迚も塲に堪へられないのである。それにわざ〳〵友人を呼出すと言ふ事は甚だ馬鹿氣て居る、何が何んでも厭だ、もウ誰にも逢ふまい。

寢やうと思ッた、しかし寢られないのは知れて居る。如何したら好いかと思ッた、如何も仕樣が別に無い。仕方なく讀盡した新聞を開いた。論說。小說。雜報。廣告。相場。讀まずに只一度目を通した。そしていつの間にやら破ッて仕舞ッた。

考へた、草津で乘過しかけた老婆の事を考へた。さァ其先きが氣に成ッて仕方がない。三雲で首尾好く降りたか、乘過して四日市の方へ行きは仕ないか、又忘れ物は仕ないでゐらうか、三雲で降りて何處へ行くのであるか、さァ溜らぬ、いろ〳〵の事を考へては彼の老婆の身上にはめる、そして又心配を仕て遣る。餘計な世話、しかし此餘計な世話を燒く方が自分には未だ〳〵好い。萬一これが自分の事を考へ出さうものなら嗚呼慘憺たる吾身上を考へ出さうものならば、それは迚も斯うしては居られないのだ。

自分で自分の事を忘れ樣と勉めて今吾方の水車を廻さゞらむが爲めに、此方へ落ちて來る水を堰留めて他の溝へ流して避けてゐるのだ。樋口が破れては成らぬと一生懸命に留めて居るのだ。

だが、水の勢いは非常だ、堰を破ッた。一時に水が落ちた。さァ水車は恐ろしい勢いで廻轉を始めた。

自分、自分の失望、或る事の失望、失望、大失望、慘又慘、無情、……戀……傑作、……失望、失望、大失望。

飛出した、迚も居られなくなッて飛出した。

* * * * * * * * * * * * * * *

身はいつの間にやら金龜城の石垣の上に立ッて居た。

伊吹山が先づ最初に消えた。摩針の連山は今や消ゑやうとして只幽かに、幽かと言ふ其幽かの中に殘ッて居る。此上には朧ながら十三夜の月が出て、照らすともなく下界を照して居る。湖水は半分消えて居る。

松原の方で燈火が二ッ三ッ光ッた、それも又消えて仕まッた。

下の樂々園では宴會があると見えて頻りに絃聲が響いて居る。入江のヱリの中から小舟が一雙漕いで出たが、いつの間にやら見ゑぬ樣に成ッた。余は只いつまでも斯うやッて立ッて居た。遲咲の櫻の花瓣が何處からか知らぬ、飛んで來た。鐘の音が響いた。此時の余は彼の宿の中に居た時の自分では無い、非常に元氣の好い大詩人と成りすました。鶴に乘ッて下界を見降して居る樣な氣持になッた。そしてのそ〳〵と步き出した。

* * * * * * * * * * * * * * * *

我大詩人は城を下ッて又町へ出た。いつしか賑かな町へ出た。豪然として緩步した。

酒屋へ飛込んだ。水呑で引掛けた。大詩人ハ醉ッた、蹌々踉々と成ッて來た、詩を吟じて町を步いた。

そして宿へ歸ッた。

* * * * * * * * * * * * * * * *

吾木枕に響く音あるに目を覺ませば土藏の外で米を搗いて居る、其音であッた。

今朝の余は昨夜の大詩人にあらず又小心家でもない、只眞面目な自分に相違はないと安心した。扨て滊車の出る八時十六分に間も無いから匆々に支度を仕て、彼の鷄の塒の下を潜り、物置の中を通り、井戸端を通り、臺所を通ッて、繩暖簾を出た。

坊主頭も、主婦も、少女も、子供も、見送ッた。余ハ急いで停車場の方へ行ッた。

其所にハ高宮の友人が居たので驚き又其奇遇を喜んだ。そして昨夜からの仕末を語ッて笑ッた。友人は又電報の誤解よりして家に居て君の來るのを待ッて居た、をかしいつまで待ッても來ぬ故、都合があッて寄らずに直ぐ歸京した事と實ハ怨んで居たと云ふ事であッた。勿論多忙は何處までも多忙なので、しかも今日此下り列車で自分の妹ハ西京の某方へ緣付く爲めに乘ッて行く、自分も同行すると言ふ事であッた。

計らず此所で逢うて初一念は通したものゝ、互ひに深く語る間もなく、余ハ上り列車に乘ッて東京へ、友人ハ下り列車で西京へ。所謂西と東へ別れた。

（完）

◉雲烟過眼

江見水蔭

○妻暦

拙しと言ふにはあらねど、大都に天彩を競ふの力なく、片山里に引籠りて世を外に送る書師あり。鴛鴦も啻ならぬ最愛の妻を失ひて、悲哀やるかたなく、朝夕の墓參りに手向の水を酌むの他、柴門を閉して更に出でず。村人其子の野邊に遊ぶを見て、父さんは何を仕て居給ふやと問ふに、頑是なき子は答へて言ふ樣。父さんは每日泣いて居るよ、そして何か書いて居るよと。其人さる用事ありて書師の家をおとづれしに、いそがしく机の下に何物かを隱して、周章の中に客を迎へぬ。要談濟みて後、此頃何を書きておはすやと、あからさまに問ひければ、包みきれで、耻かし氣に隱したる物を取出し、これは亡妻が筒井筒、振分髮の昔しより臨終までの一代、中には彼が花見小袖着かざりたるあり。夏の涼みに團扇持ちて、柳の影に螢撲つ處もあり。彼の時はかうか、此樣の姿なりしと、はかなき事を思出しては書き。眼前にちらつく幻さては夢に見る昔の樣を、其都度染めてこれ此繪卷物。菊畑に蝶を追ひし娘姿も、いかい苦勞にやつれ顏の世話女房、霜の朝に米洗ふ井戸端は、今半分書きかけたりとて、さびしく笑ひぬ。

○旅の空

遠國の親類を訪ひて其處に宿りたる若き旅人あり。翌日は出立せむと言ふに、家の娘達は、是非に今一日延し給へと言ふ。雨降ずば留まるまじと言ふに、さらばとて娘達はかり、雨乞ひの紙人形造り、空れみながめて星の夜を怨みぬ。
家に待つ許嫁の妻は、未來の夫が旅にある間は好き天氣にてあれかしと、姑に知れぬ樣にてり〳〵坊主して、裏の庭木に結付けたり。

○花衣裳

娘を嫁につかわしたる後、母親は裁縫の師がり行きて厚く禮を述べ。彼の針持つすべも知りませぬ頃から、何呉と御敎へ被下れ、いがみなりにも如何やら、斯樣やら、今度の晴衣も人手を借らず、自分で縫うて參りました。これも皆貴女樣の御影と存ずまするとほろ〳〵、喜泣きにぞ咽びける。

○如菩薩

病人は寢臺の上に横はり、窓より來る朝の空氣吸ひて、心地好く息をなしつゝ、何か花ほしやと言ふ。
看護婦は藥瓶に水を入れて、これに桐の花を揷し、綳帶の切れをもて柱の釘に釣れば、病人は喜びて瞬きもせず打守りぬ。
看護婦は又病人の喜ぶを見て樂しみ、此次ぎには薔薇を插代へむと約しぬ。

○古城

詩客某侯の城跡を一覽せむとて、案内を畑耕す老爺に賴みしに、喜んで承諾なし。鍬を捨て、家に走り、紋附の古帷衣に白小倉の馬乘袴穿き、朱鞘の一刀を手に持ちて出來り。いざ御坐れと先きに立ちて行く、城門を過ぐる時には低頭、昔日の禮をほどこし。天主閣に至るや塵積る板の間を跣足にて步みぬ。此所は何の間なり、誰が何したるは此所なり。此所は何の名跡あり、何は誰の遺物なりといと委しく說終りて後、襟を正して一咳。

拙者は某家の舊臣何の何某で御坐る。

○古檢校

やさしき聲すなり。響く琴の音に引かれて尾花の中を流るゝ小川の邊、其處に土橋のあるを渡れば、竹朽ちたる垣の內に柱傾ふきたる一ッ家あり。椽側に夜の物、軒には薪木を干しならべて、煙出る隙間は雨の入る穴ならむか。未だ澁氣なる柹の實の熟さぬに落つる風しあらば、憫れ此家も倒れつべし。抑も何人の住居なるにや。

糸は誰が爪に彈かれて玉を轉ばすは誰の聲ぞ。金殿玉樓奧深く美姬これを弄するは珍らしからず。斯る草家に音立て道行く人を留むるとは、こゝろにくき業なりと、垣の下より覘きけるに、恐らくは今歲花咲かぬ菊の二株三株さびし氣なる畑を、前に控へし只一間。障子はあれど骨折れて、開かずとても人通ふらむ。持佛の前には六十路餘の盲人、昔は勾當か、檢校か、人品自ら高く見えて、俗調に染まぬ妙

手、惜しむべきは震勝なり。孫と見ゆる七歳八歳ばかりの少女を眞向きの前に坐らせ、心をこめて、教へ、唄はせ、身は彈かぬ時少女に彈かせ、彼彈かぬ時此方に音あり。なほ此外に響く音あり――嗚呼、我は老ひぬ。せめては此孫娘の、天晴名手となれかし、早やう成れかし。

十三絃の糸瘠せて、琴柱を配る礙きしみぬ。如何に秋風の寒からずや。少女の人と成るを急ぐとも如何に技の進歩を急ぐとも、老ひたる人のそれまでは保つまじ。古き家のそれまでは保つまじ。

○鐘樓守

又今月も參りました目白の鐘つく坊。當節は何方さまへ伺つても時計があるから其樣な月錢は出さぬとおつしやィます。鳴程それが御道理、捨鐘からはトめて氣長に數へておいでなさる間には、時計の方でチン〳〵〳〵〳〵〳〵、扨て〳〵忙しなく打ッて仕舞ひます。申さでもの事ながら、昔は彼でも中〳〵用に立ッた物、ヘ、ヘ、隨分好い御錢にも成ッた物。牛込、小石川、高田在、大塚近邊。一軒樣で文久一ッ宛頂いても、家内五人に晝の撞手と夜の撞手、二人傭ッて未だ樂な生活、ハイサ結構な株で御坐イました。只今では何方さまへ伺ッても時計があるから其樣な月錢は出さぬとおッしやる、それに此方樣では蒼蠅ともおッしやいませず、忝かも澤山にお惠み被下います。此樣に頂戴出來ます御屋敷は、一町内で二軒か三軒、兎ても撞手は傭はれませぬ。晝は嬶、夜は老爺、一人の息子は造兵へ出まして一人の娘は家で賃仕事、一人の子供はカラやんちやで困ります。家内五人の口は中々以て過されませぬ。イ

エサ申せば口痴、申さねばふさぎの虫。これも雄鳥を追起して、生木の契を引裂いた罰でがな御坐りませう。わはゝゝゝ御喧しう御坐いました。秋の日は暮易く、今夜も亦長い事で……夜半に鐘の音が聴えましたら、アレハ爺が撞いて居るのぢやと、ヘエヘエ、時には思うて被下いまし。

○草の露

○若き女房の瀟洒としたる扮裝して、こゝろよく眠りたる子を背に負ひ、手に其子の玩弄物と小やかなる包とを携へ、塵立つ路をあゆみて尚ほ吾家遠きに、勸むる車夫の聲聽流し、足早に急ぐ樣誠にしほらし。

○兄が紺足袋を穿けば、我も同ド色なるが好しとて、白足袋投捨てる弟の三歳ばかりなるが、廻らぬ舌に說きて止まず。さらばとて兄は己が足より脫し、これを彼に穿かして遣はせば、喜びて其ふくらみたる樣の可笑きも知らず、座敷の中を駈歩き、果ては父母に示し、乳母に示し、又兄に示して得々たり

○唯吾身の兵なるを識り、兵は國の爲めに死する事を知りて、其他は分らぬ徒二人、連立ちて街を行きぬ。向ふより來る士官あり、これを見て二人は恭しく立留り、右手を擧げて禮をほどこしぬ。士官も帽を取りて之に返しぬ、其手は左の手にて爲しぬ。兵卒大いに怒り、あなどり給ふな、左の手にて禮するはいづれの國法にや。上官なりとて免すべきかは、改ためて行ひ給へと、語氣甚だ急なりけり。士官莞爾と打笑ひ、御身等の言ふ事道理なり、吾行ひし處亦法に違はず。見よ、とて右の筒袖をまく

れば、刀痕あり、二人は驚きぬ。士官は語を次ぎて、西南の役より歸りて後は何人にも左の手にて爲しぬ。　かしこきあたりの御前に出ても此方にて行ひぬ。敢て御身等をあなどりしにはあらず。來れ、咎めたる氣性の面白さよ、來れ、共に一杯酌まむ。

○某塾の學生大勢、拂曉入谷の朝貌見に行き、それより根岸の笹の雪に上りて朝餐を喫する事と爲しぬ。軈て御あつらへの豆腐に、酒も出で、米飯もならびぬ。見れば其猪口も、其箸も、皆二十九の數なり、一行は三十八なるに何とて數の不足やと責むれば、下女叉訝りて答へらく、只今御下足を數へましたが、二十九人樣しか御坐りませぬ故と、其氣轉をほこり顏なり。時に一隅より叫ぶ者あり。我が跣足で來たからだ。

○東岸の客を西涯に渡し、南村の人を北郊に運ぶ。行く人を送り、歸る人を迎ふ、渡守の生活は筧に廻る水車の如し。同じ事して同じ瀬に棹を取り、同ド事して同ド淵に櫓を漕ぎゆく。出ては呼べども歸らず、おくれたる人のもだゆるを知らず顏して、まづき節に船歌を唄ふなり。繫ぎては急ぎても放たず、待つ人の退屈を餘所にして、船端に吸殼をはたくなり。素より渡錢定めありて、人の高下の別はあらず、艫に居る者先きに着くにあらず、艫にありとて遲くるゝにもあらず。四民平同にあつかひて、何の依估更に爲さゞり。雪中薄氷を破り、雨後濁流を橫ぎり、霜を載せ、星を頂く、これをつらしとも思はざるなり。月を碎き、霞を破り、散込む花瓣、飛行く水鳥、これを嬉しとも思はざるなり。

○この盃

酒量無き吾母の、一合の晩酌に少しは酔ひ給ひしなるべし。ほんのりと赤くなりたる顔にいかにも樂しげなる微笑を含まれつゝ、膳の上に載せたる一箇の盃を執り上げ給ひて、傍に侍れる我等三人の兄弟に向ひ。

この盃見る度にいつも思出さぬ事は無けれど、話すべき折も無くて、今日まではそれと打明けて物語もせざりき。今は最早十餘年の昔！お前達もそれ相應に成長くなりて、最早親無くとも安全に世を渡らるべきやうになりたれば、私も漸く今迄の重荷を卸したといふ物。もうこれからはお前達に孝行を仕て貰ふばかり。昔はそれ程好でも無かッた酒も、父様に死なられて柄、憂き辛さを慰むる爲に少しづゝ用ひたのがつひ例になつて、これこのやうに毎晩二三杯つゝ飲まぬ中は、何だか物足らぬやうな心持がするが、此の盃——この盃の燒繼の跡を見ると、いつもお父様の事ばかり思出される。これはお父様が昔お在番なされし頃、態々求めて來られし唐津燒。燒きか好いとて、此上も無く珍重なされ、一寸もお膳を離せし事なく、毎晩これにてお酒を召上られしが、あの………西南戰爭に行かれし跡にて、………その時お前は（吾弟を指し）生れてから、まだ二歳のちよこ〳〵歩行。お膳の上にあつたのをいつか知らぬ間に持ッて行ッたと見え、椽側に何か音がしたと思うて出て見れば、お前はこの盃を庭石に落して、見事二ッに破れ居たるに私は驚き、これは困ッた事を仕た。父様が歸ッたら、どんなに小言を言はるゝ事か、あれ程お愛玩なされし盃なればと、思ッて見ても詮方無さに、せめては繼でなりと置

くべしと、その翌日町に行きて燒繼屋に賴み、これこのやうに繼で置いたが、待ッて居たお父樣は某月某日の役に花々しき戰死して、この盃ばかり入りもせぬ私の手に殘り、今もこのお膳の上にあると思ふと、……十年餘の憂き辛さもまことに夢のやうに思はれる。されどお前達も皆立派なものになッて、私にも孝行して吳れるのは、年老たる身に何よりの樂……今は何一ッ不足なる事とても無けれど、只お父樣ばかりは、其子の生長も見ず、老後の樂みも受けず、詣づる人も無き西海の片山里に埋められて、嘸々淋しく思ッてお出なさるであらうと、その盃を下に置きて、暫時懷舊の情に堪へざる樣子なりしが、あゝこれも愚痴か……と亦一杯の酒を呑乾し給ひぬ。

○宵の明星

七歲の兄五歲の妹、共に夕暮の窗より可愛らしき頭を出して、不思議さうに宵の明星を指し合ひぬ。兄樣あの星は何故あのやうにぴか／＼と光るのでせうと、突如に妹が問へば。　今日學校の先生に、裏の川は海の子供で裏の岡は山の子供で蕾は花の子供で僕達は人の子供だと敎はつたから、あんなにぴか／＼ひかる星は、屹度月の子供だらうと、昨年より學校に行き始めたる兄は賢だちていふ。　さうと言かけて妹は又星を仰ぎ、それでは兄樣あの星も私たちが家の阿母樣のやうにおほきく／＼なる時分には、お月樣のやうに大きくなるのかえ。　うむさうだ／＼と妹の肩に手を懸けなから、愛度氣なく兄は答へぬ。

かくて二人は夕暮ごとに必ずこの窗に凭かゝりて、無心にも宵の明星のやがて大きくならむときを待ちぬ。彼等の稚なき目には、夜毎にその光の大きくなり行くごとくにぞ見えたけりむ。數夕の後、二人はその星の姿を覺え、いつも寺の杉の上に出る星なることを覺ゐて、雲暗き雨の夕を此上なく怨みぬ。

然るにその年の秋も暮れて、野分の風杉の梢を吹き、鎌月の影に初冬の寒さをおぼゆる頃、いつよりとも無く、その窗に優しき妹の顏は顯れずなりぬ。顯れたる一個の顏も、何となく憂を帶びたるごとし。暫くありて内に細く愛らしくしかも震へたる聲ありて、兄樣星は、と尋ねぬ。顯れたる一個の顏は急に振返りて、星は出て居るよと悲しげに答へぬ。

病みたる妹は日增に衰へ行くらん。冬近き空は時雨勝にて、ぬれたる落葉と木枯のをりをり吹おこすもあはれなり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

冬の初、路暗き村寺の墓地に、新らしき墓一ッ添ひて、手向の花も大方は萎みはてたり。死したるおのが子にそゝぎし父母の涙は、あはれ幾許ぞ。

窗には猶宵ごとに只一個の顏顯れぬ。彼の眼は涙を含みて、寺の杉の上に出でたるかの星を眺めて居り彼は猶かの星の大きくならむときを。いつか〳〵と待つならむ。

○杖賣

雲雀峠の登口に五歳ばかりの童、枯竹の細杖抱へて立ちぬ。

此春の事なりき、彼が竹の折半を持ちて遊戯居りしに、前を福々しき翁と美しき娘と達者氣なる荷持との三人連通りぬ。其時山路に馴れぬ娘は酷くつかれて見え。赤き紐にて結びたる麻裏草履の重くてや引づりぬ。供の男は後より勵まして、これよりぞ坂の嶮しかるに、今から其樣にてハ二合目あたりにて早や弱り給はむ。下奴の肩に荷物さへなくば、負うてなりと進ずべきにト言ふ。娘は泣聲になりて、斯くては得越すまト。何と仕たらば好き。跡の驛に歸るべきかトかこちぬ。翁はほゝゑみて、それ見よ、山駕を窮屈なりといなみ、駄馬を危ふしとて斷はりたる報ひよ。此上は如何とも仕難し、吾力を其方に分つより他なし。之に縋りて登らば強力を傭ひたるにも倍さるべしト手馴れたる杖を娘に讓りぬ。左すれば祖父樣の嘸たより失ひ給ふべしトためろふに、供の男はフト童の持つ竹を見出して、彼を貰ひてはと心付けたり。それ妙なりとて福々の翁は、白く光る物を取出し、童の青き竹杖と交換すべく乞ひぬ。彼はこれを諾したり。

* * * * * * *

彼は家に歸りて光る物を母の前に出し、其次第を物語りぬ。こは好き物なりとて母は帶の間に狹み、德利提げて直ちに酒屋へと走りぬ。父は山より下りて德利に滿ちたる酒に肝を消し、これを飲みて魂を失ひぬ。

父が此時の喜びを又見まく思ひて、童は峠の同じ處に立ちぬ。彼の竹杖を持ちて、彼の三人の如き旅人の過ぐるを待ちぬ。如何なる日にても其所に立ちぬ。

夏も過ぎ、秋も過ぐれど、彼の娘の如き旅人は過ぎざりき。青き竹は既に枯れたれども、そを抱きて待詫びぬ。

去れよ童、今日は雪催、雪來るとも人は來らざるべし。風邪引かば何とする、嘸や母のなげくべし。父の笑顔は尙更見らるまじ。

○作家の妻

都に遠き山里に最愛の妻と唯二人、餘所目にも羨しき生活を送りし一作家あり。久しき前より肺を患ひて、世に生れし程の事も成ざりしを、不憫や近頃は病日増に重く、まだ年若き身のいとゞ憐れなる最期を遂げて遺されたる妻の涙は、日毎に新らしき墓の土を濕すと聞えしか、同し年の秋、その遺稿なる一小說顯れて、思ひも寄らざる喝采を博したる程の事なりき。作家生前の知己某、野分吹あるゝ朝、尾花枯れ萩散り果てし寡婦の門を叩きて、死られし悔やら、遺稿に就きての評判やら、何彼と物語の末、先生はいつの間にあのやうなる著述をなし置かれしやと問はれて、寡婦は懷舊の情に堪へざりけむ。霰のごとく涙を流して、語出すこゑも哀れに、あの小說の評判好きに就けても、夫が生きて居られたなら、どれほど喜び玉ひしかど、今朝も思出して泣きました。せめては彼の世からでも喜んでゐて下さるやう

に、……あれあの佛前にと指さす方をみれば、線香物淋しく薫じたる位牌の前に、かの書籍五六冊を載せたり。さてはと某もしみぐ同感の涙を流しつ。それに就ても、御著述なされしは何時の頃かと餘意なく尋ぬれば、寡婦も今は包みかねしとみえ。ツと立上りて作家の用ゐし机の抽斗より、原稿らしき冊子を取出し、見て下されと某の前へ出しぬ。見れば駿河半紙百枚ばかりを無造作にとぢ合せたる冊子にて、殆ど解しがたきまで亂れ震へたる筆の跡なり。かの人はかくまで拙なる筆跡にはあらさりしとと、昔を知れる身のいぶかしく、心を靜めて點撿すれば、一枚二枚――字躰の分らぬほど赤きものに汚されたる處あり。血か。

これはと問へば、寡婦は涙を欷歔げつゝ御存の通り、夫は昔より他の作家の如く世に阿ねり風潮に漂はされませぬゆゑ、從ッて世に用ゐられず、名を知る人とても無かりしが、さることとは少しも心に留め玉はざりしを、この秋病氣の重くなりしころより、これで死んでは世に生れたる甲斐も無し。されど治る例無き肺病にかゝりたるは我身の不運、未だ完からざる詩想を紙に上さむは、つくぐも殘念なれどゝのたまはれて、枕を着けたるまゝ、筆と紙とを求め給ひしゆゑ、妾は病氣の毒と幾度もお諫め申せしかど、聞入れ玉はぬばかりか、それより一寸も筆を離し給はず。次第々々に重り行く病をも苦になし玉はで、一章出來上るごとに、如何にも喜ばしげなる聲を揚げ玉ひ、果ては紙の上に吐出したる血を拭ふ事さへ忘れ玉ふばかりなりしが死りまする朝、妾を枕元に呼びて、作り果てたるこの原稿をわたし、これさ

へ出來れば我は死んでも好いとのたまひて、その後は快よげにすや〳〵と眠り……其夜それなりに彼の世の人になッて仕舞ひましたと、其時を思出してか、寡婦は低頭きぬ。

暫くして面を擧げ、その遺稿が今このやうに人樣にも賞められ、後の世までも殘ると思へば、あの喜ばしげなる夫の顏が、今も目前へちらついて見えるやうで御座ります。ましてこの原稿の上に吐き出した血の跡を見ますと……妾は………

某も堪かねて顏をそむけぬ。表には野分の風いよ〳〵烈しくなりまさりて、大方は吹折られたる枯尾花、最早人を招かむ風情もなし。

○水の面

○ヘッポコ畫師とヘボ義太夫語と夫婦になりぬ。妻は良人を先生と稱し、夫は女房を師匠と呼びぬ。此畫師の耳には吾妻のかなづる猫皮程世に妙へなる音はあらざるべく感ド、又此女太夫が眼には吾夫の畫きたる繪圖程世に美しきはあらざるべく思ひぬ。されども此尊敬は只二人の上にのみ行通ひて、他に一人の崇拜者なかりき。先生と師匠とは斯く世人の冷淡なるを怪しみて、後には世人を美術に盲、音樂に聾なりと信じぬ。

○幼童の競走程世に罪なきはあらざるべし。競走の服を着けながら、競走の場に出でながら、吾身の競走者たるを知らざるあり。既に相圖の太鼓は鳴り、既に二三人は走出すにも係らず、何やらむ互ひに

言爭ひて、歩まむともせず、走らむとも爲さず、次の子の肩をたゝき、次の子の腕に縋りて、賞牌とは何ぞと問へるあり、漸く氣のつきて走出すを見れば、足は迹に頭のみ先きにゆきぬ。其手を振り首を振る事釣人形の如し。號令者は持餘して、走れ、走れ、走るべき時來りぬと急立つるに、漸くさとりて馳出しぬ。皆早く來よと呼連れて走りぬ。中に驀地母親の方に向ふあり。

○美人を載せたる車の迹押を仕て坂を登る人夫の鼻には如何なる香や留るらむ。

○新春雜景

○目出度き事書集めたる新聞の初刷を配る人。目出度きたよりを誌したる書信を集め又は配る人。牛乳を配る人。これ等の人には元日らしき元日はあらされども、他人より早く元日を知り、初日出を見るなり。

○子供のあげる紙鳶の糸は紳士の禮帽にかゝり、小娘のつける羽根の顆は貴女の花冠に乘りぬ。

○猿を背にして行く猿廻しに、子を負ひたる子守は小石を投げたり。其石は猿に當りて、猿怒り、猿引怒り、子守の手を取りて巡査に渡さむとせまれば、子守泣出し、子も亦泣く。

○大小柱暦を賣る老人、新聞の大附錄賣る子供、彼の聲は長閑にして、彼の聲は勇まし。

○雲助

客を載せて輿丁山路を登りながら、後肩の一人は言ふ。

ねえもし旦那ね、雲助でも人間で御座い

まさア、自分一人晝寢を仕てせえ暑い日中を、御客を擔いで山の上へ登るのだから、隨分息もされますが、これも職業で今更こぼす事アありませんのさ。それよりア鬮に負けて、、、あぶれて歸る戻路、駕を疊んで掛けた肩の方が骨へめりこんでこてえます。のゥ棒組と呼掛けぬ。

さうよト答へて先棒の一人は、運が向いて來ねえといつでも〱どちばかり組つゞけて、自分の札を尻番に落され、毎日溜りで日を暮す事がありやすが、其時の身躰の惡さは又格別で御坐いますよと言ふ。客はすかさず、

さういふ時には酒の事だなと言ふに、後肩は溜息を吐いて。

扨て飲みたい時には好く仕た物で、文なしが打かりますよ。

だがありがてえ事には溜りの小家でブテ寢を仕て居やすと、儲けて歸つた友達が、おい權公、行かうぜ、我が取つて來たからふさぎなさんな、飲みに行つて景氣をなほさうぜッて、酒屋へさそつて呉れますから、さうかい、そいつア濟まねえと跡からこそ〱尾いて行きやす。へへ其時アあまりハヾがきゝやせんが、でも酒の味ア無類で御坐いますよ。

其變り自分で稼いだ時ア大威張でふるまいますからツマリは同ドに成りますのさ。

しかし自分の御錢で飲むで歸る時と、人に出してもらッた時とは、醉方が違うッて家の山の神がさう言ひますッけ。

私等だッて矢張妻子は可愛くッて其所のところは旦那方と別に違ゐませんが、時々喧嘩をおッぱドめて、とんだ厄介を掛けますよ。

それと言ふのも、、あぶれた時には、何んぼ酒蛙つくの雲助でも嬶の前へ極りが悪くッて、素面じやア歸れませんのさ。

米櫃の空の事や蚊帳が流れるてえ事から、何が如何した、彼が斯樣

したと、一々ならべたてるのを眞面目で聽聞と出掛けた日にァ、實にうンざり仕やすからね。　其所でそれ附景氣に一杯引掛け、酒の機嫌で家え飛込み、文句を臍の底から舌先まで並べて此方の顏を見次第巡繰にえやべり出さうと待搆へて居やァがる處を、アベコベに捻伏せて、太平樂を振舞いて、揚句の果てが抓合ひで、餓鬼の泣くので氣がついて止めますが、それからァもう大丈夫、ぐず〳〵言ひなりに寐てしめえますから、何ンの事ァありませんや。　こんな事ァもし旦那え、好きこのむでするわけぢやァありません、餓鬼にもひもじい目はさせたくあし、山の神にも年中御飾は付けさせたかァありませんが。　最先からも言ひます通り、さう行かねえから仕方がありませんので。　あはゝゝとんだ泣言で、旦那は御退屈だ。おい棒組、景氣好く行かうせ。　今日は大手を振ッて家え歸れらアト息杖を當て二人聲をそろえ、　坂はなァ、え、照る〳〵なァ……

○繪島守

○淋しき裏坂の兩傍を挾みて椿樹繁りぬ。奥の宮への近路とて島人は誰も此下を通ひけり。一人の少女米海苔を拾集めたる笊を抱えて小歌唄ひつ過ぐる時、風なきに花一ッ落來り其笊の中に入りぬ。そを捨てもせす載せたる儘にて倘節をかしく唄ひつゝ行きぬ。

○田舍にそだちたる人ならむか、色黑く髮赤くいづれも手織木綿着たる若夫婦の、下の宮に至る石段を手に手提へて登りかけたり。さるに妻は思出したる如く結びたるを振りはどきて立留りぬ。良人は驚

きて如何にせしやと問ふ。妻は小聲にて答へらく。　里の母様より聽きたる事あり、夫婦連立ちて此島詣仕ては悪しと。良人は魂消たる顔して、　そは又何故にや。　神の祟りあれば。　何故に神の夫婦連に祟り給ふや。　辨財天は美しき女の神なるに、如何に斯くや、嫉妬深くおはす覧。若し仲の好き者を見給ふ時は必ず其縁を絶ち給ふとの事、これ専ら我村にて昔より言傳ふ戒めなり。此度の嬉しさに全くそれを忘れて居りぬ。

眞實か、眞實か、吾鄉にては言はぬ事なり。我等のいまだ知らざる處あり。さらば參詣は止めむとて降らむとしぬ。男は思起して言ふ。　されども二人別れ〳〵にありて行かば好からずや、他人の如く仕てゆかば好からずやと。妻はこれに頷きぬ。　折角此處まで來た物を、斯くなして行くこそ好けれど。斯くて二人は五六歩宛常に離れて登行きぬ。兒ヶ淵、龍の窟、俎石此景の佳さと、海士の藻繰る樣の面白さと、　蠑の壺燒の美味さとは、七里ヶ濱を辿る頃初めて語合はせしならむ。

○山二ッの岨に望みて細道あり。それは黒鯛釣りの漁翁、幅海苔拾ふ海女のみ通ひて、不時に飛泉の窟見に行く物好きの客が降るの他は人知らず。素より絶壁の急坂其嶮しき事言ふまでもなし。扨て小笹の根に縋り、大岩の角に懸り、砂と共に足を濘らして辛くも下に降れば、誠に空井の底に落ちたらむ心地せられぬ。魔神の力にて引裂きたるかと疑はるゝ石塀は三面を圍みて屹立なし、一面南の方よりは荒浪鼕々と寄來り、ざれ石の動ぎ、藻屑の漂ふも、皆凄してふ形をぞあらはしける。此所に一坪あ

るやなしなる砂路あり其所に卒塔婆を立てたり小石を積重ねてあり塗の剝げたる盆の上に欠けたる茶碗を載せてあり、誰人をやらむ葬りてあるなりけり。島人の墓所は聖天町の邊とかきゝぬるに、何とて唯一人かゝる處に埋めしやらむと案内者に質せば、此所に漂着きたる伊豆の漁師が死骸なり、そを島人が集りて葬りしなりと言ふ。扨て又語る樣、其妻が遙々墓參りに來りたる時は、誠に目もあてられぬ有樣にて、私等も貰泣きに泣きたりと言ふ。

○昨夜の烏賊釣りに草臥て漁夫は小家に眠り、舟は干潟に乘りぬ。其干潟に乘りたる舟の上に乘りて父が眠りたる間の漁師顏、三四人の小童が掛聲して波を切る眞似す。一人魚となりて砂の上を泳ぐ眞似なしぬ。　ほゥら〳〵と船端をたゝいて繩の網を投ずればこれに掛りて。　我ァ捕られたァ、トのこ〳〵と舟の中に這入りぬ。

○竹杖に縋りて、ひよこり〳〵と飛ぶ樣に歩く一人の老爺、其衣服の破れて垢染たるは非常なり。窟への案内者とて先きに立ち、舊跡、奇石、佛像等につき說明なしぬ。暗黑の洞中に入りては手に燭を秉りて照しつゝ、曰く何佛、何神、何の瀧、何の池、何の橋、何岩、曰く此奥は富士の人穴に通ずるなり。曰く日蓮上人の寢像石なりと（以上第一日）奥の宮の前に至れば欣然として出來る彼の案内者。旦那、又お出でなさいましたねと早や先きに立ちて步みぬ。人が賴みもせぬに自分合點して先導なしぬ。三天を降り、又彼の龍窟に入れば、又彼說明して曰く何曰く何何何昨日の言を繰返しぬ。彼は此

は魂消たる顔して、　院の大旦那にと答ふ(以上第二日)豆州の海角より龍巻の水烟舞上りて、大島の沖に消えぬ。海には一艘の舟なく、浪は高岩の上より冠せて忽ちに白雪の巒岳を現ずるかと思へば、海の底をあらはすかと思ふ程潮引きて深谷を生ずる瞬時、其開きたる浪の落來りて合する樣、壯景奇觀、快極りなし。此樣何にかたとへむ、さらに詞なしとて岩頭に直立する下より、彼案内者は言ふ。　本統に花を見た樣だと、これも院の大旦那より敎へられしか、左なくして和主の知る事かは(以上第三日)旦那又來ましたねと例の如く先きに立ちぬ。洞中の案内例の如し。　何故其樣にピヨコ〳〵と步くのだと問へば。　足が痛いからと答ふ其足の痛き故を語次ぎて曰く。

或日岩の上で晝寢して居たゞ、すると家だと思ッて寢がへり仕たら、轉がッて下へおッこッたゞ、それから一年ばかり患うて、こんなに成ッて仕舞ッたァ(以上第四日)今日は洞へ行かぬのか、と彼は言ふ。　さうだ、今日は行かぬ代りに此所の景色を寫すのだと石燈籠に腰を掛けて三天の降口を寫圖せむとすれば。　さうかねそれでは書きなさるのを見べいト横手の岩に彼も腰を掛けたり。扨ていつまでも、いつまでも、彼は動かず一心に見居たり。後には立ちて正面に廻はりぬ。斯くては寫圖の邪魔なればと筆を以て避けよと命ずれバ、其意素より通ずべきにあらず。にや〳〵と笑ひて倘立てり、其笑顏の如何にも愚直をあらはして腹も立ちかねたれば、戲れに。　其所を避かないと

お前の顔を寫して仕舞ふせと言へば、彼誠に吾顔を寫さるゝと思ひけむ、おはたゞしく目屎を拭きぬ(以上第五日)又彼の 狙石の邊に行きたる時、何を思出してか彼は呼留め。　私は旦那の家郎だねェ(以上第六日)今日歸ると言ふ日、名殘のしるしにと彼に酒を與へぬ。彼は醉ひて終には泣出しぬ。我の旦那に別れるのは厭だ、暴風になればいゝがなァと。斯く言ひて貝細工の店を一軒毎に歩きぬ。竹杖をつき、草履を穿き、余が與へたる帽子を冠りて、蹌踉として歩きぬ(以上第七日)

○潮に近き岩頭に竹籠と釣竿とあり、其傍に一節切あり、月にや吹くらむ抑も誰が。

○何に成る

いつぞやお前が妾に向ひ═母様! 坊は他人より智恵がある、そして他人より勉强する、だから何處の學校へ行ッても、先生には褒められ、試驗には點數が好い、此儘で通したなら坊はえらい者に成るのだけども、始終病氣だから仕方がない。こんなに身體が弱くッては、坊は成長くなると何に成るだろうと═思出した樣に問うてゞあッたがお前はおほきくも成り得ずに、佛樣に成ッでお仕舞ではないかえ、ト冷めたき吾子の死骸を抱上げてぞ母は泣きける。

○二人のわが子

わが二人の小兒の母は、さる用事ありて遠き所へ行きたり。この間、我は二人の小兒をわが右左に抱きて寢ねぬ。われ等三人して二階の奥座敷に寢ねしこと早十夜にありき。

然るに今朝の郵便箱に一封の手紙ありて、そは彼等の母より今日の夕暮に歸らむことを報ド來れるなり。我は喜びて先この事を七歳の兄に語りぬ。あはれ彼の喜はいかゞなりけん。彼はうれしさに堪へずして、其處此處を縱橫無盡に驅け廻りつゝ、　今日はお母様が歸ッて來る、　今日はお母様が歸ッて來ると叫びぬ。竹の籬を隔てたる隣までも、聞えんばかりなる大聲にて叫び廻りぬ。我は、そのやうに叫びたりとて、お母様の處までは聞えないから、音無しくして待ッて居ると言ふて聞かせぬ。されど猶あちこちとはねまはりて、果ては、　いつお母様は歸ッてくるのとわが肩をゆすぶりつゝ、尋ねはじめぬ。

詮方なくて、我は母の過ぎ來らむ路筋、……山、川、野、森、橋も渡らねばならず、町も通らねばならぬことを靜かに說きゝかせて、お母様は晩に歸ッて來ると語れば、彼は少しく弱りたるやうなる顏色、　晩にかへと元氣なく言かけて表へ行きぬ。されど五歳の妹は、山も知らず、川も知らず、町も橋も晩さへも、充分には知り得ざれば、只お母様の歸るといへる事をのみ樂みぬ。彼の喜びは、さながら小猫小鳥などの喜べるさまに似たりき。彼は躍れり、目あても無き處へ走りぬ、意味も無き事を獨語ちぬ。

午後遊に倦みたる兄は茫然として歸來れり。門の外より聲を擧げて、　お母様は歸ッて來たかへと叫びぬ。やがて家に入り來りしが、未だ歸らぬよしをきゝて、彼れ又遊びに行きぬ。

夕暮近くなりぬ。我は待兼ねたる二人を慰めむため、前園に行きて花を摘み竹を折りつ、目隱しをなし昔話しを語りぬ。さて兩人は暫しその事を忘れたるかと思ふ折々、　お母樣はまだ歸ッて來ない。早く晩になれば好いなァといふ。

晩になりぬ。母は未だ歸らず。夕飯を畢りぬ。母は未だ歸らず。彼等の眠るべき時は來りぬ。されど母は猶いまだ歸らず。　お母樣はいつまで歸ッて來ないのだらうと兄は待詫び、　お母樣〳〵と妹はむづかりぬ。

然れども猶彼等を慰むるによき手段あり。そは彼等の眠る前に、いつも二階の階梯を驅ッくらして上る事なり。　階梯の驅ッくら！と我か言へは、二人は直に母の事を忘れぬ。ばた〳〵〳〵。我等はいつものごとく笑ひさゞめきて階梯を上れり。

添寐の床に數分を經れば、あはれ！彼等はそのまゝ穩なる眠に就けり。忙はしき彼等の手足も、うつくしき彼等の眼も、今は名殘なく靜まり且つ閉されぬ。

○雪の朝

雪の朝、母樣がお言ひなさッた、今日は大變な雪だから學校は御休みに仕たら如何だえと。しかし僕は答へた、何、母樣、僕は福島中佐よ！　すると母樣は笑ひながら、　それはまァ感心だねえ、それおやァ衣服を澤山着ておいでよ、とおッしやッた。

身支度か出來て、古形の鳶合羽を上に着せられた、これは御父樣ので、僕には大きい、この大きいのが暖かでそして雪避にはいゝさうだ。可笑くはないかえと母樣に問ふたら、少し可笑いけども風邪を引くよりはいゝではおいかえとおッしやッた。成程僕も贊成だ、笑ハれても暖かい方がいゝ。

入口を出る時に、其所まで送ッてお出なさッた母樣は、轉ばない樣におしよと呉々もお言ひなさッた。しかし和助か雪をさらッてわざ／＼こしらえた道を歩くより、牆の邊まで來る處を靴でズカ／＼踏むで行くのが面白い。かうやッて門口を出やうとすると、そんな所通ッて溝へ落ッこちてはいけないよと母樣の御聲――まだ入口に御出なさッたのか。

餘所の門外でも雪かきをして居る、雪達摩をこしらえて居る、僕は片手に傘があッて片手に本の包を持ッて居るから、途中では出來ない。早く學校の運動場へ行ッて雪合戰を仕樣と思ッた。これを目的にして道を急ぐ、程なく家敷町を離れていつもの田畝道。急に寒く感じた。雪が横に降ッて來出した。風よけの無い所爲だらう。しかし鳶合羽がどんなに役に立ッたらう。これを着てさへこんなに寒い、可笑からと言ッて母樣の言ふ事を聽かなかッたら、屹度此時の寒さで風邪を引いたに違ゐない。

石地藏が半分雪に埋れて居る、此顏は何時見ても平氣だ。

水車が廻らなくなッて、氷柱が刀の樣に下ッて見える。水の中の萱の葉も凍ッてこれは剃刀の樣だ。

此水車小家のつゞきの小高い岡の下は、沼だ。これも氷ッたらう。氷すべりは出來ないかと思ッてわざ

〳〵其所に登ッて見た。嗚呼、氷ッて居る！枯蘆も枯蓮も一所に氷ッて居る。大丈夫氷すべりは出來る。誰だか我より先きへ來て石を投げたと見える、其石も氷ッて居る。向ふの方の薄い所を破ッて、其所に雁が居る。誰か來て撃たないかなア。

此時不思議な聲がする、好く聽くと犬の聲だ。其方を見ると此岡の眞中に立ッて居る大きな松の樹の下――少しばかり雪の積らない處に、むく〳〵した小さな犬が、ぶる〳〵震へて居る。好い犬だ！白犬だ！柔らかい毛には泥がついて、左まきの尾にも泥がついて、一寸見ると汚いけども、それが落ちれば綺麗な犬だ。大きくなれば強くなるに違ゐない。それが僕を見ると僕の犬か何ぞの樣に、僕を見ると、此犬が、さも喜ばしさうに此方を見た。小さな尾を振ッて、そして又あはれに鳴いた。僕の方へ來やうと思ッて二足ばかり歩いたけれど、其先は雪が高く積つて居るので、止した。止して、そして又鳴いた。其聲は如何にも情けない聲であッた。僕は可愛さうで溜らなくなッたから、急いで傍に駈寄ッた、彼は鳴き止むだけれど、尚ぶる〳〵と震へて居る。

寒いのだろう、抱いて遣ろうと僕は思ッたが、傘と包があるので抱けなかッた。傘と包を置いて抱いて遣ろうと餘程思ッた。

此時學校の授業の始まりを知らせる鐘が鳴響いて聽える、仕方なく僕は思留ッた、そして此岡を降ろうとした。彼は僕の犬かの樣に跡から尾いて來やうとした。しかし雪の積ッて居るために隔られた。可愛

さうに、又ぶる〱震へながら鳴出した。僕は溜らなくなッた。僕には此通り合羽を着せて寒くない様に仕て被下る母様があるのに、あの小犬には親犬が無いのだ。僕は溜らなくなッた、可愛さうで。志かし學校の時間に遅れては成らない、仕方なくすご〱と岡を降ッた。此時松の枝が折れて一塊の雪が落ちた。

如何思ッたかずか〱と元の岡に僕は馳上ッた、けれど雪は犬の上には落ちて居なかッた。やれ〱と安心して今度は本統に思切ッて降りた。そして歸りには屹度抱いて遣ろふと思ッた。

短篇小説 明治文庫第三編 終

明治廿六年十一月十五日印刷發行

定價金拾五錢

編輯兼發行者　大橋新太郎
日本橋區本町三丁目八番地

印刷者　杉原辨次郎
京橋區元數寄屋町四丁目二番地

印刷所　杉原活版所
京橋區元數寄屋町四丁目二番地

明治廿六年八月三十日內務省許可

版權所有

發兌元　博文館
東京日本橋區本町三丁目

福地櫻癡先生新著 （武内桂舟密畫）

大久保彦左衛門

全一册洋裝　正價貳拾錢　郵稅六錢

彦左衛門質樸鯁直なる氣象を、櫻痴先生の雄文を以て、寫出したる一大傳奇なり。從來世間に流布する所は、狂妄悖戾の彦左なるを、先生之を慨し、博く舊記を尋ね偏く逸書を捜して此編を稿せらる。英主、賢相、奸吏、佞官、孝女、忠僕、邪徒、暴客、等の業事叢出して變幻極なく、實に快絕奇絕の新著なり。稿成るや、歌舞伎座主は直に先生に請ふて脚本となし、既に名優團十郎をして活現せしめたり、以て其絕妙の名作たるを知るに餘りあるべし。苟も幕初武俠の眞相を知らんと欲する人は、早く一本を購讀して、當時の元氣如何を詳にせよ。

高橋太華山人著 （富岡永洗密畫）

新太郎少將

全一册和裝　正價拾二錢　郵稅六錢

明主備前少將新太郎君の、少年時代を描き來りて、渠が德川氏三百年間、政治歷史の畫幅彩色者として、鷹揚せし泉源を採る。忠臣、節婦、黠奴、兇漢等、巧みに相錯綜合して、一部の好演劇を爲す。新太郎君は則ち此演劇の花役者。少年諸君が他日社會の花役者たるを、敎ふるは則ち此書。

◉賴山陽　青軒居士著 （武内桂舟密畫）　全一册　近刊

◉上杉鷹山公　渡部乙羽著 （寺崎興業密畫）　全一册　近刊

◉菅相丞　遲塚麗水著　全一册　近刻

博文館發兌小說稗史書類

諸名家著作 ●短篇小說 明治文庫 毎月一回 一冊 拾五錢 郵稅六錢

博文館編輯局校訂 ●校訂 眞書太閤記 全四冊 一冊 五拾錢 郵稅 拾六錢

博文館編輯局校訂 ●校訂 源平盛衰記 全一冊 正價 五拾錢 郵稅 拾六錢

博文館編輯局校訂 ●校訂 南總里見八犬傳 全三冊 一冊 五拾錢 郵稅 拾六錢

博文館編輯局校訂 ●東海、木曾 奥羽、江島 道中膝栗毛 全一冊 正價 五拾錢 郵稅 拾六錢

博文館編輯局校訂 ●校訂 梅暦、春告鳥 全一冊 正價 五拾錢 郵稅 拾六錢

博文館編輯局校訂 ●校訂 通俗三國志 全二冊 一冊 五拾錢 郵稅 拾六錢

博文館編輯局校訂 ●校訂 三馬傑作集 全一冊 正價 五拾錢 郵稅 拾六錢

博文館編輯局校訂 ●校訂 西鶴傑作集 全一 正價 五拾錢 郵稅 拾六錢

福地櫻痴居士新著 ●大久保彥左衛門 全一冊 正價 二十錢 郵稅 六錢

福地櫻痴先生著作 ●十二時會稽曾我 全一冊 正價 二十錢 郵稅 四錢

福地櫻痴先生戯作 ●櫻癡滑稽談 全一冊 正價 廿五錢 郵稅 六錢

福地櫻痴先生著作 ●東鏡拜賀卷 附春興鏡獅子 全一冊 正價 拾五錢 郵稅 四錢

福地櫻痴先生著作 ●關ヶ原譽凱歌 全一冊 正價 貳拾錢 郵稅 四錢

著者	書名	册數	正價	郵稅
福地櫻痴先生著作	●女楠 附 求女塚 身替新田	全一册	拾五錢	四錢
福地櫻痴先生著作	●平野次郎	全一册	拾五錢	四錢
增田克德君譯述	●夜と朝	全一册	廿五錢	六錢
三遊亭圓朝講演	●八景隅田川	全一册	貳拾錢	四錢
三遊亭圓朝講演	●政談月の鏡	全一册	拾五錢	四錢
採菊散人條野傳平君著	●痘痕傳七郎	全一册	貳拾錢	四錢
骨皮道人著	●滑稽教育談	全一册	拾錢	四錢
骨皮道人著	●骨皮滑稽談	全一册	拾錢	四錢
南新二君著	●甲子待	全一册	拾貳錢	四錢
文學士小川忠武君譯	●佛蘭西二人皇后	全二册	廿四錢	八錢
巖谷漣山人著	●新御伽草子	全一册	拾五錢	四錢
巖谷漣山人著	●こがね丸	全一册	拾貳錢	四錢
巖谷漣山人著	●暑中休暇	全一册	拾貳錢	四錢
巖谷漣山人著	●當世少年氣質	全一册	拾貳錢	四錢
巖谷漣山人著	●猿蟹後日譚	全一册	八錢	貳錢
尾崎紅葉山人著	●鬼桃太郎	全一册	八錢	貳錢

尾崎紅葉山人著
●二人むく助　全一册　正價拾貳錢　郵税四錢

尾崎紅葉山人著
●俠黑兒　全一册　正價拾貳錢　郵税四錢

江見水蔭君著
●今辨慶　全一册　正價拾貳錢　郵税四錢

川上眉山人著
●寶の山　全一册　正價拾貳錢　郵税四錢

山田美妙齋君著
●雨の日ぐらし　全一册　正價拾貳錢　郵税四錢

嵯峨のやおむろ君著
●姉と弟　全一册　正價拾貳錢　郵税四錢

宮崎三昧道人著
●親の恩　全一册　正價拾貳錢　郵税四錢

幸田露伴君
●二宮尊徳翁　全一册　正價拾貳錢　郵税四錢

原抱一庵主人著
●大石良雄　全一册　正價拾貳錢　郵税四錢

村井弦齋君著
●紀文大盡　全一册　正價拾貳錢　税四錢

高橋太華山人著
●河村瑞賢　全一册　正價拾貳錢　郵税四錢

高橋太華山人著
●太閤秀吉　全一册　正價拾貳錢　郵税四錢

高橋太華山人著
●新太郎少將　全一册　正價拾貳錢　郵税四錢

幸堂得知君著
●陸奥の長者　全一册　正價拾五錢　郵税四錢

青軒居士著
●賴山陽　全一册　正價拾貳錢　郵税四錢

渡部乙羽君著
●上杉鷹山公　全一册　正價拾五錢　郵税六錢

遲塚麗水君著
●菅相丞　全一册　正價拾二錢　郵税四錢

圖書出版
東京博文館